

# 上野国分僧寺・ 尼寺中間地域(8)

前橋市元総社町小見地区，群馬郡群馬町大字東国分村前・薬師道南・中道南・上野道南(植野道南)・高井道東地区に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書 8分冊中の第8分冊。

— 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第41集 —

## 第 一 篇

1992

群 馬 県 教 育 委 員 会  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 上野国分僧寺・ 尼寺中間地域(8)

前橋市元総社町小見地区，群馬郡群馬町大字東国分村前・薬師道南・中道南・上野道南(植野道南)・高井道東地区に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書 8分冊中の第8分冊。

一 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第41集一

## 第 一 篇

1992

群馬県教育委員会  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団





① 染谷川河川敷部からの榛名山遠景



② 3区階段状遺構土層断面



③ 2区祭祀遺物出土状況



④ FA直上のPEAT質層と火山灰層群



① 胎分661



② 胎分858



③ 胎分860



④ 胎分850



⑤ 胎分849



⑥ 胎分857



⑦ 胎分886



⑧ 胎分855



⑨ 胎分886



⑩ 胎分900



⑪ 胎分958



⑫ 胎分951





① 胎分815



② 胎分810



③ 胎分811



④ 胎分830



⑤ 胎分826



⑥ 胎分828



⑦ 胎分812



⑧ 胎分876



⑨ 胎分873



⑩ 胎分874



⑪ 胎分867



⑫ 胎分866



⑬ 胎分871



⑭ 胎分872



⑮ 胎分870



① 胎分572粘土・藤岡市緑埜



② 胎分粘土・藤岡市緑埜



③ 胎分962粘土・藤岡市竹沼



④ 胎分795粘土・藤岡市土師神社



⑤ 胎分786・795の焼成物



⑥ 胎分792藤岡市土師神社隣地採集



⑦ 胎分796水鏡粘土・藤岡市庚甲山



⑧ 胎分787・796の焼成物



⑨ 胎分964粘土・高崎市山名



⑩ 胎分842粘土・安中市下秋間



⑪ 胎分797粘土質FA



⑫ 胎分963甲粘土・富士見村米野



⑬ 胎分981、粘土575内石英雲母片岩



⑭ 胎分982、粘土575内石英雲母片岩



⑮ 胎分791藤岡市金山瓦窯



⑯ 胎分793新里村新宮



⑰ 胎分794新里村新宮

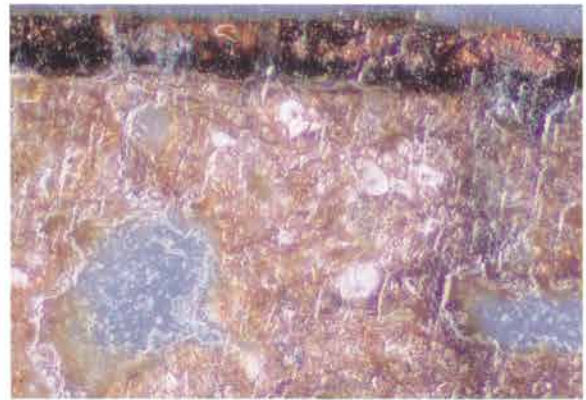


⑱ 胎分789笠懸町鹿島川瓦窯





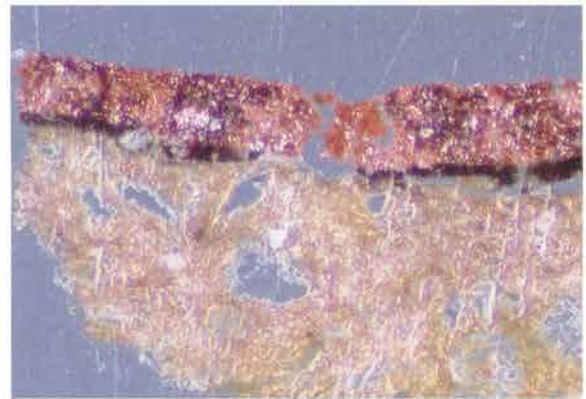
1 縄文土器 No.12 外面 2.5×



2 同左 赤色部層断面 250×



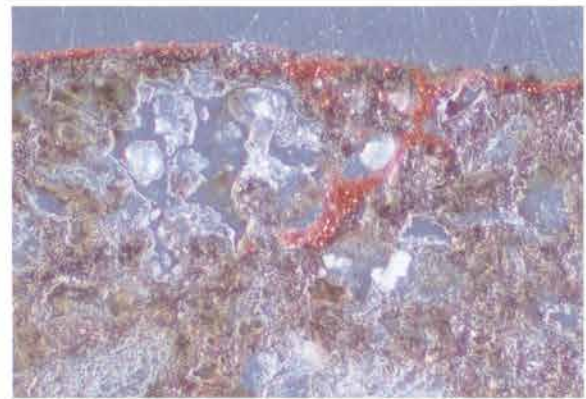
3 縄文土器 No.10 外面 2.5×



4 同左 赤色部層断面 250×



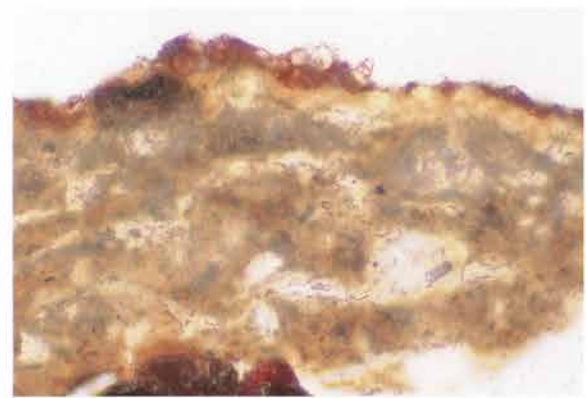
5 縄文土器 No.7 赤色部 2.5×



6 同左 層断面 250×



7 瓦 赤色付着部 2.5×



8 同左 層断面 250×



## 序

関越自動車道新潟線は、太平洋側の首都東京と日本海側の新潟市を結ぶ高速自動車道として、昭和60年10月1日に開通いたしました。本道路の開通に際しては、数多くの埋蔵文化財が、道路建設工事に先立って調査されました。本県でも58箇所の埋蔵文化財包蔵地が発掘調査され、記録されています。

本報告による上野国分僧寺・尼寺中間遺跡は、群馬郡群馬町東国分、前橋市元総社町に所在する埋蔵文化財包蔵地であり、昭和55年4月から昭和59年3月にかけて、当事業団が調査しました。

ご承知のように本遺跡は、上野国分寺の僧寺・尼寺、上野国府跡、山王廃寺跡に隣接する遺跡として早くから識者の注目をあびていました。発掘調査によって奈良・平安時代の国分寺僧寺・尼寺中間地域の歴史が明らかにされ、数々の貴重な資料が得られました。これら資料は、昭和59年4月から8年計画で報告書作成のための整理作業が行われており、「上野国分僧寺・尼寺中間地域」として既に7分冊の調査報告書が刊行されています。

今回旧染谷川河川跡にかかる地区について整理が完了し、8分冊目の報告書を作成することができました。本報告には、古墳時代後期以後の祭祀遺物、特に道教に係わる遺物また、奈良時代の石積の井戸跡等貴重な資料が報告されています。本報告をもって、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡の整理は完了し、また、昭和48年度以来実施してきました関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査事業も19年の歳月をかけてすべて終了しました。

発掘調査から報告書の刊行に至るまでに、日本道路公団東京第二建設局、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、群馬町教育委員会、地元関係者から種々のご援助、ご指導、ご協力を賜りました。ここに深甚なる感謝の意を表し、併せて本報告書が上野国分寺の創建及び本県の歴史を解明するための資料として、広く活用していただければ幸甚であります。

平成4年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之



## 例 言

1. 本書は関越自動車道(新潟線)建設工事に伴い、記録保存のため事前調査された前橋市元総社町字小見・群馬郡群馬町大字東国分小字村前・薬師道南・中道南・上野道南(植野道南)・高井道東地区に所在する「上野国分僧寺・国分尼寺中間地域、(小見・村前・薬師道南・中道南・上野道南(植野道南)高井道東地区)の埋蔵文化財発掘調査報告書8冊の内の第5冊である。
2. 委 託 者 日本道路公団東京第二建設局  
群馬県教育委員会
3. 発掘調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
4. 調 査 期 間 昭和55年4月～昭和59年3月31日
5. 調 査 担 当 者 佐藤明人・石井克己・石北直樹・徳江秀夫・木津博明・桜岡正信・麻生敏隆・関根慎二  
※調査担当年度については、上野国分僧寺・尼寺中間地域報告書第1冊を参照。
6. 調 査 嘱 託 員 黒沢はるみ・間庭 稔
7. 事 務 担 当 者 邊見長雄・松本浩一・田口紀雄・神保佑史・住谷 進・岩丸大作・真下高幸・國定 均・笠原秀樹・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・船津 茂
8. 整理事業は、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団が昭和59年4月～平成4年3月までの8ヵ年にわたり実施したもので、本報告書は、平成3年4月～平成4年3月までの1年間に整理実施した報告書である。また、本報告書には、Y・Z区古墳時代(後期)～奈良・平安時代の検出された遺構・遺物を第1篇として掲載し、理科学分析等を第2篇として編集した。
9. 整 理 担 当 者 木津博明・桜岡正信・友廣哲也
10. 整 理 補 助 員 黒沢はるみ・鈴木幹子(嘱託員)  
安藤三枝子・今井サチ子・川原嘉久治・金子ミツ子・木暮紀子・榎原浩美(旧性斉藤)・嶋崎しづ子・須田育美・関口貴子・高橋順子・高橋優子・田村栄子・武永いち・角田孝子・戸神晴美・中野秀子・中野和子・生巢由美子・萩原鈴代・渡辺フサ枝・狩野君江・狩野フミ子・篠原富子・南雲素子・高柳哲子・下境マサ江を中心に以下の方々の協力を得た。長沼久美子(嘱託員)・佐藤美代子・高梨房江・尾田正子・千代谷和子・八峠美津子・吉田恵子・吉田笑子・小野寺仁子・光安文子・平林照美・渡辺あい子・鈴木加津枝・高橋真樹子・五十嵐由美子・小池 緑・野島のお江・並木綾子・今井もと子・今井あや子・松井美智子・角田みづほ・塩浦ひろみ
11. 遺物保存処理 関 邦一  
北爪健二(嘱託員平成2年退職)・小材浩一
12. 写 真 撮 影 遺構 発掘調査担当者  
遺物 佐藤元彦・木津博明
13. 現場コンサルタント 並木英行(三洋測量株式会社)
14. 出土遺物の化学分析・鑑定について以下の方々に依頼した。(敬称略)  
人骨鑑定 森本岩太郎(聖マリアンナ医科大学教授)ほか  
獣骨鑑定 大江正直(前 群馬県家畜登録協会常任理事)  
石材鑑定 飯島静雄(群馬地質研究会)

胎土分析 群馬県工業試験場

胎土分析 株式会社第四紀地質研究所

胎土分析 三辻利一（奈良教育大学教授）

鉄製品分析 岩手県立博物館 赤沼英男

赤色顔料 国立歴史民俗博物館 永嶋正春

15. 発掘調査及び本書を作製するにあたっては、群馬県教育委員会・前橋市教育委員会・群馬町教育委員会・同町都市計画課及び以下の方々の御指導・御教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。（敬称略）

上原真人（国立奈良文化財研究所）・須田 勉・斉藤孝正（文化庁）・大川 清（國土館大学）・大塚初重（明治大学）・新井房夫（群馬大学）・三辻利一（奈良教育大学）・池上 悟（立正大学）・吉岡康暢・平川南（国立歴史民俗博物館）・矢部良明（東京国立博物館）・林辺 均（奈良県教育委員会）・前園実知男（奈良県立橿原考古学研究所）・本沢慎輔（岩手県平泉町教育委員会）・大金宣亮（栃木県教育委員会）・橋本澄朗（栃木県博物館）・田熊清彦・田代 隆（財団法人栃木県文化振興事業団）・柿沼賢治（財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団）・梁木 誠（宇都宮市教育委員会）・阿久津 久・瀬谷昌良（茨城県協和町教育委員会）・堤 隆（御代田町教育委員会）・安田 稔（福島県文化センター）・井口 嵩（君津郡袖ヶ浦町郷土博物館）・光江 章（財団法人君津郡市文化財センター）・高橋一夫（埼玉県教育委員会）・井上尚明（埼玉県立歴史博物館）・有吉重蔵（東京都国分寺市教育委員会）・遠藤政孝・田崎通雄（尾鷲市教育委員会）・種定淳助・岡崎正雄（兵庫県教育委員会）・松尾宣方（鎌倉市教育委員会）・斉木秀雄・原 廣志・小林康幸（鎌倉市文化財研究所）・井澤洋一（福岡県教育委員会）・増田 修（桐生市教育委員会）・前原 豊（前橋市教育委員会）・大塚昌彦（渋川市教育委員会）・羽鳥政彦（富士見村教育委員会）・宮崎重雄（大間々高校教諭）・望月公子（日本大学農獣医学部獣医学科）・西田隆雄・伊東信夫（東京大学農学部畜産獣医学科家畜解剖学教室）・茂原信男（獨協医科大学第一解剖学教室）・西中川 駿（鹿児島大学農学部獣医学科家畜解剖学教室）・吉川瑞子（国立科学博物館分館動物研究部動物第一研究室）・石川春律・藤巻 昇（群馬大学医学部第二解剖学教室）・山下靖雄（東京医科歯科大学歯学部口腔解剖学教室）・小林次郎（群馬県食肉事業協同組合）・森村隆作（群馬県畜産試験場）・越田賢一郎（財団法人北海道埋蔵文化財センター）・岡田康博（青森県埋蔵文化財調査センター）・高橋與右衛門（財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）・赤沼英男（岩手県立博物館）・佐々木 稔（新日本製鉄株式会社）

16. 発掘調査及び整理事業に関する業務委託は以下のとおりである。

遺構実測・遺構・遺物トレース 株式会社測研

井戸跡の調査 株式会社原沢ポーリング（調査所見は同社有賀正明による）

17. 調査に至る経緯については、上野国分僧寺・国分尼寺中間地域報告書第1冊に詳述されているので、同報告書を参照願いたい。

18. 本書の執筆は以下のとおりで、文責は別記した。

木津博明・桜岡正信・友廣哲也

19. 発掘調査においては群馬町、吉岡村、新東村、榛名町、渋川市、赤城村、前橋市、高崎市の多くの方々ならびに、ふるさとを知る会の方々の御協力を頂いた。また、群馬町立中央中学校、南中学校の社会科学クラブの生徒諸君の参加を得た。

20. 本遺跡の図面・写真・遺物は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が管理し、現在群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

## 凡 例

1. 本書中に掲載した地形図は、国土地理院、1：25,000、群馬町・前橋市都市計画図、1：2,500を縮小し使用した。
2. 本書中の方位記号の方向は真北を指す。
3. 本書中の遺構実測図の縮尺は図中のスケールのとおりである。
4. 遺構挿図中の等高線・断面基準線は海拔で表示し、断面基準線標高値はL=で示した。
5. 土層断面図中のI～VII……は、基準層序のI～VII層……に準じ、覆土の層序は1～nとした。
6. 本書中にある火山灰は以下のとおり略記した。










浅間山噴出B軽石層→B軽石・BT・B      浅間山噴出C軽石層→C軽石・CP・C  
 榛名山二ツ岳噴出火山灰層 →FA、FP

7. 遺構挿図中に使用した遺物の記号は以下のとおりである。





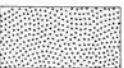






土師器・須恵器・土師質土器   ●   灰釉陶器・緑釉陶器・白磁   ○   石器   △   金属製品  
 紡錘車      白玉      土錘      瓦   □   鞆の羽口      炭化物      骨

8. 挿図中に使用したスクリーンは以下のとおりである。

### 遺構実測図

	焼土・焼土層		灰・灰層		粘土
	礫の断面		B軽石		C軽石
	FA		礫層		掘り方

### 遺物実測図

	灰釉陶器		緑釉陶器		摩滅部分
	黒色処理・炭化物		赤色塗彩		鉄滓
	羽口の鉄分付着		羽口の珪酸分		羽口の酸化部分
	羽口の還元部分		羽口の中性部分		

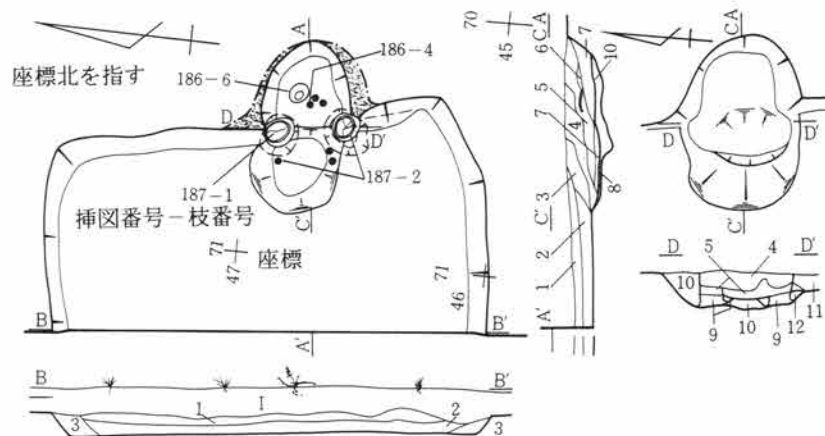
9. 遺構実測図中の遺物番号は出土遺物実測図の番号と一致し、挿図番号—遺物番号の順で記載した。
10. 遺物実測に当たっては、当事業団拡大整理委員会歴史部会で編集した「仕様書—遺物編」に準拠したが、全てがこの限りではない。
11. 本書中の遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。

土器・土製品   1：3（大形1：6、瓦1：5）      石器・石製品   1：3（白玉1：2）  
 金属製品   1：3（古銭1：1）

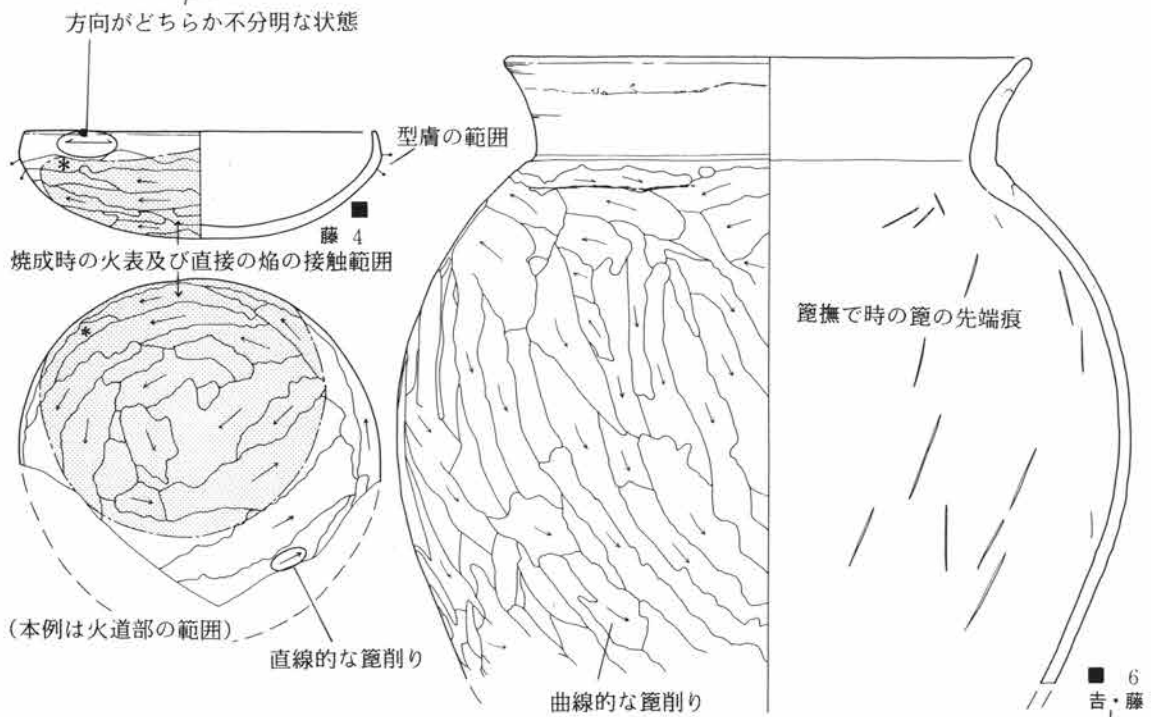
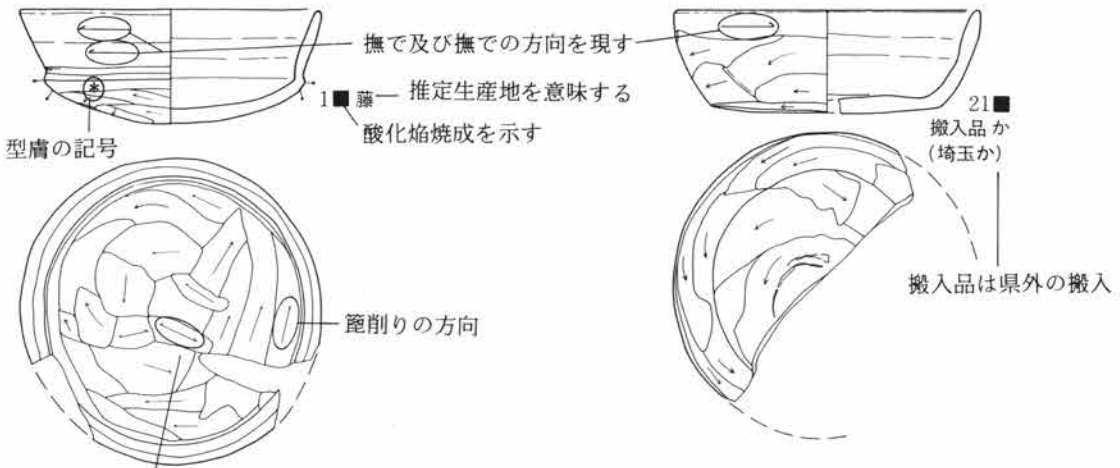
上記以外の縮尺のものについては、個別に明記した。

12. 遺物観察表中の「度目」「度・量目」は、度は長さを、量は重量を示す。また、( ) は完成品以外の推定値・復原値を表わし、量目では残存量を計測した。金属製品については、錆等の除去後の数値である。
13. 遺物観察表中の「色調」は、「標準土色帖」農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色表監修、1976年9月発行を使用し記載したが、細部では観察者の個人差がみられる部分もある。
14. 遺物計測位置は、上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)図表編参照。
15. 土器の種別については、原則として轆轤使用・還元焰焼成のものを須恵器、轆轤不使用・酸化焰焼成のものを土師器として扱ったが、中間的なものについては判断をさけたものがある。
16. 土器の器種については、原則として高台を付すものを埴、付さないものを坏、口径に比較して器高の著しく低いものを皿とし、その他、甕、壺等使用したが、文献にあたって使用したものではなく、また、特に概念規定を明らかにした上で使用したわけではなく、あくまでも整理上便宜的に使用した。
17. 本遺跡出土遺物の注記は、「KK17」を冠し区名・遺構名称を記入した。初めのKは「関越自動車道」のKanetuのKで、次のKはKousokudouのKで、17は群馬県内で南から17番目の遺跡であることを示す。

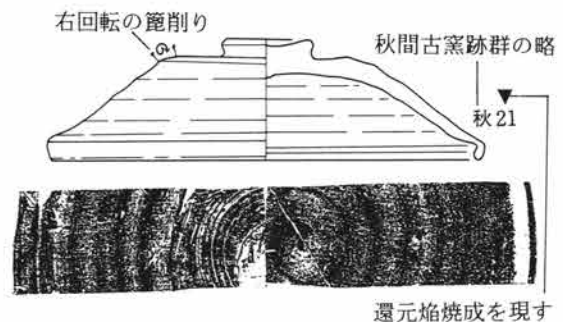
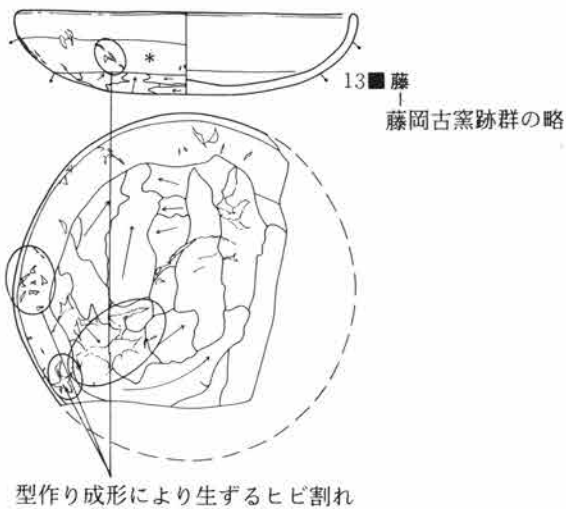
一点鎖線は焼土分布を現し、トーン部は掘り方を現す。



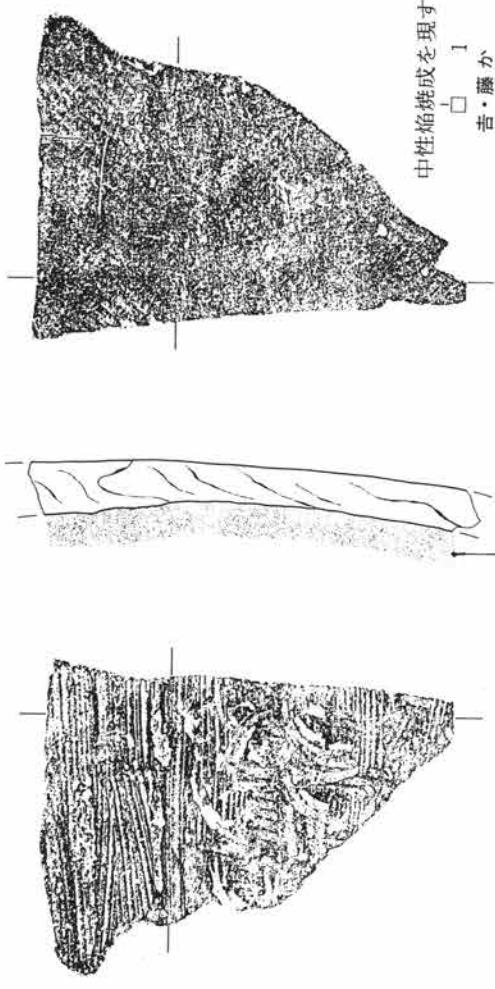




吉井・藤岡古窯跡群の略

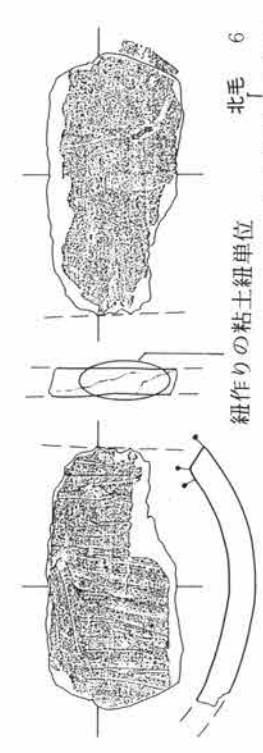


左・外面拓影図 右・内面拓影図

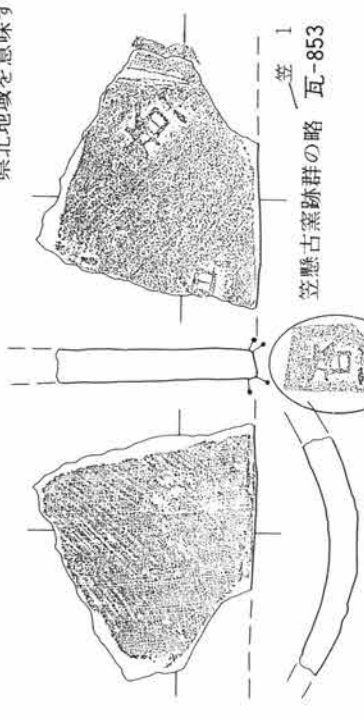


中性焰焼成を現す  
吉・藤が

内面側の摩滅を現す（この場合右に内面、左に外面）

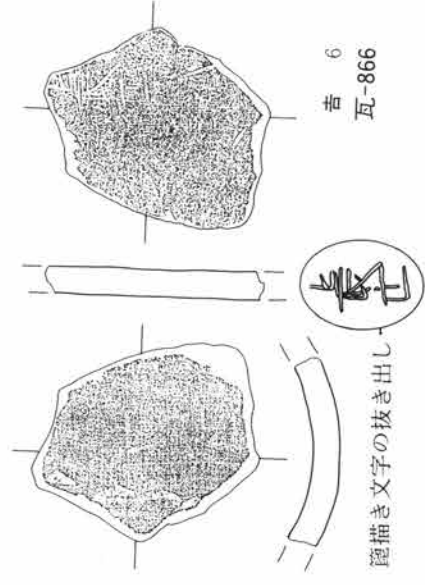


紐作りの粘土紐単位  
北毛 6  
県北地域を意味する



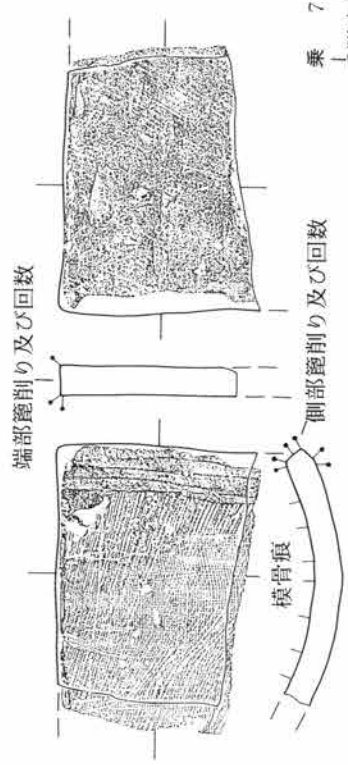
笠懸古窯跡群の略 瓦-853

刻印文字の抜き出し



吉 6  
瓦-866

磨滅き文字の抜き出し



乗 7  
乗附古窯跡群の略

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
対照目次	

## 第1篇 染谷川河川敷部の調査報告

### 第1章 調 査 経 過

第1節 調 査 経 過 .....	(木津博明) .....	1
-------------------	--------------	---

### 第2章 周 辺 遺 跡

第1節 周 辺 遺 跡 .....	(木津博明) .....	2
-------------------	--------------	---

### 第3章 グリッドと基本層序

第1節 基本杭とグリッド .....	(桜岡正信) .....	3
--------------------	--------------	---

第2節 基 本 層 序 .....	(木津博明) .....	4
-------------------	--------------	---

### 第4章 検出された遺構・遺物

第1節 染谷川河川敷部の調査概要 .....	(木津博明) .....	7
------------------------	--------------	---

第2節 試 掘 調 査 .....	( // ) .....	8
-------------------	--------------	---

第3節 検出遺構概況 .....	( // ) .....	9
------------------	--------------	---

第4節 検出された遺構・遺物 .....	( // ) .....	11
----------------------	--------------	----

第5節 追 補 (1) .....	( // ) .....	182
-------------------	--------------	-----

第6節 追 補 (2) .....	( // ) .....	201
-------------------	--------------	-----

### 第5章 考 察

第1節 検出遺構に就いて .....		209
--------------------	--	-----

第1項 古墳時代の祭祀遺構 .....	(木津博明) .....	209
---------------------	--------------	-----

第2項 奈良・平安時代の石組遺構 .....	( // ) .....	213
------------------------	--------------	-----

第2節 出土遺物に就いて .....		215
--------------------	--	-----

第1項 文化層とその出土遺物 .....	(木津博明) .....	215
----------------------	--------------	-----

第2項 染谷川河川敷部出土の刻書土器について .....	(高島英之) .....	230
------------------------------	--------------	-----

第3項 古墳時代後期の土師器坏の成・整形技法に就いて .....	(木津博明) .....	242
----------------------------------	--------------	-----

## 第2篇 理科学分析・瓦

### 第1章 胎土分析

#### 第1節 胎土の考古学的検討 ……………348

第1項 胎土の肉眼観察(1)……………(木津博明) ……348

第2項 胎土の肉眼観察(2)……………(桜岡正信) ……373

第3項 胎土の肉眼観察(3)……………(友廣哲也) ……374

#### 第2節 胎土の理科学的検討 ……………377

第1項 胎土分析の実施にあたって ……………(大江正行・木津博明) ……377

第2項 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の土器・瓦の胎土分析(1)  
……………(花岡紘一・大山義一・小沢達樹) ……379

第3項 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土土器胎土分析(2)……………(井上 巖) ……391

第4項 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土須恵器の産地推定 ……………(三辻利一) ……482

#### 第3節 胎土分析結果の検討 ……………488

第1項 胎土分析結果の検討(1)……………(友廣哲也) ……488

第2項 胎土分析結果の検討(2)……………(桜岡正信) ……488

### 第2章 鉄製品の分析

#### 第1節 鉄製品分析 ……………491

第1項 鉄製品分析にあたって ……………(桜岡正信・木津博明) ……491

第2項 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土鉄器・鉄滓の金属学的解析について  
……………(赤沼英男) ……525

第3項 鉄製品分析結果の検討 ……………(桜岡正信・木津博明) ……539

### 第3章 赤色顔料の分析

#### 第1節 赤色顔料の分析 ……………541

第1項 上野国分僧寺・尼寺中間地域出土漆及び赤彩関係資料 ……………(永嶋正春) ……541

第2項 赤色顔料の分析結果の検討 ……………(桜岡正信・木津博明) ……543

結 語 ……………(木津博明) ……544

# 第1章 調査経過

## 第1節 調査経過

本集上野国分僧寺・尼寺中間地域第8集は、例言でも述べたとおり、調査区内最南端に広がる染谷川河川敷部の発掘調査報告と、既刊7冊で未検証であった諸科・化学分野による検討の部分に大別されるが、本節では、前者の調査経過に就いて記述する。

当該の染谷川河川敷部は、昭和54年度時点では調査対象以外の地区になっていたが、同年度12月～3月にかけて県教育委員会により実施され試掘調査結果に基づき、発掘調査実施必要地区となった。

かくして、本調査が、財団法人群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団に委ねられ、昭和56年12月～昭和57年5月にかけて本調査が実施された。

### 試掘調査

試掘調査は、昭和54年に県教育委員会によりトレンチ調査を実施した。調査に伴うトレンチの設定は第5図を参照して載きたい。

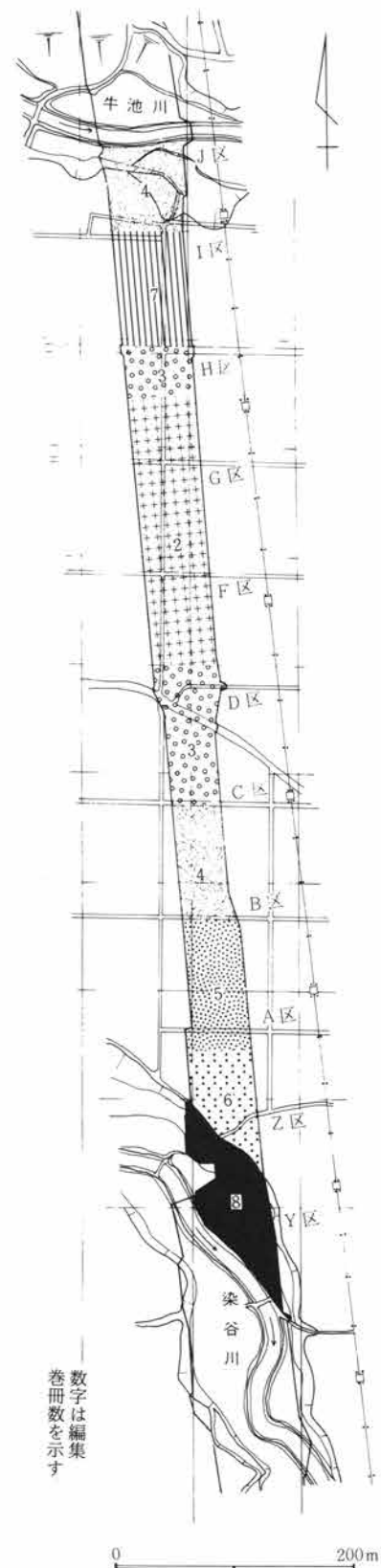
トレンチ調査の結果、河川敷中央部では、表土層の層厚が2m以上に達した上、冬期という渇水期であり勿も湧水による出水が非常に著しかった為、調査不能という結論であったが、台地縁辺部に当たる部分では、文化層の存在が確認され、台地上とほぼ同様な堆積が認められた。そして、一部拡張し、遺構の存否を確認した結果、台地の縁辺に沿ってFAを切り込んで構築されている溝状遺構の存在を確認し、同時に、台地上の試掘調査でも出土した、縄文時代～江戸時代に至る多量の遺物の出土も見た。この結果に基づき、本調査の必要性が生じた。

### 本調査

本調査は、上述の試掘調査の所見に基づき台地縁辺部に主力を投入した。調査対象面積は、染谷川河川敷約8,200㎡に対して約3,000㎡の約27%であった。

調査期間は、試掘所見の湧水による出水を考慮し冬期に設定した。調査は前述のとおり、約6ヶ月を費やしたが、途中、年度変わり等により、凍結した期間約1ヶ月半程が含まれている。この間の調査概要は後章で述べることにする。

尚当該調査区の中で、中世以降にその所産年代が推定される遺構・遺物に就いては既刊第1分冊に報告したので参照されたい。



第1図 調査経過概念図

## 第2章 周辺遺跡

### 第1節 周辺遺跡

当「上野国分僧寺・尼寺中間地域」の名称は県教育委員会・日本道路公団・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の三者の事業名称であり、調査担当者としては軽々に「遺跡」としての名称とは考えていない。則、前橋市・群馬郡群馬町の一市一町に跨がる一大遺跡であり、縄文時代から現代に至る複合遺跡である。この遺跡の性格に対して奈良・平安時代の上野国の二大モニュメントに挟まれた地域であるが所以にの国分寺を冠する名称としては不本当であり、正しくは字名乃至大字名をもって遺跡名称とする可きと考える。蓋し、調査に至迄の経過には、この名称が有する重要な地域での遺跡保存の運動が行われたことも考慮される。

当該地は、行政区分上前橋市元総社町字小見・群馬郡群馬町大字東国分(字地名は 名称が該当)に位置する。このことから前橋市分は小見遺跡・群馬町分は東国分遺跡(群)と呼称される可きものである。

当遺跡の周辺遺跡に就いては、既刊の「上野国分僧寺・尼寺中間地域」(1)～(4)の同章目を参照していただきたい。尚、第3分冊には、特に詳述したのを参照していただければ幸である。



1 上野国分僧寺・国分尼寺中間地域 2 国分僧寺 3 国分尼寺 4 染谷川河川敷

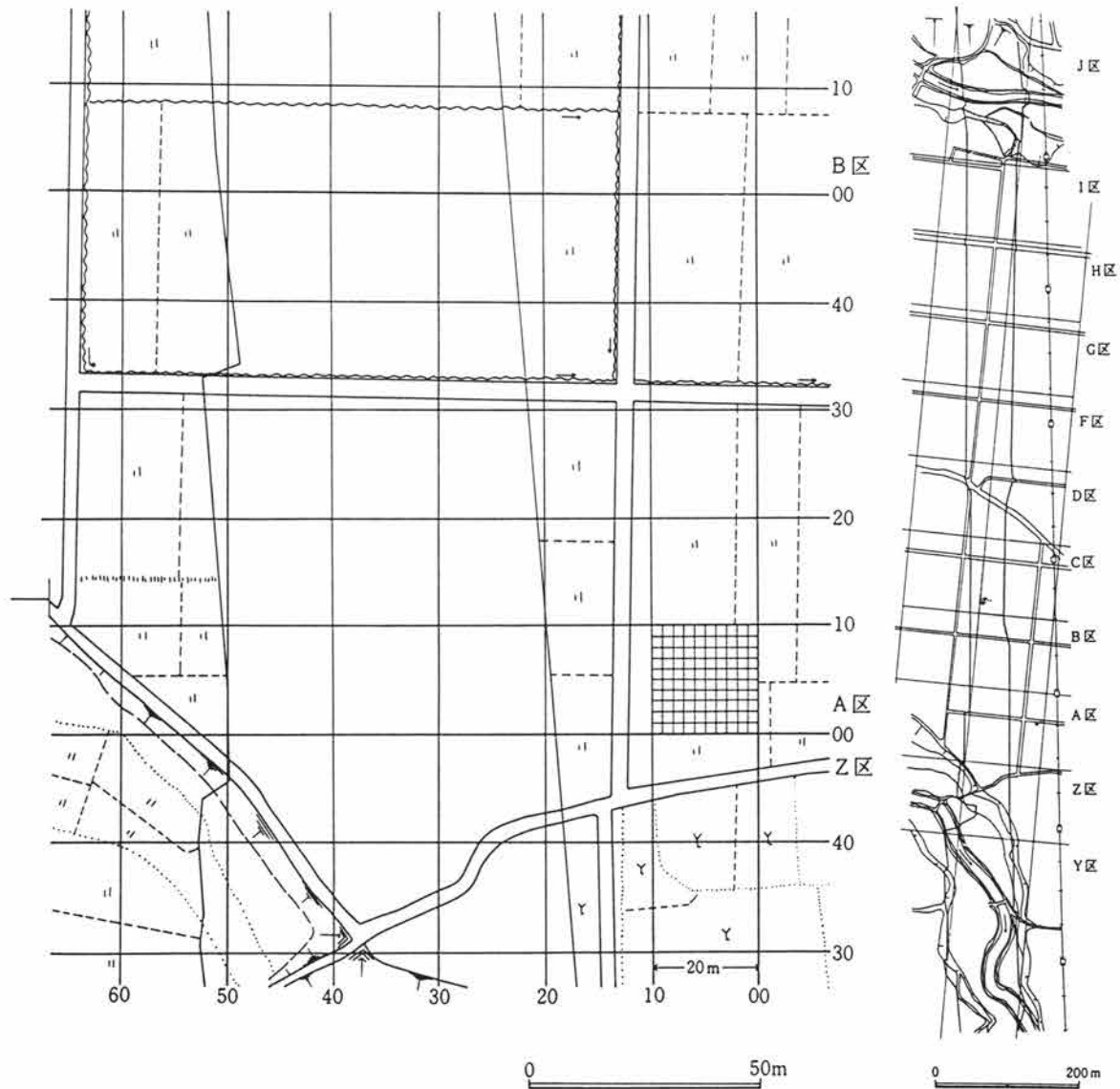
第2図 遺跡位置図

## 第3章 グリッドと基本層序

### 第1節 基本杭とグリッド

調査区のグリッド設定は、史跡上野国分寺跡の保存整備事業との関連も考慮して、国家座標を使用した。基準としたのは、調査区南の染谷川左岸に位置するIX系X=43400、Y=-72100である。この位置を00として南北100m、東西200mを大グリッドとして南からY（河川敷）・Z・A～J（Eを除く）の11区を設定した。また、大グリッド内は、南東コーナー部を基準として北方向に0～50（50=次大グリッドにおける0）、西方向に0～100の数字を与えた2m×2mの小グリッドに区分した。杭の設定は、調査の便宜上10mごとに行ない、必要に応じて増設した。

小グリッド名称は、大グリッド同様南東コーナー杭名称をもって呼称することとし、（X軸上の数字）－大グリッド名－（Y軸上の数字）として表記した。



第3図 基本杭とグリッド

## 第2節 基本層序

当遺跡は榛名山東麓・浅間山東方に位置し、両山の火山活動の痕跡は土層中において顕著に認められた。基本層序は上述の火山活動時に噴出された「火山灰・軽石」を含有するもので、その種類の含有等により分層できる。

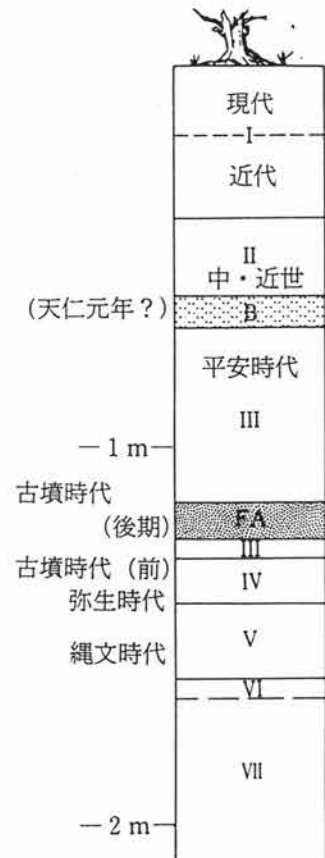
基本層序は第3図に示したとおりであるが、各調査区の地点により層厚等差異が認められるが、おおよそ図示した状況であり、図はD区での状況を模式図化したものである。

上層は7層に分層できる。地山はローム土層であり、同層下位は火山系のシルト層でその粒子・色調によって分層できるが、ここではローム土層を地山と呼称し、ローム土層下位の土層については井戸跡の断面図を参照されたい。ローム土層は堆積時の状況により2分される。これは黄褐色を呈する部分と濁橙褐色を呈する部分である。前者は比較的乾燥状態での堆積で、後者は水性ないし水の流路部であった可能性が指摘されている。<sup>註1</sup>さらに前者は砂質味を帯びる部分等も認められ、後者は粘性に富んでいる。これらの状況は、両者が調査区内を横断する様に認められる点で、地形の傾斜方向に沿うと考えられる。また、この両者のあり方は上位の層にも影響を及ぼしており、前者の上位層のIV・Vは粗粒質土であるのに対し、後者の上位層のIV・V層は比較的微粒質で粘性に富んでいる。

このローム土層の堆積した段階では地山の起伏が著しく、上位層はこの起伏を埋める様な状態で堆積しており、おおよそ平坦になったのは奈良時代に至っての頃と考えられる。また、調査区の部分によってはV層土の層厚の変化が著しいが、倒木痕の調査によりV層土は調査区全体に均一的に堆積していたことが判明した。

### 基本層序

- I層—表土層 濁暗褐色を呈する。昭和35年に実施された耕地基盤整備事業以降の土壤、全体的に発色が濁る。また、上述の昭和35年以前の土壤の存在も認められる。この土層は調査内の地点により存在し発色もやや暗い。両者は砂質味が強く、下位のII層土を主体に耕作された土壤である。
- II層—黒色土層 浅間山供給のB軽石を多量に混入する。砂質味もB軽石により非常に強い。発色はIV層土に次いで暗い。本層土はB軽石降下以降(天仁元年とすれば1108年以降)から近世ないし近代に至る間の土壤と考えられるが、おおよそ12世紀から17世紀頃の年代が考えられる。これは文化層として出土した遺物の年代観からであり、中世遺構の覆土の主体をなす土壤である。
- B—浅間山給源B軽石 基本層序の中では土壤としての層とは把握しなかった。B軽石は前述した粘性を帯びるVII層土上位に遺存する傾向が認められた。降下時期は天仁元年(1108年)・天永3年(1112年)・弘安4年(1281年)等が考えられるが、現状では天仁元年(1108年)説が有力視されている。
- III層—黒褐色土層 浅間山給源のC軽石を多量に混入する。砂質味はほとんどなく、粘性も際立ったほどでもない。C軽石の降下年代は4世紀頃であるが、本層土とIV層土に主体的に混入する。本層土は古墳時代中期以降B軽石降下直前までの間の土層で、上述した間の遺構の覆土の主体を成す土壤である。また、本土層下位では古墳時代後期以降に降下した榛名山二ツ岳供給のFAが埋没する畠状の遺構が検出されており、IV層土との間隙は5cm前後である。
- IV層—黒色土層 浅間山給源のC軽石を多量に混入する。III層土より粘性があるが顕著なものではない。本層土は層として確認されたものは比較的薄い、古墳時代前期の住居跡の覆土は本土層を主体として埋没している。この点から古墳時代前期以降の何らかの作用を想起せざるを得ない。FAが存在する部分の畠のサク内だけであり、他の部分に降下したFAは土と共に攪拌され、IV層・V層の色調の差に現れたものと考えられる。
- V層—暗褐色土層 本土層は比較的さらさらした感の土層であり、明定できる軽石は認められないが、細粒の白色粒子(鉱物質)・黄褐色粒子を含有している。また、本層中には特に南側調査区で縄文時代の遺物を多量に包有している。さらに北側調査区の弥生時代の住居には、上述のIV層と本層の中層的な土壤により埋没している。縄文時代の遺構は本土層と褐色味の強い土壤により埋没している。
- VI層—濁橙褐色土層 VII層土はソフトロームに相当する層である。VII層土は前述したローム層であり、D区では粘性の強いローム土であった。



第4図 基本層序





第5図 試掘トレンチ設定図



## 第4章 検出された遺構・遺物

### 第1節 染谷川河川敷部の調査概要

#### 地 形

染谷川は、榛名山東麓斜面新東村広馬場辺の標高280mで水源を発し、南東方向に流下し、標高160mの群馬郡群馬町後疋間・冷水付近に至り幅を広げ、更に東南方向に流走し、標高110m程の前橋市元総社地区で牛池川が合流し、同所辺から流路を南方に変換している。そして、高崎市下新保町で井野川に合流する総延長約13kmの河川である。

当遺跡地の群馬郡群馬町東国分・引間地区及び前橋市元総社町小見地区では、染谷川の蛇行による侵食を受け川幅は広く、当該報告区の周辺では幅200m程を計測し、河床と台地上との比高差は8mに及び、河川敷面との比高差は約4.5mを測る。

又、この染谷川は、広瀬川と共に、侵食を行い流走し、侵食により形成された台地を前橋台地と呼んでいる。

染谷川河川敷部（当該報告区）（以下「河川敷」と略称）は、染谷川左岸に当たり、標高120mを測る。そして、対岸南側は鳥羽遺跡が位置している。河川敷部は、北西250mに位置する上野国分僧寺の前面から南東隅部にかけての平地が緩やかに下り、調査区西端部に接する部分よりほぼ平坦になっている。この平坦部は、旧染谷川流路が蛇行した部分が、その後の流路変更に伴い蛇行時の面影を残した部分であり、半月形状の平面形状を呈している。この河川敷部の調査着手以前の地目は全て水田であったが、西側の緩斜面部から台地上では桑・菜園である。

河川敷部分の水田耕作地は、平坦面が2段に造成してあった。上位及び下位水田耕作面は、水路を介して約80cm程の比高差を有している。

上位水田面は、崖線に沿って10～25m程の幅員を有し三ヶ月状の形状を呈していた。そして、この上位面は、崖線側の一部は、昭和35年に実施された、耕地整備に削平され、耕地の拡張が実施されている部分がある。この部分が顕著なのが5区・6区である。この5区と6区との界は、耕地整備に伴い地山を削り出し造成された「ヘッピー坂」が台地上と河川敷部を継いでいる。この「ヘッピー坂」を中心として崖線下が、耕地整備時に削平された主体部分である。

下位水田面は、上位水田との境界に当たる水路から、染谷川の沿堤までの単一面で構成されており、最大幅45m、長さ約200m程の不整形を呈する状態であった。この下位水田も、耕地整備に伴い造成されている。

6区の西端側は、前述した国分僧寺南線から当該部に向かい緩やかな傾斜地である。現地目は菜桑園の耕作地になっている。

この緩斜地形は、国分僧寺南東隅部（国分僧寺第16次調査）（寺域外＝寺地）の調査所見によると現地表下約2m程に、国分寺存続期間（時期の特定は不詳）に併存した「道」の遺構が検出されている。この「道」は、検出深度及び南東方向に向かい緩やかに傾斜していることから「道」は当該報告区に向かい延びる状況が推定出来る。即ち、当該報告区の部分は、南東部からの進入より、寧、北西側の、国分僧寺南縁沿い乃至南東隅部から、緩やかに下る「道」により結ばれていたことが類推出来る。

上述してきたように、当該の調査区は、染谷川河川敷部という地理的環境下にあるが、地勢的には、近接する国分僧寺と、強い関係にあったことを示唆する地域であり、寧、地形上、高・低という台地上と、河川敷部では、両者を継ぐ何らかの有機関係が無ければ、遺跡としての真の性格を追求することが出来ない。

## 第2節 試掘調査

染谷川河川敷部の試掘調査は、昭和55年12月より最初の試掘調査地区として実施した。実施に当たっては、日本道路公団用地中心杭を基本とした。この最大理由として、調査対象地（遺跡地）を100m毎に直線で貫く点と、座標系の設定を実施する時間が無かった都合と、従前に於ける試掘調査・本調査が、中心杭を利用しているこの3点による。

欺して、日本道路公団用地中心杭をして調査区の設定を行い。S T 179～180をI区とし、S T 180～181をII区とした。そして、この方法により、調査区全体をS T 179～190迄の11区間、即ち、I～XI区迄の調査の設定を行った。

トレンチは、中心杭より左右に各々1本と、直交するトレンチを各区に対に、2本を基本とし、各区の調査区域の状況に応じて増減を行った。

染谷川河川敷部は、便宜上I区とした。トレンチの設定は、上述の点を基本と第5図に図示した第1トレンチ～第5トレンチを設定した。又、部分的なテストピットを設定しトレンチ調査の補足を行った。

トレンチ調査は、調査工程の都合から二期に分けた。これは、調査所見に基づくものである。そして、トレンチ調査の結果は、遺構の存在を確認・検出したことに外ならない。以下に各トレンチの所見を記述する。

第1トレンチ、当トレンチは、重機による掘り下げを行い、可能な深度まで掘り下げたが、現地表下約2m程迄が表土層であることが確認出来たが、以下は湧水により確認する方法が無かった。この状況は、当トレンチを含め、第2・3・4トレンチでも同様であった。

第5トレンチ、当トレンチは、上述の結果から、文化層の存否がどこから確認出来るかという点から、地形に沿った状態で設定した。この結果、少量の遺物と黒色土の存在が確認出来た。この黒色土が台地上のIV層に対比される。

第6トレンチ—当トレンチも第5トレンチの設定理由と同様で設定した。この結果、現表土層下には、数層の文化層の存在が想定され、第5トレンチ同様に黒色土と上位の文化層の存在が確認出来、遺物も、やや多く、縄文時代～近世に至る多時代の遺物が得られた。

この第5・6トレンチで検出された黒色土が文化層なのか、遺構の覆土かいとう点を確認する為、両者の中間に2m×2mのテストピットと崖線の際の部分に設定した。この結果、この地点でも黒色土の堆積が確認出来、更に大形破片の古式土師器（台付甕）のみ数点が出土した。このことから、この黒色土は、古墳時代前期の文化層であることが確認出来た。

拡張区—当拡張区は、全体の試掘調査終了後、崖線際の平坦部（上位水田面）を面的に調査した。これが、本調査時の4区である。当区では、現地表下80cm程で地山砂質シルト層に達したが、南側で、緩やかに落ち込んでいることが認められた。そして、この落ち込む部分に数本のセクションベルトを設定し掘り下げた結果、プライマリーなFA層を切り込む溝状の落ち込みが崖線に沿って認められた。そして、この落ち込みを調査した結果、何らかの遺構であることを確信した。これにより、染谷川河川敷部には遺構の存在することが推定され、本調査の必要有りという結論に達した。

しかし、第1～5トレンチの所見もあることから、遺跡の存在は、崖線に沿った部分であろうことも想定されたので、本調査時に、再度、調査必要地域の確定後に実施せざるを得ないとうを所見として試掘調査の当該区の試掘結果とした。そして、本調査は、上記の遺構の存在が予期し得る点から実施した。

### 第3節 検出遺構の概況

#### 第1項 検出遺構の概況

染谷川河川敷部で検出された遺構は、鎌倉時代以降では井戸4基が検出され、この4基の井戸に就いては既刊第1分冊に掲載報告した。又、当該区内での小調査区の設定と各調査小区（以下調査区と略記）の概況に就いても併載したので第1分冊を参照して戴きたい。

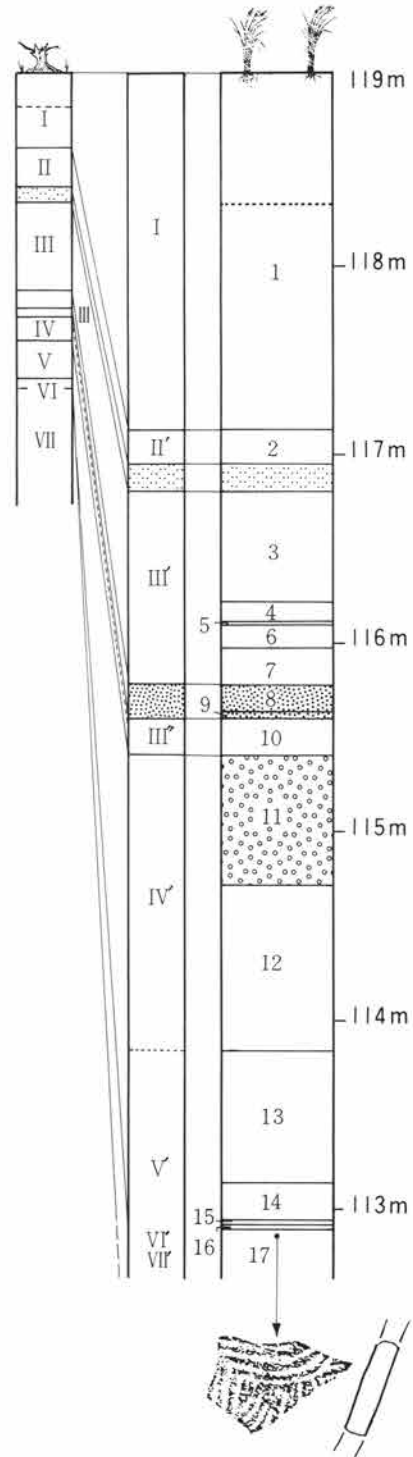
今次の報告は、上述した以外の古代の遺構・遺物が主体である。検出された遺構は、階段施設を伴う石組み井戸2基、祭祀跡1ヶ所、土坑7基、及び時期不明ピット（5区ピット群）12基である。これらの遺構の内、5区ピット群を除く全ての遺構は、2区・3区で両区の境に集中して検出されている。そして、これらの遺構は、古墳時代後期から平安時代迄、長期に亘り生活の一端を担っていたのである。このことは、当該河川敷部に於いて、古墳時代後期以降、特殊な背景の存在により利用があったことを示唆していると推察される。又、出土遺物の中にも道教思想の具現化した遺物種の出土もあり（第5章第2節第1項参照）、当該地区の遺構の性格を考察する上で非常に重要な存在である。以下、各遺構に就いて記述し、第5章でこれらの遺構に就いて考察したい。

#### 第2項 染谷川河川敷の堆積土

染谷川河川敷部の堆積土は第6図に図示した。第6図は、染谷川河川敷部と台地上の基本土層を対比させた図でもある。下に土層の説明を記す。

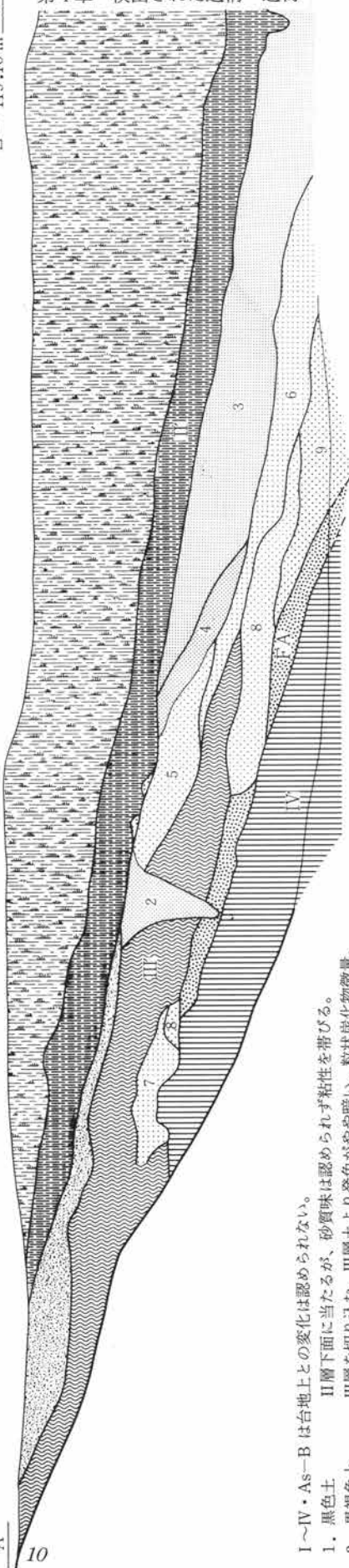
##### 層序

1. 表土層。台地上と変化は認められない（180～190cm）。
2. 黒色土。台地上II層と変化は認められない（約20cm）。
3. 濁暗灰橙色。台地上III層土に対比されるが、発色が濁り、橙色を帯びた状態で、鉄分を多量に混入する（BTの影響か）（40～60cm）。
4. 橙灰褐色砂質層（若干粗粒）（約10cm）。2井戸周辺砂質に対比されるか。
5. 鉄分（1cm）水田面と考えられる。
6. 砂質層（10～15cm）。2井戸周辺砂層に対比される。
7. 濁暗橙褐色（シルト質）。（約20cm）
8. 明灰緑色砂層。FA上位層か（10～15cm）。
9. 濁暗橙シルト。FAに対比される。（2～2.5cm）。
10. 黒色土。台地上IV層及びIII層（FA直下部）に対比される。
11. C T。10mm～20mm大の粗粒軽石が多く、細粒の台地上のC軽石は少ない。
12. 黒色砂質。台地上V層上部層に対比される（約90cm）。（60～70cm）
13. 暗濁灰褐色砂層。台地上V層下部層に対比される（60～70cm）。
14. // 微粒砂土。泥炭質（約20cm）。
15. 砂層。（2～3cm）
16. 濁暗橙褐色砂質層（2～3cm）
17. 砂礫層。旧染谷川河床面か。砂礫は円粒。図中の縄文土器が上面で出土。土器の器面は磨滅している。

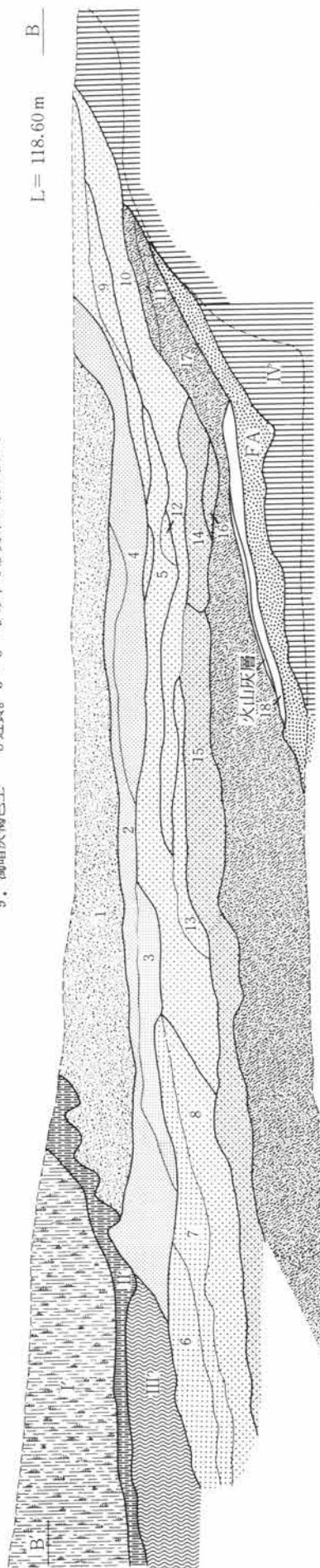


第6図 染谷川河川敷部堆積土層柱状模式図

第4章 検出された遺構・遺物



- I~IV・As-B は台地上との変化は認められない。  
 II層下面に当たるが、砂質味は認められず粘性を帯びる。  
 III層を切り込む。III層土より茶色がやや暗い。粒状炭化物微量。  
 粗粒状礫含有・粗粒状C軽石若干(砂質土)。  
 粒状C軽石含有。  
 粒状C軽石含有・III層土近質。
6. 濃黒褐色土 粒状炭化物多量。奈良・平安期の遺物が多量に出土。  
 水性堆積砂層。  
 7. 濃灰褐色土 3近質。(FA層を切る。)  
 8. 濃暗灰褐色土 8近質。3・8・9の中で砂質味が最も強い。  
 9. 濃暗褐色土



1. 茶褐色砂質土 粒状C軽石多量(1号井戸覆土に類似)。  
 2. 茶褐色砂質土 粒状C軽石多量。鉄分多量。  
 3. 茶褐色砂質土 鉄分若干。  
 4. 暗灰褐色土 粒状C軽石含有。(上図4と同質)
5. 茶褐色砂質土 2より鉄分多量。  
 6. 茶褐色砂質土 鉄分微量。  
 7. 黒褐色土 III層近質。  
 8. 茶褐色砂質土 粒状C軽石含有・鉄分少量。  
 9. 注記漏れ。  
 10. 注記漏れ。
11. 注記漏れ。  
 12. 暗濁灰色土。  
 13. 暗濁灰色土 鉄分多量(硬質)。  
 14. 暗濁灰色土 鉄分若干(上面硬質)  
 15. 暗濁灰色土 14同質。  
 16. 濃暗褐色砂質土
17. 濃暗茶褐色土  
 18. 濃暗灰褐色土 植物遺体を多く含む(ピート質)。

第7図 染谷川河川敷部2区(下段)・3区(上段)堆積土層断面図

## 第4節 検出された遺構・遺物

### 第1項 本 調 査

本調査は、試掘調査の結果に鑑み、先ず、再びトレンチによる試掘を実施し、遺構の明確なる存否の確認を実施した。しかし、結果は良でなく、結果的に崖線に沿って幅15m程での平面調査とした。この時のトレンチが6～8トレンチである。(付図1参照)

この平面調査により、3区で集石状の瓦を伴う遺構を確認した(3区第1号集石の名称を与えた)。しかし、遺構なのか、単なる台地上からの廃棄遺物なのか判然としなかった。そして、遺物を伴う点を重要視し調査実施した。又、この集石遺構の調査に併行し、2区の掘り下げを行った結果、多量の土器を含有する文化層の確認と、2区と3区の境のセクションベルト際で、多量の礫と少量の遺物を確認した。この礫群は、第1号集石の構成礫と大きさが異なる為、第1号集石と区別し新たに第2号集石の名称を与えた。この二者の集石が本調査の主体を成す部分である。

調査の結果、第1号集石は、石組み井戸の崩壊したもので2基の切り合い関係と、この両者に付随する階段遺構が検出され、第2号集石では、やはり石組みの井戸状の施設が検出され、この石組み井戸状遺構の存続中に大量に廃棄された土器等の遺物の出土があった。

又、1区の第8トレンチでは、地山直上層の上面には、鉄分の沈着した薄い層が断面で認められている。この鉄分沈着層が、水田跡の可能性があったが、平面での露呈は行わなかった。この水田跡と思われる遺構の存否は、他の地点でも想定させる状況を観察しているので、後章で総括的にのべる。

### 第2項 検出された遺構・遺物

#### 3区第1号集石

当集石は、染谷川河川敷部に於いて、遺構の存在を明定させた最初の遺構である。

#### 確認時の状況

確認時に於ける状況は、当初、昭和55年度の試掘調査の結果の一つである。FA層を切る溝状遺構の存在を確認すべく、崖線に沿って表土層の除去を重機を使用して行った。この表土層除去作業実施する以前に河川敷全体を調査の便宜をはかり1～6区の区別を行った。そして、当該の3区には、2区との区境に幅1.5mの土層観察の為に区別を明らかにすることを目的にセクションベルトを設定した。

表土層除去後、スコップ・鋤簾により、B軽石層上面迄の掘り下げを行い、B軽石を切り込む遺構の存否を確認すべく平面精査を実施した。

この結果、3区の中央部に於いて、中世所産と考えられる井戸4基(既刊第1分冊報告済み)が確認出来た。そして、当該の集石部であるが、B軽石上面では存在を示す何らかの状況も無かった為、更に下位層への掘り下げを実施した。掘り下げには、重機と人力とを併用した、その結果、重機の掘削部が礫部に達した為人力のみの確認に先ず専念した。

確認の結果、礫は、崖線直下より傾斜方向(染谷川河道に向かう)に長軸3.5～5.6の不整形を呈する範囲に、礫と瓦が混在する状態であった。そして、一部には、円形状を呈す配石状態も認められたことにより、当該の礫群に対して3区第1号集石の名称を与えた。

然し、調査の結果、礫組井戸の二基の切り合い関係が明らかとなったが、3区第1号集石として遺物の取

#### 第4章 検出された遺構・遺物

納も実施した為、両井戸跡自体の調査着手時3区第1号集石の名称は、両者の確認段階ということとし、名称の廃止は行わなかった。

出土遺物は、瓦類が主体を占め、瓦類に対して少量の土器類が出土している(第12～33図)。この出土遺物の中で、土器類を既刊第5分冊の須恵器坏類の分類に対比させると、「ト段階」～「リ段階」に対比され、9世紀前半～9世紀後半の年代観が得られる。

ただし、出土遺物は、後述する第1・3号井戸跡の両者の遺物が夾雑していると考えられることから、土器の示す年代観は、両者の上限と下限を示す年代観と推定される。

又、出土遺物の中で土器に墨書した須恵器坏・塊類が3点ある(第12図—12・18・22)。この3点には順に、「如」・不詳・「天ク」乃至「天夕」と判読出来、特に「如」は、仏教との関連、即、国分二寺との係りを想起させるものがある。

遺構名称	Y区第1号井戸		位置 3-Y-19グリッド内。				平面形態	円形
規模(m)	地上径1.65	最細径0.7	最大径1.65	深度2.8	勇水位深度	夏期 2.5・冬期		
アグリ部最大径	夏期 — ・冬期 —		勇水層		IV層	耐水層 FA層		

遺構名称	Y区第3号井戸		位置 3～5-Y-18～20グリッド内。				平面形態	円形
規模(m)	地上径1.85	最細径0.56	最大径1.85	深度1.75	勇水位深度	夏期 1.6・冬期		
アグリ部最大径	夏期 — ・冬期 —		勇水層		IV層	耐水層 FA層		

所見(1号井戸跡) 当井戸跡は、西側で3号井戸に切られているが、3号井戸自体、当井戸跡の壁体を一部に利用している。

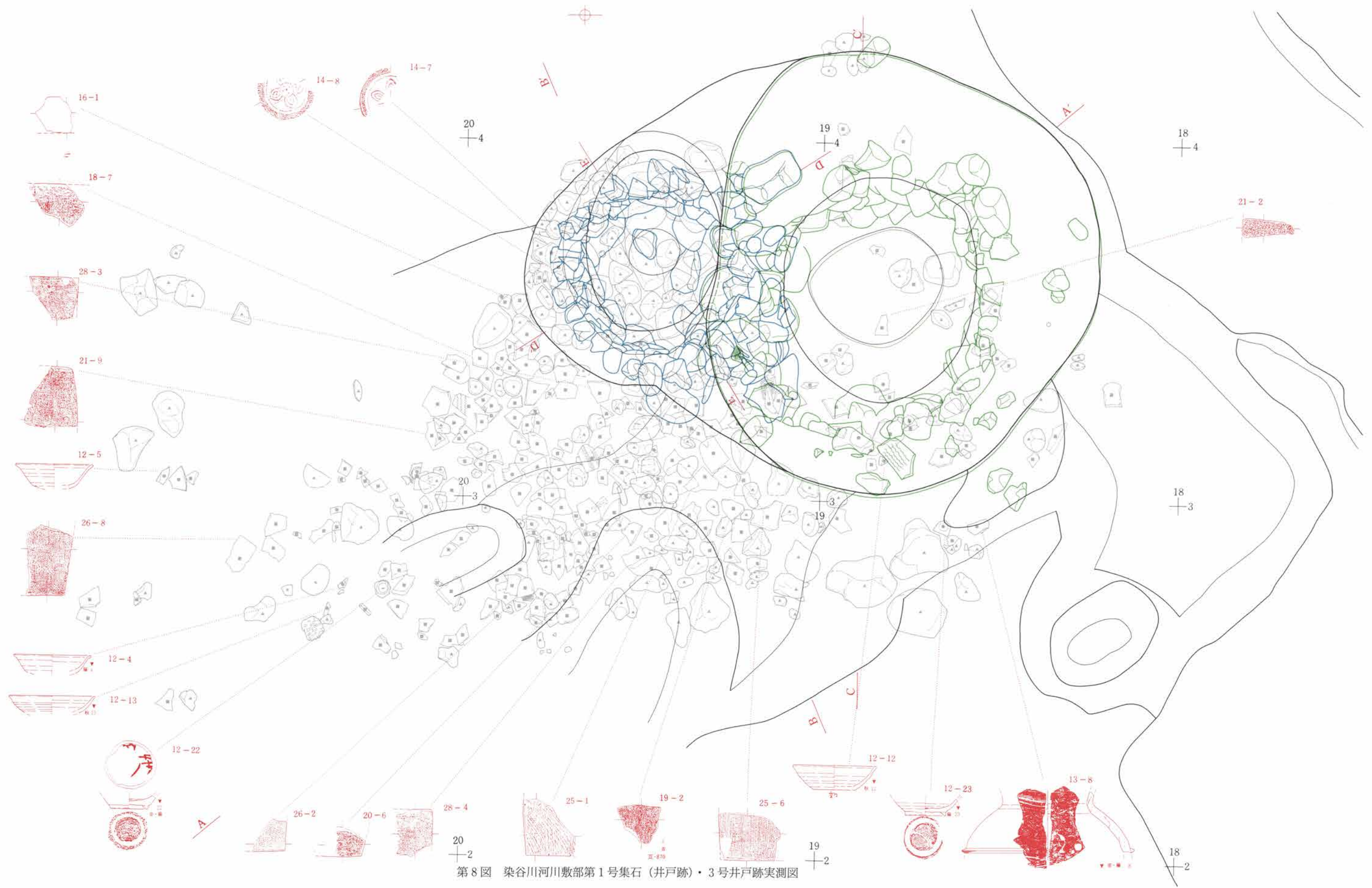
構造は、河原石を主材とする石積みで、小口積み構造であるが、部分的に崩落やずれにより旧態をそのままの遺存では無い。使用している礫は河原円礫であるが、大きさは、概ね大・中・小の三者に分別出来る、中位の円礫(30cm×25cm×20cm)を主体とし、大はこれを上回るが量的には少ない。小は拳大が主体であり、主に壁体の間隙・裏込めに用いられている。

壁体の石積みは、凡6段程が残存する。この石積みは、底面直上より積み上げるのではなく、底面より50cm程上位より積み始めている。積み方は、掘り方壁面に密着させる状態で積む礫と、壁体より10cm程遊離させた状態で積む二者がある。又、礫の積み上げの界には、瓦(女瓦主体)を緩衝材的に用いるが、各石積みの段毎に確実にには行われておらず、散漫的な状態である。この瓦の使用状況から、上位(確認面)での第1号集石での瓦と礫は、井戸の壁体に用いられていたことが推定出来るが、3号井戸跡の存在から、第1号集石の礫・瓦は1号井戸跡のそれと特定することは出来ない。

出土遺物。井戸内部からは礫に混じり瓦がやや多く出土しており、土器の出土は少量であった。又、前述した第1号集石の出土遺物には、当井戸跡に伴う遺物が含まれている可能性があり、この点を考慮すると、第12図—9に代表される9世紀前半頃(第5分冊での分類「E類系ト段階」)に1号井戸の存続乃至廃棄が考えられる。更に瓦では、全体的に、国分僧寺創建段階の瓦が多く、国分境遺跡C区第1号井戸跡と同様な様子が看取される。則、9世紀前半頃に国分僧寺に於いて、創建建物の改修が類推され、これに伴い、8世紀中頃の瓦類は周辺地区に搬出され、何らかの遺構の一部に部材として転用があったとする点である。この点を重視すれば、当1号井戸跡にもたされた瓦類は、やはり、9世紀前半頃の国分寺の改修に伴い搬出された瓦類の転用が、当井戸跡にもあったことが推測される。

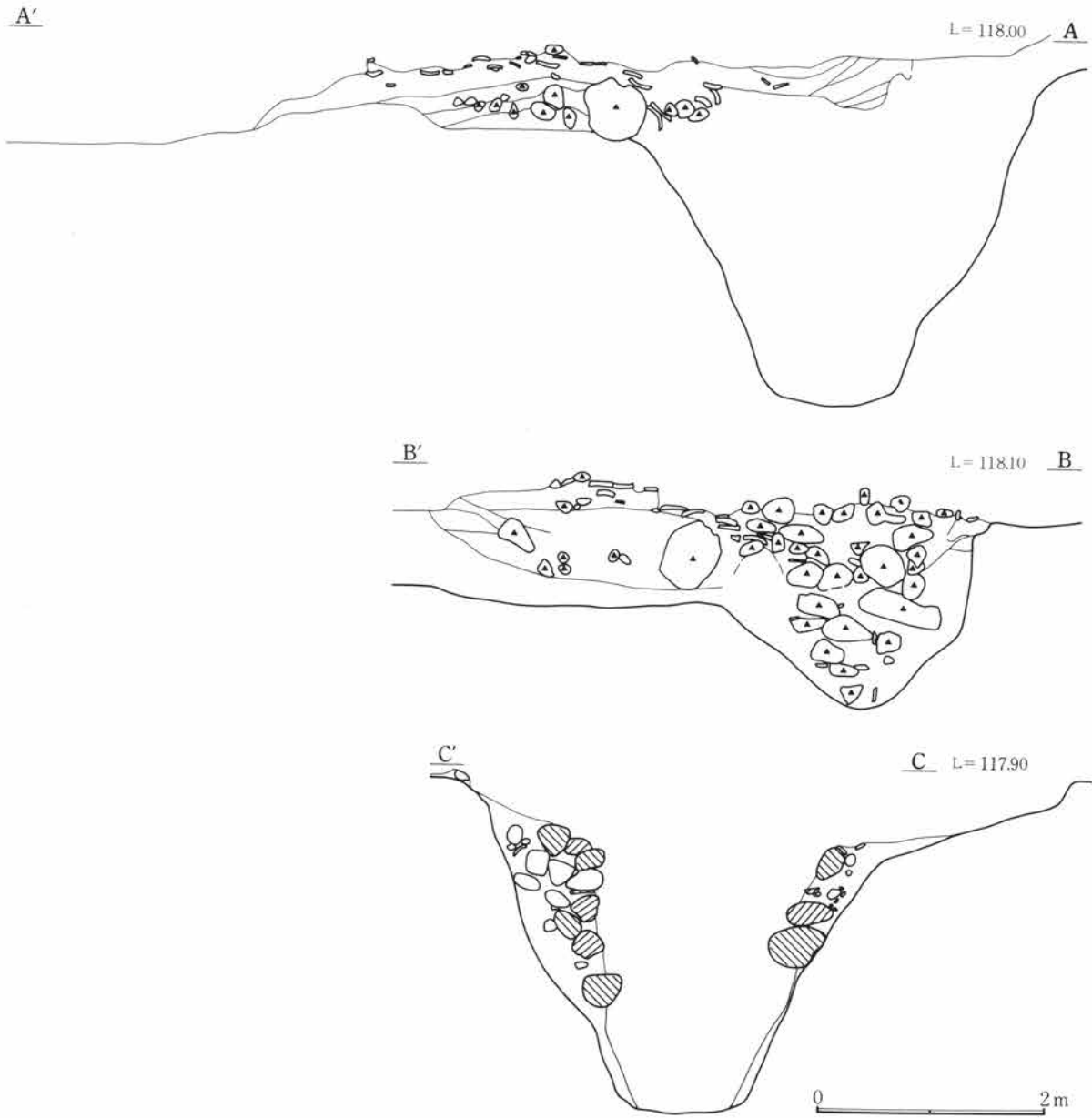
上述した2点のことから、当井戸跡は、9世紀前半代での存続と廃棄があったことが推定され、恐らく、9世紀初頭頃の構築と考えられる。





第8図 染谷川河川敷部第1号集石（井戸跡）・3号井戸跡実測図





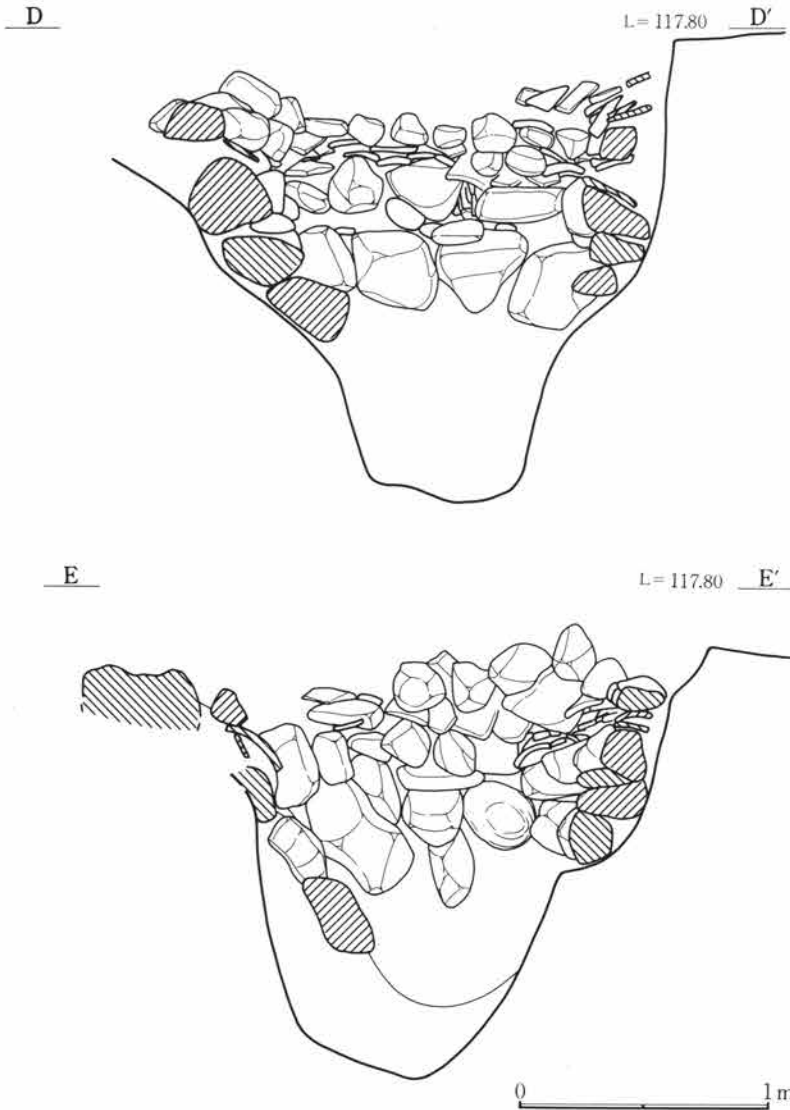
第9図 染谷川河川敷部第1号集石（井戸跡）断面図

自然遺物では、植物遺存体として、果実の種子が25点出土（第180・181図）している他に、瓢箪の外皮？が1個体の一部が出土したが、自然個体の状態が容器としての個体なのかは観察不能であった。

**所見（3号井戸跡）** 当井戸跡は、前述の1号井戸跡の西壁の一部を利用して構築している。

構造は第1号井戸跡と同様に河原石を主材とする石組みで、小口積み構造であるが、規模は第1号井戸跡よりやや小規模である。そして、第1号井戸跡と同様に、石積みの中に瓦を用いるが、第1号井戸跡のそれより多用している。

壁体の石積みは、3段が残存する。この石積みも第1号井戸跡と同様に、底面より直接積み上げるのでは



第10図 染谷川河川敷部第3号井戸跡断面図

階段状遺構 (第11図) (第52・53図)

当遺構は、第1・3号井戸に東接する崖斜面部で検出された。この遺構は、崖部を緩い弧状に削り、幅30～70cmの平坦面を6段分造成している。この階段状の施設を断面で観察すると、掘り方状のが崖面の掘り込み部にIII'層の近質上を盛り上げ、段を造成し地山シルト土を貼り床状に被覆させている。しかし、この状態では、雨水等には非常に崩壊しやすく、何らかの更なる被覆処理が行われていた可能性も考慮されようが、一方では、非常に脆弱な為、幾度となく改修され、この痕跡が、掘り方状の掘り込みとも考えられ、結論は言い難い。

この第1・3号井戸跡に東接する崖斜面に構築されたこの6段の階段の上端は、台地斜面直下に幅1.2m程に削出されているテラス部に達しており、このテラス自体は、崖線に平行し5区に達している。則、調査の西端に向かっており、西側の緩斜部に存在するであろう「道」に達していたと考えられる。このことは、国分僧寺の南東隅部（寺域外）からの通路としての崖線直下のテラス部を通り、当該階段状遺構を経て第1・3号井戸に達する為に設けられた施設であったと類推される。

出土遺物は、土器・瓦があるが、土器の年代観より瓦による年代観、則、井戸跡との併存は確実視される。

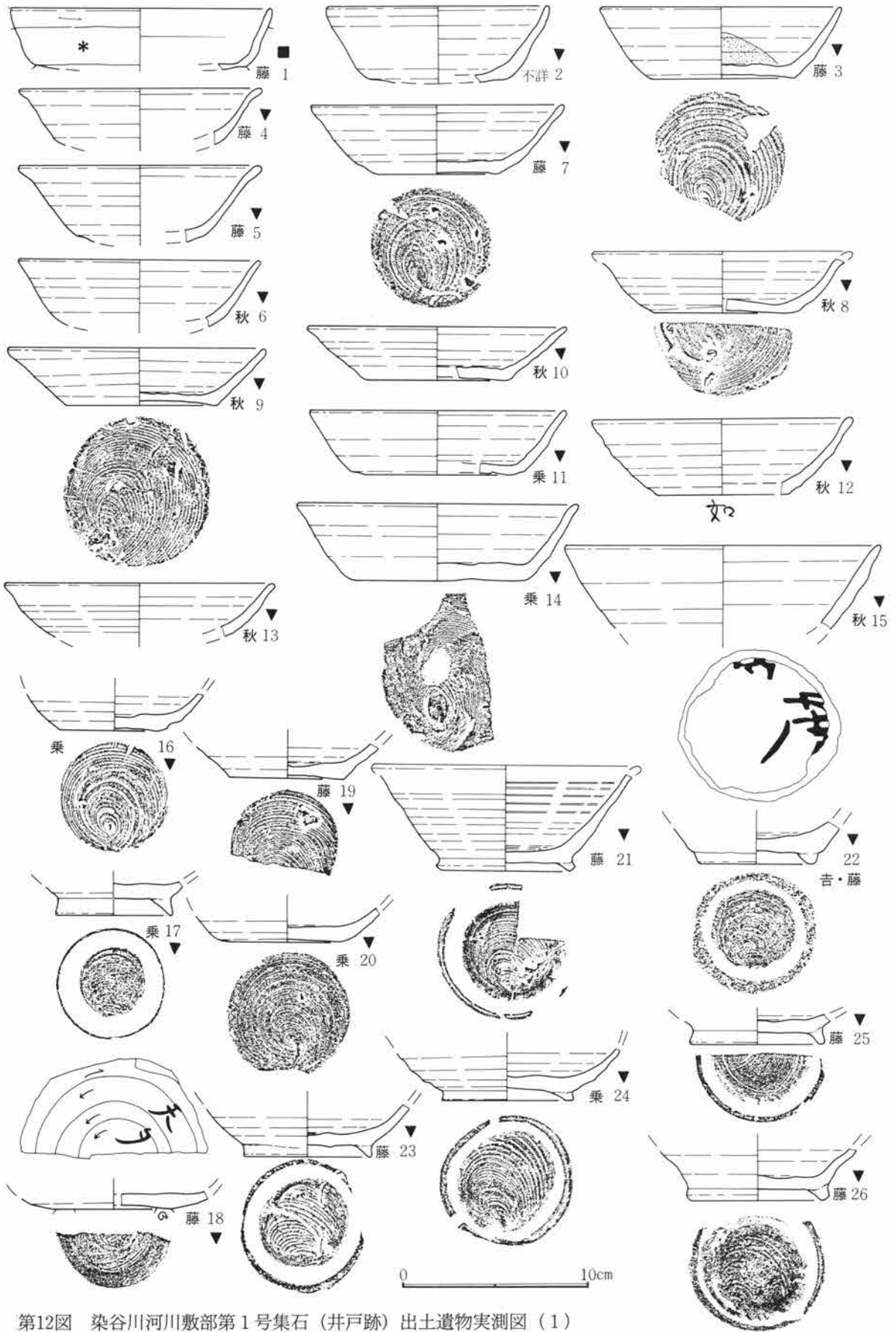
無く、底面より約60cm程上位の部分より積み方を行っている。

掘り方でこの状況を観察すれば、掘り方が、石積部を考慮した状態で、底より60cm程の部分に幅約30cm程のテラスを削り出しており、積石の礫の安定した設置方法をとっている。この点が、第1号井戸跡と大きく異なる点である。ここに、1号井戸跡の後出形としての改良点が認められる。そして、石積を底面から行わないのは、湧水位がテラス部より下位にあり、湧水による崩壊を考慮しての所産であったことが推量される。

出土遺物は、前述第1号井戸と同様な状況である。第37図-1に示した須恵器塊のが示す年代観が本井戸跡の下限年代と考えられる。その年代観は9世紀後半に比定される。

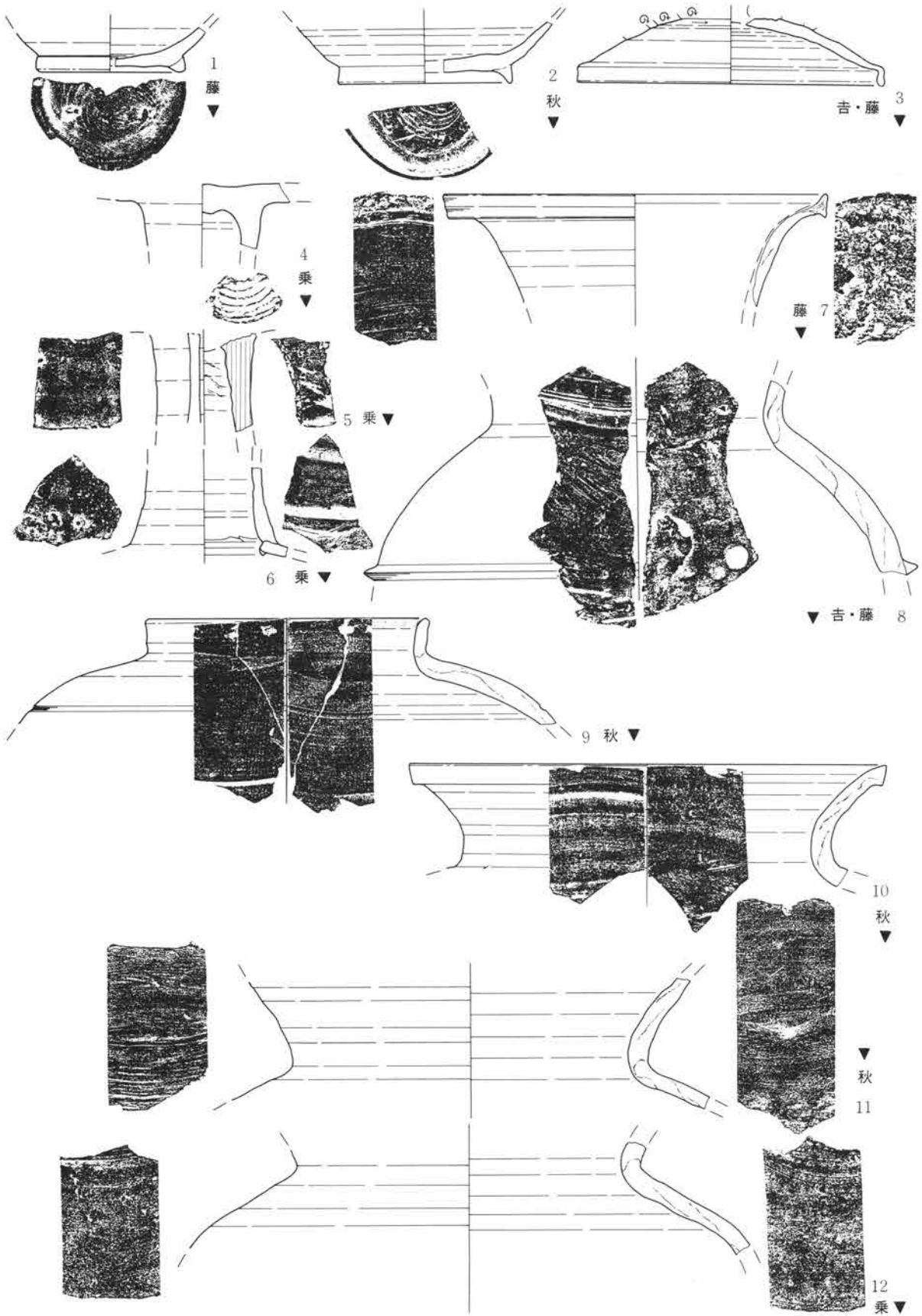


第11図 染谷川河川敷部階段状遺構実測図

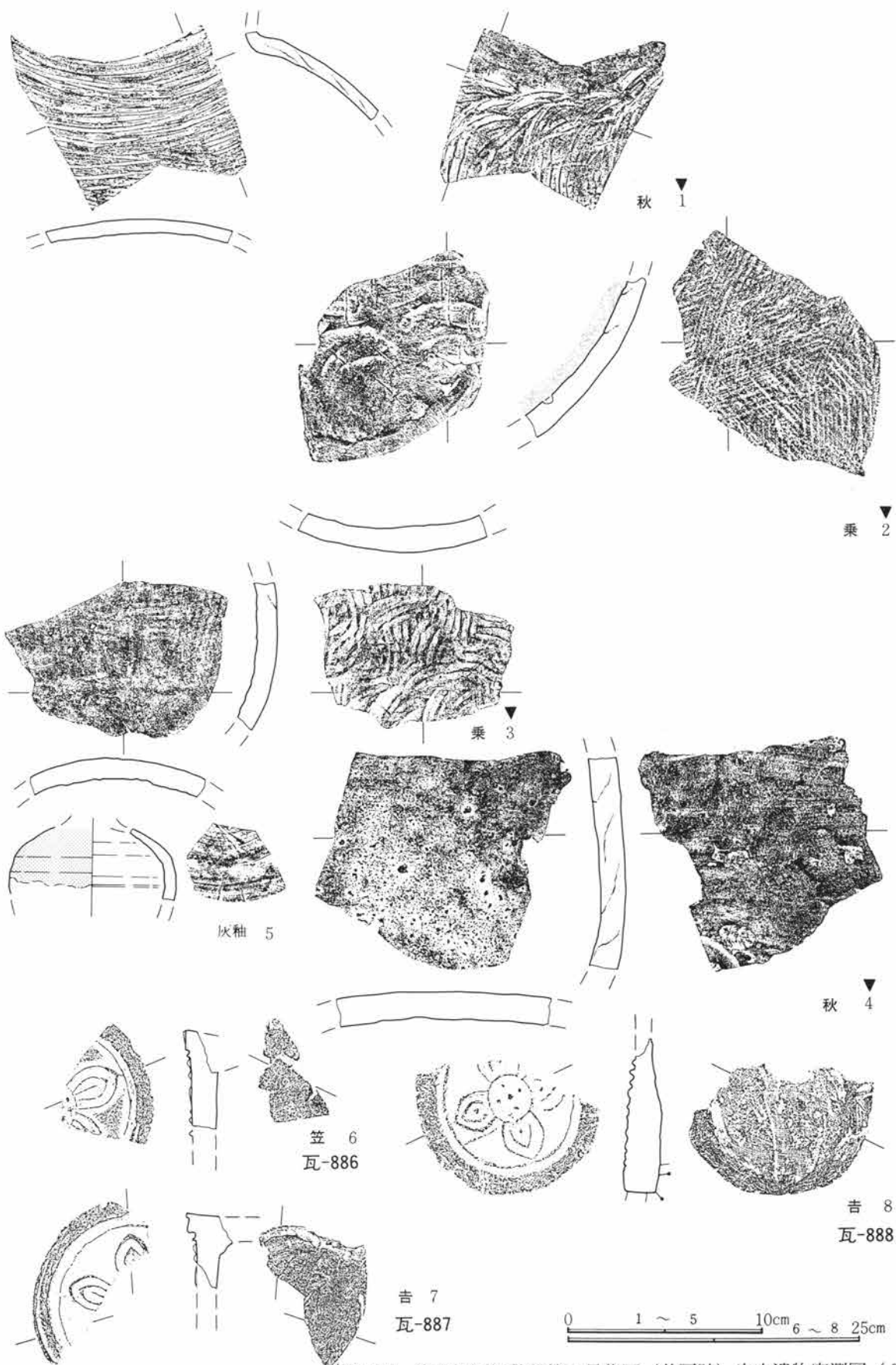


第12図 染谷川河川敷部第1号集石(井戸跡)出土遺物実測図(1)

第4節 検出された遺構・遺物

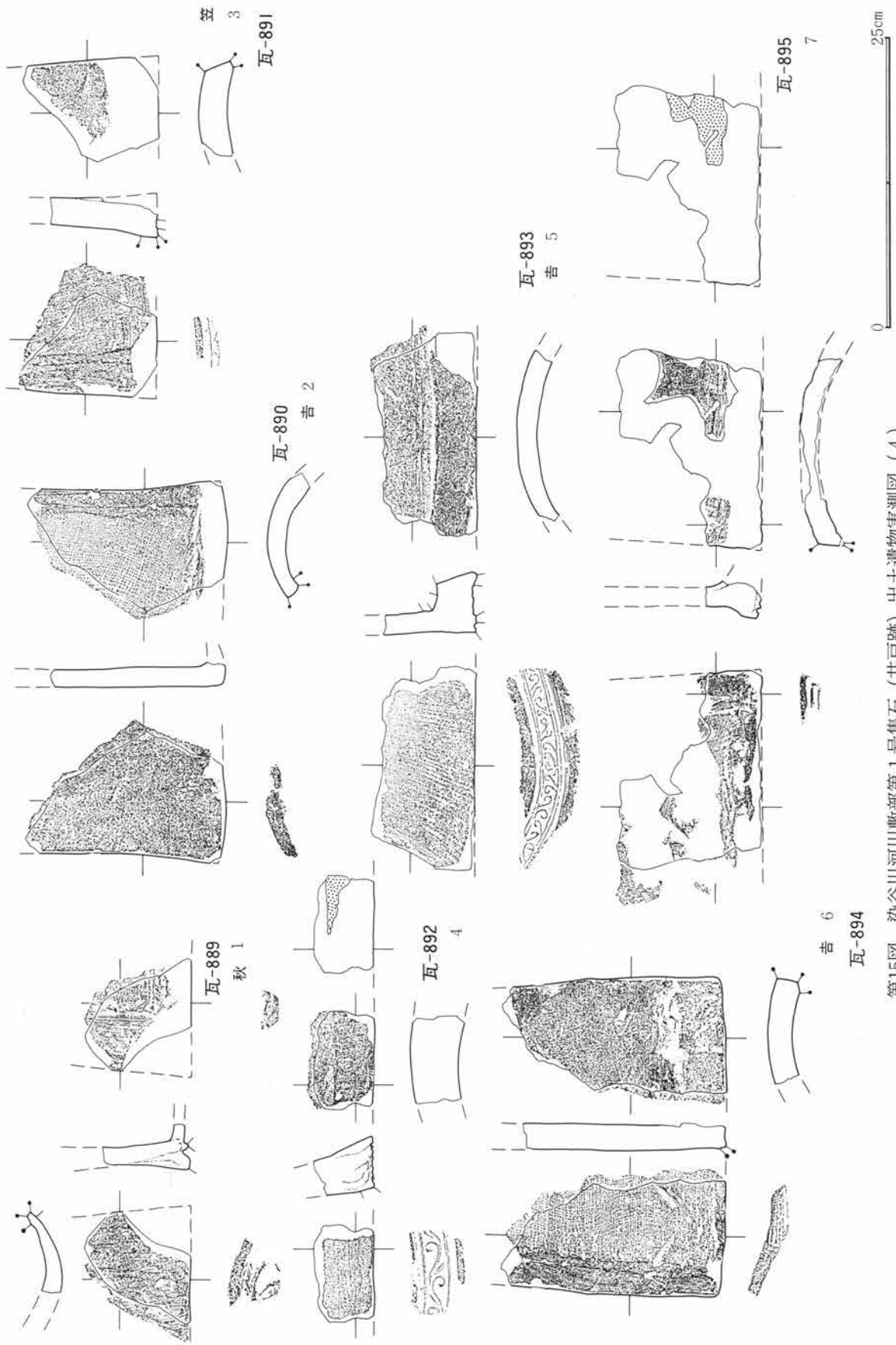


第13図 染谷川河川敷部第1号集石（井戸跡）出土遺物実測図（2） 0 10cm

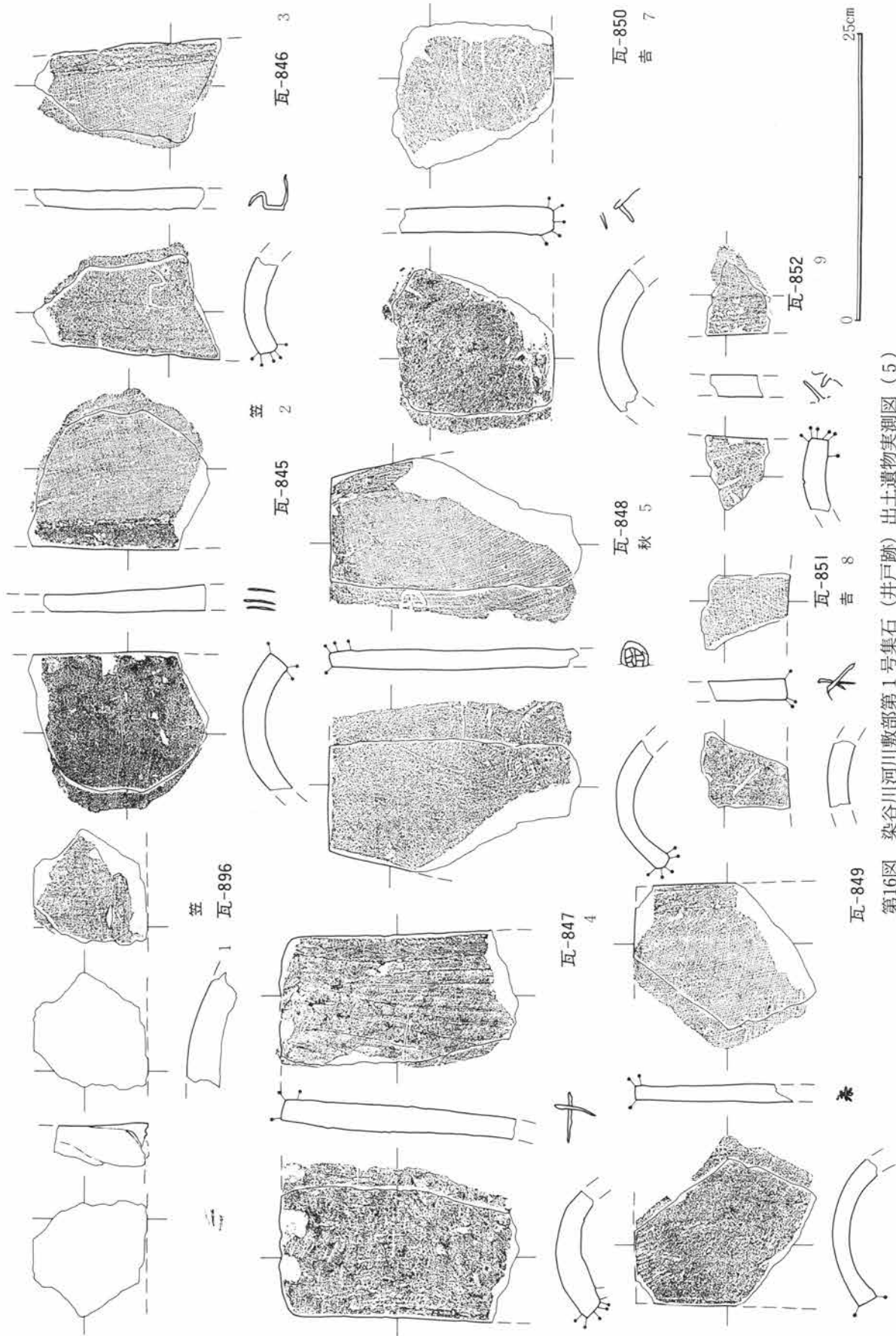


第14図 染谷川河川敷部第1号集石(井戸跡)出土遺物実測図(3)

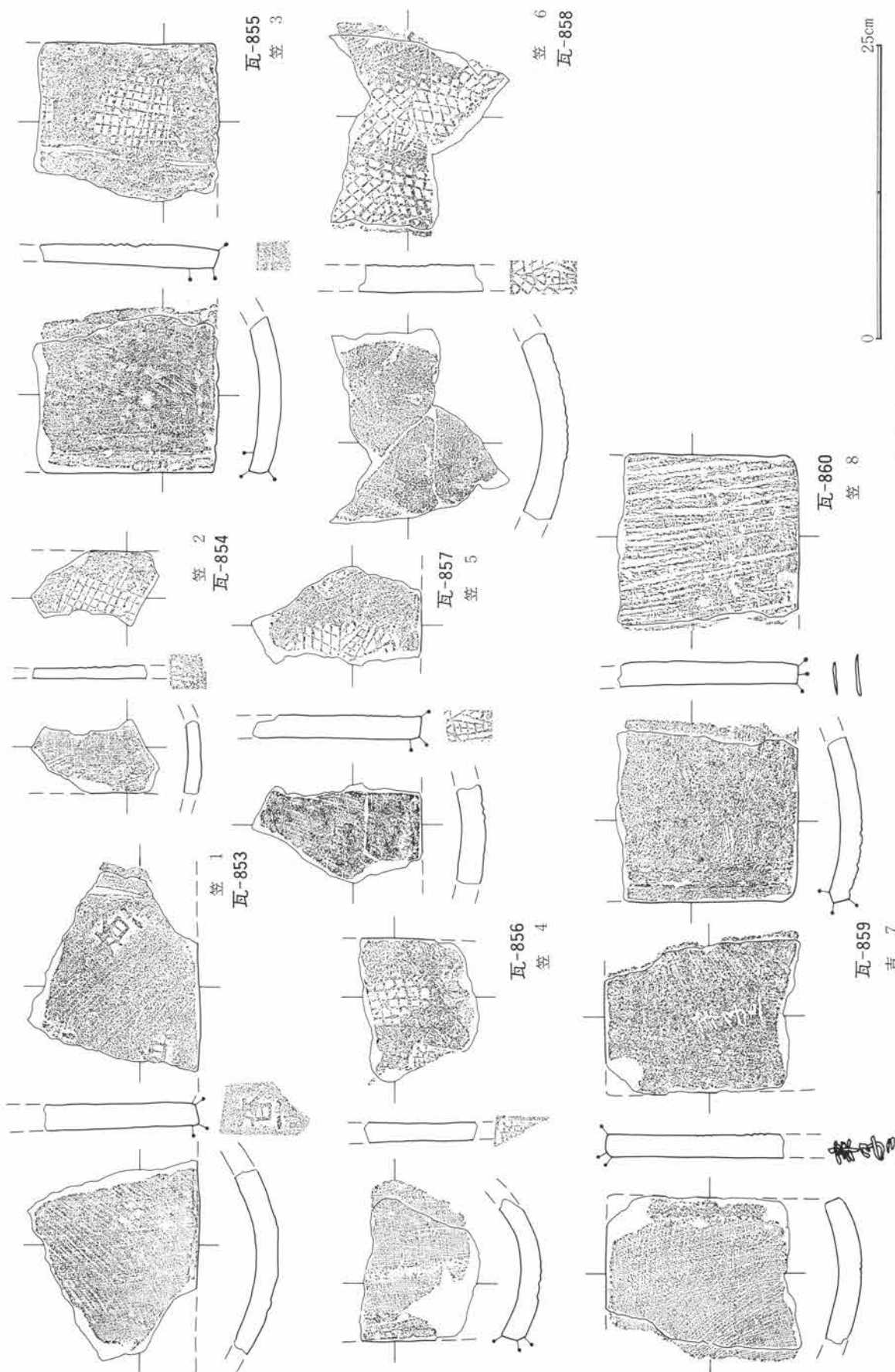




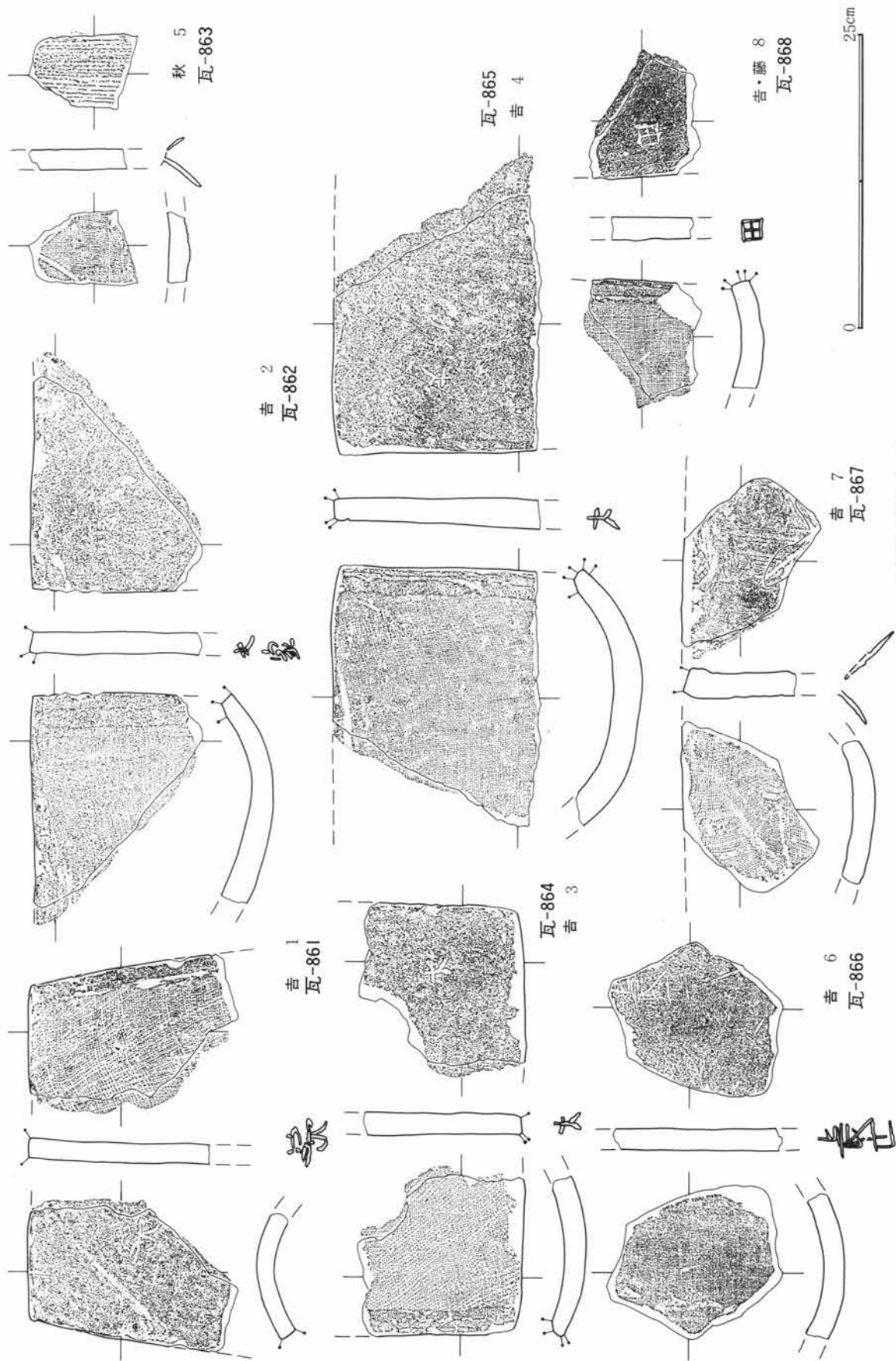
第15図 染谷川河川敷部第1号集石（井戸跡）出土遺物実測図（4）



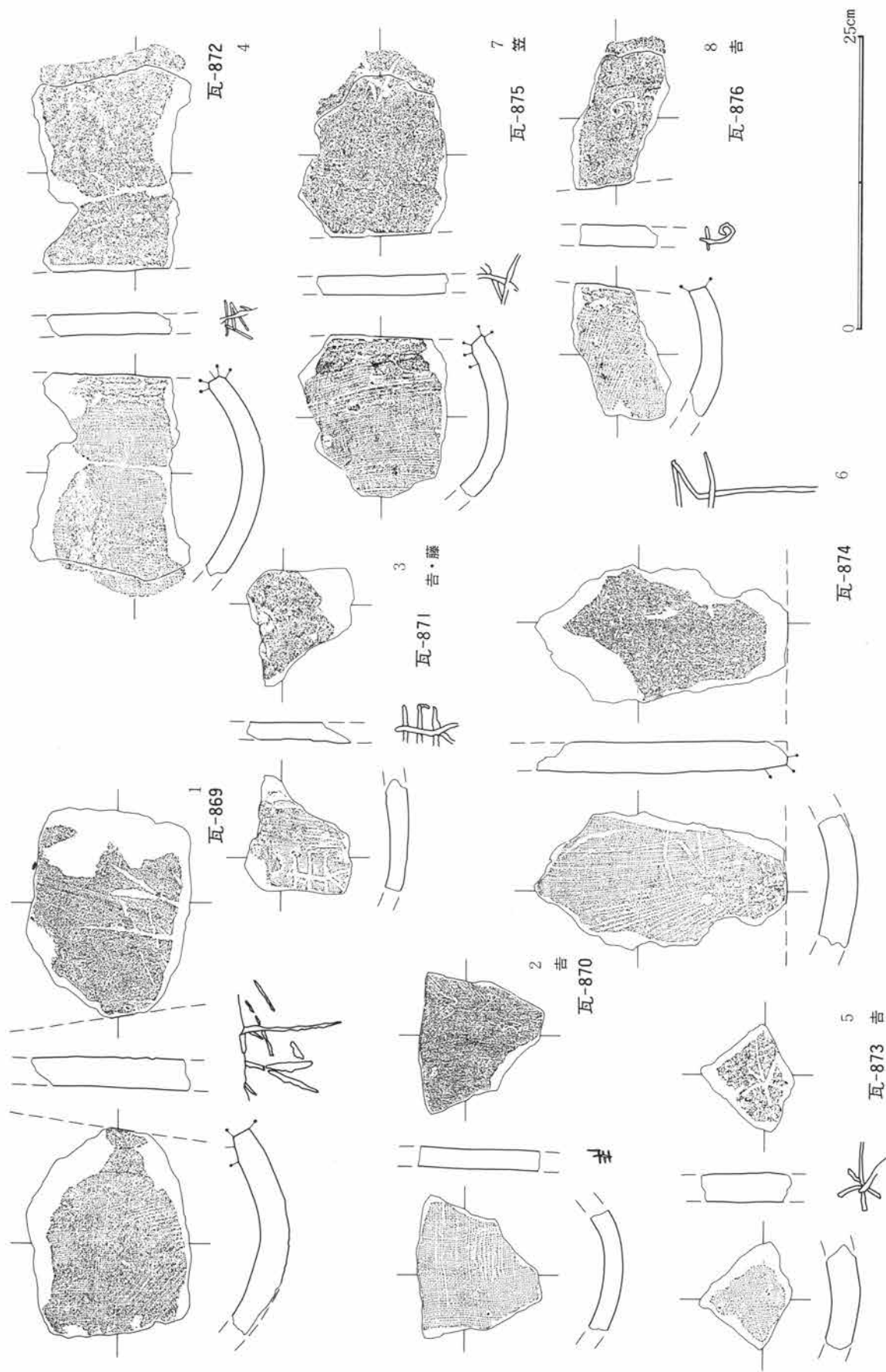
第16図 染谷川河川敷部第1号集石（井戸跡）出土遺物実測図（5）



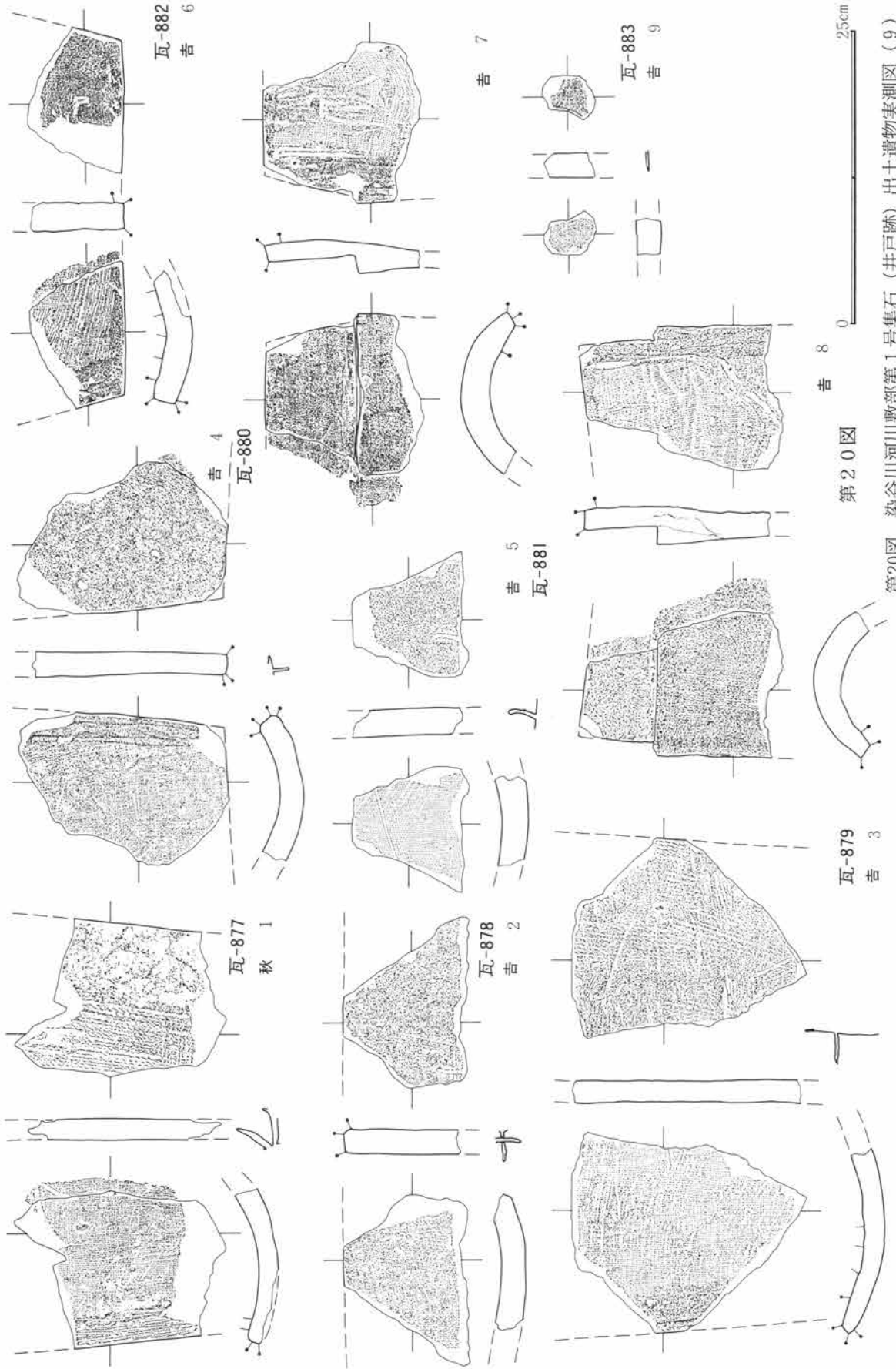
第17図 染谷川河川敷部第1号集石（井戸跡）出土遺物実測図（6）



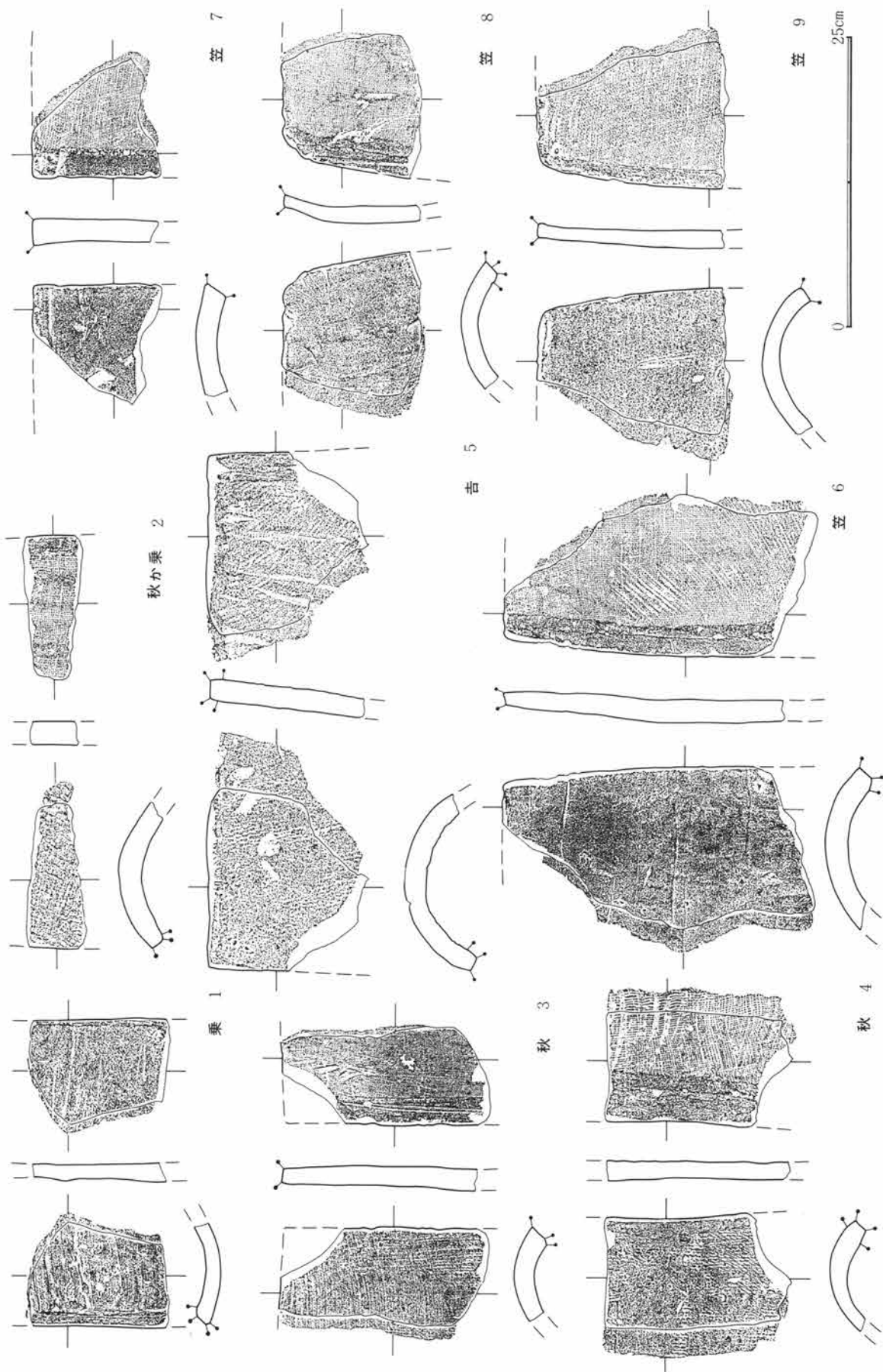
第18図 染谷川河川敷部第1号集石(井戸跡)出土遺物実測図(7)



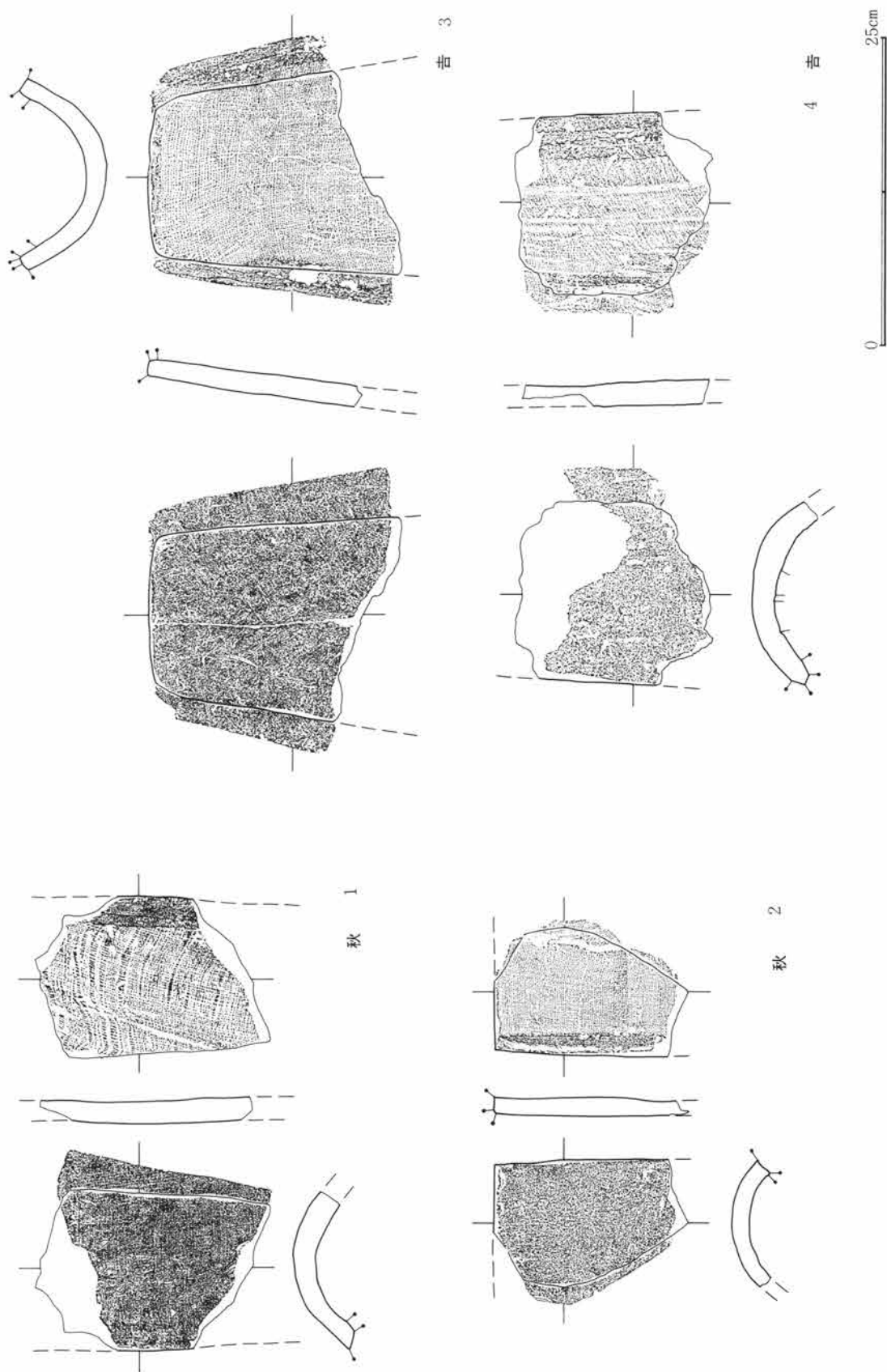
第19図 染谷川河川敷部第1号集石（井戸跡）出土遺物実測図（8）



第20図 染谷川河川敷部第1号集石（井戸跡）出土遺物実測図（9）

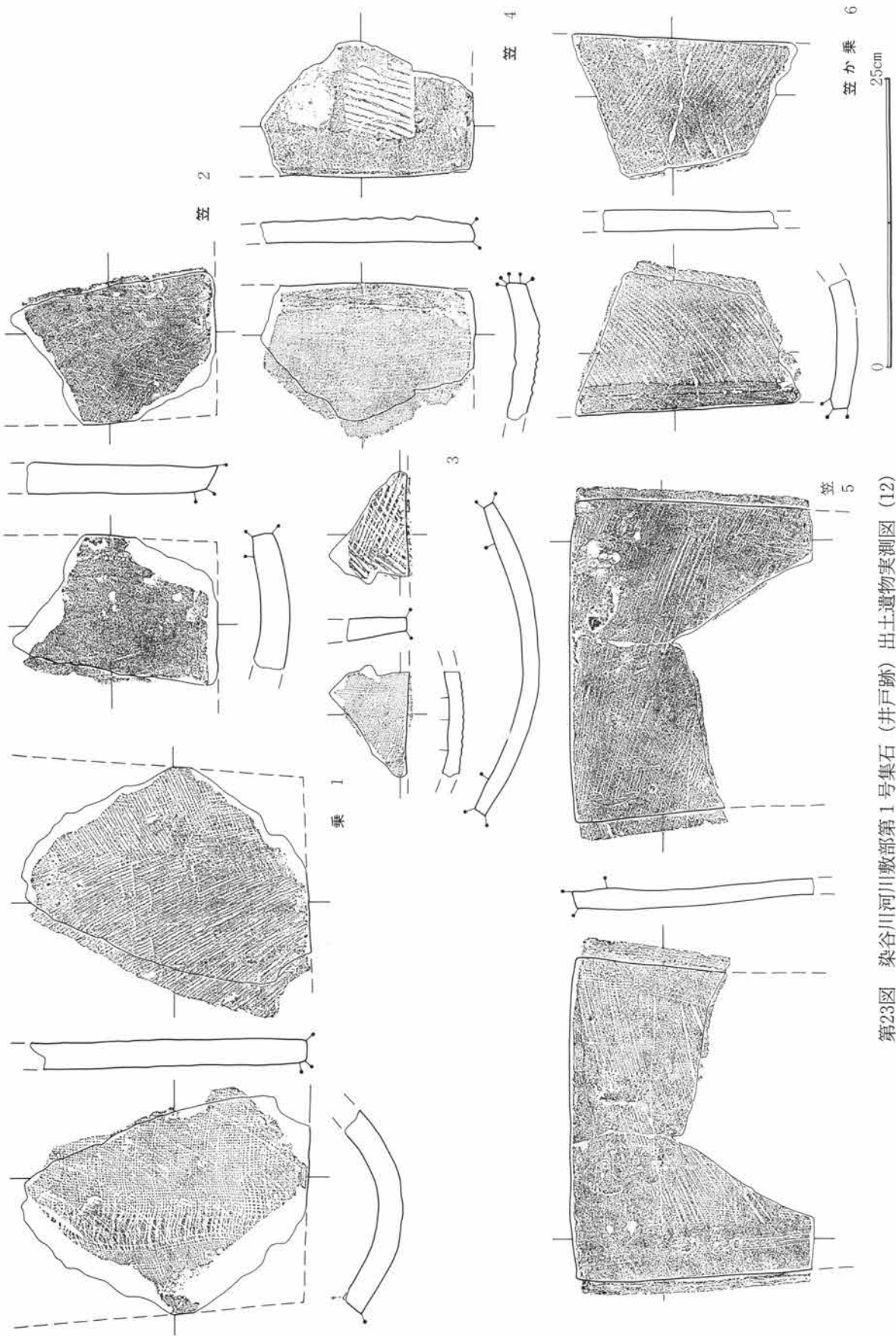


第21図 染谷川河川敷部第1号集石（井戸跡）出土遺物実測図（10）

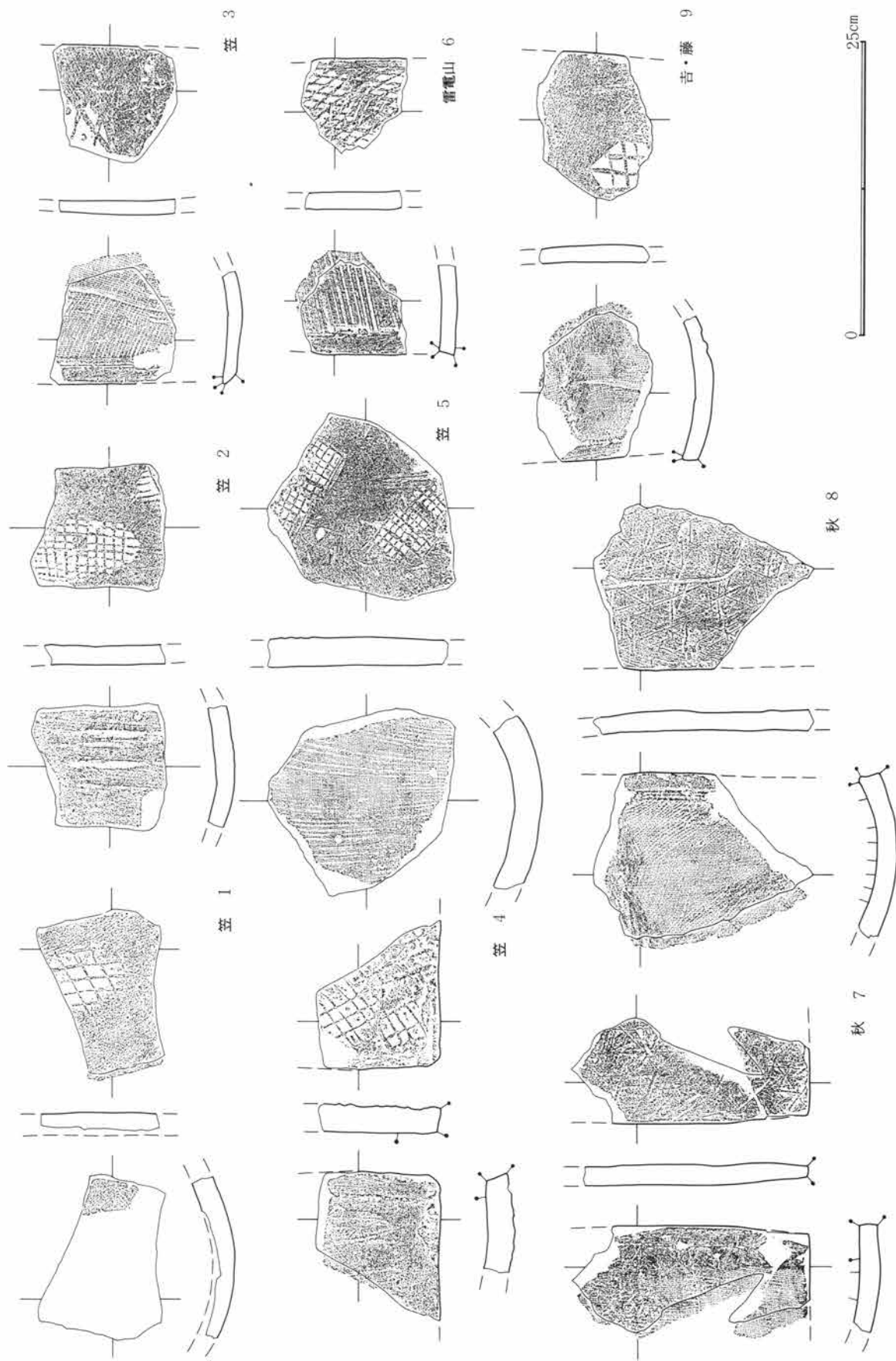


第22図 染谷川河川敷部第1号集石（井戸跡）出土遺物実測図（11）

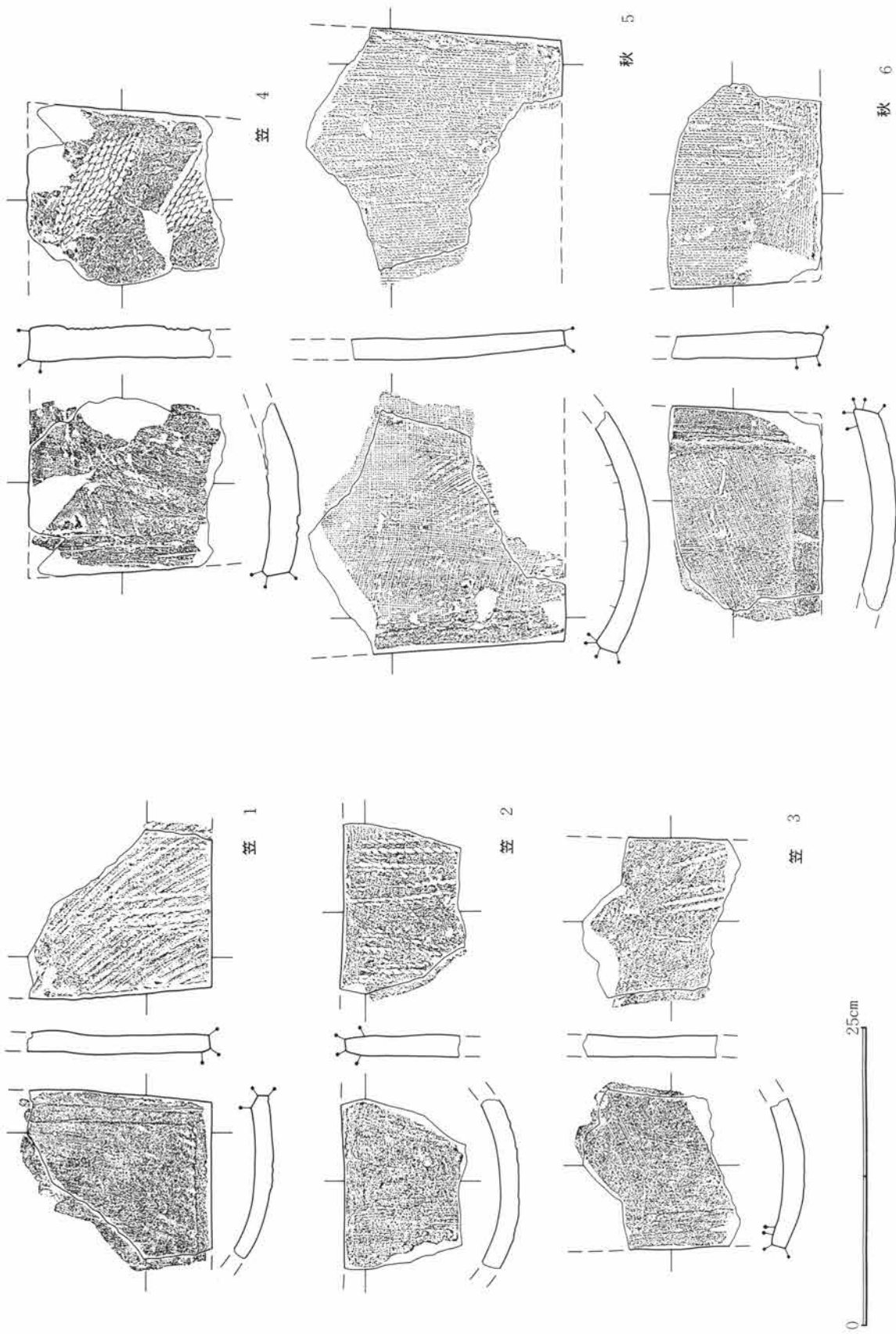




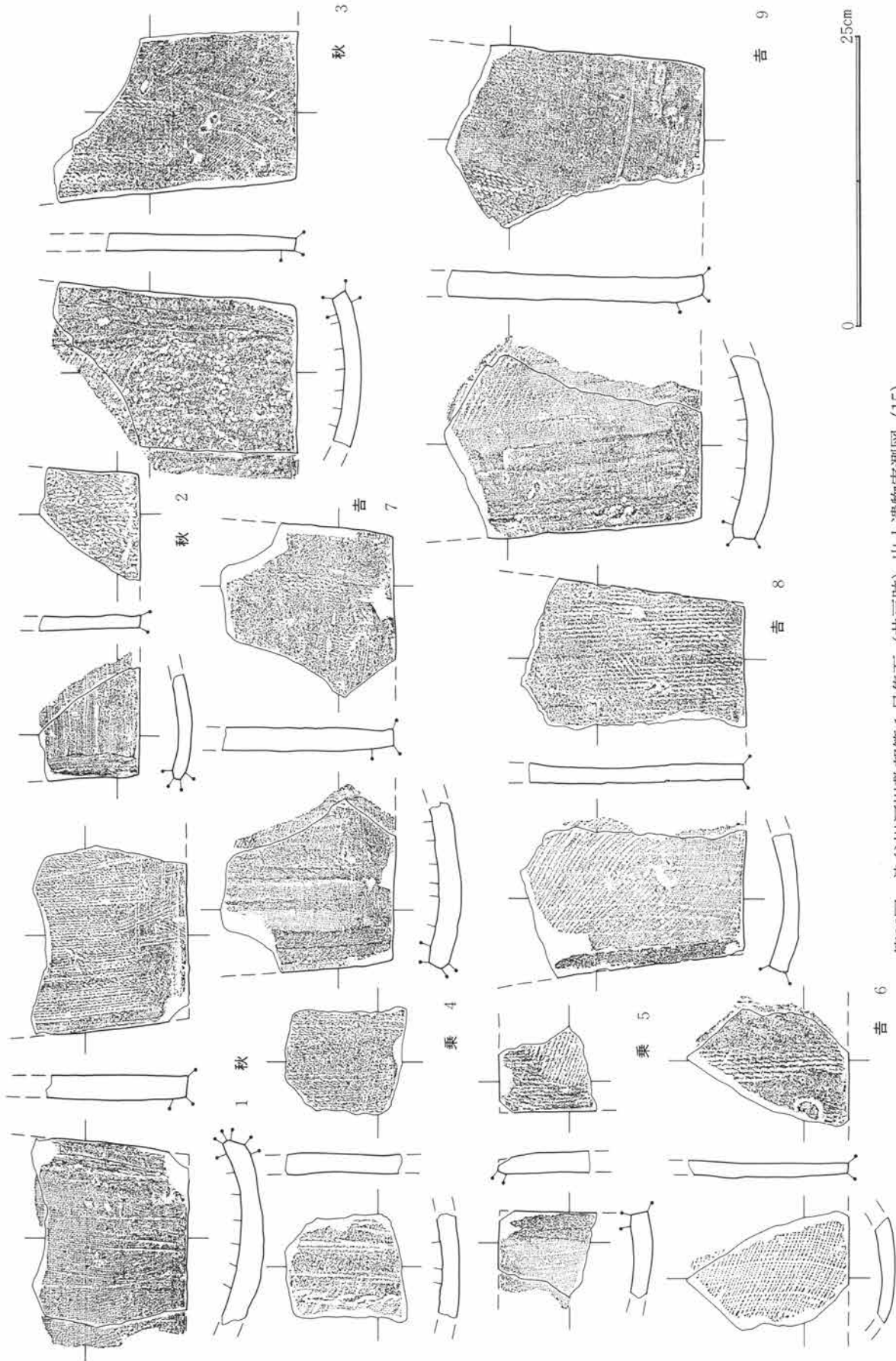
第23図 染谷川河川敷部第1号集石（井戸跡）出土遺物実測図（12）



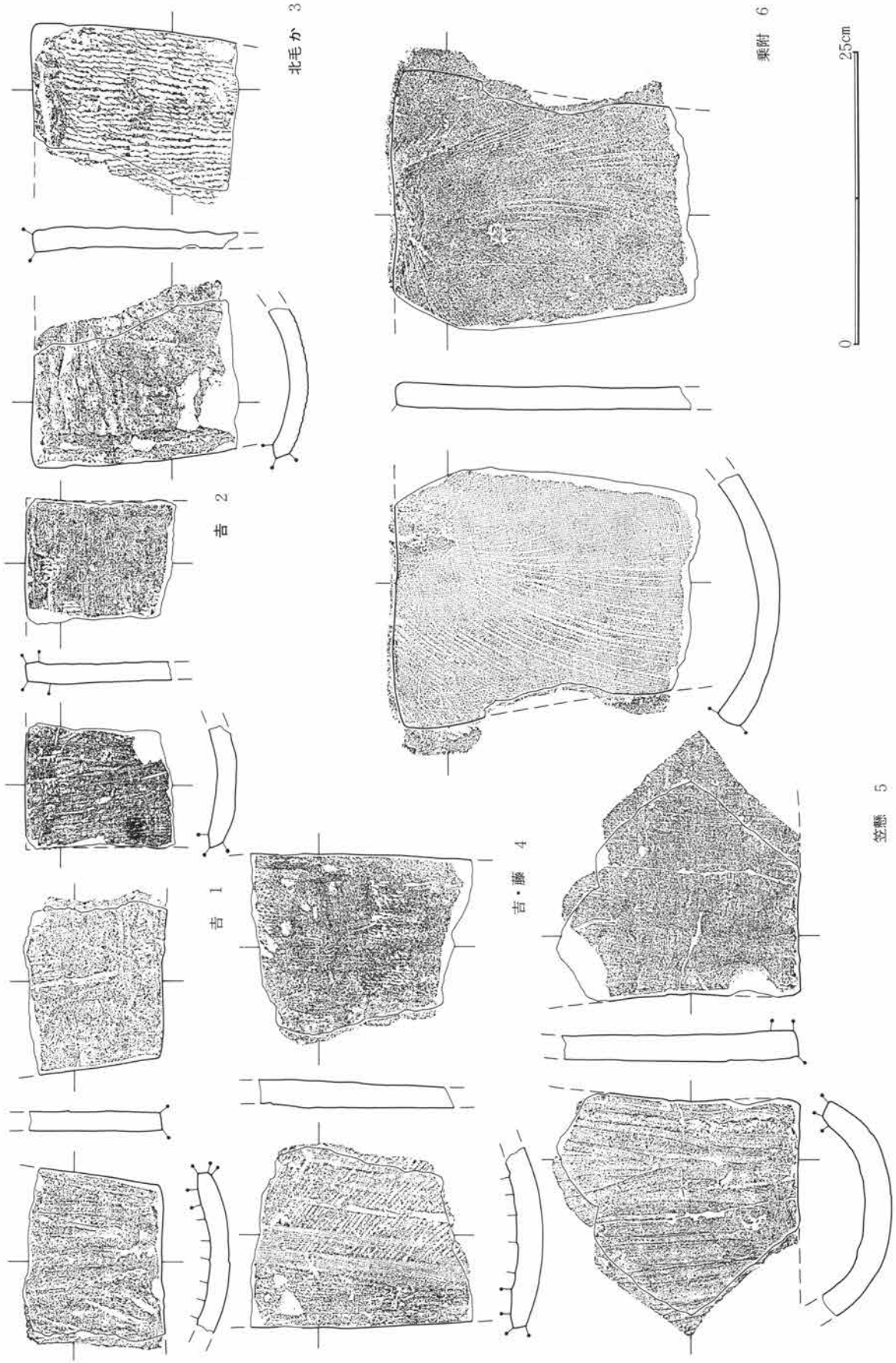
第24図 染谷川河川敷部第1号集石 (井戸跡) 出土遺物実測図 (13)



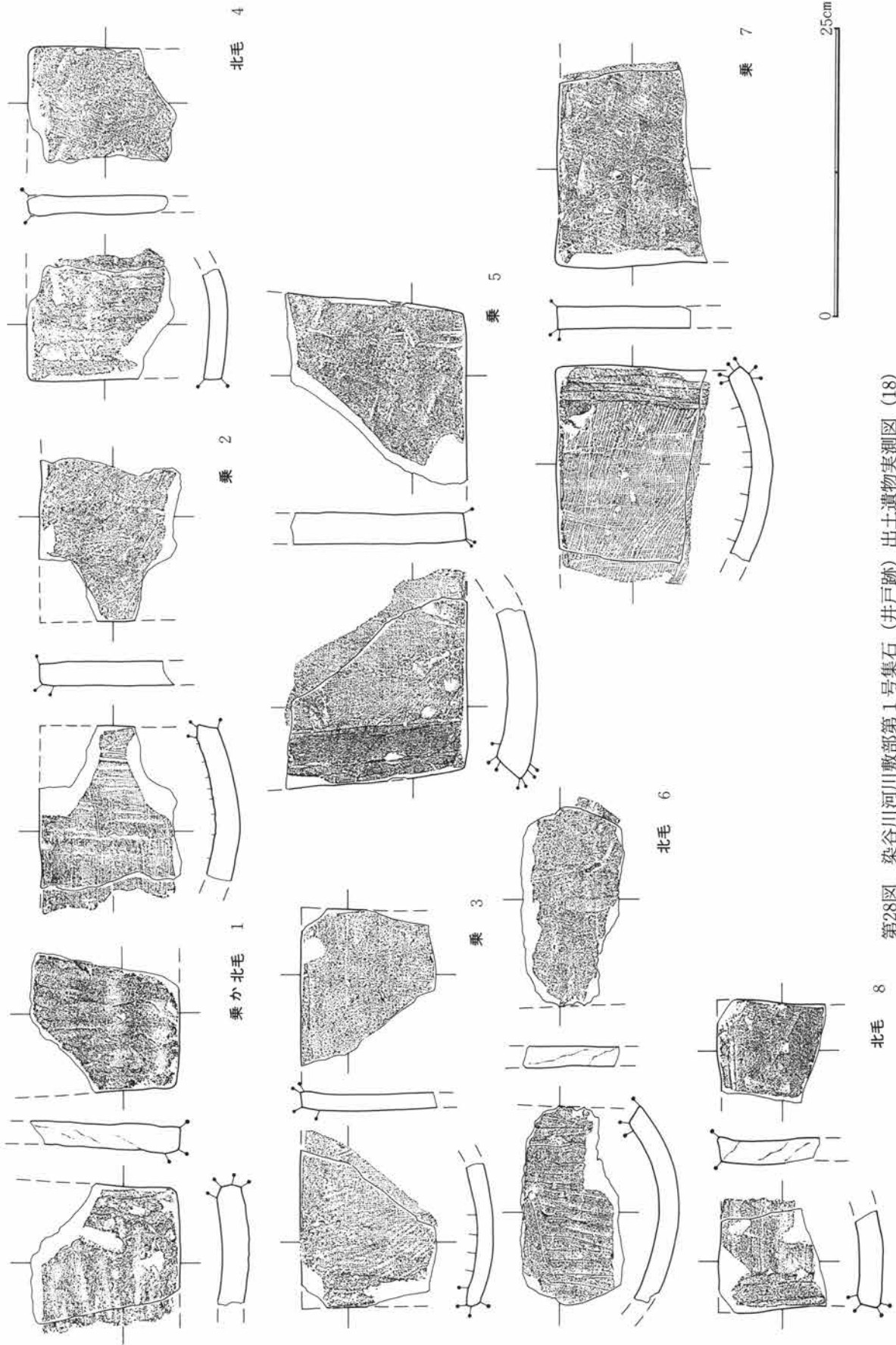
第25図 染谷川河川敷部第1号集石(井戸跡)出土遺物実測図(14)



第26図 染谷川河川敷部第1号集石（井戸跡）出土遺物実測図（15）

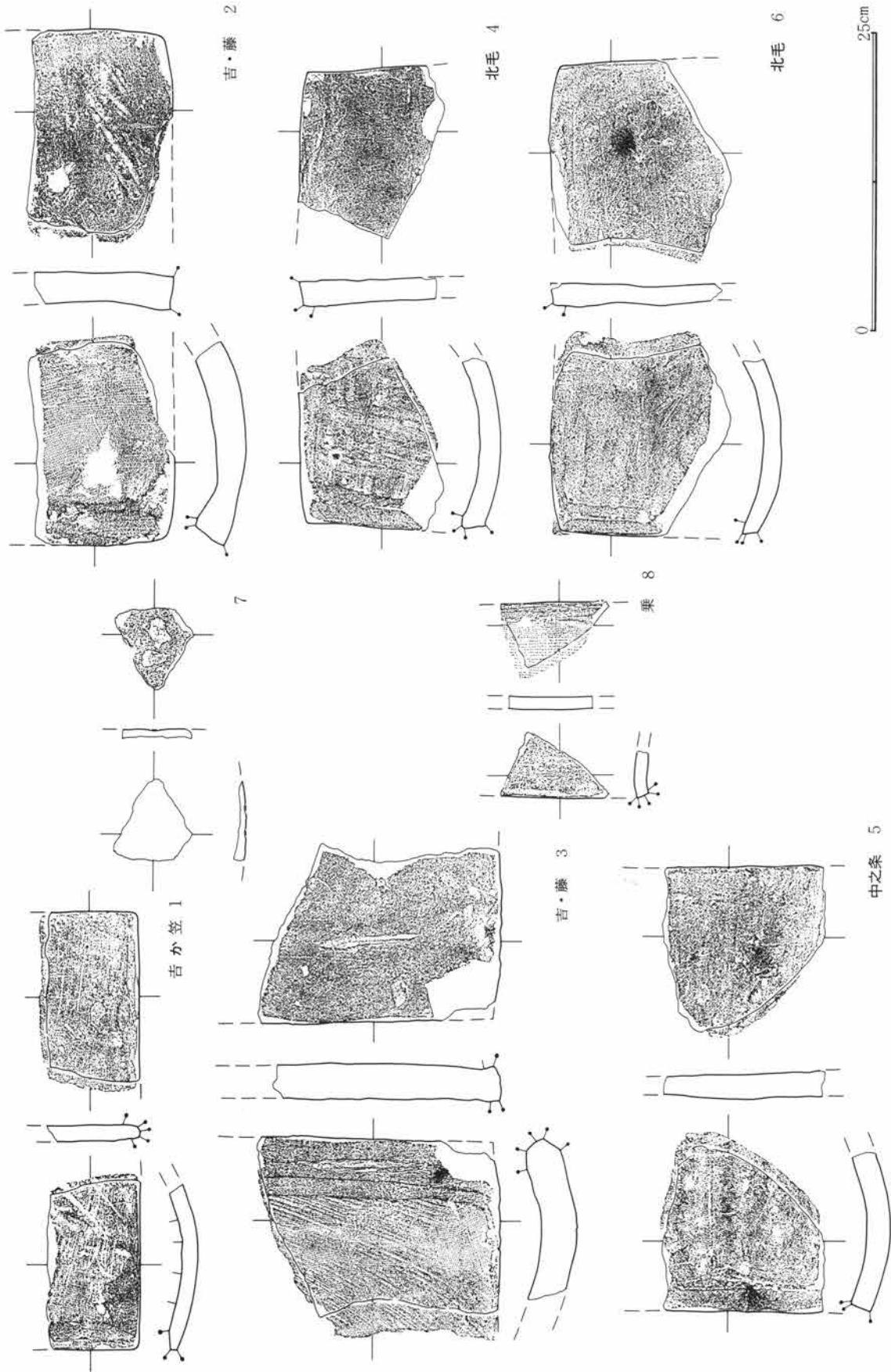


笠懸 5  
第27図 染谷川河川敷部第1号集石（井戸跡）出土遺物実測図（16）

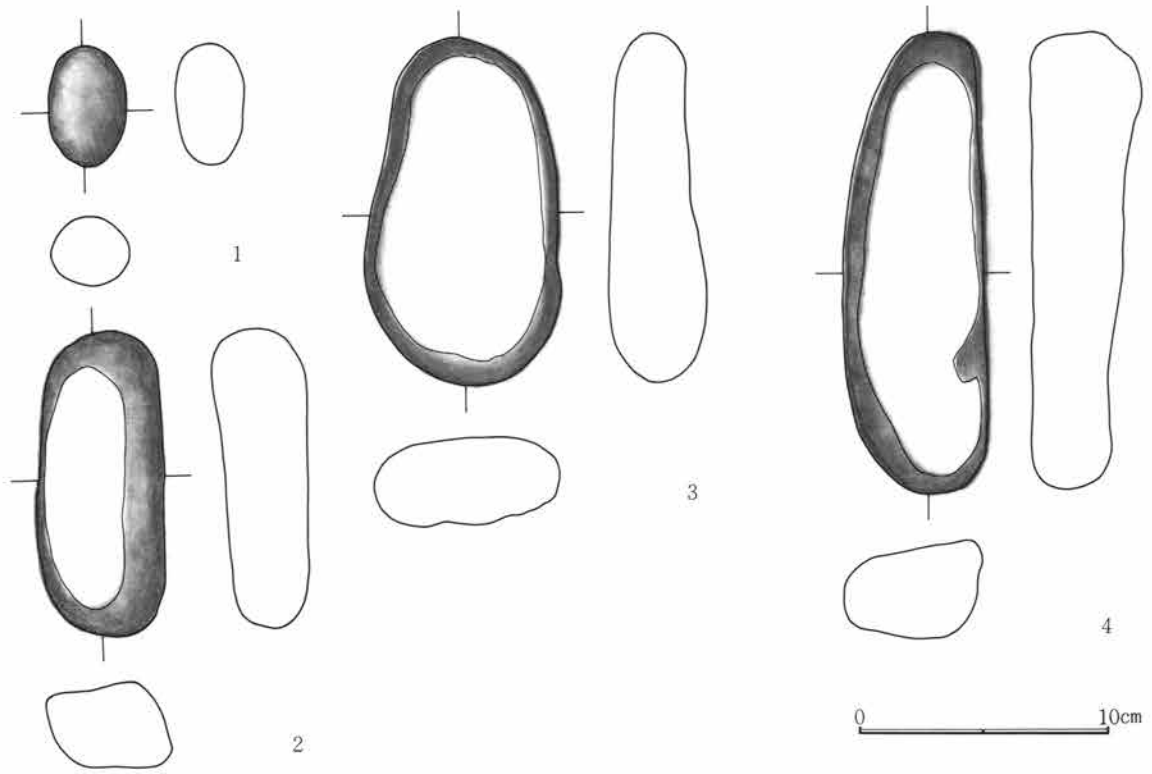


第28図 染谷川河川敷部第1号集石（井戸跡）出土遺物実測図（18）

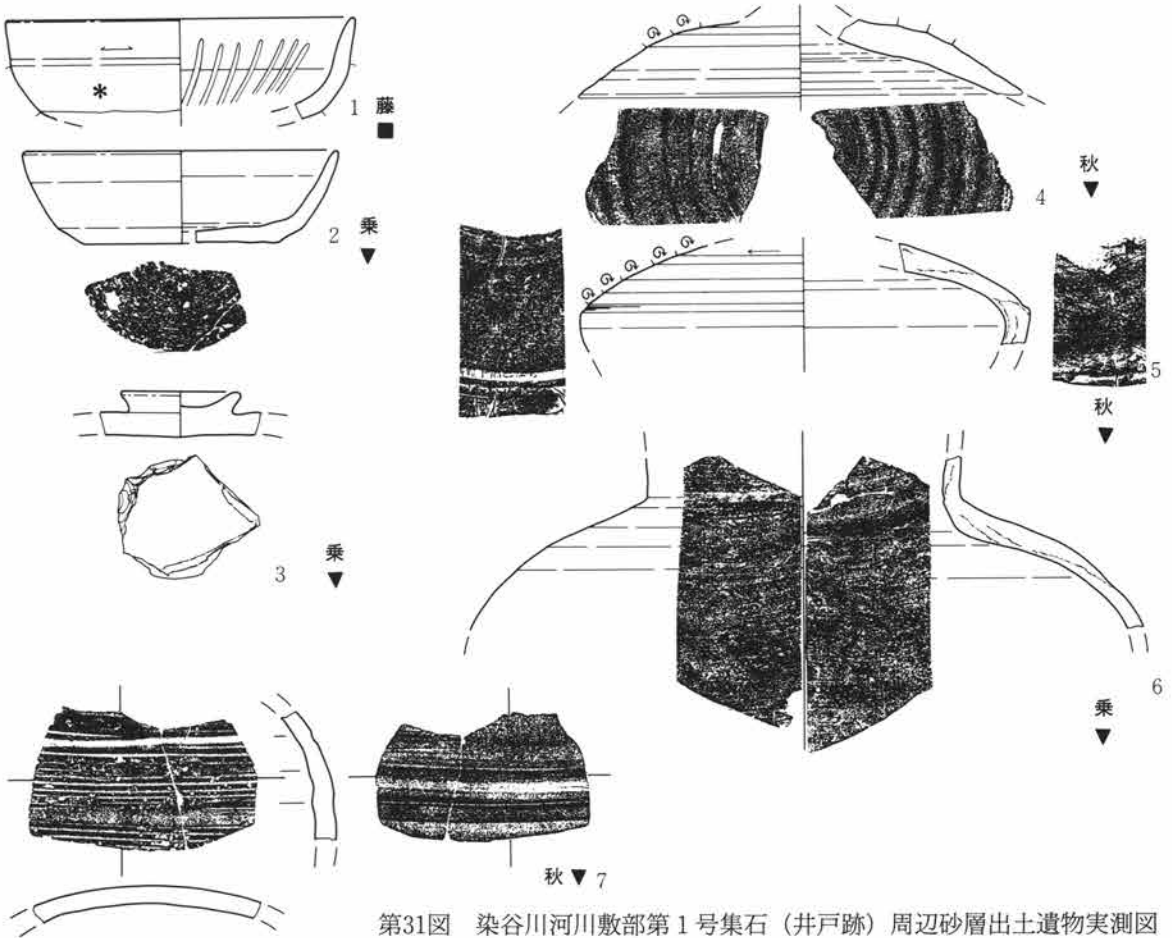
北毛 8



第29図 染谷川河川敷部第1号集石（井戸跡）出土遺物実測図（19）

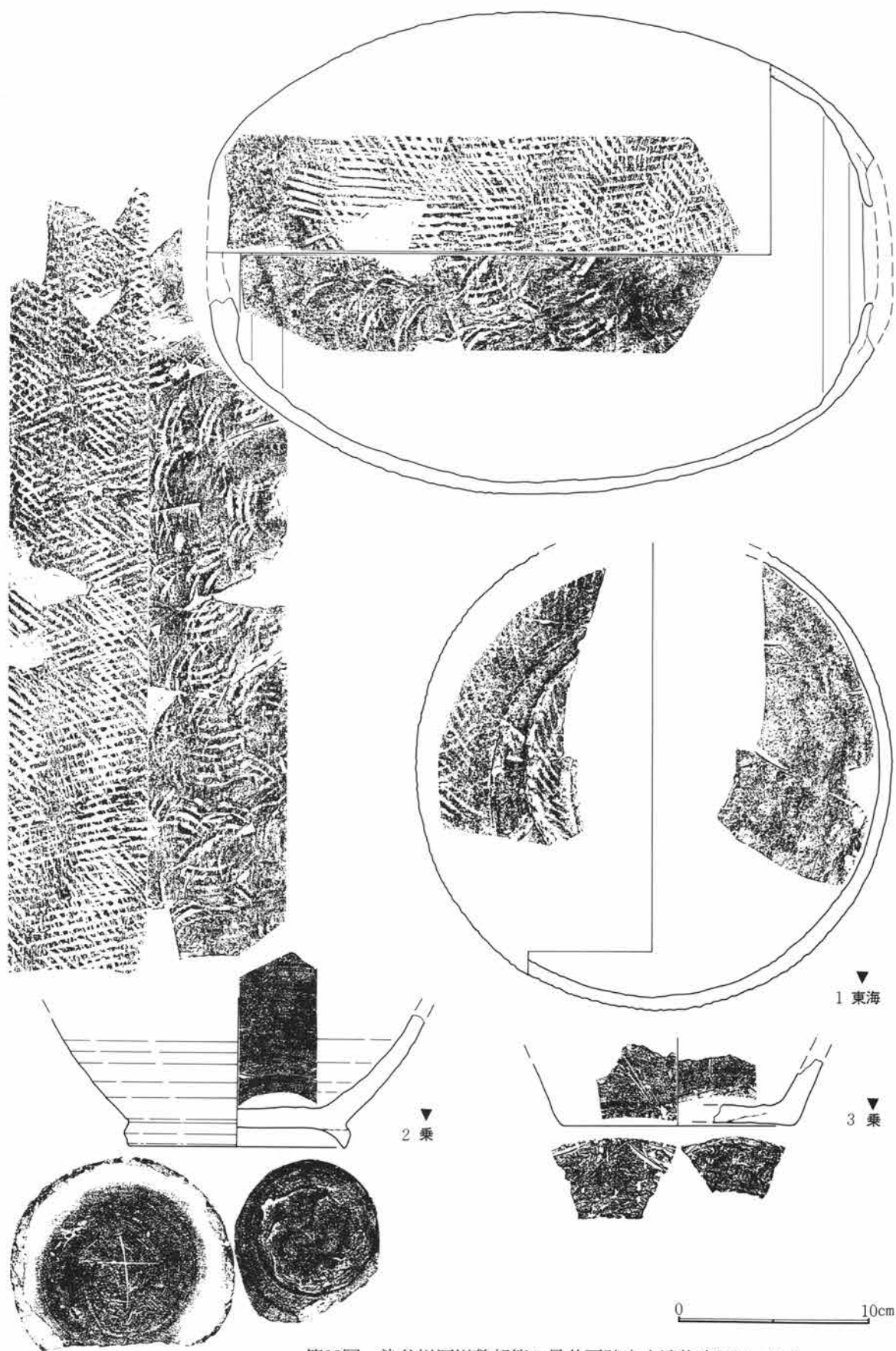


第30図 染谷川河川敷部第1号集石（井戸跡）出土遺物実測図（20）

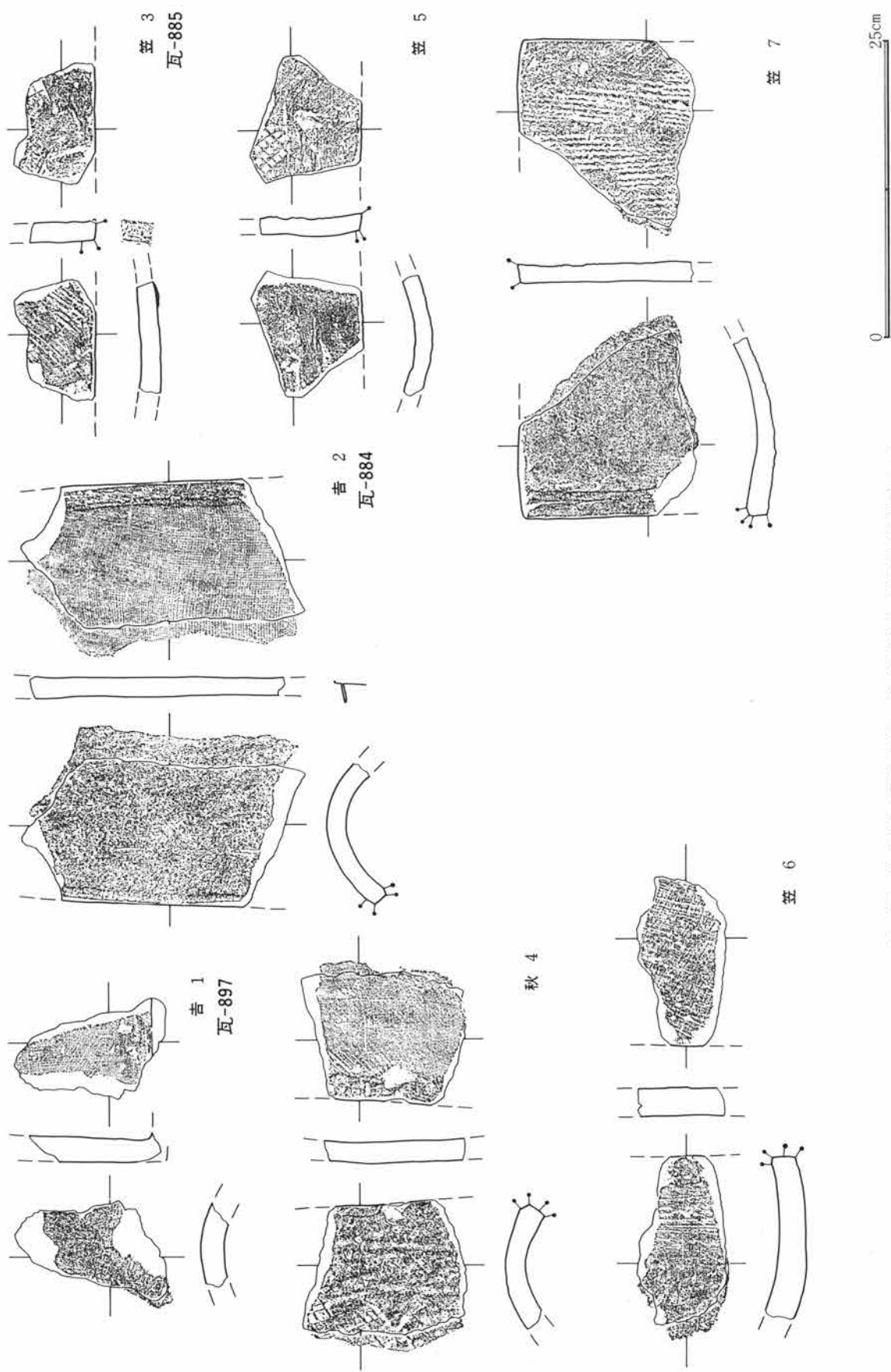


第31図 染谷川河川敷部第1号集石（井戸跡）周辺砂層出土遺物実測図

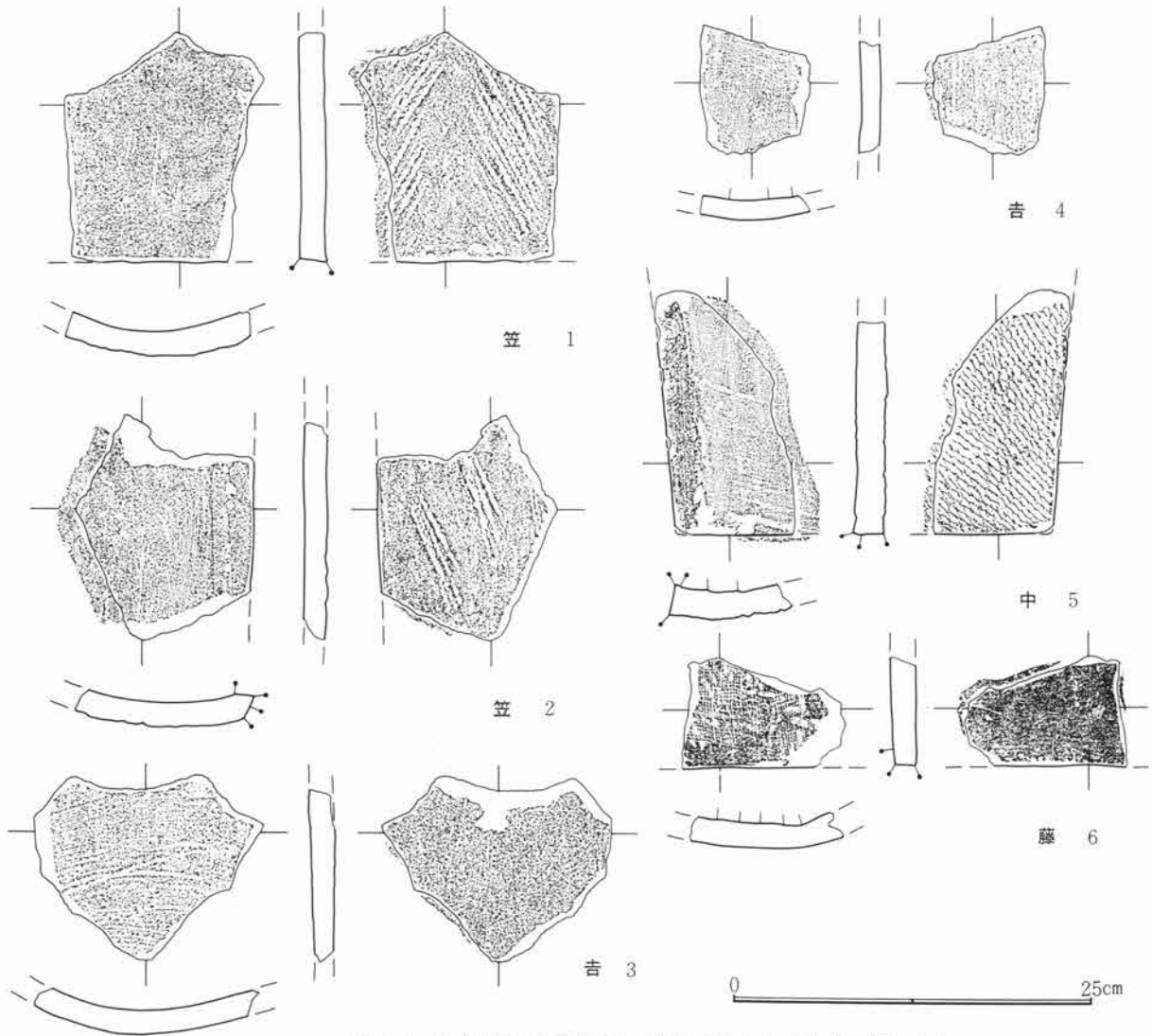




第32図 染谷川河川敷部第1号井戸跡出土遺物実測図(1)



第33図 染谷川河川敷部第1号井戸跡出土遺物実測図(2)



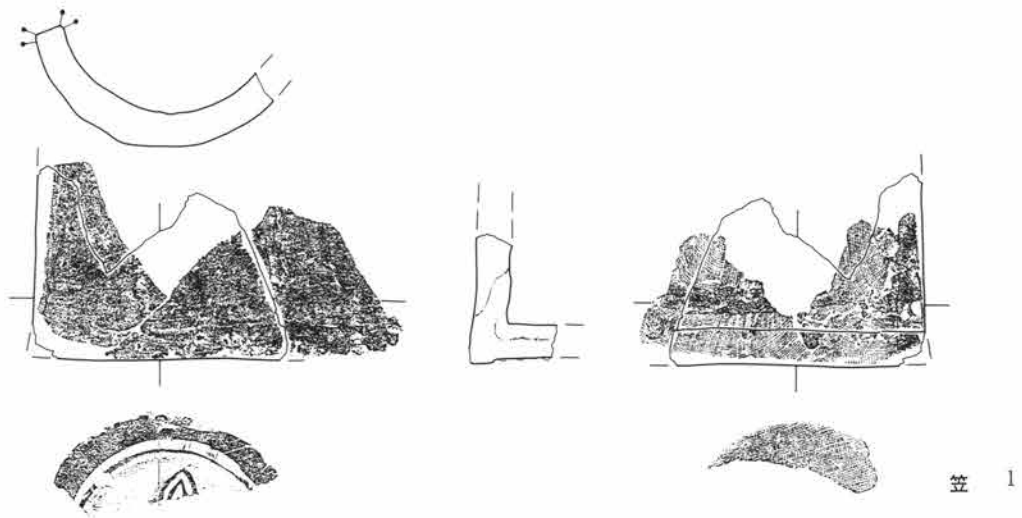
第34図 染谷川河川敷部第1号井戸跡出土遺物実測図(3)

### 3区第1・3号井戸周辺砂層に就いて

第1・3号井戸の掘り方調査に平併して周辺の掘り下げ調査を実施した。この結果、第11図中に図した、両井戸跡の西側に水成堆積による砂層が検出された。特に、溝に掘り込まれた部分では、西側に緩やかに傾斜する状態での堆積が認められた。この砂層は、両井戸跡に接してその西側の傾斜方向に向かい流出している点から、両井戸の湧水に大きな係わりが判断される。そして、溝状の掘り込み等の存在は、水を西側に流す為の施設と考えられ、両井戸から何らかの目的をもって西側に給水したものと類推出来る。

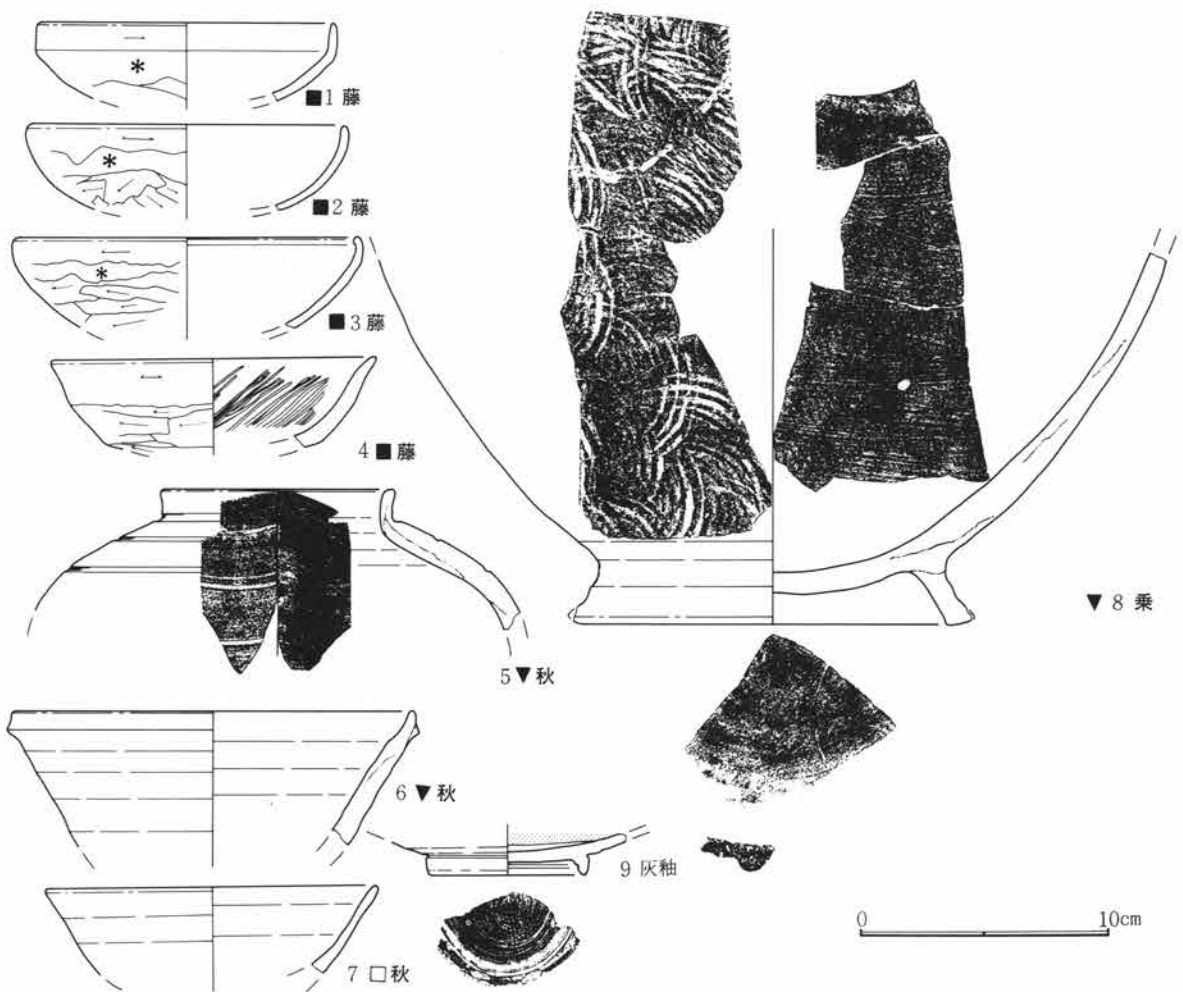
1区の調査所見では、水田跡の存在も想定されたが、明確な証左は確認出来なかった。又、2・3区調査時に、調査区の西端壁面で2段の平坦面が認められ、上面には10cm程の層厚で砂の堆積が確認出来た。そして、底面には薄い鉄分の沈着した層が認められたが、下位の湧水等により調査が不能であった為この2段の平坦面の調査実施は行わなかった。しかし、調査担当者間では、これが水田跡であろうことが想起された。この水田跡を想起された断面部と1・3号井戸跡との距離は約6m程で、レベル的にも、両井戸の検出面より50~60cm下位に当たっていたことを記憶している。即、上述の砂層は、この水田跡と想起された部分への給水道に堆積した砂層と推定され、両井戸跡は、この水田?への給水を行う為の井戸跡であったと考えられる。

第4章 検出された遺構・遺物



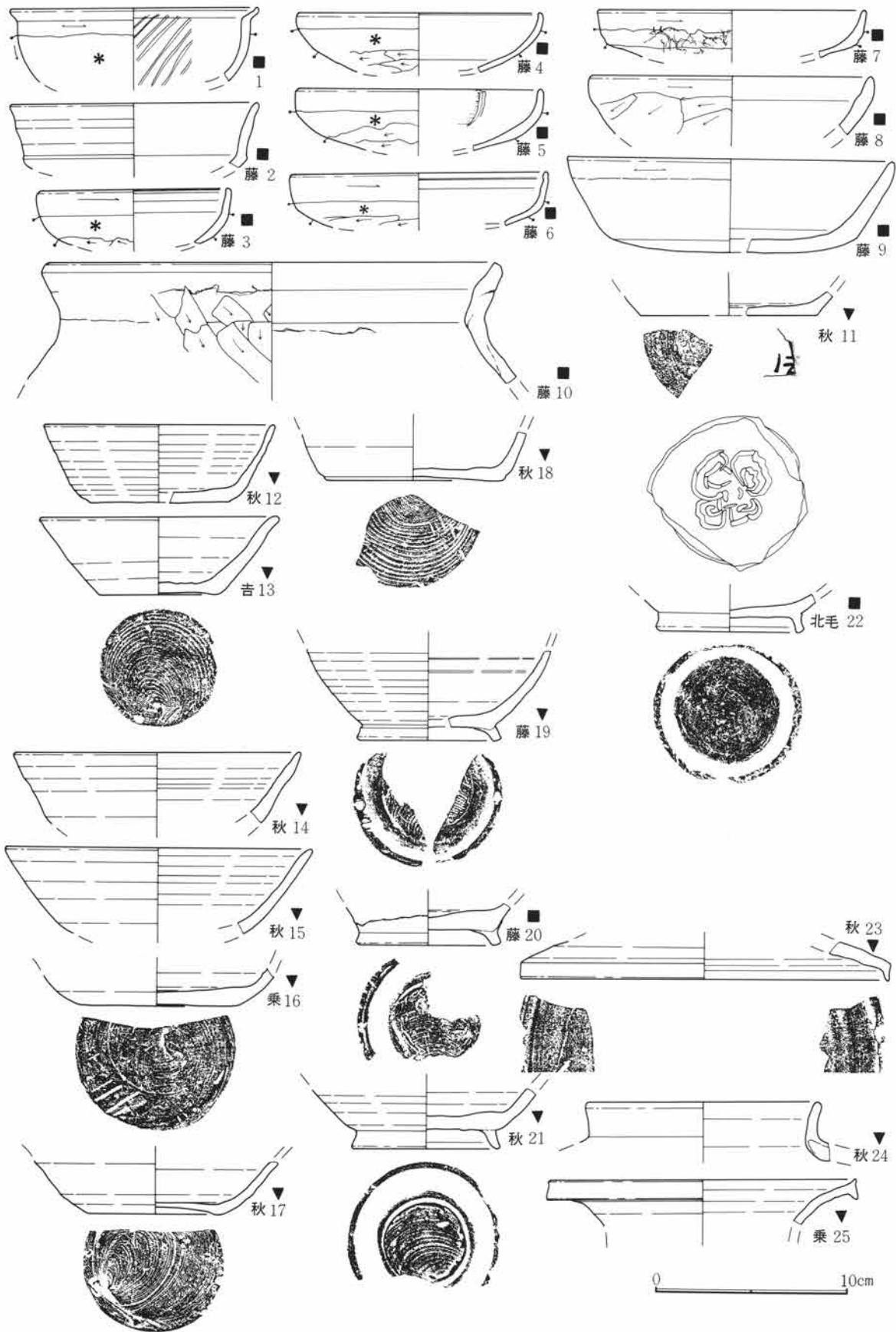
0 25cm

第35図 染谷川河川敷部第1号井戸跡出土遺物実測図(4)

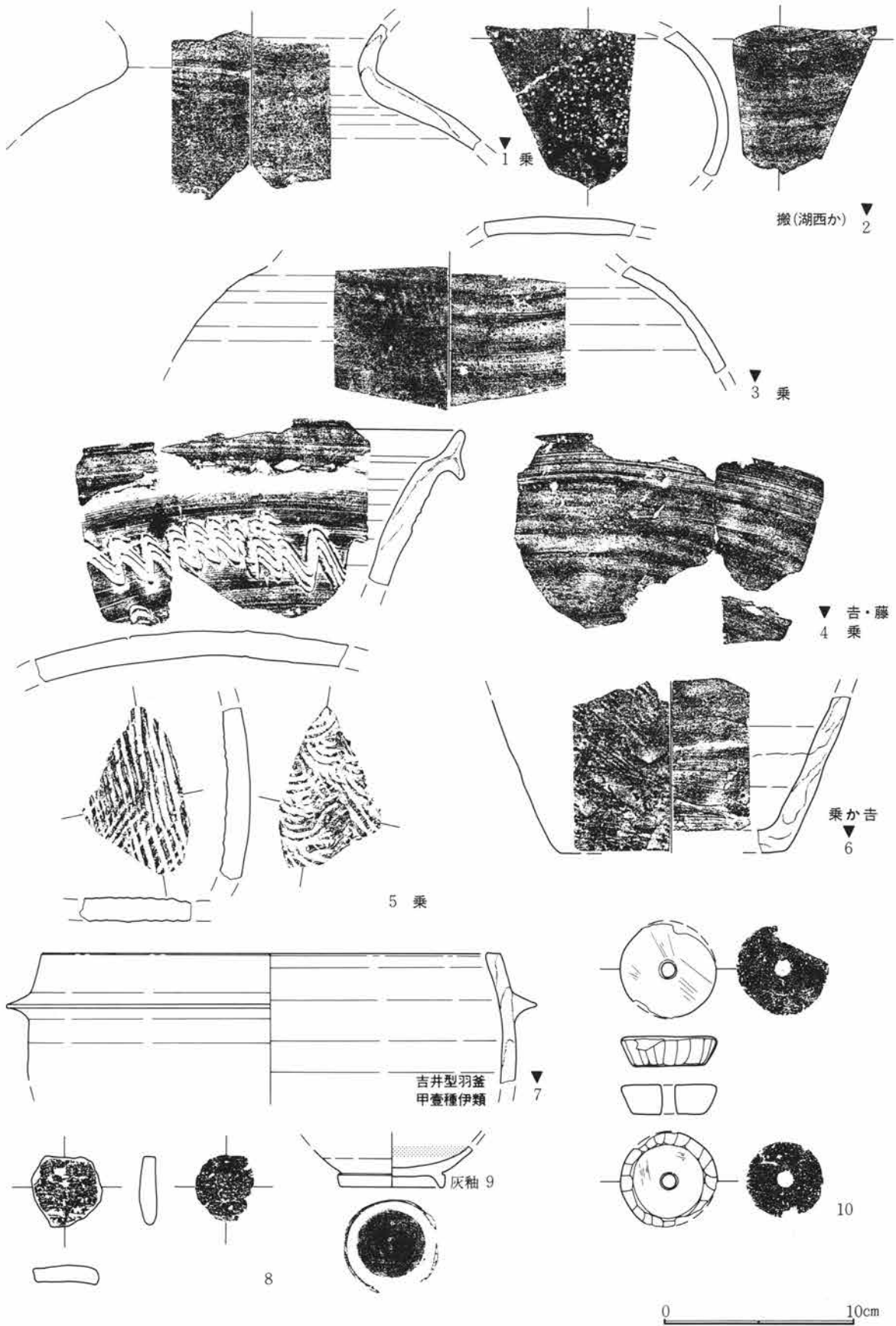


第36図 染谷川河川敷部第3号井戸跡周辺砂層出土遺物実測図

第4節 検出された遺構・遺物

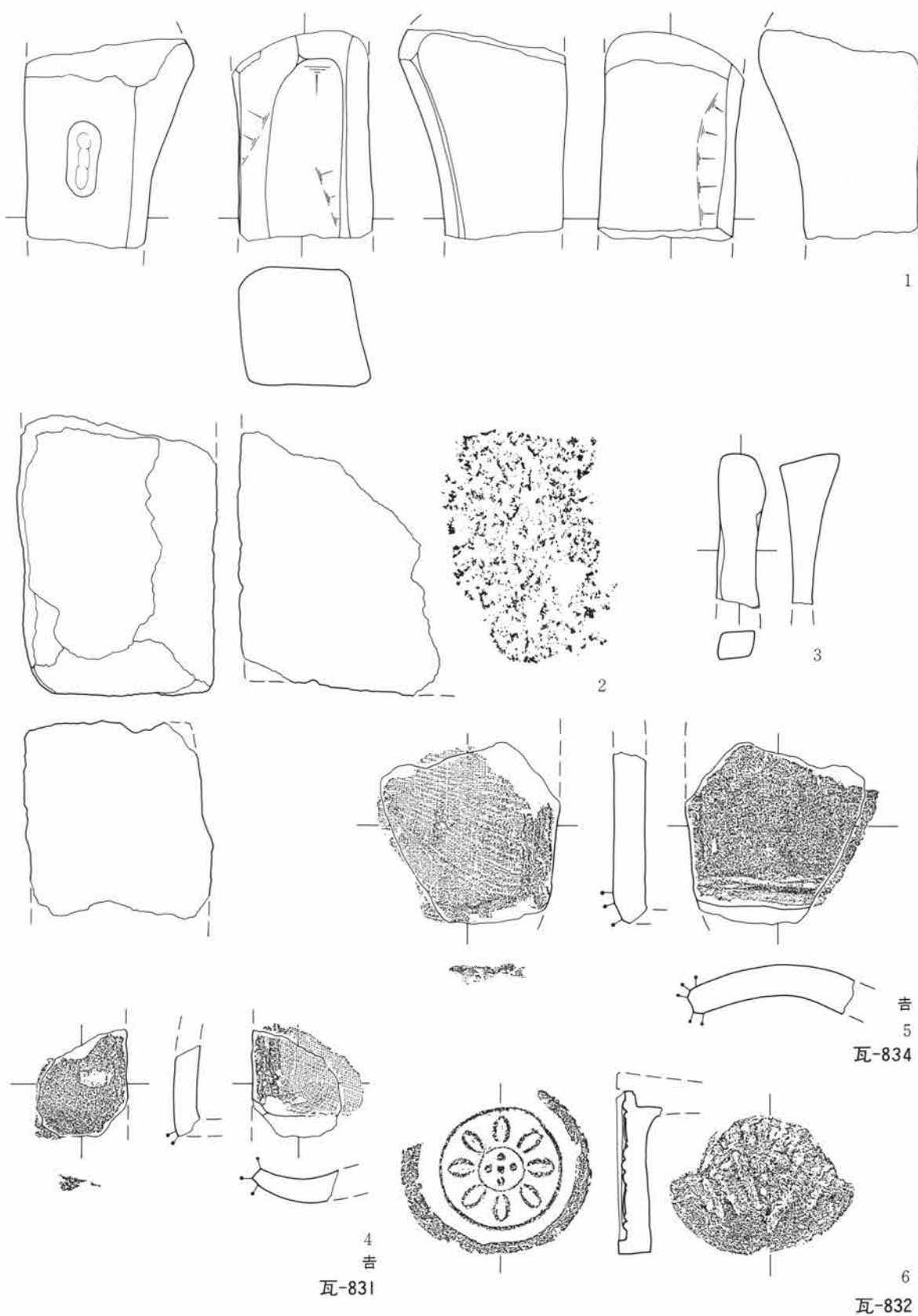


第37図 染谷川河川敷部第3号井戸跡出土遺物実測図(1)

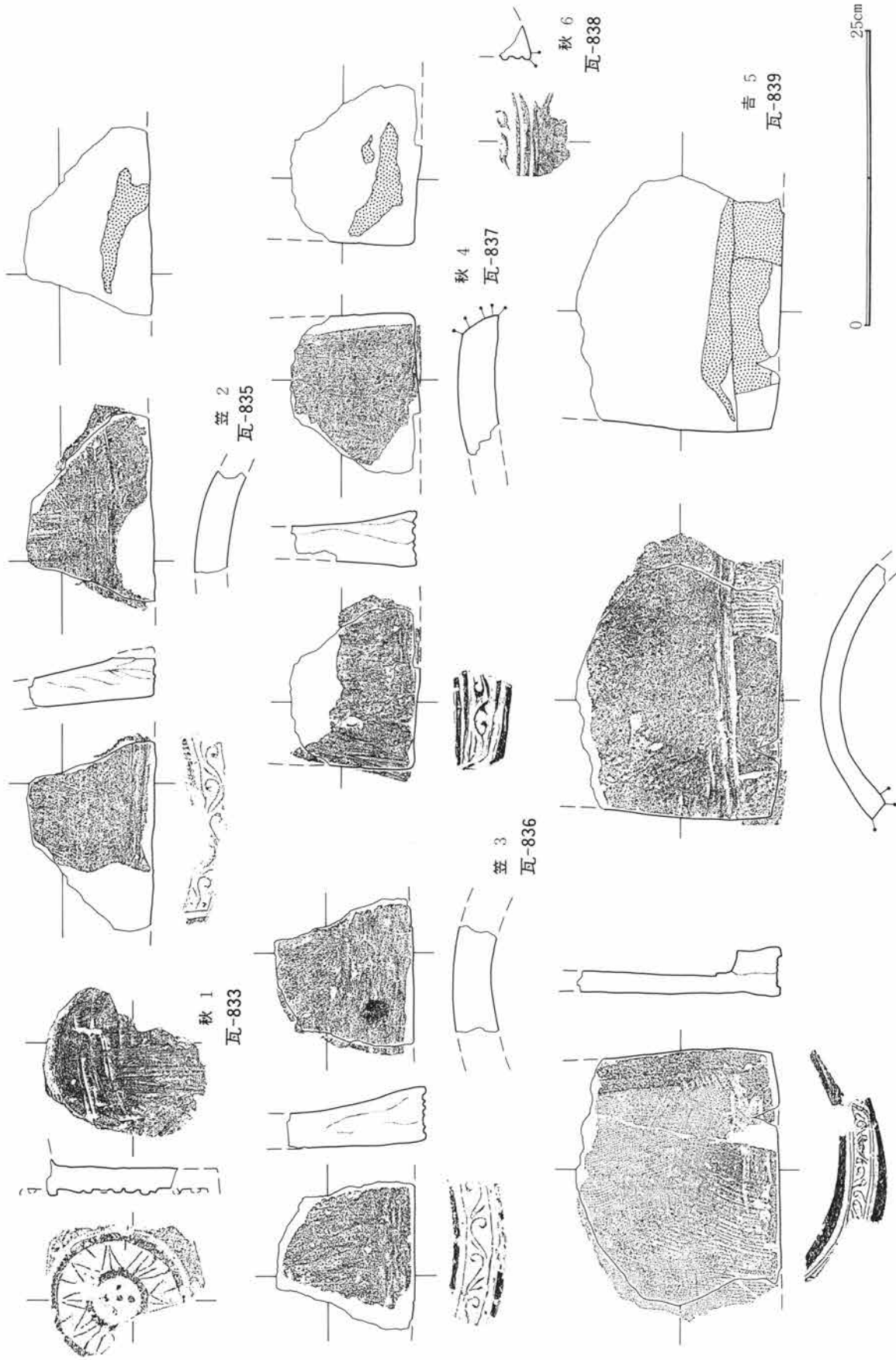


第38図 染谷川河川敷部第3号井戸跡出土遺物実測図(2)

第4節 検出された遺構・遺物



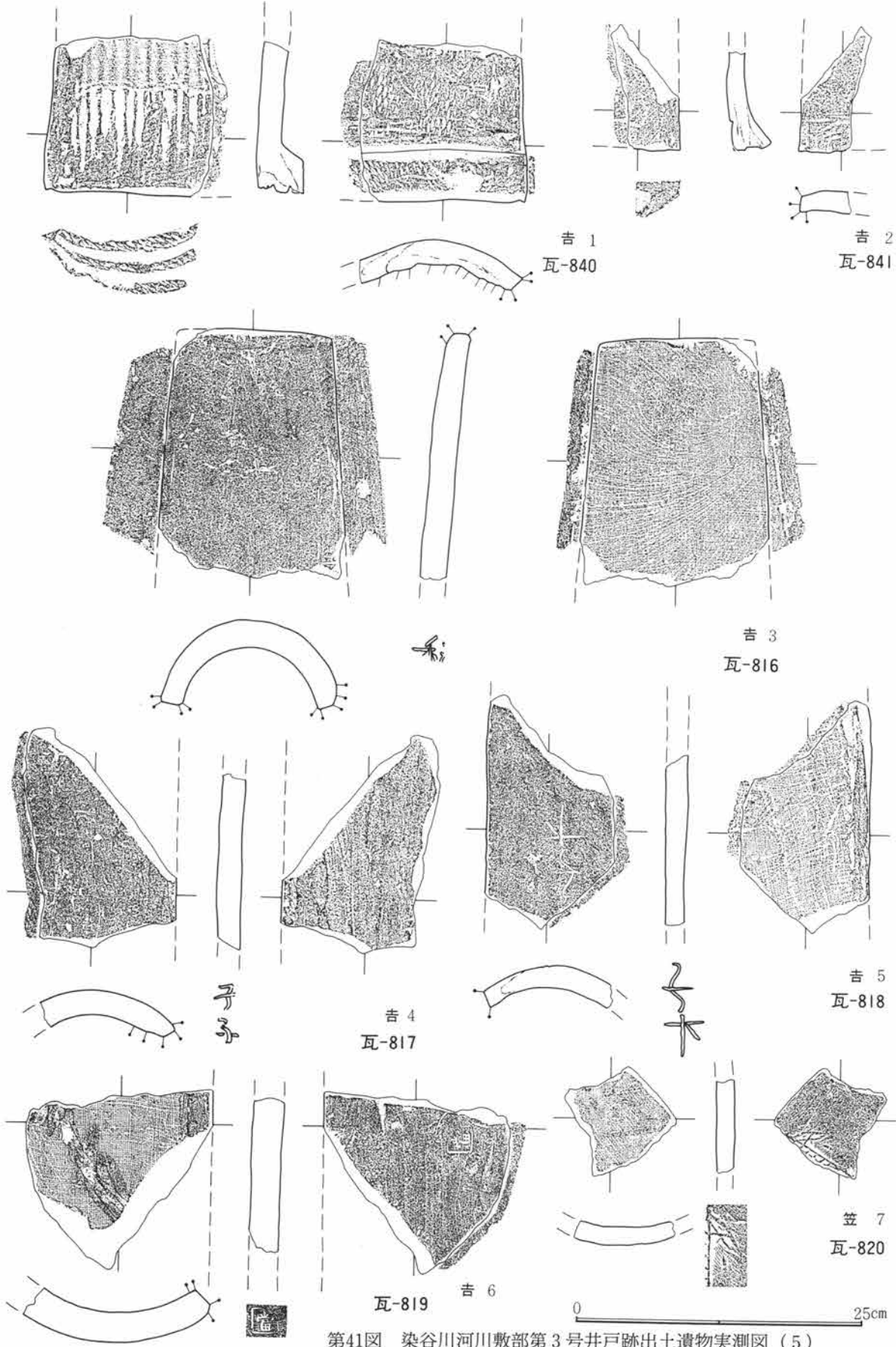
第39図 染谷川河川敷部第3号井戸跡出土遺物実測図(3)



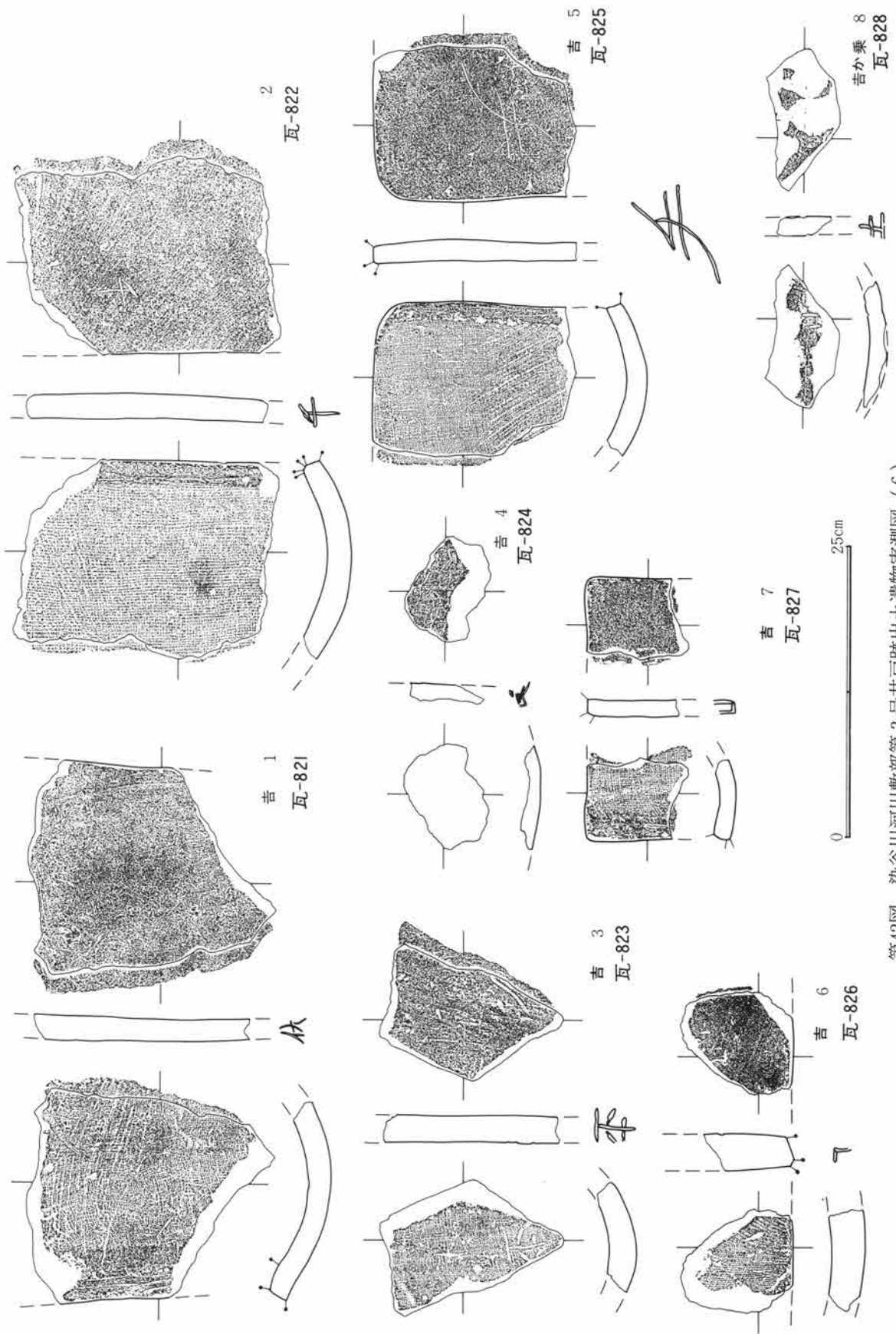
第40図 染谷川河川敷部第3号井戸跡出土遺物実測図(4)



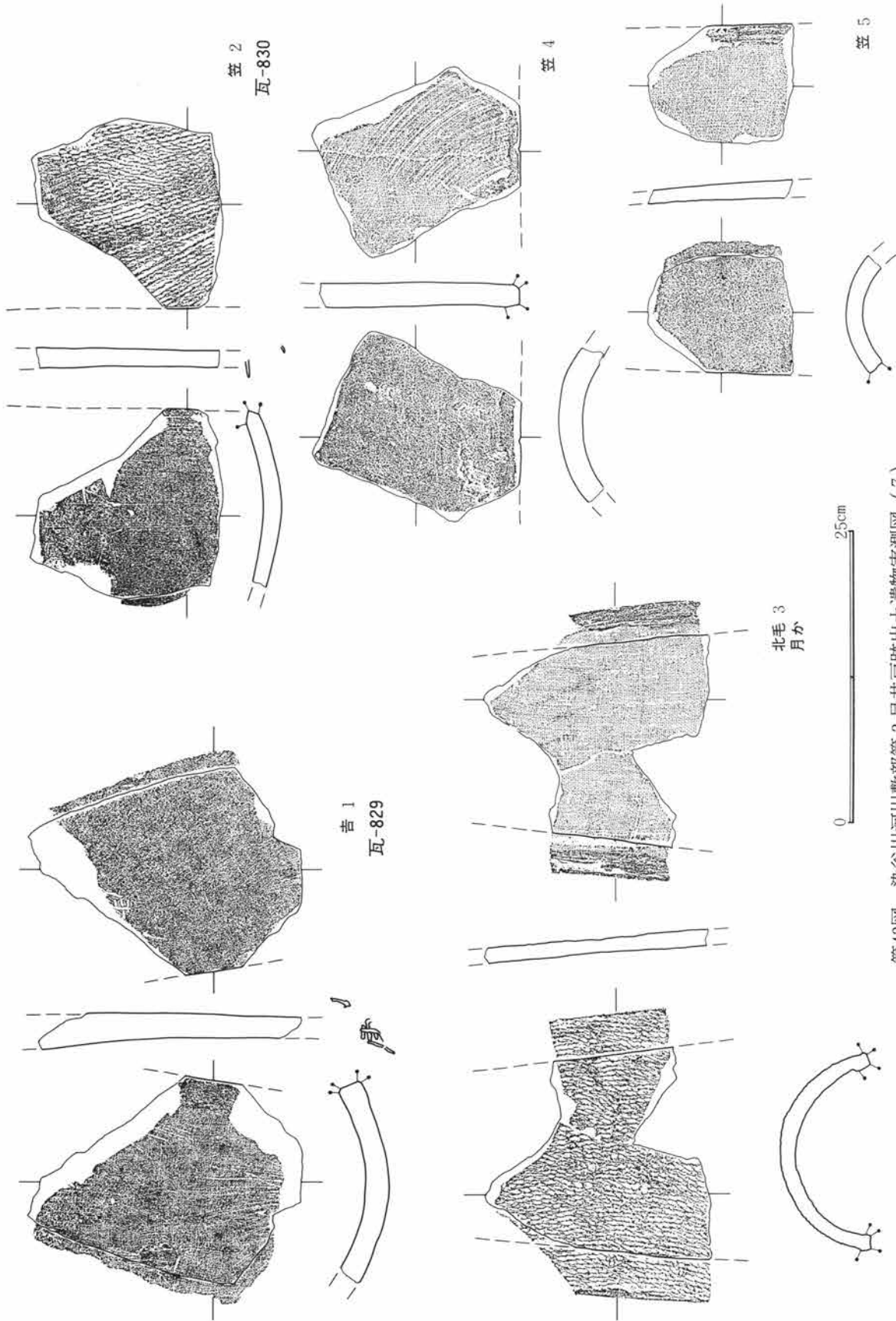
第4節 検出された遺構・遺物



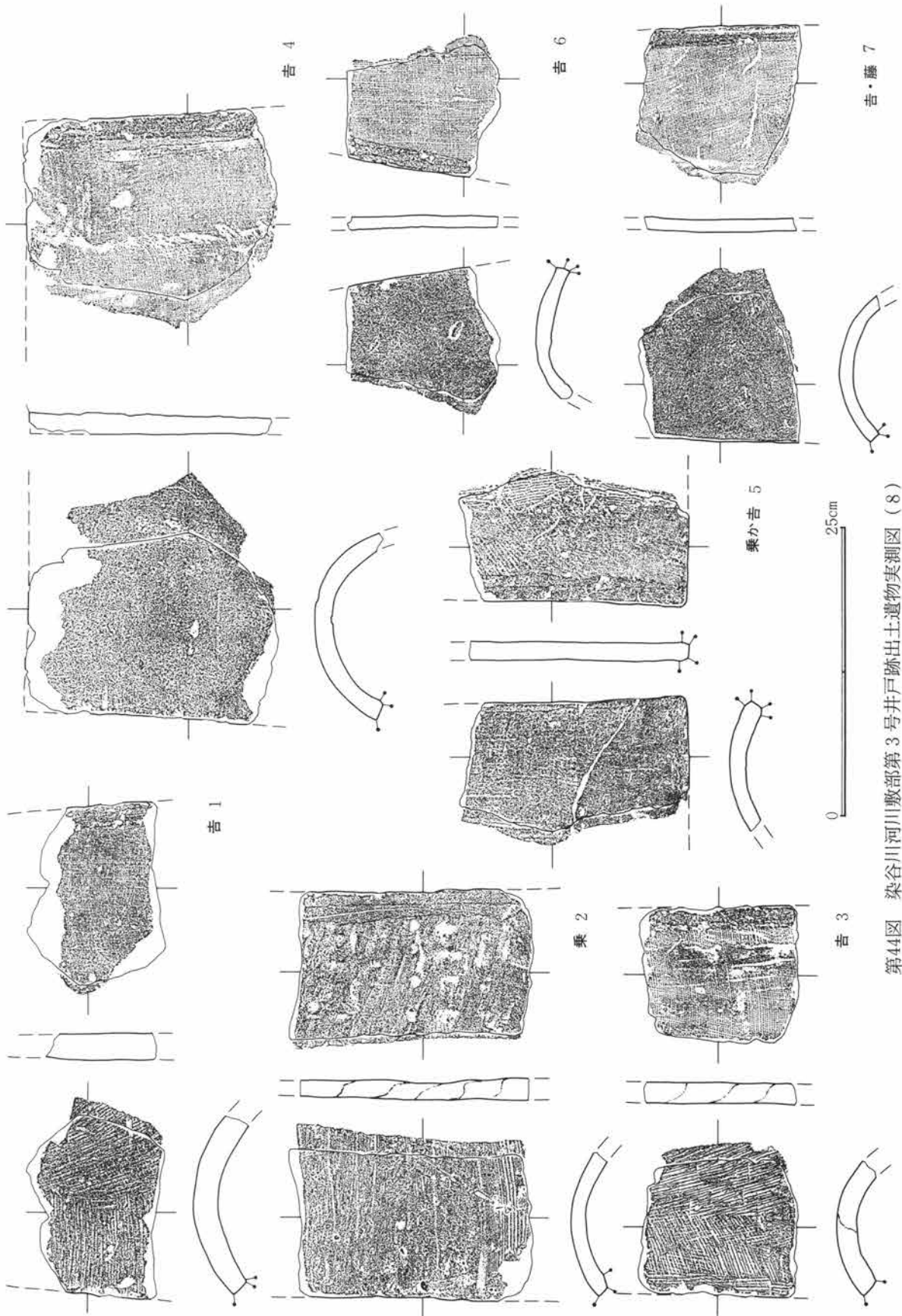
第41図 染谷川河川敷部第3号井戸跡出土遺物実測図(5)



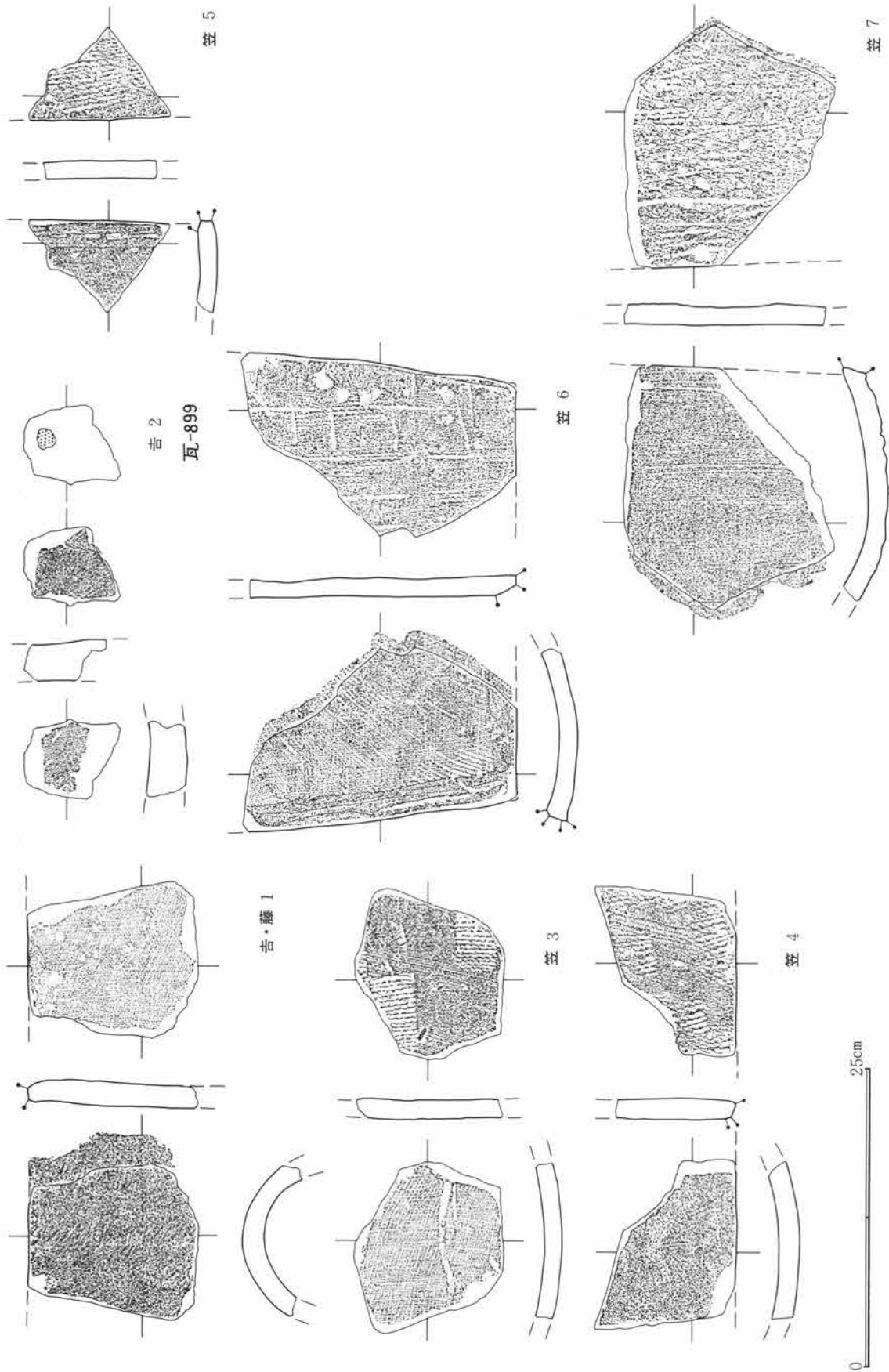
第42図 染谷川河川敷部第3号井戸跡出土遺物実測図(6)



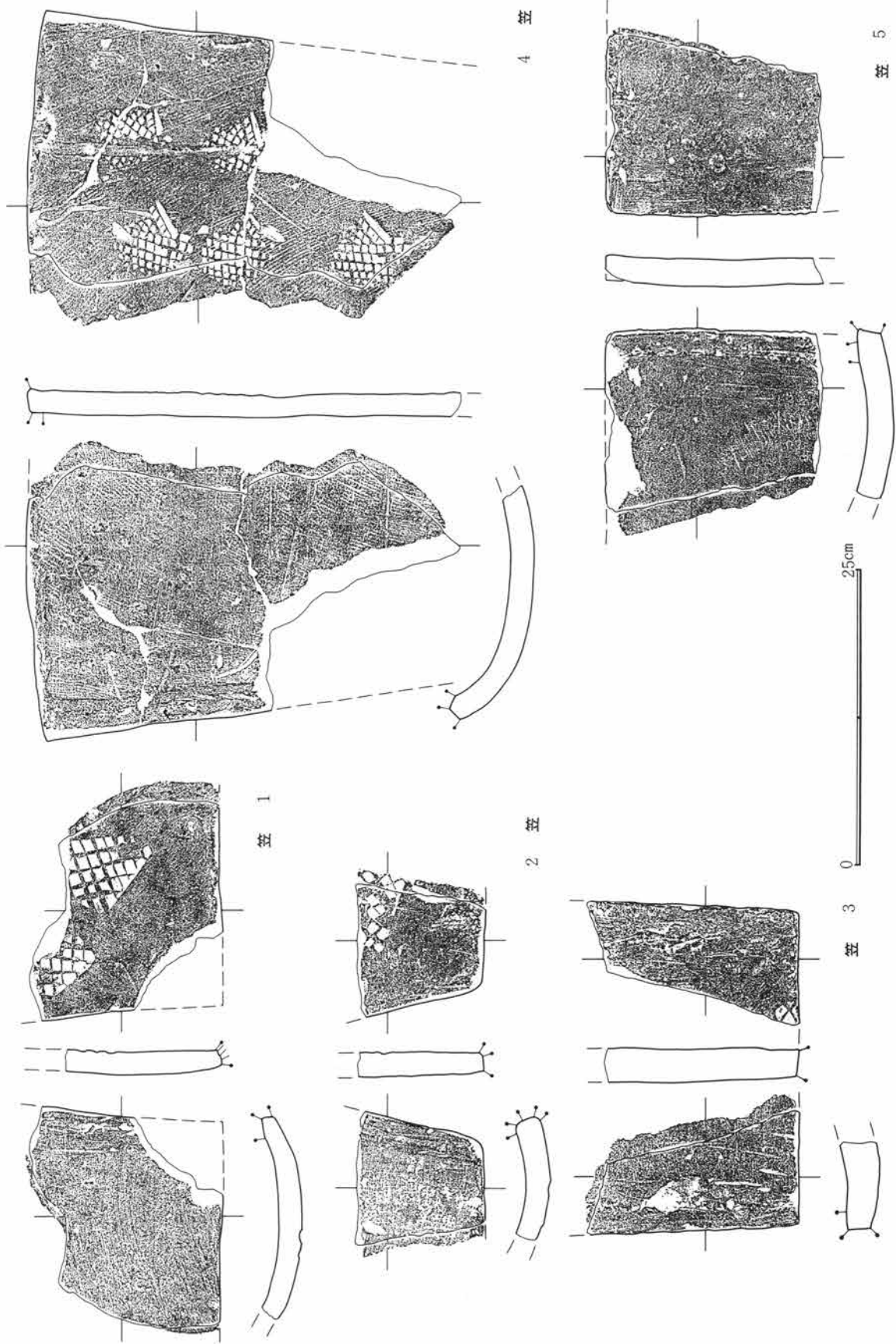
第43図 染谷川河川敷部第3号井戸跡出土遺物実測図(7)



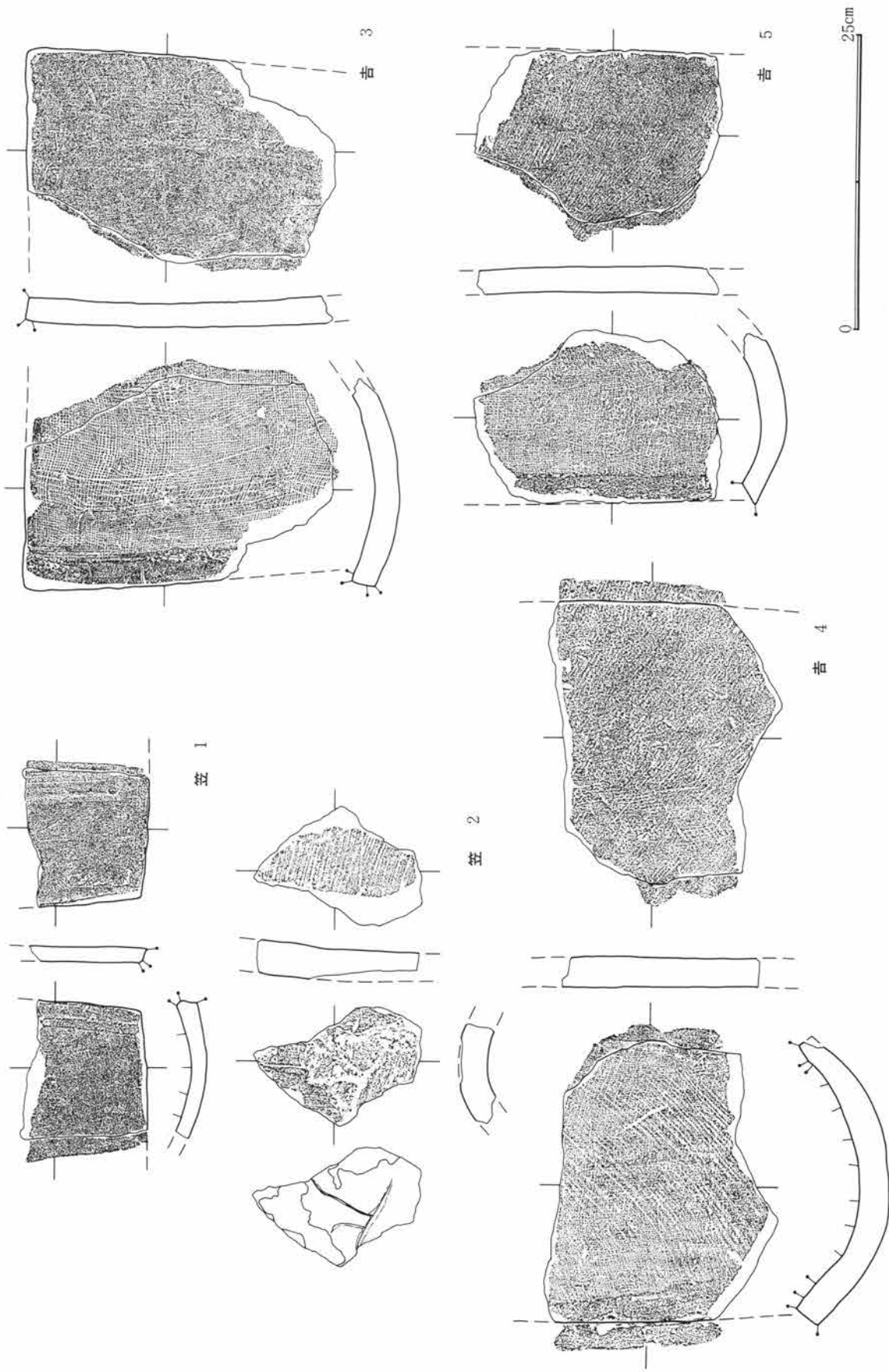
第44図 染谷川河川敷部第3号井戸跡出土遺物実測図(8)



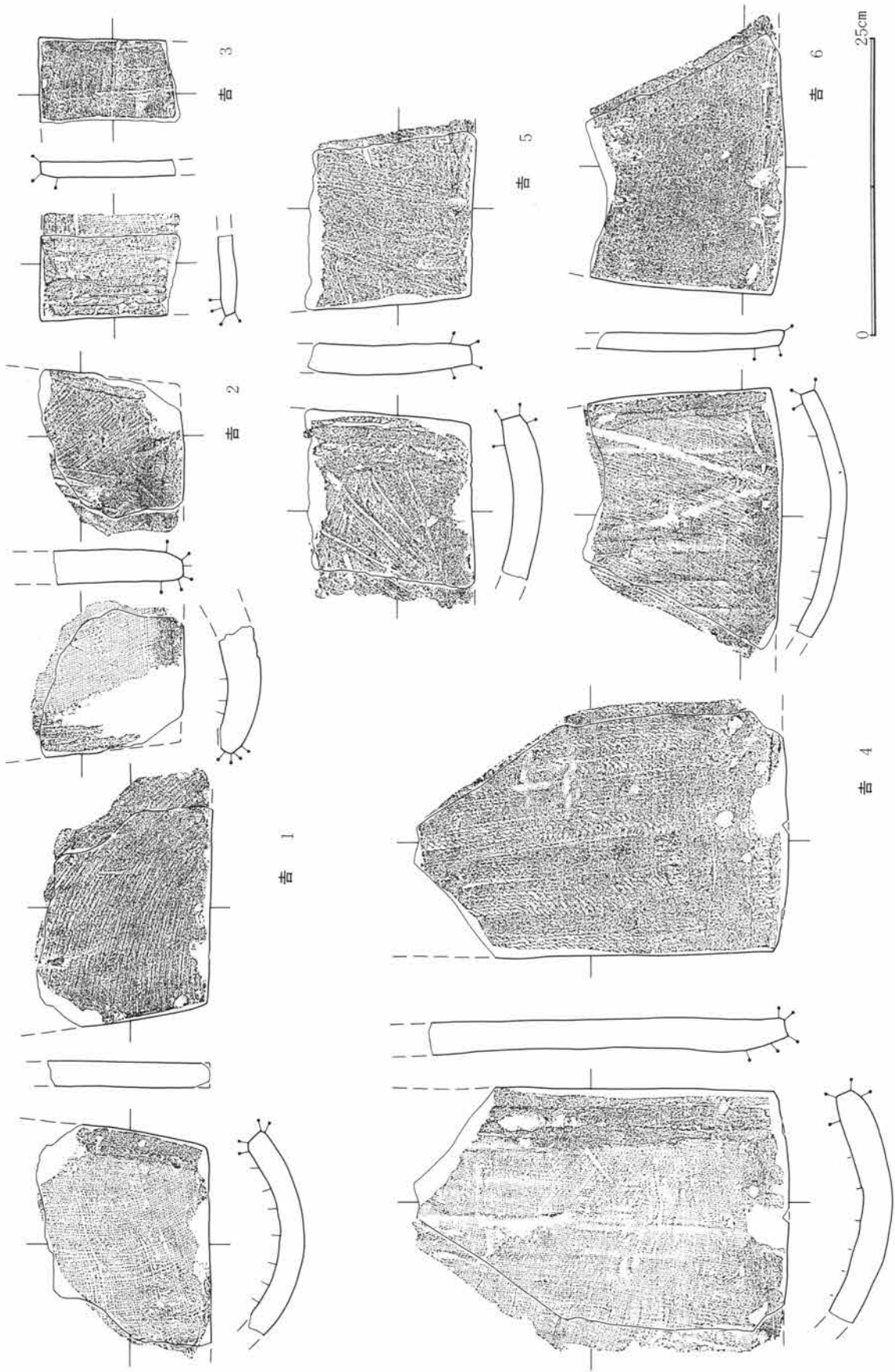
第45図 染谷川河川敷部第3号戸跡出土遺物実測図(9)



第46図 染谷川河川敷部第3号井戸跡出土遺物実測図(10)

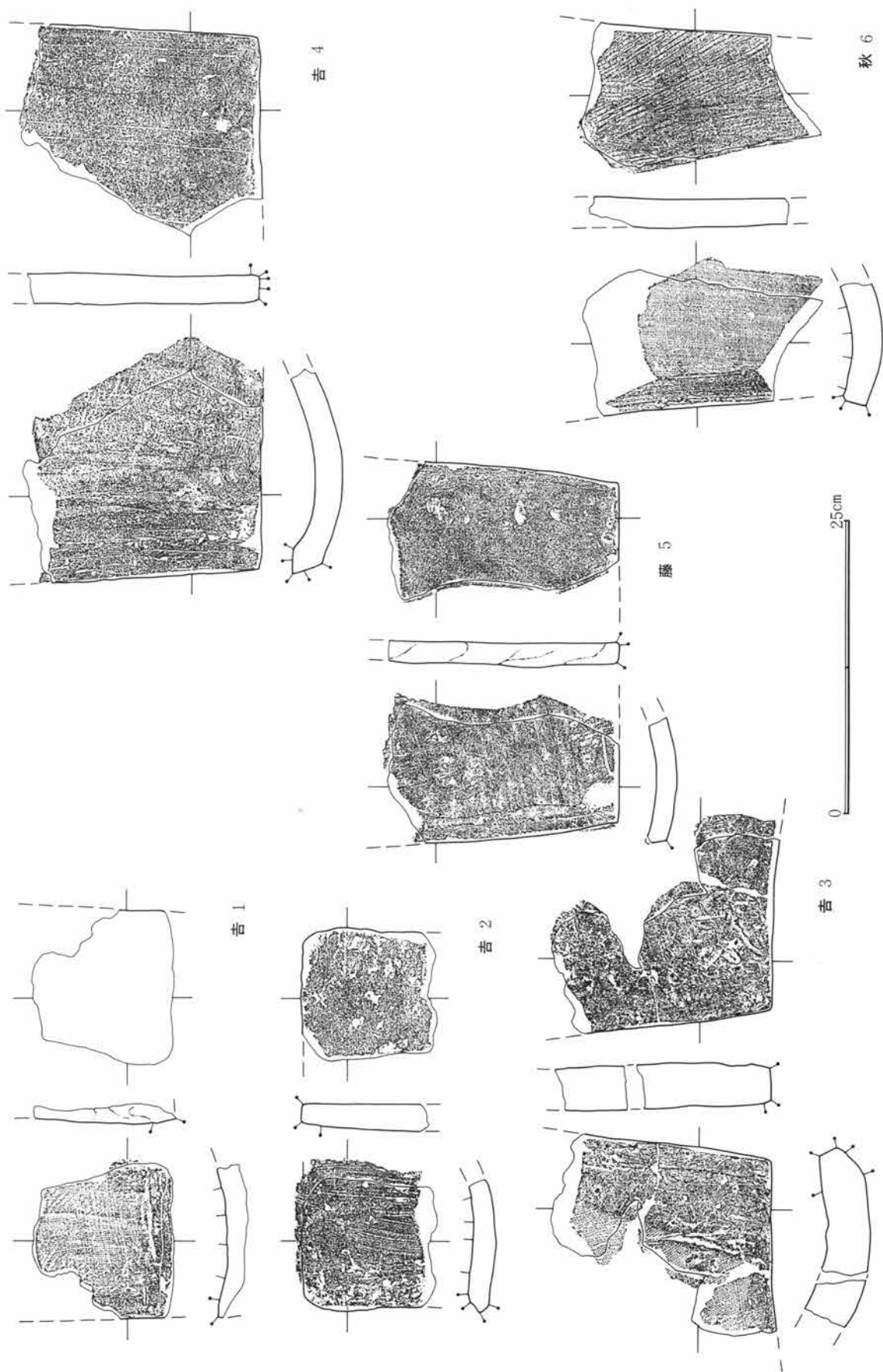


第47図 染谷川河川敷部第3号井戸跡出土遺物実測図(11)

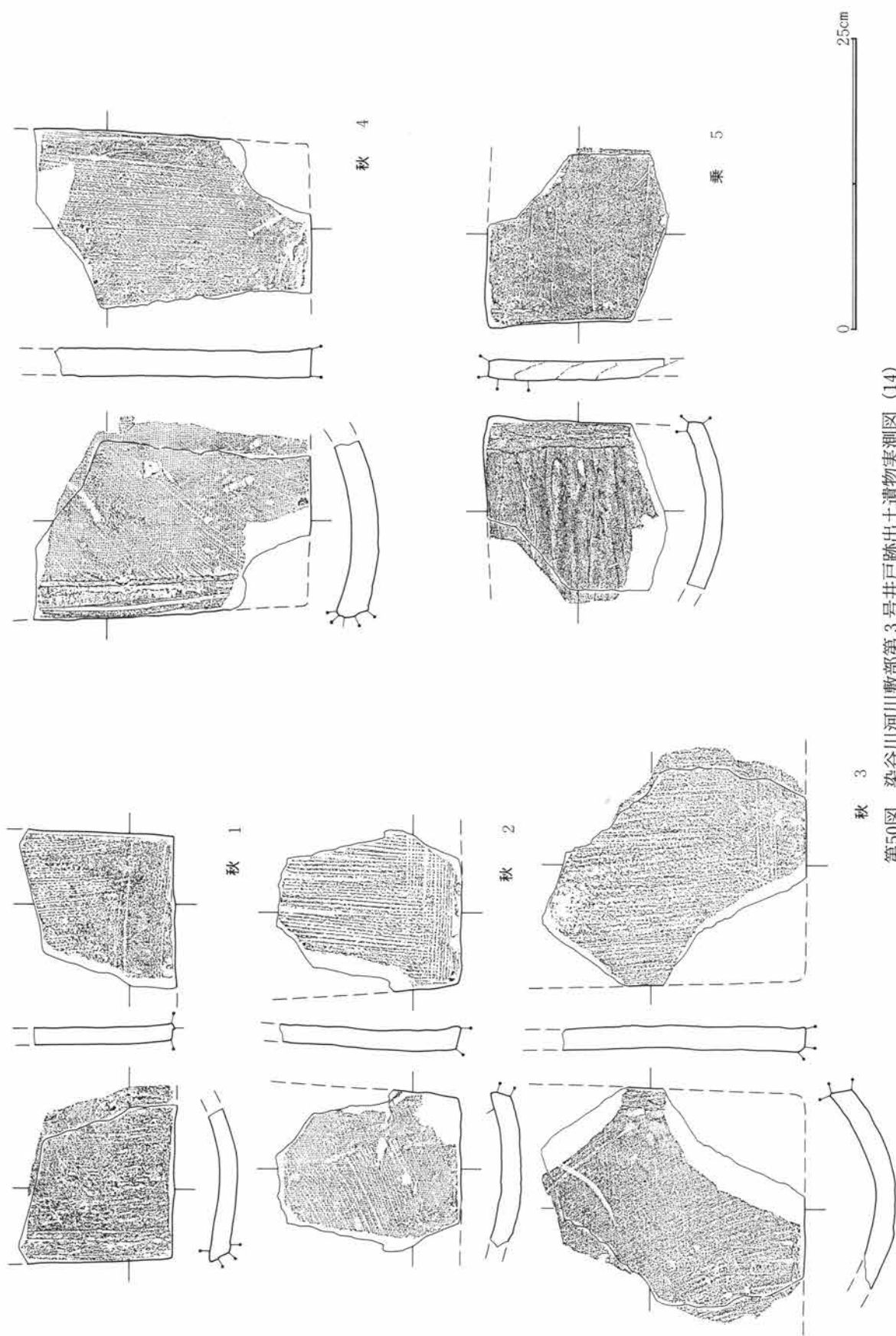


第48図 染谷川河川敷部第3号井戸跡出土遺物実測図(12)

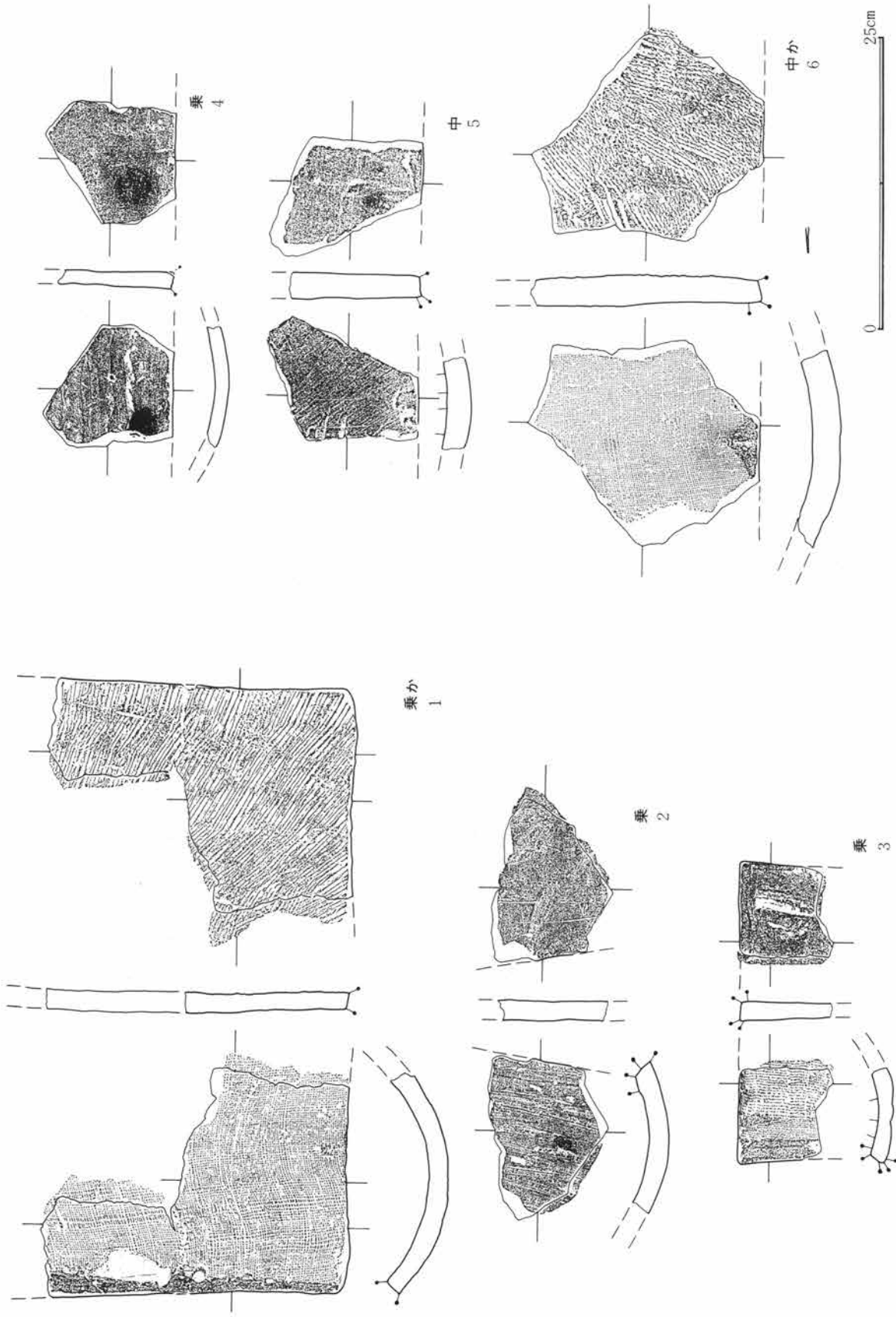




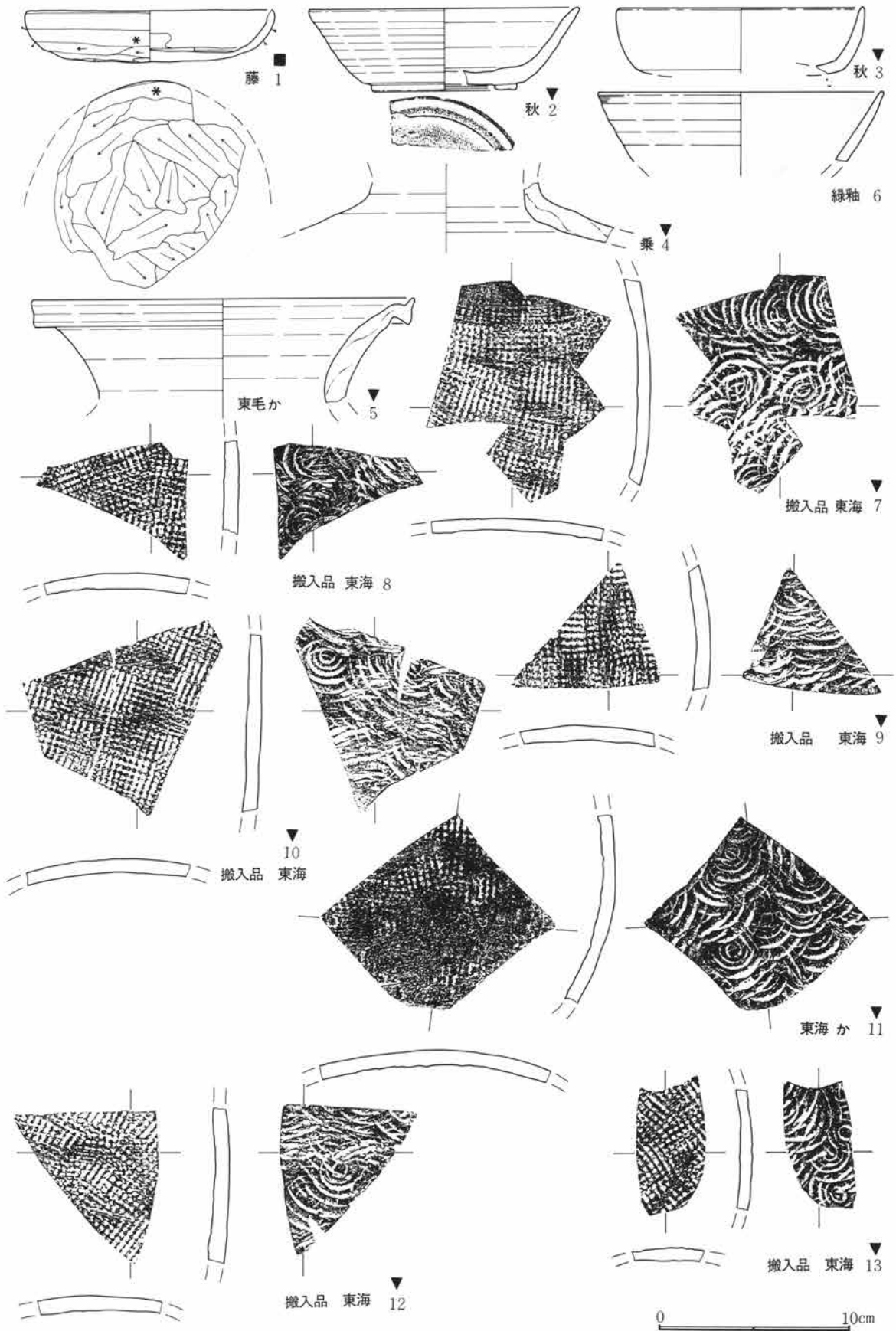
第49図 染谷川河川敷部第3号井戸跡出土遺物実測図 (13)



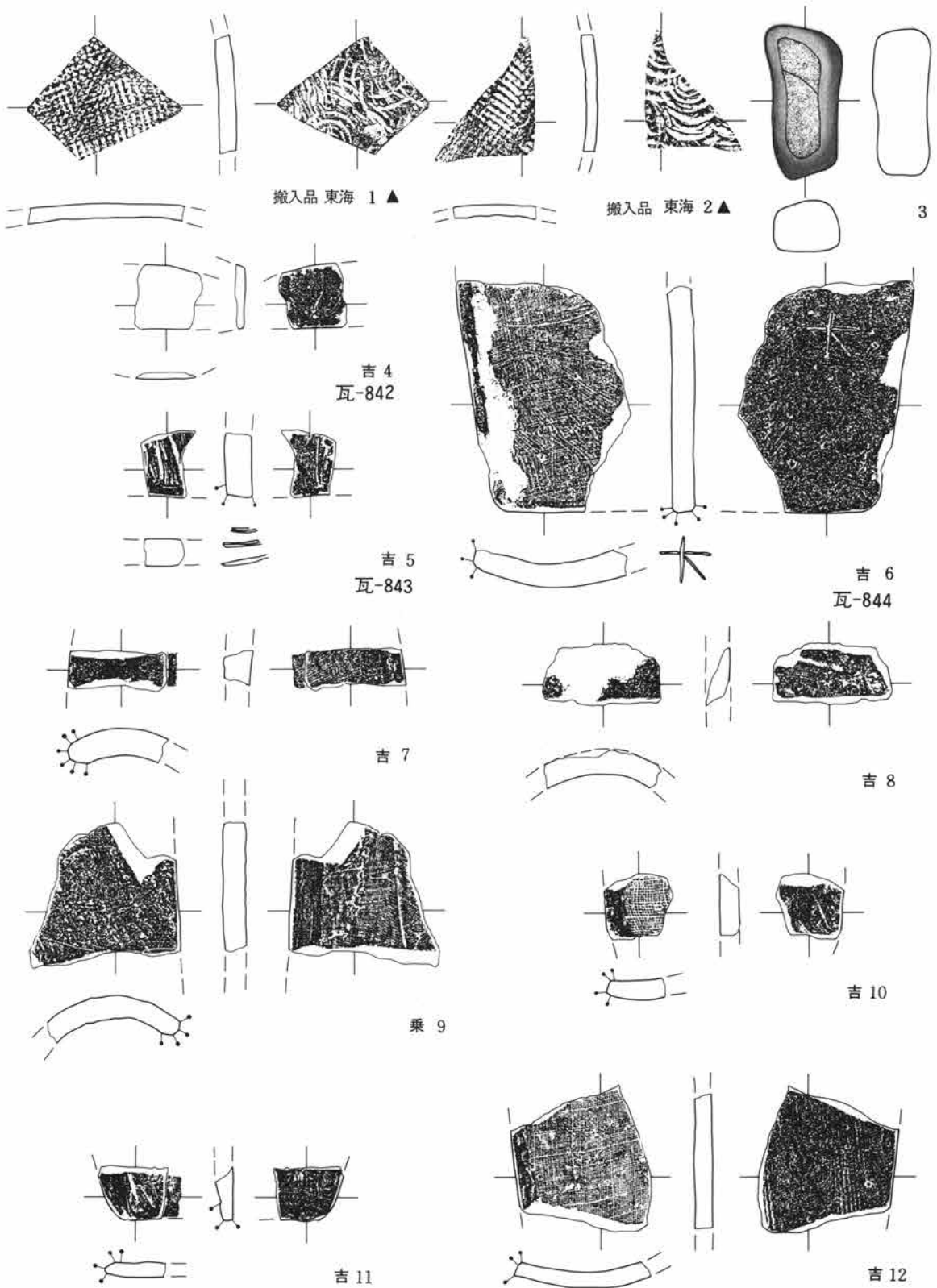
第50図 染谷川河川敷部第3号井戸跡出土遺物実測図(14)



第51図 染谷川河川敷部第3号井戸跡出土遺物実測図 (15)



第52図 染谷川河川敷部階段状遺構出土遺物実測図(1)



第53図 染谷川河川敷部階段状遺構出土遺物実測図(2)

## 第4章 検出された遺構・遺物

### 2区 祭祀遺構（土器溜りと2区第2号集石）

当該の名称は、2区内での遺構・遺物の検出状況からの設定名称であり、“祭祀遺構”を構成する具体的な遺構は、2区第2号集石と2区土器溜りである。以下に両者の状況説明し、その後に“祭祀遺構”の性格を考えたい。

#### 2区第2号集石

当集石は、2区と3区の区境に設定したセクションベルトに南接して確認された。確認時の状況は、第7図下段17層土中に、河原円礫が密集した状態で、西側で灰緑色を呈する砂質地山土の粗大な塊が礫群を被覆する様な状態で確認された。そして、この時の平面状況を図化したのが第54図の墨版の状態である。この灰緑色砂質土の直には未だ礫の存在が予想されたので、同部を断割色緑色砂質土の堆積状況の確認を行った。この時の所見では、灰緑色砂質土は、地山中の堆積土で、それを粗大（50cm×60cm×20cm）塊状のまま同部に置かれたかの状態であることが推定された。これは、崖面からの崩落の場合、面的広がりをも有したであろうし、小塊状や塊状のものが多く散見される筈であって、この状況が認められないことから、設置された可能性が推定された。だが、この灰緑色砂質土を何故置いたのかという点に就いては不明である。

上述した灰緑色砂質土を除去した結果、直下から礫が検出され、2区集石の全容が明らかになった。確認面の礫は、特大・大・中・小の四者に分別出来る。（大・中・小は3区1号集石と同様の規模）。特大の礫は、60cm×40cm×30cm程あり量的には非常に少ない。これらの礫は散在した状態であるが、この礫群中に獣骨（頭部）が出土している。この獣骨は、土圧・水等により非常に遺存が悪かった。そして、この獣骨の前歯側は、鋭利な利器により切断された状態であり、第55図の中央での出土であるが、直下や下層では礫は少量しか出土しなかった。このことは、この中央部が埋設されていたことを示唆している。

集石として確認されたが、礫の撤去を行っていくと、獣骨の出土地を中心として第57図の円形の石組み遺構として検出された。これは、周辺に散在した礫はこの石組みの構物であったことが判断された。しかし、調査の都合上1号集石同様に名称の廃止は行わなかったが、3区1・3号井戸跡の存在から、当跡も井戸跡という先入観念にとらえられ、2区2号井戸跡と名称の変更を行った。しかし、整理事業を進める中、周辺からの出土遺物や、中央部の覆土状態・湧水位等から、井戸としての性格は考え難いことから、単に、2区2号石組みという名称に変更した。

#### 2区第2号石組み

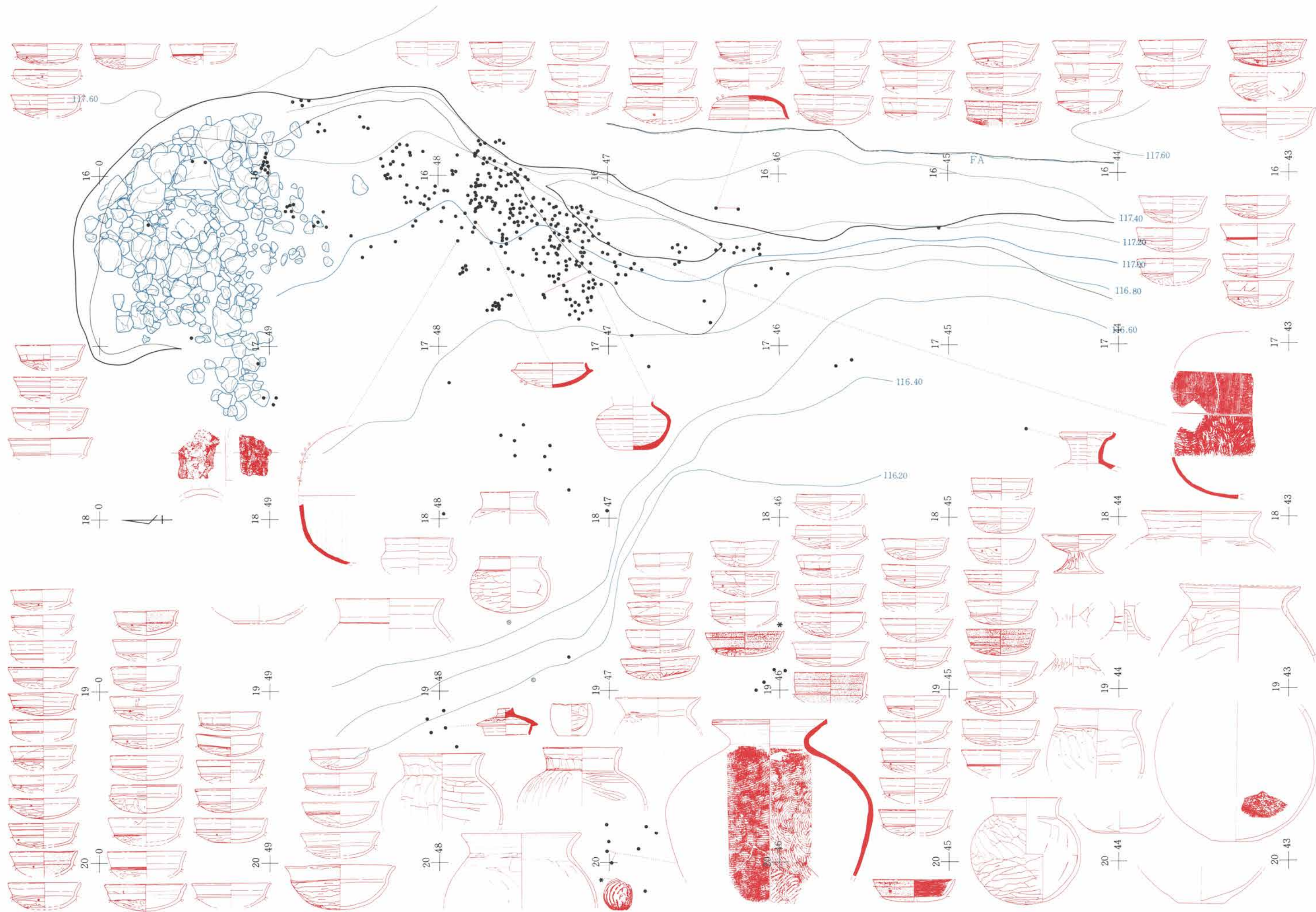
上述した2区第2号集石が、調査・整理の過程で名称変更になったものである。

石組みは川原円礫を円形に小口積みにしたものである。規模は外径3.0～3.5m・内径0.7～0.9mを測り、底面は径0.5m程を測る。そして掘り方は、径1.5m程の円形状を呈している。石積みは底面直上から積み上げ、4段から5段が残存しているが、周辺に散乱していた礫からは6段程の石積みであったと考えられる。又、石積みは、下方で用いる礫が小規模のものが多く、上位に上がるに従って規模が大きくなっている。

検出した面は、周辺に散在した礫の下端の面を平面的に検出した。又、同面は、やや硬化していることが認められた。そして、この検出面が当時の生活面であった可能性が非常に濃厚である。この生活面と考えられる面を図示したのが付図2の青色の等高線である。この面活面と考えられる検出面は、西側に向かうにつれて面が傾斜しており、調査区内西端では、直下のFA層との間層が僅か4～5cm程であった。この厚さは、FAの降下からの時間的経過を示しており、当跡の年代観を考える上で重要である。

#### 土器溜り

土器溜りは、2区第2号石組みの周から南側にかけて出土した遺物に対する名称である。出土層位は2区



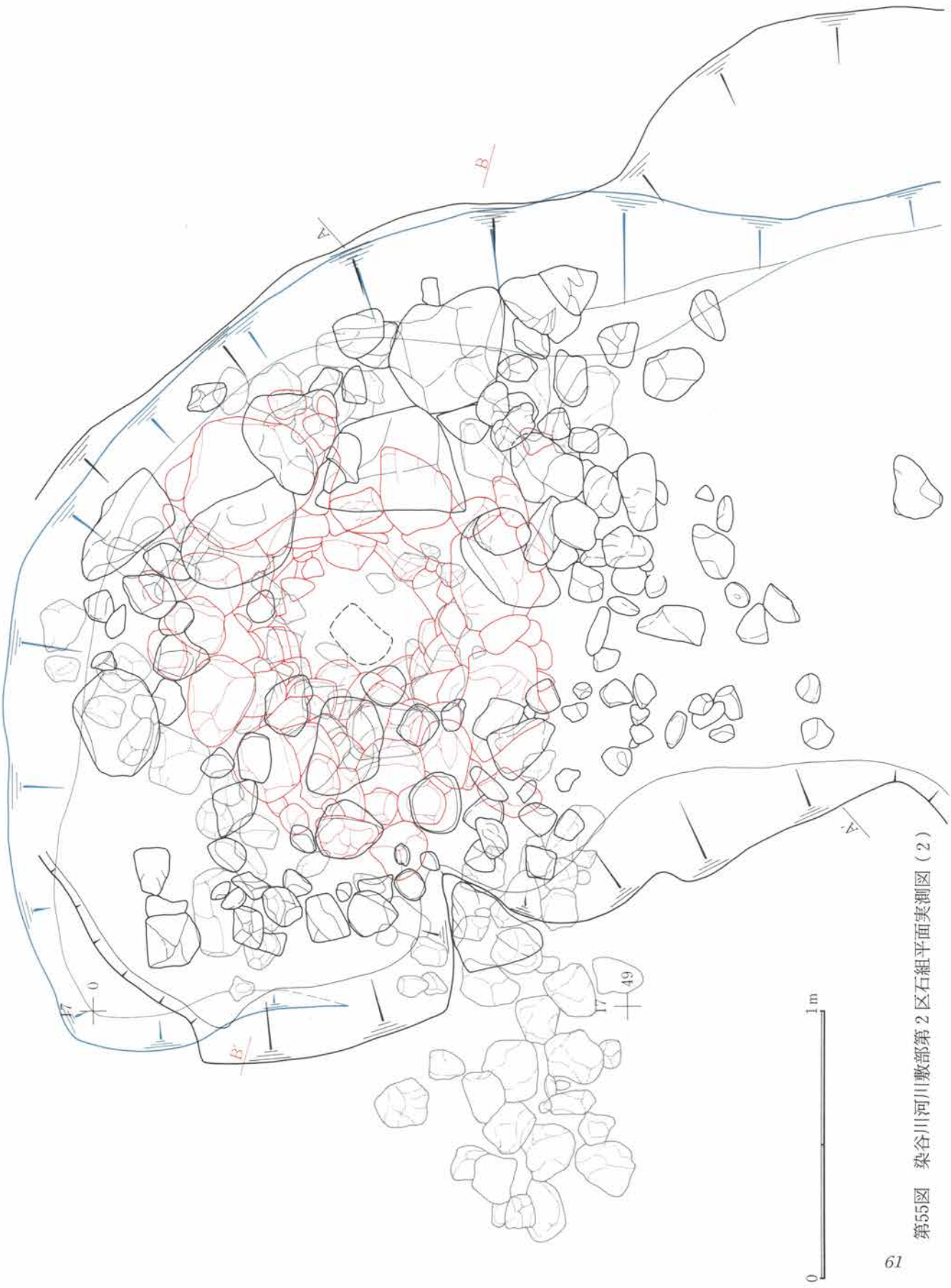
第54図 染谷川河川敷部第2号石組平面実測図(1)





15  
+  
0

15  
+  
49 第4節 検出された遺構・遺物



第55図 染谷川河川敷部第2区石組平面実測図(2)

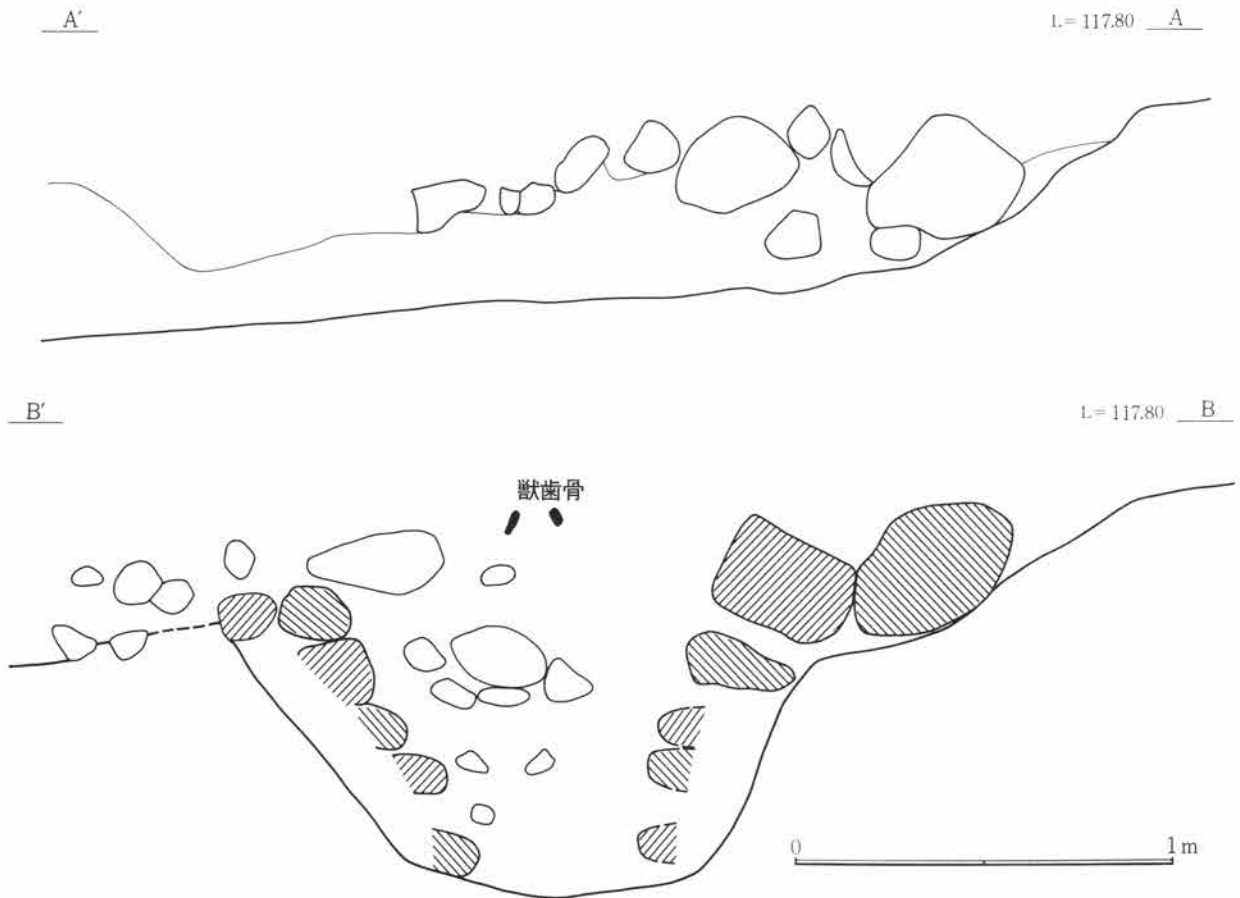
第2号石組み周辺で検出された、生活面と考えられる面が上位で、第7図下段の17層土中での一括出土遺物群である。

出土した遺物は、須恵器・土師器・玉類・石製品・植物遺存体などがある。この中で主体的な量を占めるのが土師器坏類で全体の7割以上程度を占め、次いで須恵器甕類である。

土師器が全体の7割以上を占め、しかも、土師器甕類より須恵器甕類が多いという点では、通有の住居跡の出土遺物様相とは大きく異なる点である。更に、出土した土師器坏類は、水簸土で作られたと思われる程の夾雑物の少ない胎土のものが9割以上を占める。この胎土は当初水簸土かと考えていたが、推定生産地の藤岡市で、この坏の胎土と非常に類似した粘土を確認採取したので、恐らく、水簸土では無く自然の粘土をそのまま使用した胎土と考えられる。そして、残り1割程の土師器坏は、内黒・黒色の土器で東毛系と考えられる。この二者の土師器坏は、一方が橙色を呈し他方は黒色を呈するという「赤」、「黒」という色調の特殊性が見られる。

これらの土器類は、完全な形を成して出土したものは皆無で、良くとも口縁部の一部が欠損している。甕出土時は大半のものが破片化しており、その割れ口も新鮮で、通有の出土例の割れ口とは異なっている。この割れ口と接合状態からすれば、破片化した坏は、出土地に程近い所で破却されたと判断出来、恐らく、石組み乃至土器溜り部で何らかの要因により破却したと考えられる。そして、この破却する行動そのものが、石組みと土器溜りの性格が内在していると考えられる。

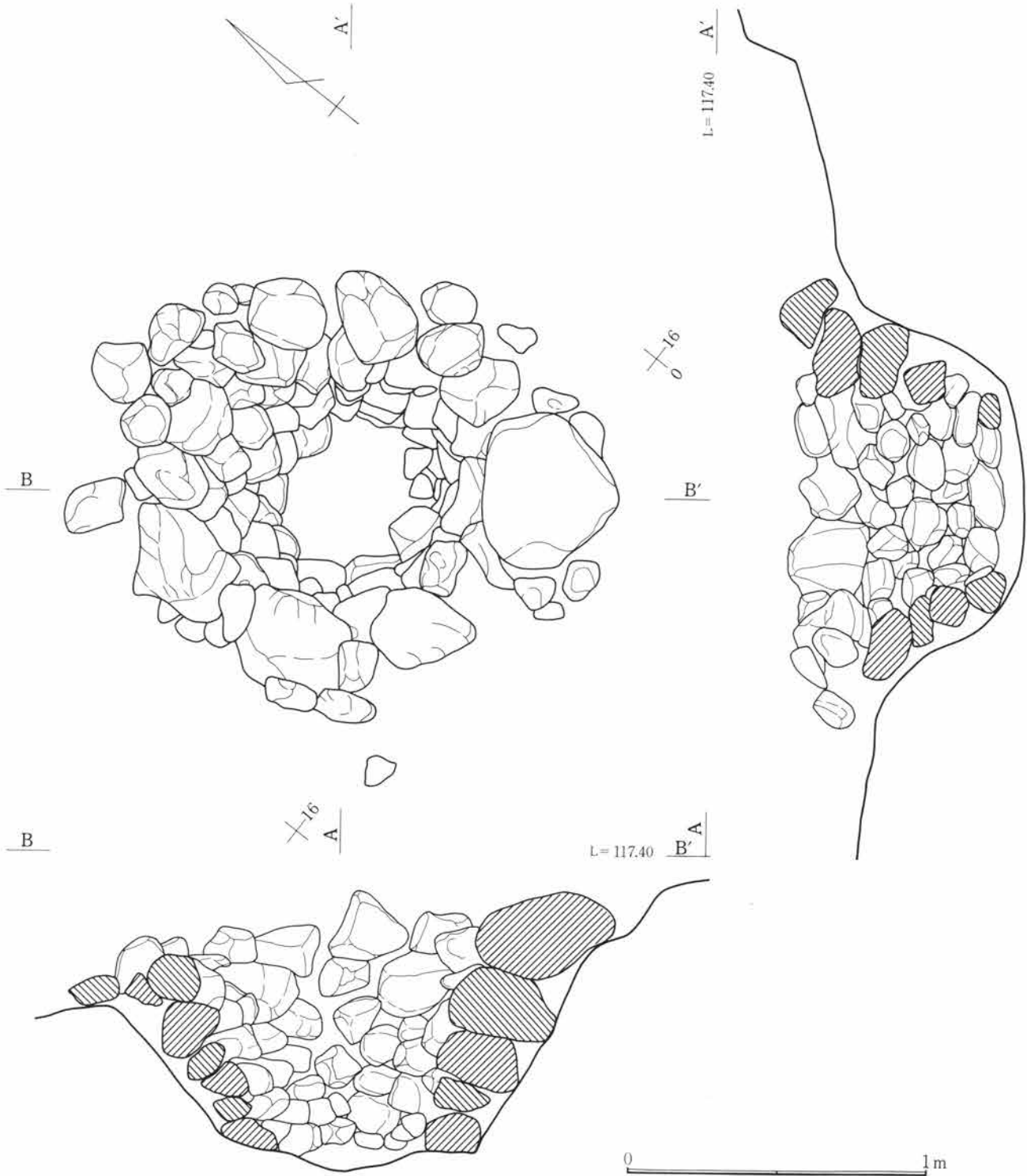
他の出土遺物では、玉類が目される。玉類は滑石製の白玉で9点と滑石片が1点出土している。この白



第56図 染谷川河川敷部第2区集石・石組断面実測図

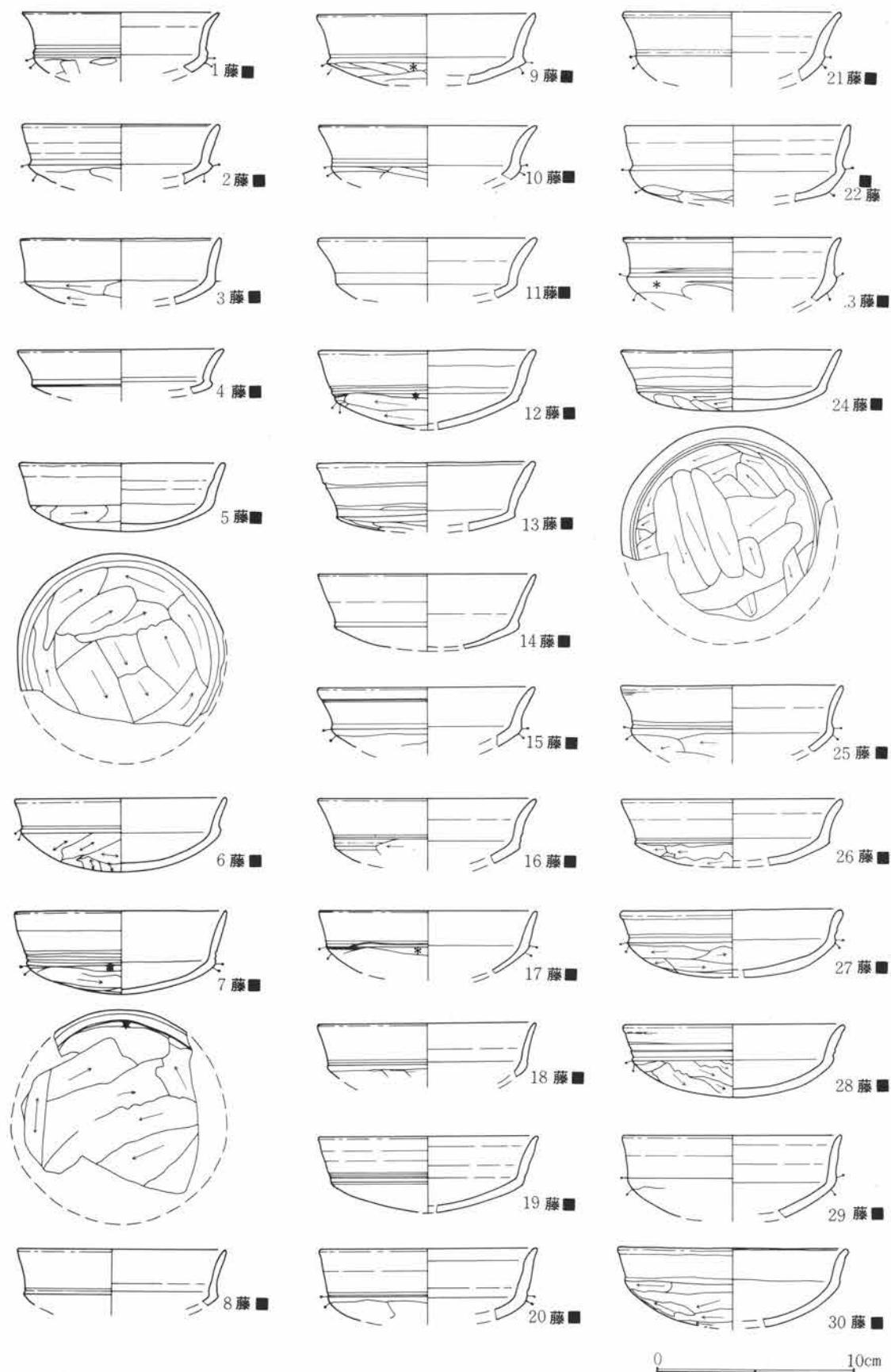
玉は、石組み部に重複する状態で西側の斜面周辺から集中して出土している。

植物遺存体では、FA直上層より自然木(?)を燃やしたものが2点出土しており(第182図)この場所で火を焚いた痕跡が窺われる。そして、前述した獣骨等の出土状態等を勘案すると、この石組みと土器溜りは、周辺に何らの遺跡の存在しない点と、河川敷部という占地、FA降下より若干時間が経過していること等から、当該の性格は、何らかの祭祀施設であったと考えられる。



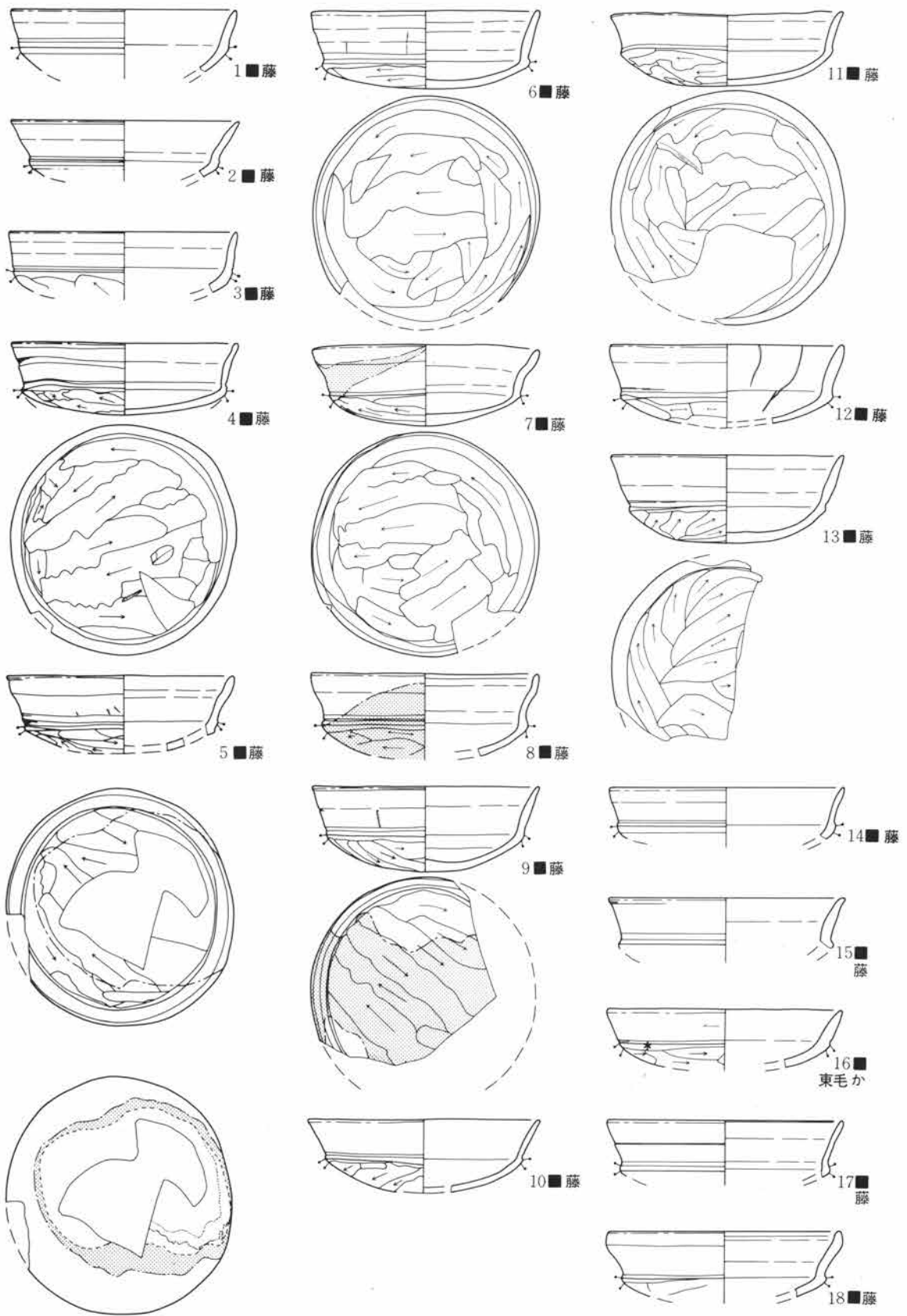
第57図 染谷川河川敷部第2区石組平・断面実測図

第4章 検出された遺構・遺物

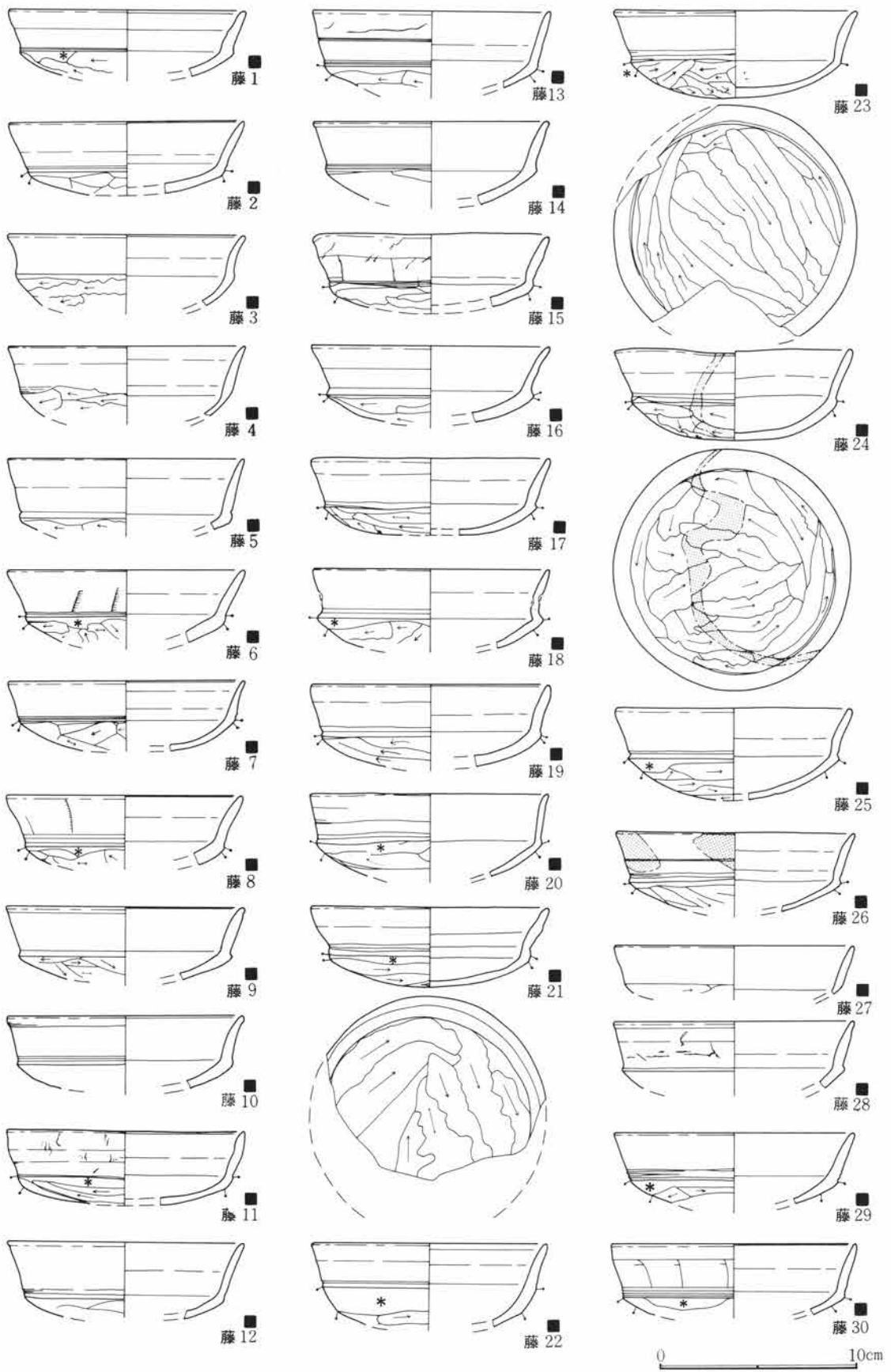


第58図 染谷川河川敷部第1号祭祀（土器溜り）出土土師器実測図（1）

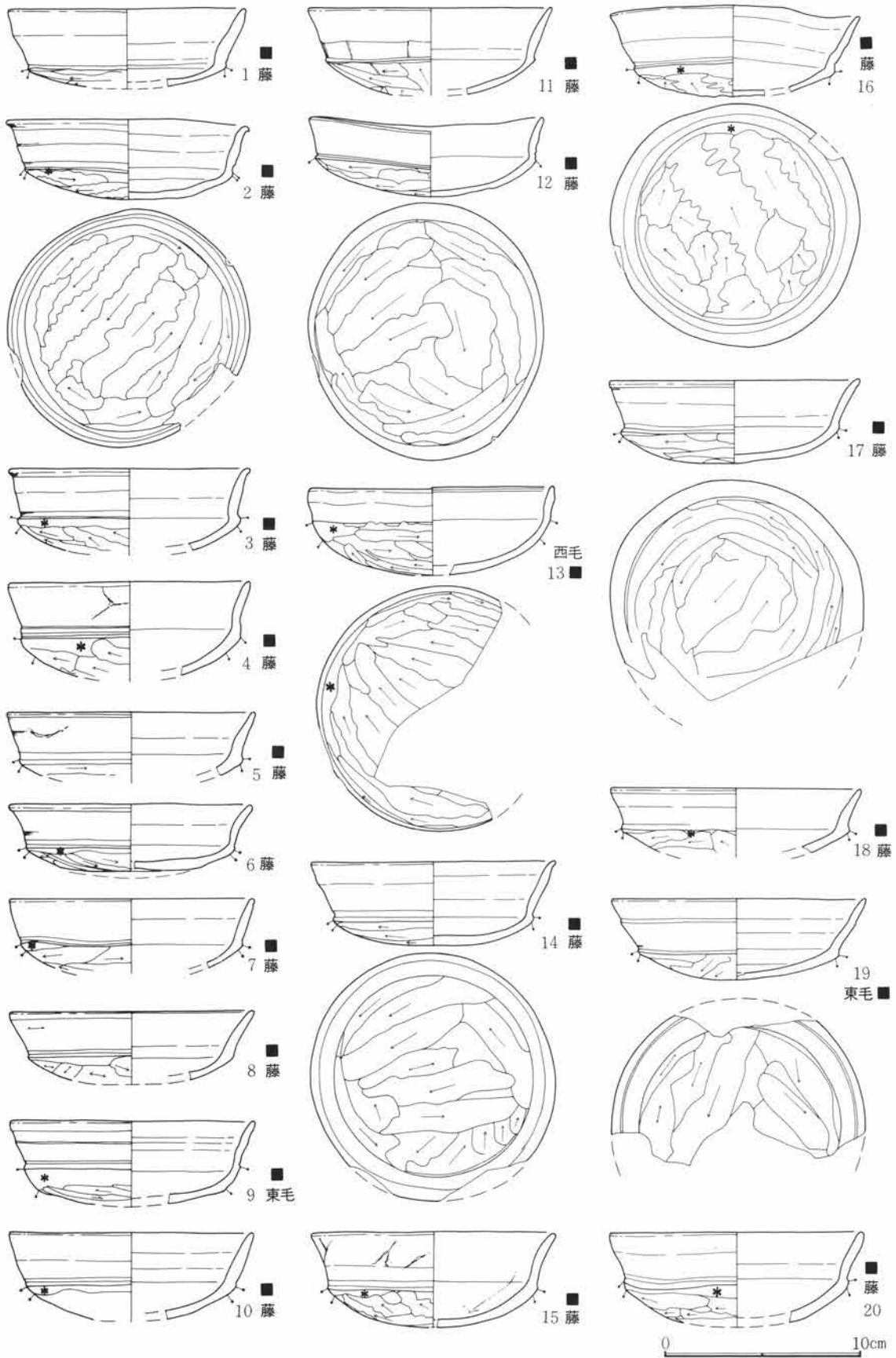
第4節 検出された遺構・遺物



第59図 染谷川河川敷部第1号祭祀（土器溜り）出土土師器実測図（2）

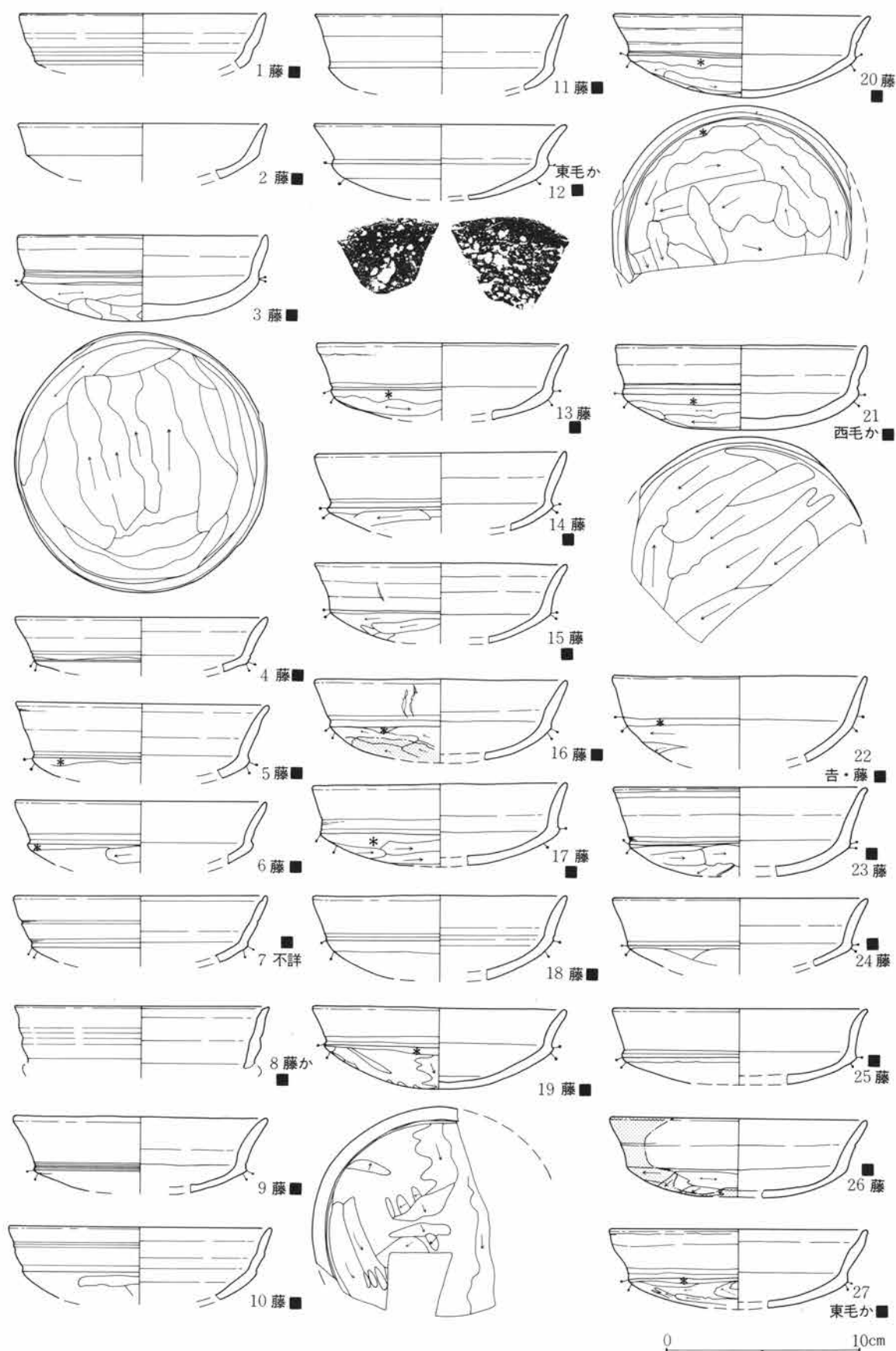


第60図 染谷川河川敷部第1号祭祀（土器溜り）出土土師器実測図（3）



第61図 染谷川河川敷部第1号祭祀(土器溜り)出土土師器実測図(4)

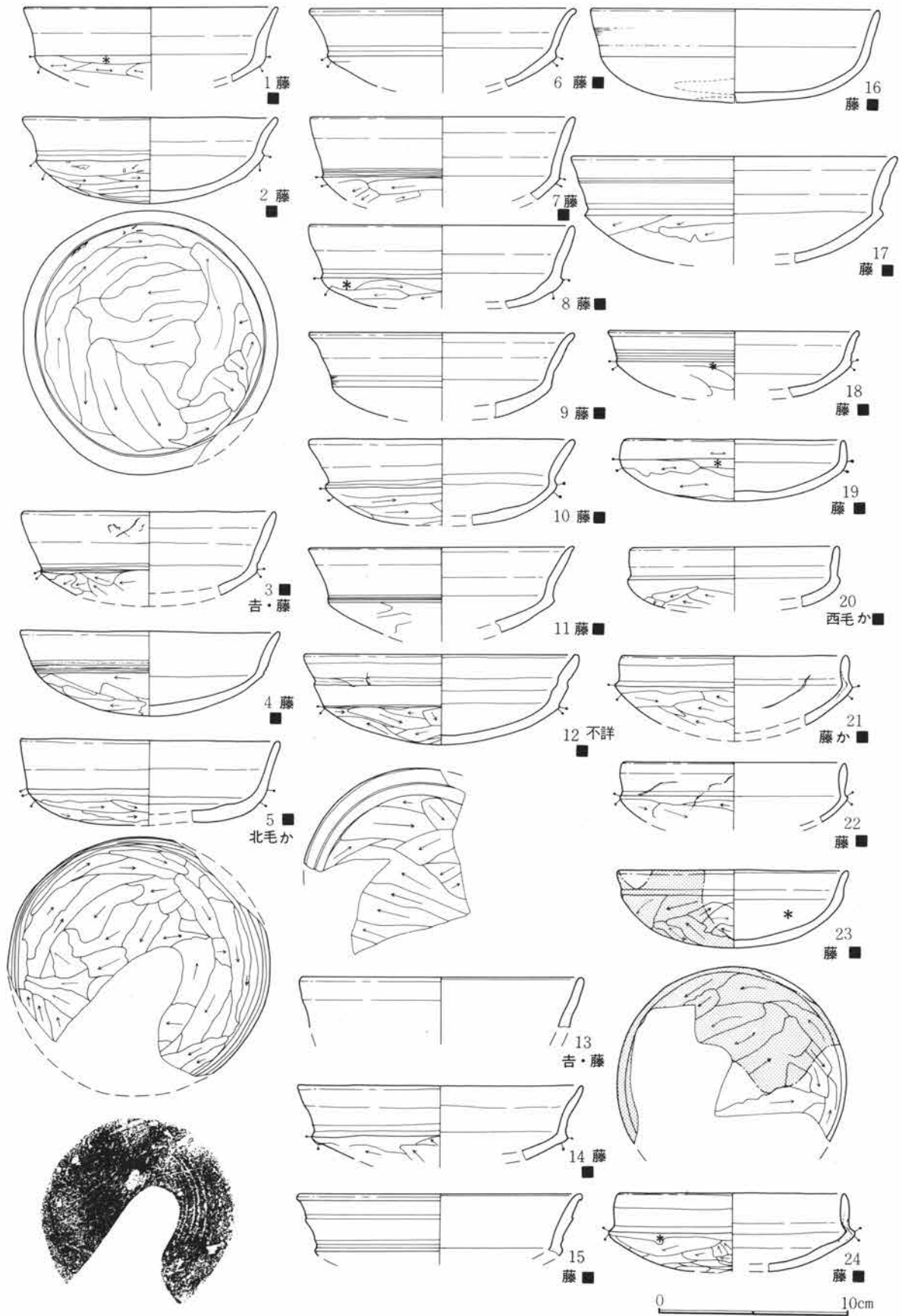
第4章 検出された遺構・遺物



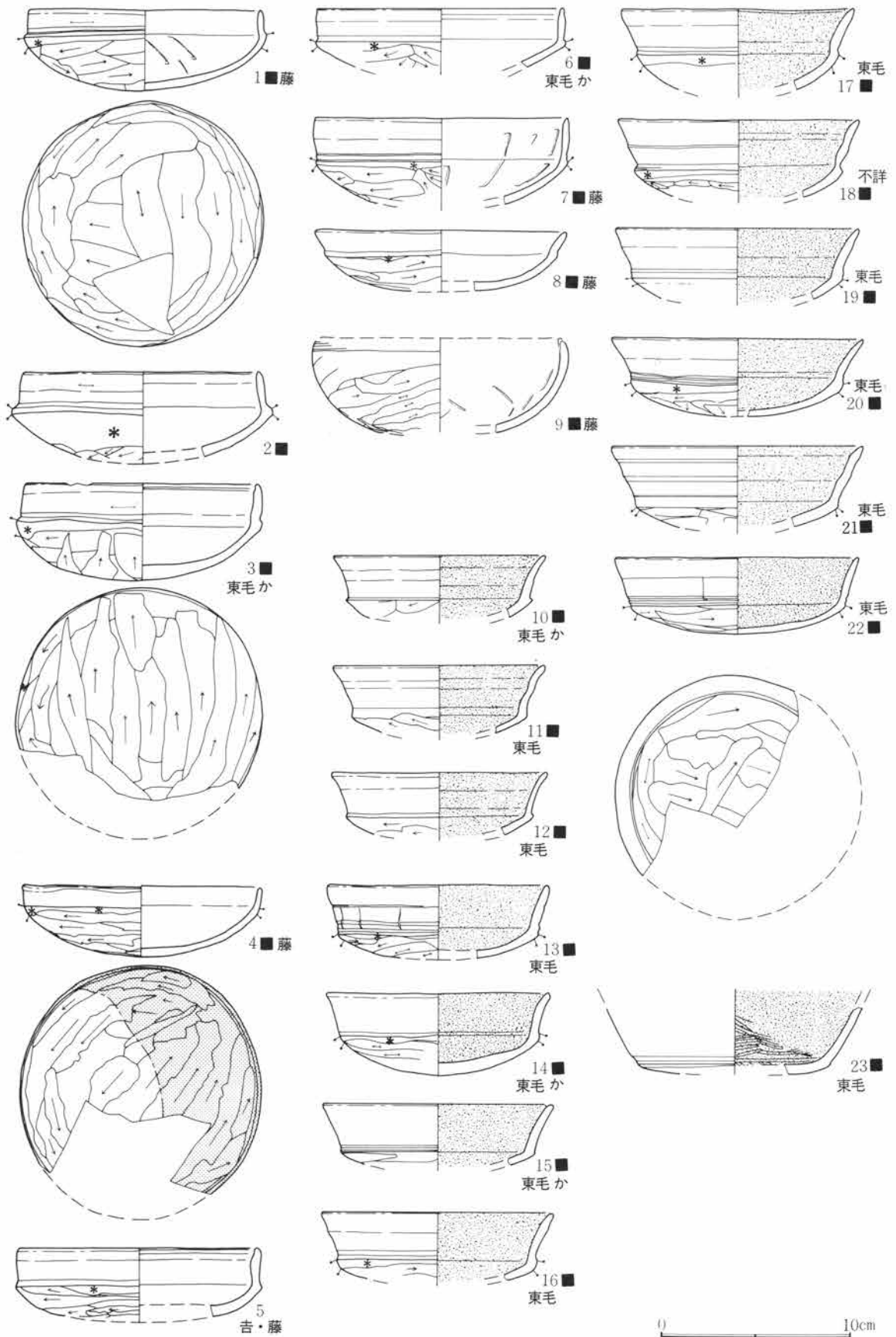
第62図 染谷川河川敷部第1号祭祀（土器溜り）出土土師器実測図（5）



第4節 検出された遺構・遺物

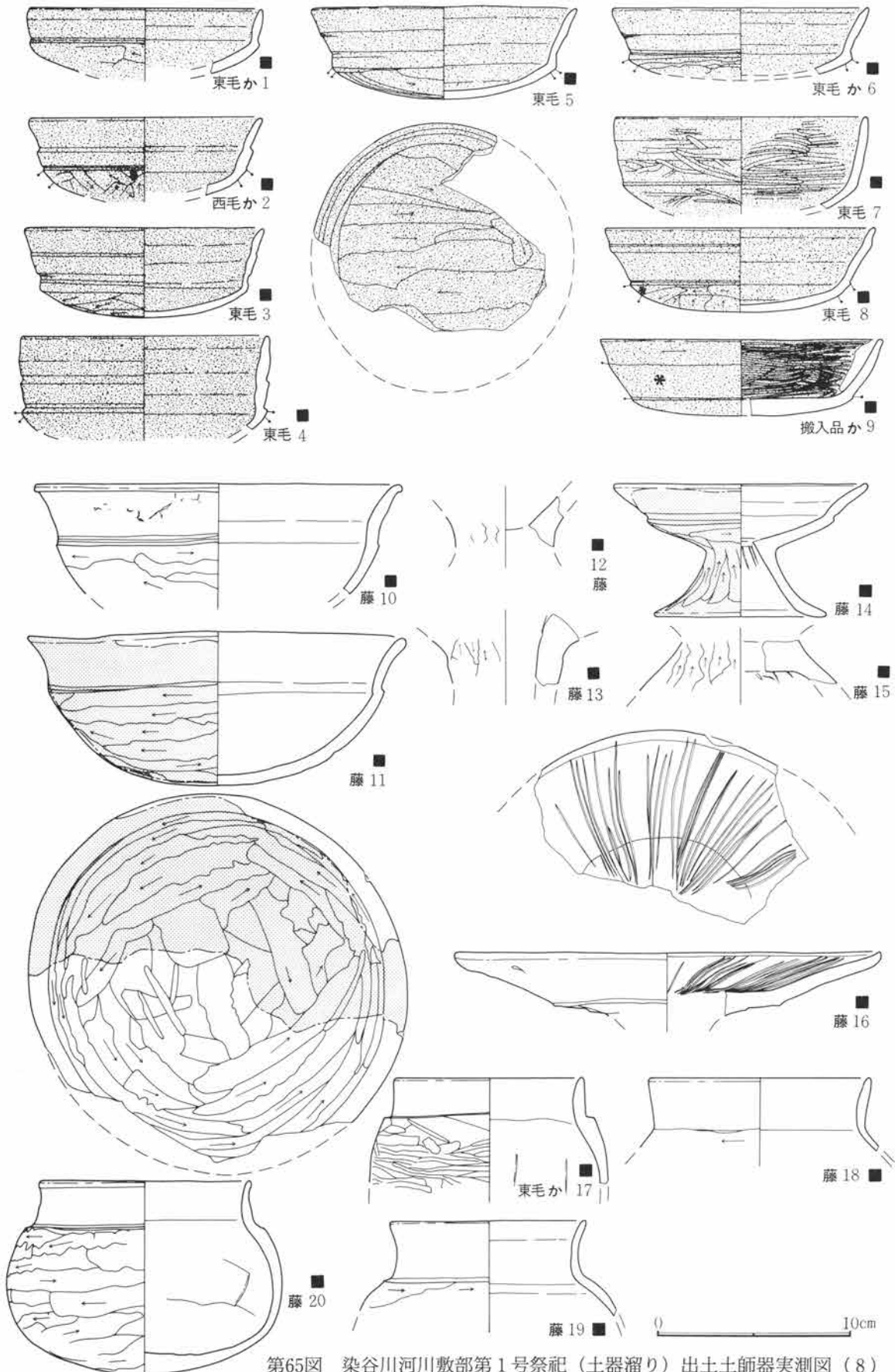


第63図 染谷川河川敷部第1号祭祀（土器溜り）出土土師器実測図（6）



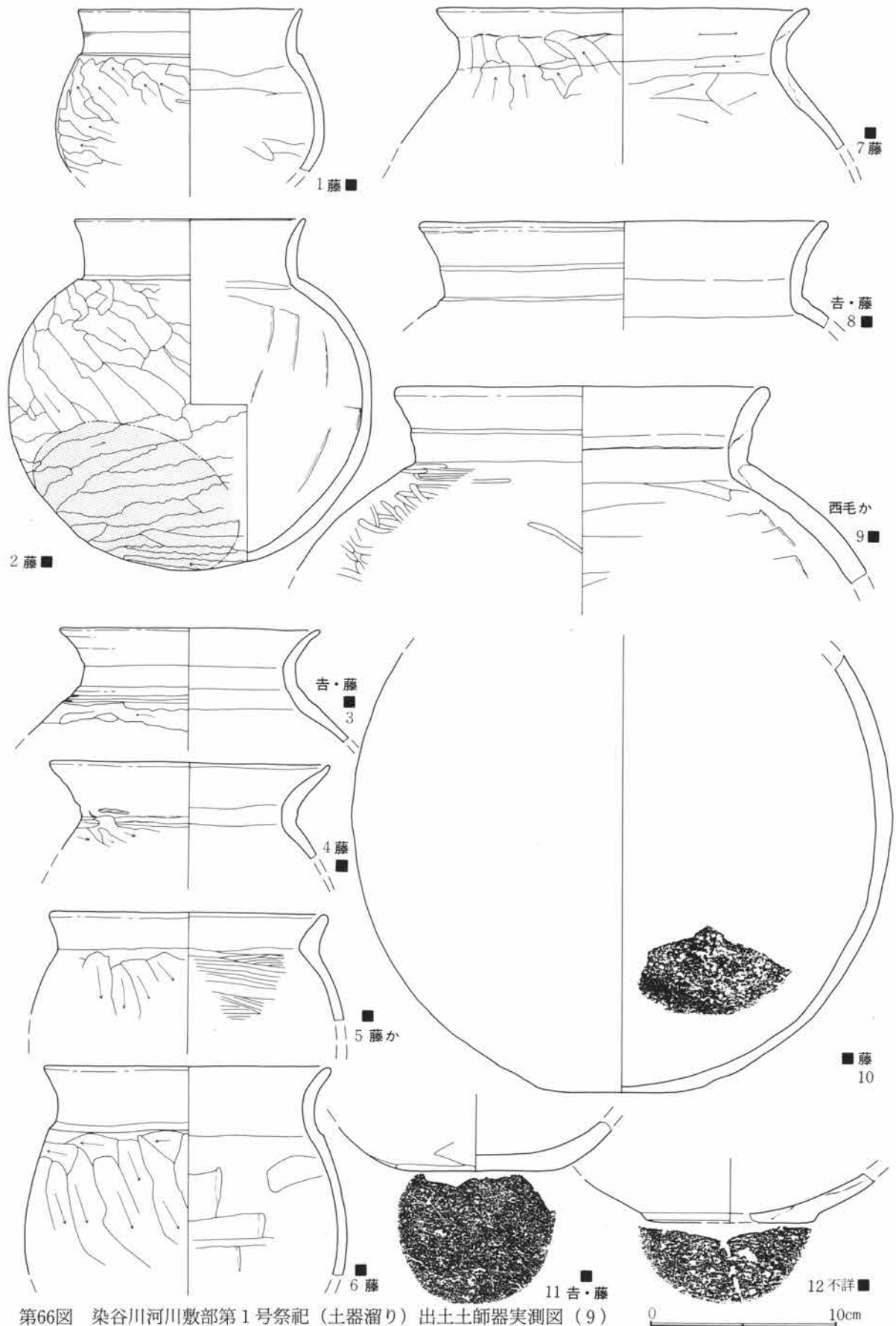
第64図 染谷川河川敷部第1号祭祀(土器溜り)出土土師器実測図(7)

第4節 検出された遺構・遺物



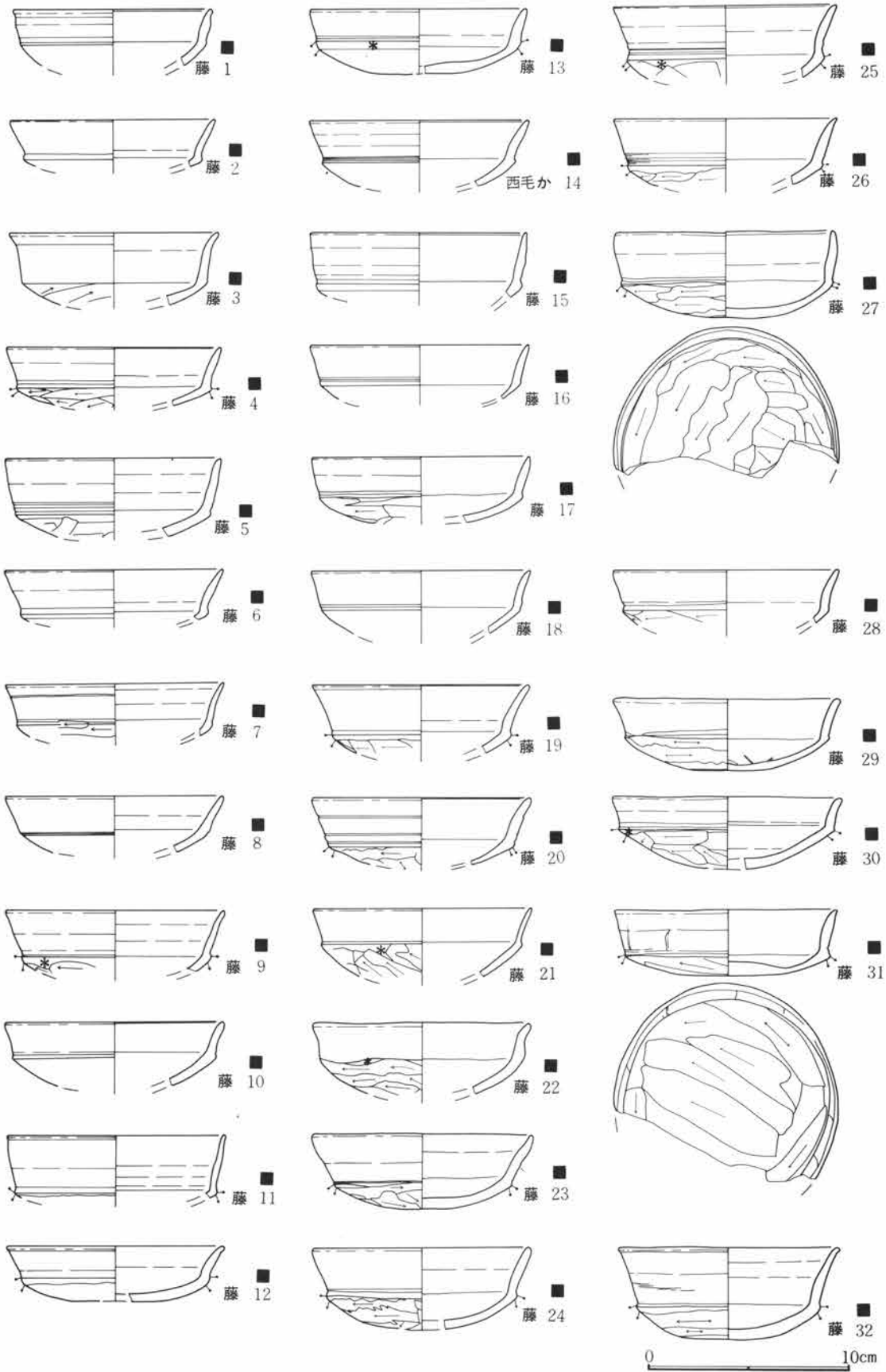
第65図 染谷川河川敷部第1号祭祀（土器溜り）出土土師器実測図（8）

第4章 検出された遺構・遺物



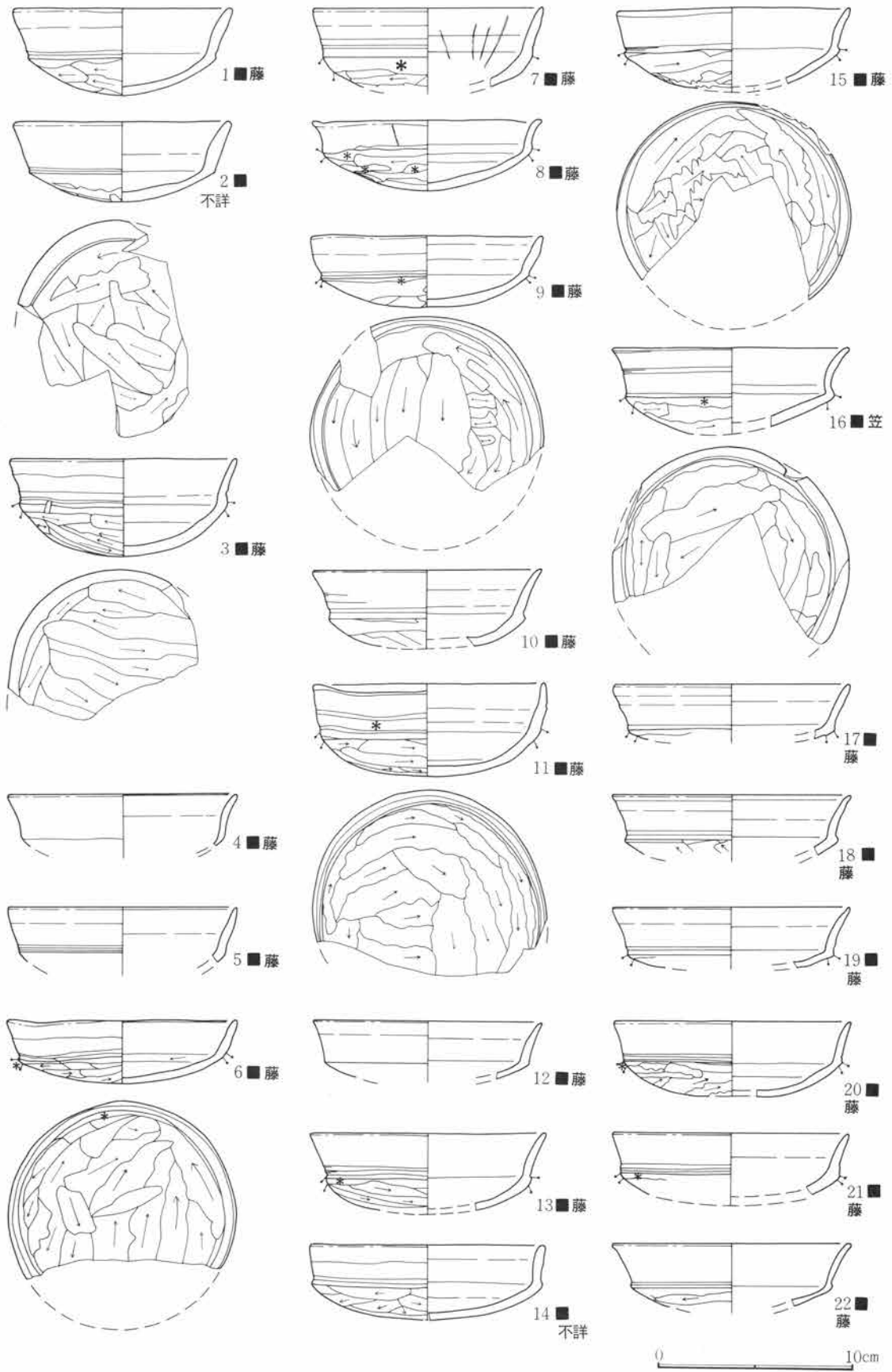
第66図 染谷川河川敷部第1号祭祀（土器溜り）出土土師器実測図（9）

第4節 検出された遺構・遺物



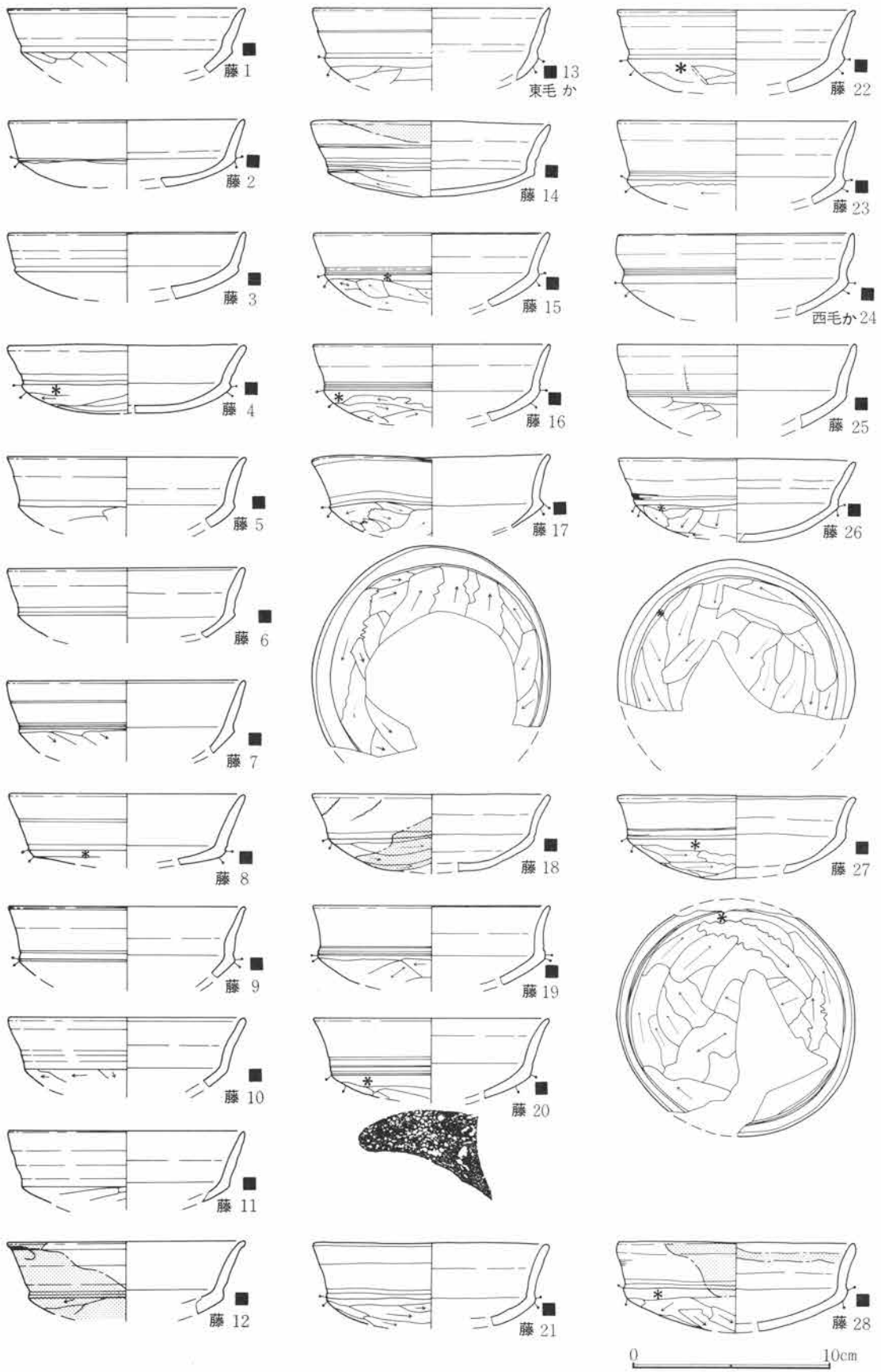
第67図 染谷川河川敷部第1号祭祀(暗灰褐色砂層)出土土師器実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



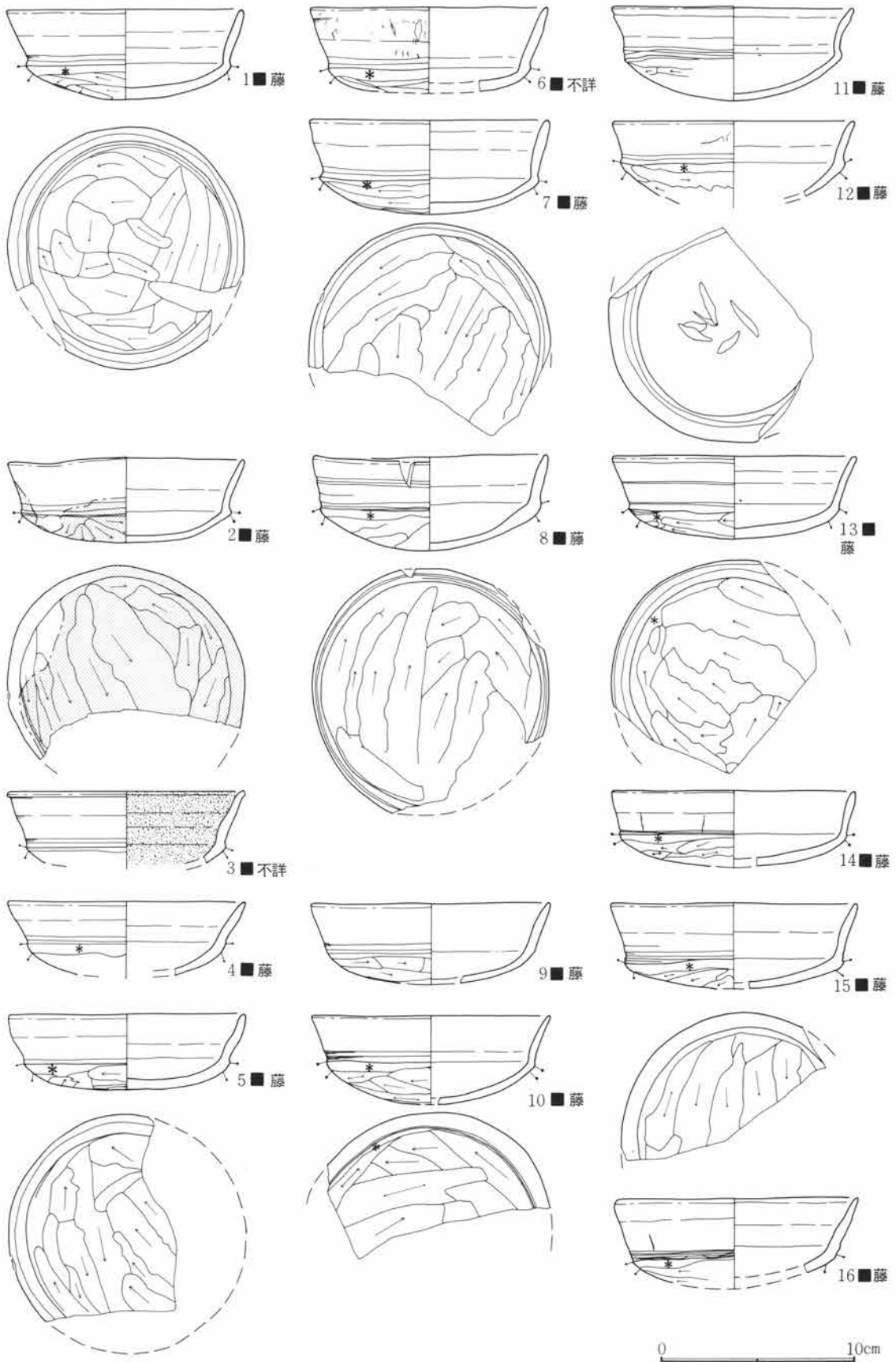
第68図 染谷川河川敷部第1号祭祀(暗灰褐色砂層)出土土師器実測図(2)

第4節 検出された遺構・遺物



第69図 染谷川河川敷部第1号祭祀（暗灰褐色砂層）出土土師器実測図（3）

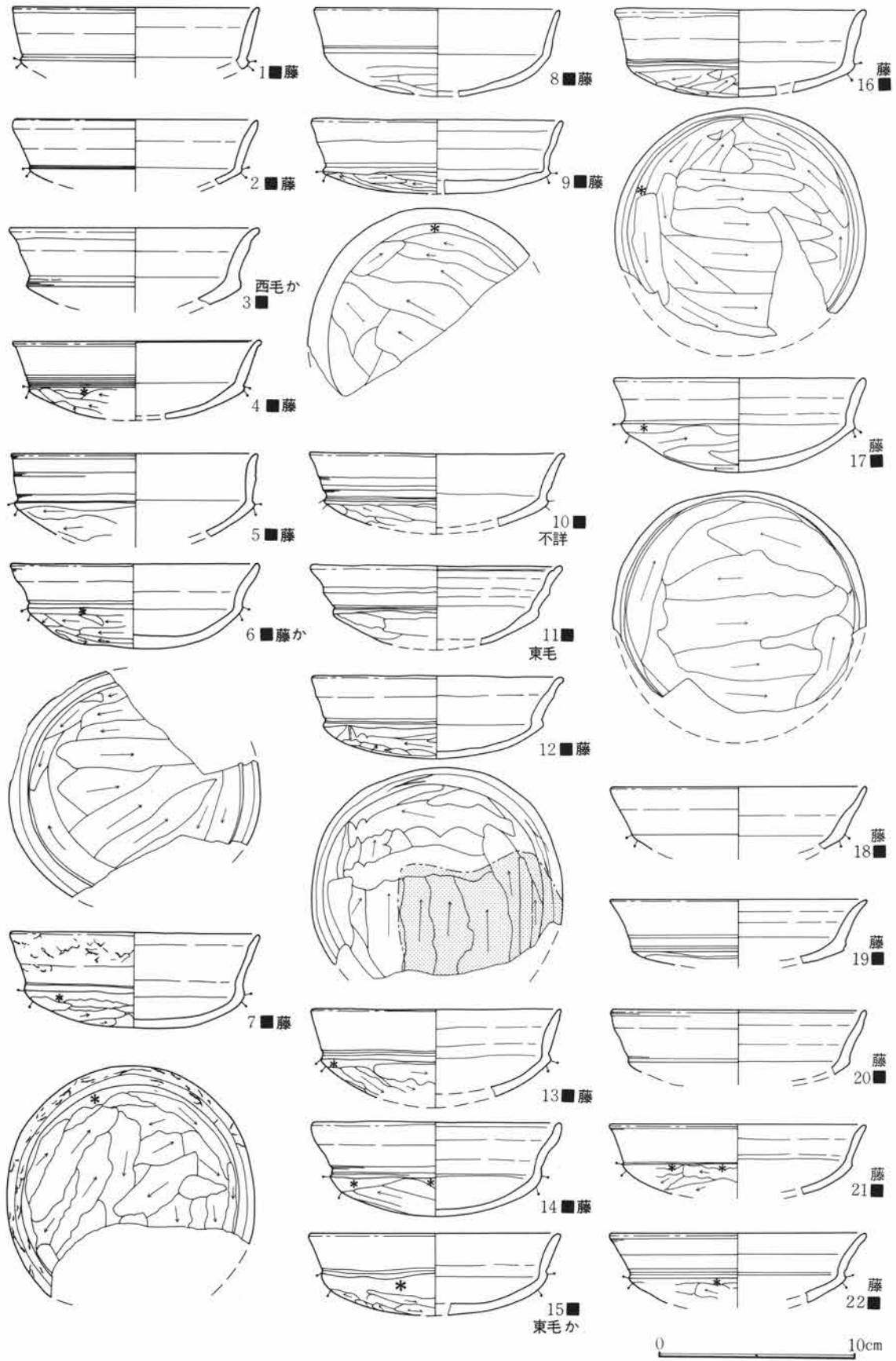
第4章 検出された遺構・遺物



第70図 染谷川河川敷部第1号祭祀(暗灰褐色砂層)出土土師器実測図(4)

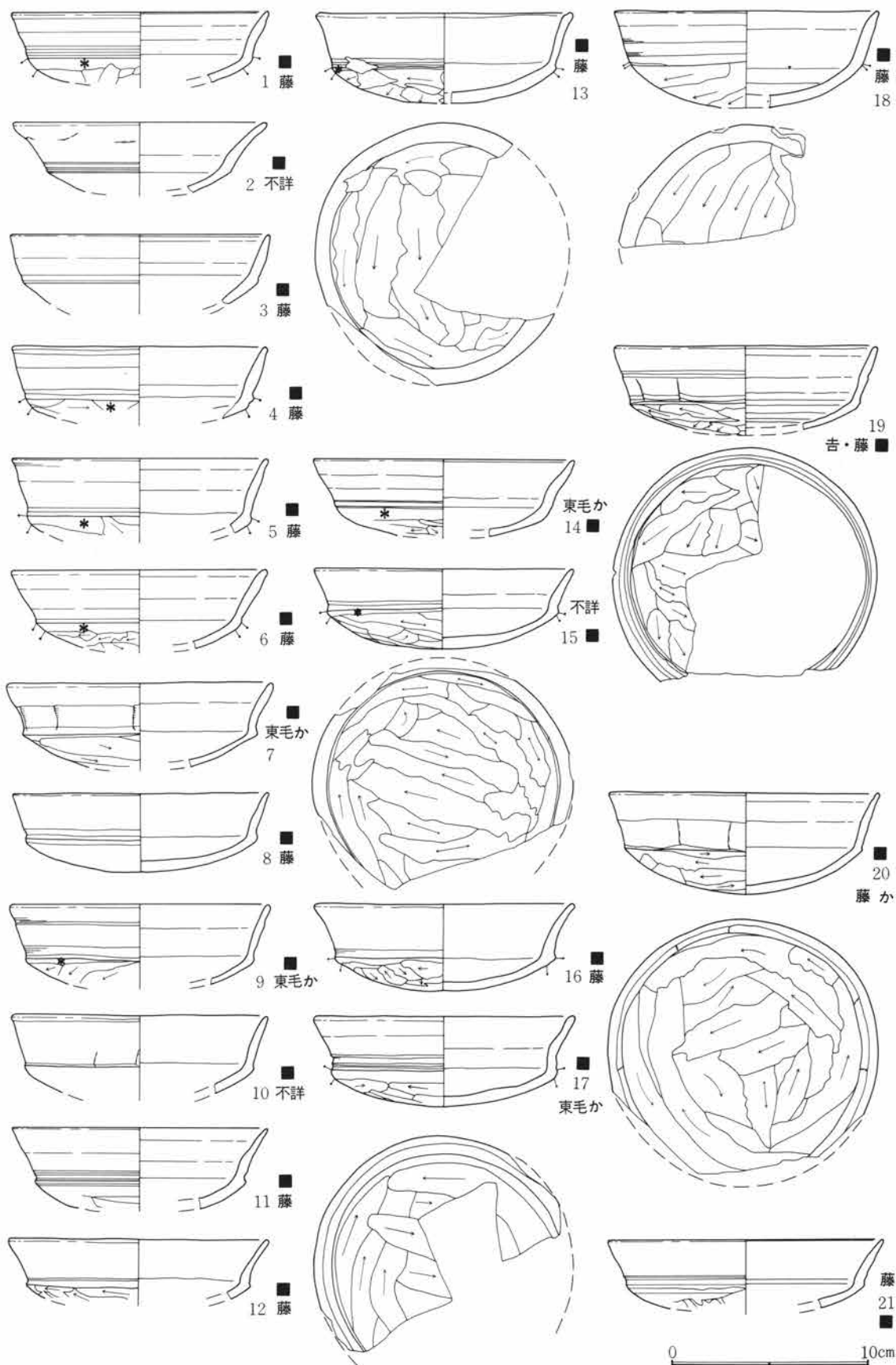


第4節 検出された遺構・遺物



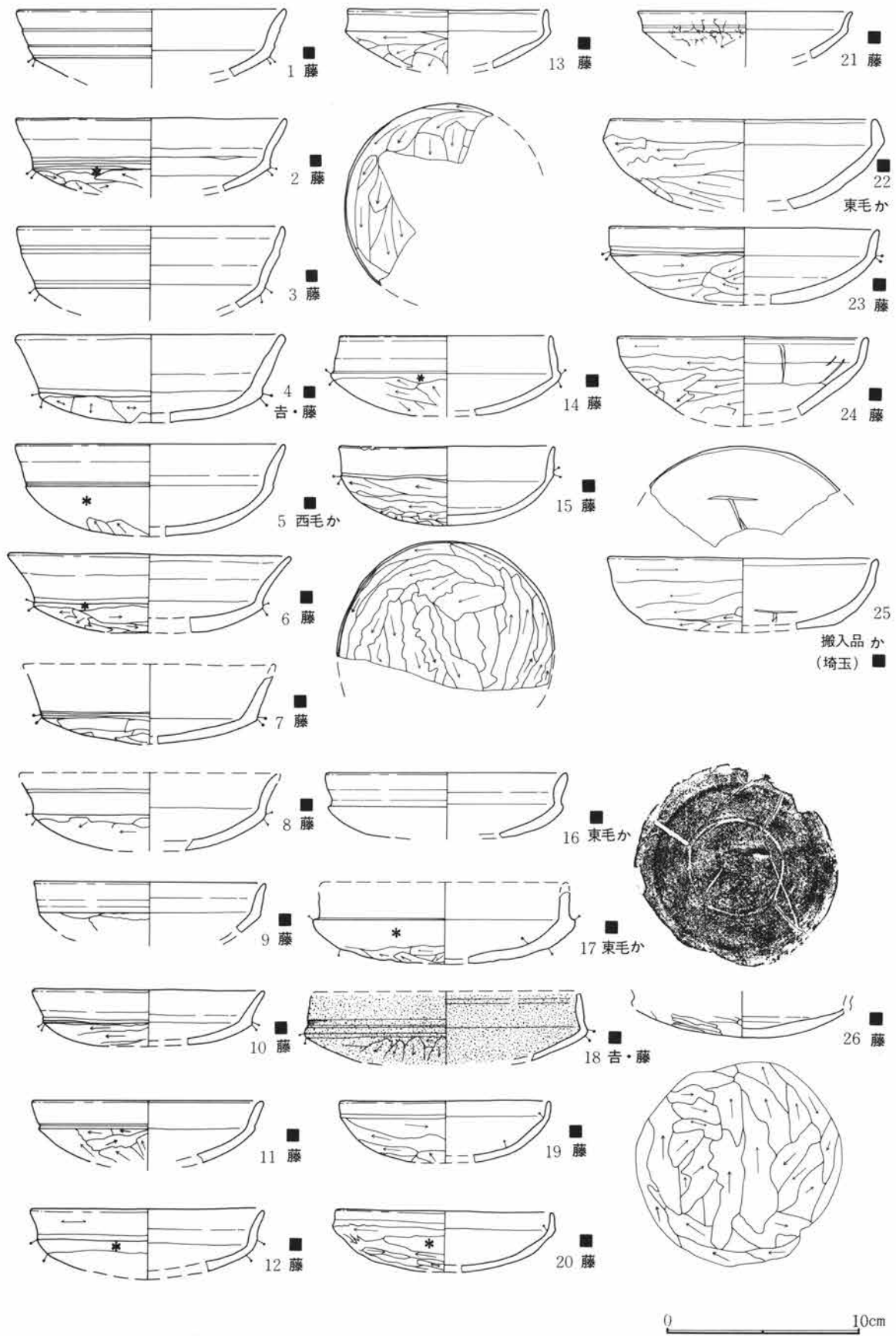
第71図 染谷川河川敷部第1号祭祀（暗灰褐色砂層）出土土師器実測図（5）

第4章 検出された遺構・遺物



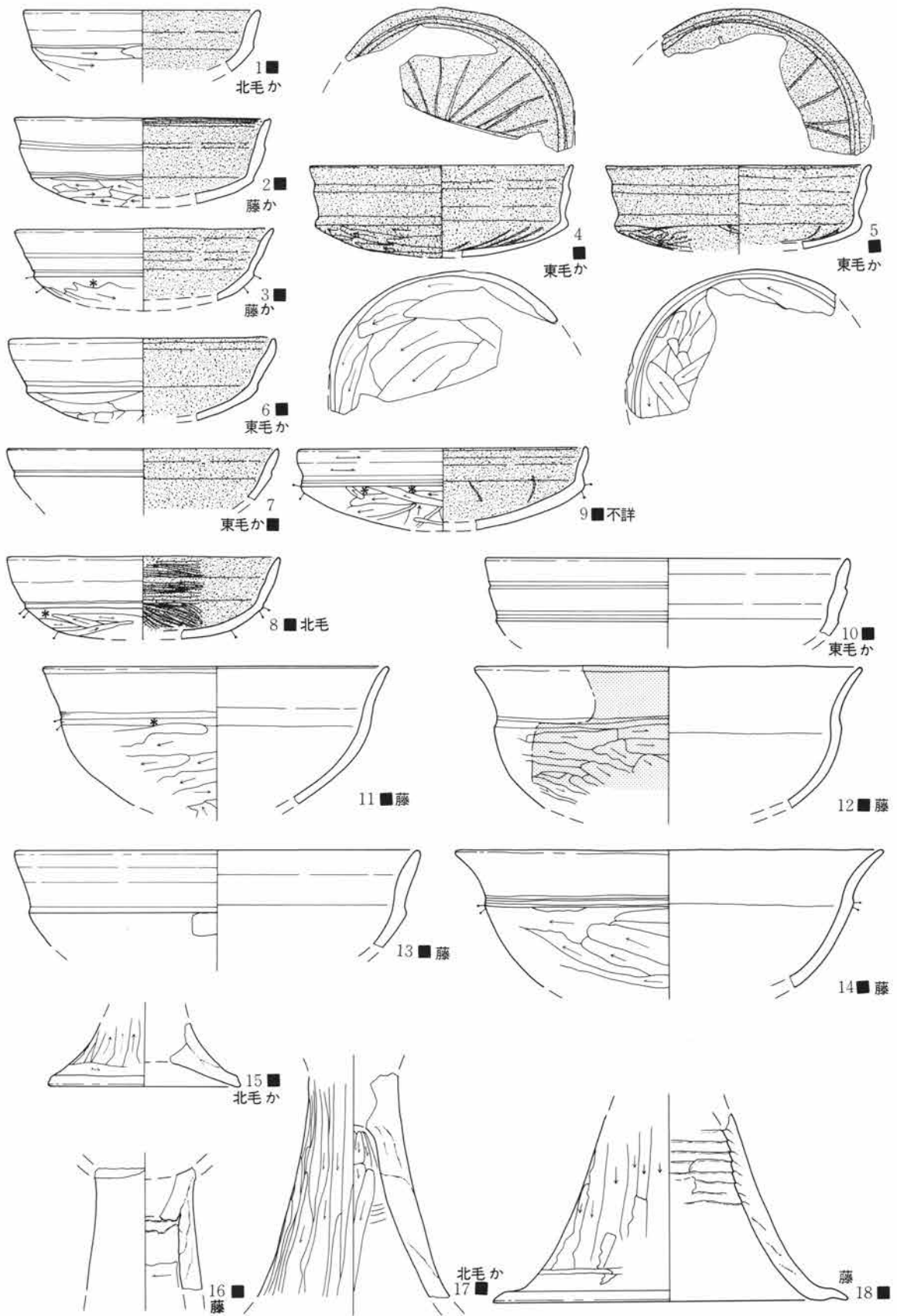
第72図 染谷川河川敷部第1号祭祀(暗灰褐色砂層)出土土師器実測図(6)

第4節 検出された遺構・遺物

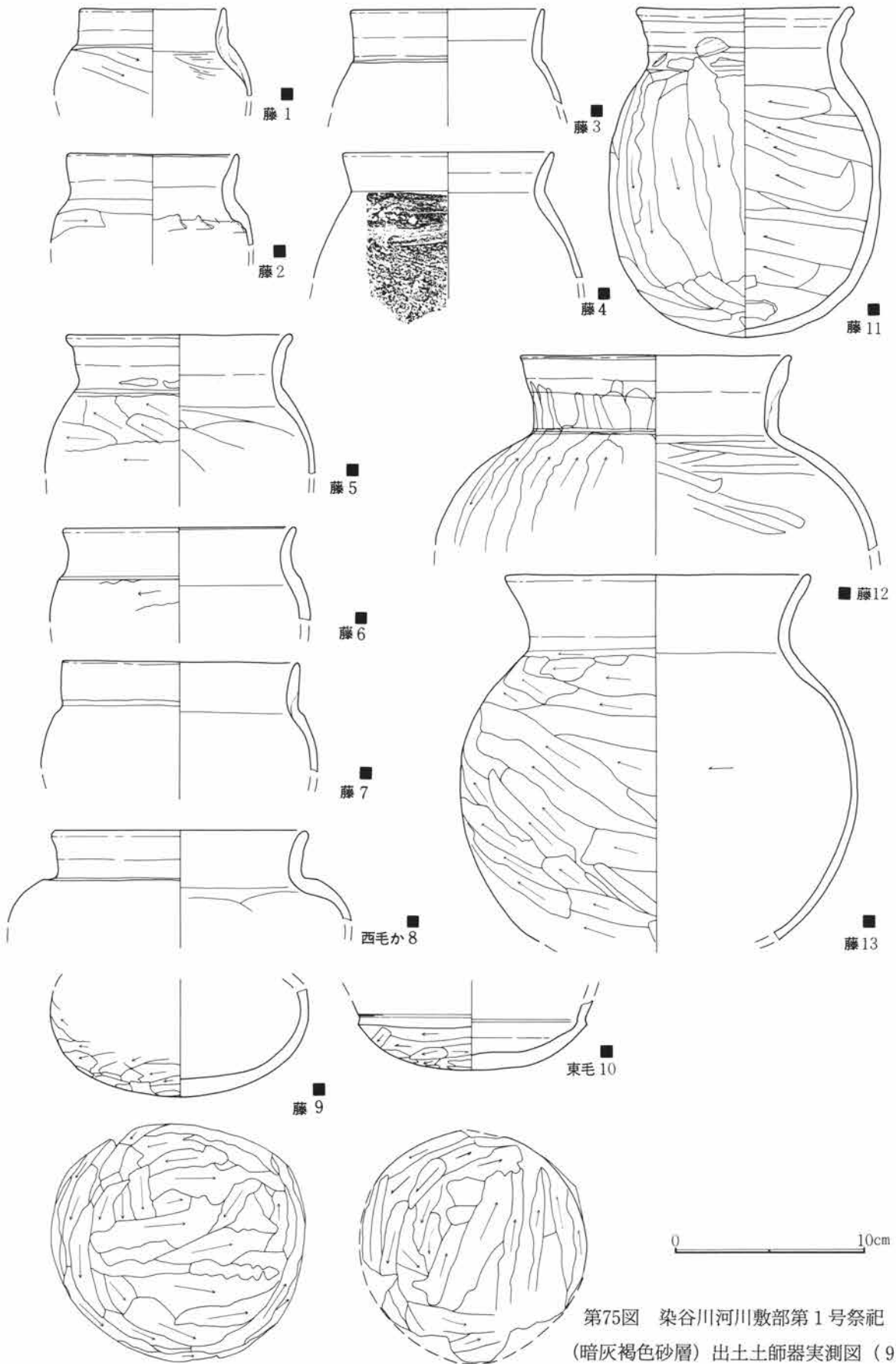


第73図 染谷川河川敷部第1号祭祀(暗灰褐色砂層)出土土師器実測図(7)

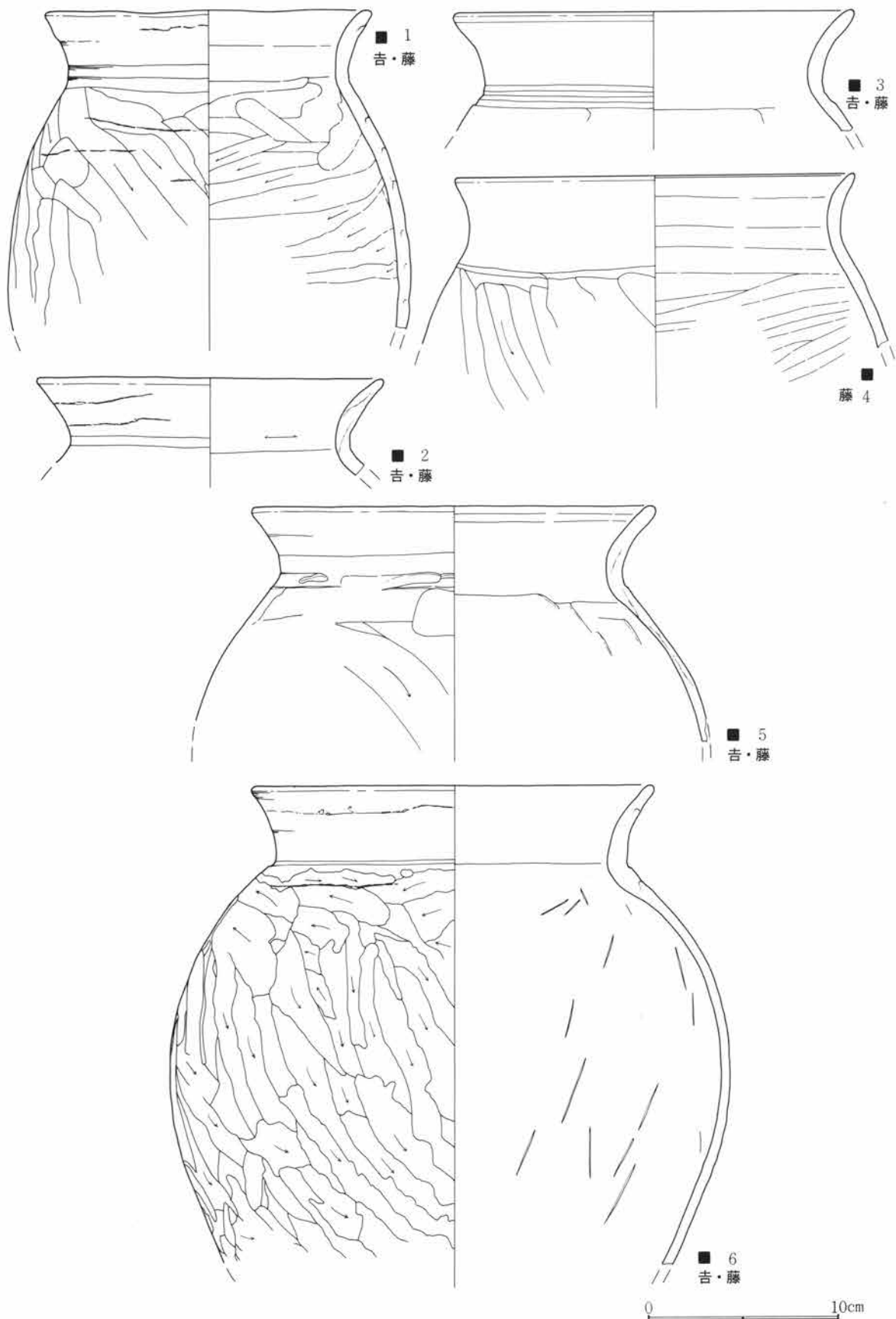
第4章 検出された遺構・遺物



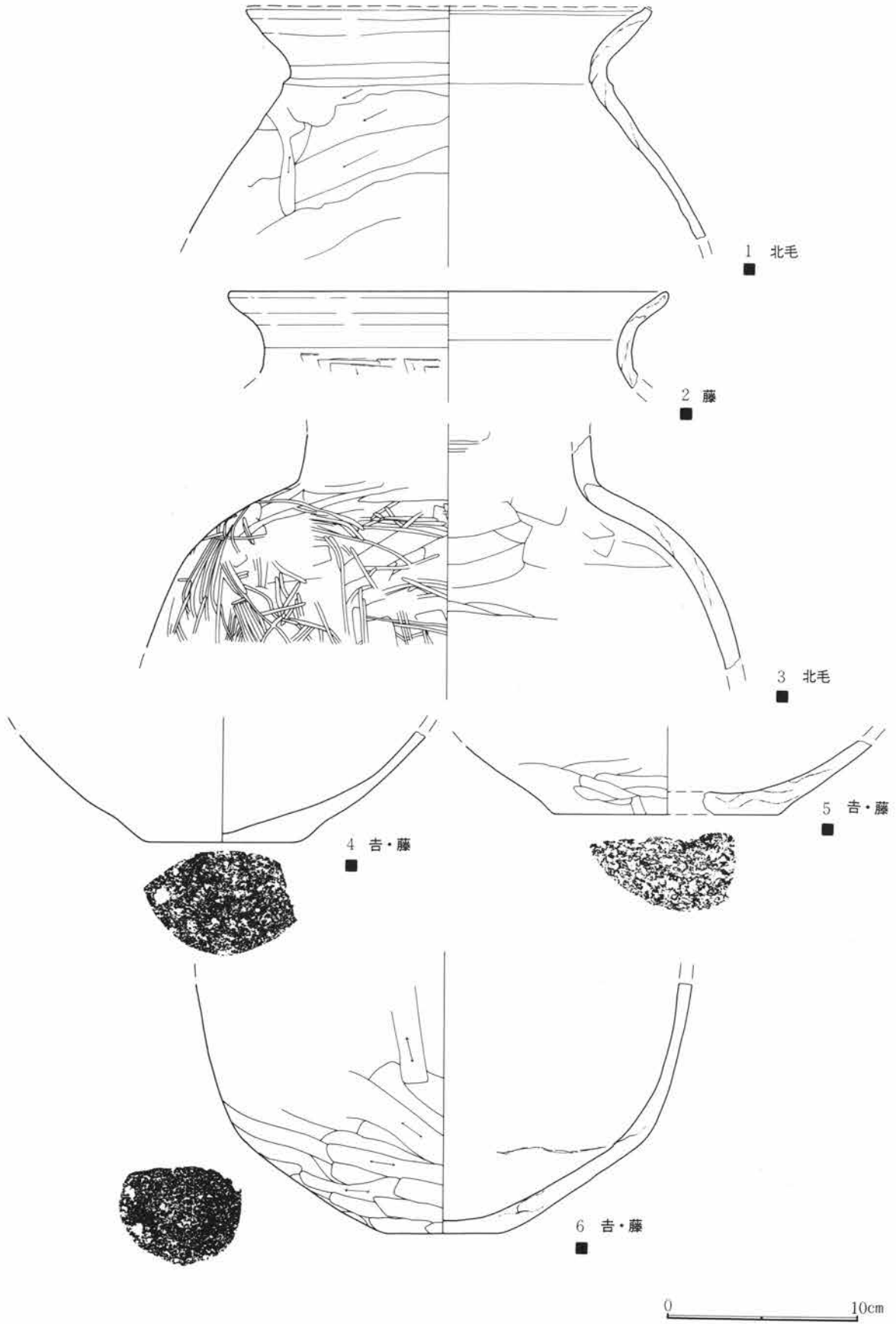
第74図 染谷川河川敷部第1号祭祀（暗灰褐色砂層）出土土師器実測図（8）



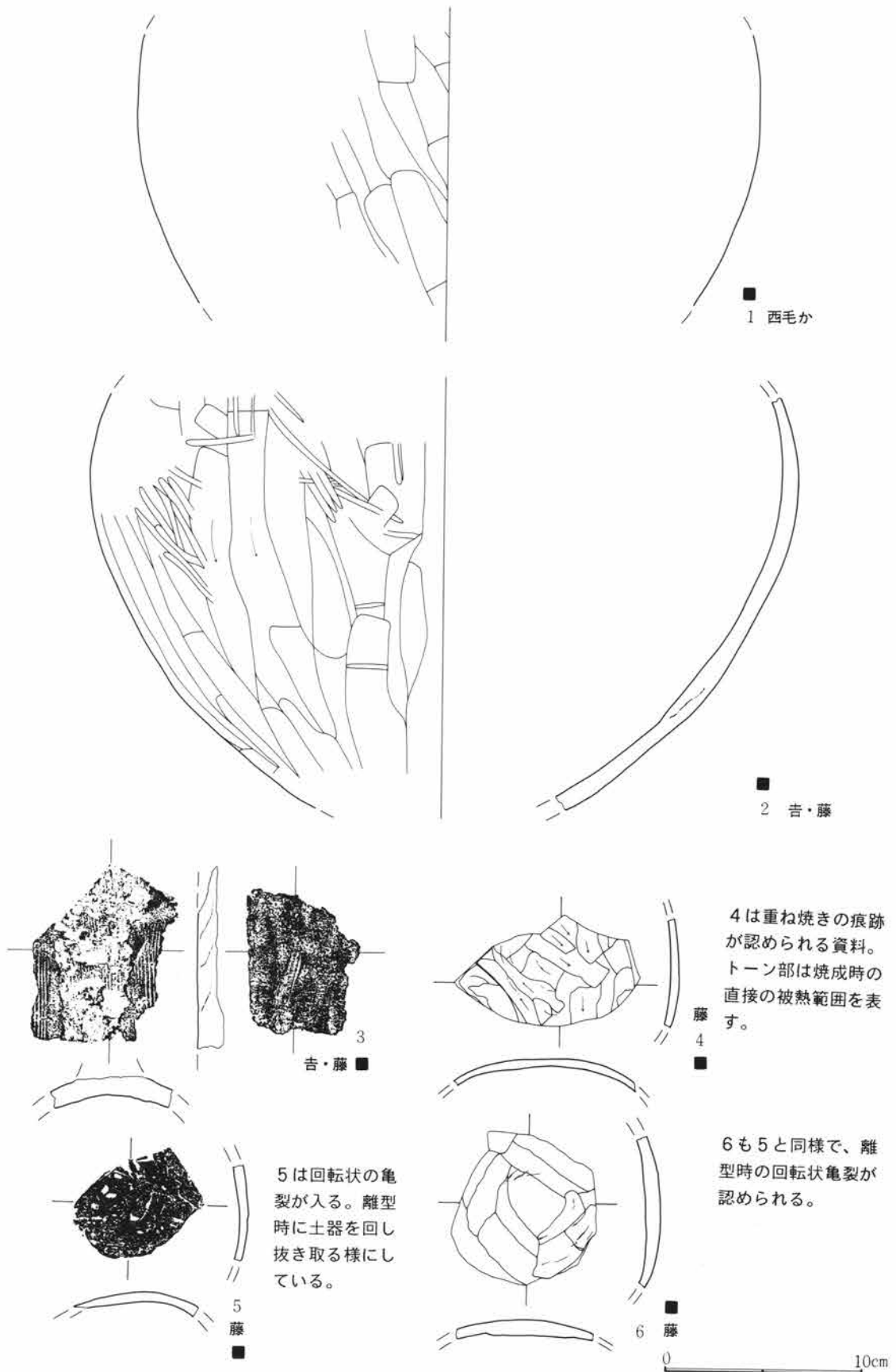
第75図 染谷川河川敷部第1号祭祀  
(暗灰褐色砂層) 出土土師器実測図(9)



第76図 染谷川河川敷部第1号祭祀（暗灰褐色砂層）出土土師器実測図（10）



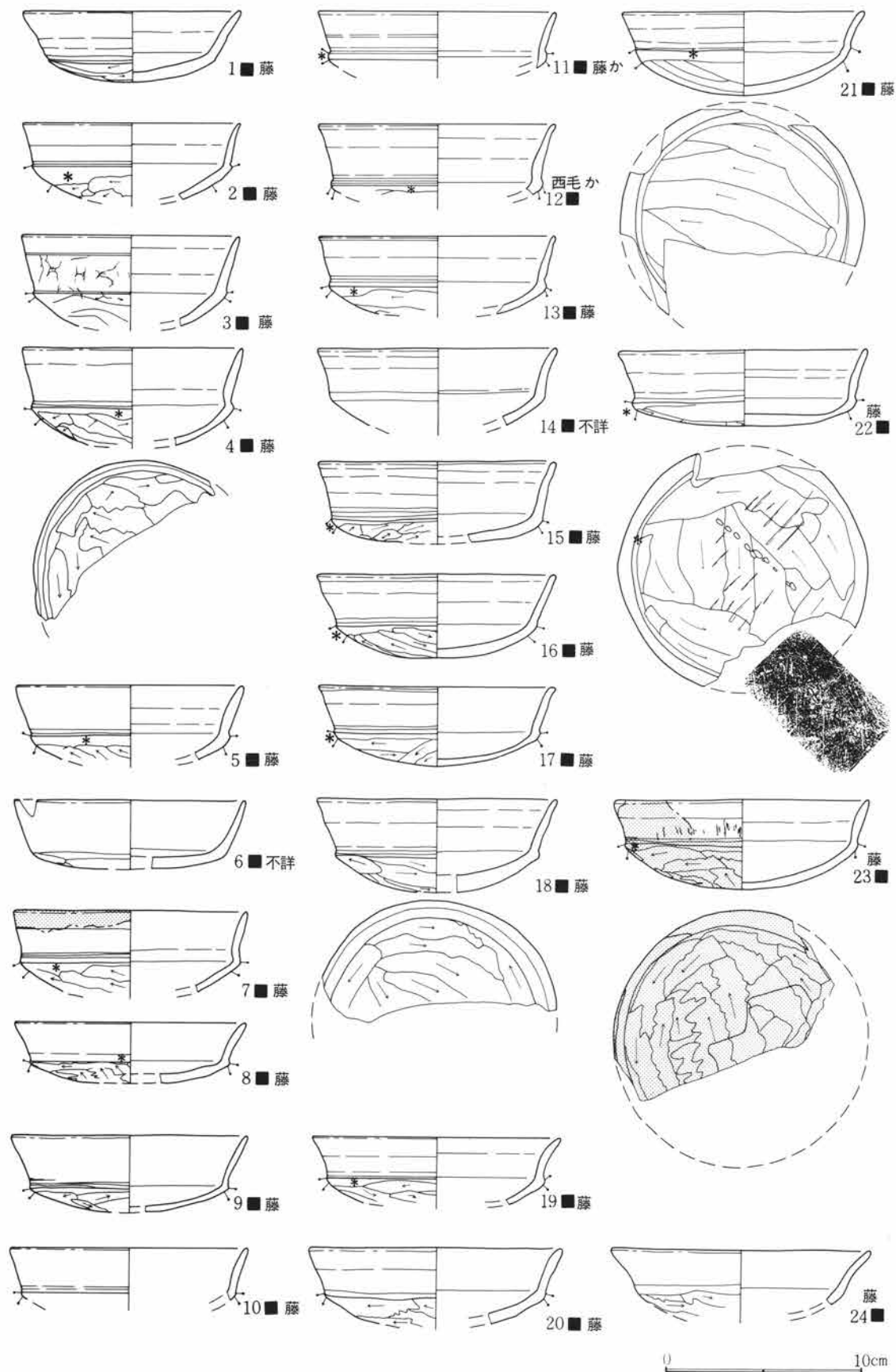
第77図 染谷川河川敷部第1号祭祀（暗灰褐色砂層）出土土師器実測図（11）



第78図 染谷川河川敷部第1号祭祀（暗灰褐色砂層）出土土師器実測図（12）

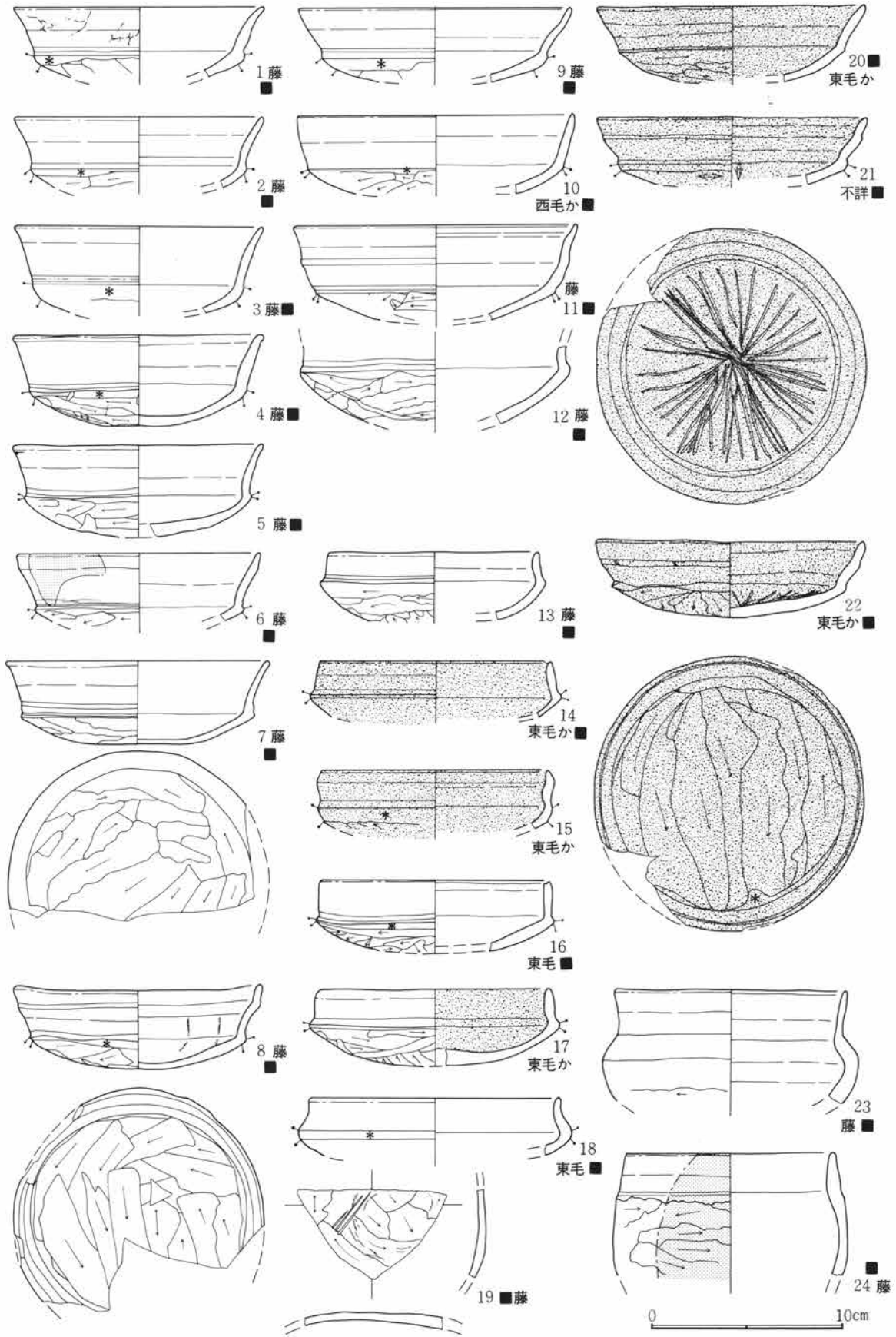


第4節 検出された遺構・遺物

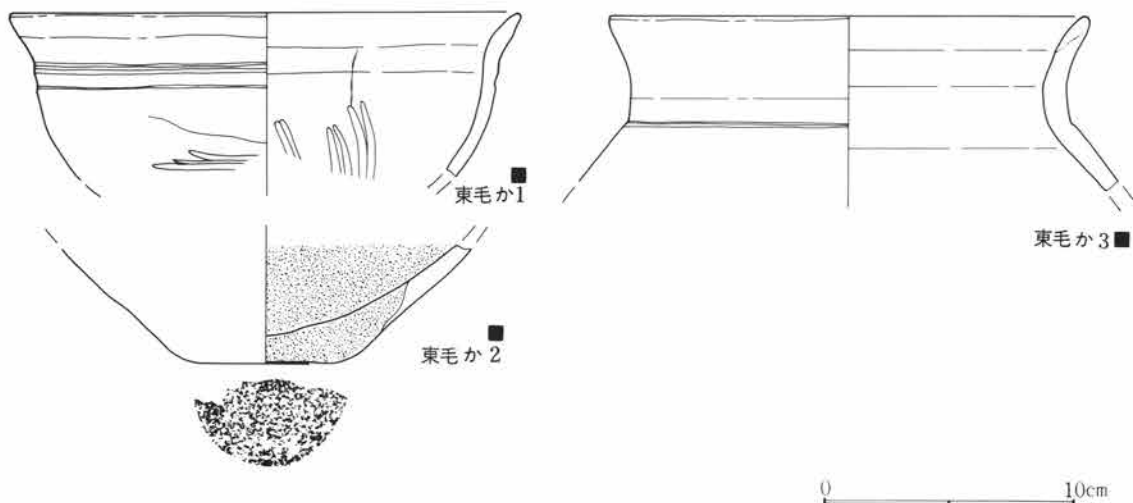


第79図 染谷川河川敷部第1号祭祀（暗灰褐色土層）出土土師器実測図（1）

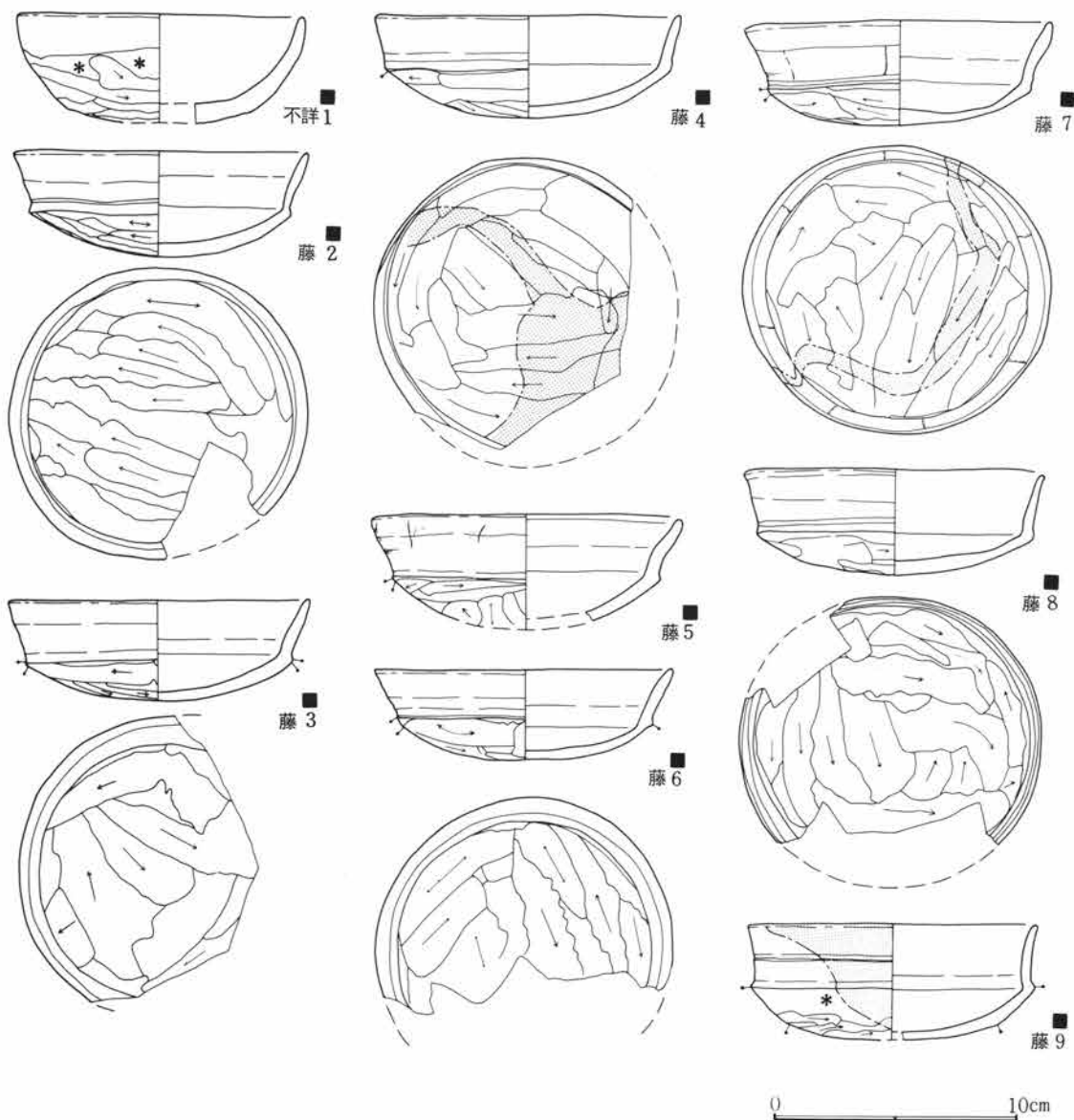
第4章 検出された遺構・遺物



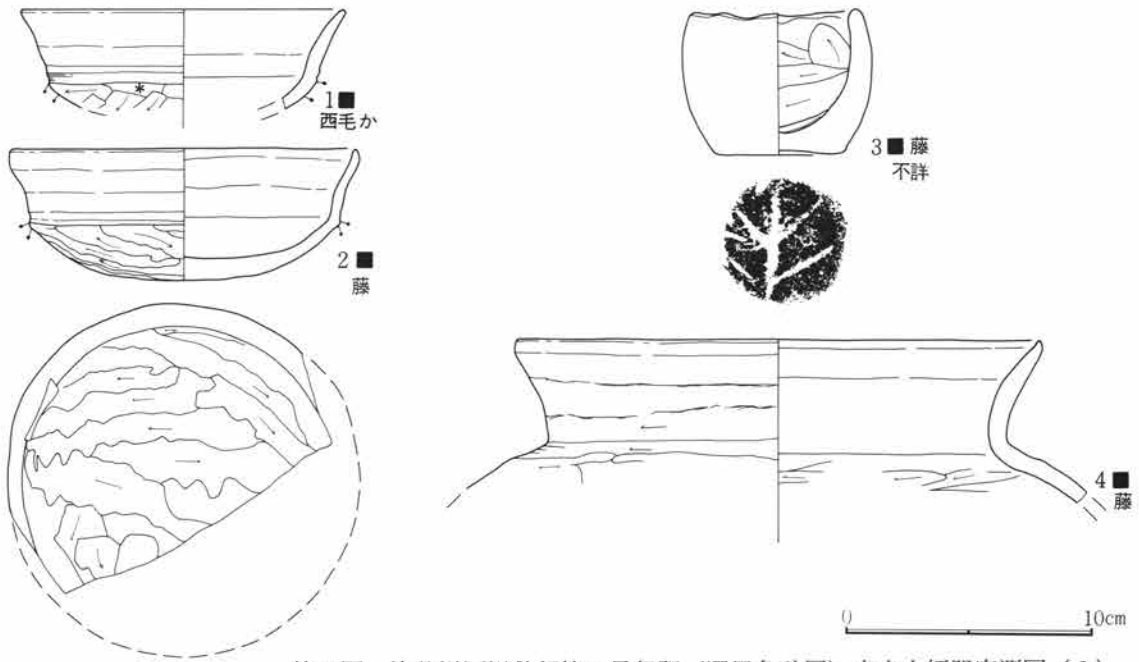
第80図 染谷川河川敷部第1号祭祀（暗灰褐色土層）出土土師器実測図（2）



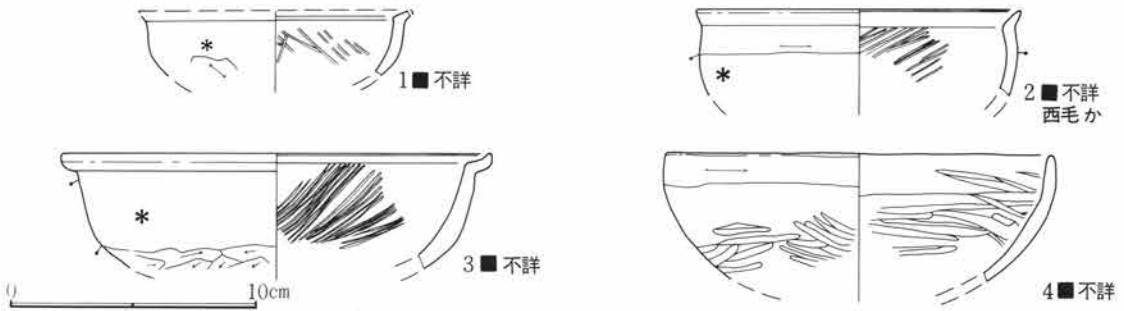
第81図 染谷川河川敷部第1号祭祀（暗灰褐色土層）出土土師器実測図（3）



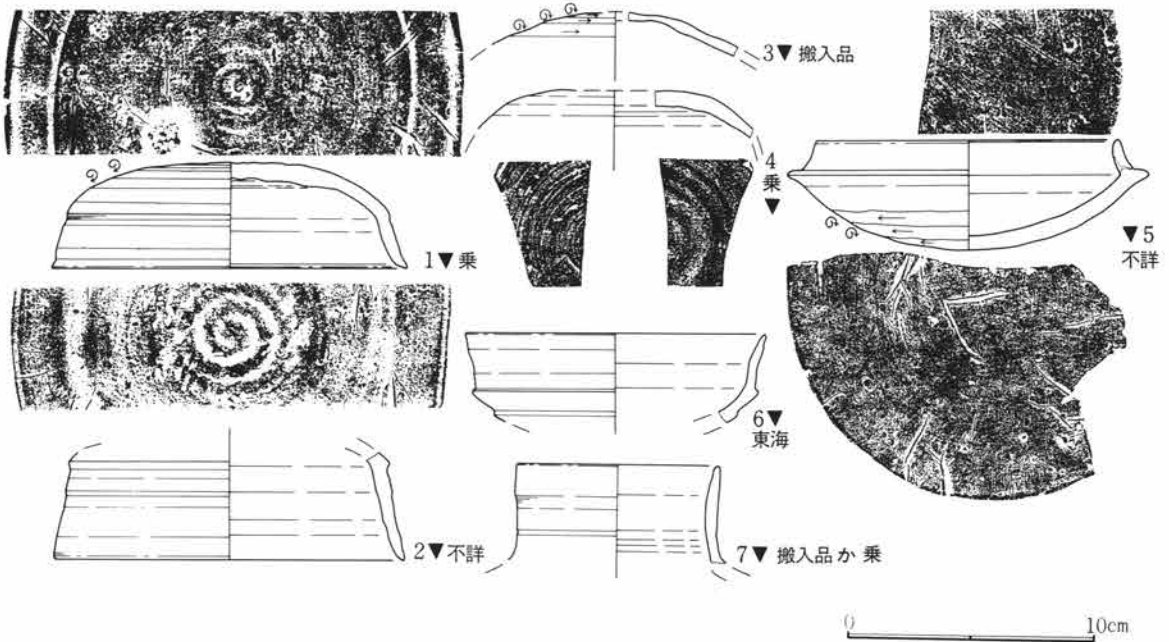
第82図 染谷川河川敷部第1号祭祀（濁黒色砂層）出土土師器実測図（1）



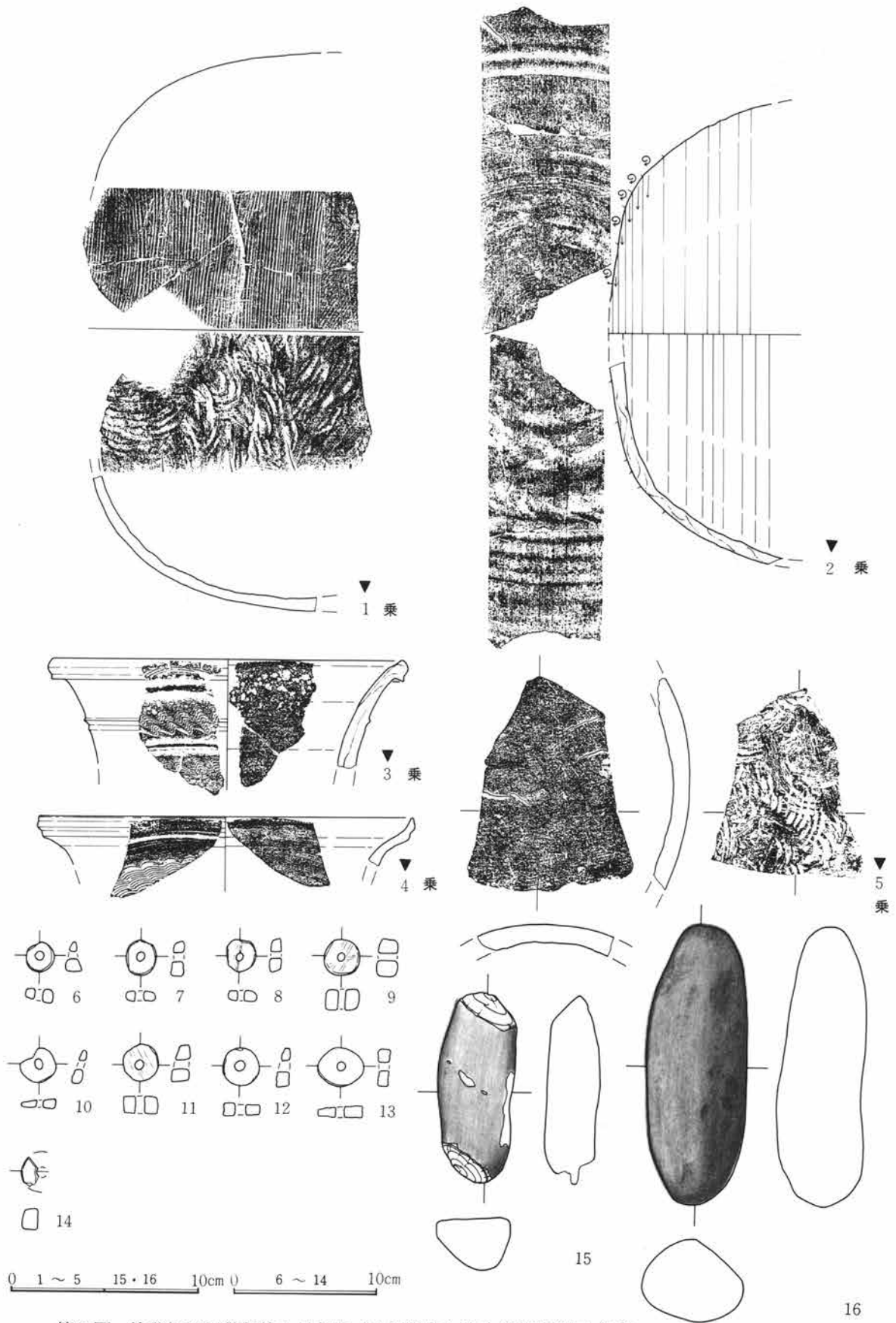
第83図 染谷川河川敷部第1号祭祀（濁黒色砂層）出土土師器実測図（2）



第84図 染谷川河川敷部第1号祭祀（土器溜り）出土遺物実測図（10）

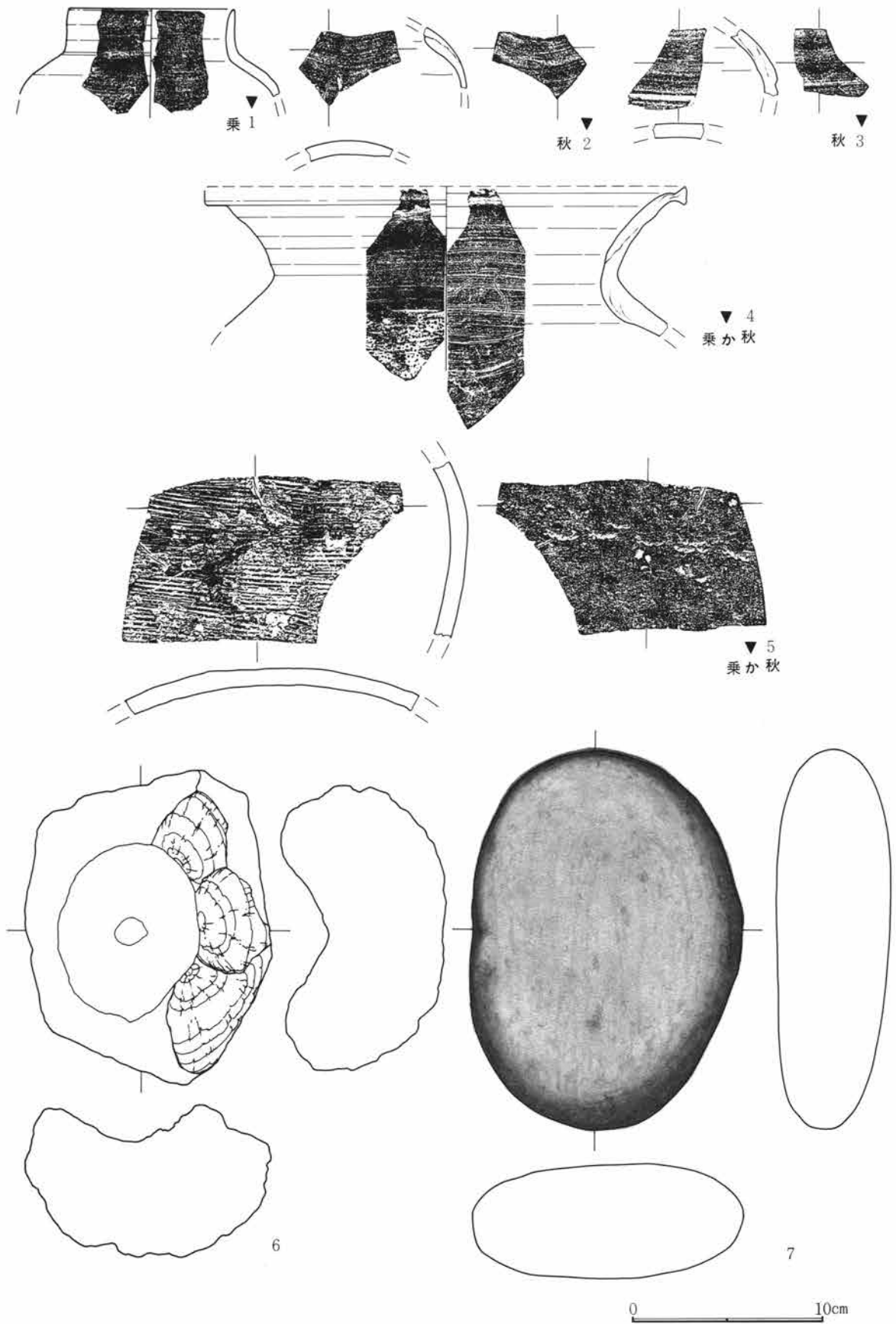


第85図 染谷川河川敷部第1号祭祀（土器溜り）出土須恵器実測図（11）



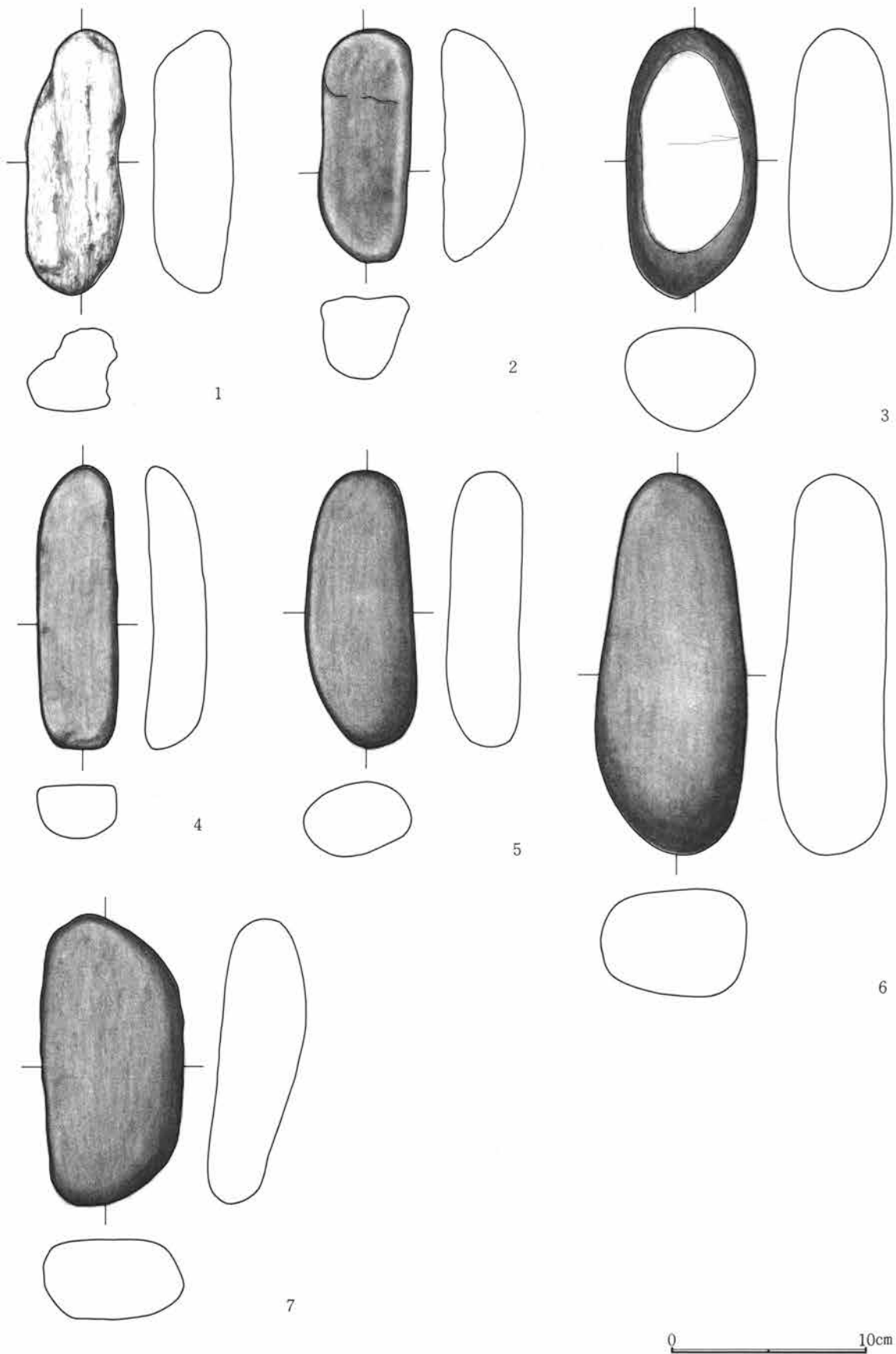
第86図 染谷川河川敷部第1号祭祀（土器溜り）出土遺物実測図（12）

第4章 検出された遺構・遺物

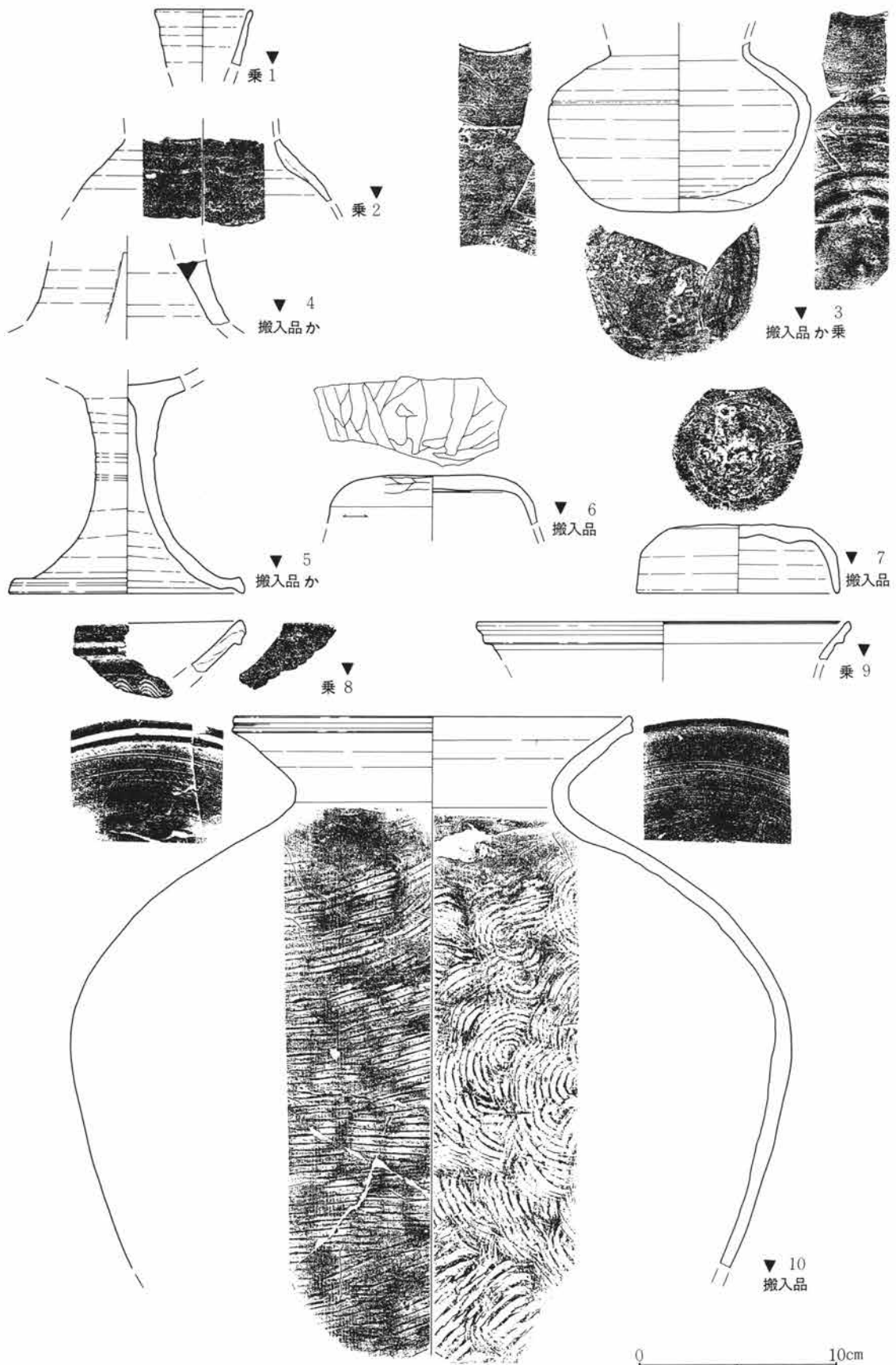


第87図 染谷川河川敷部第1号祭祀（石組部）出土遺物実測図（1）

第4節 検出された遺構・遺物



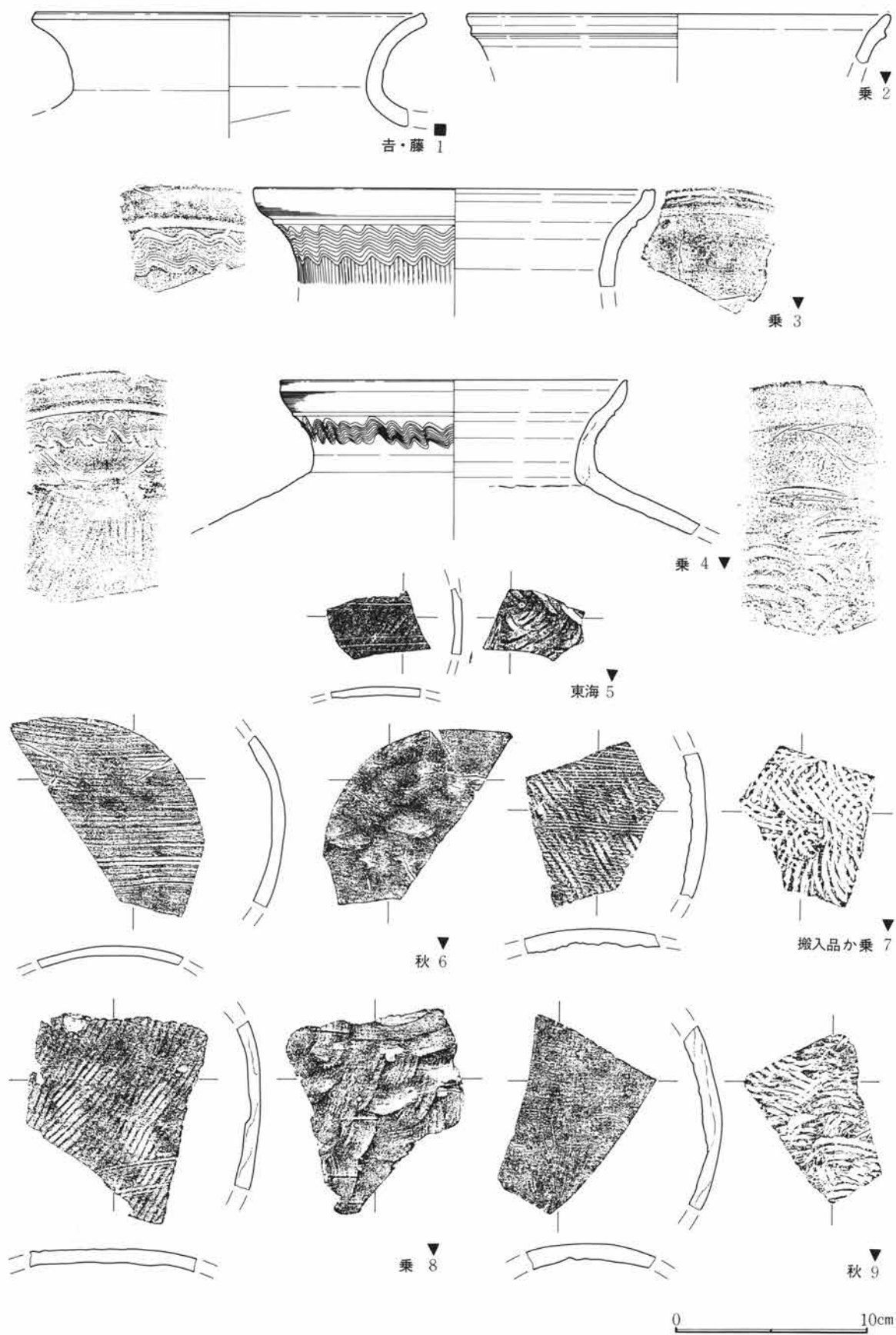
第88図 染谷川河川敷部第1号祭祀(石組部)出土遺物実測図(2)



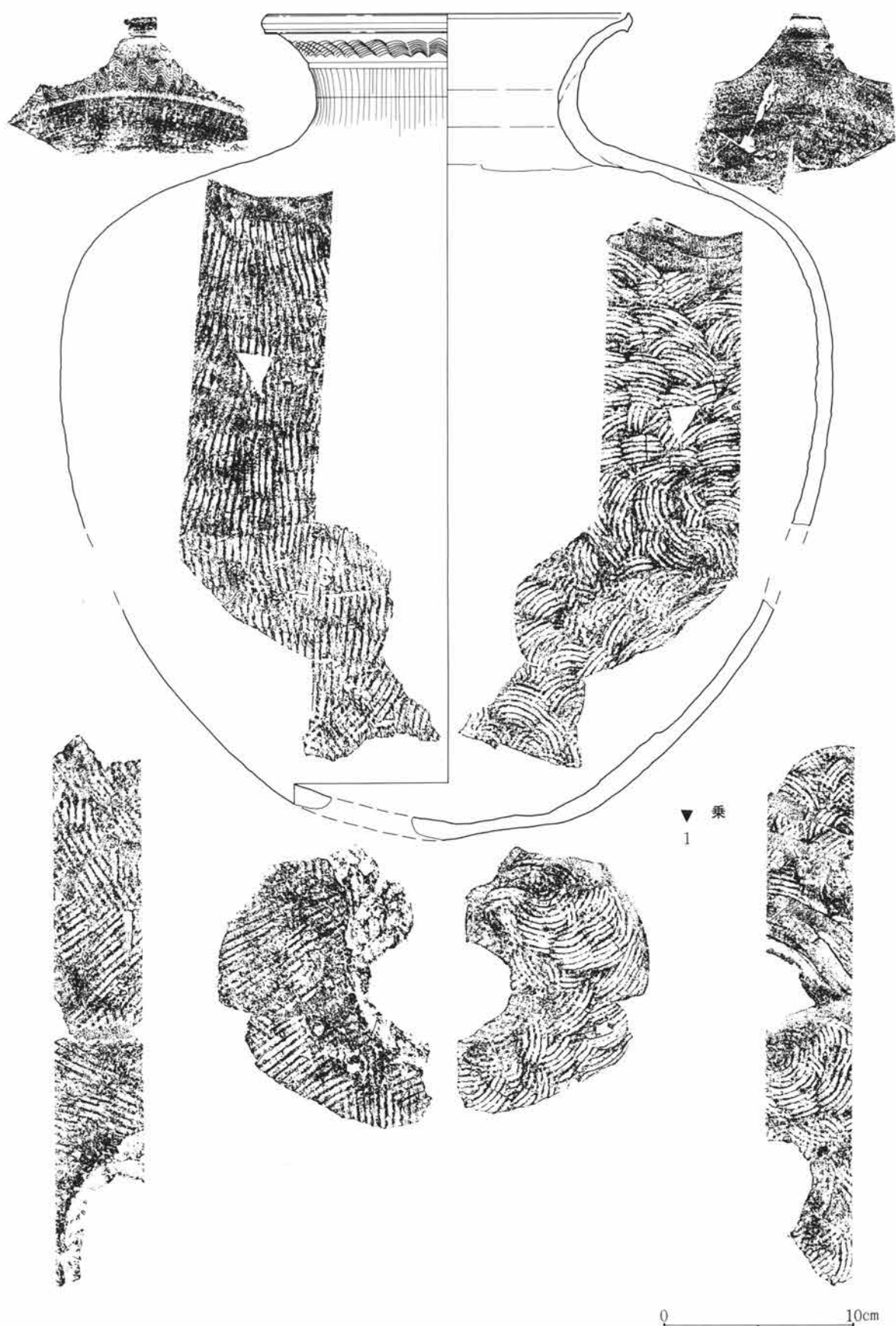
第89図 染谷川河川敷部第1号祭祀(暗灰褐色砂層)出土須恵器実測図(13)



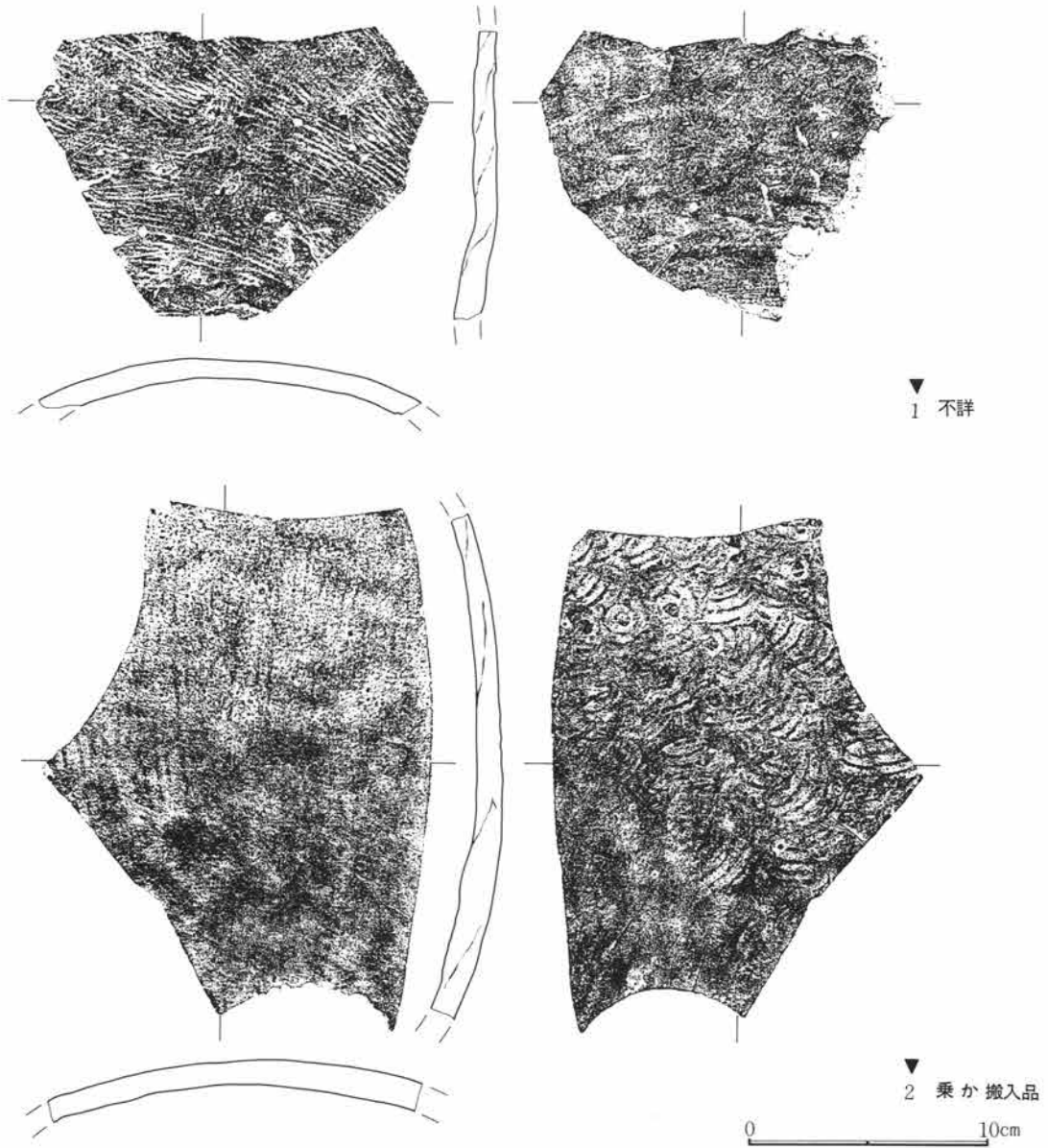
第4節 検出された遺構・遺物



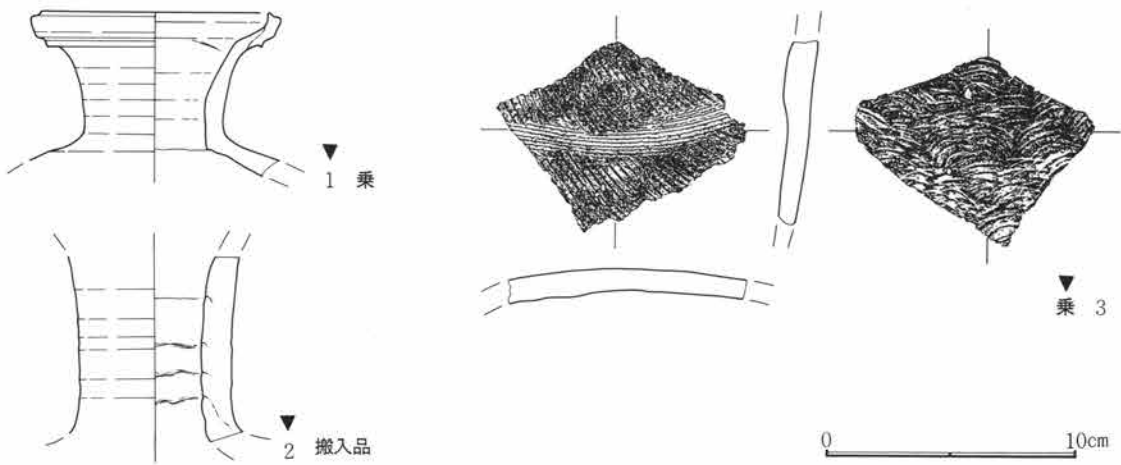
第90図 染谷川河川敷部第1号祭祀（暗灰褐色砂層）出土須恵器実測図（14）



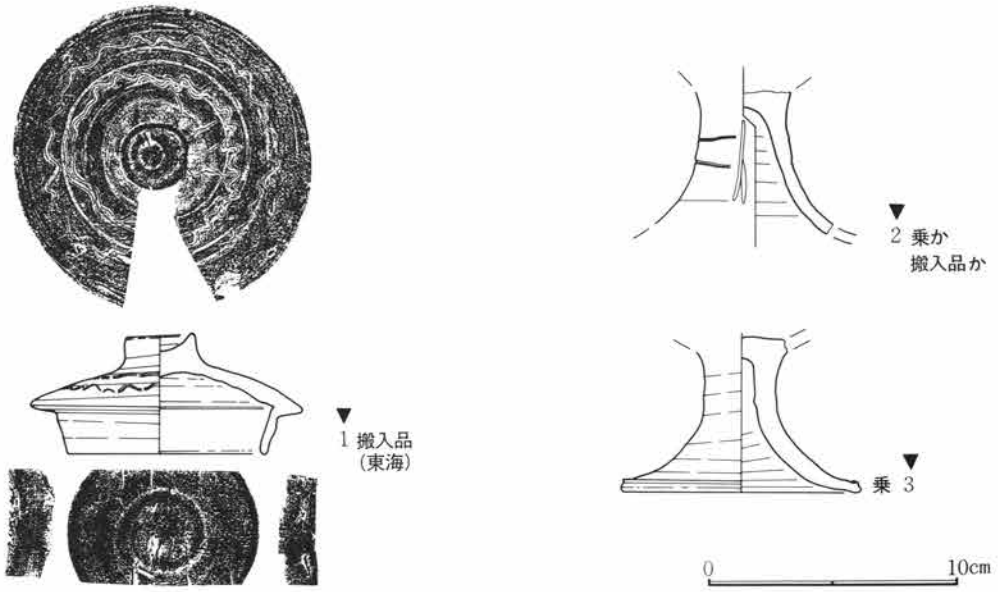
第91図 染谷川河川敷部第1号祭祀（暗灰褐色砂層）出土須恵器実測図（15）



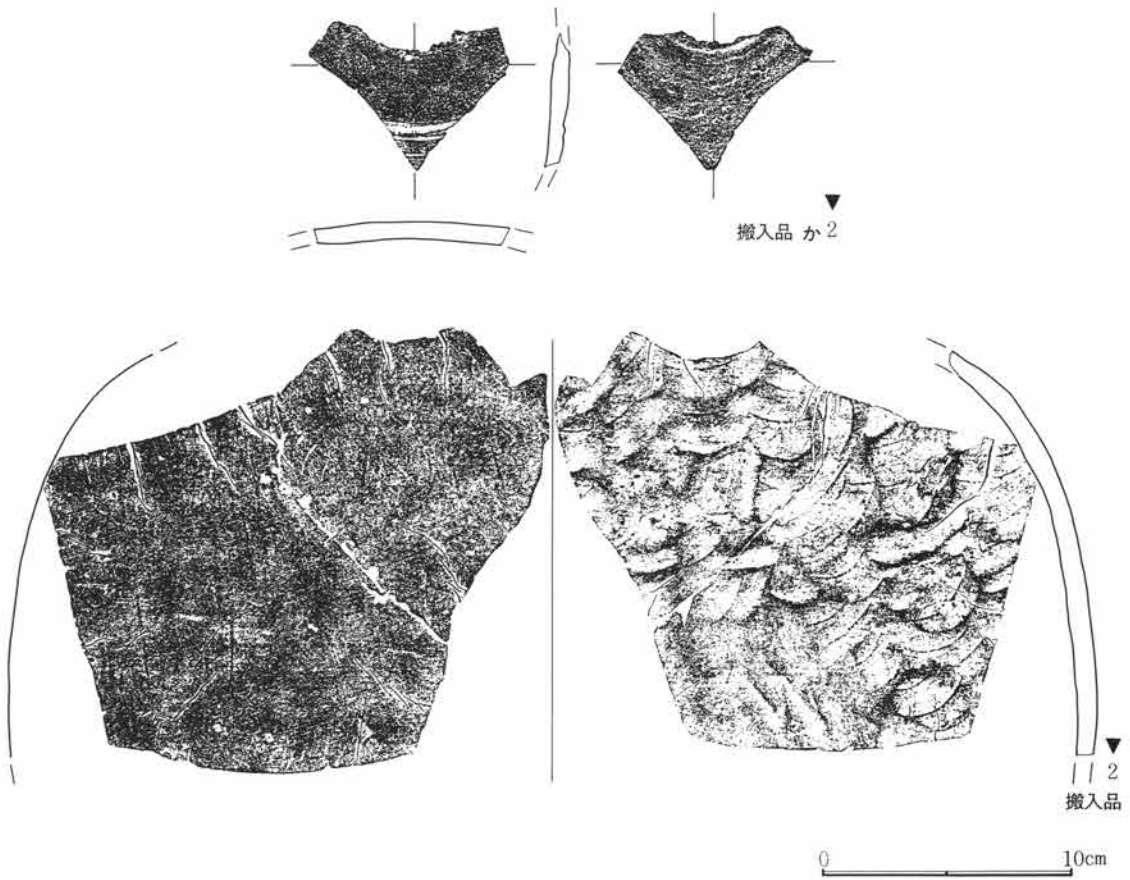
第92図 染谷川河川敷部第1号祭祀（暗灰褐色砂層）出土須恵器実測図（16）



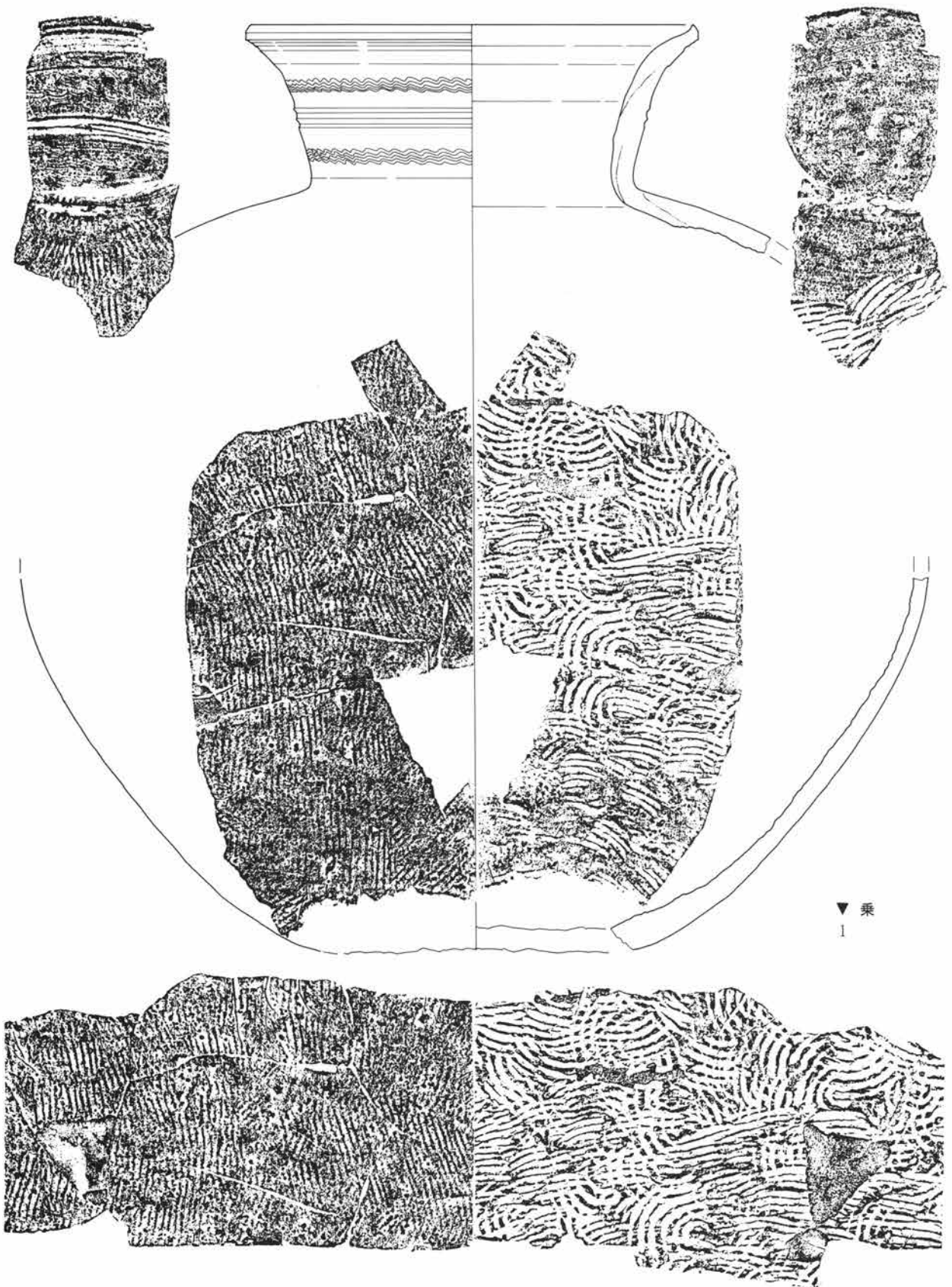
第93図 染谷川河川敷部第1号祭祀（暗灰褐色土層）出土須恵器実測図（4）



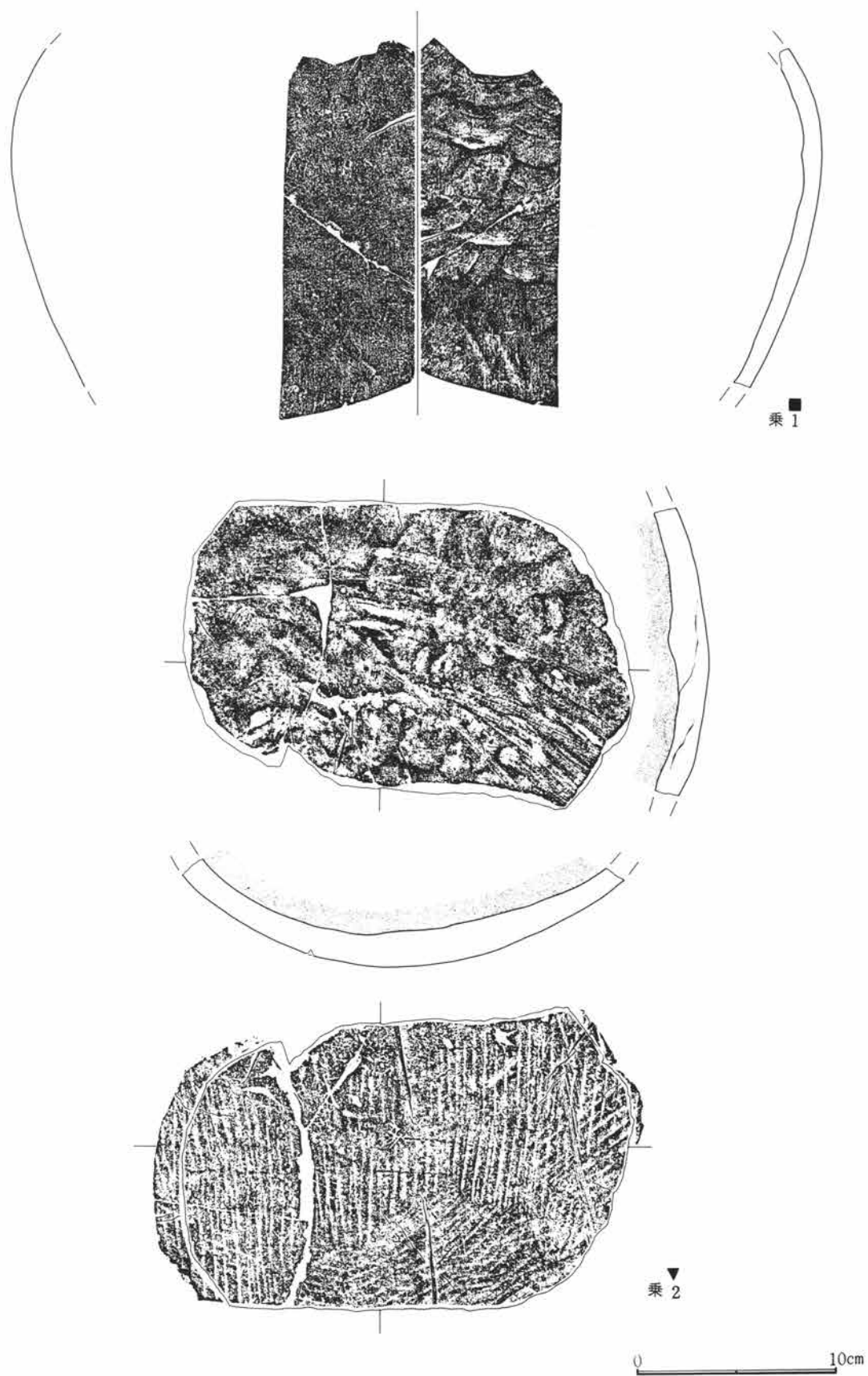
第94図 染谷川河川敷部第1号祭祀（濁黒色砂層）出土須恵器実測図（3）



第95図 染谷川河川敷部第1号祭祀（濁暗灰褐色砂層）出土須恵器実測図（1）



第96図 染谷川河川敷部第1号祭祀（黒褐色粘質土）出土須恵器実測図



第97図 染谷川河川敷部第1号祭祀（濁暗灰褐色砂層）出土須恵器実測図

### 土坑・落ち込み

染谷川河川敷部の検出遺構には、前述した3者の遺構とここで述べる土坑・落ち込みがある。この土坑・落ち込みも3区のある程度限定された地域内から検出されている。以下各土坑毎に記述する。

#### 染谷川河川敷部第1号土坑

当土坑は、台地の崖線直下で、階段状遺構の上端のテラス部の奥部で検出され、4・5—Y—15・16グリッド内に位置する。平面形状は、胴張りの方形状を呈するが、円形基調であったと考えられる。規模は長軸133cm・同直交軸で100cmを測り深度は-128cmを測る。北-100度-南を指す。覆土は、全体の発色が濁り、濁暗灰褐色を呈し、III乃至III'層を基調とするものとは異なっている。又、地山層（層序の特定は不能）の塊状のものが多く混入し、総体的に台地上（斜面上方向）からの堆積が顕著であった。この点は占地上での要因が考えられる。出土遺物は、土師器甕の胴部細片2点が出土したのみであった。このことから、所産時期は8世紀以降と考えられるものの、占地の要因上、9世紀代と想定されるところである。

#### 染谷川河川敷部第2号土坑

当土坑も崖線下のテラス状の“道”部の中央で検出され、8・9—Y—17・18グリッド内に位置する。平面形状は円形状を呈する。規模は80cm程である。覆土は、III'層を主体に地山土の塊状灰色土が混入する。出土遺物は、皆無であった。所産時期は、周辺の検出遺構の状態から9世紀頃と思われる。

#### 染谷川河川敷部第3・4号土坑

この両土坑は、第2号土坑同様にテラス部の中央で検出され、二基並んだ状態であった。位置は11~13—Y—21・22グリッド内に当たる。平面形状は双方共に円形で径100cm程を測る。覆土は第2号土坑と同様であった。出土遺物は双方共に皆無であった。

#### 染谷川河川敷部第5号土坑

当跡は、調査時土坑としたが、倒木痕状の浅い落ち込みであった。

#### 染谷川河川敷部第6号土坑

当土坑は、階段遺構の上端部で検出された。位置は3・4—Y—16・17グリッド内に位置する。平面形状は隅丸長方形を呈する。規模は主軸長220cm、同直交軸73cm、最深々度-54cmを測る。覆土は、底面にIII'層土と同質の堆積が層厚10cm程で認められ、直上に、B軽石ユニット層の堆積が認められた。B軽石ユニット層が遺構の埋没過程で堆積した例としては当遺跡唯一のものであるが、断面自体、調査の不手際で測図・写真撮影が出来なかった。出土遺物は皆無であった。

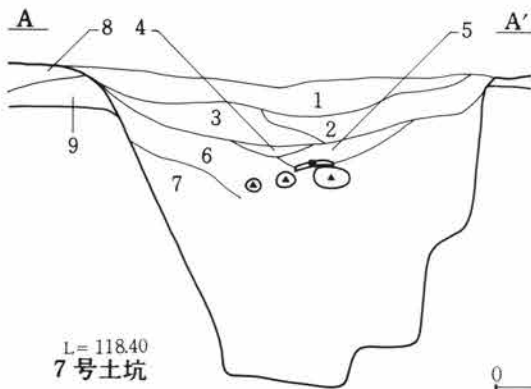
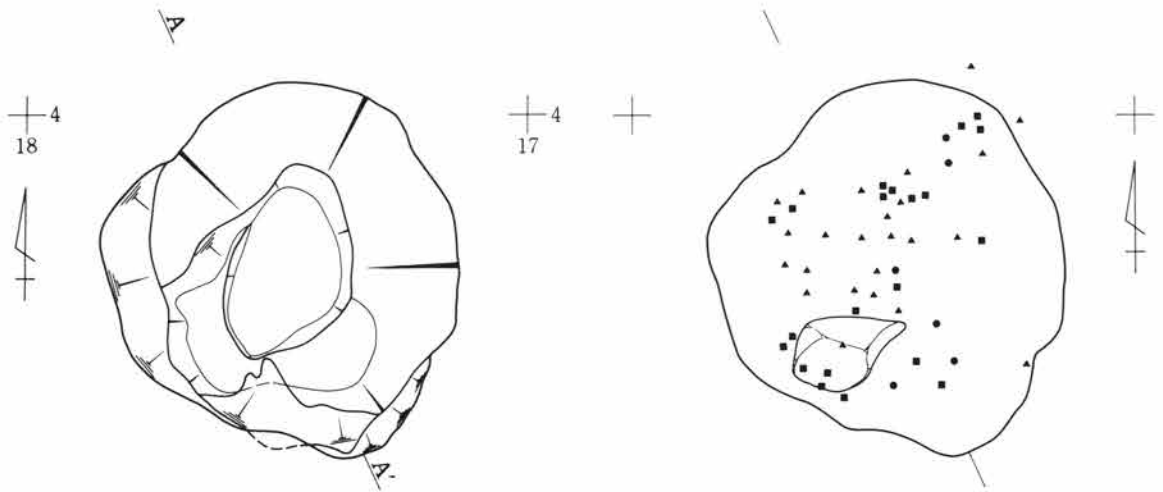
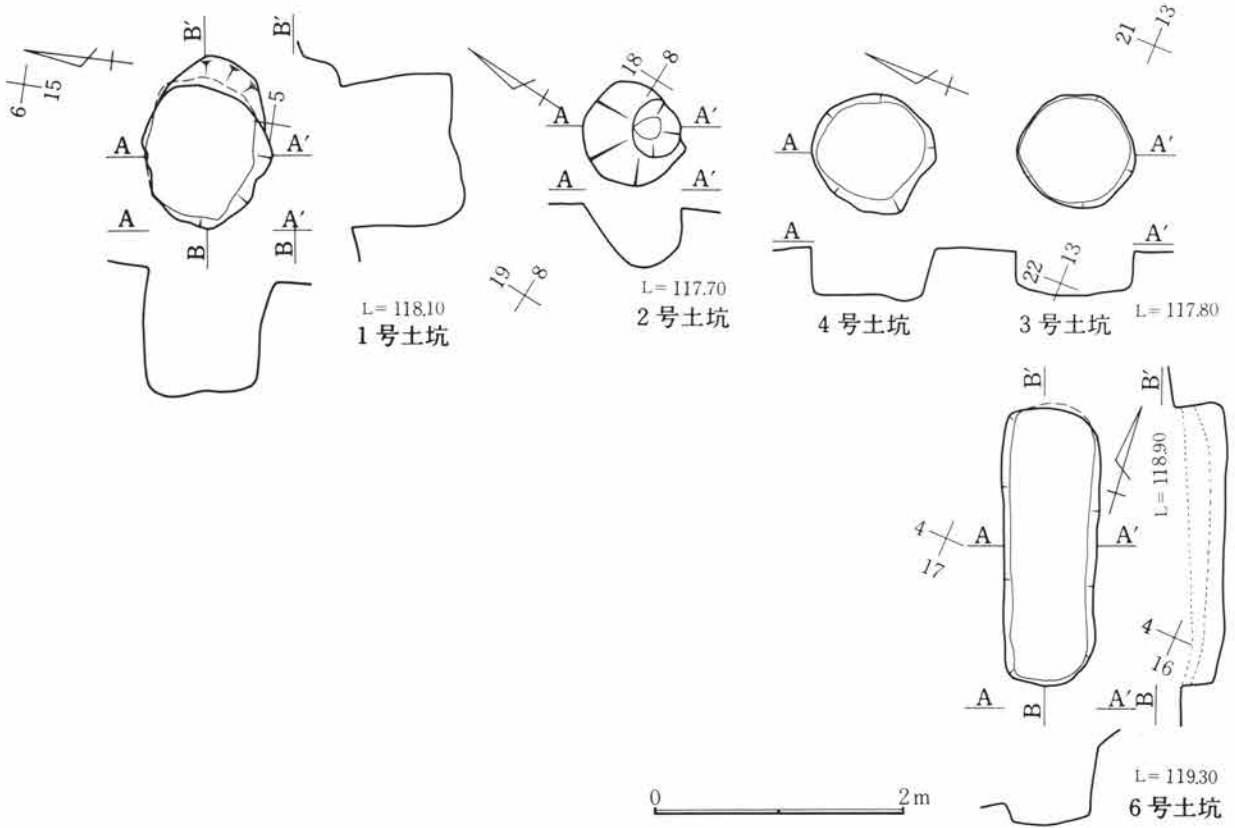
#### 染谷川河川敷部第7号土坑

当土坑は階段部の下半部で検出された、位置は3・4—Y—18グリッドに位置する。平面形状は、不整円形状を呈する。規模は径140cm程で深度は120cm程である。状態は、南側が2段のテラスを備えているが、形状の均整はない。覆土は、全体的に均一な堆積では無く、色調の発色が異なる土により埋没していた。出土遺物は比較的多く、土器類・瓦種・礫が覆土上層で出土した（第99・100図）。土坑の所産時期は、出土した遺物（第99図-1）は、D区の第二段階に対比されることから、下限として10世紀後半が考えられる。

#### 染谷川河川敷部3区落ち込み

当落ち込みは調査途上で確認された為、全容は不明である。位置は3~5—Y—16~18グリッド内に位置する。層位は第7図上段6層である。出土遺物は土器類（第101図）があり、所産時期は8世紀前半頃と考えられる。

第4章 検出された遺構・遺物

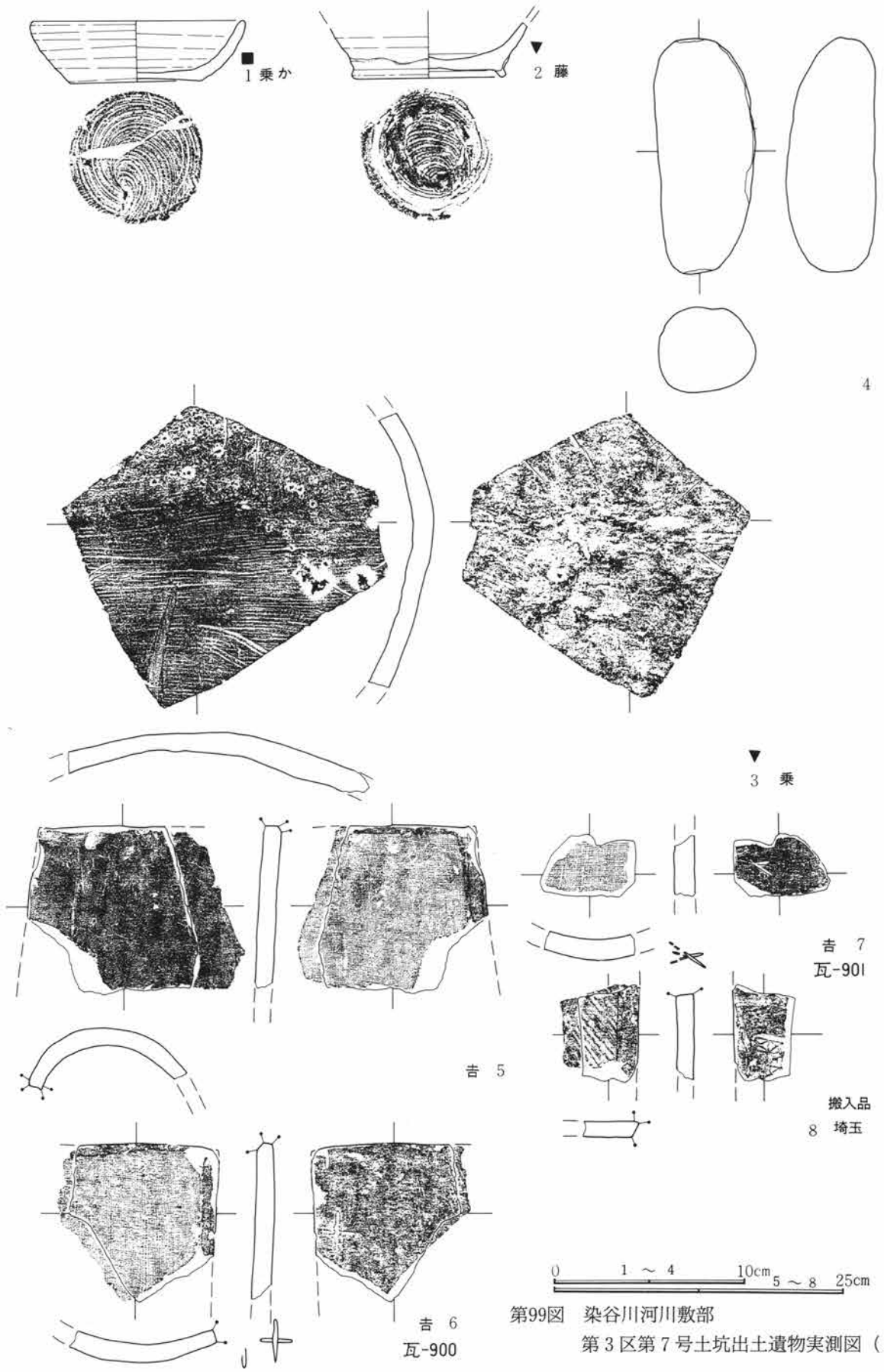


染谷川河川敷2区7号土 層序  
 層序 L=117.00m  
 1. 濁暗灰褐色粗粒土 2. 濁灰褐色土 3. 水性堆積砂層  
 4. 灰橙褐色微粒シルト層 5. 4近質。 6. 3同質。  
 7. 濁暗灰褐色土 8. 1近質。 9. 濁褐色砂質土

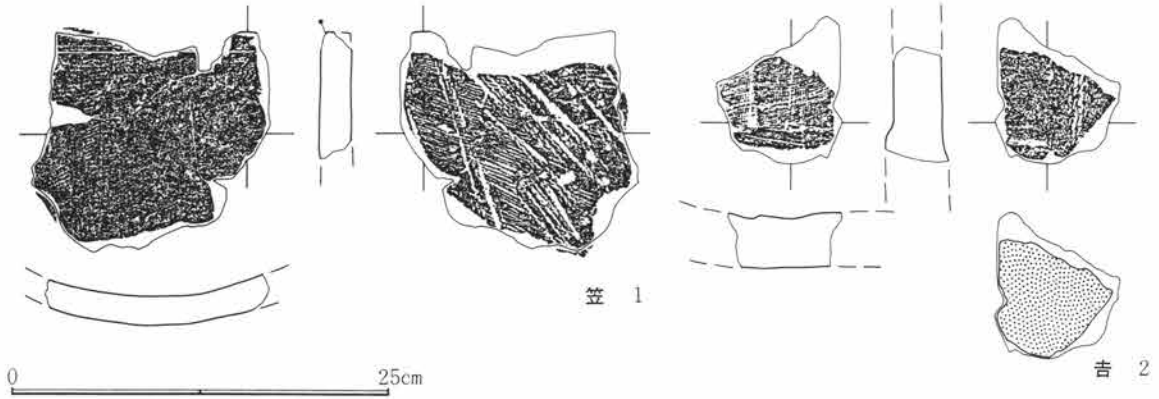
第98図 染谷川河川敷部検出土坑実測図



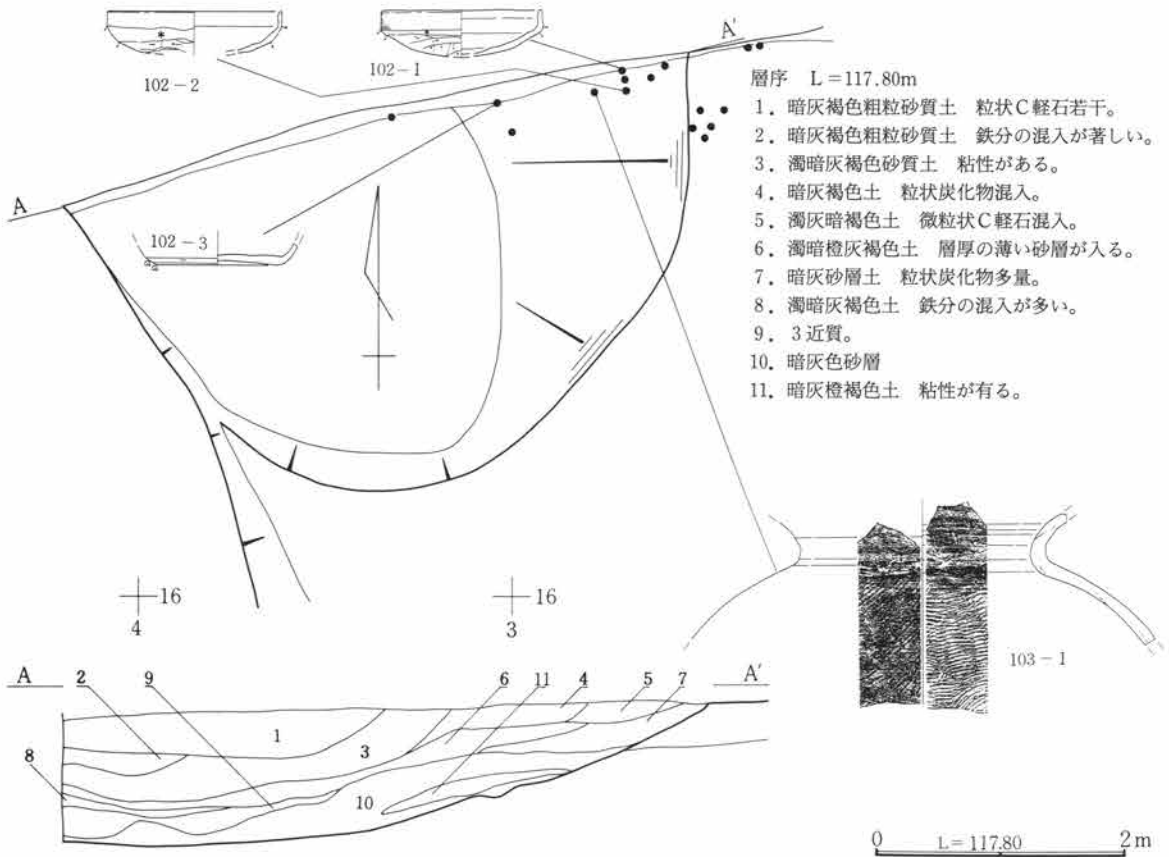
第4節 検出された遺構・遺物



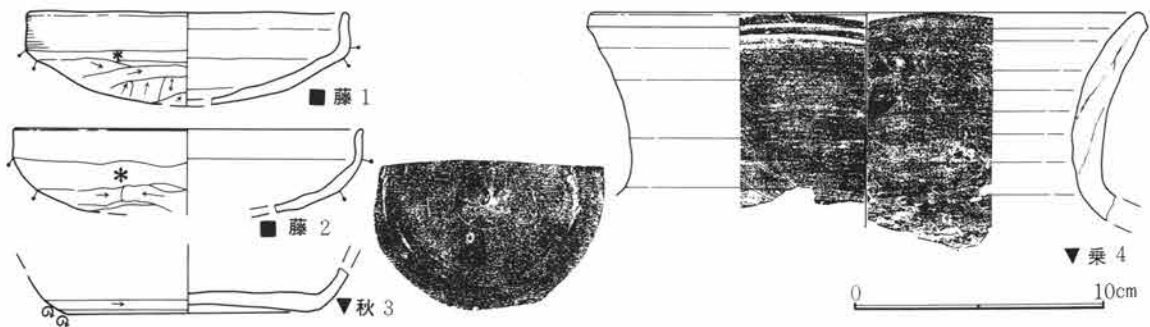
第99図 染谷川河川敷部  
第3区第7号土坑出土遺物実測図(1)



第100図 染谷川河川敷部第3区第7号土坑出土遺物実測図(2)

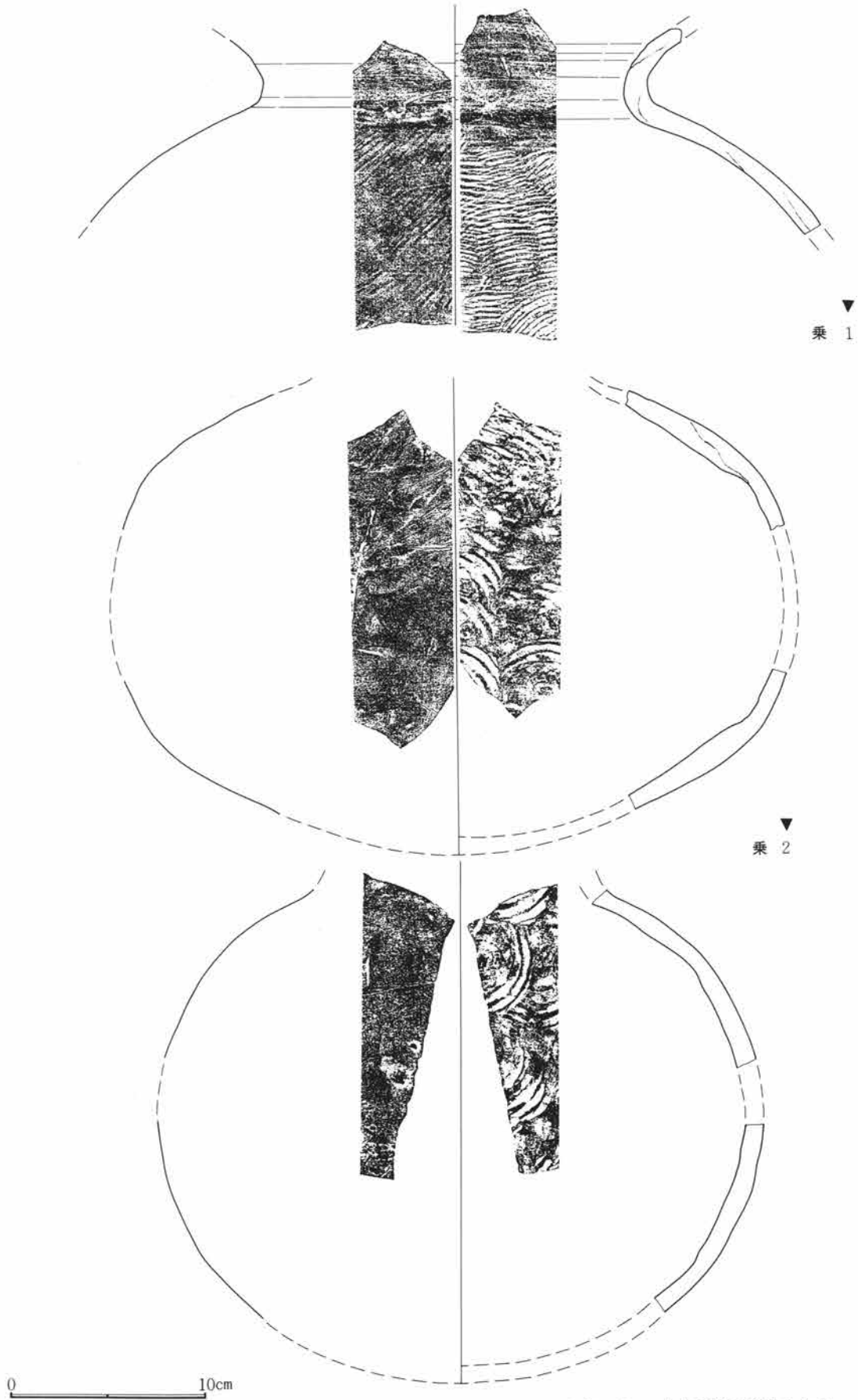


第101図 染谷川河川敷部第3区検出落ち込み平・断面実測図



第102図 染谷川河川敷部第3区検出落ち込み出土遺物実測図(1)

第4節 検出された遺構・遺物



第103図 染谷川河川敷部第3区検出落ち込み出土遺物実測図(2)

### 文化層の出土遺物

文化層の出土遺物は、第7図のB軽層以下の層位で、出土層位がある程度明らかな遺物であるが、後出する遺構外としたIII'層出土遺物は、明確な層位が把握出来なかった一群である為両者を区分した。

文化層は、B軽石以下の堆積土とした。表土層中等の出土遺物は、遺構外扱いとなっている。文化層は、各地区・地点で発色を含め混入物の異なる場合が多く、逆に、染谷川河川敷部の土壤堆積が複雑であったことを意味している。然し、第6図に図示した如く、台地上の堆積層位と染谷川河川敷部での堆積には、基本的な層位の不整合等の状況は無い。このことは、染谷川河川敷部に於ける堆積は、大半が風化作用により、台地上を含めた、周辺地域からの再堆積土としての土壤であると考えられる。この周辺地域からの風化作用による堆積とした場合、周辺地域の浸蝕が進行したことが類推され、各文化層自体の層厚は、文化層が示す時期に周辺地域の浸蝕が進んだことを示している。唯、自然条件を考慮せねばならないが、現状の当該地域の気候は、冬期から春期にかけての季節風が強い自然条件と、夏期の台風等の自然条件等、古代に於いても大きな相違はなかったと想定される。いずれにしても、自然の作用が土砂運搬の要因であろう。

### 各層出土の遺物

文化層出土とした遺物の出土層名は、暗濁黒褐色粘質土・暗灰褐色土・暗灰褐色砂層・濁灰褐色粗粒土・濁黒褐色粘質土・2区セクションベルトカーボン層（第6図上段6層）である。これらの層位の内、2区セクションベルトカーボン層出土のものを除く他の層は、14層～17層に至る間での部分的な色調層名である。この14層～17層という土層は、下位の17層が、2区土器溜りの被覆土層でもあり、直上に相当する14～16層土中には、比較的多くの土器溜りの時期の遺物が混入している。そして、同14～16層中には、17層中では礫と認められなかった、8世紀代の遺物が多く混入している。この点が、17層上面位を境として奈良時代とそれ以前を分別出来る層序関係と判断出来る。

又、第6図上段の8層はEA層を切り何らかの施設を造成した痕跡が認められる。この造成跡は、試掘調査時のFAを切る溝状遺構としたものと考えられるが、その平面露呈は出来なかった。この造成跡と同様な痕跡が、第6図下段の土層断面中で顕著に認められる。これを色別したのが各トーンによる表具部分である。この造成は大きく5回の痕跡が認められる。そして、最古の造成は、2区石組み・土器溜りによる祭祀段階である。この祭祀段階は、祭祀施設を施ける直前と考えられる。これは、FA直上層の（第6図下段17層）と18層直上の火山灰層を切る状態であり、土器溜りの土器が、17層土中に混在する状況から推定出来る。

更に、第6図下段の2、4層土も、下位面の堆積土を削平して平坦面を造成している。この面が3区1号井戸跡の段階と考えられる。これは、3区第1号井戸跡の生活面との標高位から推定される。この様に、削平と造成により造られた削平面に堆積した土層を一つの層群として捉えることが出来る。

そして、第6図下段の層群を1層と第1層群、2・4を第2層群、3層を第3層群、6・7層を第4層群、5・8～10・12～14層を第5層群、14～16層を第6層群、17層を第7層群として名称を与えておきたい。

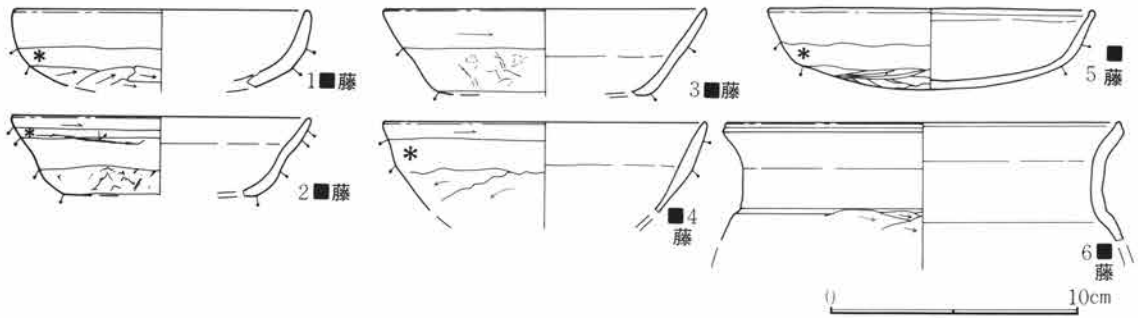
### 第1層群以前の火山灰層

火山灰層は文化層とは異なるが、本項で若干の説明を加えておきたい。

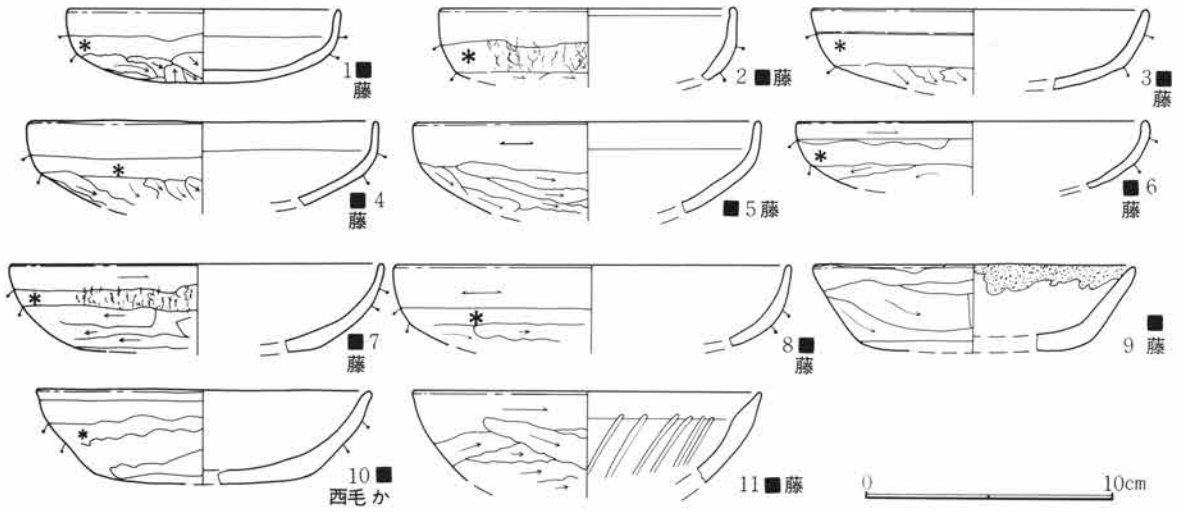
火山灰層は、FA層が顕著な状態で堆積している。層厚は約17cm程度であり色調は、黄褐色の部分と青灰色の二者があり、上位（崖線下端側に寄って）では黄褐色を呈して、下位になるにつれて灰色化が認められる。そして、標高116.5mあたりで完全に青灰色に変化している。この発色は環化作用と考えられる。

FA直上層（第6図下段）の上面には1cm内外の層厚の薄い灰色火山灰が2層を有して堆積している。当時新井房夫先生に鑑定願ったが、恐らく榛名山給源のものとしか判らなかつた（口絵参照）。

第4節 検出された遺構・遺物



第104図 染谷川河川敷部第3区第1号集石出土遺物実測図（追補）



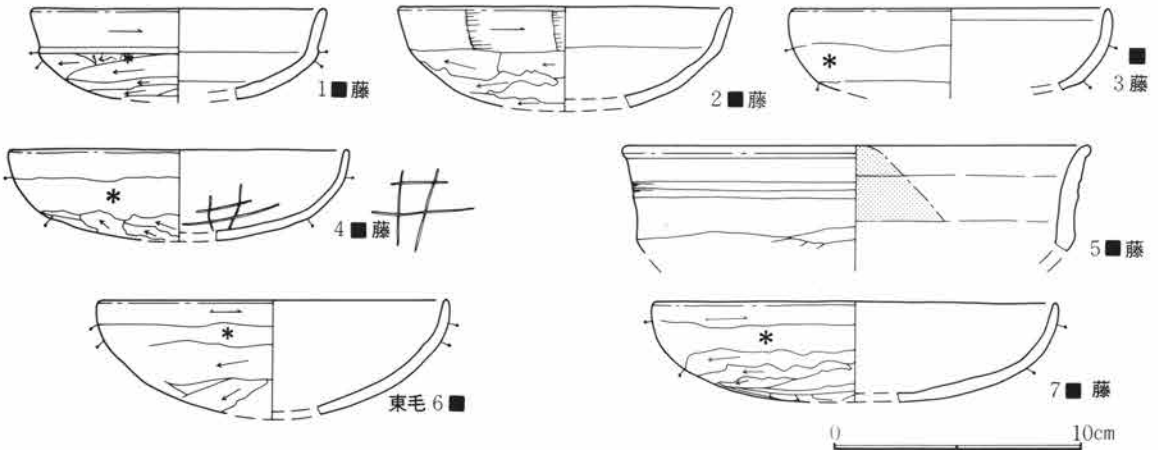
第105図 染谷川河川敷部第3区第1号井戸周辺砂層出土遺物実測図（追補）



第106図 染谷川河川敷部第3区階段状遺構出土遺物実測図（追補）

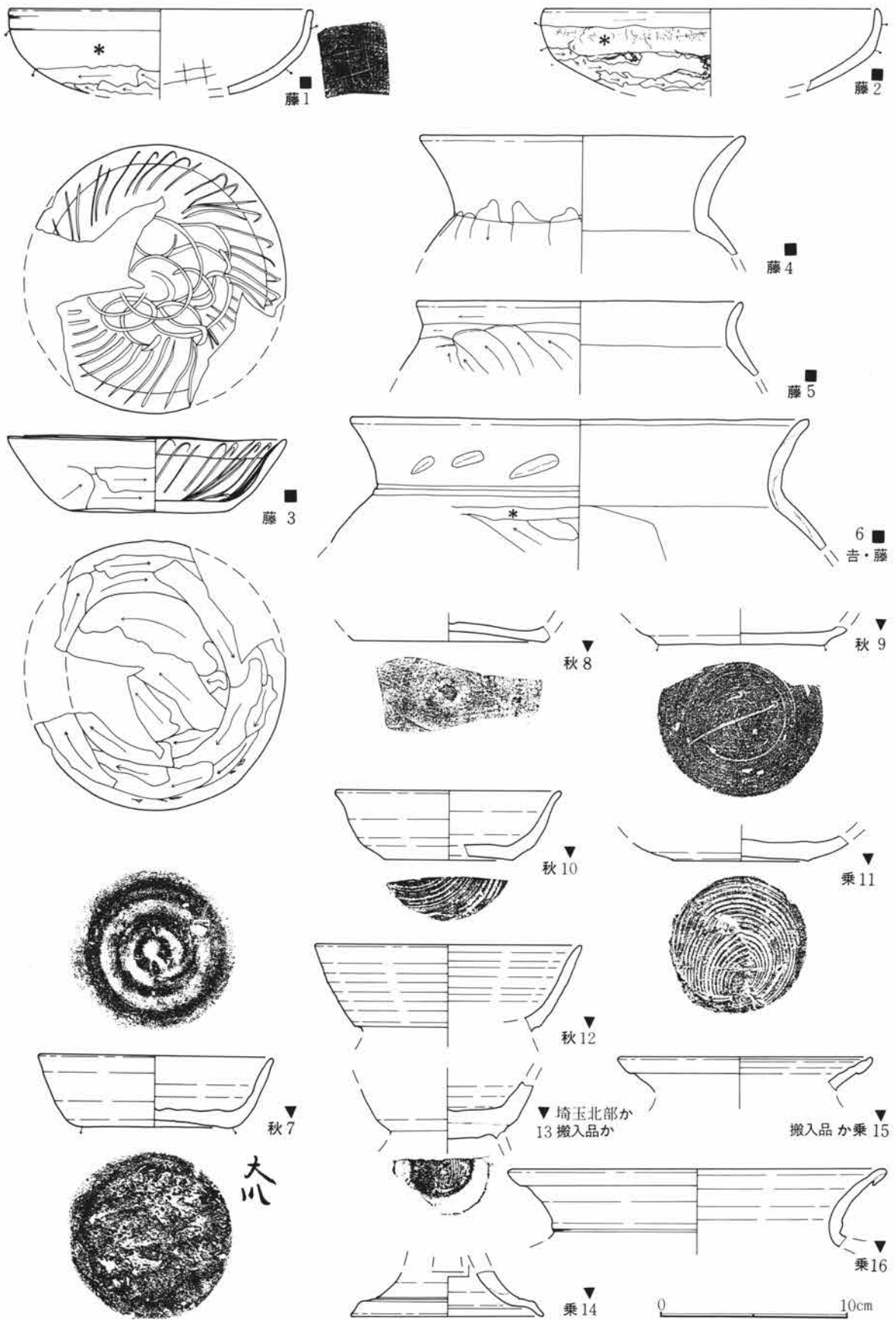


第107図 染谷川河川敷部第2区土器溜り出土土師器実測図（追補）

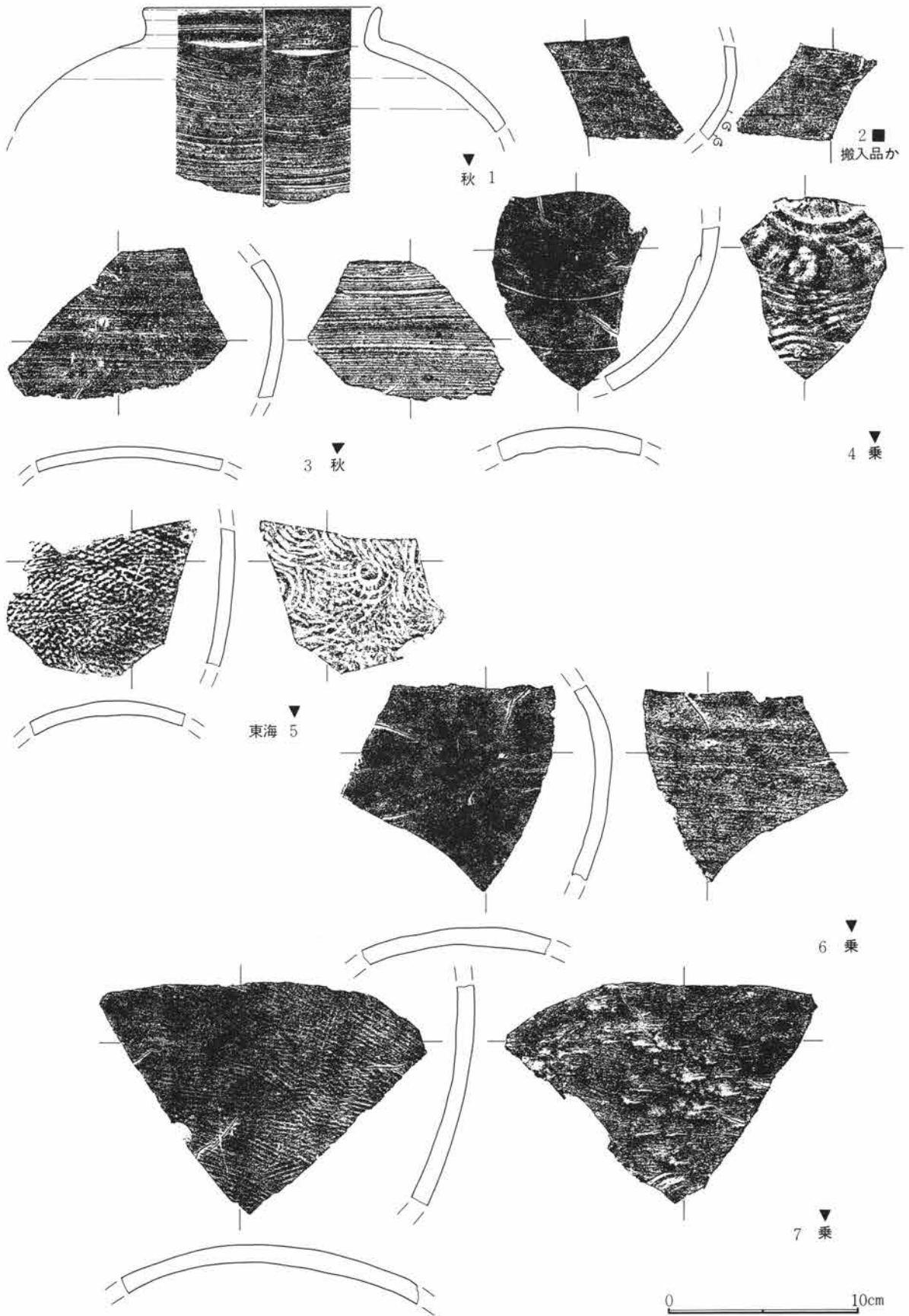


第108図 染谷川河川敷部第2・3区暗濁黒褐色粘質土出土遺物実測図（1）

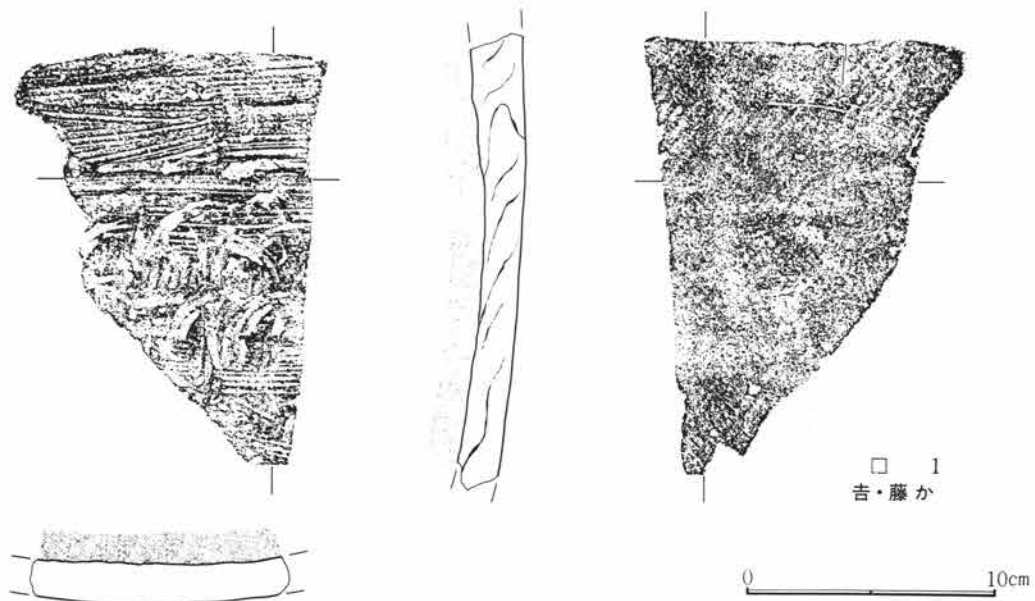
第4章 検出された遺構・遺物



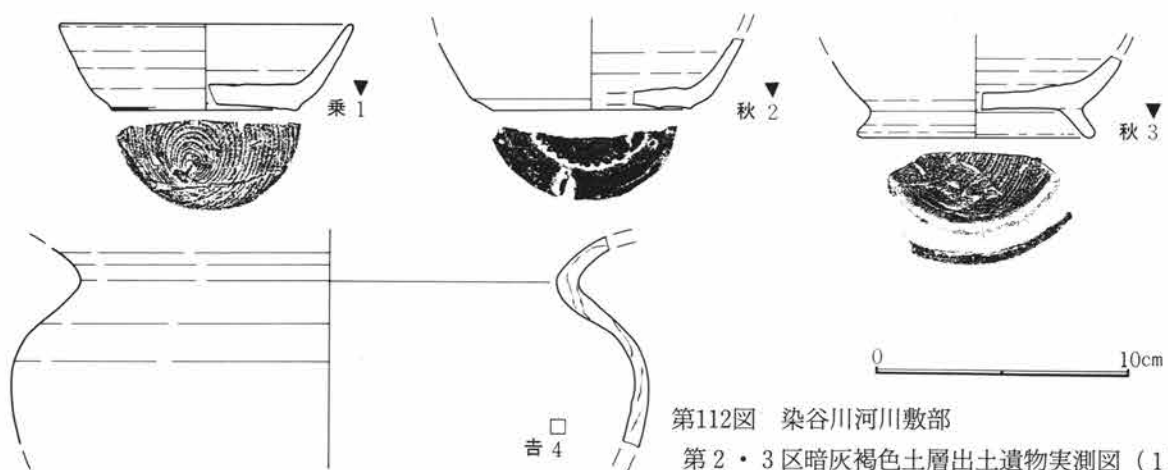
第109図 染谷川河川敷部第2・3区暗濁黒褐色粘質土出土遺物実測図(2)



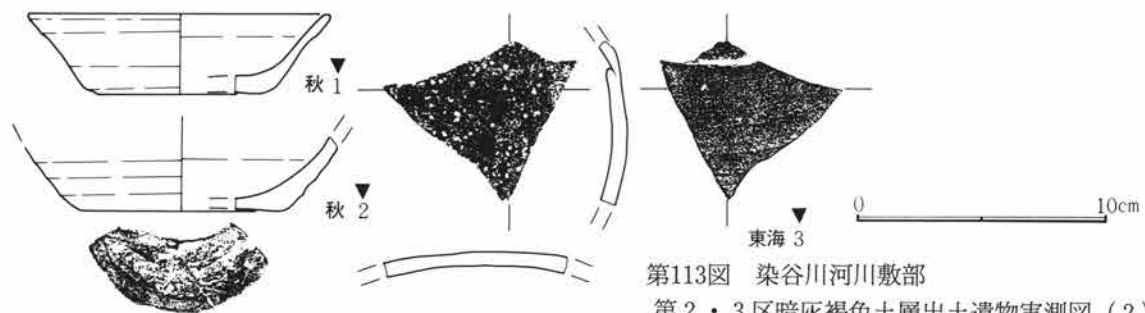
第110図 染谷川河川敷部第2・3区暗濁黒褐色粘質土出土遺物実測図(3)



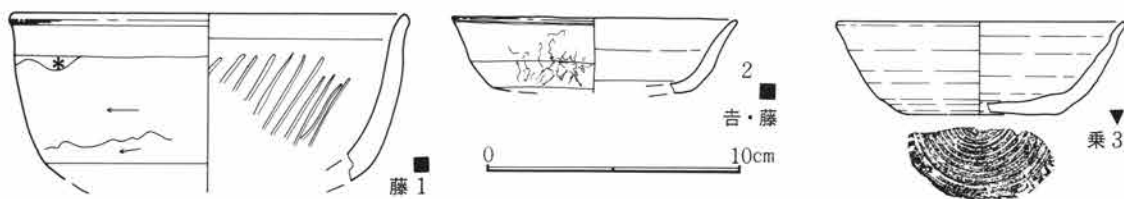
第111図 染谷川河川敷部第2・3区暗濁黒褐色粘質土出土遺物実測図(4)



第112図 染谷川河川敷部  
第2・3区暗灰褐色土層出土遺物実測図(1)

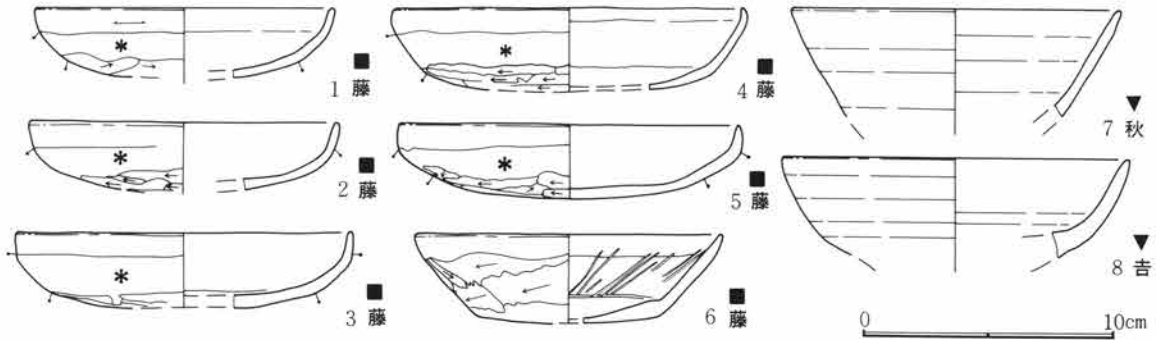


第113図 染谷川河川敷部  
第2・3区暗灰褐色土層出土遺物実測図(2)



第114図 染谷川河川敷部第2・3区濁灰褐色粗粒土出土遺物実測図





第116図 染谷川河川敷部第2区セクションベルトカーボン層中出土遺物実測図

### 第3項 遺構外出土遺物

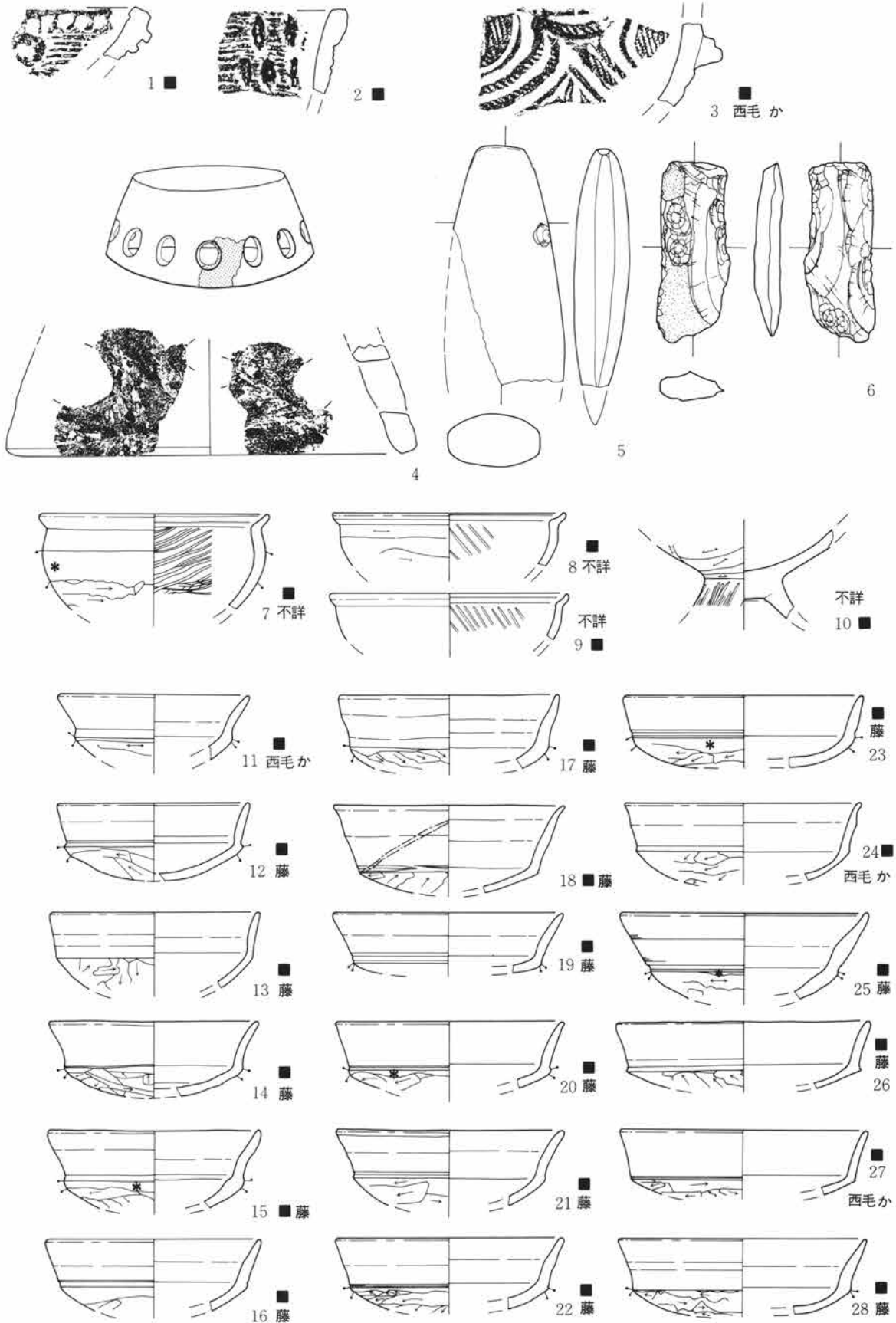
遺構外出土遺物は、前述の文化層の特定出来る遺物とは異なり、遺物取り上げ時にIII'層として収納した遺物である。

全体傾向では、2区を中心にして6世紀後半の土師器坏が多く少量の須恵器甕類等が出土している。一方、3区では、7世紀後半以降の土師器坏須恵器坏類等が集中する傾向が認められる。

2区・3区で共通する要素として土師器坏が主体を成す点である。2区の場合は、祭祀という行為に対して共伴している点で、遺物の使用目的がある程度はその性格が判断出来る。だが、7世紀後半以降、3区第1号井戸跡が構築される段階迄は、少なくとも具体的な遺構の構築が認められない。然し、第6図下段に示した土層断面からは、第4・5層群が位置付けられ、この第4・5層群が造成平坦面の埋設土とすれば、この造成平坦面は7世紀後半～8世紀代の何らかの行為が行われた遺構として把握される。そして、第4・5層群の2つの土層群の存在は、7世紀後半～8世紀代を分別する要因として捉えることが出来る。

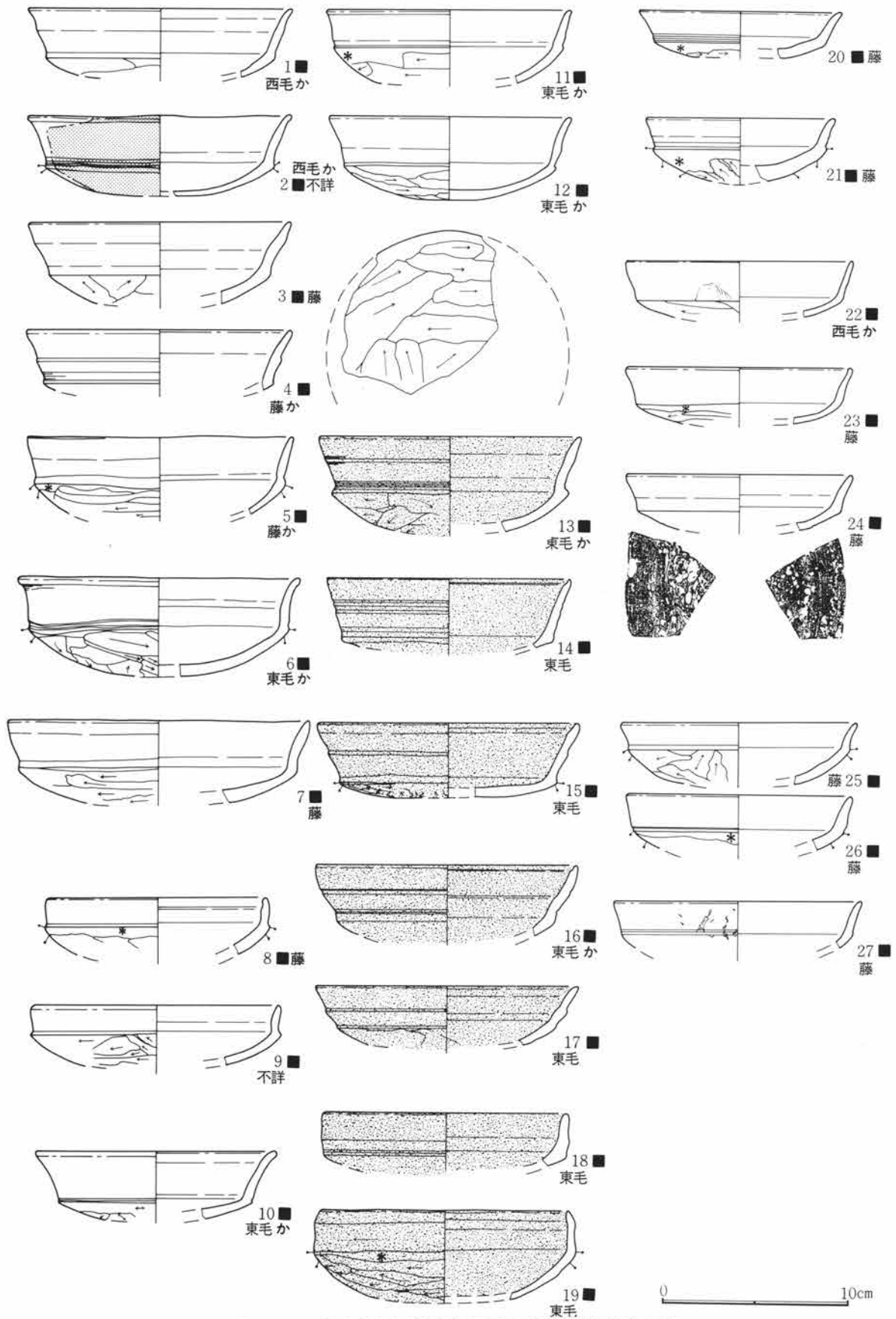
この様に、遺構外として扱った遺物は、明確な出土層位が明らかであったなら、より具体的な所見が得られた筈であるが、調査の不幸により大切な状況把握を怠ったことを深く反省している。

第4章 検出された遺構・遺物



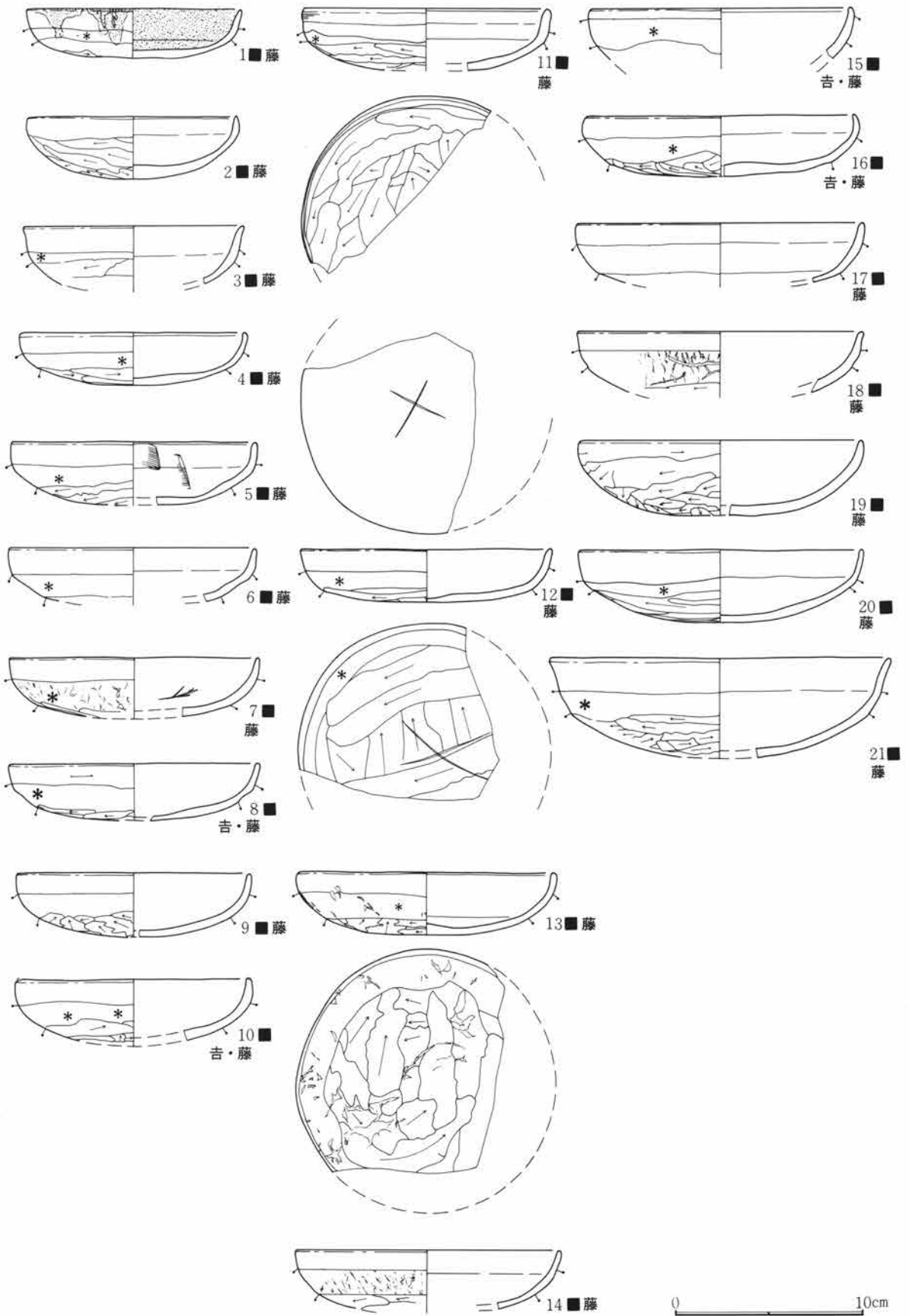
第117図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図(1)

0 10cm



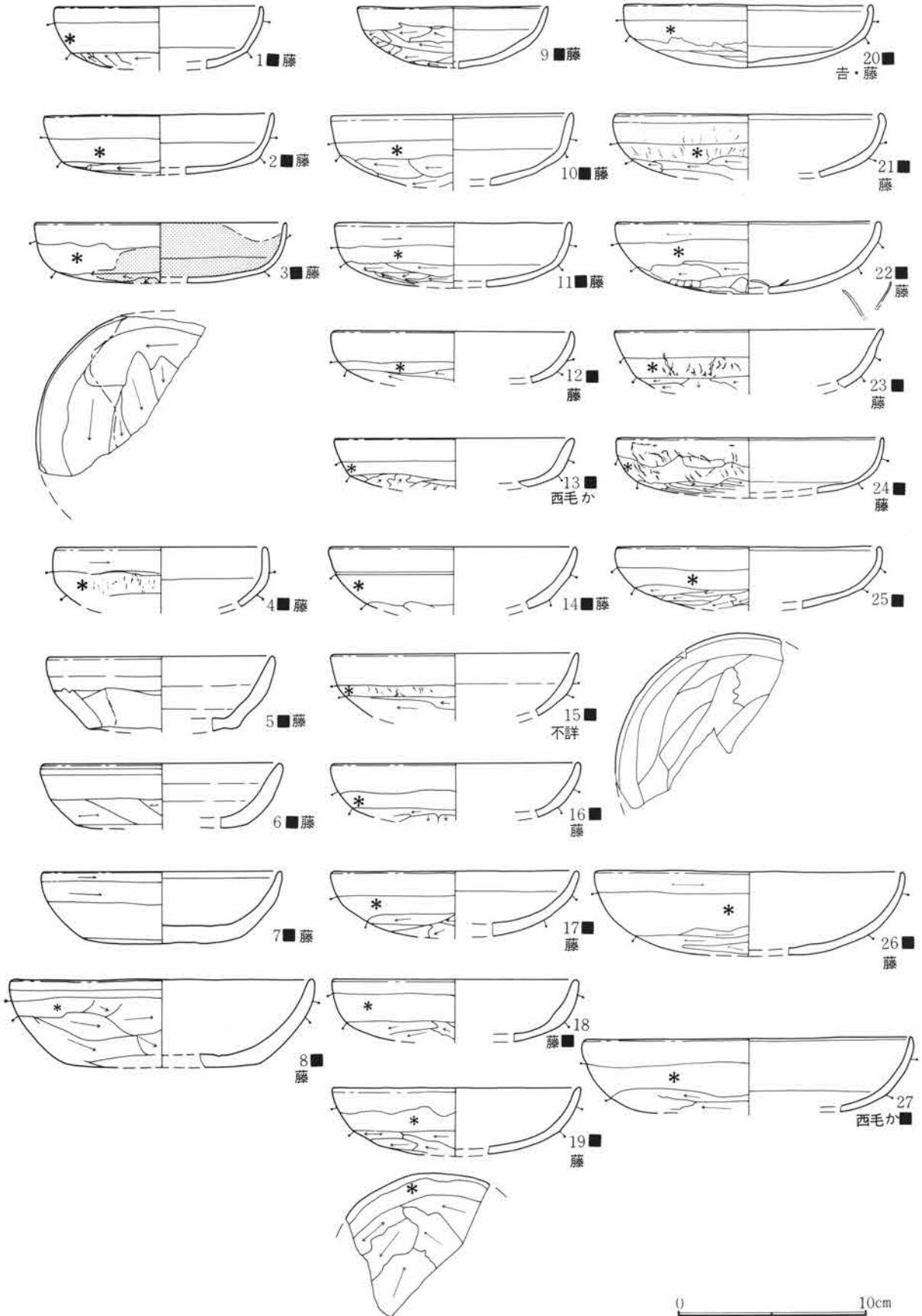
第118図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構・遺物



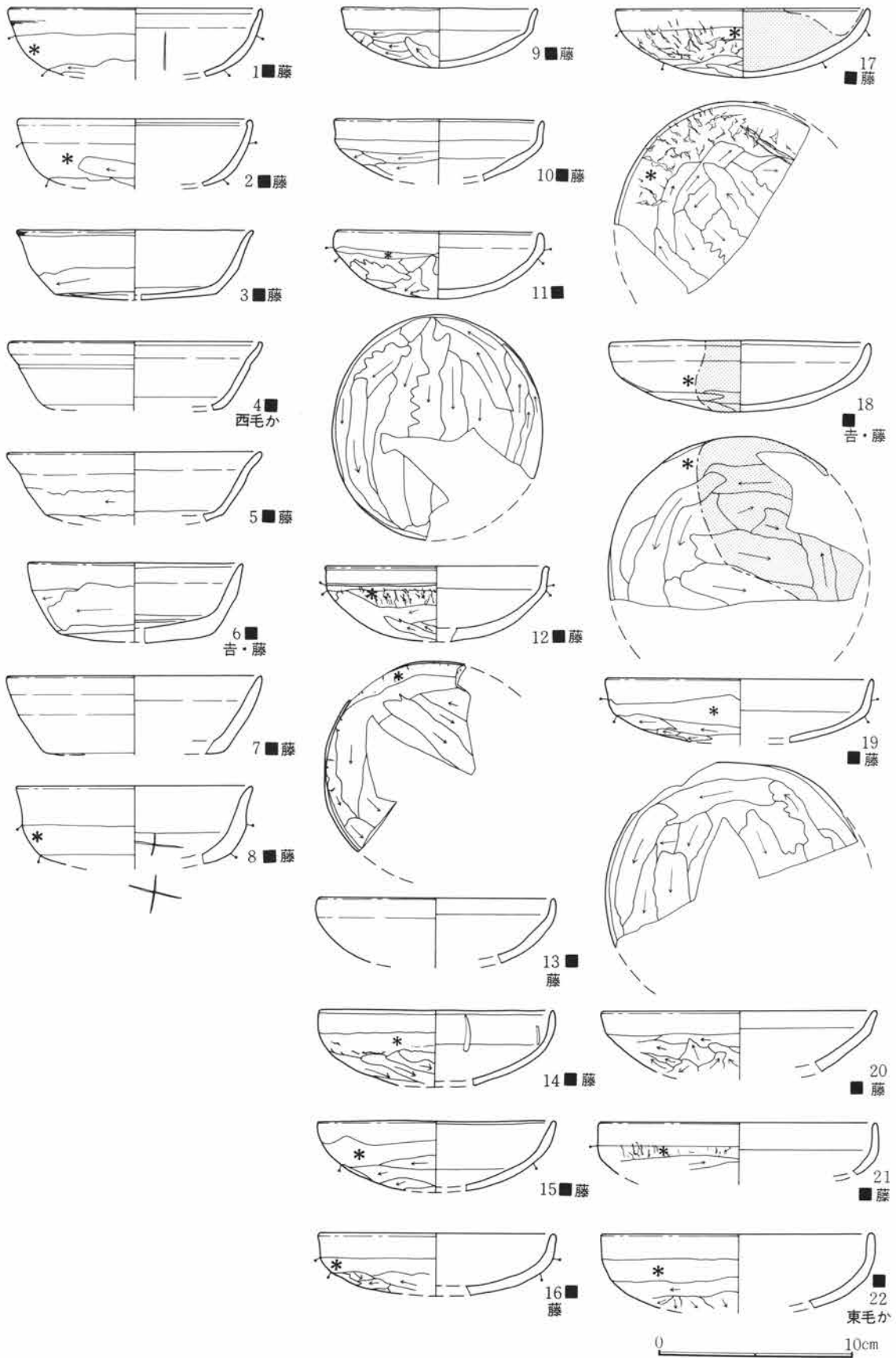
第119図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図（3）

第4節 検出された遺構・遺物

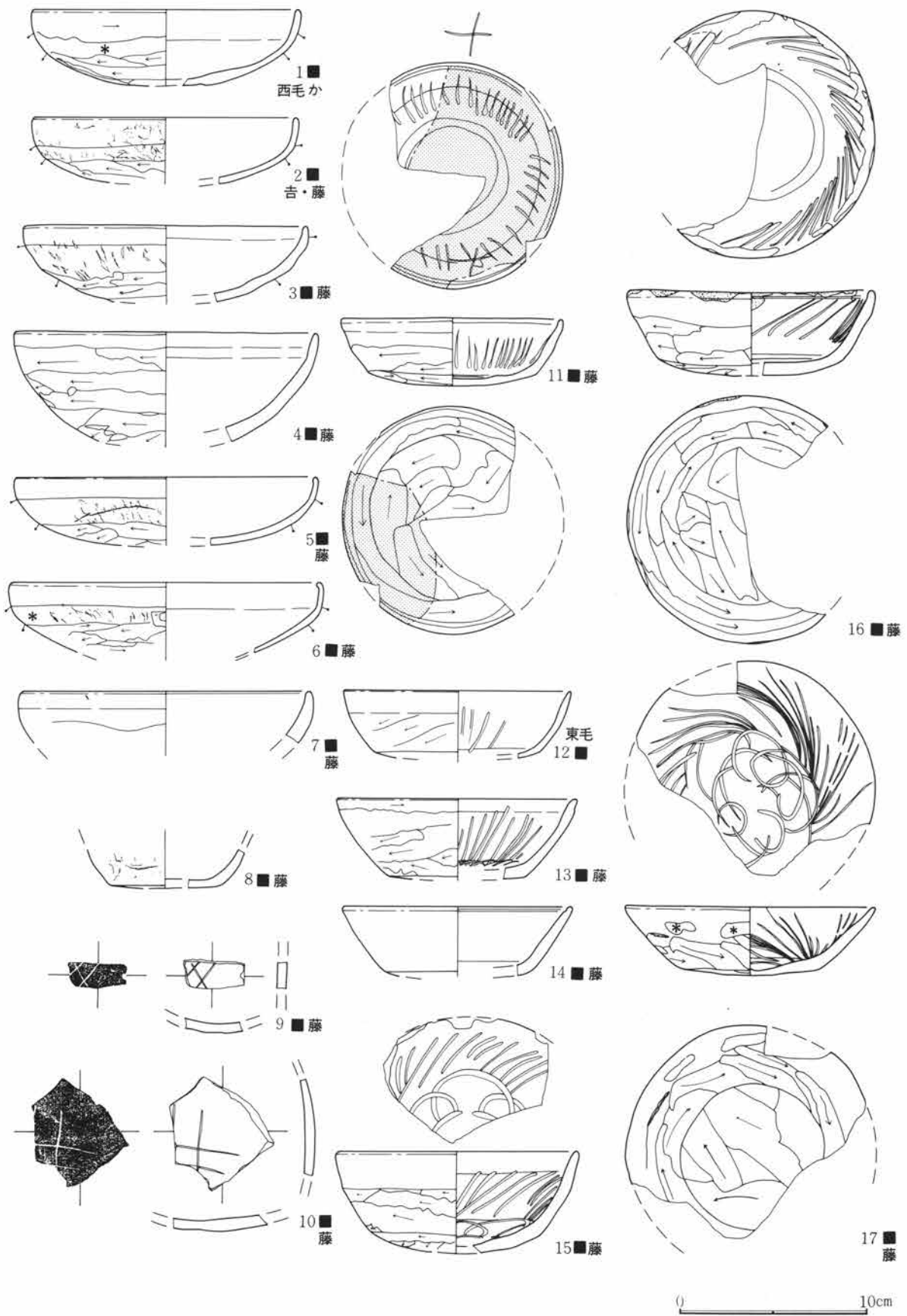


第120図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図(4)

第4章 検出された遺構・遺物

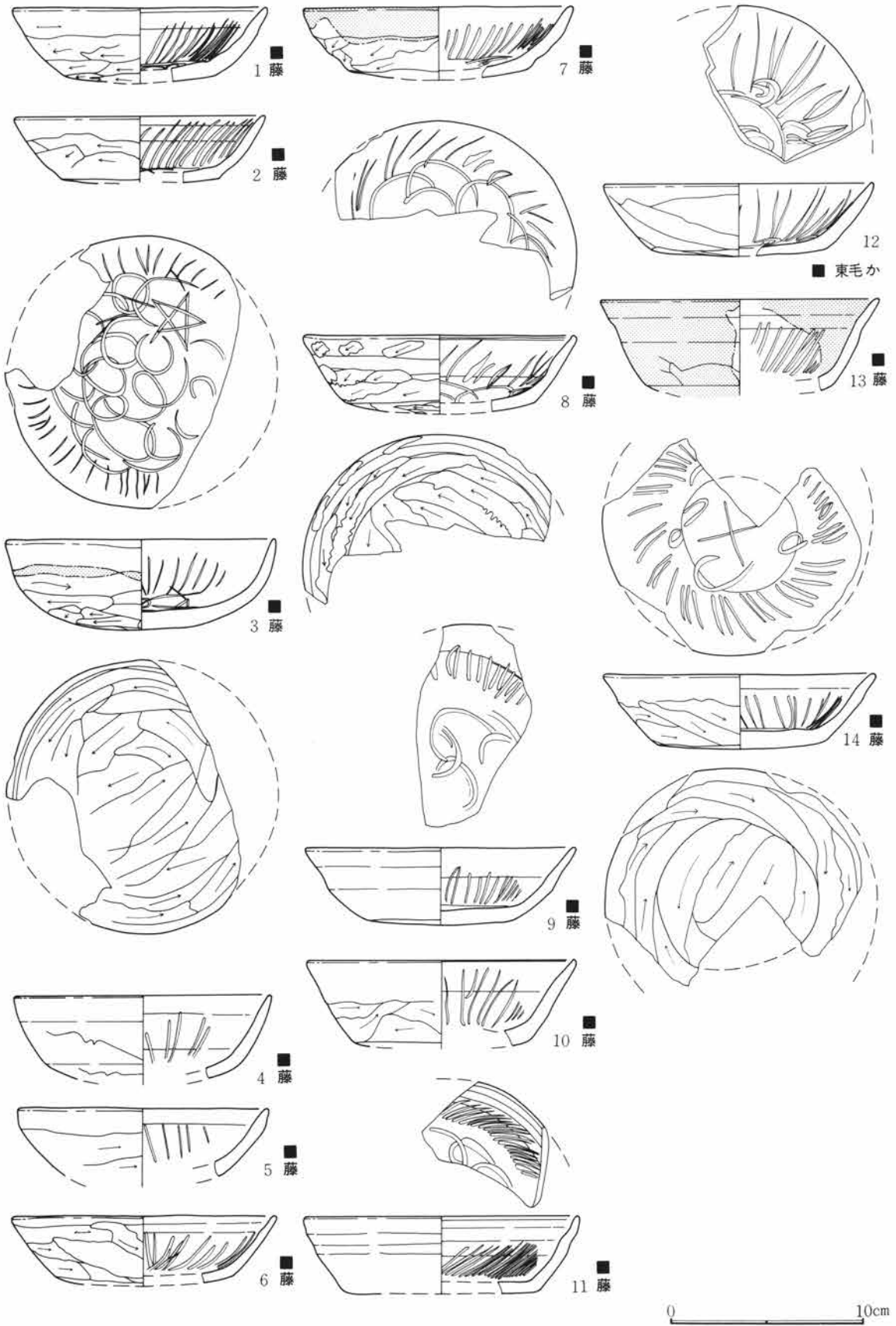


第121図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図(5)



第122図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図(6)

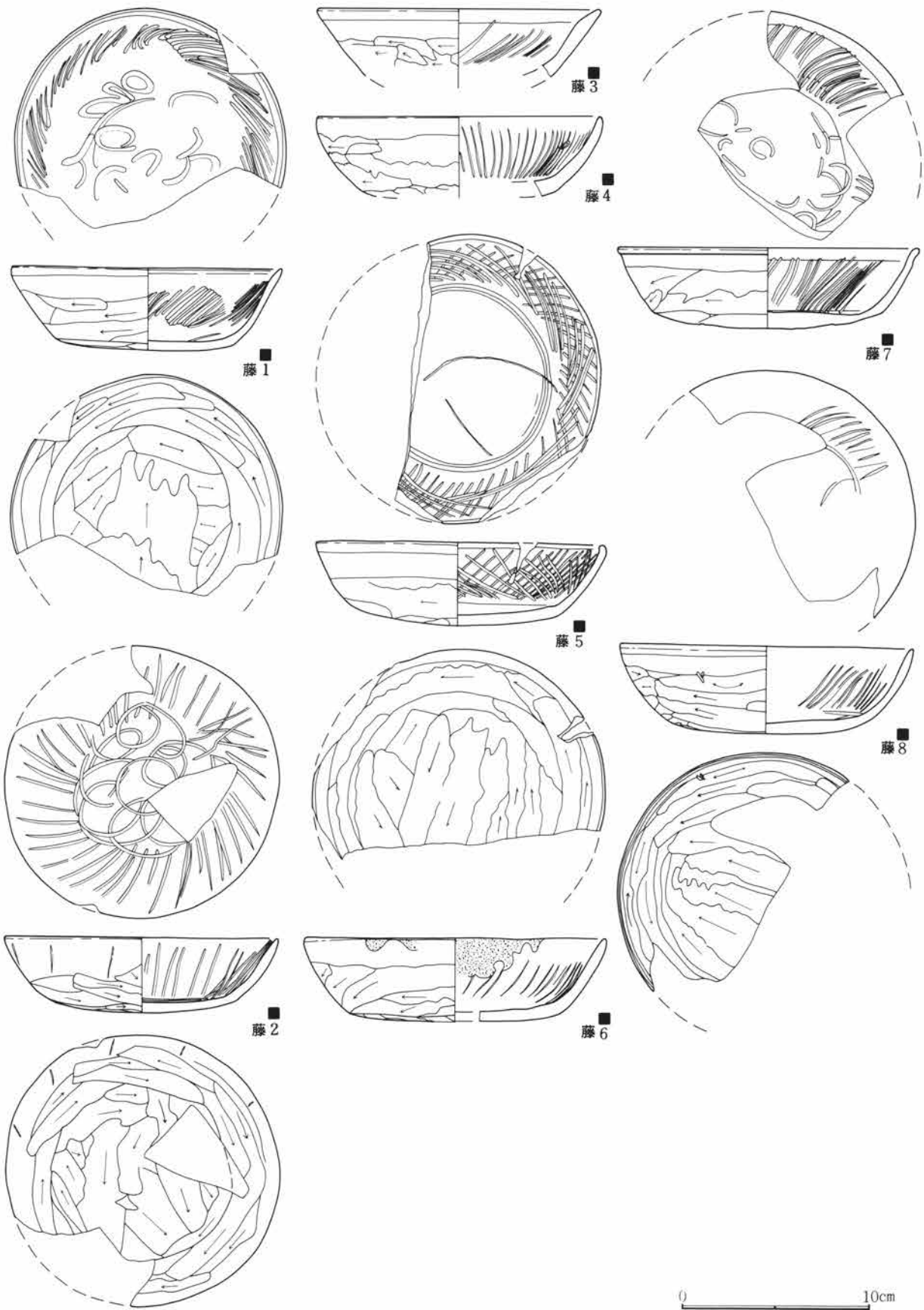
第4章 検出された遺構・遺物



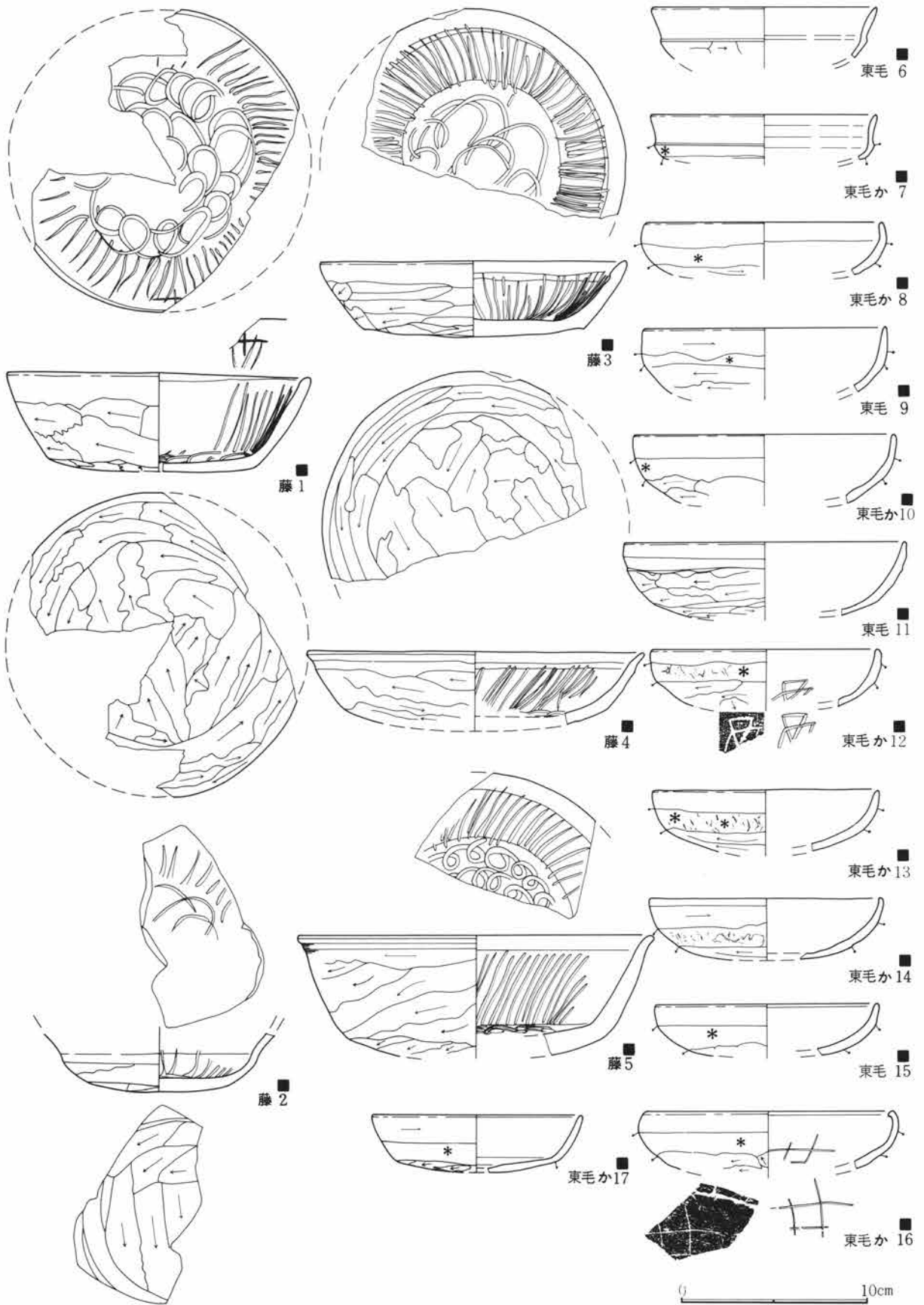
第123図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図（7）



第4節 検出された遺構・遺物

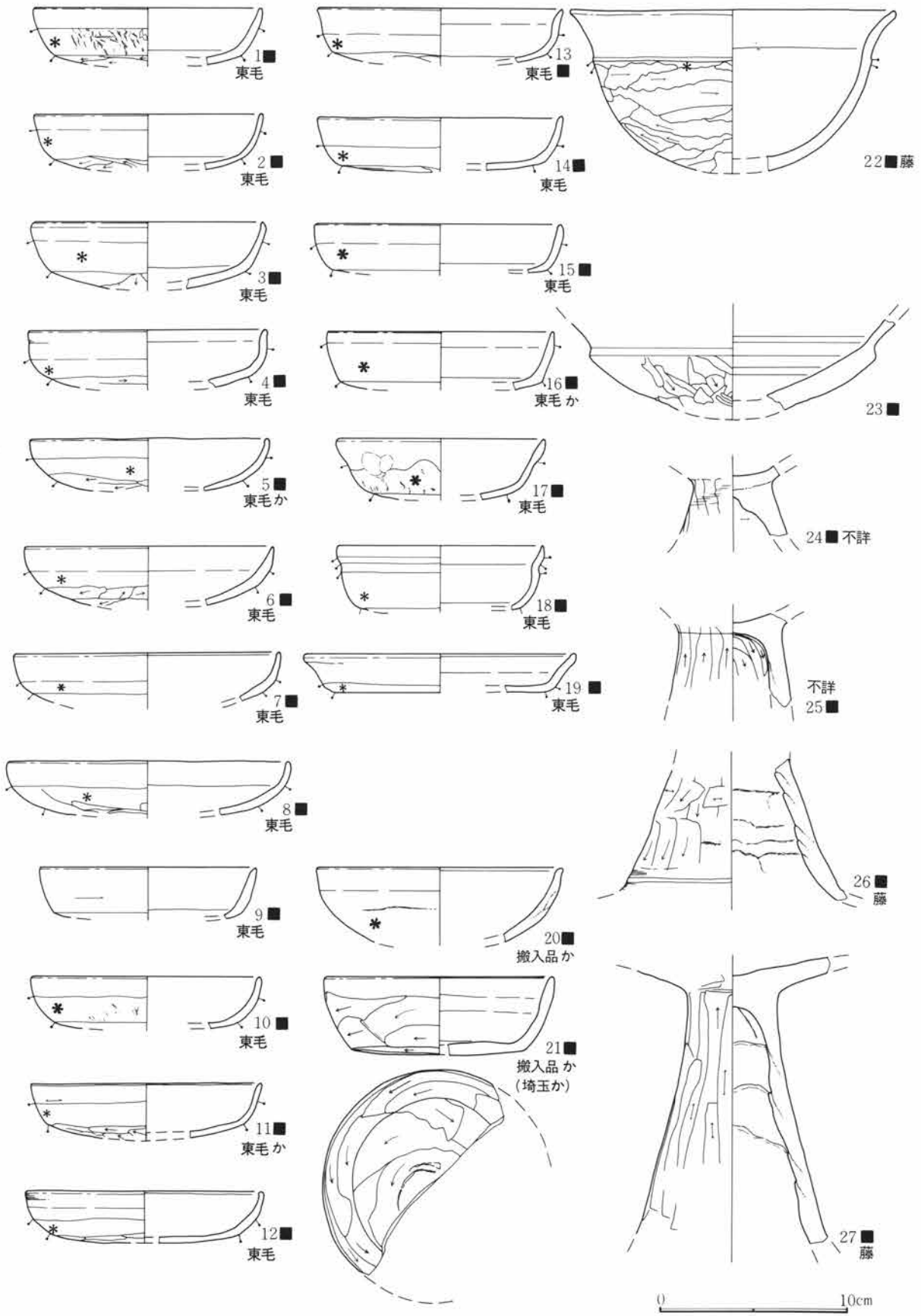


第124図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図(8)

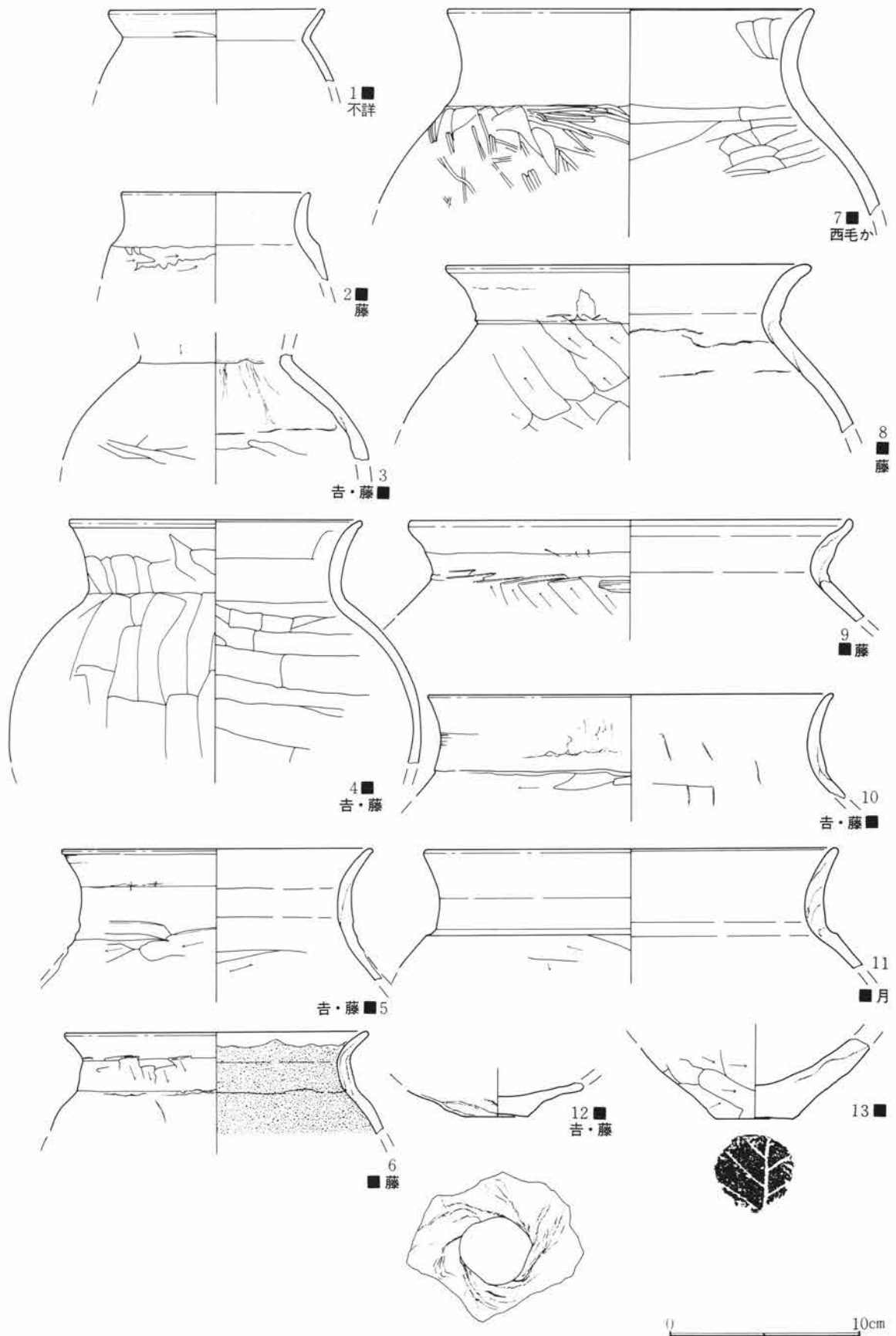


第125図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図(9)

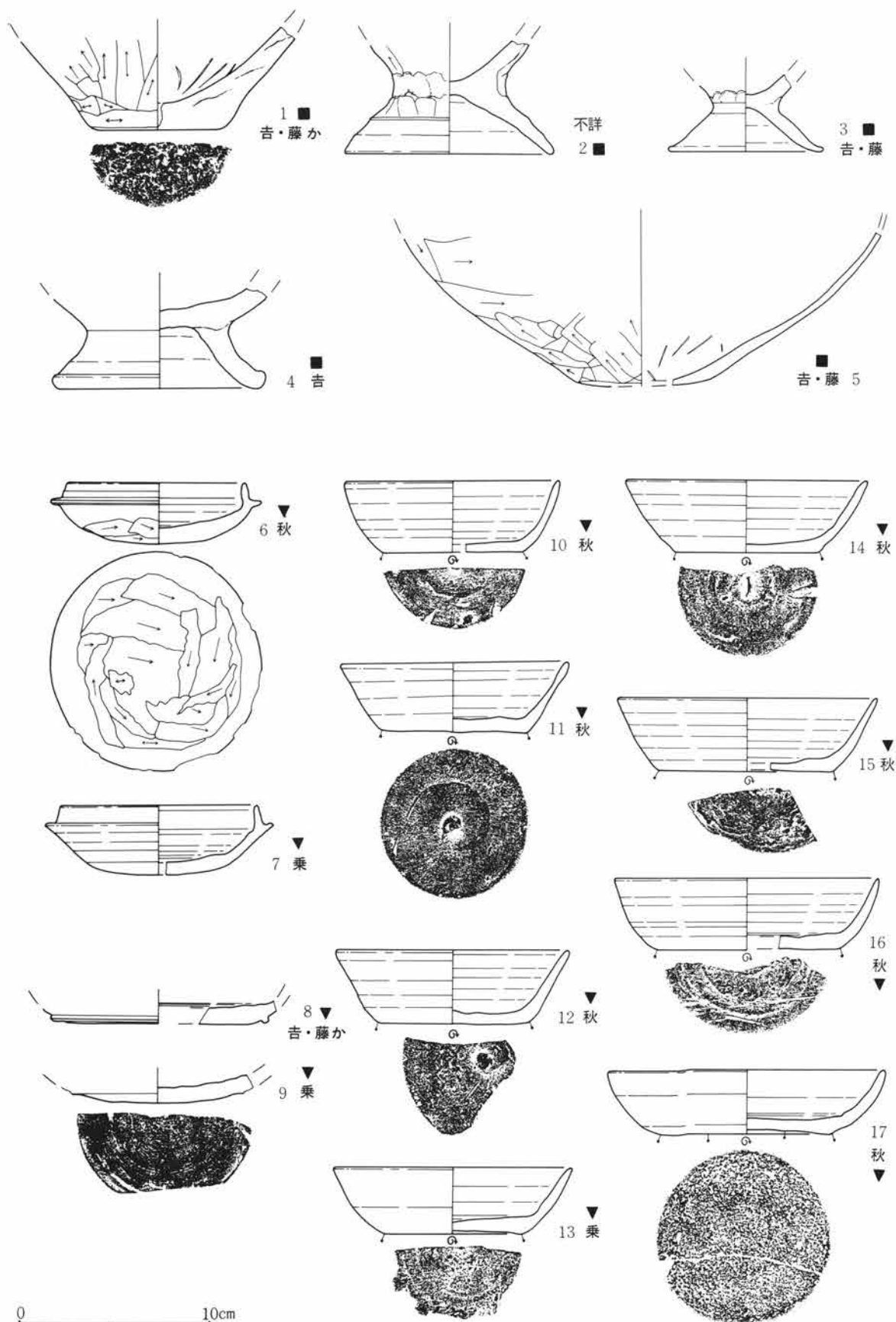
第4節 検出された遺構・遺物



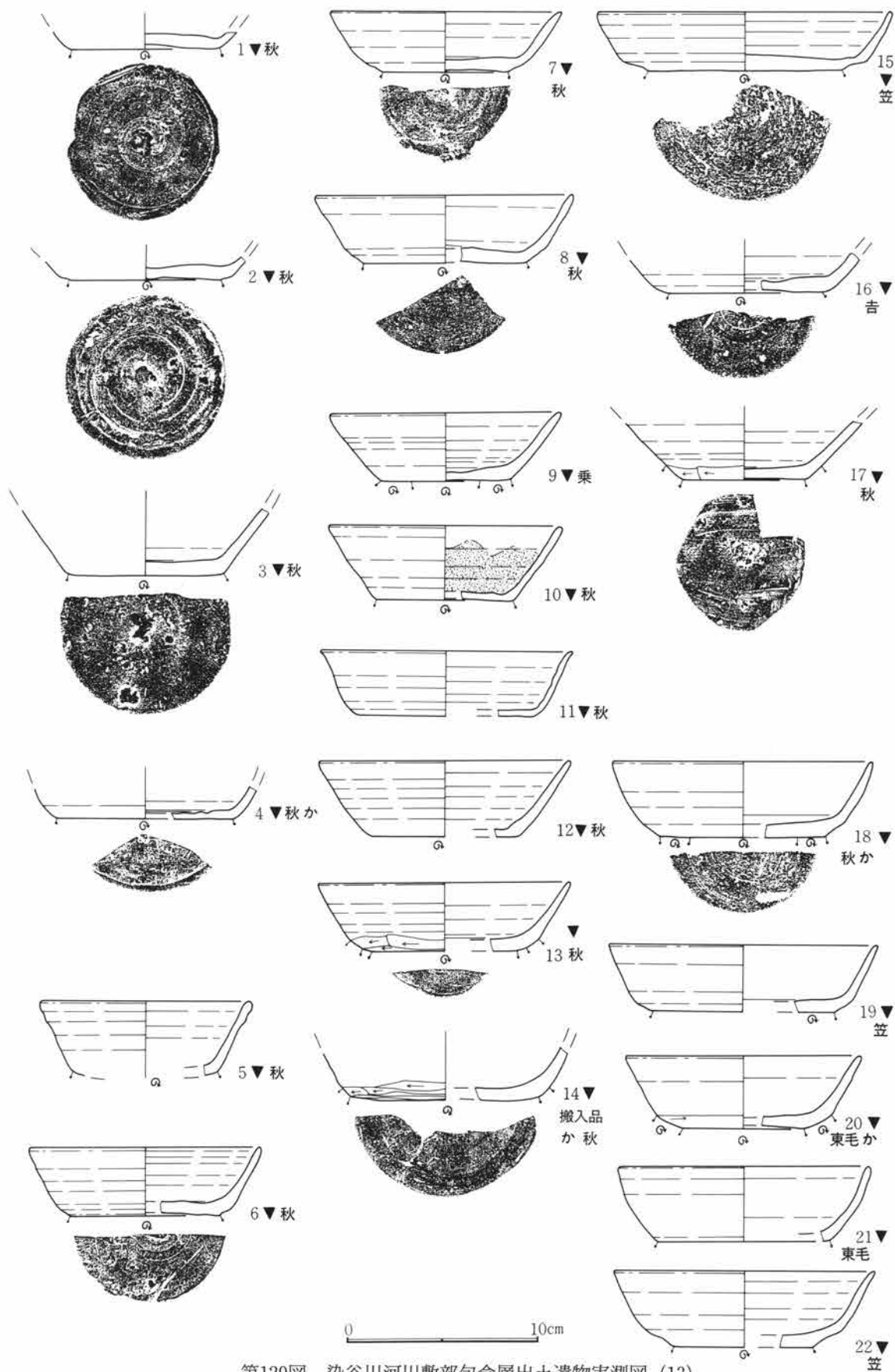
第126図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (10)



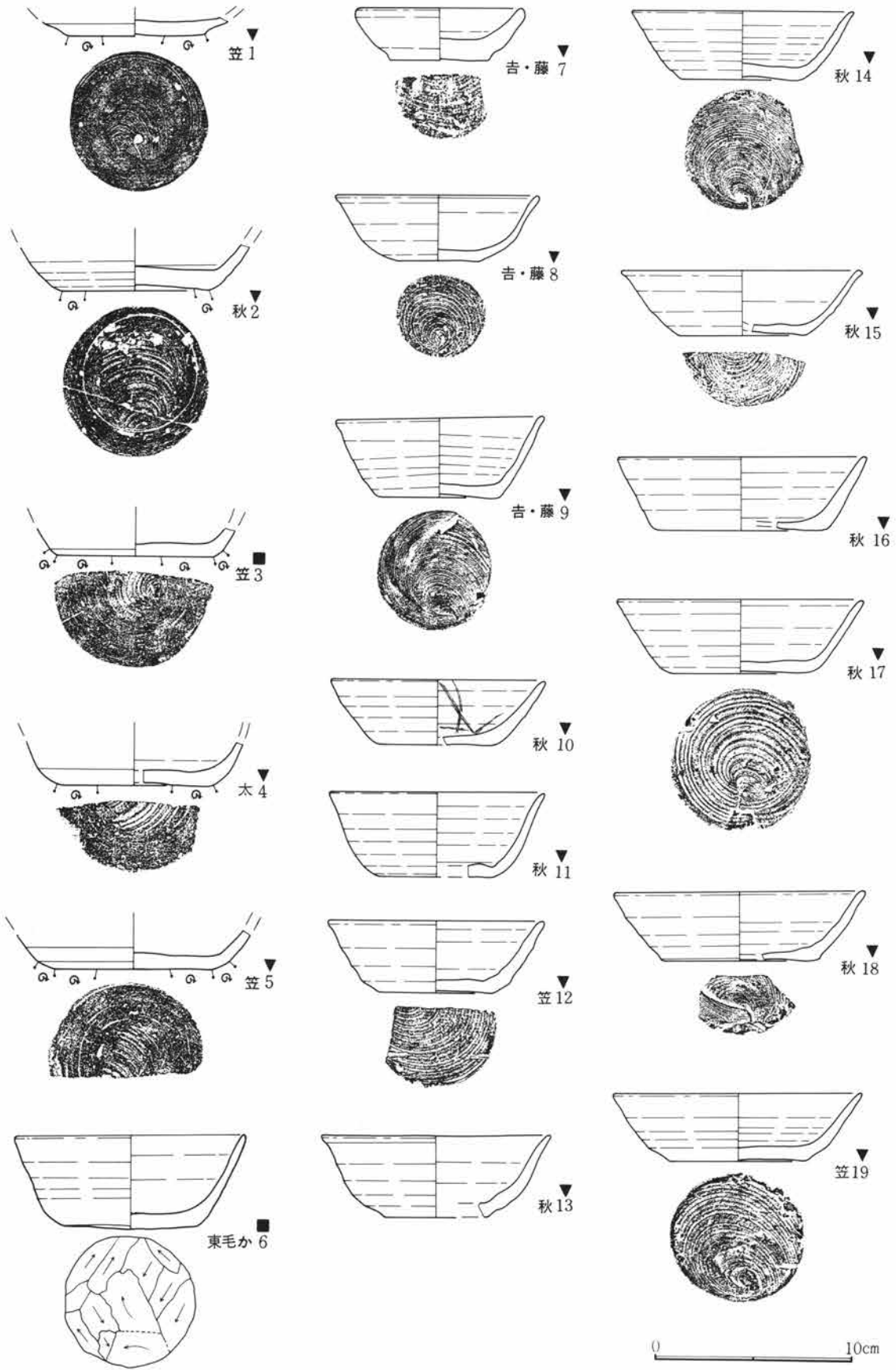
第127図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (11)



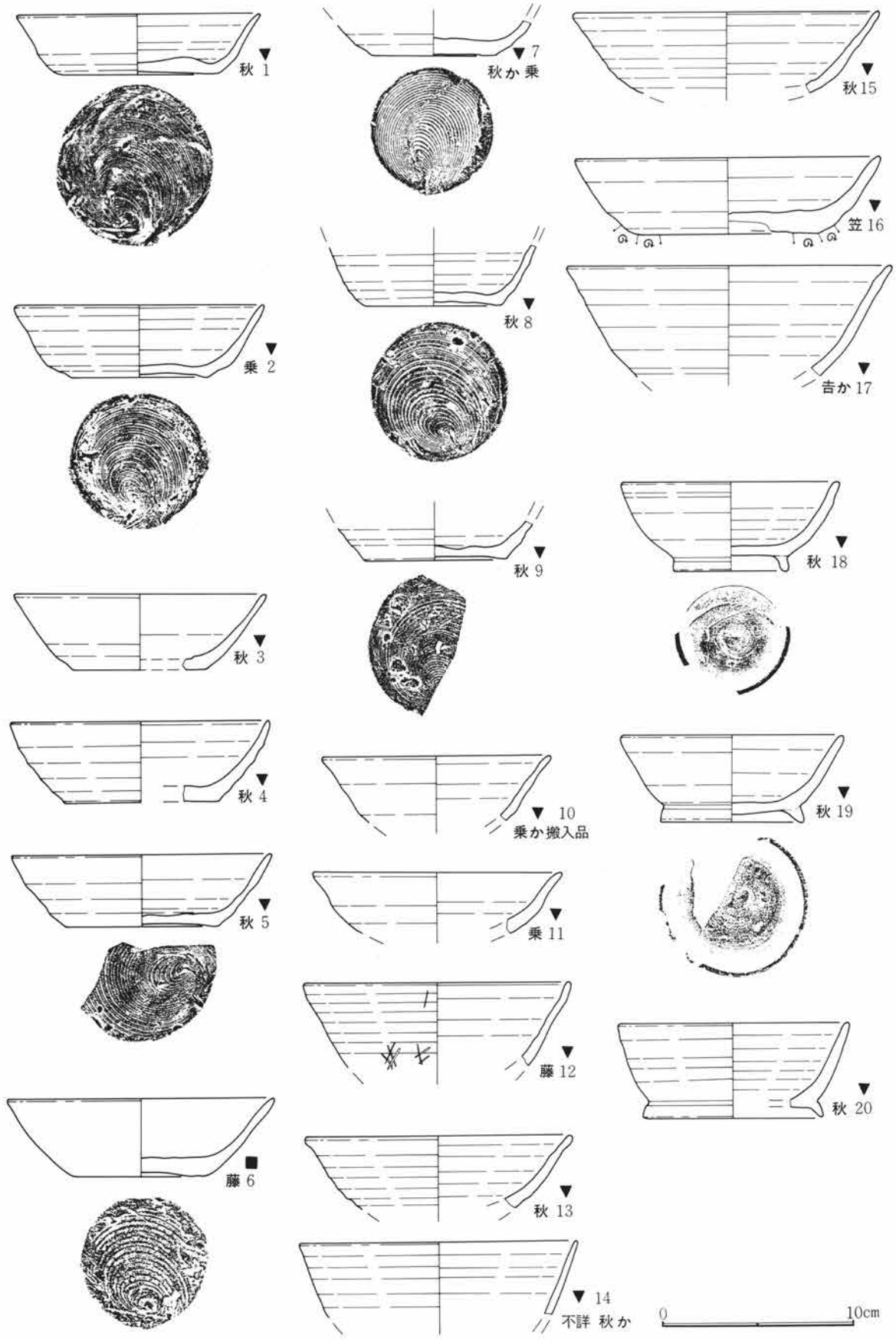
第128図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (12)



第129図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (13)

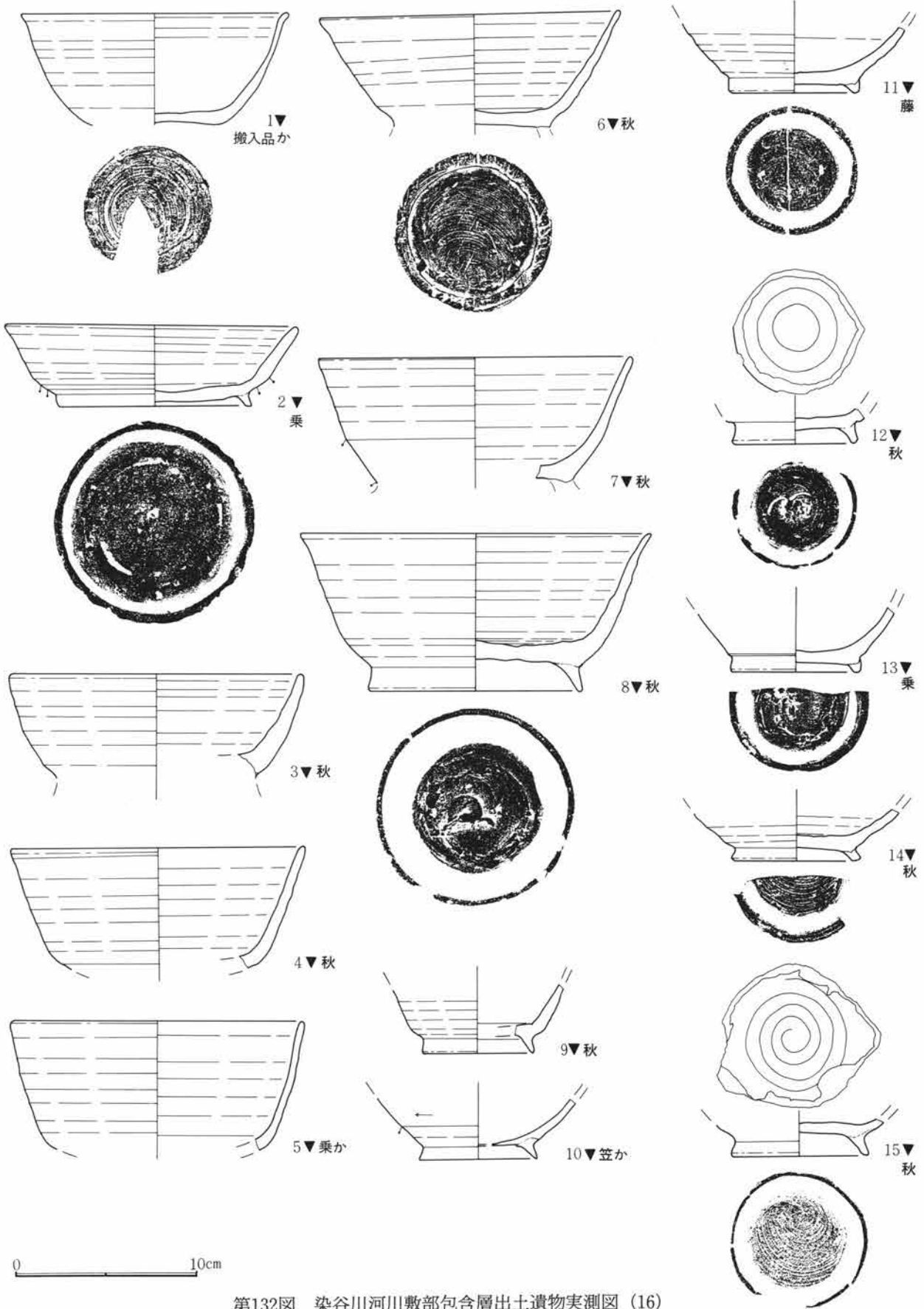


第130図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (14)

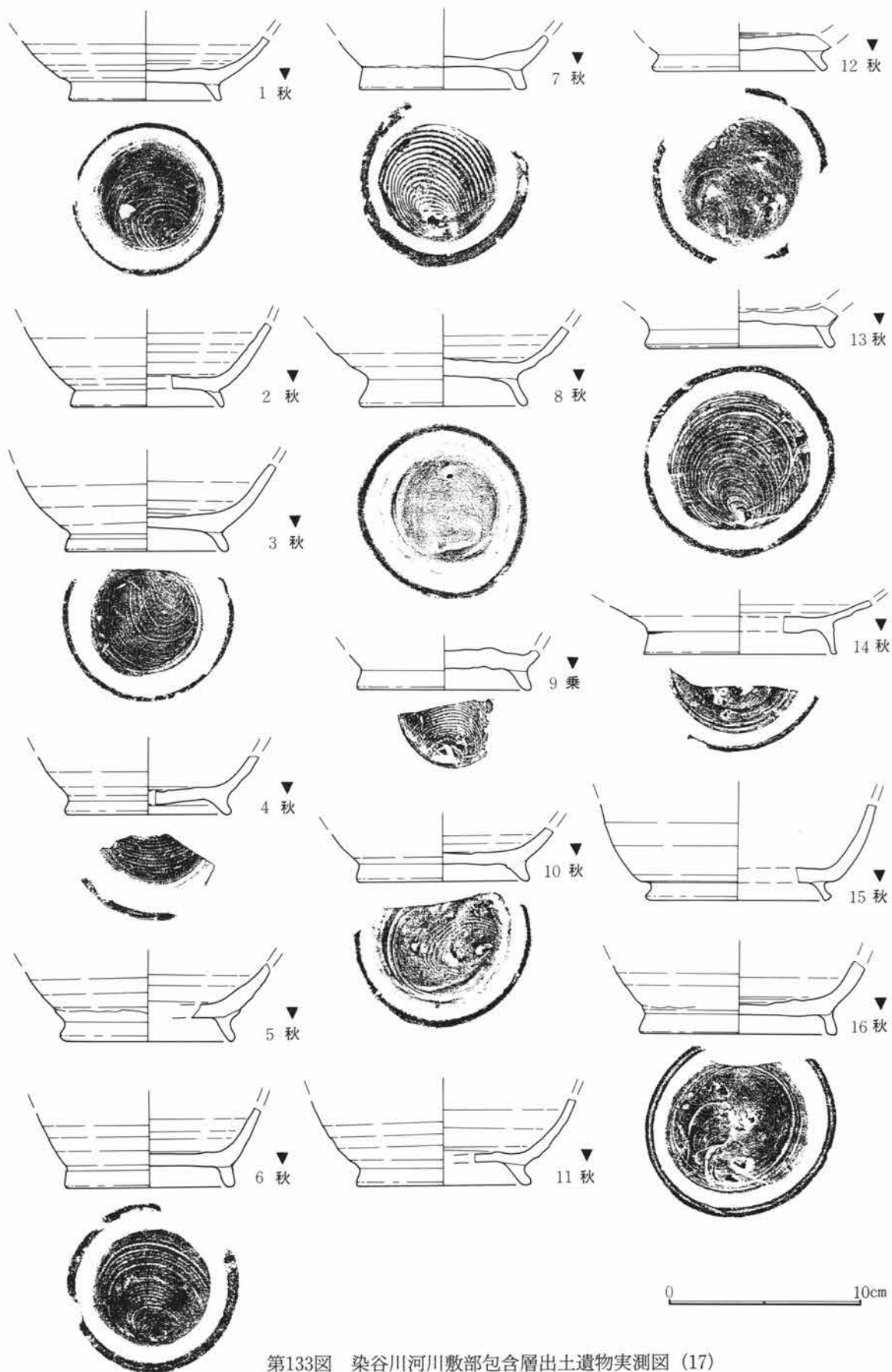


第131図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (15)



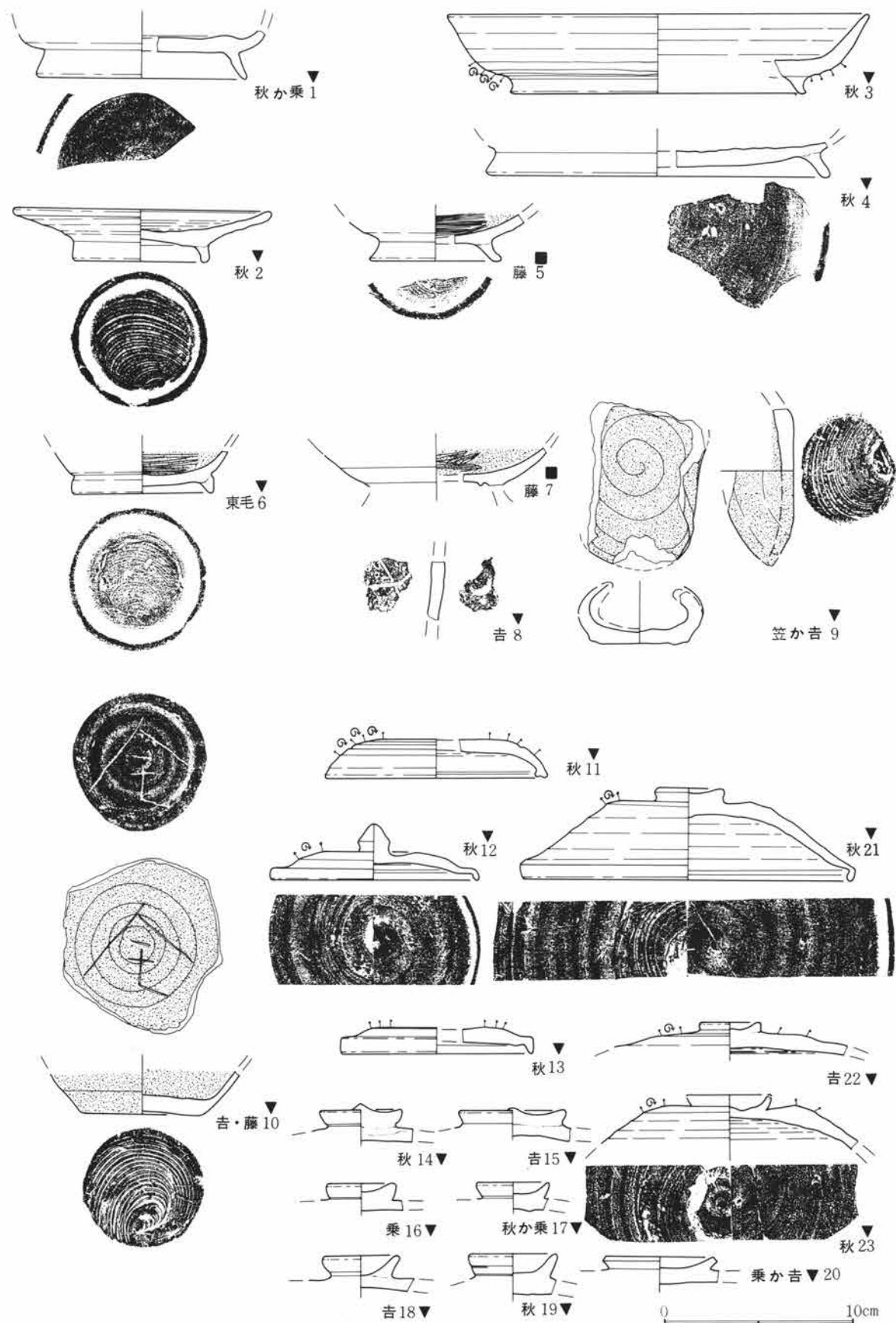


第132図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図(16)



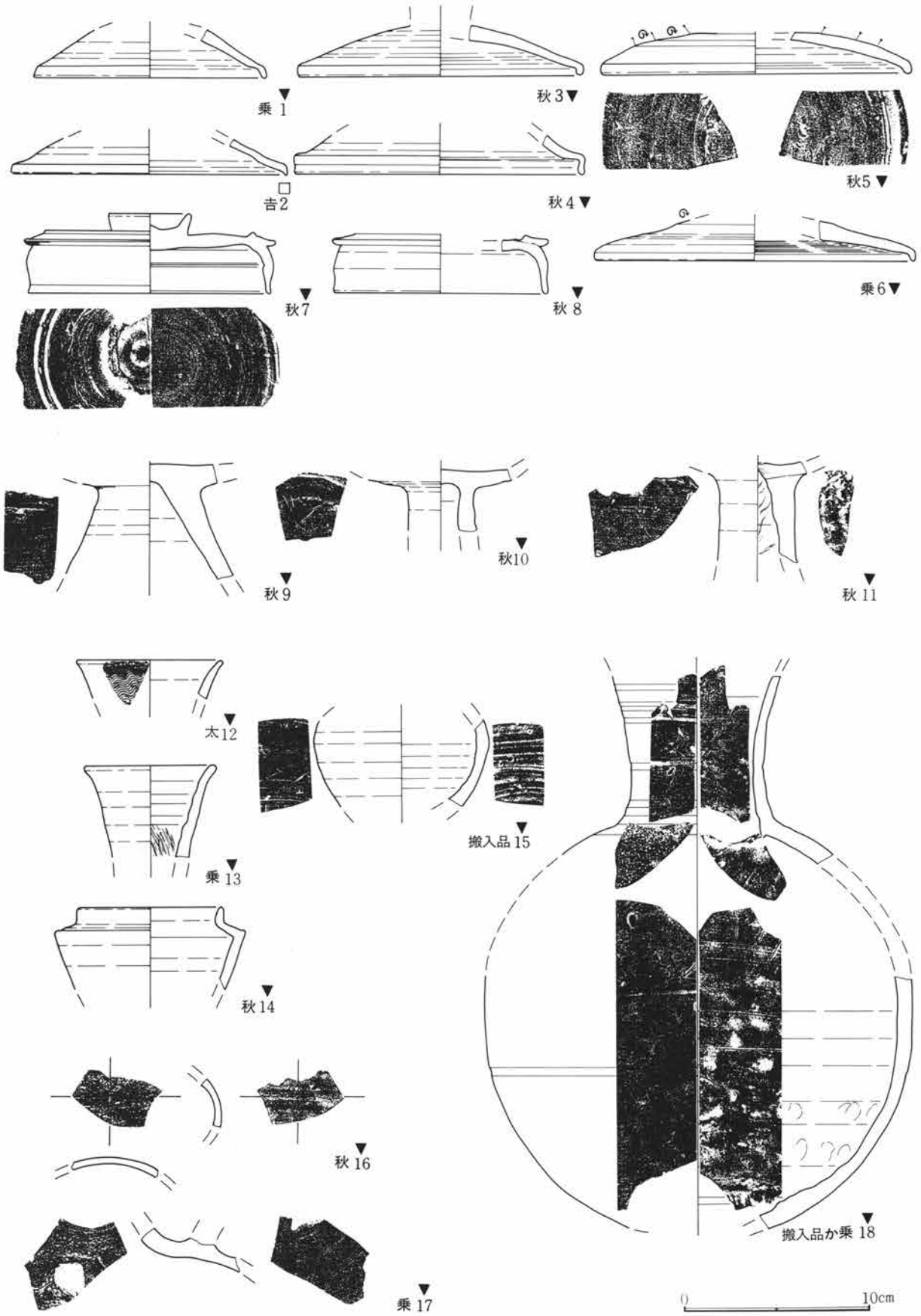
第133図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (17)

第4節 検出された遺構・遺物



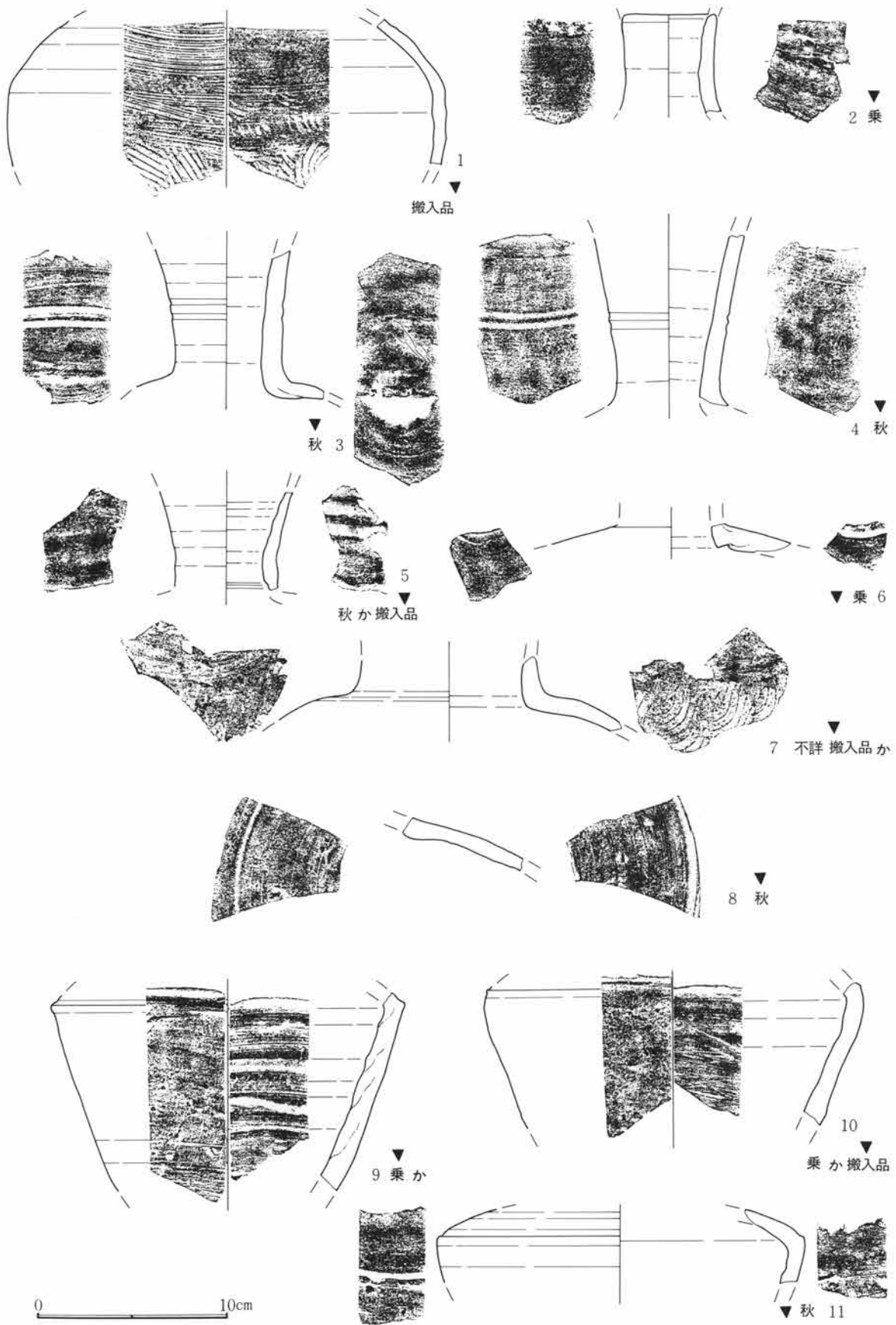
第134図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (18)

第4章 検出された遺構・遺物



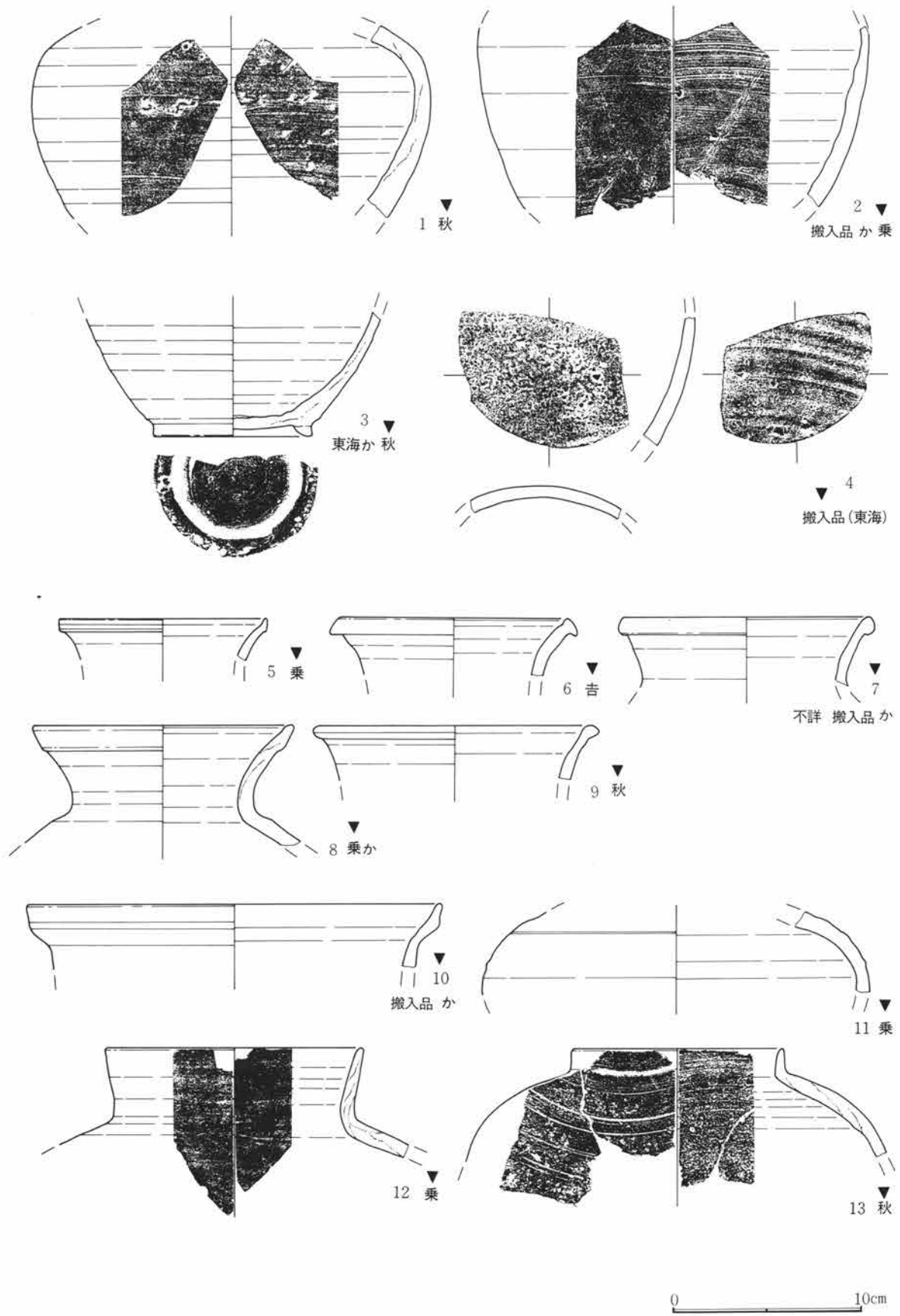
第135図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (19)

第4節 検出された遺構・遺物

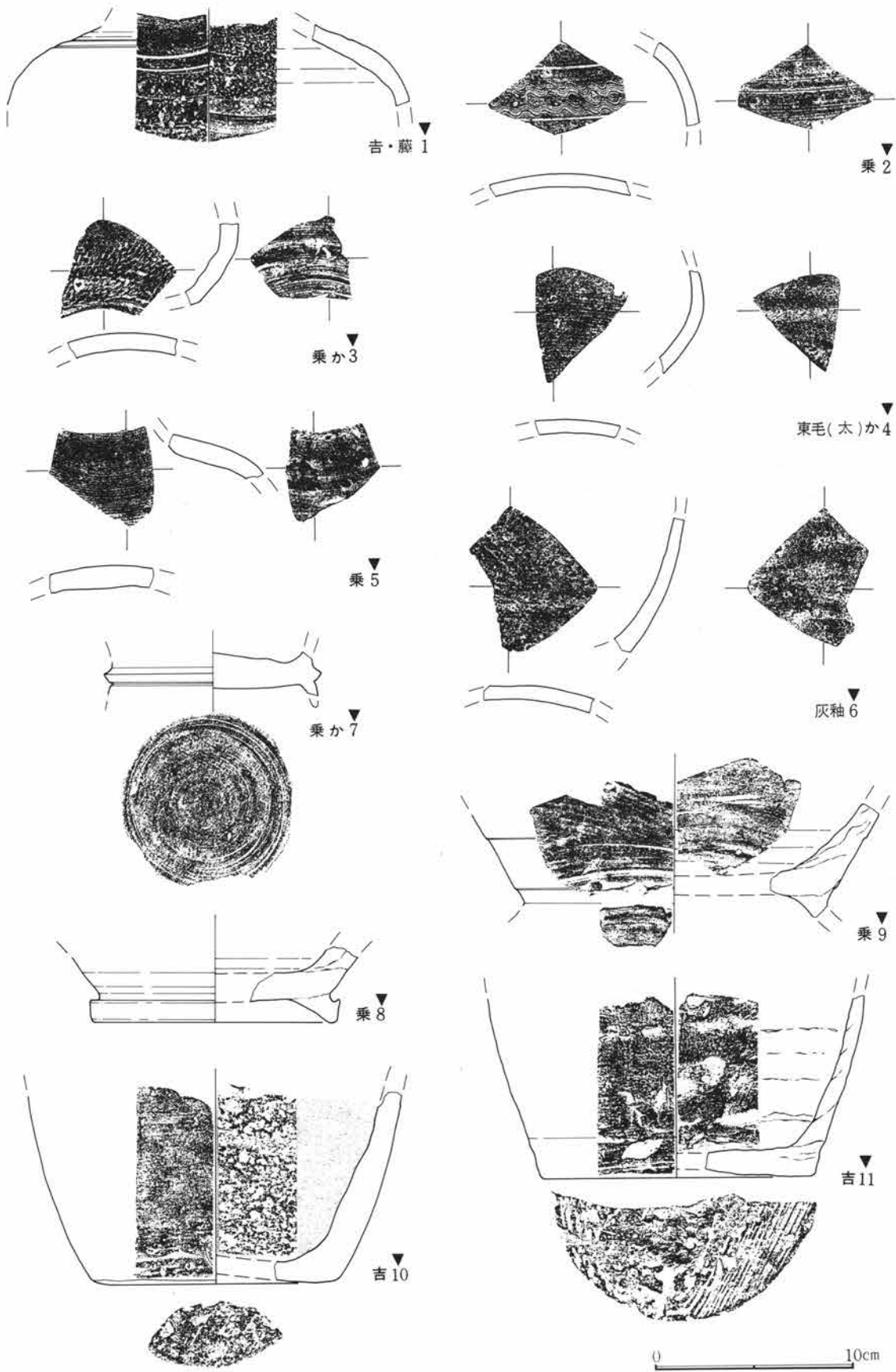


第136図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (20)

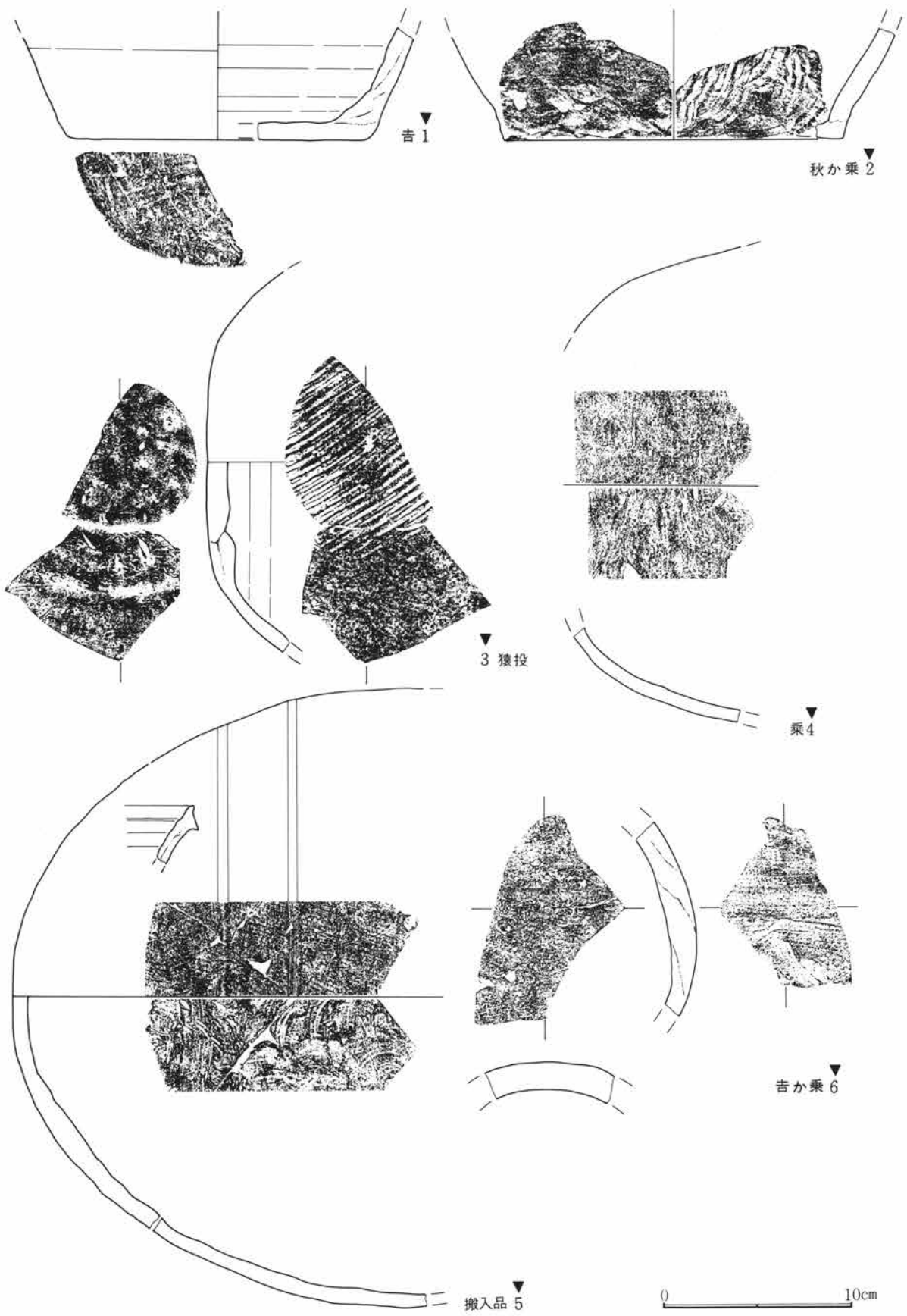
第4章 検出された遺構・遺物



第137図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (21)



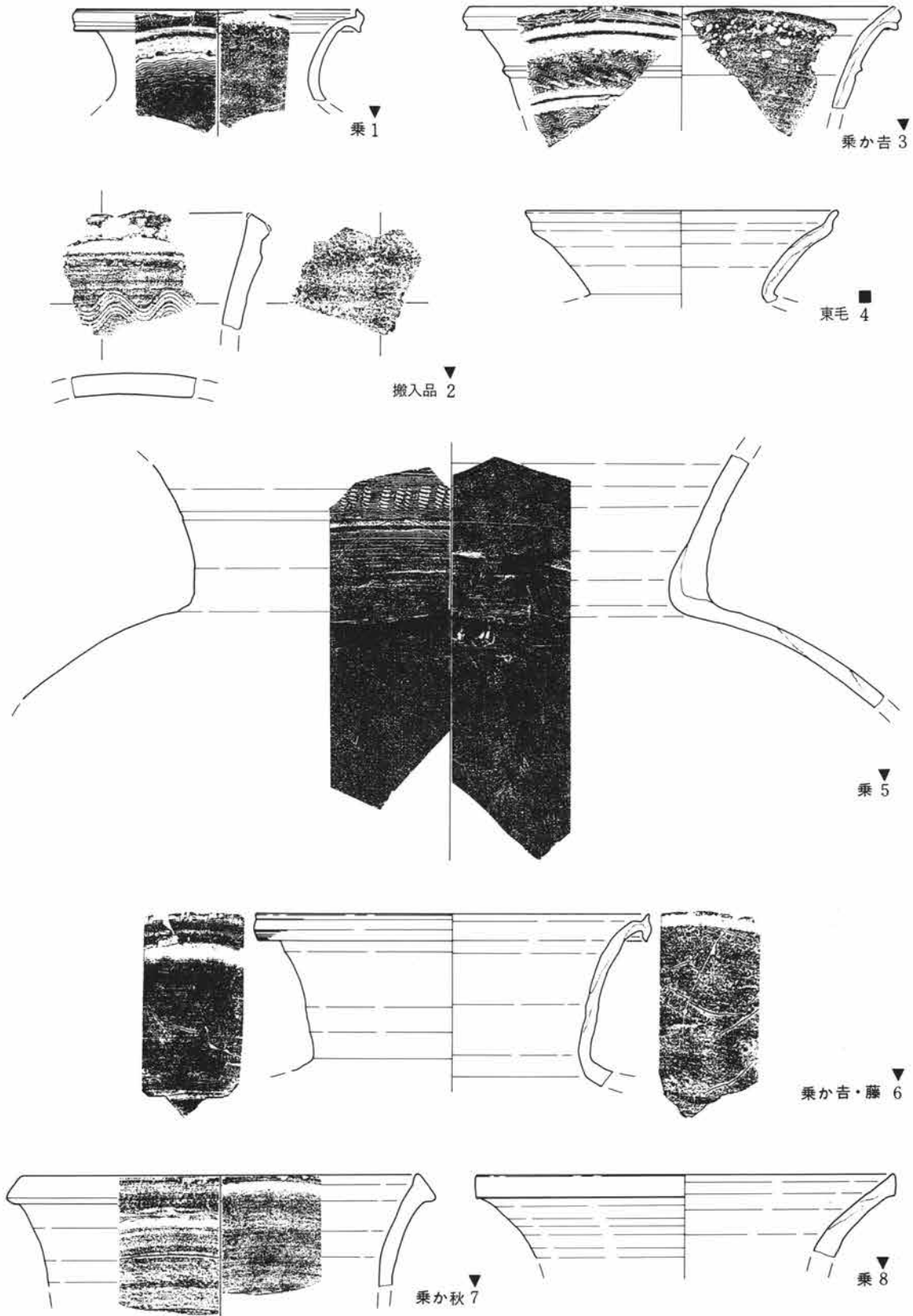
第138図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (22)



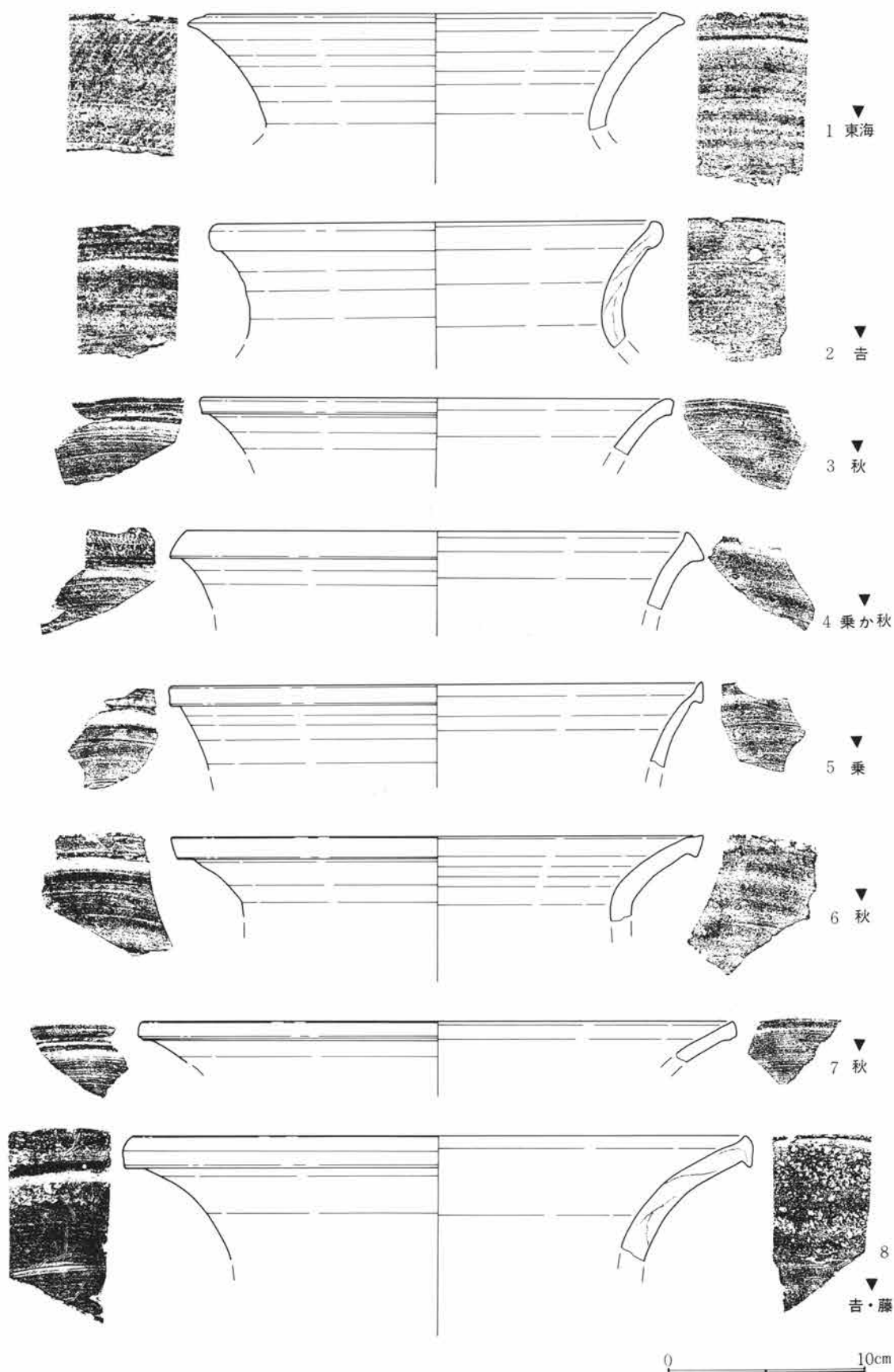
第139図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (23)



第4節 検出された遺構・遺物

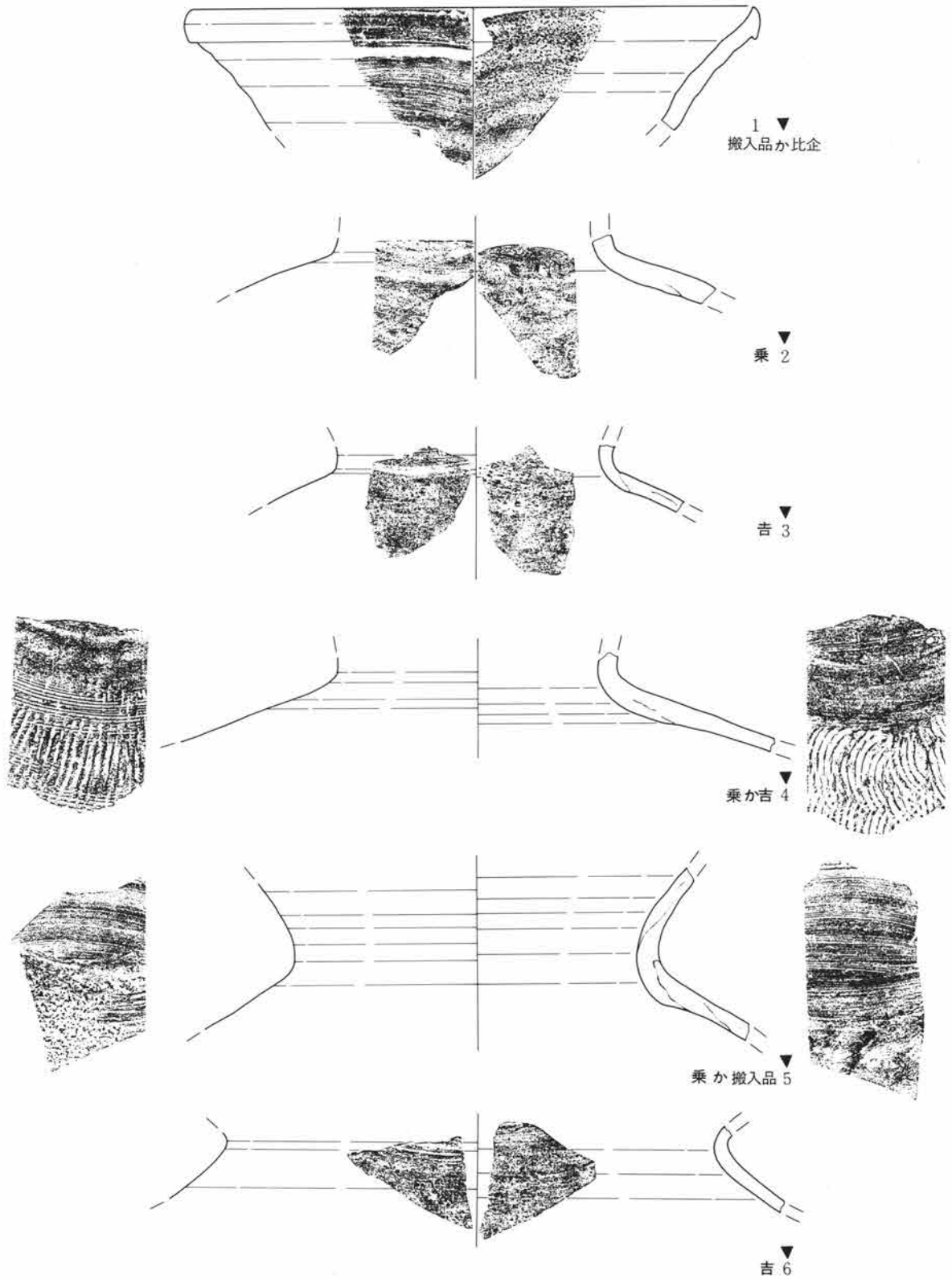


第140図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (24)

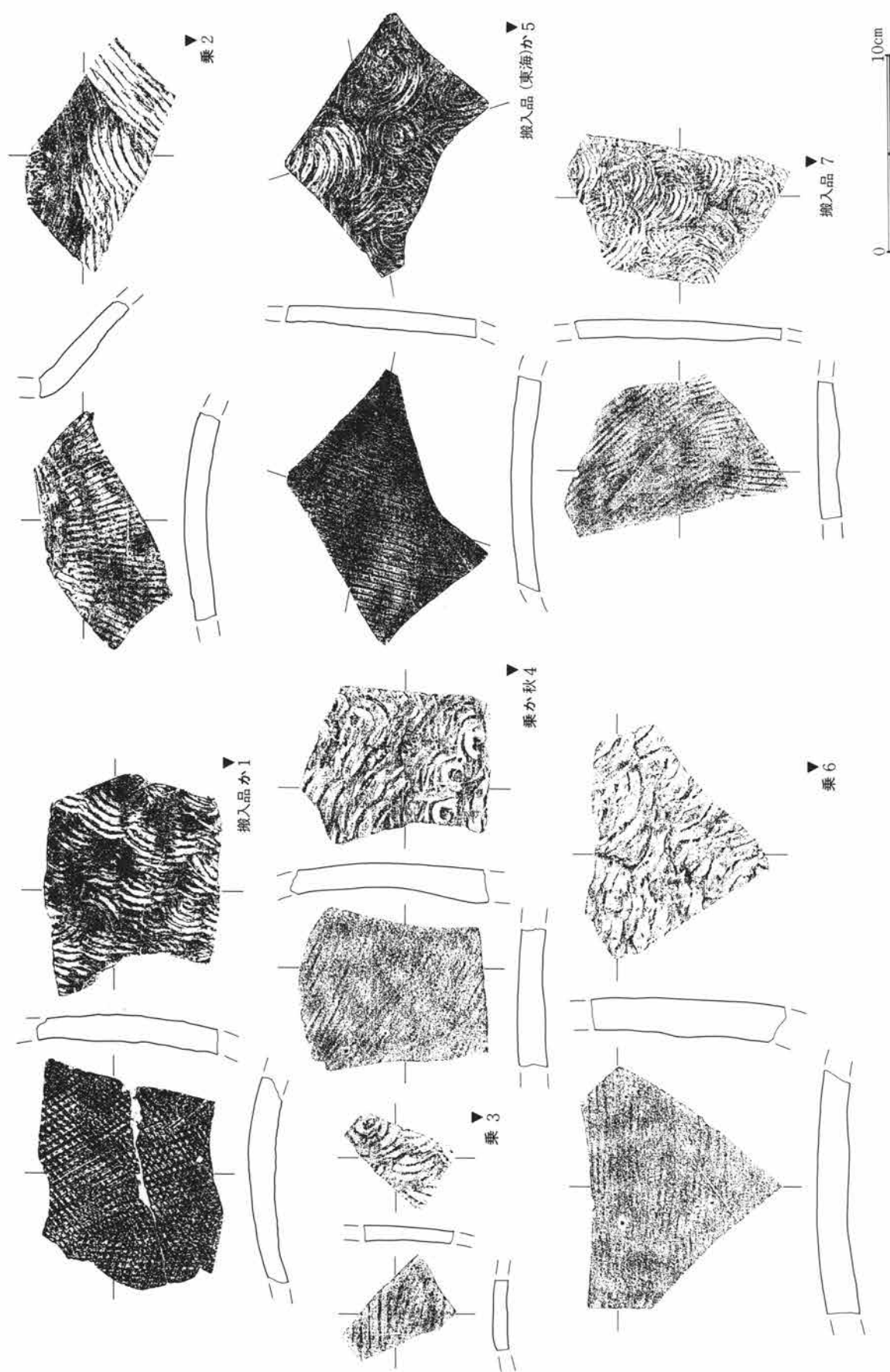


第141図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (25)

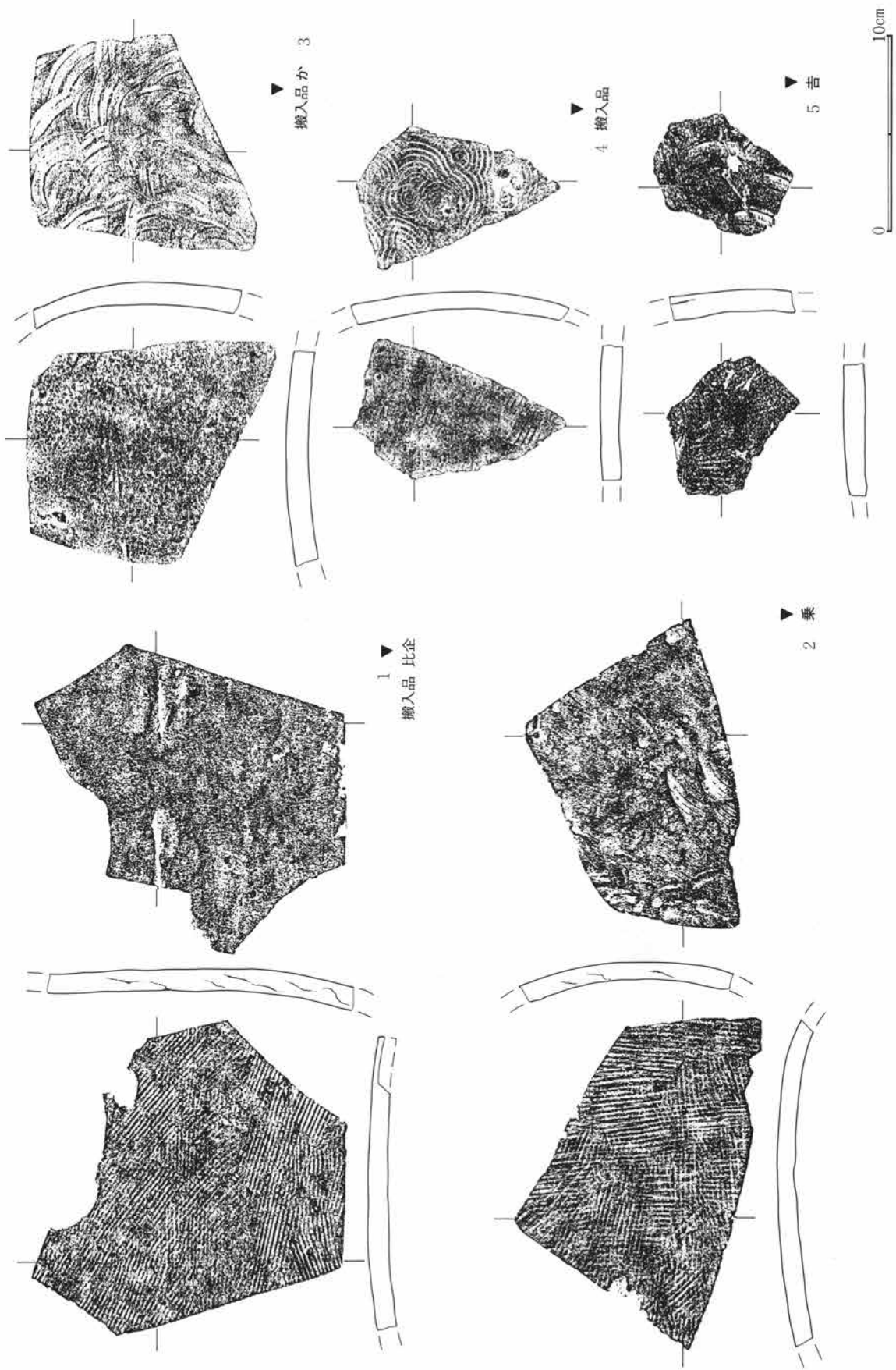
第4節 検出された遺構・遺物



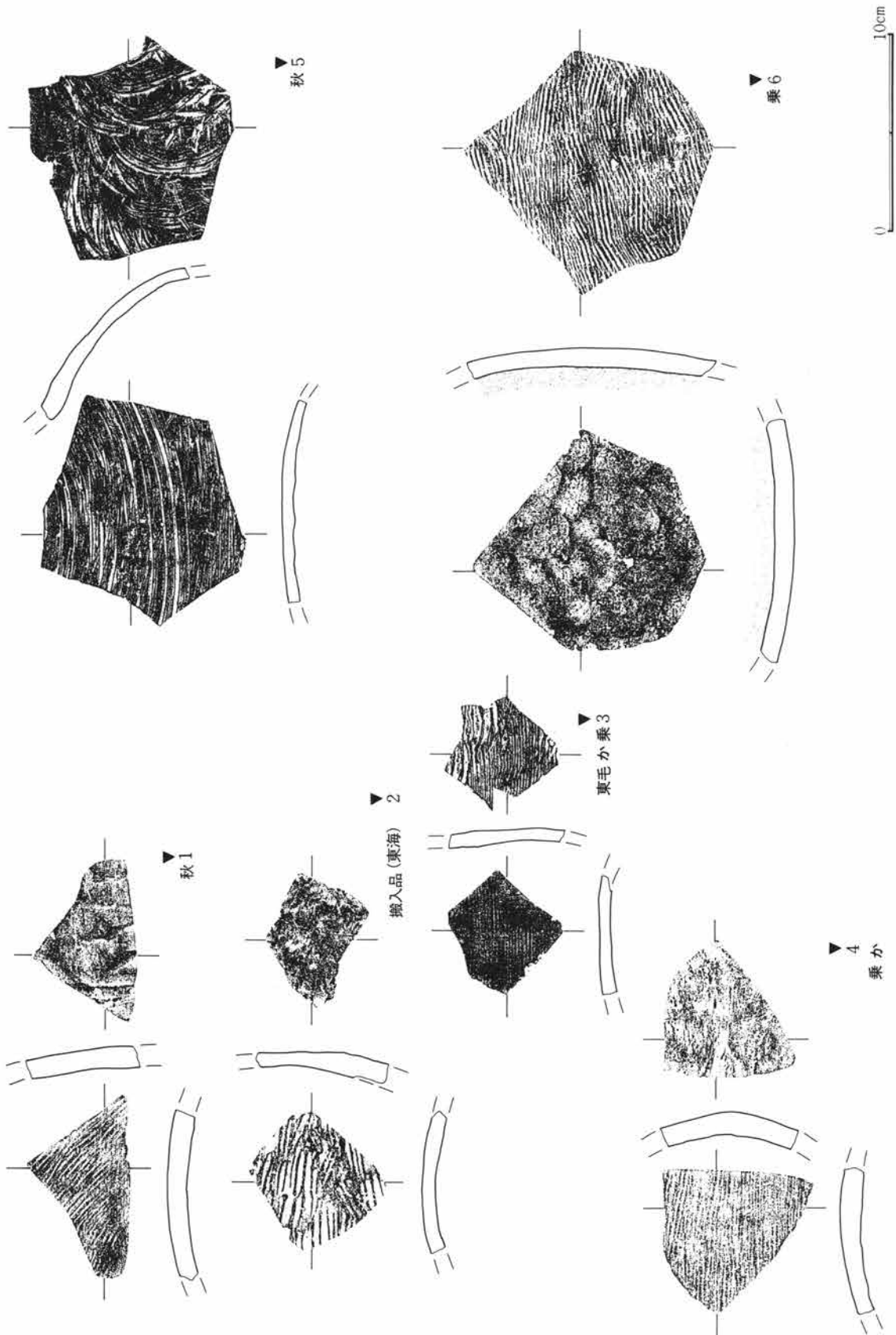
第142図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (26)



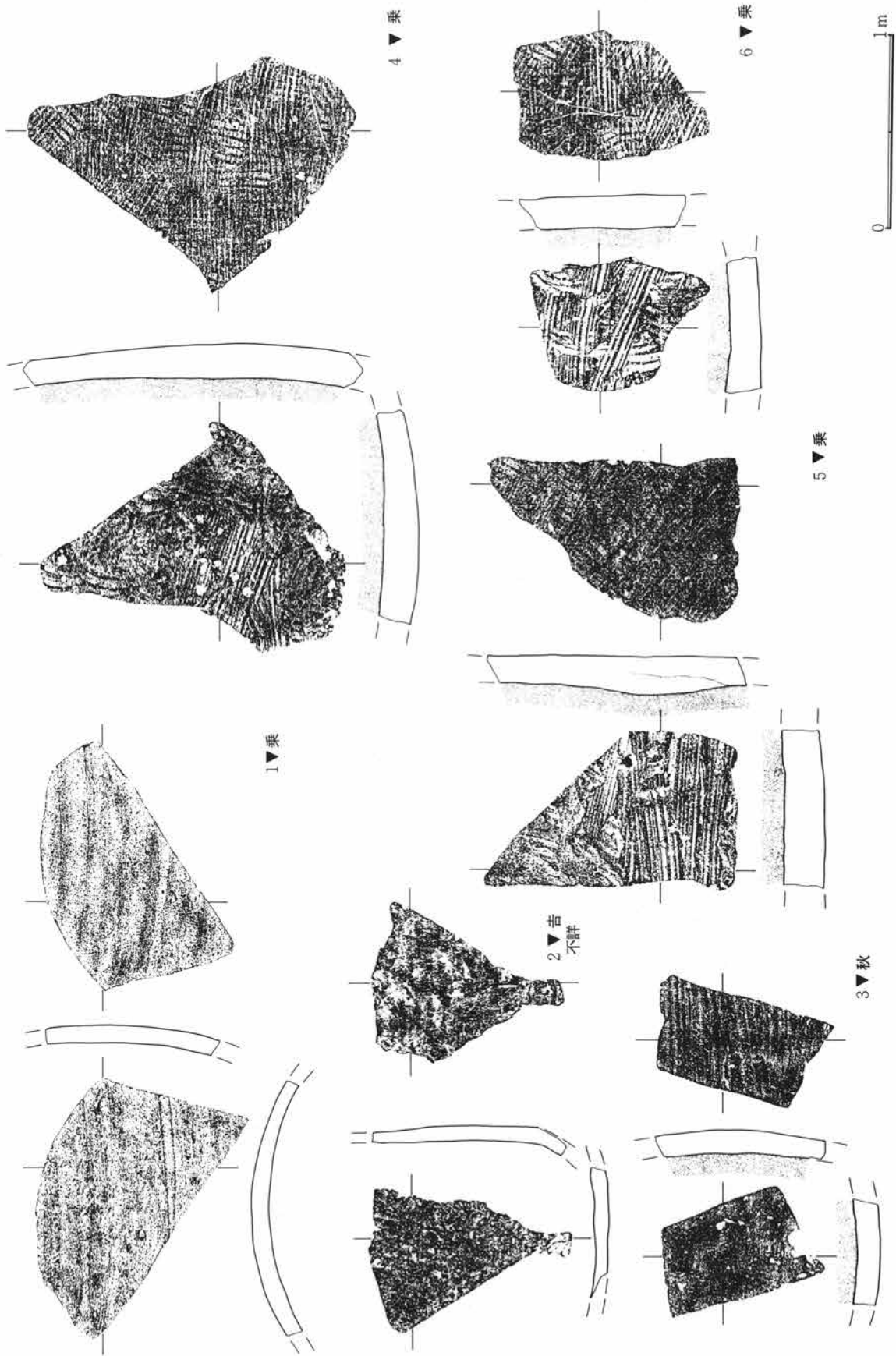
第143図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (27)



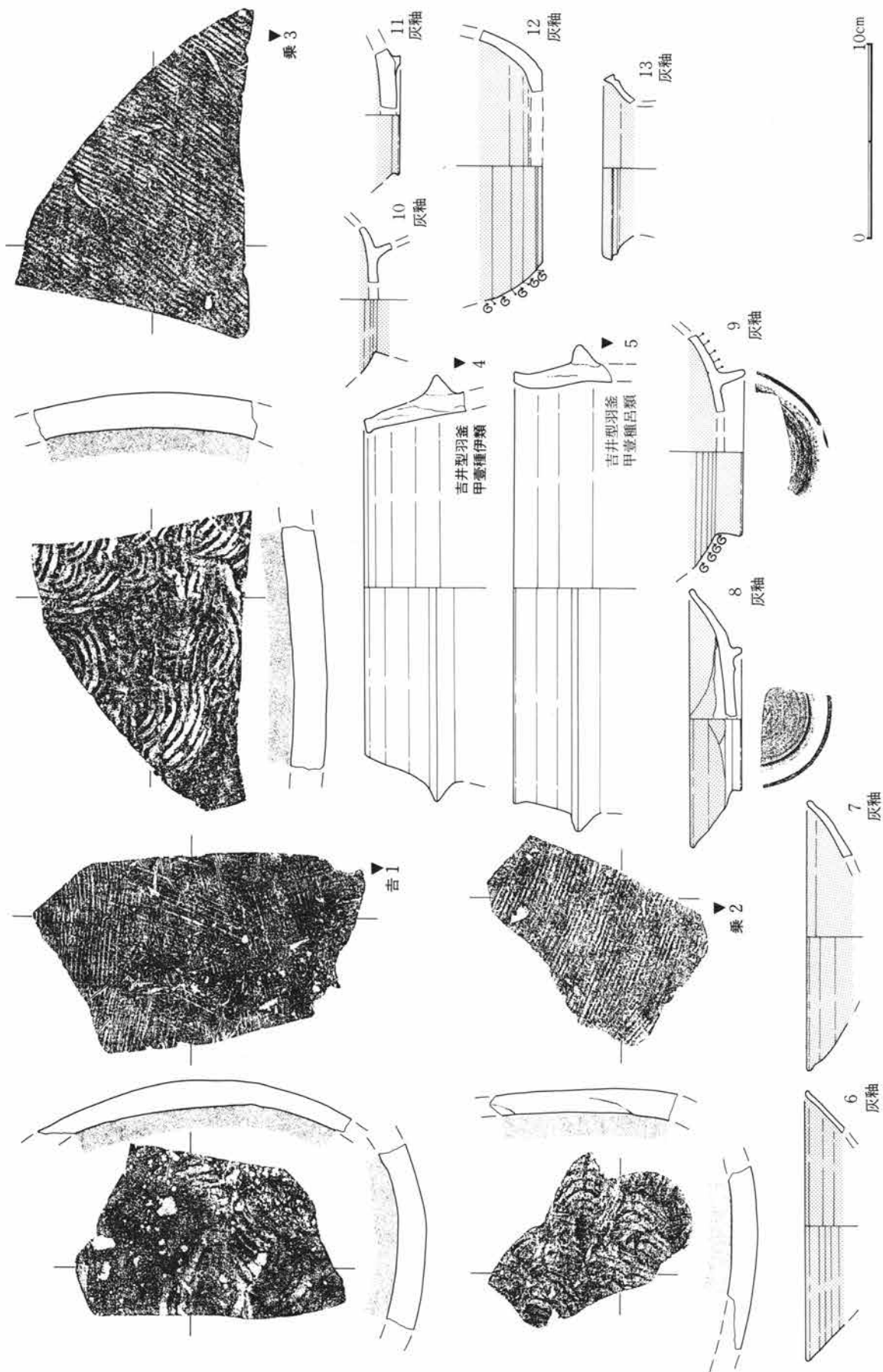
第144図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (28)



第145図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (29)

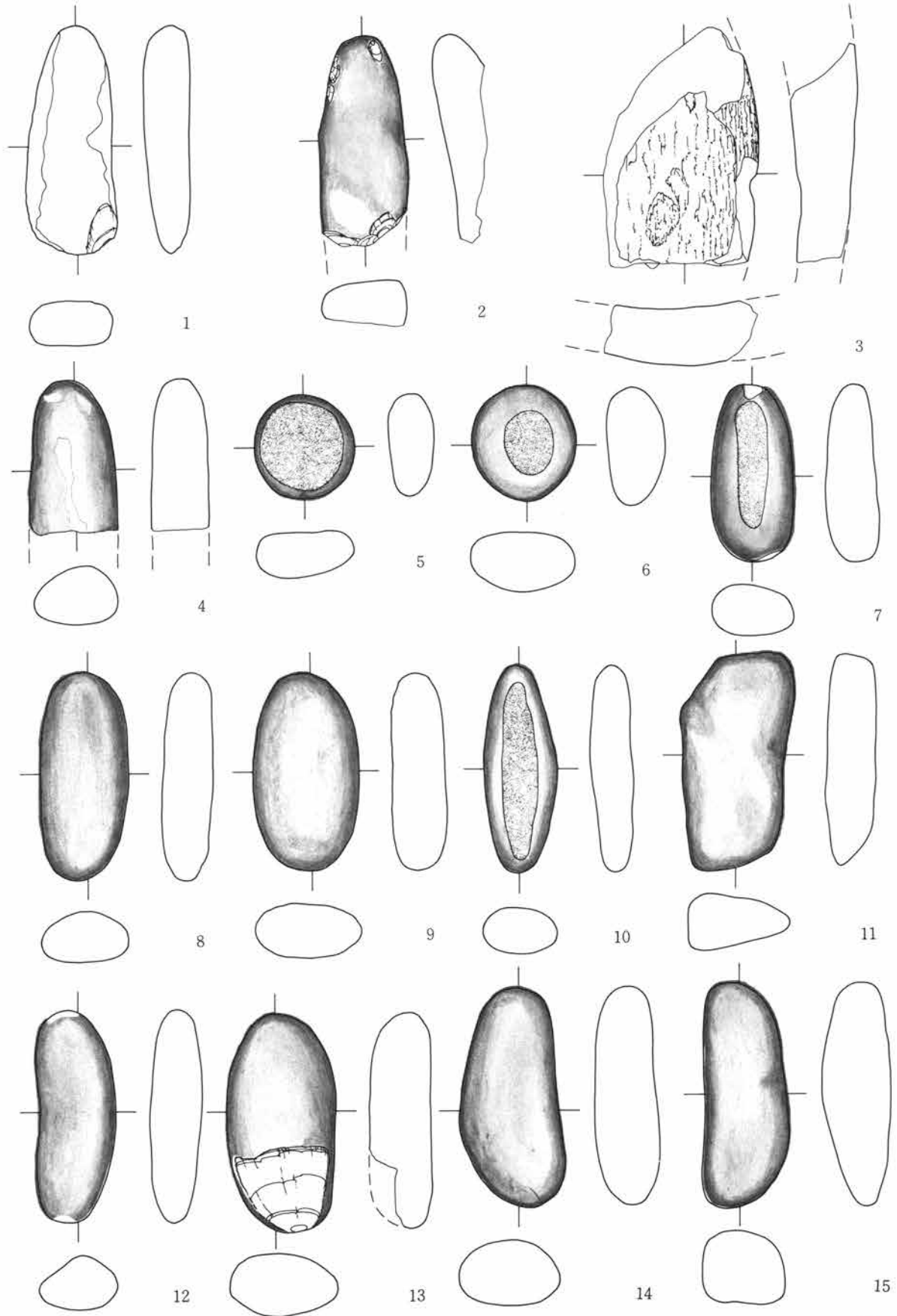


第146図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (30)



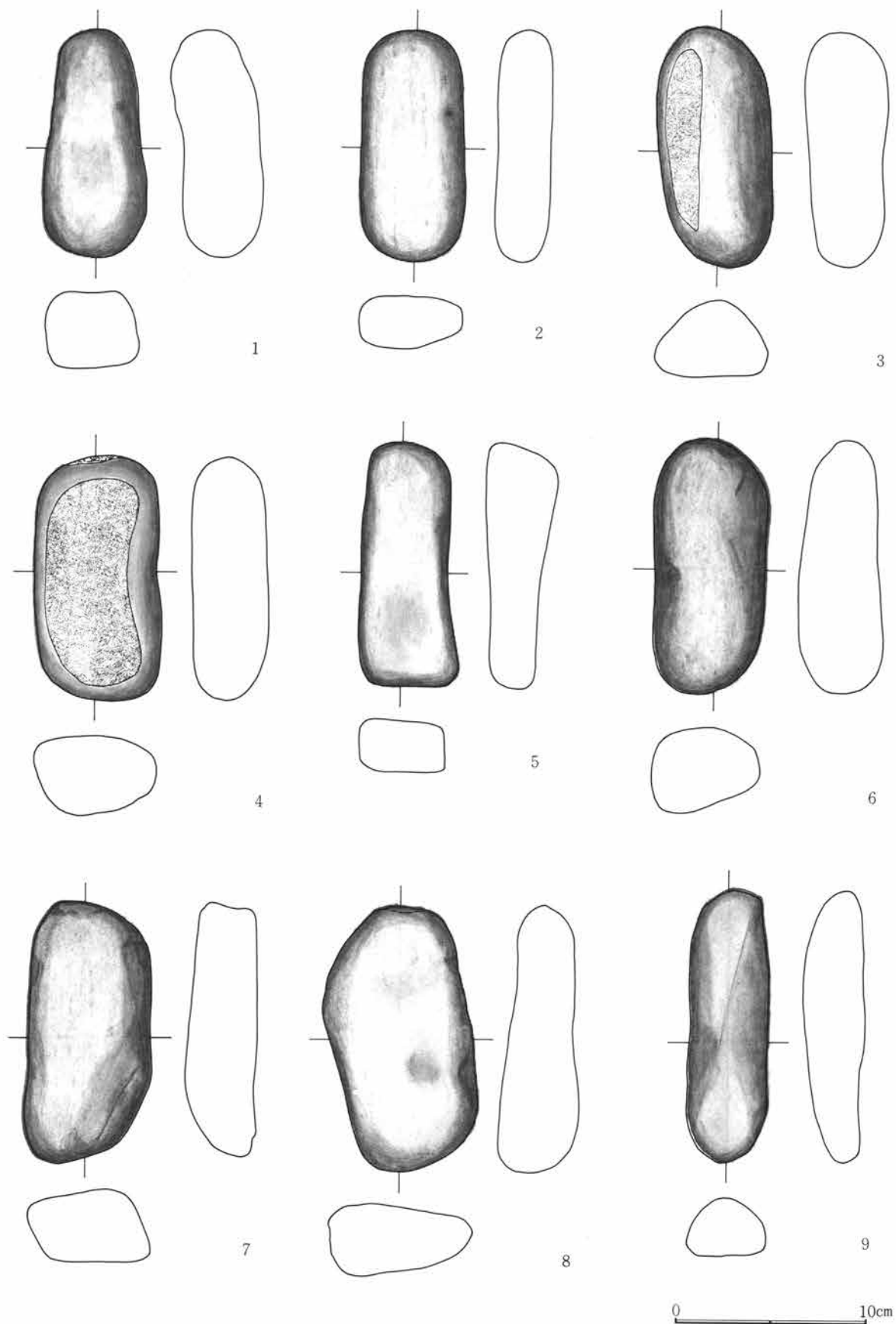
第147図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (31)



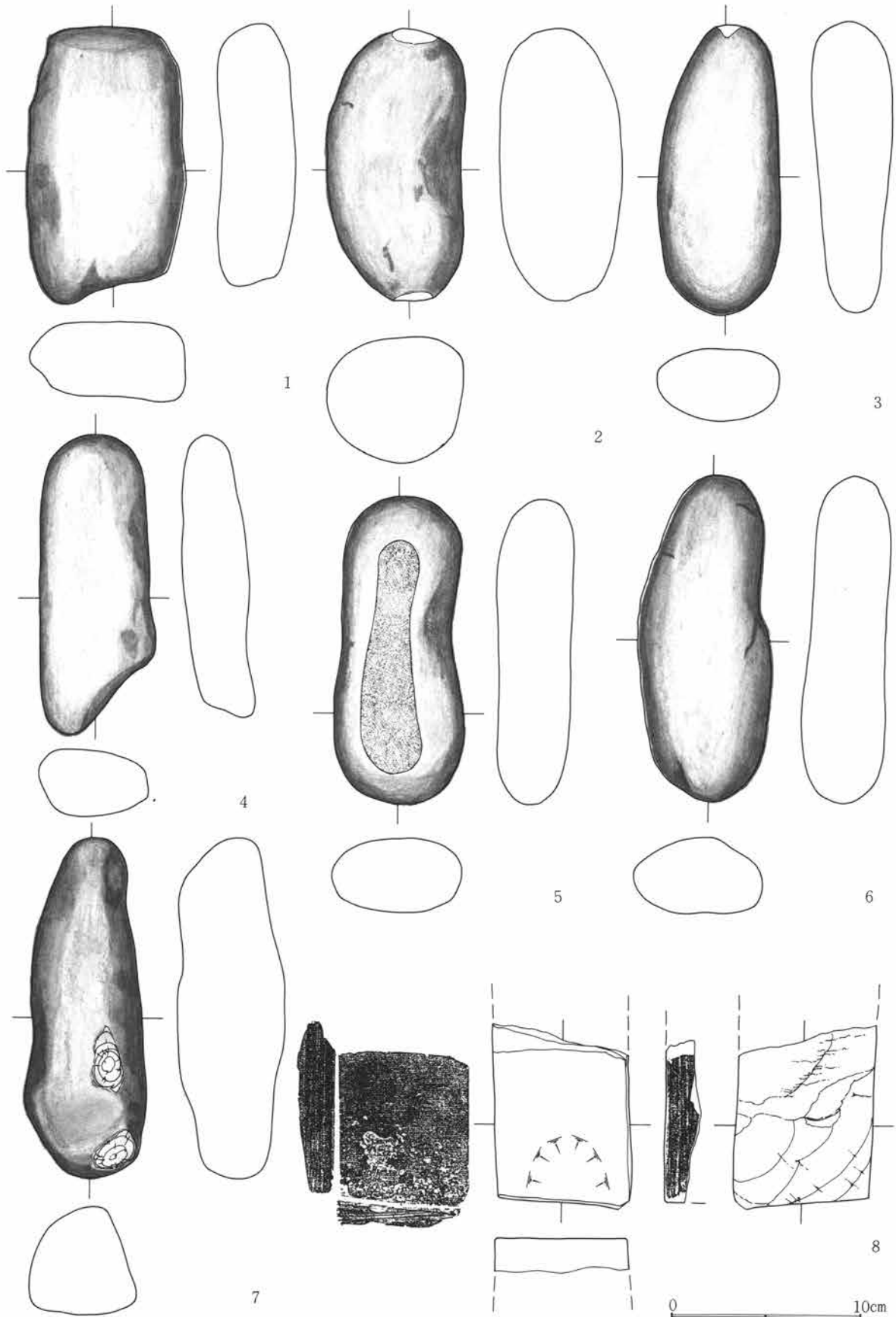


第148図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (32)

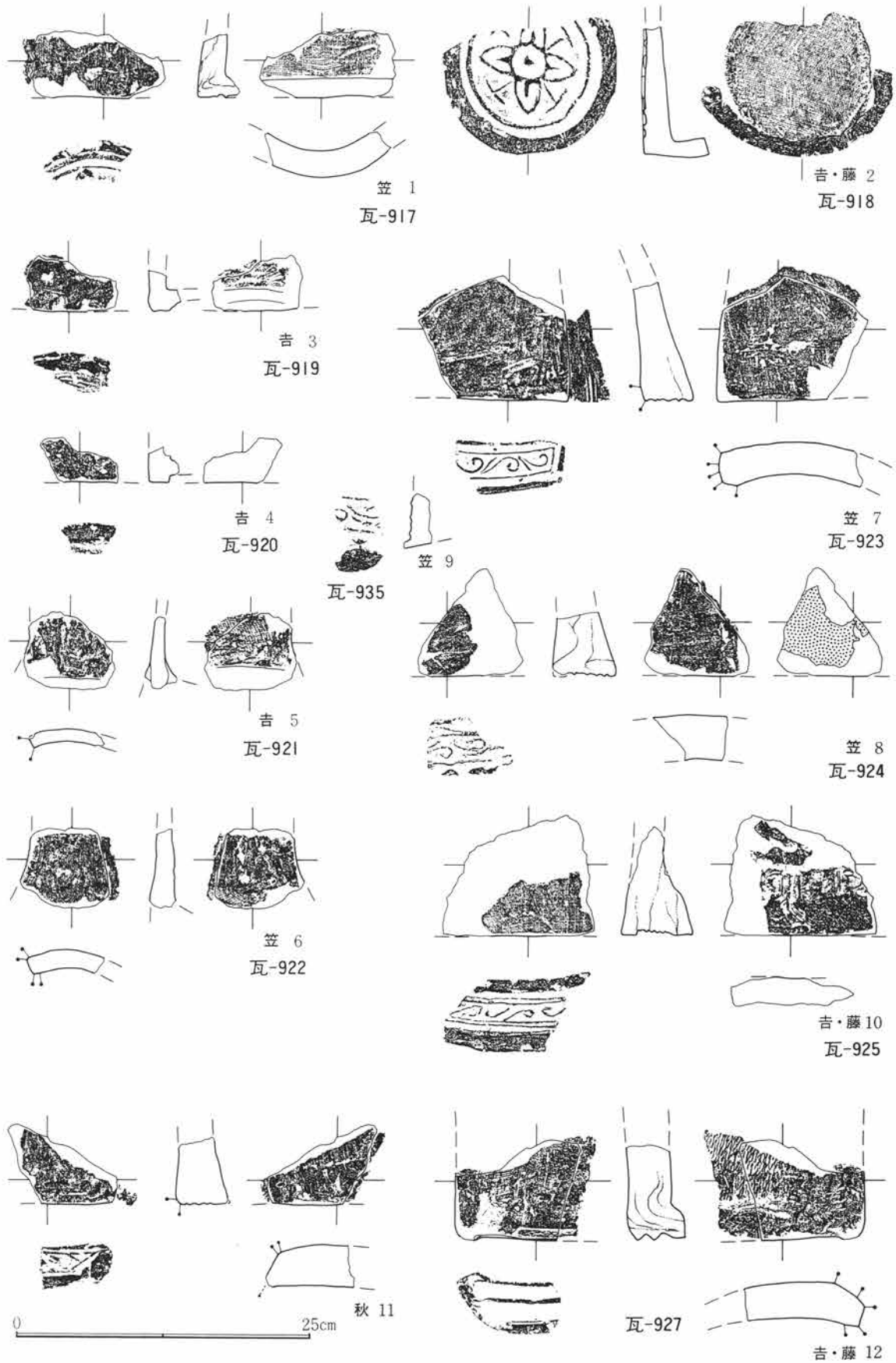
0 10cm



第149図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (33)

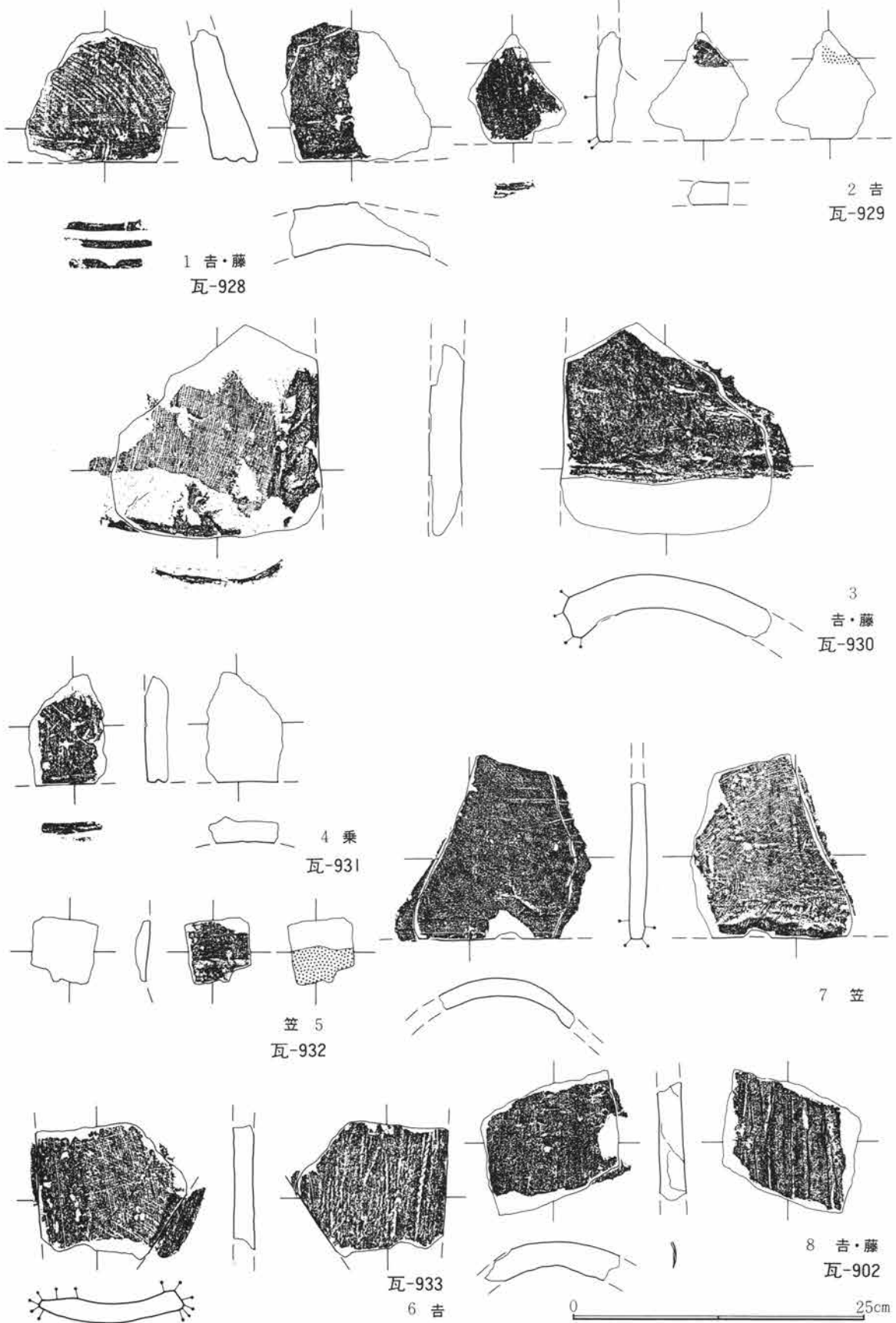


第150図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (34)



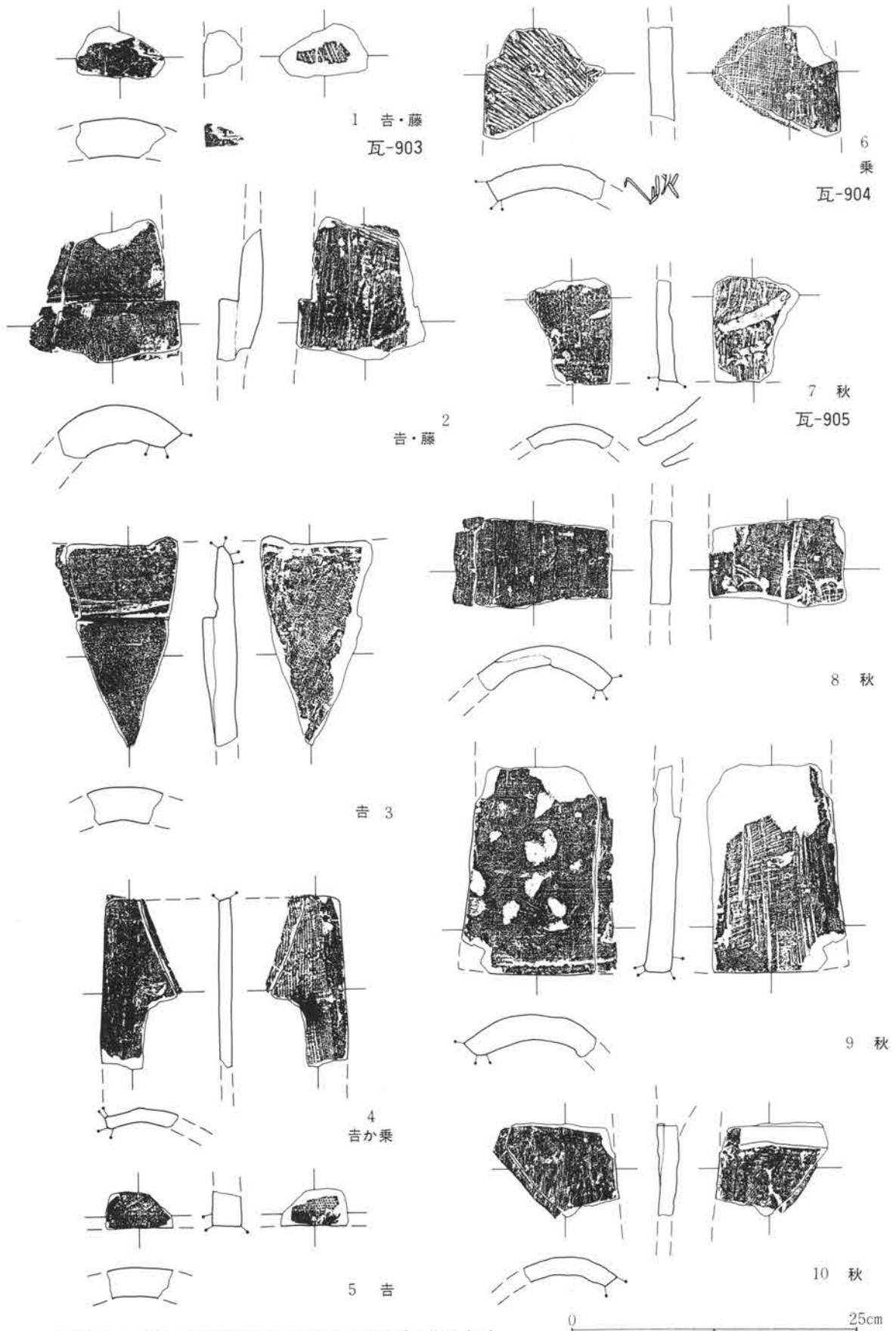
第151図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (35)

第4節 検出された遺構・遺物

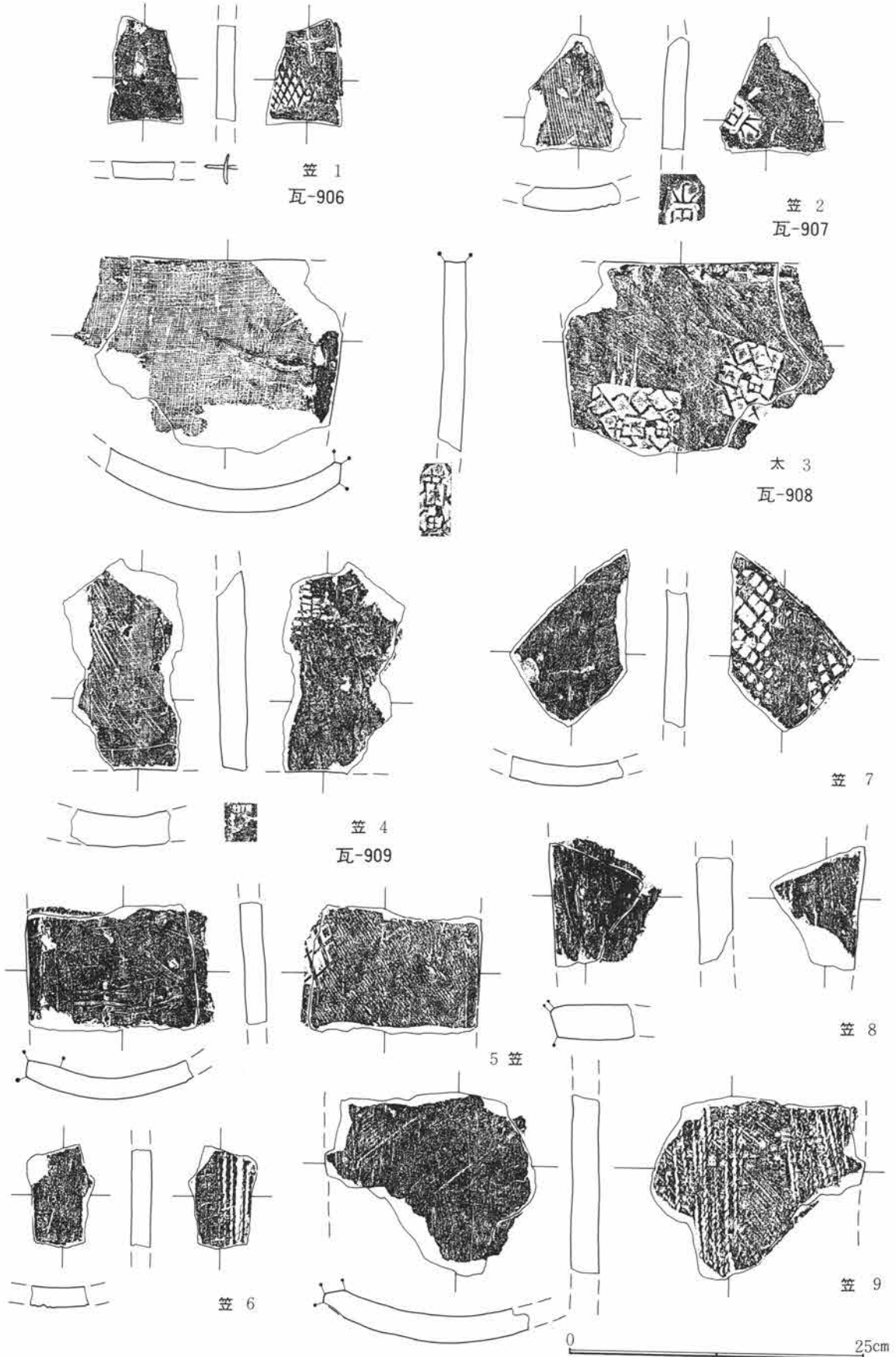


第152図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (36)

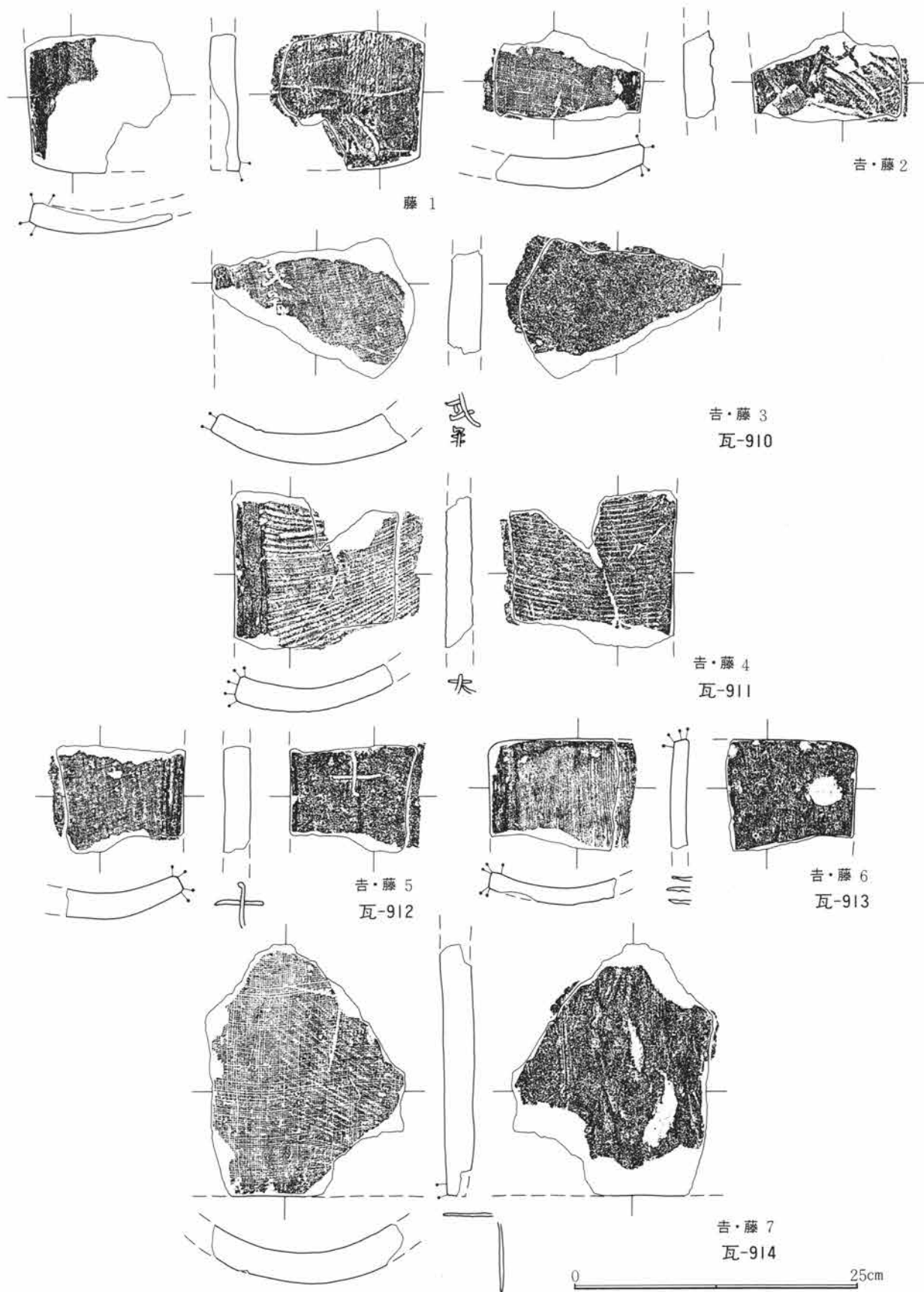
第4章 検出された遺構・遺物



第153図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (37)



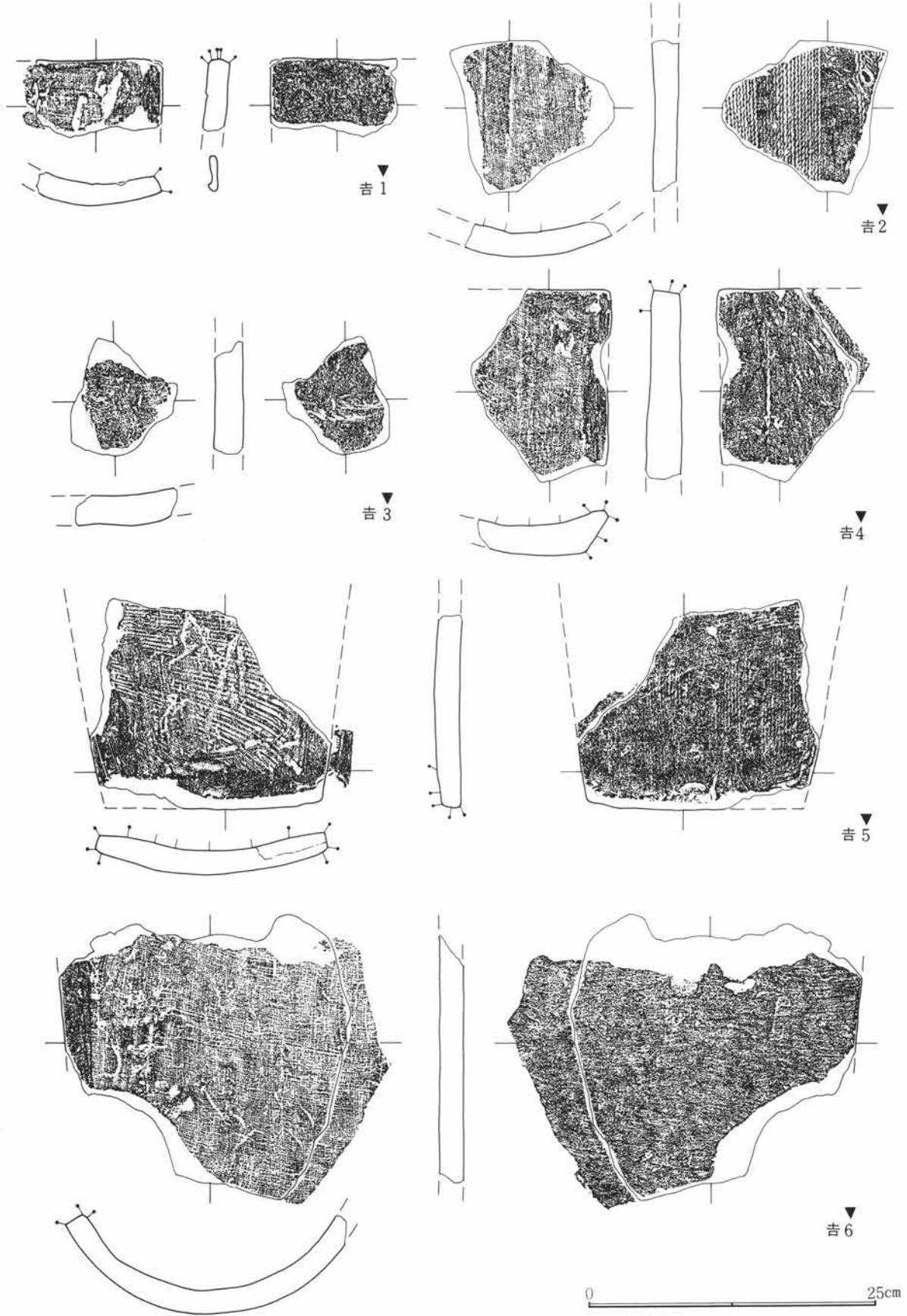
第154図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (38)



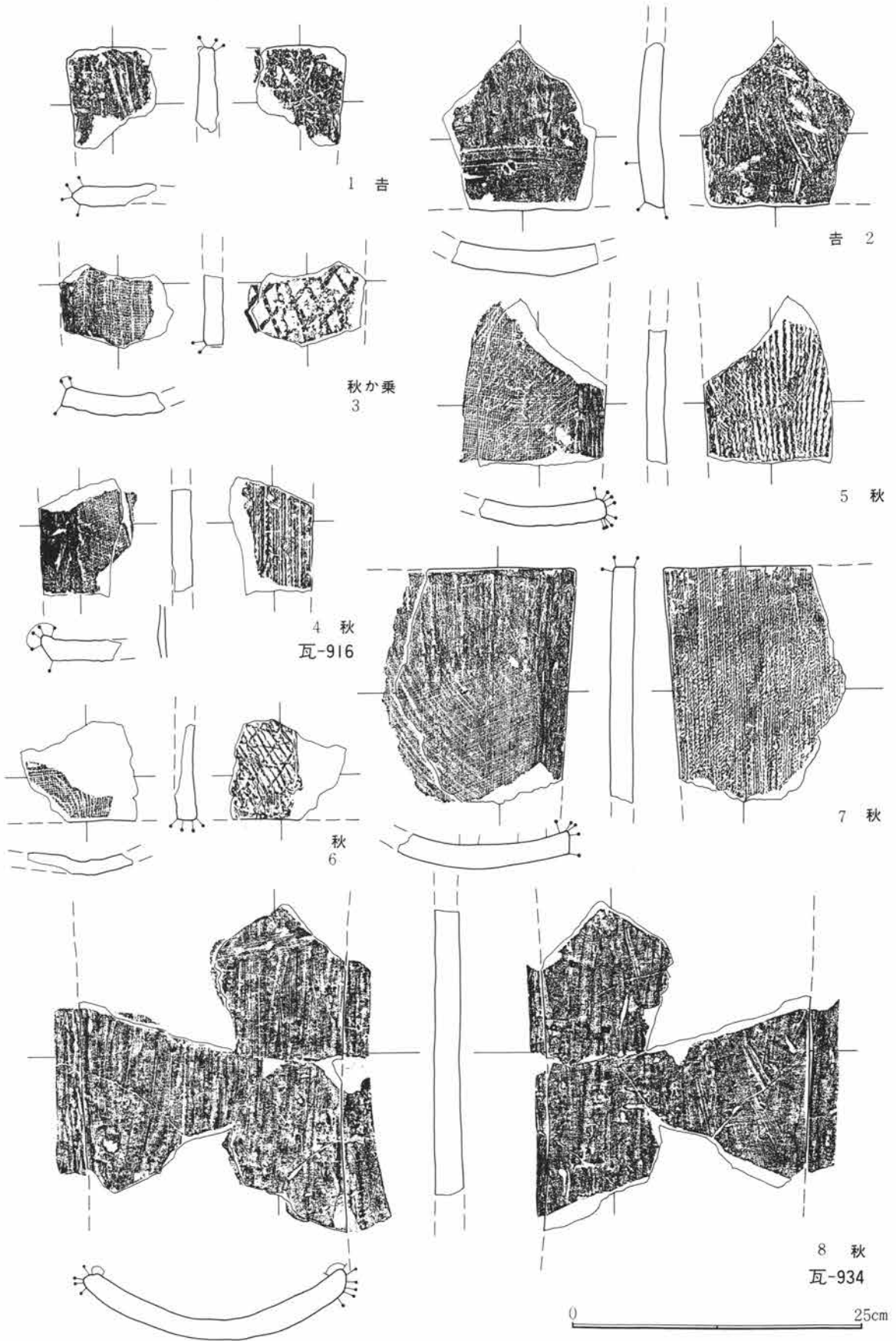
第155図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (39)



第4節 検出された遺構・遺物



第156図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図(40)

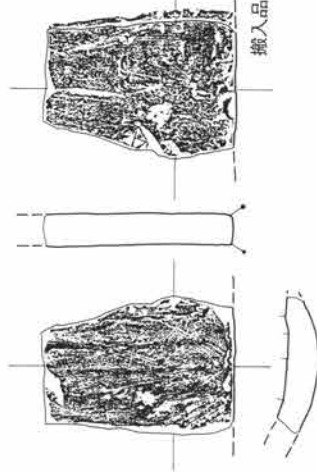


第157図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (41)

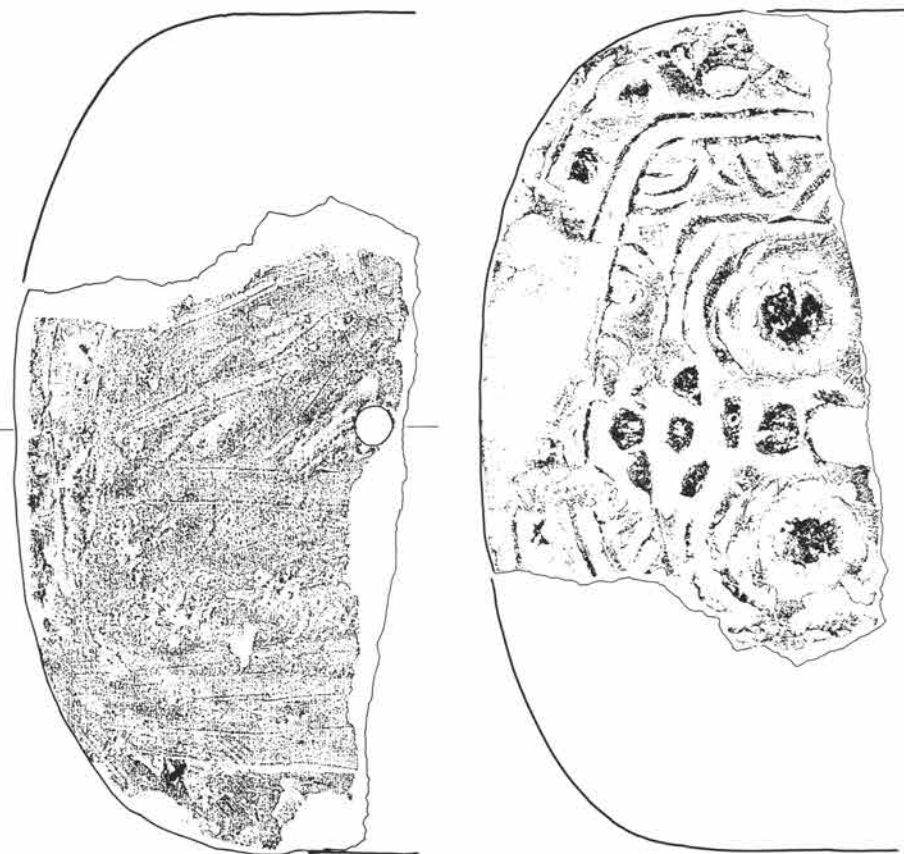
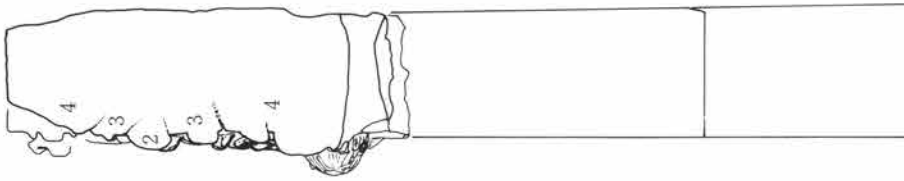
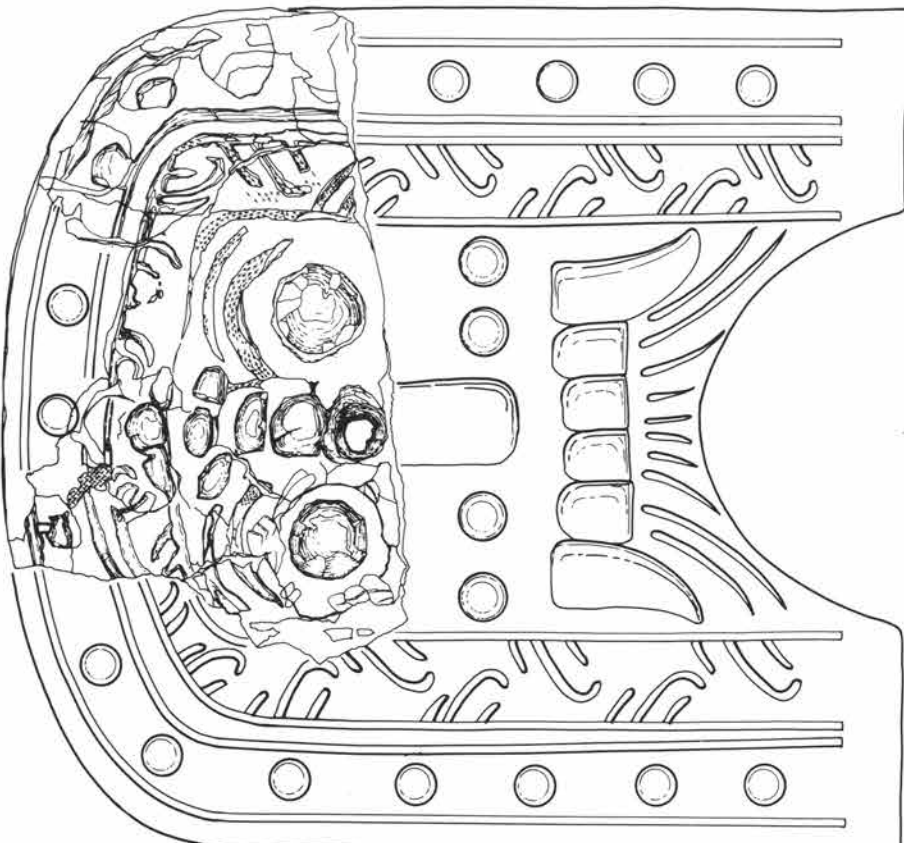
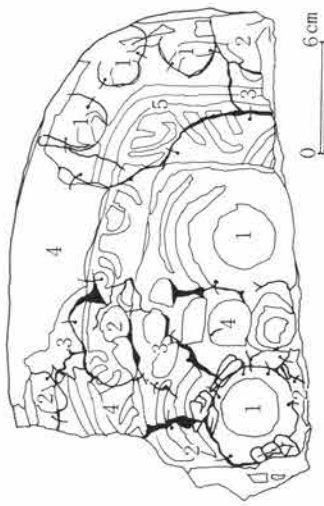
第158図 染谷川河川敷部包含層出土遺物実測図 (42)



挿入品 2



数字は粘土ブロック単位の製作工程順を示す。



## 第2項 瓦 類

### 文字瓦類

今次の報文中で掲載した文字瓦類は合計104点ある。内訳は、3区第1号井戸跡41点・3区第3号井戸跡15点・階段状遺構2点・3区7号土坑2点である。遺構外扱い15点・その他1点と、既刊書の中での掲載漏れ26点・その他2点である。

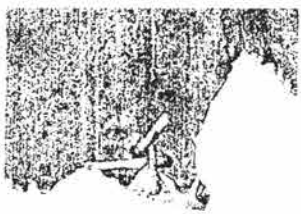
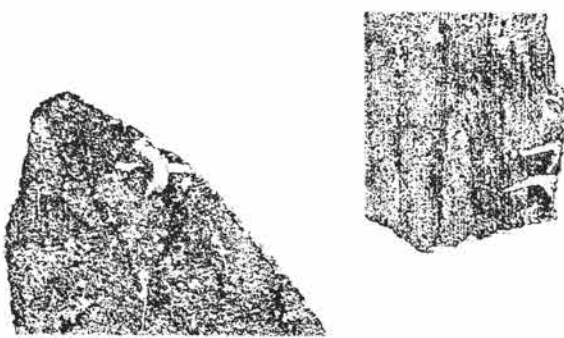




この中で、3区第1号井戸及び第3号井戸跡出土の文字瓦類は、同井戸跡の存続期間である9世紀前半と9世紀後半という年代観を下限として与えることが可能である。又、既刊書の中で、住居跡出土の文字瓦類にも同様に、各住居跡の年代観を下限として与えることが可能である。然し、報告書を作成する中で、全ての遺物に対する検討はこれからであると考えているので、今度、これらの問題点を含め考追してみたいと考えている。

今次報告分で最も特筆出来ることとして、従前に於いて掲載した文字瓦類とほぼ同様な内容であって、これが、3区第1号・3号井戸跡の年代観が与えられるとすれば、文字瓦類の大半は8世紀中頃から9世紀前半代の年代が与えられることである。この所見は、文字瓦以外の瓦種にも言及出来。大半の瓦は、9世紀以前に国分寺に搬入されていたという点にある。この点に就いても詳細な分析は今後の課題として考えたいが現状の指摘として留めておきたい。

### 瓦当瓦類

染谷川河川敷部での瓦当瓦類の出土量は比較的少ない。そして、出土した大半のものが、国分寺創建よりあまり時間的経過が多くないと考えられる一群である。これらの内、文字瓦同様に、3区第1号・3号井戸跡から出土した瓦に就いては、9世紀前半と・9世紀後半を下限の年代観として与えられる。しかし、出土瓦の中には、創得意匠を含む、創建段階のものが多いことから、搬入された瓦自体は、国分寺創建建物に葺かれていた瓦であることが示唆される。この点に就いては、国分境遺跡C区1号井戸跡等と同様なことであるが、台地上での実態を踏まえないと、明確な点が指摘出来ない。この点も文字瓦類と同様であると考えて。今後の課題として考追していきたい。

第4節 検出された遺構・遺物

瓦-816		出土位置		染谷川 河川敷		Y区3号井戸	
挿図番号		41-3		写真図版			
類	男	生産地	吉井				
							読 判読不能
摘要							
瓦-817		出土位置		染谷川 河川敷		Y区3号井戸	
挿図番号		41-4		写真図版			
類	男	生産地	吉井				
							読 子(凸面)・子(凹面)
摘要							
瓦-818		出土位置		染谷川 河川敷		Y区3号井戸	
挿図番号		41-5		写真図版			
類	男	生産地	吉井				
							読 子下
摘要							
瓦-819		出土位置		染谷川 河川敷		Y区3号井戸	
挿図番号		41-6		写真図版			
類	女	生産地	吉井				
							読 富
摘要 刻印。左拓本は印面の状態。							
瓦-820		出土位置		染谷川 河川敷		Y区3号井戸	
挿図番号		41-7		写真図版			
類	女	生産地	笠懸				
							読 佐位か左文字
摘要 佐位郡佐位郷をあらわす。							
瓦-821		出土位置		染谷川 河川敷		Y区3号井戸	
挿図番号		42-1		写真図版			
類	女	生産地	吉井				
							読 伏
摘要							
瓦-822		出土位置		染谷川 河川敷		Y区3号井戸	
挿図番号		42-2		写真図版			
類	女	生産地	吉井				
							読 千
摘要							
瓦-823		出土位置		染谷川 河川敷		Y区3号井戸	
挿図番号		42-3		写真図版			
類	女	生産地	吉井				
							読 平
摘要							


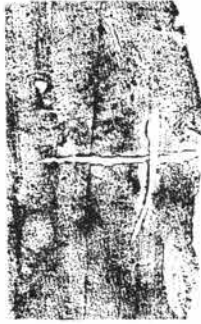
第159図 文字瓦類(1)

第4章 検出された遺構・遺物

瓦-824	出土位置 染谷川 河川敷	Y区3号井戸	挿図番号 42-4	写真図版	類 女	生産地 吉井		読	摘要
瓦-825	出土位置 染谷川 河川敷	Y区3号井戸	挿図番号 42-5	写真図版	類 女	生産地 吉井		読 手	摘要
瓦-826	出土位置 染谷川 河川敷	Y区3号井戸	挿図番号 42-6	写真図版	類 女	生産地 吉井		読 乙	摘要
瓦-827	出土位置 染谷川 河川敷	Y区3号井戸	挿図番号 42-7	写真図版	類 女	生産地 吉井		読 判読不能	摘要
瓦-828	出土位置 染谷川 河川敷	Y区3号井戸	挿図番号 42-8	写真図版	類 女	生産地 吉か乗		読	摘要
瓦-829	出土位置 染谷川 河川敷	Y区3号井戸	挿図番号 43-1	写真図版	類 女	生産地 吉井		読 判読不能	摘要
瓦-830	出土位置 染谷川 河川敷	Y区3号井戸	挿図番号 43-2	写真図版	類 女	生産地 笠懸		読 判読不能	摘要
瓦-843	出土位置 染谷川 河川敷	3区階段状遺構	挿図番号 53-5	写真図版	類 女	生産地 笠懸		読 判読不能	摘要
瓦-844	出土位置 染谷川 河川敷	3区階段状遺構	挿図番号 53-6	写真図版	類 女	生産地 吉井		読 大	摘要

第160図 文字瓦類(2)

第4節 検出された遺構・遺物

瓦-845	出土位置 染谷川 河川敷 Y区1号井戸	挿図番号 16-2	写真図版	類 男	生産地 笠懸		読 判読不能	摘要 篋傷か。
瓦-846	出土位置 染谷川 河川敷 Y区1号井戸	挿図番号 16-3	写真図版	類 男	生産地		読	摘要
瓦-847	出土位置 染谷川 河川敷 Y区1号井戸	挿図番号 16-4	写真図版	類 男	生産地		読 十	摘要
瓦-848	出土位置 染谷川 河川敷 Y区1号井戸	挿図番号 16-5	写真図版	類 男	生産地 吉井		読 ⊕	摘要
瓦-849	出土位置 染谷川 河川敷 Y区1号井戸	挿図番号 16-6	写真図版	類 男	生産地		読 判読不能	摘要
瓦-850	出土位置 染谷川 河川敷 Y区1号井戸	挿図番号 16-7	写真図版	類 男	生産地 吉井		読 判読不能	摘要
瓦-851	出土位置 染谷川 河川敷 Y区1号井戸	挿図番号 16-8	写真図版	類 男	生産地 吉井		読 判読不能	摘要 記号か。篋傷か。
瓦-852	出土位置 染谷川 河川敷 Y区1号井戸	挿図番号 16-9	写真図版	類 男	生産地 笠懸		読 判読不能	摘要
瓦-853	出土位置 染谷川 河川敷 Y区1号井戸	挿図番号 '17-1	写真図版	類 女	生産地 笠懸		読 廣山 左文字	摘要 刻印。左拓本は印面の状態。

第161図 文字瓦類(3)


第4章 検出された遺構・遺物

瓦-854	出土位置 染谷川 河川敷 Y区1号井戸	挿図番号 17-2	写真図版	類 女	生産地	笠懸	読 刻印雀		読 刻印雀	摘要 「雀」は、佐井郡雀部郷の略称。刻印文字であるが、正格子叩き具の手元側に刻まれている。
瓦-855	出土位置 染谷川 河川敷 Y区1号井戸	挿図番号 17-3	写真図版	類 女	生産地	笠懸	読 刻印雀		読 刻印雀	摘要
瓦-856	出土位置 染谷川 河川敷 Y区1号井戸	挿図番号 17-4	写真図版	類 女	生産地	笠懸	読 刻印勢		読 刻印勢	摘要 勢多郡の郡銘瓦か。
瓦-857	出土位置 染谷川 河川敷 Y区1号井戸	挿図番号 17-5	写真図版	類 女	生産地	笠懸	読 山田か		読 山田か	摘要 山田郡の郡銘瓦か。
瓦-858	出土位置 染谷川 河川敷 Y区1号井戸	挿図番号 17-6	写真図版	類 女	生産地	笠懸	読 山田か		読 山田か	摘要 山田郡の郡銘瓦か。
瓦-859	出土位置 染谷川 河川敷 Y区1号井戸	挿図番号 17-7	写真図版	類 女	生産地	吉井	読 辛子三		読 辛子三	摘要 辛は多胡郡辛科郷をあらわす。
瓦-860	出土位置 染谷川 河川敷 Y区1号井戸	挿図番号 17-8	写真図版	類 女	生産地	笠懸	読 二		読 二	摘要
瓦-861	出土位置 染谷川 河川敷 Y区1号井戸	挿図番号 18-1	写真図版	類 女	生産地		読 家		読 家	摘要
瓦-862	出土位置 染谷川 河川敷 Y区1号井戸	挿図番号 18-2	写真図版	類 女	生産地	吉井	読 大家		読 大家	摘要 大家は多胡郡大家郷をあらわす。

第162図 文字瓦類(4)



第4節 検出された遺構・遺物

瓦-863		出土位置		染谷川 河川敷		Y区1号井戸	
挿図番号		18-3		写真図版			
類	女	生産地	秋間				
							読 大か
摘要	秋間古窯跡郡の文字瓦は指頭先で描いたものが多く文字も大きい。一部籠描きのあるものがある。既存では大が多い。						
瓦-864		出土位置		染谷川 河川敷		Y区1号井戸	
挿図番号		18-4		写真図版			
類	女	生産地	吉井				
							読 大
摘要							
瓦-865		出土位置		染谷川 河川敷		Y区1号井戸	
挿図番号		18-5		写真図版			
類	女	生産地	吉井				
							読 大
摘要							
瓦-866		出土位置		染谷川 河川敷		Y区1号井戸	
挿図番号		18-6		写真図版			
類	女	生産地					
							読 長女
摘要	女は万呂の異体字。						
瓦-867		出土位置		染谷川 河川敷		Y区1号井戸	
挿図番号		18-7		写真図版			
類	女	生産地					
							読 判読不能
摘要							
瓦-868		出土位置		染谷川 河川敷		Y区1号井戸	
挿図番号		18-8		写真図版			
類	女	生産地	吉・藤				
							読 田
摘要							
瓦-869		出土位置		染谷川 河川敷		Y区1号井戸	
挿図番号		19-1		写真図版			
類	女	生産地					
							読 大伴か
摘要							
瓦-870		出土位置		染谷川 河川敷		Y区1号井戸	
挿図番号		19-2		写真図版			
類	女	生産地	吉井				
							読 生 左文字
摘要							

第163図 文字瓦類(5)

第4章 検出された遺構・遺物

瓦-871	出土位置 染谷川 河川敷	Y区1号井戸	挿図番号 19-3	写真図版	類 女	生産地 吉・藤		読 判読不能	摘要
瓦-872	出土位置 染谷川 河川敷	Y区1号井戸	挿図番号 19-4	写真図版	類 女	生産地		読 成	摘要
瓦-873	出土位置 染谷川 河川敷	Y区1号井戸	挿図番号 19-5	写真図版	類 女	生産地 吉井		読 判読不能	摘要
瓦-874	出土位置 染谷川 河川敷	Y区1号井戸	挿図番号 19-6	写真図版	類 女	生産地		読 子	摘要
瓦-875	出土位置 染谷川 河川敷	Y区1号井戸	挿図番号 19-7	写真図版	類 女	生産地 笠懸		読 判読不能	摘要
瓦-876	出土位置 染谷川 河川敷	Y区1号井戸	挿図番号 19-8	写真図版	類 女	生産地 吉井		読 判読不能	摘要
瓦-877	出土位置 染谷川 河川敷	Y区1号井戸	挿図番号 20-1	写真図版	類 女	生産地		読 大	摘要
瓦-878	出土位置 染谷川 河川敷	Y区1号井戸	挿図番号 20-2	写真図版	類 女	生産地		読 十か	摘要

第164図 文字瓦類(6)

第4節 検出された遺構・遺物

瓦-879	出土位置	桑谷川 河川敷	Y区1号井戸	挿図番号	20-3	写真図版		類	女	生産地	吉井		読 判読不能	摘要
瓦-880	出土位置	桑谷川 河川敷	Y区1号井戸	挿図番号	20-4	写真図版		類	女	生産地			読 十か	摘要
瓦-881	出土位置	桑谷川 河川敷	Y区1号井戸	挿図番号	20-5	写真図版		類	女	生産地	吉井		読 判読不能	摘要
瓦-882	出土位置	桑谷川 河川敷	Y区1号井戸	挿図番号	20-6	写真図版		類	女	生産地	吉井		読 判読不能	摘要
瓦-883	出土位置	桑谷川 河川敷	Y区1号井戸	挿図番号	20-7	写真図版		類	女	生産地	吉井		読 判読不能	摘要
瓦-884	出土位置	桑谷川 河川敷	Y区1号井戸	挿図番号	33-2	写真図版		類	男	生産地	吉井		読 判読不能	摘要
瓦-885	出土位置	桑谷川 河川敷	Y区1号井戸	挿図番号	33-3	写真図版		類	女	生産地	笠懸		読 刻印雀	摘要
瓦-900	出土位置	桑谷川 河川敷	3区7号土坑	挿図番号	97-6	写真図版		類	女	生産地	吉井		読 □十	摘要
瓦-901	出土位置	桑谷川 河川敷	3区7号土坑	挿図番号	97-7	写真図版		類	女	生産地	吉井		読 判読不能	摘要
								摘要	「雀」は、佐井郡雀部郷の略称。刻印文字であるが、正格子叩き具の手元側に刻まれている。					
								摘要	記号か。					

第165図 文字瓦類(7)

第4章 検出された遺構・遺物

瓦-902	出土位置	染谷川外 河川敷	挿図番号	152-8	写真図版	類	男	生産地	吉・藤	読	判読不能		摘要	
瓦-903	出土位置	染谷川外 河川敷	挿図番号	153-1	写真図版	類	男	生産地	吉・藤	読	刻印		摘要	刻印。左拓本は印面の状態。瓦-819参考
瓦-904	出土位置	染谷川外(3区)	挿図番号	153-6	写真図版	類	男	生産地	乗附	読			摘要	
瓦-905	出土位置	染谷川外 河川敷	挿図番号	153-7	写真図版	類	男	生産地	秋間	読	判読不能		摘要	
瓦-906	出土位置	染谷川外(3区III層)	挿図番号	154-1	写真図版	類	女	生産地	笠懸	読	十		摘要	
瓦-907	出土位置	KK17外	挿図番号	154-2	写真図版	類	女	生産地	笠懸	読	刻印山田		摘要	山田郡の郡銘瓦。刻印。左拓本は印面の状態。
瓦-908	出土位置	染谷川外(3区III層)	挿図番号	154-3	写真図版	類	女	生産地	太田か	読	刻印菌田		摘要	山田郡菌田郷をあらわす。郷名刻印。刻印。左拓本は印面の状態。
瓦-909	出土位置	染谷川外(III層)	挿図番号	154-4	写真図版	類	女	生産地	笠懸	読	刻印雀		摘要	「雀」は、佐位郡雀部郷の略称。刻印文字であるが、正格子叩き具の手元側に刻まれている。
瓦-910	出土位置	染谷川外(2区III層)	挿図番号	155-3	写真図版	類	女	生産地	吉・藤	読	武美		摘要	多胡郡武美郷をあらわす。既出例に武美子がある。


第166図 文字瓦類(8)

第4節 検出された遺構・遺物

瓦-911	出土位置	染谷川 河川敷外(III層)	挿図番号	155-4	写真図版	類	女	生産地	吉・藤	説	大	摘要
												
摘要												
瓦-912	出土位置	染谷川 河川敷外(3区III層)	挿図番号	155-5	写真図版	類	女	生産地	吉・藤	説	七か十か	摘要
												
摘要												
瓦-913	出土位置	染谷川 河川敷外(III層)	挿図番号	155-6	写真図版	類	女	生産地	吉・藤	説	判読不能	摘要
												
摘要												
瓦-914	出土位置	染谷川 河川敷2区集石	挿図番号	155-7	写真図版	類	女	生産地	吉・藤	説		摘要
												
摘要												
瓦-915	出土位置	A区遺構外(攪乱)	挿図番号	156-1	写真図版	類	女	生産地	吉井	説	判読不能	摘要
												
摘要												
瓦-916	出土位置	染谷川 河川敷外(2区II層)	挿図番号	157-4	写真図版	類	女	生産地	秋間	説	判読不能	摘要
												
摘要												
瓦-937	出土位置	G区6号井戸	挿図番号	-2	写真図版	類	女	生産地	笠懸	説	二	摘要
												
摘要												
瓦-938	出土位置	A区外(III層)	挿図番号	-3	写真図版	類	女	生産地	笠懸	説	二	摘要
												
摘要												
瓦-939	出土位置	G区4号井戸	挿図番号	-4	写真図版	類	女	生産地	吉井	説	大千か	摘要
												
摘要												

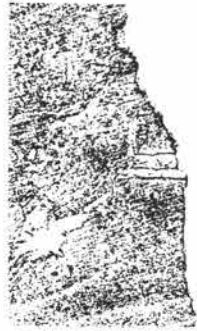


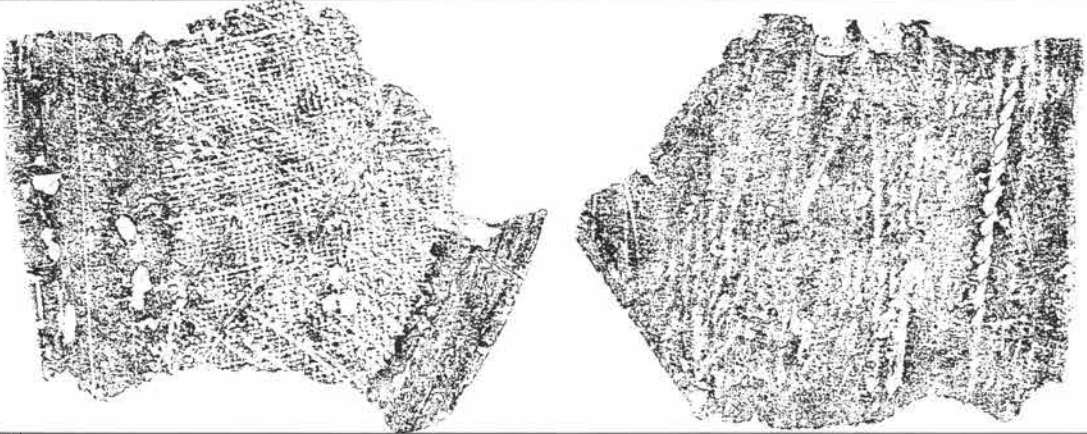

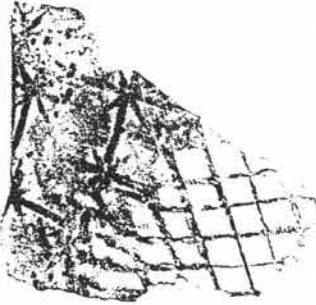

第167図 文字瓦類(9)

第4章 検出された遺構・遺物

瓦-940	出土位置	A区遺構外(表土)	
挿図番号	-5	写真図版	
類	男	生産地	笠懸
			読 判読不能
摘要			
瓦-941	出土位置	B区遺構外(III層)	
挿図番号	-1	写真図版	
類	女	生産地	笠懸
			読 刻印判読不能
摘要			
瓦-942	出土位置	A区遺構外(表土)	
挿図番号	-2	写真図版	
類	女	生産地	笠懸
			読 判読不能
摘要			
瓦-943	出土位置	B区外(1号溝)	
挿図番号	-6	写真図版	
類	女	生産地	吉・藤
			読 判読不能
摘要			
瓦-944	出土位置		
挿図番号	-7	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 判読不能
摘要			
瓦-945	出土位置	B区外(攪乱)	
挿図番号	-8	写真図版	
類	男	生産地	
			読 大
摘要	鋭利な工具による極めて細い線描き。		
瓦-946	出土位置	染谷川 河川敷外(3区III層)	
挿図番号	-9	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 十か
摘要			
瓦-947	出土位置	B区外(22号溝)	
挿図番号	-1	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 力か
摘要			
瓦-948	出土位置	A区外(表土)	
挿図番号	-2	写真図版	
類	女	生産地	吉井
			読 判読不能
摘要			



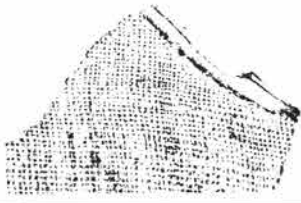


第168図 文字瓦類 (10)

第4節 検出された遺構・遺物

瓦-949		出土位置		KK17外(II層)	
挿図番号		-3		写真図版	
類	女	生産地			
					読 二か
摘要					
瓦-950		出土位置		B区外(1号井戸)	
挿図番号		-4		写真図版	
類	女	生産地	吉井		
					読 判読不能
摘要					
		出土位置		桑谷川敷 3区1号集石	
挿図番号				写真図版	
類	女	生産地	吉井		
					読 刻印多大
摘要 多胡郡大家郷をあらわす。					
瓦-933		出土位置		桑谷川敷外(1区)	
挿図番号		152-6		写真図版	
類	隅切り女瓦	生産地			
					
摘要					
瓦-951		出土位置		A区1号井戸	
挿図番号		-3		写真図版	
類	女	生産地	笠懸		
					読 米格子
摘要					
瓦-953		出土位置		B区外(1号井戸)	
挿図番号		-5		写真図版	
類	女	生産地	笠懸		
					読 米格子と斜格子
摘要					
瓦-347		出土位置		C区30号住	
挿図番号		-3		写真図版	
類	女	生産地	吉井		
					読 山か
摘要 第4分冊文字瓦類(524図)					

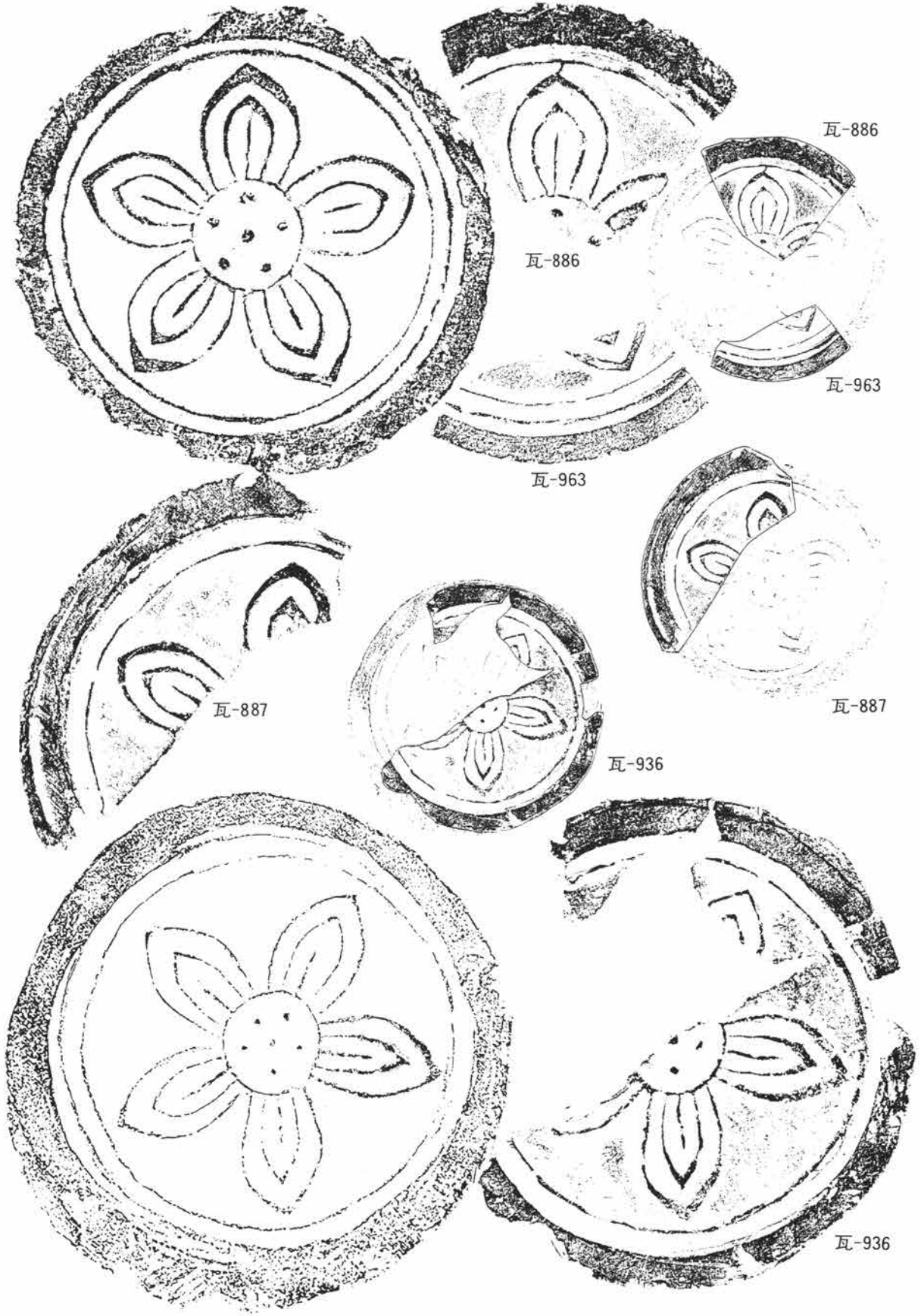
第169図 文字瓦類 (11)

第4章 検出された遺構・遺物

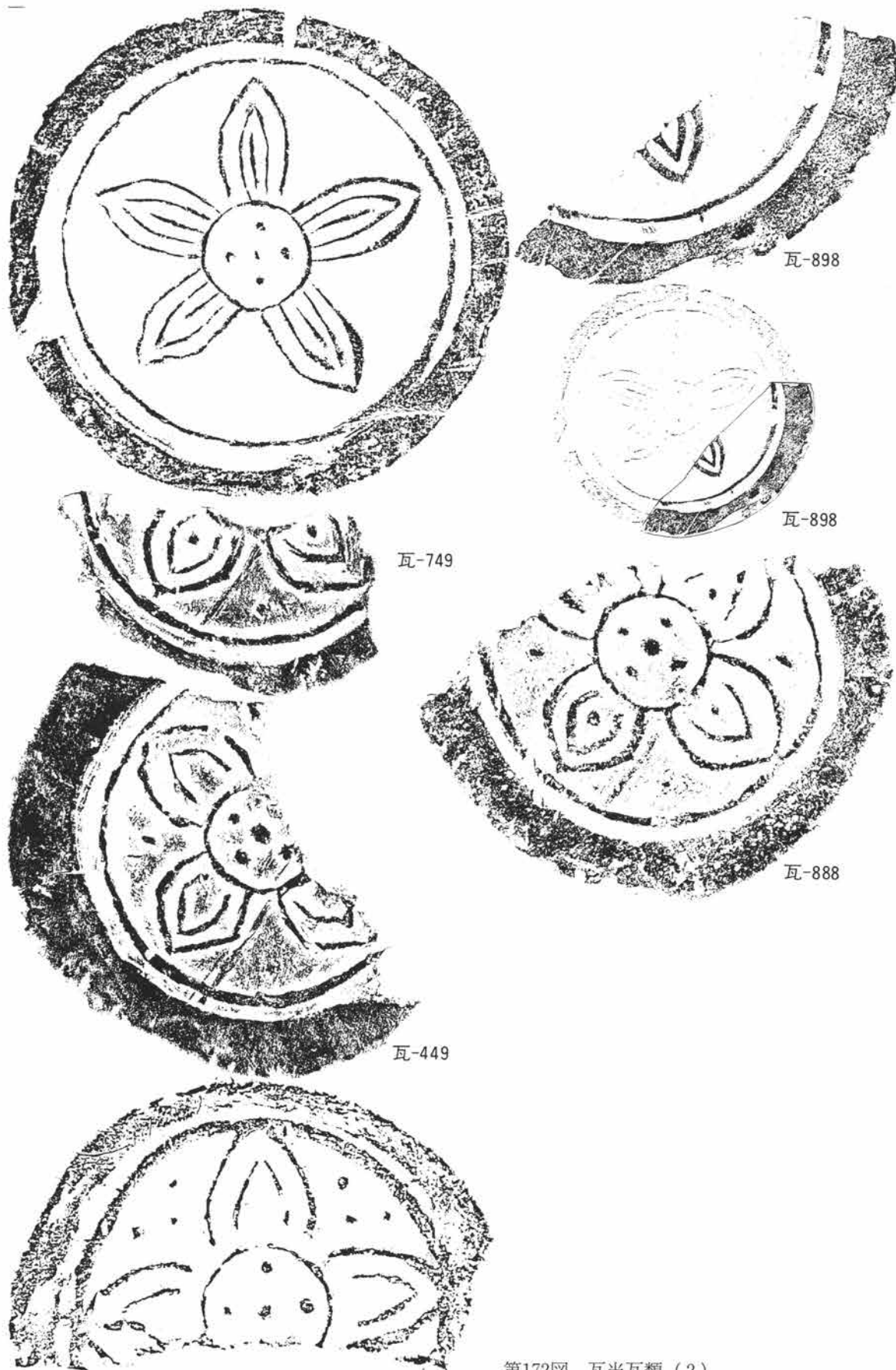
瓦-954	出土位置	B区外(1号溝)	
挿図番号	-16 写真図版		
類	男	生産地	
			読 ⊕ か
摘要	記号か。瓦848と同じか。		
瓦-955	出土位置	B区外	
挿図番号	-3 写真図版		
類	男	生産地	
			読 判読不能
摘要			
瓦-956	出土位置	B区外(III層)	
挿図番号	-4 写真図版		
類	男	生産地	
			読 判読不能
摘要			
瓦-957	出土位置	C区4号井戸	
挿図番号	-5 写真図版		
類	女	生産地	
			読 判読不能
摘要			
瓦-958	出土位置	C区外(21号土坑)	
挿図番号	-6 写真図版		
類	女	生産地	
			読 判読不能
摘要			
瓦-959	出土位置	C区6号井戸	
挿図番号	-7 写真図版		
類	女	生産地	秋間
			読 大 か
摘要	秋間古窯跡群の文字瓦は指頭先で描いたものが多く文字も大きい。一部窠描きものがある。既存では大が多い。		
瓦-960	出土位置	(V区)	
挿図番号	-8 写真図版		
類	女	生産地	
			読 判読不能
摘要	記号か。二か		
瓦-961	出土位置	B区外(III層)	
挿図番号	-9 写真図版		
類	女	生産地	
			読 判読不能
摘要			
瓦-962	出土位置	Z区外(一括)	
挿図番号	-10 写真図版		
類	女	生産地	
			読 判読不能
摘要	記号か。瓦-901と同じか。		

第170図 文字瓦類 (12)

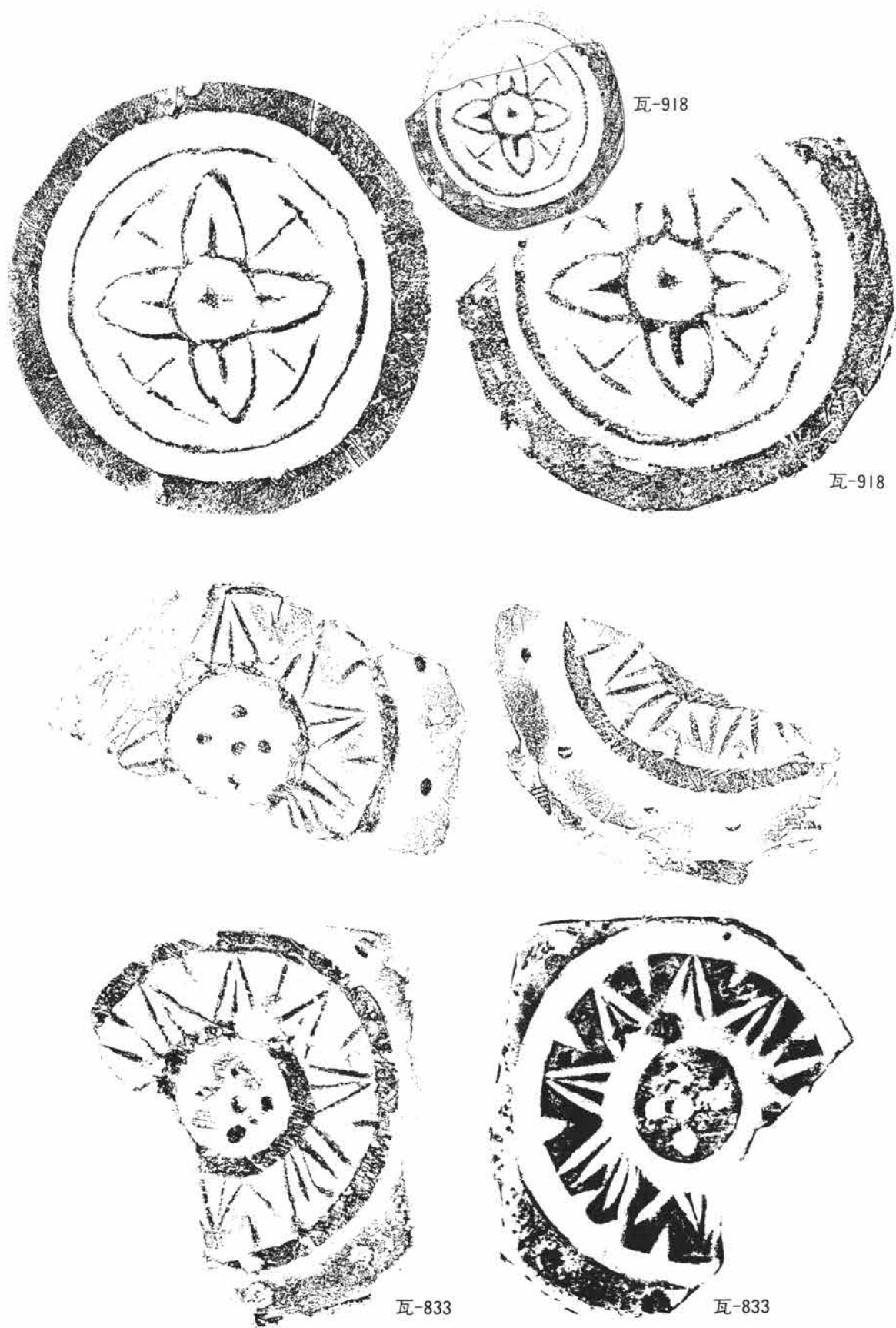




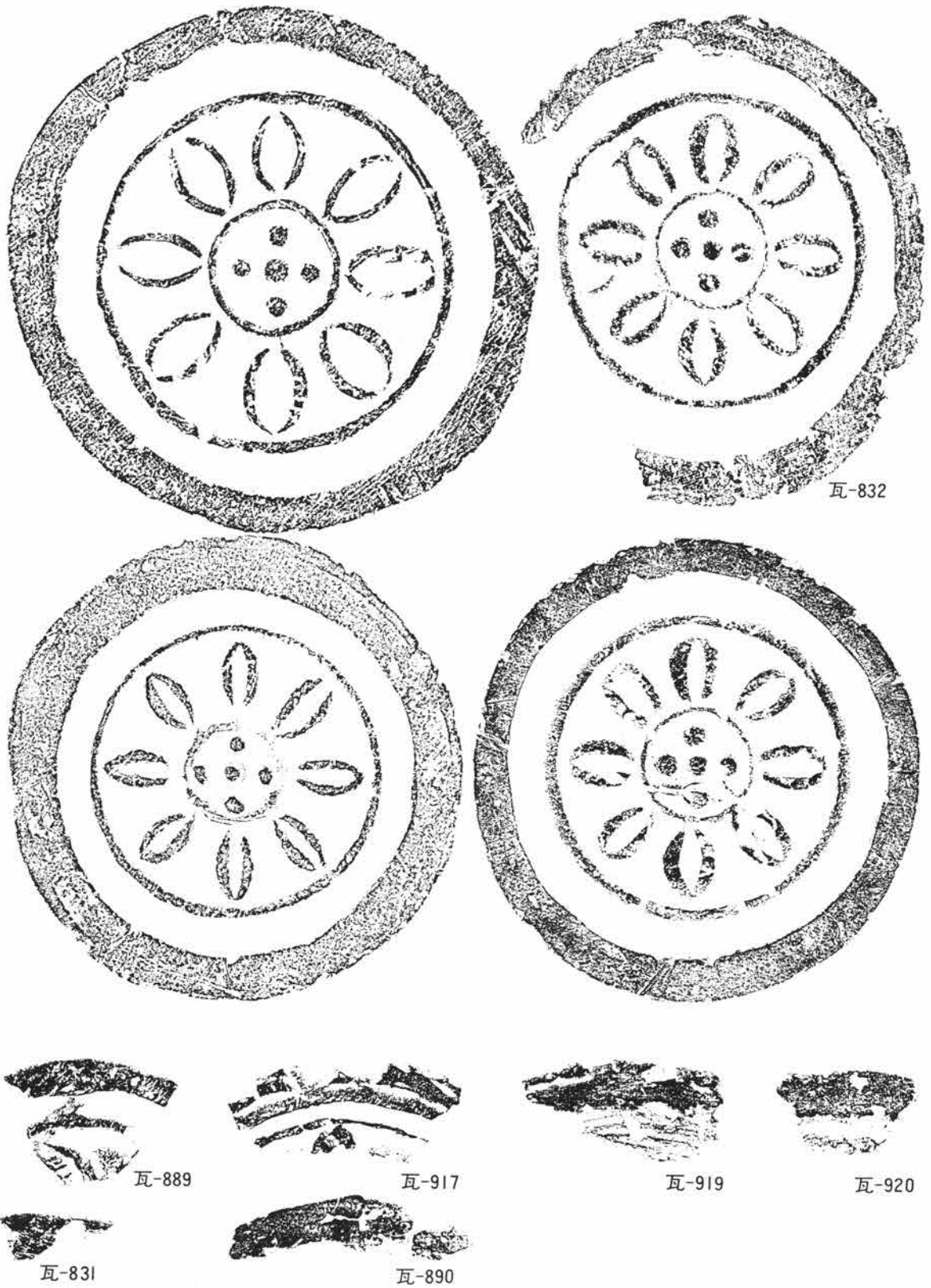
第171図 瓦当瓦類 (1)



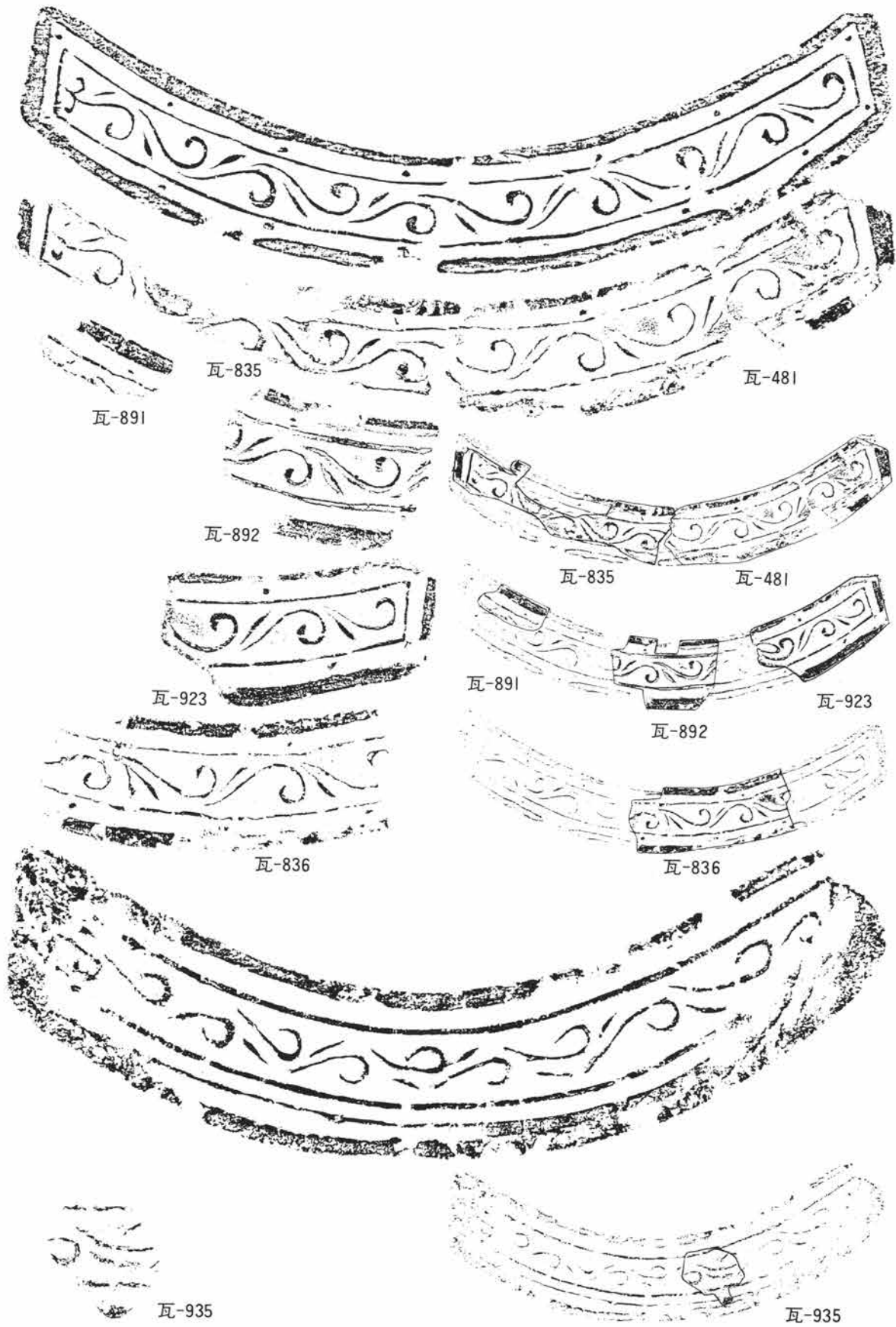
第172図 瓦当瓦類(2)



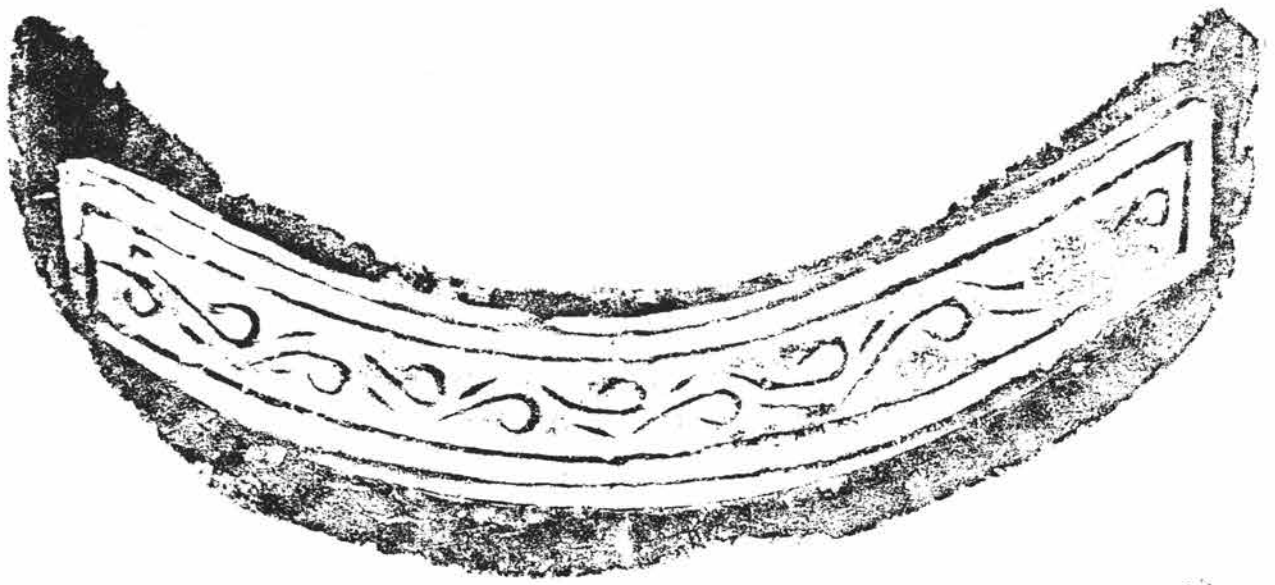
第173図 瓦当瓦類(3)



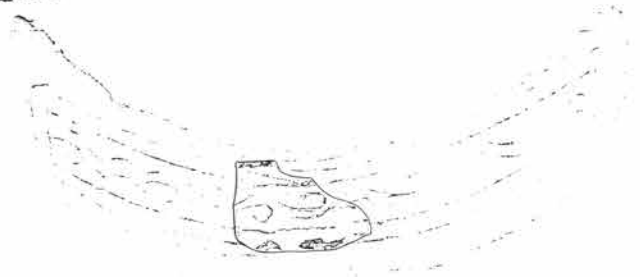
第174図 瓦当瓦類(4)



第175図 瓦当瓦類(5)



瓦-924



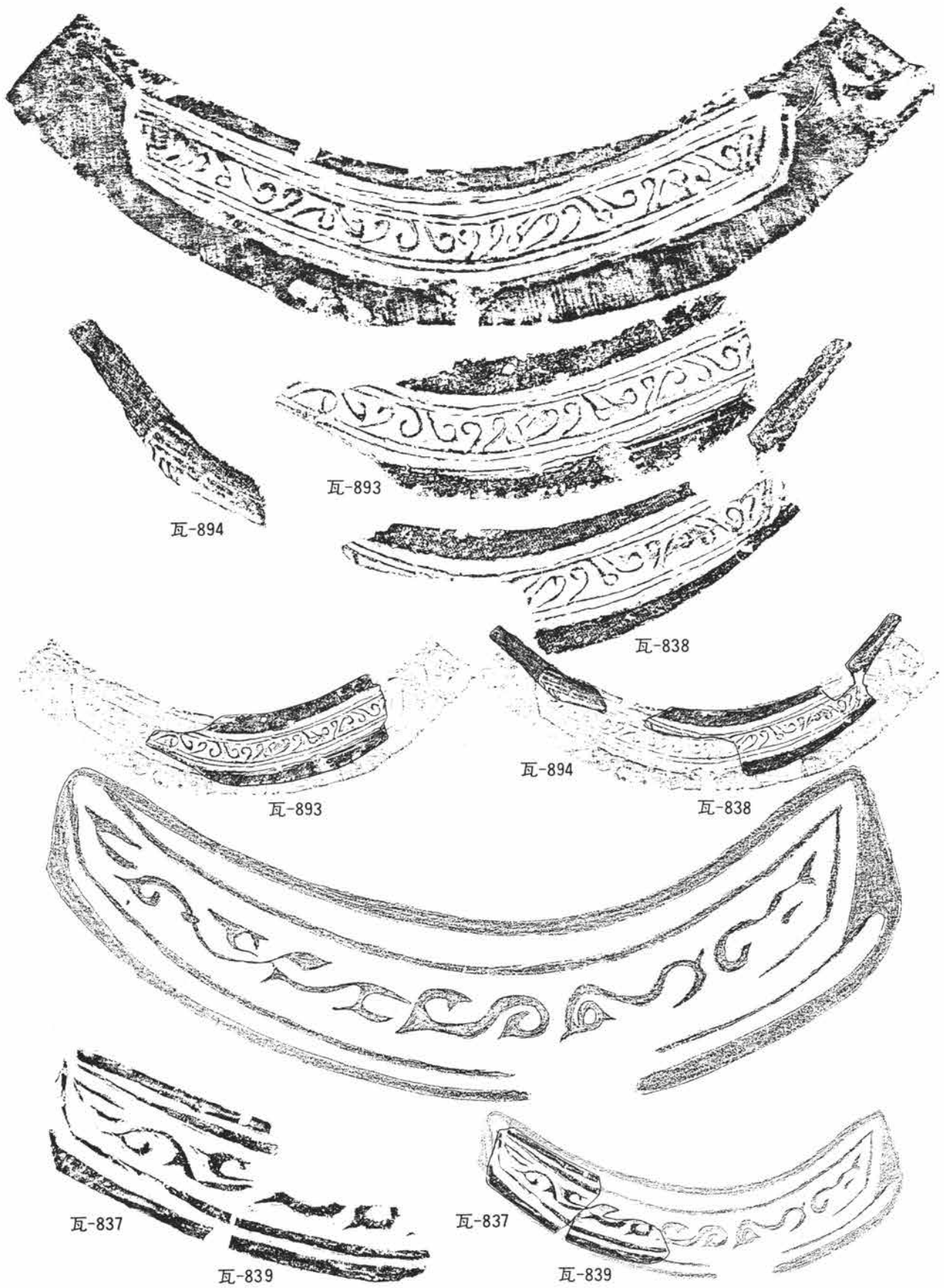
瓦-924



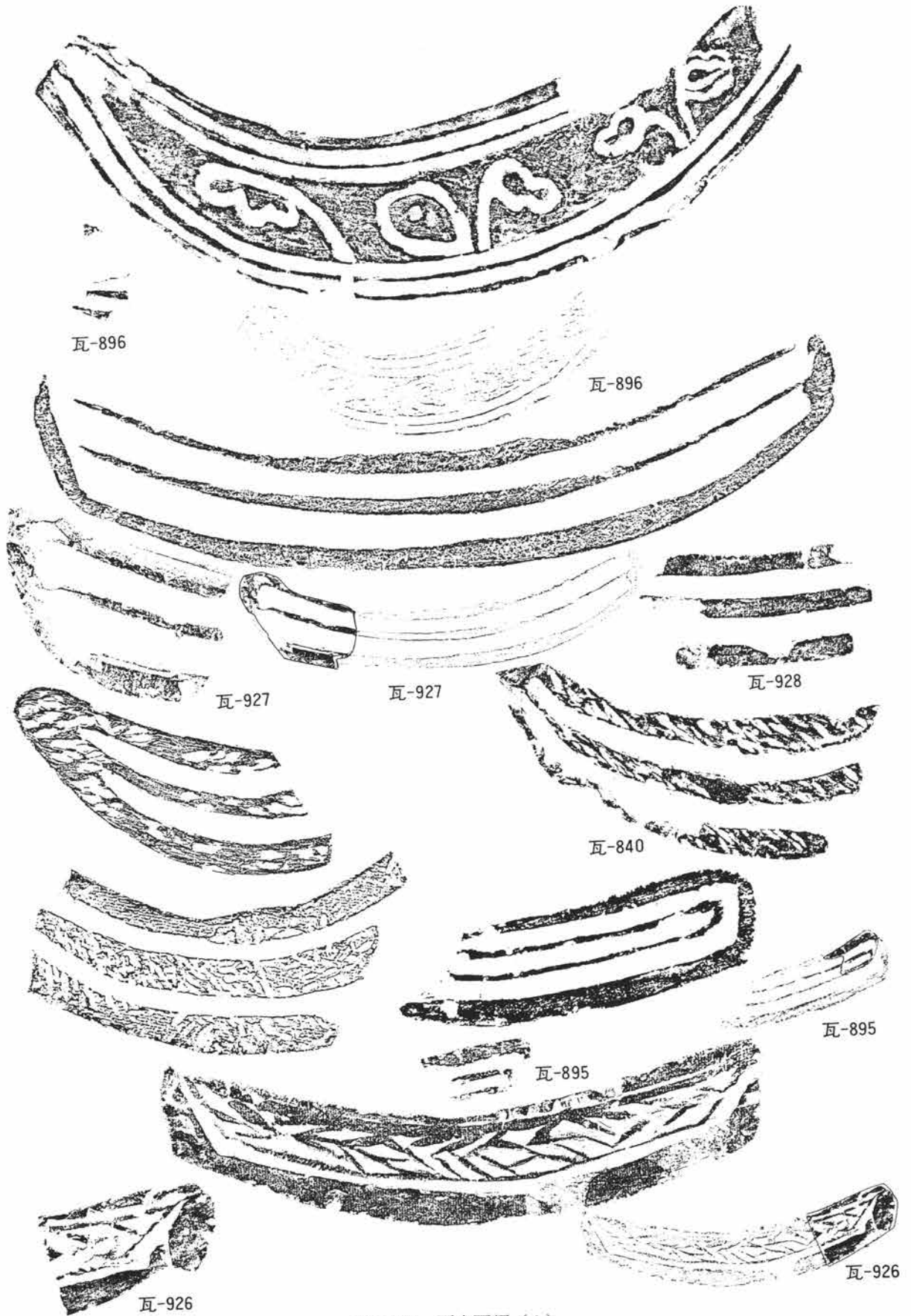
瓦-925



第176図 瓦当瓦類(6)

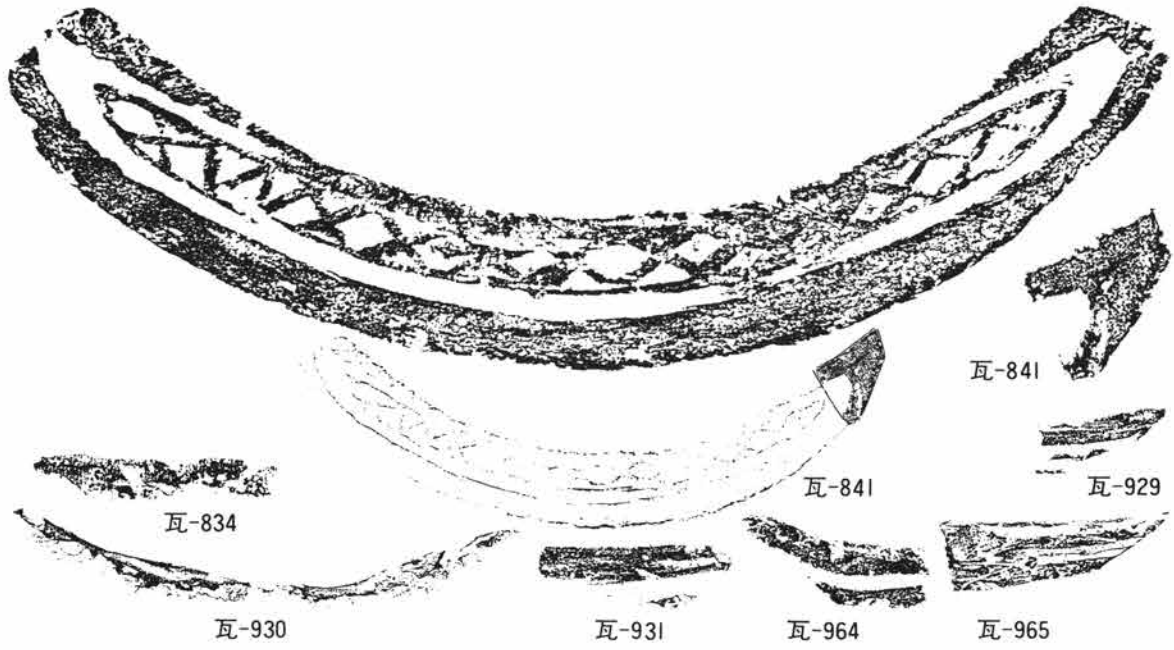


第177図 瓦当瓦類 (7)



第178図 瓦当瓦類 (8)





第179図 瓦当瓦類 (9)

### 第1項 植物遺存体

本報告で扱った植物遺存体は、染谷川河川敷部出土のもの、従前に於いて既刊報告となった中世遺構等からの出土した植物遺存体も含まれている。尚、図化掲載した資料は次頁に一覧表にしてある。

#### 染谷川河川敷部出土の植物遺存体

当該報告区の遺構では、3区第1号井戸跡と、2区祭祀跡周辺から出土している。

3区第1号井戸跡からは、果実の種子（桃乃至李）が24点出土している。この24点の種子の外に瓢箪が出土している。この両者の出土状態に就いては、第3号井戸跡の項で述べたので参照して戴きたい。

2区第1号祭祀跡周辺からは、桶乃至曲物底部（か）1点・不明木製品・加工痕の認められる木片・部分炭化した木材2点・種子1点（桃か李か）・自然木が出土している。これらの出土層位は、第6図下段の17層下層が、FA直上層（19層）の直上から出土している。いずれも断片的な状態であり、旧形状を推定し得る遺存のものは無かった。

これらの中で、第182図一1の桶の底部と考えられる板製品は、推定復原径43.0cmであり、後代の曲物等の口径と大きく異ならない。そして、この43.2cmは、3.6cmを一単位とする「ものさし、（36cm≒1尺）の12倍＝12寸の数値にほぼ符合する。この3.6cm1寸するものさしの存在は、既刊第5分冊中でも述べたとおりである。

第182図一3に示したものは、尖端側の小口の加工痕は、鋭利で重みのある利器により切断されている。この切断面を観察する限りに於いては、小刀・鉈等の鉄製品による切断であったと考えられよう。

第182図一2に図示した木片は、残存する加工面が凡そ130度程の角度で多角形を成している。この130度の角度は、正八面体の構成角度である。このことから、この木製品は八角柱状の棒状乃至これに類するものであったことが推定される。

#### 既刊書中の遺構出土の植物遺存体

F区第3号井戸跡、当該の井戸跡は、第2分冊中に報告した井戸跡である。井戸跡の推定される年代観は15世紀代である。既文中に掲載した特筆される遺物として、漆塗りの椀の底部を転用した滑車状の遺物があげられる（第183図参照）。この井戸跡から出土している植物遺存体には、曲物の底部と考えられるもの4点、加工痕のある不明木製品1点、板1枚、自然木等があり、自然木に比較的多く出土している。

第183図一3は、推定復原径30cmで、約3cmを一単位とする「ものさし」の使用が推定され、30cm 1尺の規格が推定される。当遺跡に於ける中世尺度は、第1分冊中で記述したとおりであるが、建物と器物との違いはあるものの、現代の曲尺1尺に近似するものと考えられることから、この3cm1単位とする尺度の存在は想定可能と考える。

G区第1号地下式土坑、当跡からは入口部の何らかの施設の柱材に用いられていたものである。

第184図一2は、丸太材で数ヶ所に削りの加工痕が認められ、断面側部側には縦位の裂目状の加工痕（？）が見られる。

G区第12号井戸。当井戸跡からは曲物の底板が出土している。復原推定径19.8cmでF区第3号井戸出土の第183図一3の復原推定径に近似している。これを3cm1単位とする推定尺度に換算する。約6.5となり、6寸5分の数値が得られる。然し、近似値として6寸5分の寸法が得られたとしても、これが確実な実態とは言及し得ないものである。

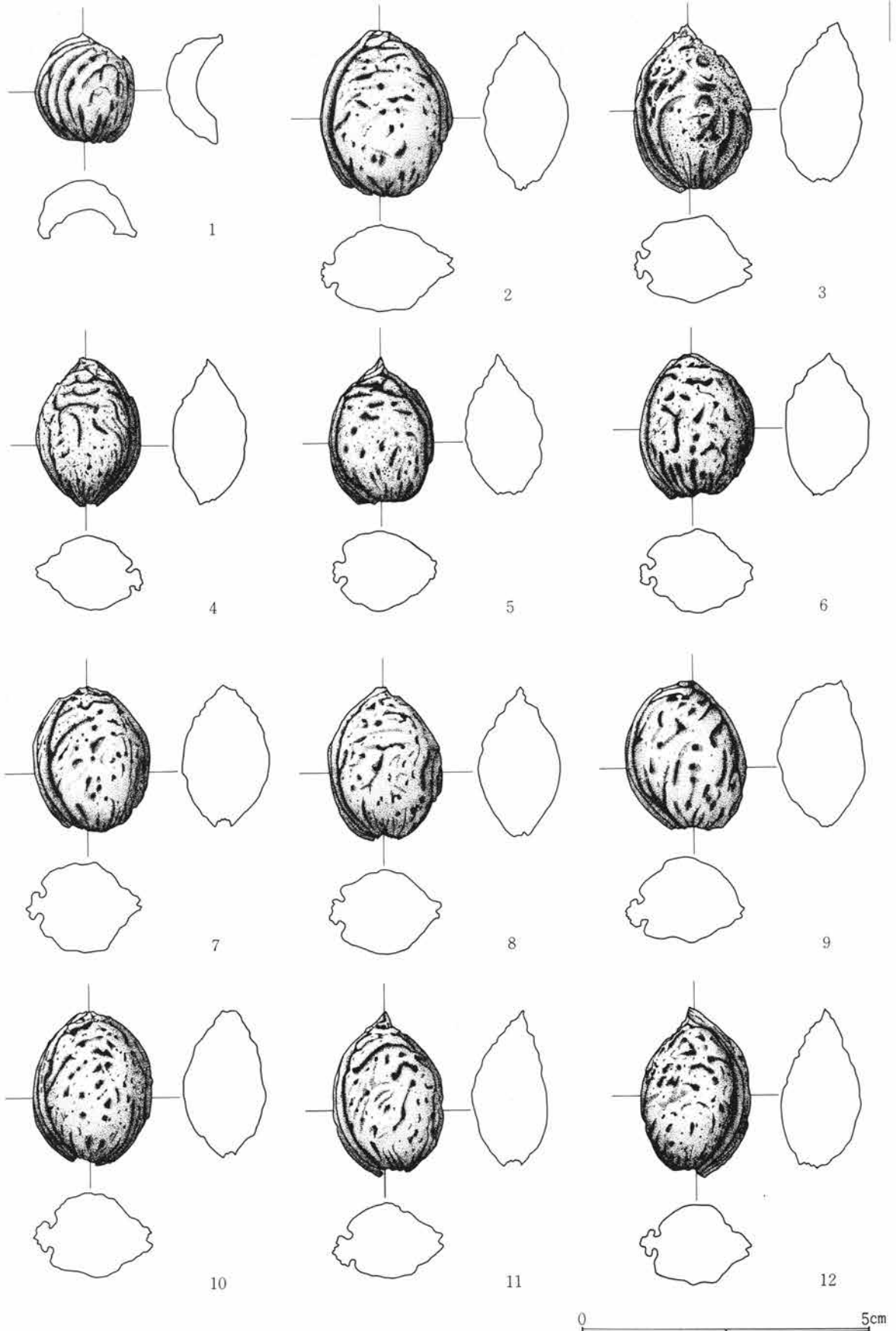
第4節 検出された遺構・遺物

上述してきた植物遺存体は、出土遺構が分明なものであるが、調査期間中に出土位置（遺構名称）が不明になったものがある。これらは第185図に図示した。調査の不手際が多く、調査を担当した一人として深く反省している。

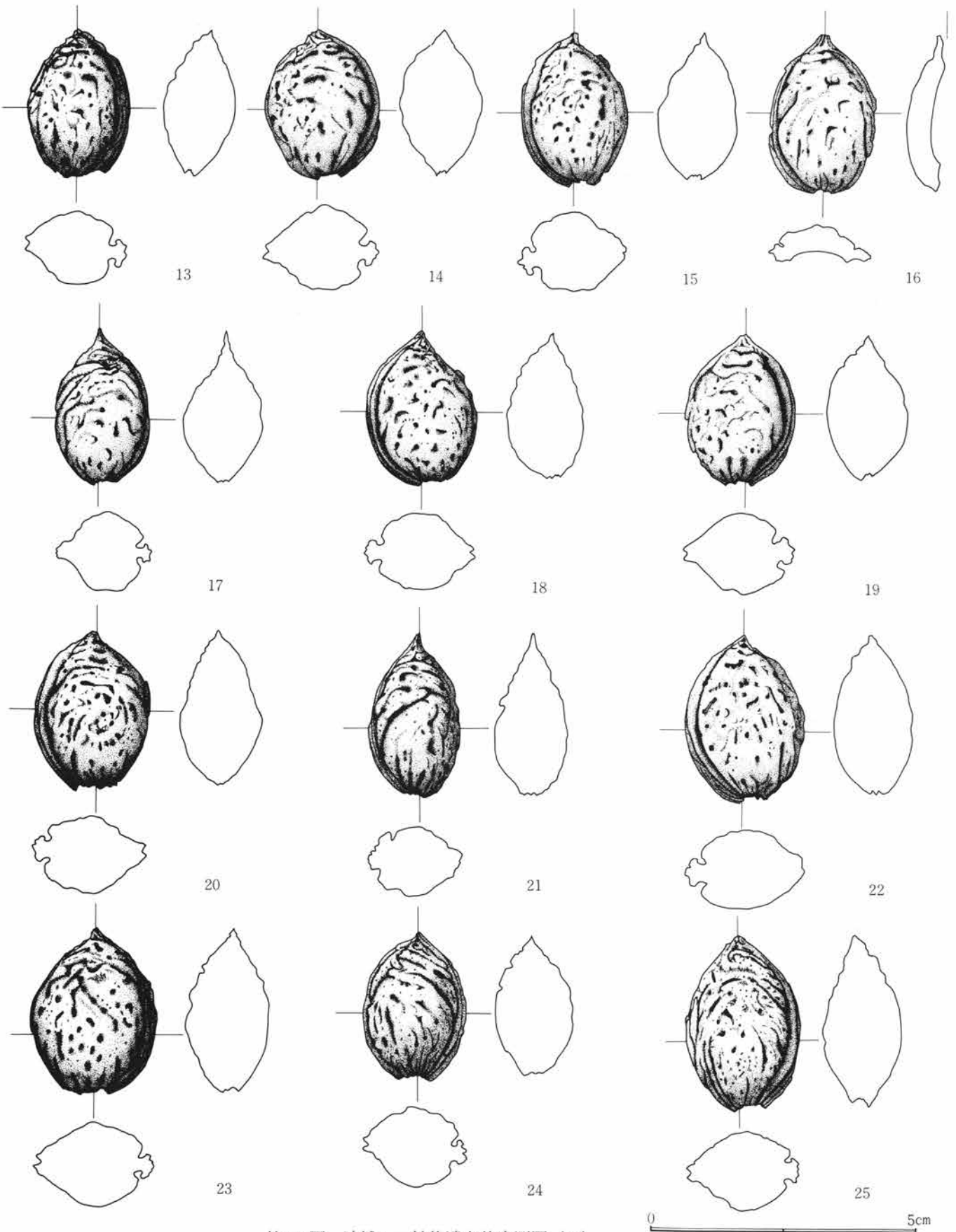
尚、次頁に植物遺存体の観察表を掲載した。

第1表 植物遺存体一覧表

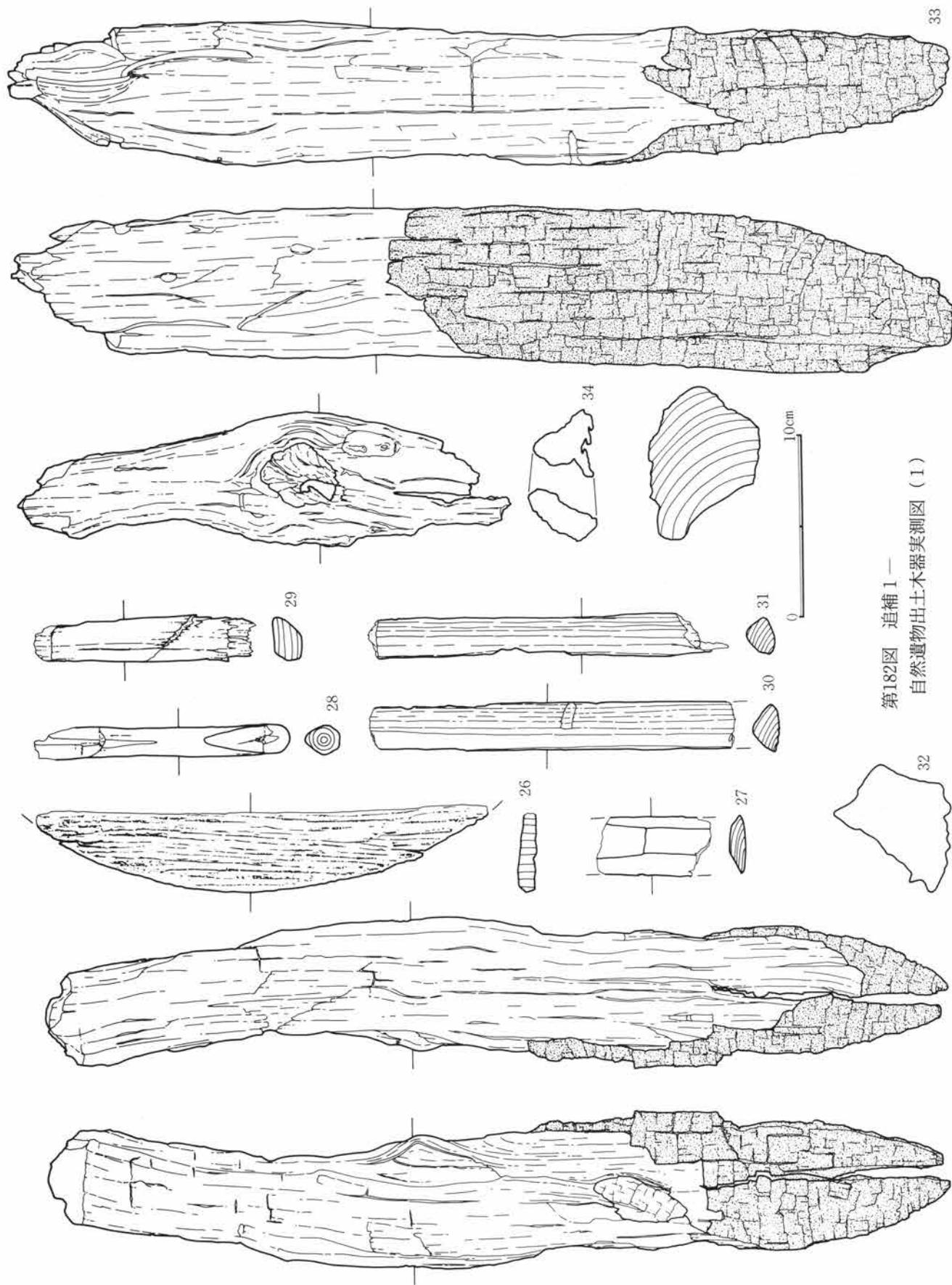
番号	出土地	種類	規模(長幅厚)(径)	摘 要
植-1	染・濁黒砂	種子(桃か)	1.8・1.75・(5.5)	植-32・33と同一の濁黒色砂層中より出土。
//-2	染・1井	//	2.4・2.4・1.5	埋土内下位から集中して出土している。
//-3	//	//	2.4・2.1・1.5	//
//-4	//	//	2.5・1.8・1.3	//
//-5	//	//	2.5・1.9・1.4	//
//-6	//	//	2.5・2.0・1.5	//
//-7	//	//	2.5・2.0・1.6	//
//-8	//	//	2.6・2.0・1.5	//
//-9	//	//	2.5・2.1・1.6	//
//-10	//	//	2.6・2.1・1.5	//
//-11	//	//	2.7・1.9・1.3	//
//-12	//	//	2.8・2.0・1.4	//
//-13	//	//	2.8・2.0・1.4	//
//-14	//	//	2.8・2.2・1.6	//
//-15	//	//	2.8・2.1・1.5	//
//-16	//	//	3.0・2.0・(0.5)	//
//-17	//	//	2.8・1.8・1.5	//
//-18	//	//	2.9・2.1・1.5	//
//-19	//	//	2.8・2.1・1.5	//
//-20	//	//	3.0・2.2・1.6	//
//-21	//	//	3.1・1.8・1.3	//
//-22	//	//	3.1・2.3・1.5	//
//-23	//	//	3.1・2.3・1.6	//
//-24	//	//	2.7・2.3・1.6	//
//-25	//	//	3.3・2.1・1.5	//
//-26	染・濁黒砂	桶底板か	径(43.0)・厚 0.5	植-1と相伴している。(濁黒色砂層)
//-27	//	不詳	幅 3.2・厚 0.9	4面が面取りされている。
//-28	//	杭か	幅 1.5	小口を斜位に鋭く削っている。
//-29	//	不詳	幅 2.5	加工痕は認められない。
//-30	//	//	幅 2.6	//
//-31	//	//	幅 2.4	//
//-32	//	//	幅 7.0	先端側が炭化している。
//-33	//	//	幅 8.5	//
//-34	//	自然木	—	
//-35	F・3井	曲物底板か	径19.2・厚 0.8	板目材を使用する。一部が火中したと思われる部分がある。
//-36	//	//	不詳	板目材を使用する。
//-37	//	//	径22.0	//
//-38	//	不詳	幅 2.0	上面に面取りが認められる。
//-39	//	竹製品の部分	幅 0.6～0.7	本品及び植40の外にも小片化したものが多くあり、桶等の籬と考えられる。
//-40	//	//	//	桶の籬とすれば、所産時期は16世紀以降と考えられる。
//-41	//	曲物底板か	幅 0.6	柁目を使用する。
//-42	G・1地	柱材か	径 6.0	地下式土坑の入口部左側に樹立されていた。坑口の補強材か。
//-43	//	//	径 7.6	// 右側 //
//-44	G・12井	曲物底板		曲物の底板の部分と考えられる。図中、中位上方に孔がある。板目材を使用。
//-45	F・3井か	杭か	径 4.5	現場取り上げ時のラベルが腐ってしまった。先端は楔状に削る。
//-46	//	//	//	先端側を小単位に削っている。
//-47	//	//	径 6.2	先端側を鋭く削る。
//-48	//	自然木か	—	枝の部分が鋭利な刃物で削られている。
//-49	//	//	—	表皮が顕著に遺存する。
//-50	//	//	—	三叉状の木製品か。



第180図 追補1—植物遺存体実測図(1)

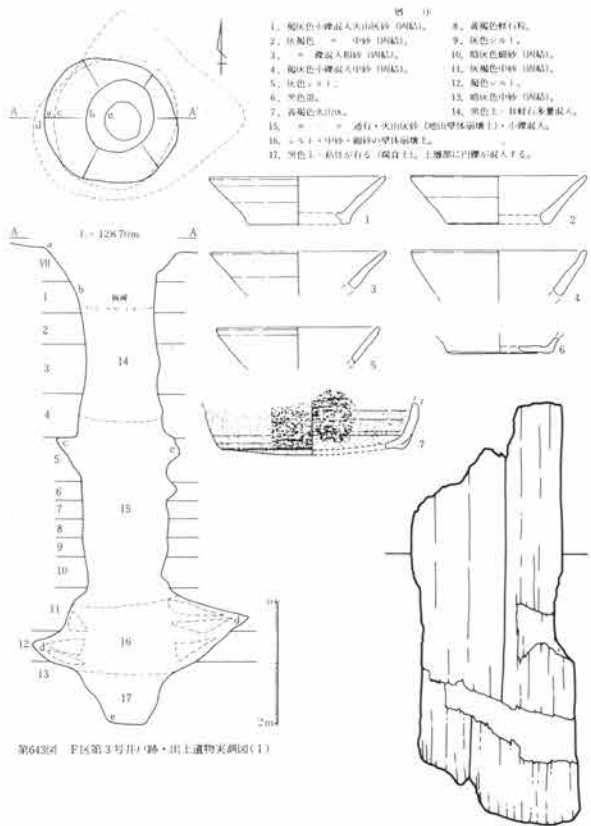


第181図 追補1—植物遺存体実測図(2)

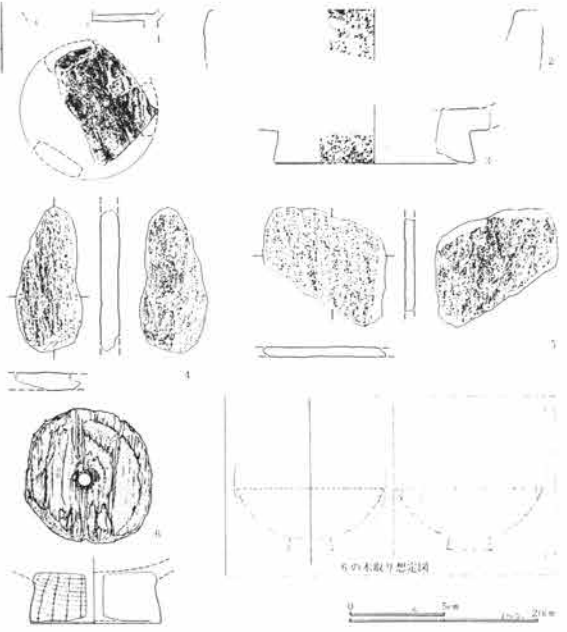


第182図 追補1—  
自然遺物出土木器実測図(1)

遺構名称	F区第3号井戸跡	位置	8・9-D-55・56グリッド内	平面形態	円形状
規模	地上径2.18 底径0.57 最細径1.12	最大径3.39	深度7.57	砂水位深度	夏期3.27・冬期6.42
アブリ部最大径	夏期1.97・冬期3.39	湧水層	5・12層	耐水層	6・13層



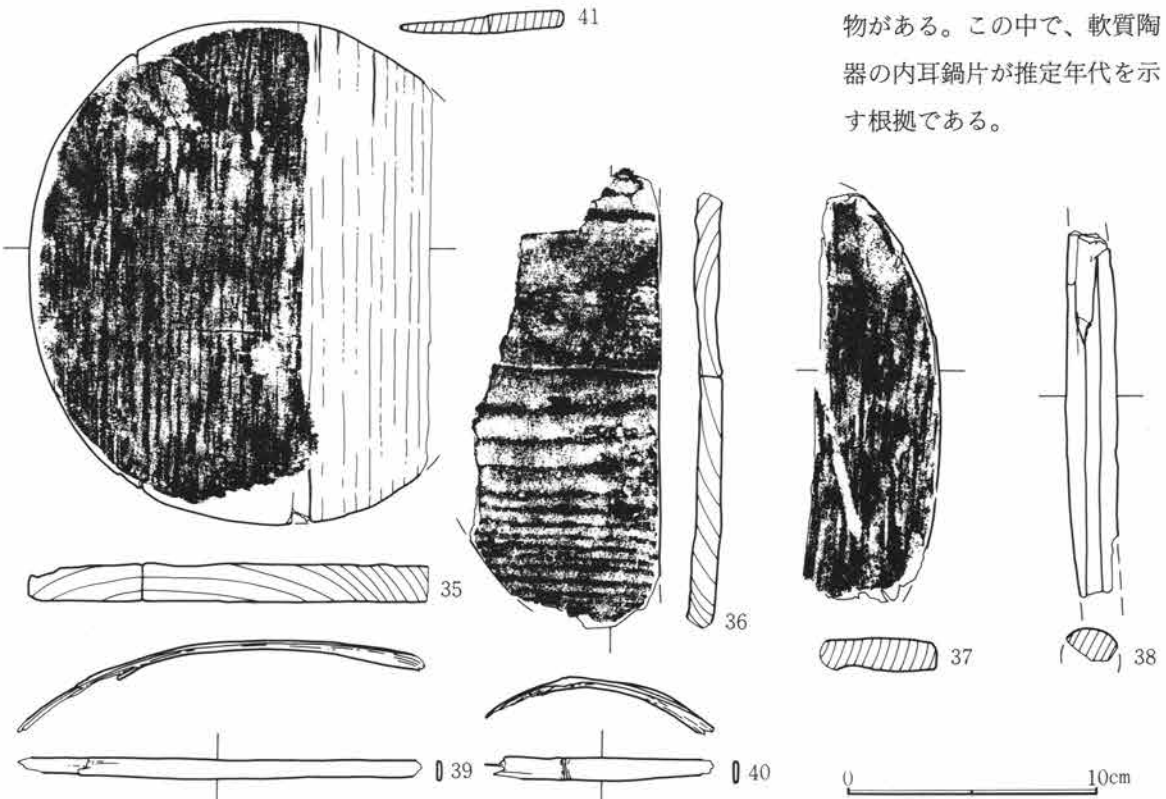
第643図 F区第3号井戸跡・出土遺物実測図(1)



第644図 F区第3号井戸跡出土遺物実測図(2)

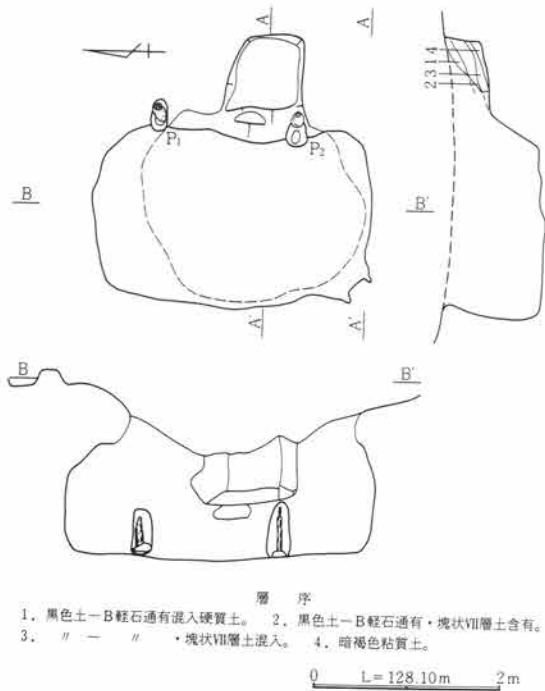
F区第3号井戸跡に就いて

当井戸跡は、15世紀の居館跡に伴う井戸跡と考えられた。出土遺物は、植物遺存体の外に、本頁に再掲載した遺物がある。この中で、軟質陶器の内耳鍋片が推定年代を示す根拠である。



第183図 追補1—自然遺物出土木器実測図(2)(F3井戸)

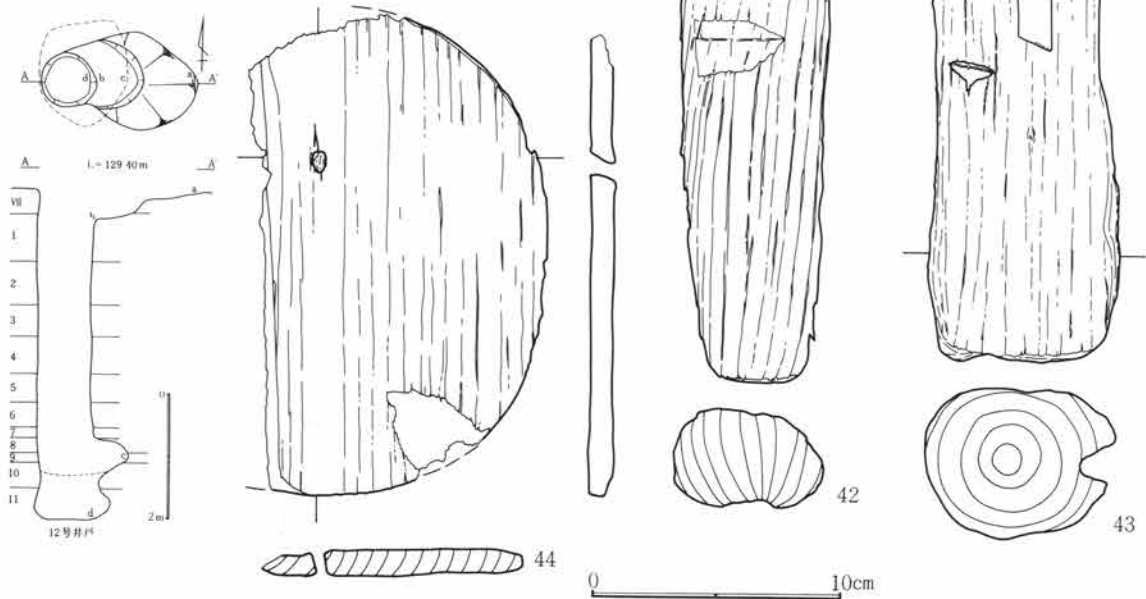
第4章 検出された遺構・遺物



- 層序  
 1. 黒色土-B軽石通有混入硬質土。 2. 黒色土-B軽石通有・塊状VII層土含有。  
 3. // - // ・塊状VII層土混入。 4. 暗褐色粘質土。

0 L=128.10m 2m

第676図 G区第1号地下式土坑実測図



第184図 追補1—自然遺物出土木器実測図(3)(G区1号地下式坑)

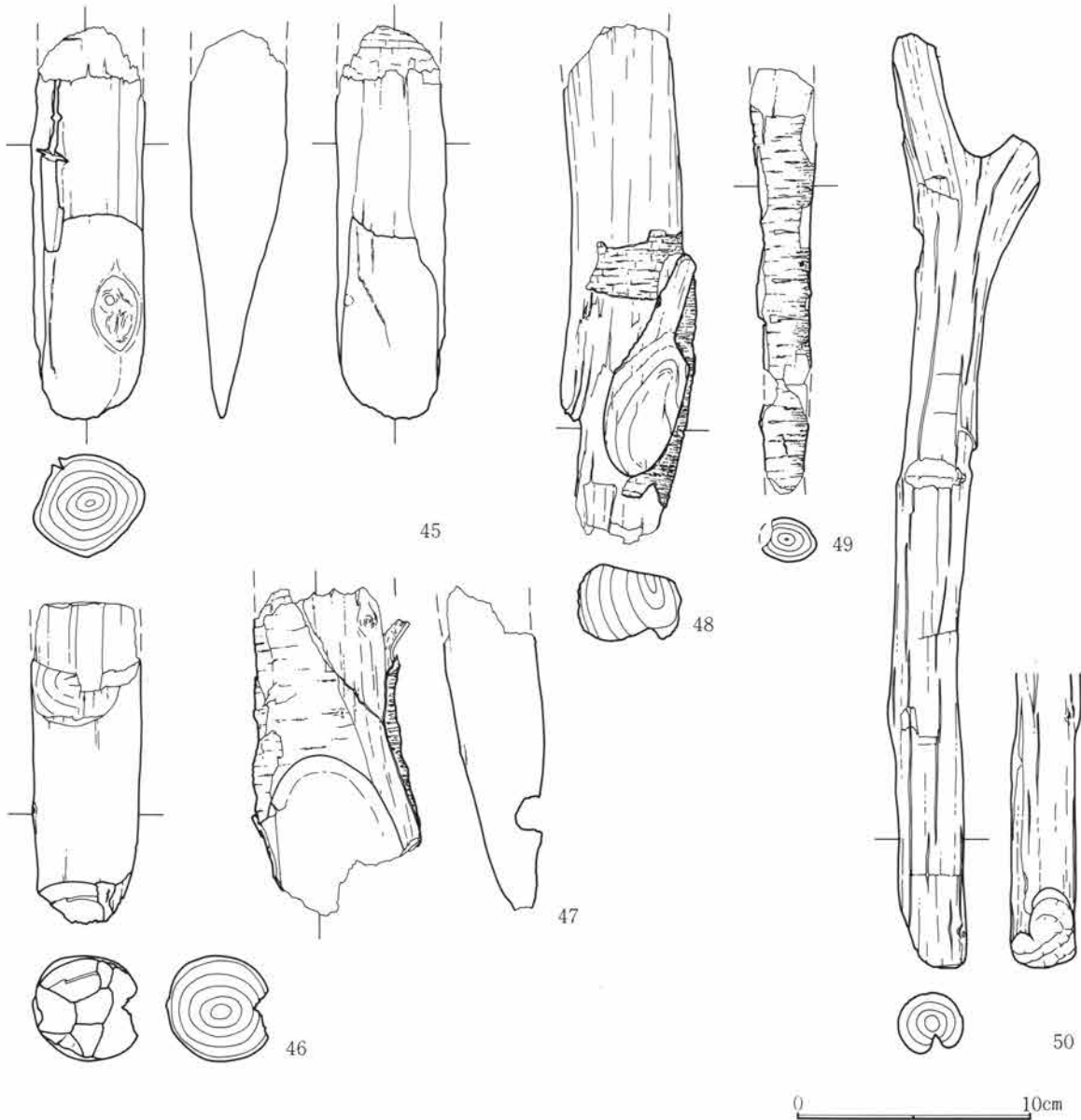
G区第1号地下式土坑に就いて

当跡は、G区第34号溝状遺構に切られる14世紀後半から15世紀前半頃の時期が考えられた。通有に、当該種の遺構は、「墓塚」としての性格付けが行われる場合がある。実態として、南関東域では埋葬人骨を伴う場合が多いが、当跡の場合、当該期の当遺跡に於ける葬制や、検出状況等を勘案し、「土倉」としての性格が考えられた。

G区第12号井戸跡に就いて

当井戸跡は、台地上で最も径の小さい井戸である。時期を示す遺物の出土は皆無だが15世紀頃に推定される。





第185図 追補1—自然遺物出土木器実測図(4)(出土遺構不詳)

#### 出土地不明の植物遺存体

調査の不幸により出土地が不明になった植物遺存体は、上図に図示したものの外に、自然木が少量あり、図化したものはいずれも加工痕の認められるものである。この第185図の遺物は、完全に出土地が不明なのでは無く、台地上で、植物遺存体を出土した遺構自体が極希で、出土していれば、F区第3号井戸跡としてしか考えられない一群である。

第185図に掲載した植物遺存体の中で自然木1点が含まれている。これは、表皮が残っていた為に図化した。他は確実に加工痕が認められる。そして、1～3は、丸太材の先端を加工して杭状の製品としている。4は、枝の部分を一刀のもとに切り払われている。6は、下端側に加工痕が認められ、上端側は三叉状になっており、何らかの生活用具と想定される。

これらの植物遺存体に就いては、後年、当団収蔵の植物遺存体と共に研究報告される予定があるので、樹種等に就いては後年明らかにしたいと考えている。

## 第5節 追 補 (1)

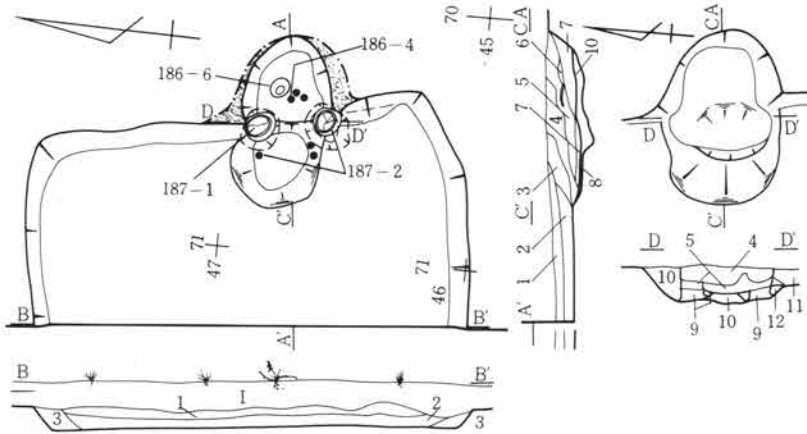
当上野国分僧寺・尼寺中間地域の整理業務は昭和59年度より8ヶ年を費やし、本書を含め合計8冊の調査報告書を発刊した。これらの8冊の報告書を刊行する中で、掲載漏れの遺構や、所在不明な遺物等の未掲載及び未報告のも調査資料が山積みしている。これらの中で、遺構の未掲載や、貴重な資料等に就いて追補という形で当8分冊に掲載するものである。又、写真図版では、文字瓦の接写写真を写真図版中に補った。該当する文字瓦は、第4分冊及び第5分冊で掲載した文字瓦類である。

尚、本節で扱う追補は以下のとおりである。

D区第48号住居跡	B区第19号住居跡出土遺物	A区第10号土坑出土遺物
B区第1号屋外小鍛冶炉	C区第79号住居跡出土遺物	A区第47号土坑出土遺物
D区第6号土壌出土遺物	B区第177号住居跡出土遺物	A区第48号土坑出土遺物
A区第23号土坑出土遺物	B区第43号住居跡出土遺物	A区第49号土坑出土遺物
C区第19号住居跡出土遺物	B区第17号住居跡出土遺物	A区第133号土坑出土遺物
C区第21号住居跡出土遺物	B区第6号住居跡出土遺物	A区第24号土坑出土遺物
C区第103号住居跡出土遺物	B区第48号址出土遺物	A区第60号土坑出土遺物
C区第139号住居跡出土遺物	A区第165号址出土遺物	A区第3号柵状遺構出土遺物
C区第30号住居跡出土遺物	A区第167号址出土遺物	等である。
C区第89号住居跡出土遺物	A区第6号土坑出土遺物	

又、第1分冊で未掲載となった第366図のJ区第13号住居跡出土の勾玉は所在が明らかにならなかった。

遺構名称	D区第48号住居跡		位置	70・71-F-45~47グリッド内。		残存深度	約21cm	
平面形態	横長方形か。	規模	1.84m×3.53m	構築基準	不詳	主軸方位	北-91度-南?	
壁	斜位に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。				
壁溝	無		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	無し。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から100cm程。				主軸方位	北-93度-南	
改築	有。袖材(甕)の据え方が底面を切っている。		形状	馬蹄形状				
規模	全長130cm・屋外長 60cm・屋内長 70cm・袖部幅 78cm・燃烧部幅 70cm							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端寄りに器設部分が考えられる。							
	袖	両袖は土師器長甕を芯材に据える。						
煙道	未検出。		掘り方	楕円形状を呈する。				
遺物出土状態	カマド内での出土が多い。							

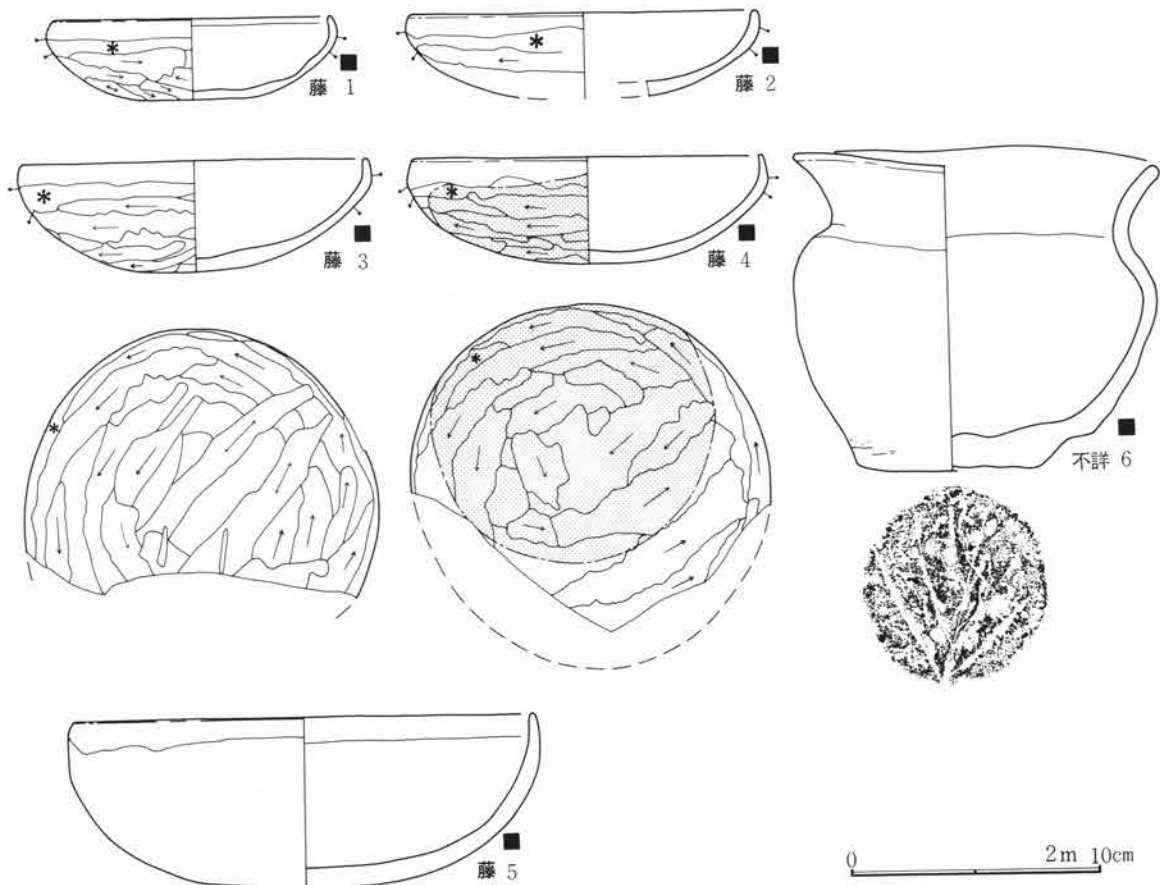


層序 D区48号住居跡  
(旧F区18号住居跡)  
1. 粒状C軽石混入。2. 粒状C軽石若干。3. 粒状C軽石若干・塊状VII層土若干。4. 粒状C軽石混入・粒状焼土微量。5. 粒状C軽石少量・粒状焼土含有。6. 塊状焼土。7. 細粒状C軽石若干・粒状焼土混入・炭化物・灰層。8. 炭化物・灰層。9. 炭化物・灰・塊状焼土の混土層。10. 細粒状C軽石微量・炭化物多量・塊状焼土含有。11. 3同質。12. 炭化物・灰層。

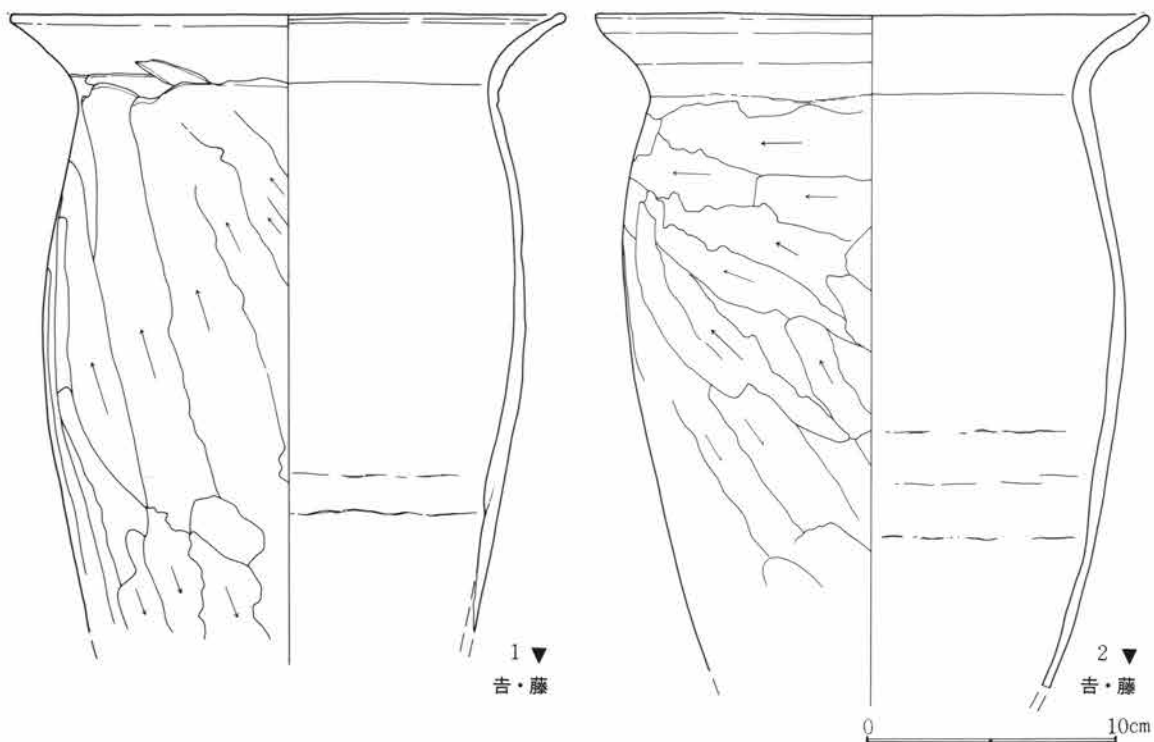
所見 当住居跡は、発掘調査時点で、F区第18号住居跡とした住居跡であるが、整理途中で検出位置がD区内であることが判明した。このことにより、遺構名称の改変が余儀なくされた。

住居跡は東側半分程が検出されたが、西側半分は調査区外に延びている。構造は、東壁中央部よりやや南東隅部に寄った位置にカマドを具備しているが、南東隅部には傍竈坑の存在は確認されなかった。又、支柱穴等の施設も検出出来なかった。

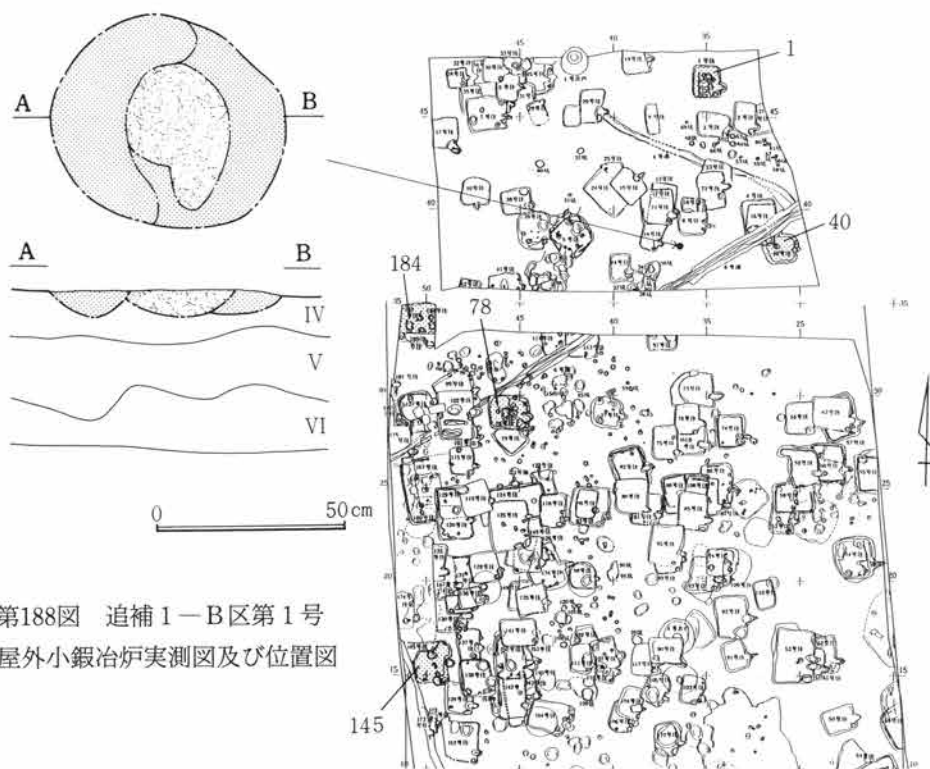
カマドは、左右の袖に土師器甕を逆位にして袖を補強している。又、燃焼部中央には、第186図-6・4を逆位にし支脚材としている。この第186図-4は、底部に焼成時の焰により赤色化した部分が丸く認められる。住居及び出土遺物は、B区の第III段階に対比される。



第186図 追補1-D区第48号住居跡出土遺物実測図(1)



第187図 追補1-D区第48号住居跡出土遺物実測図(2)

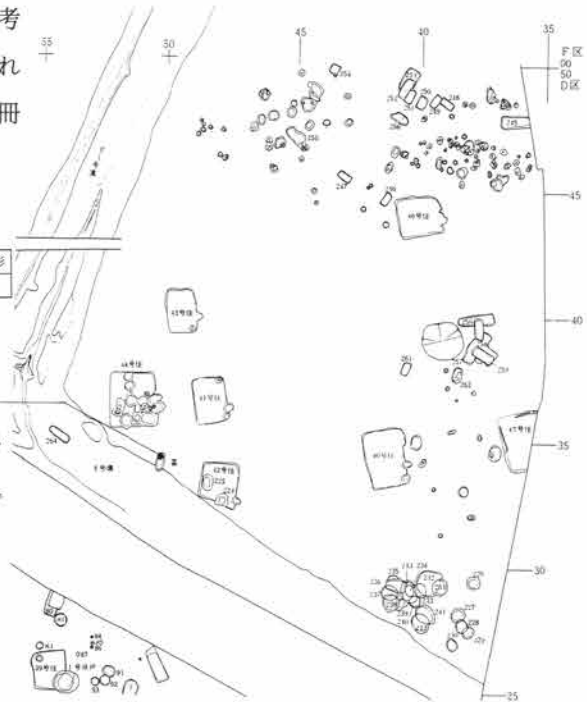
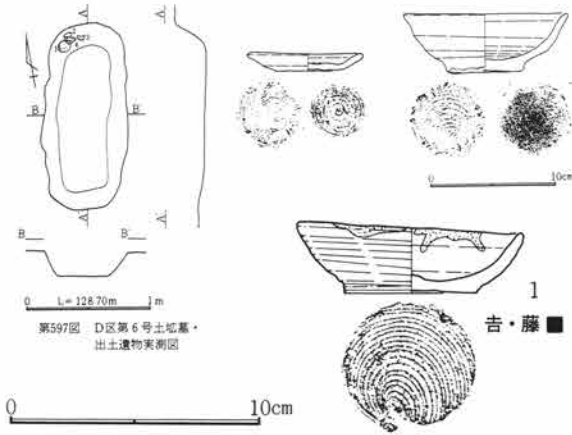


第188図 追補1-B区第1号  
屋外小鍛冶炉実測図及び位置図

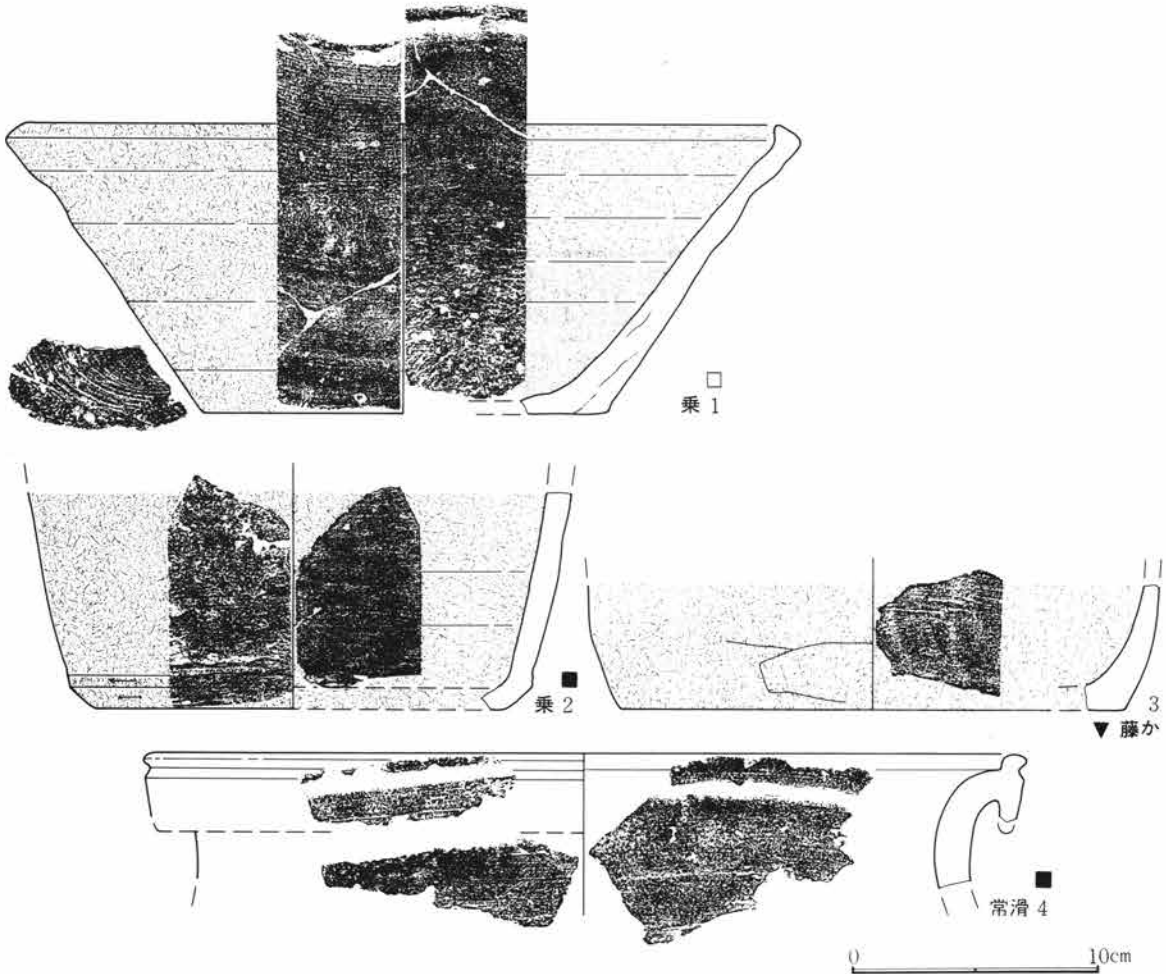
**B区第1号屋外小鍛冶炉** 当小鍛冶は、37-B-37グリッド内に位置する。周辺部には、小鍛冶遺構のB区第1・40・78・184号住居跡が位置しており、調査区で最も小鍛冶遺構が集中する。だが、これらは全て同時存続した訳では無く、8世紀から10世紀にかけての代々的に行われていたものである。当跡は、周囲には、住居の存在を想起させられる状況が皆無であった為、屋外炉と考えた。

D区第6号土壌 当跡は、伸展葬位の埋葬土坑と考えられ、出土遺物の状態から棺が存在したと考えられる。所産時期は11世紀前半代と考えられる（第1分冊を参照）。

遺構名称	D区第6号土坑墓	位置	34・35-D-0・1グリッド内	平面形態	隅丸長方形
規模(m)	1.46×0.70	主軸方位	北-10度-東	残存深度	約24cm程
				備考	



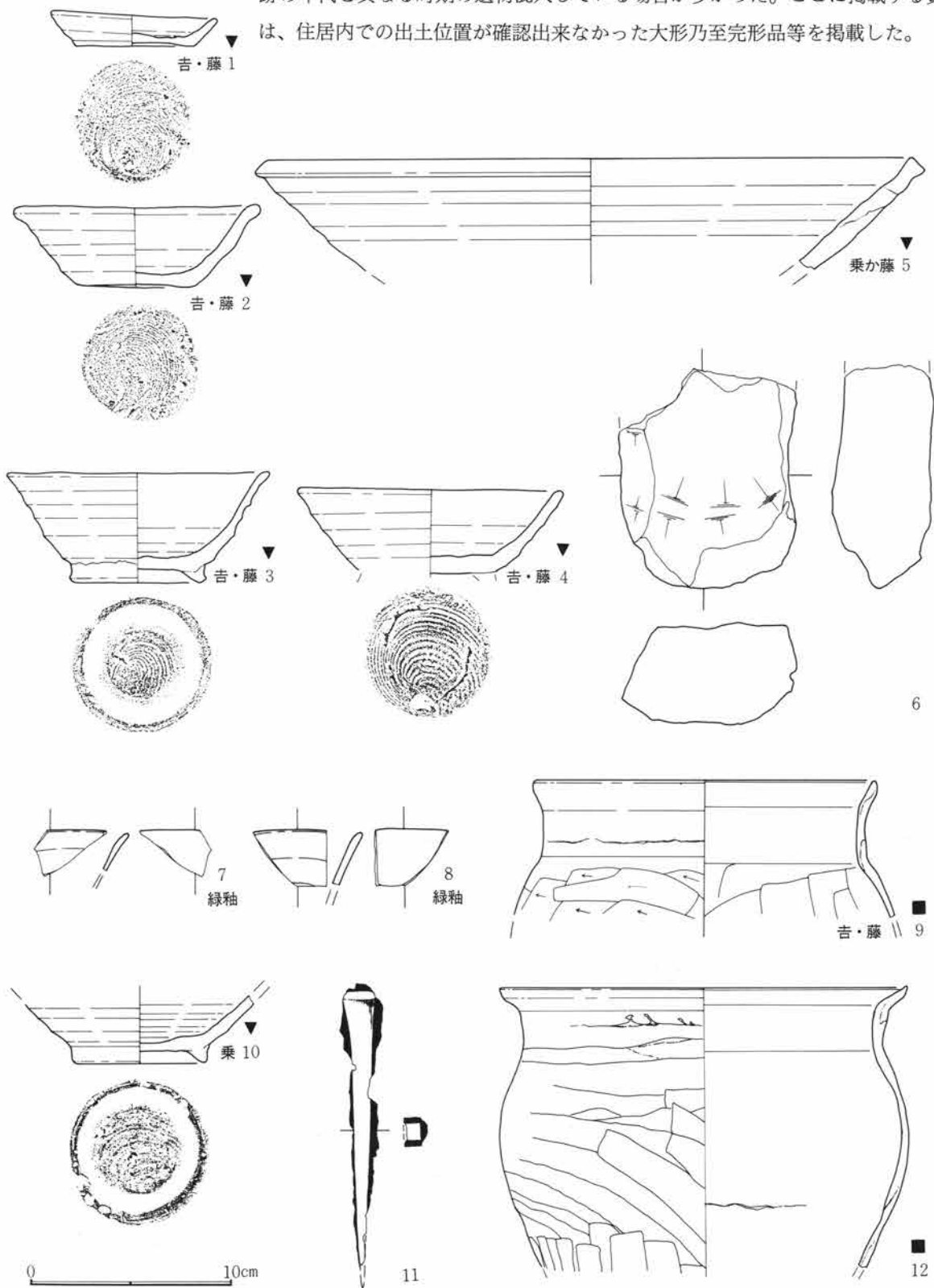
第189図 追補1—D区第6号土坑出土遺物実測図



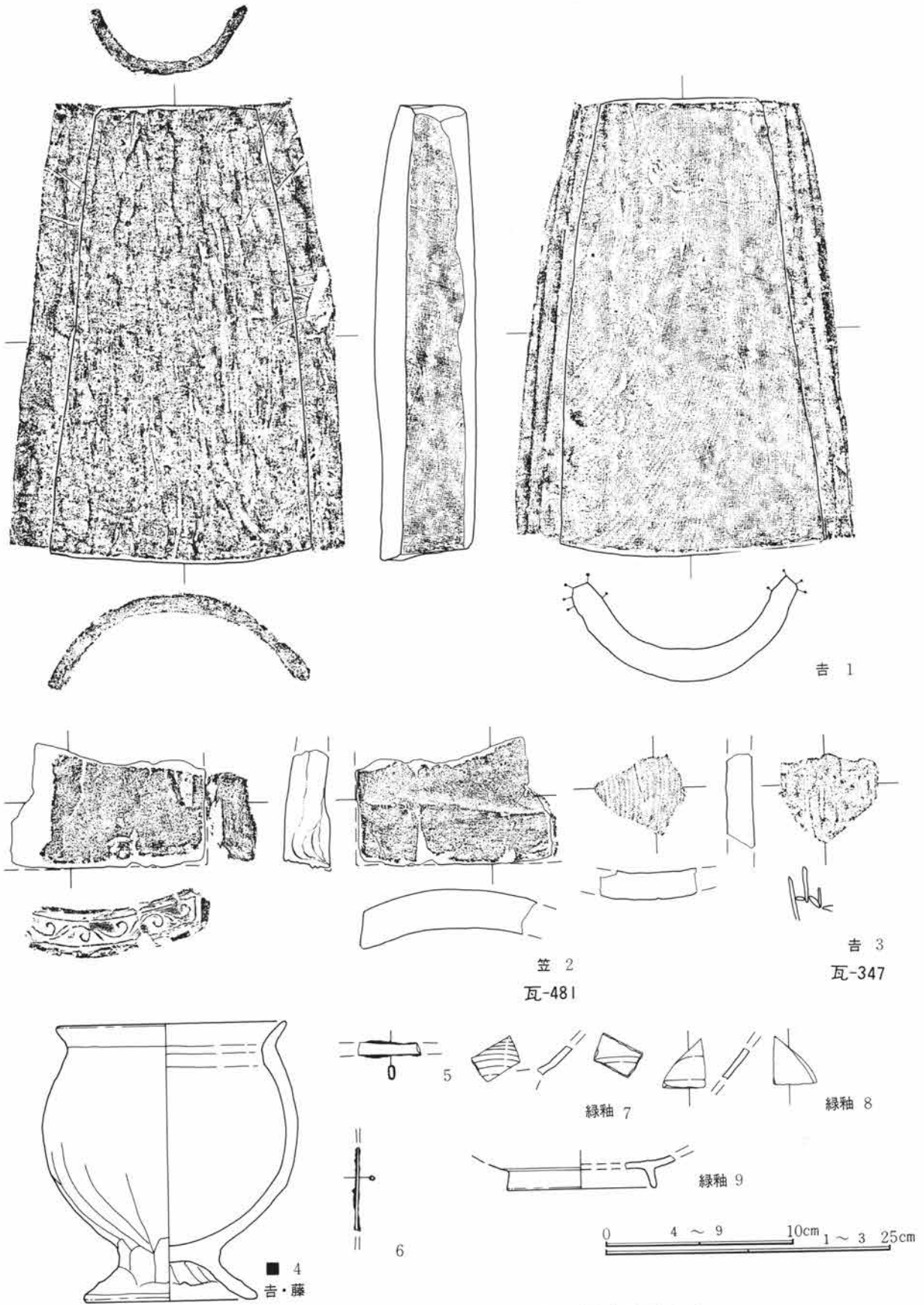
第190図 追補1—中世遺物

C区内住居跡出土遺物

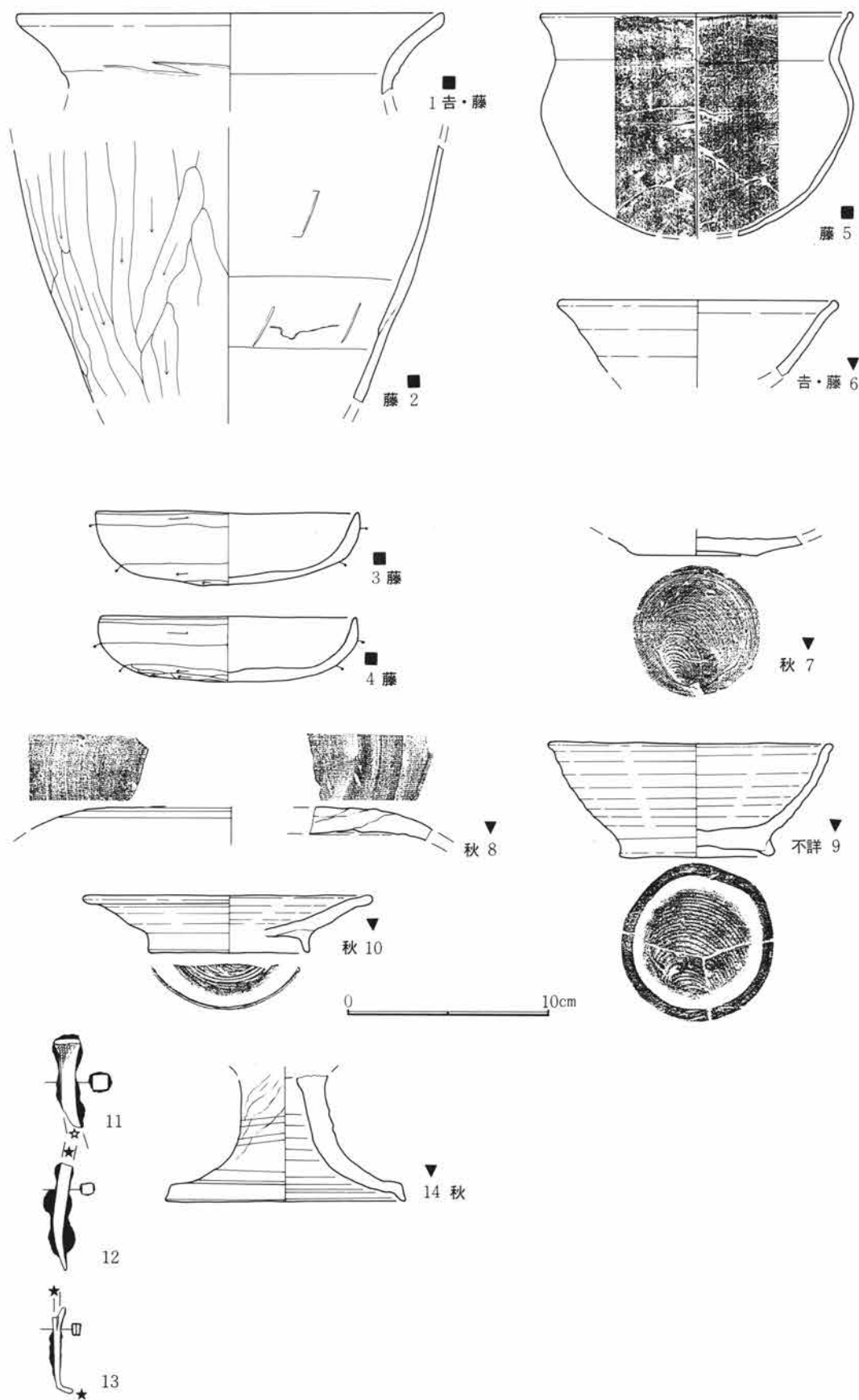
C区内は住居跡が非常に沢山切り合っている調査区である。この為、出土遺物の中には、推定される住居跡の年代と異なる時期の遺物混入している場合が多かった。ここに掲載する資料は、住居内での出土位置が確認出来なかった大形乃至完形品等を掲載した。



第191図 追補1—C区内住居跡出土遺物実測図(1)

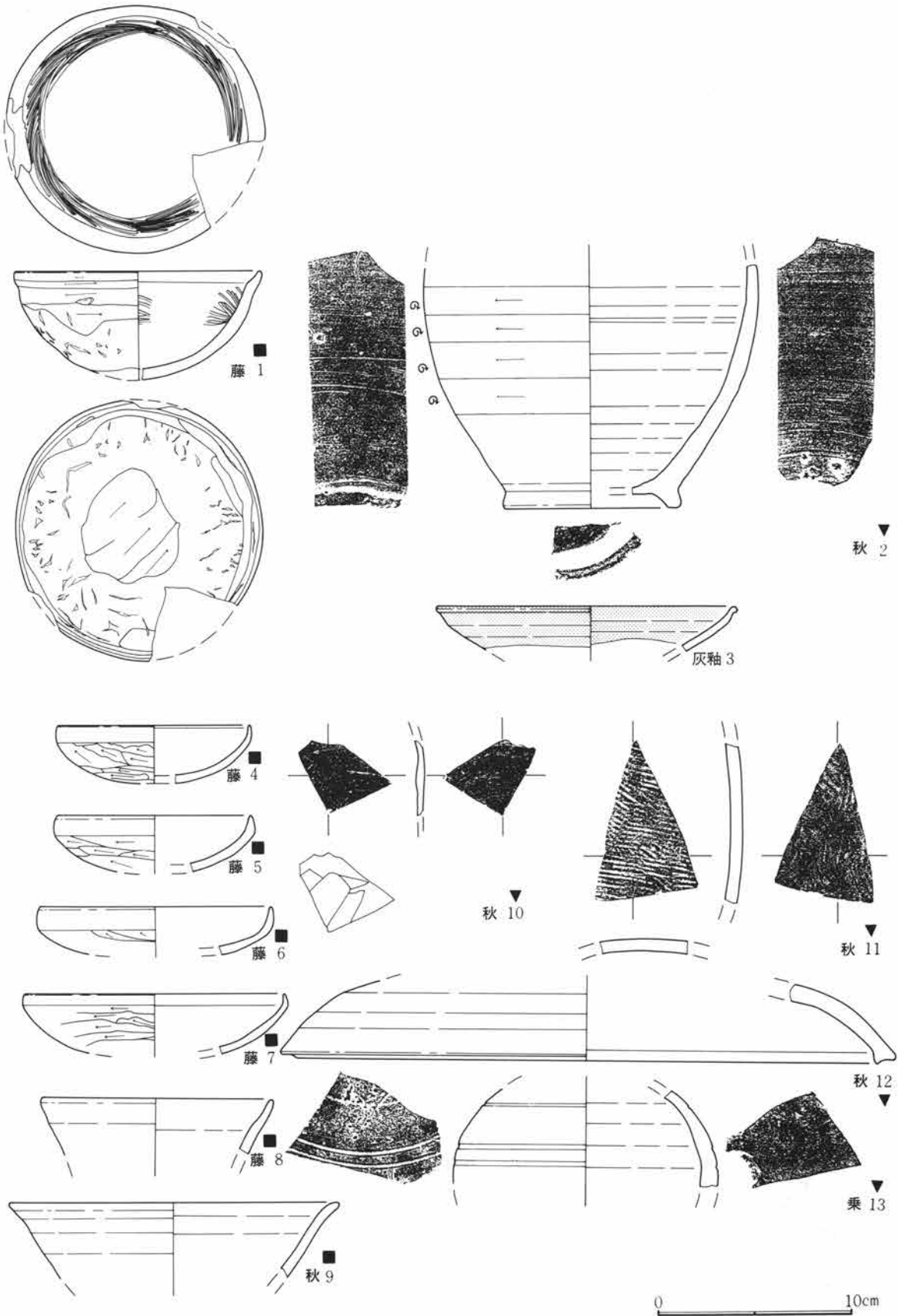


第192図 追補1-C区内住居跡出土遺物実測図(2)

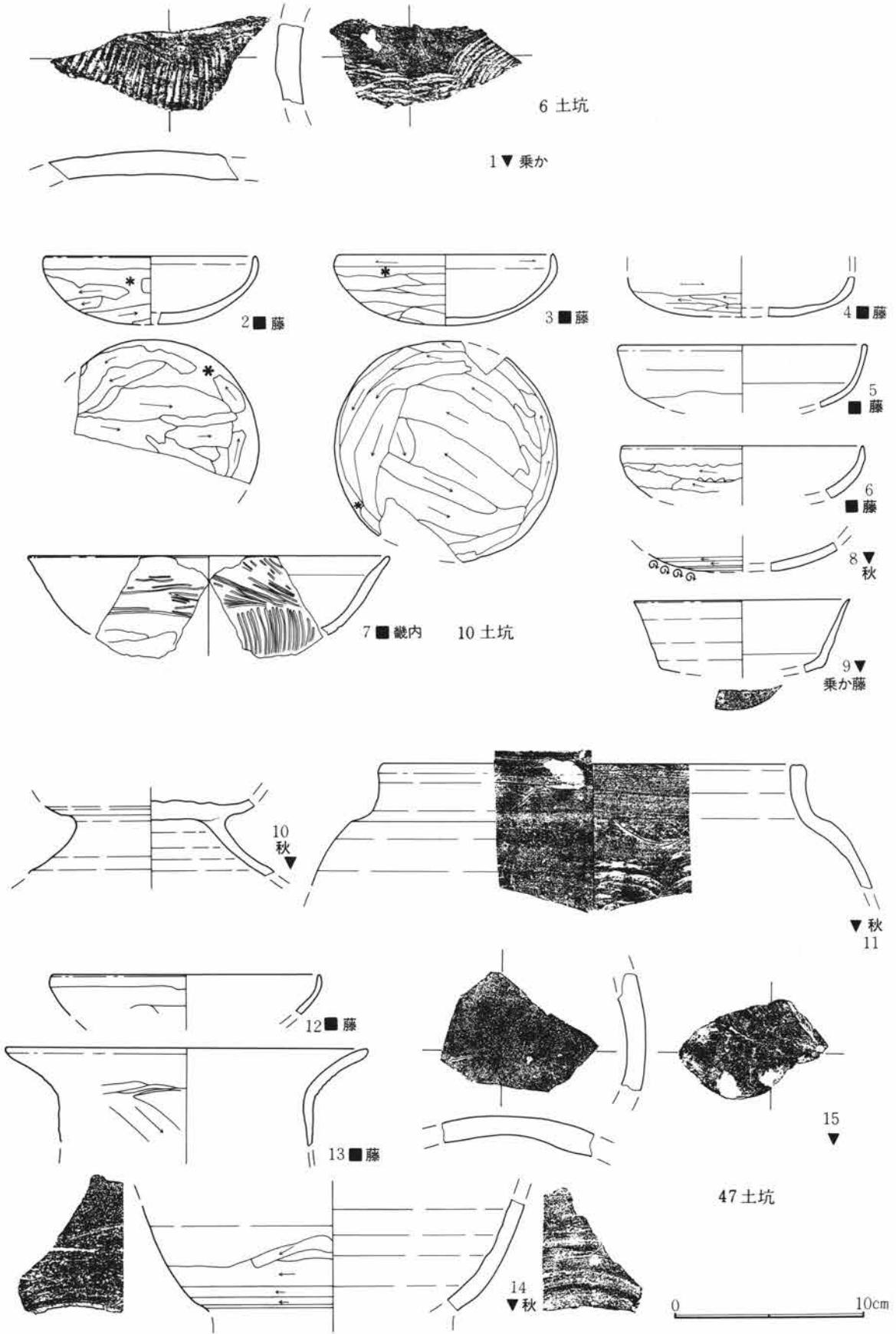


第193図 追補1-B区住居跡出土遺物実測図

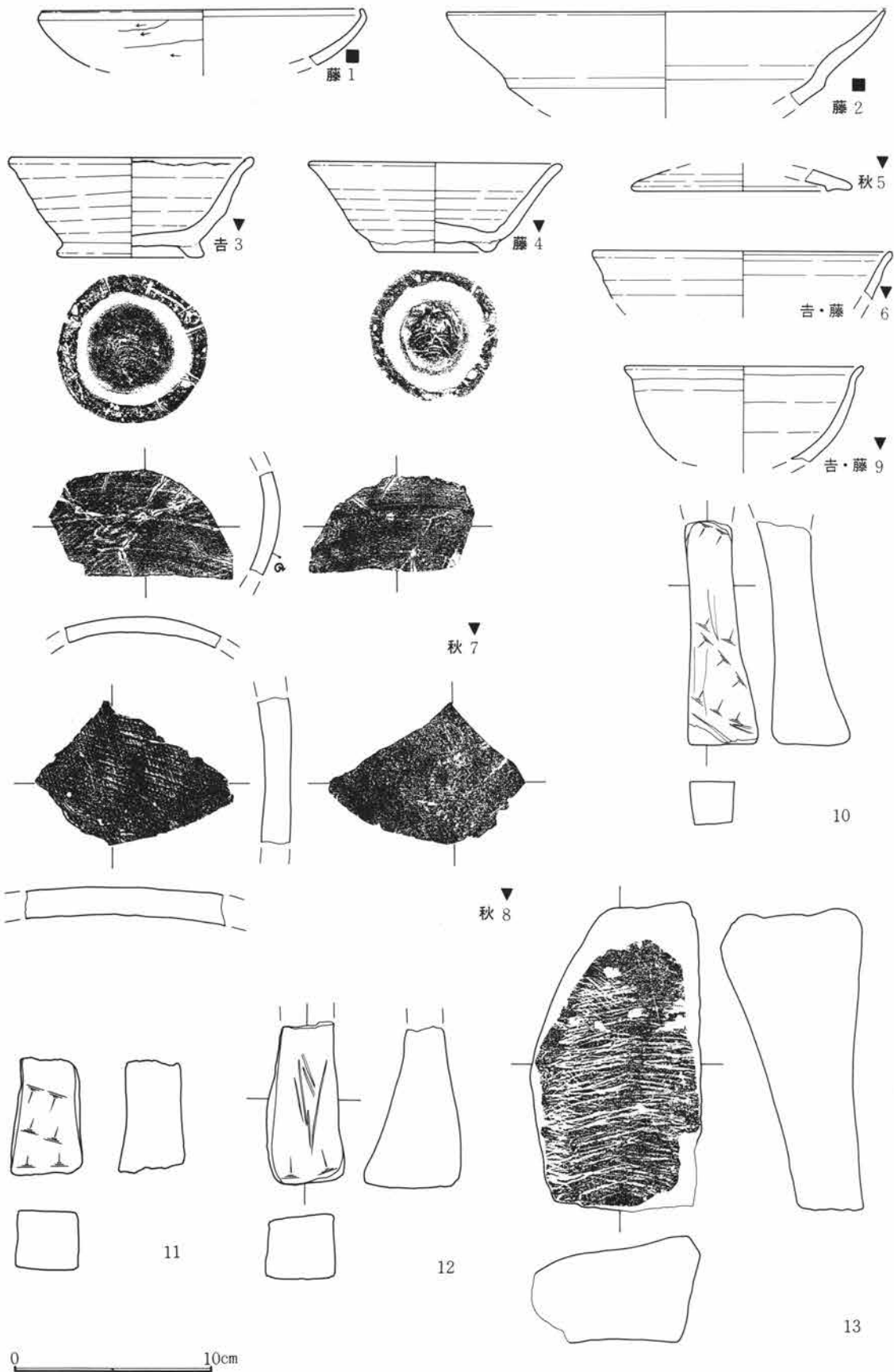




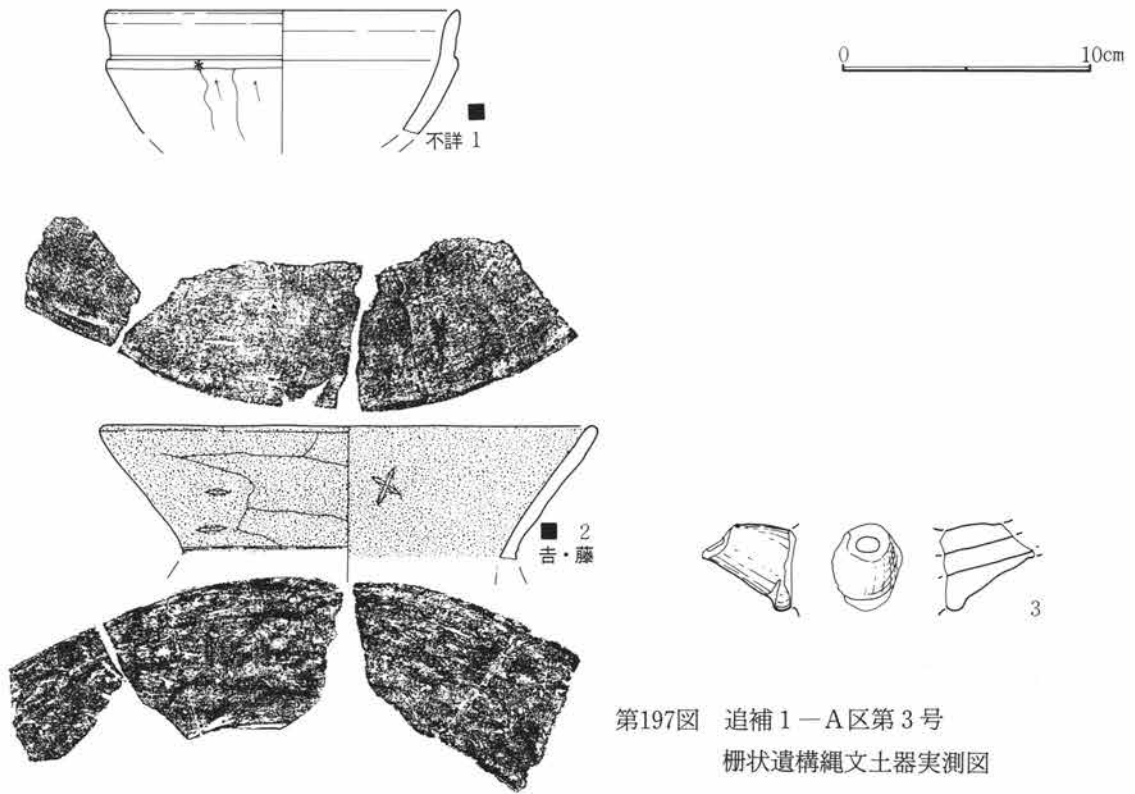
第194図 追補1-A区住居跡・土坑出土遺物実測図



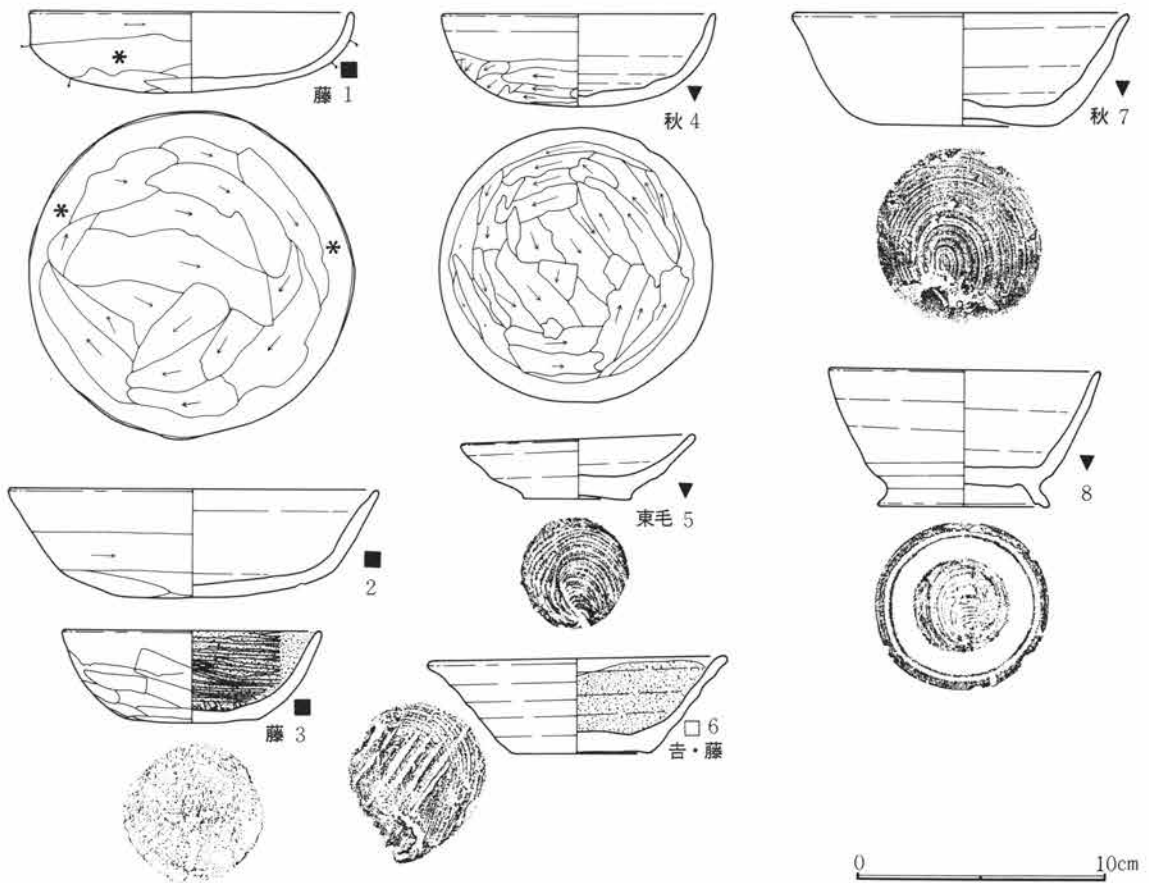
第195図 追補1-A区土坑出土遺物実測図



第196図 追補 1 - A区土坑・遺構外出土遺物実測図

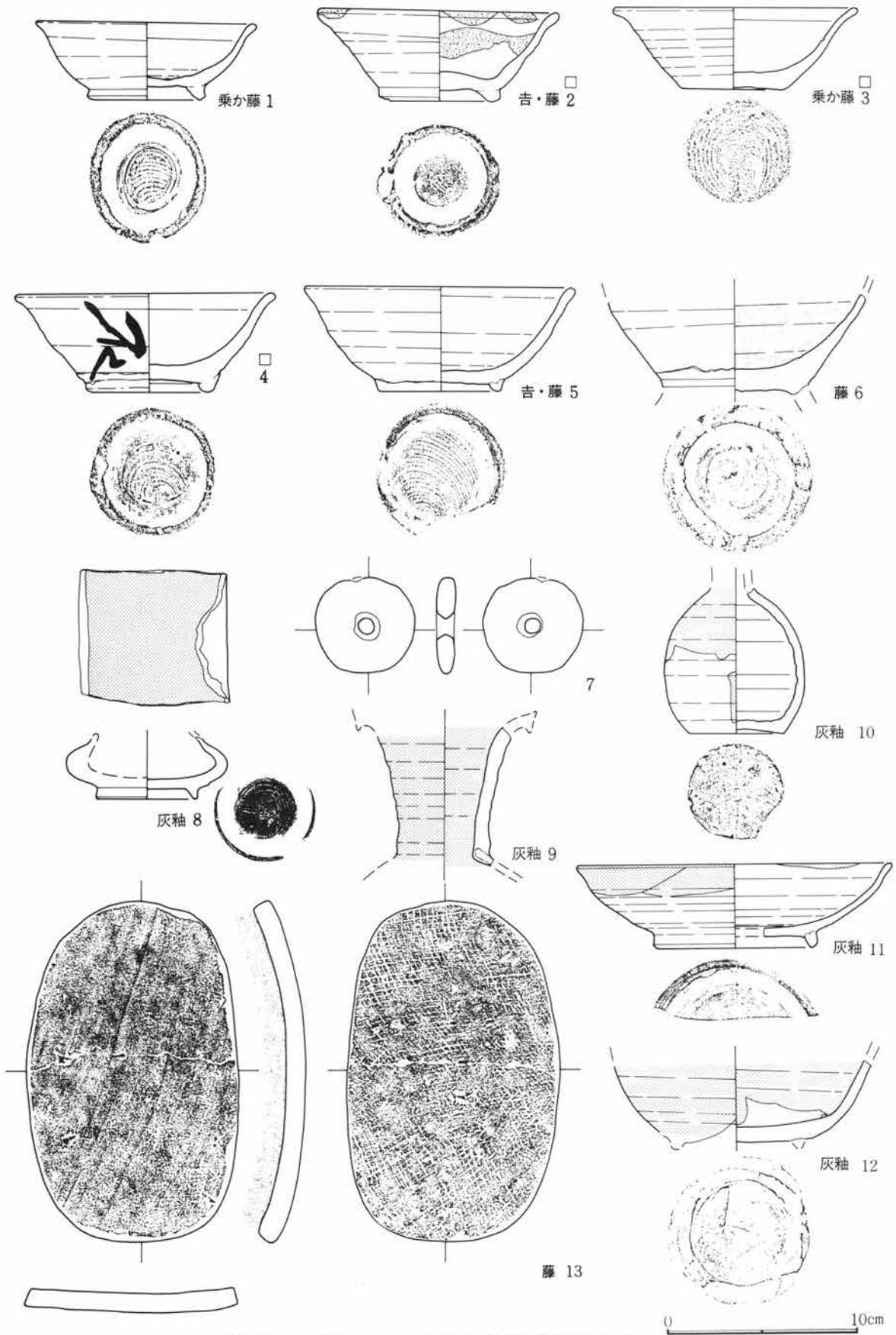


第197図 追補1-A区第3号  
 柵状遺構縄文土器実測図

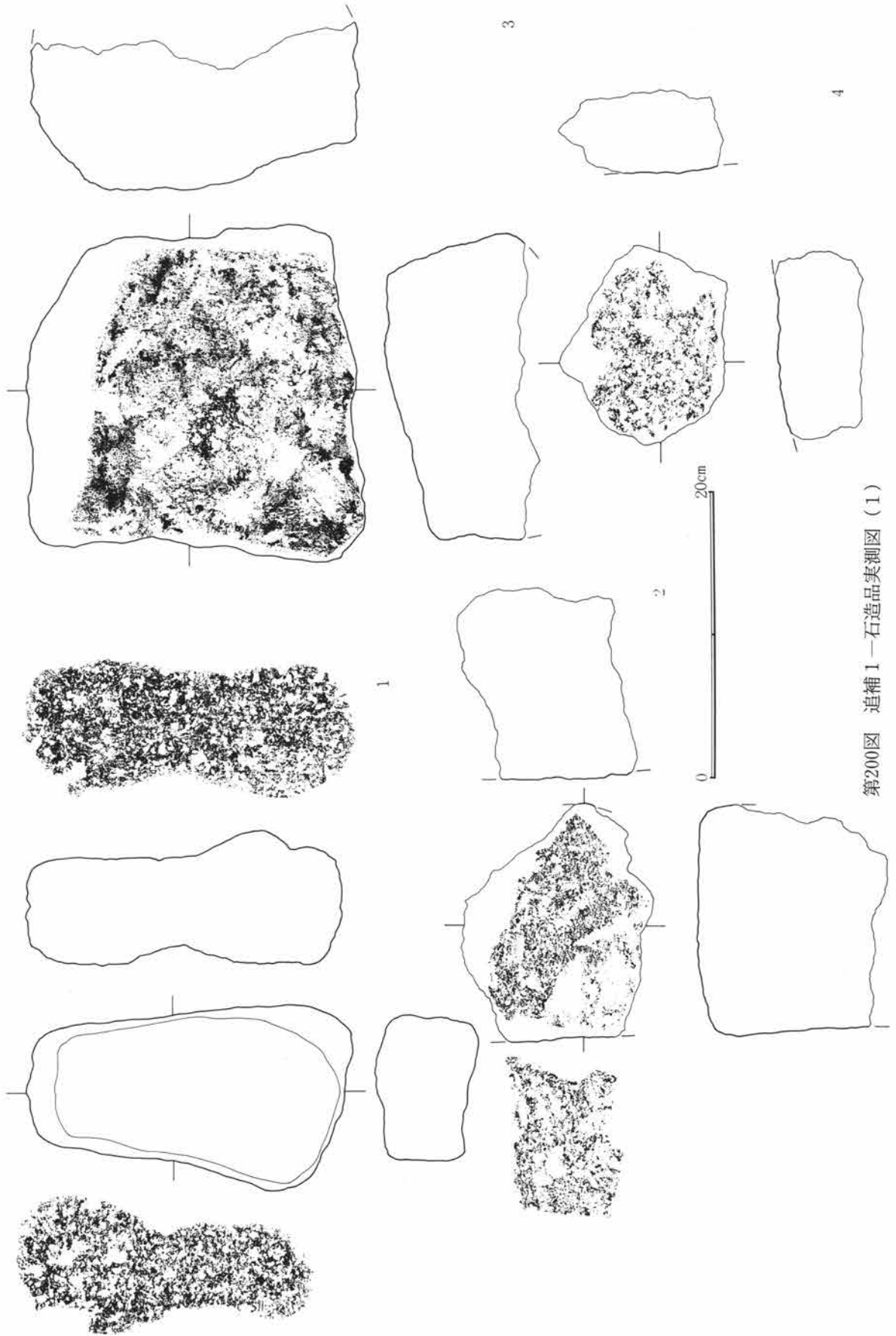


第198図 追補1-調査区外出土遺物実測図(1)

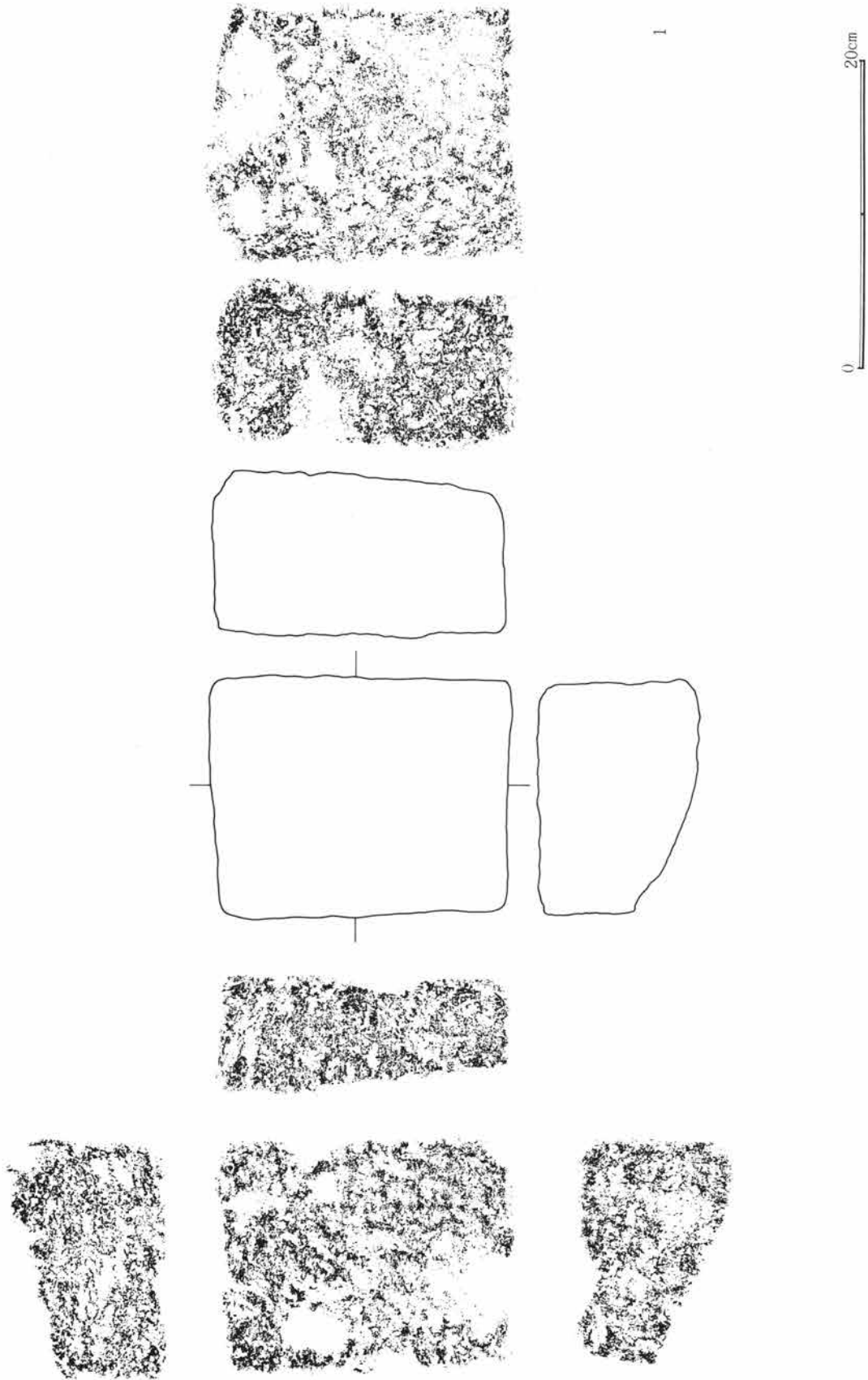
第5節 追 補 (1)



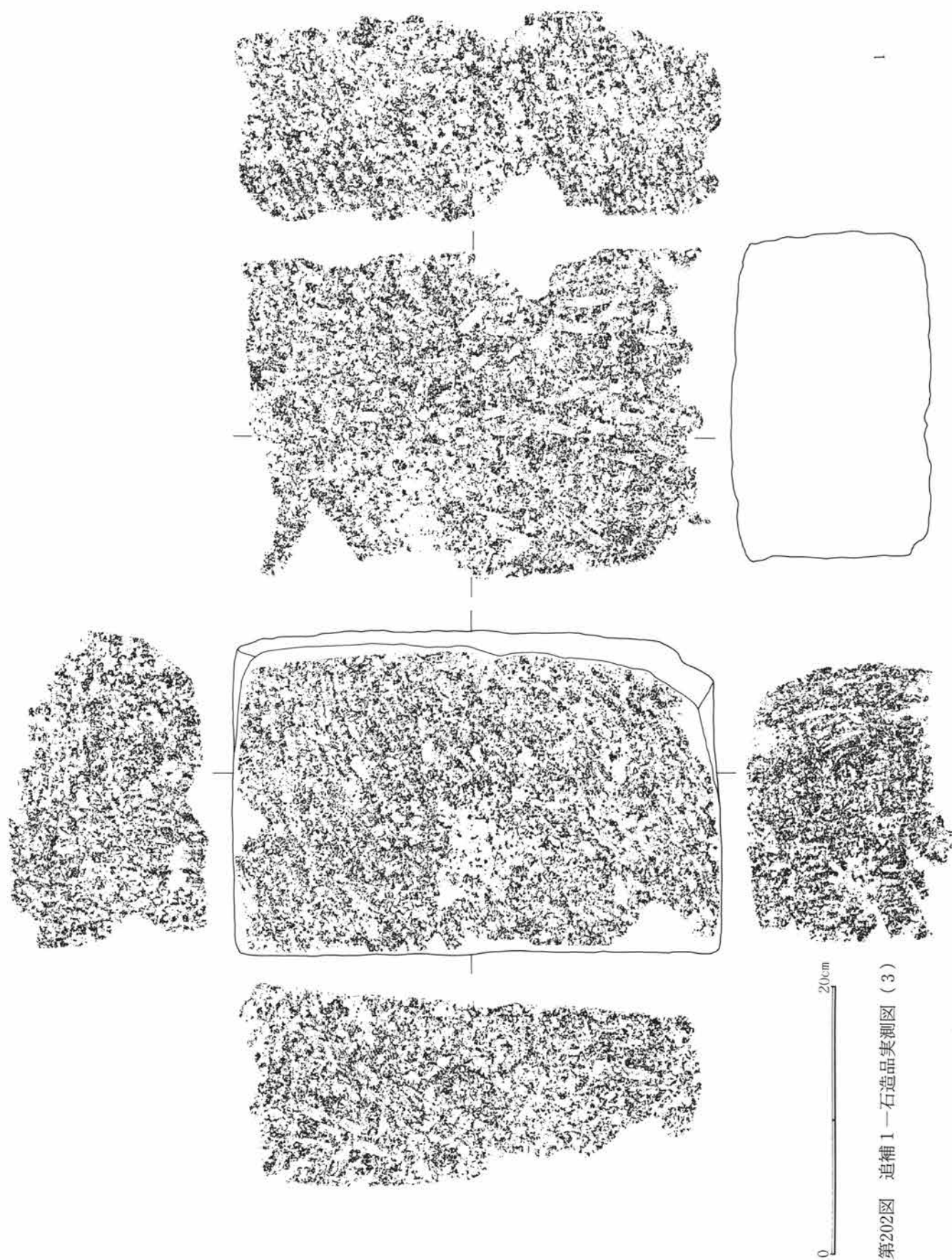
第199図 追補 1—調査区外出土遺物実測図 (2)



第200図 追補1—石造品実測図(1)

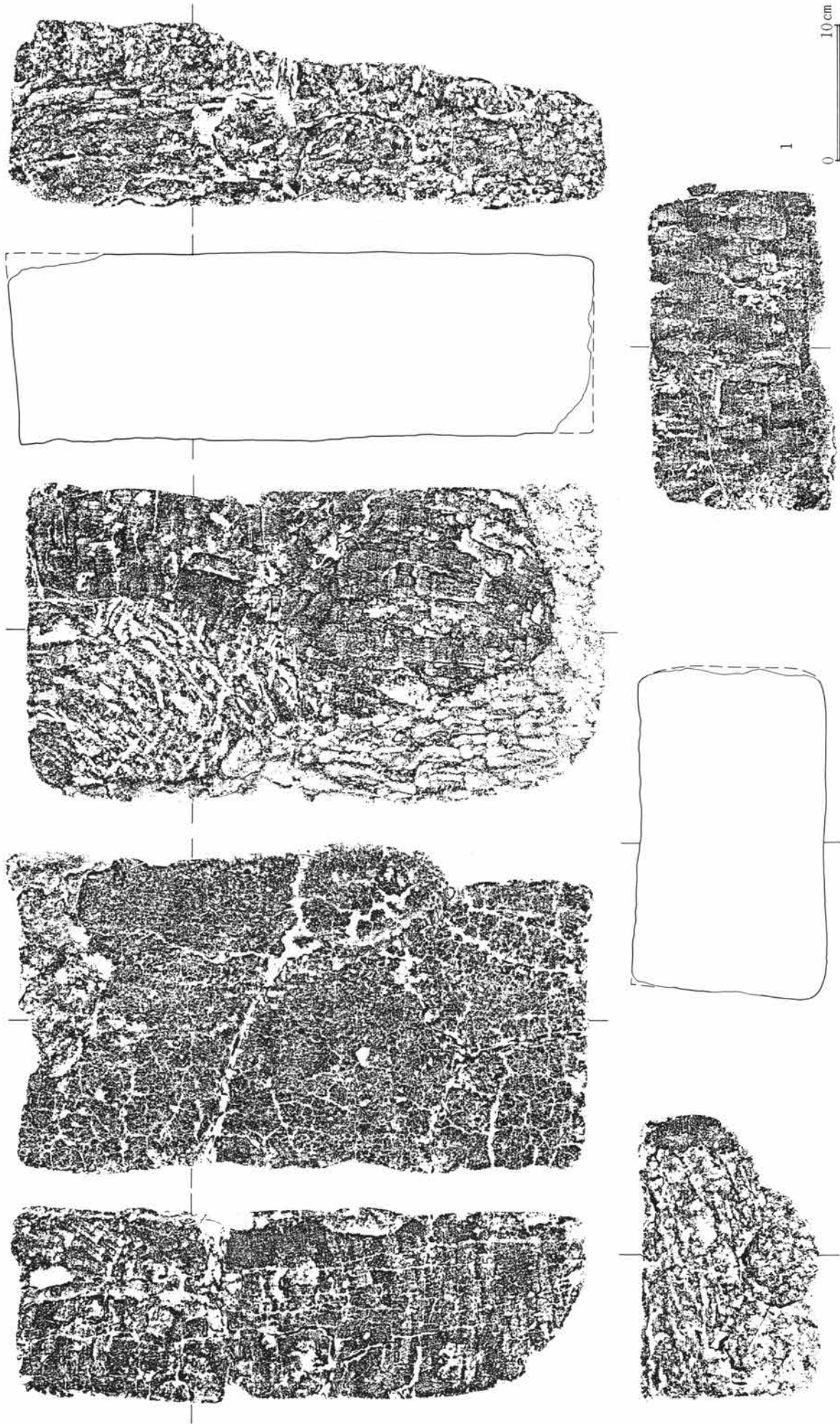


第201図 追補1—石造品実測図(2)

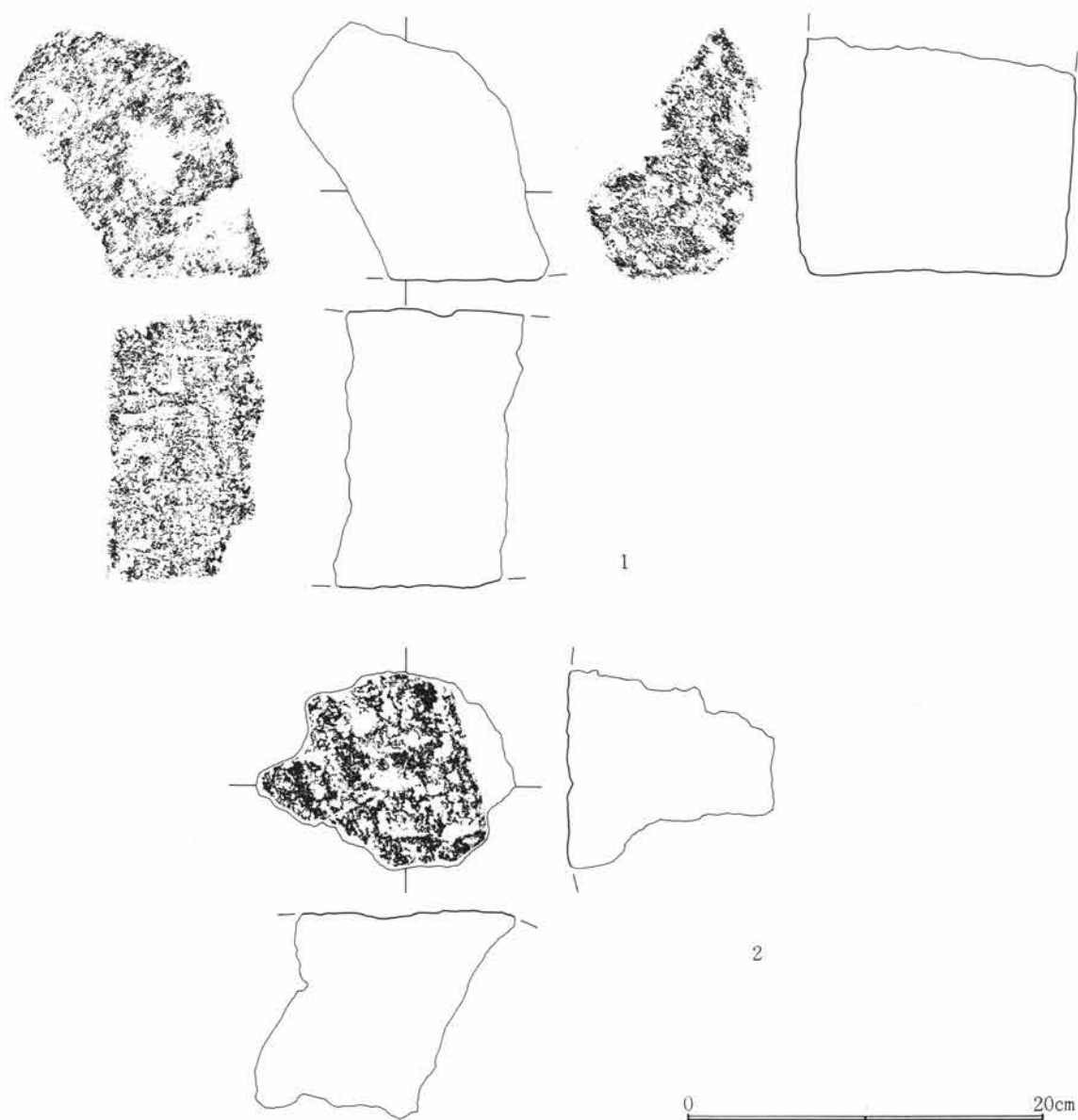


第202図 追補1-石造品実測図(3)

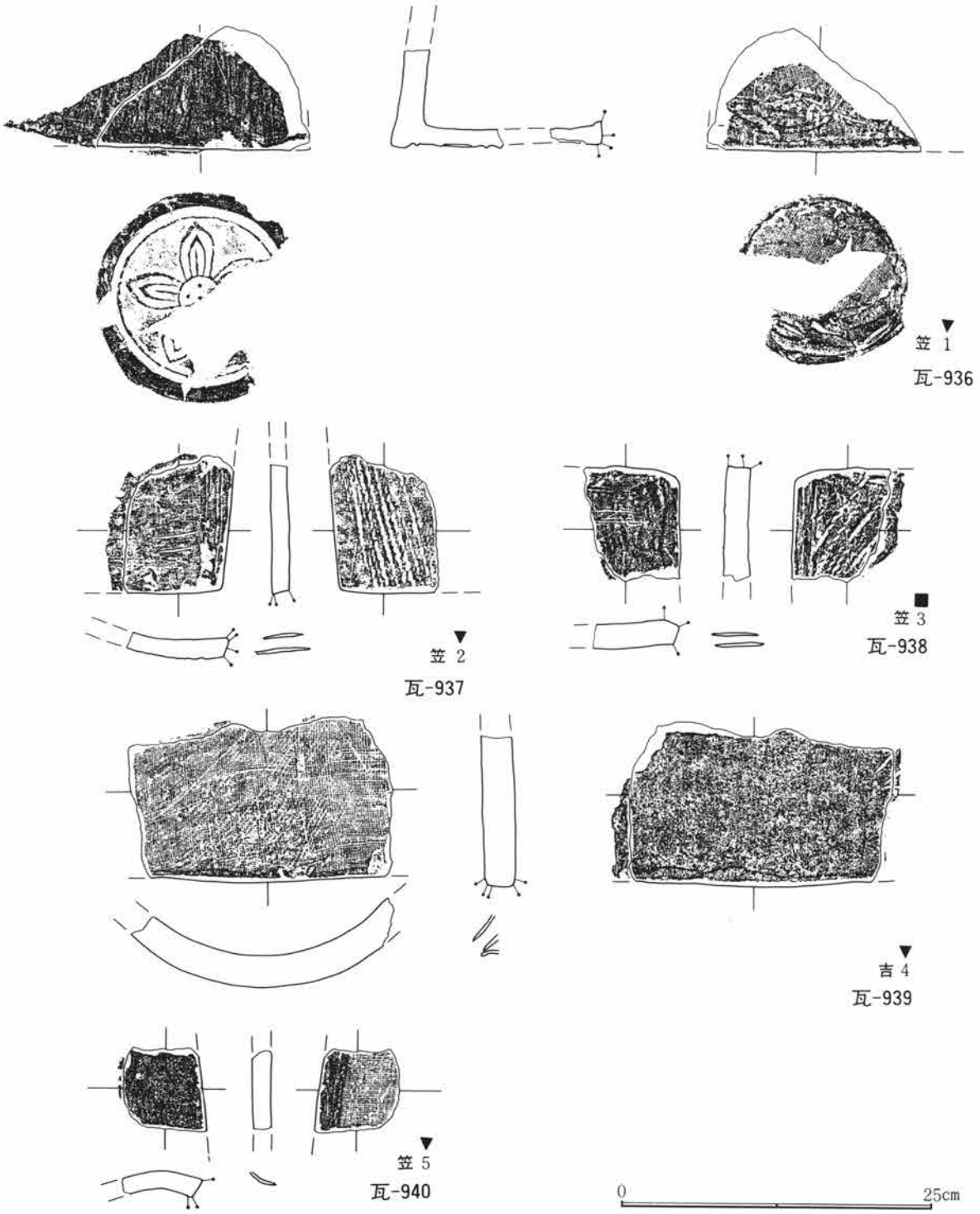




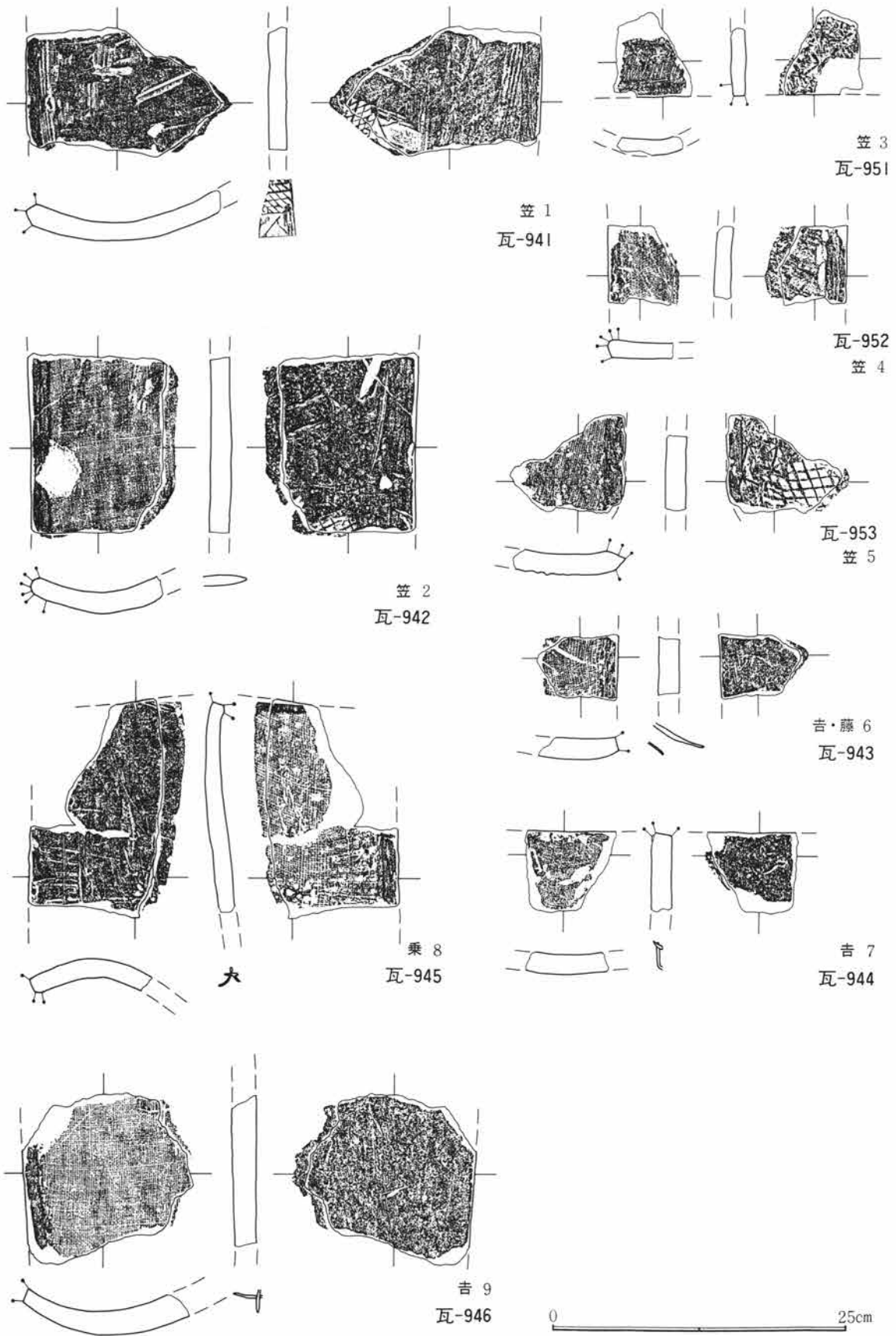
第203図 追補 1—石造品実測図 (4)



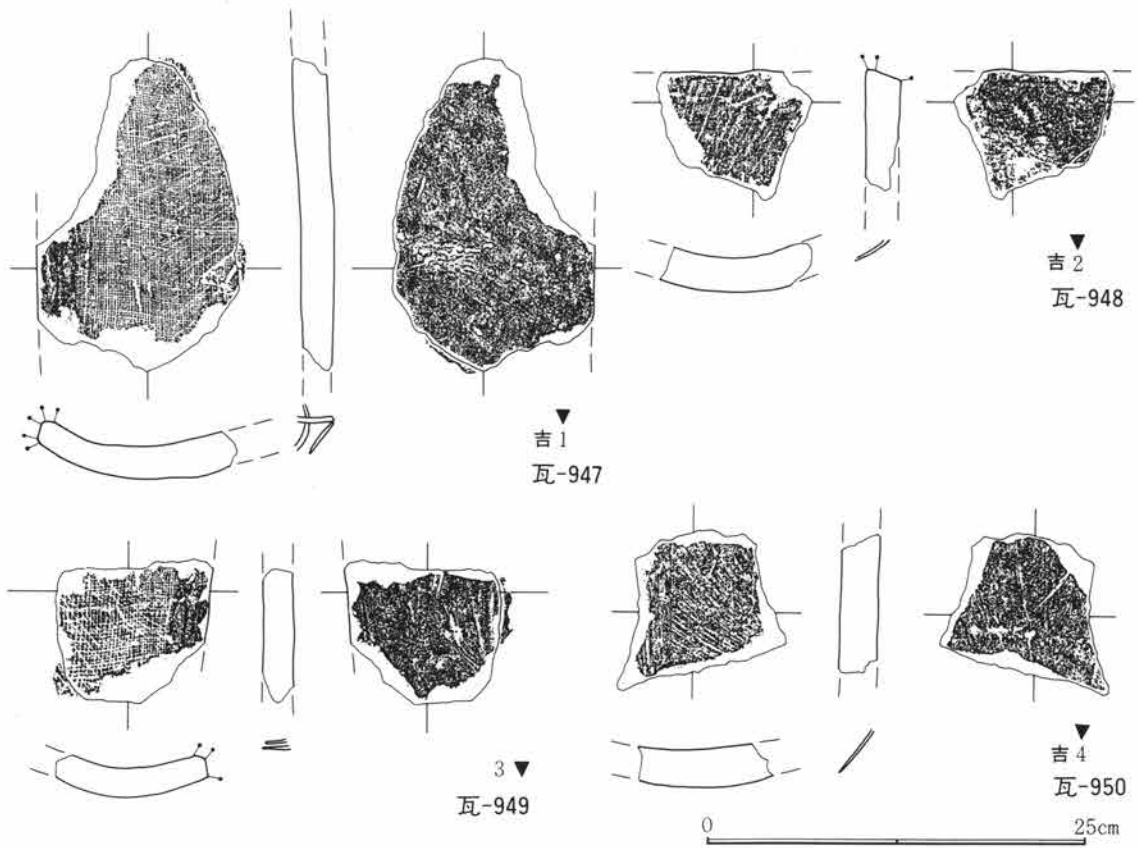
第204図 追補1—石造品実測図(5)



第205図 追補1—瓦実測図(1)



第206図 追補1—瓦実測図(2)

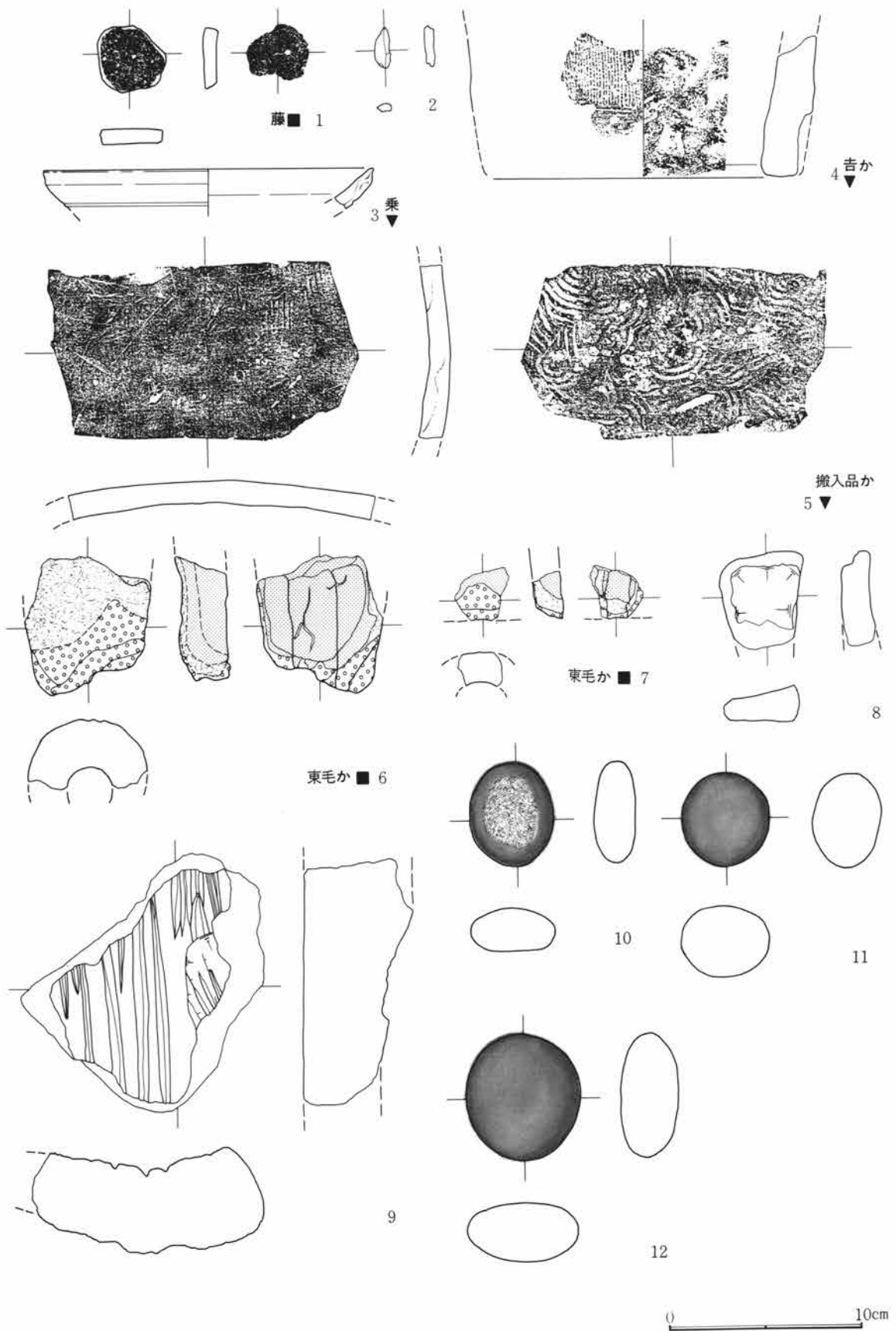


第207図 追補1—瓦実測図(3)

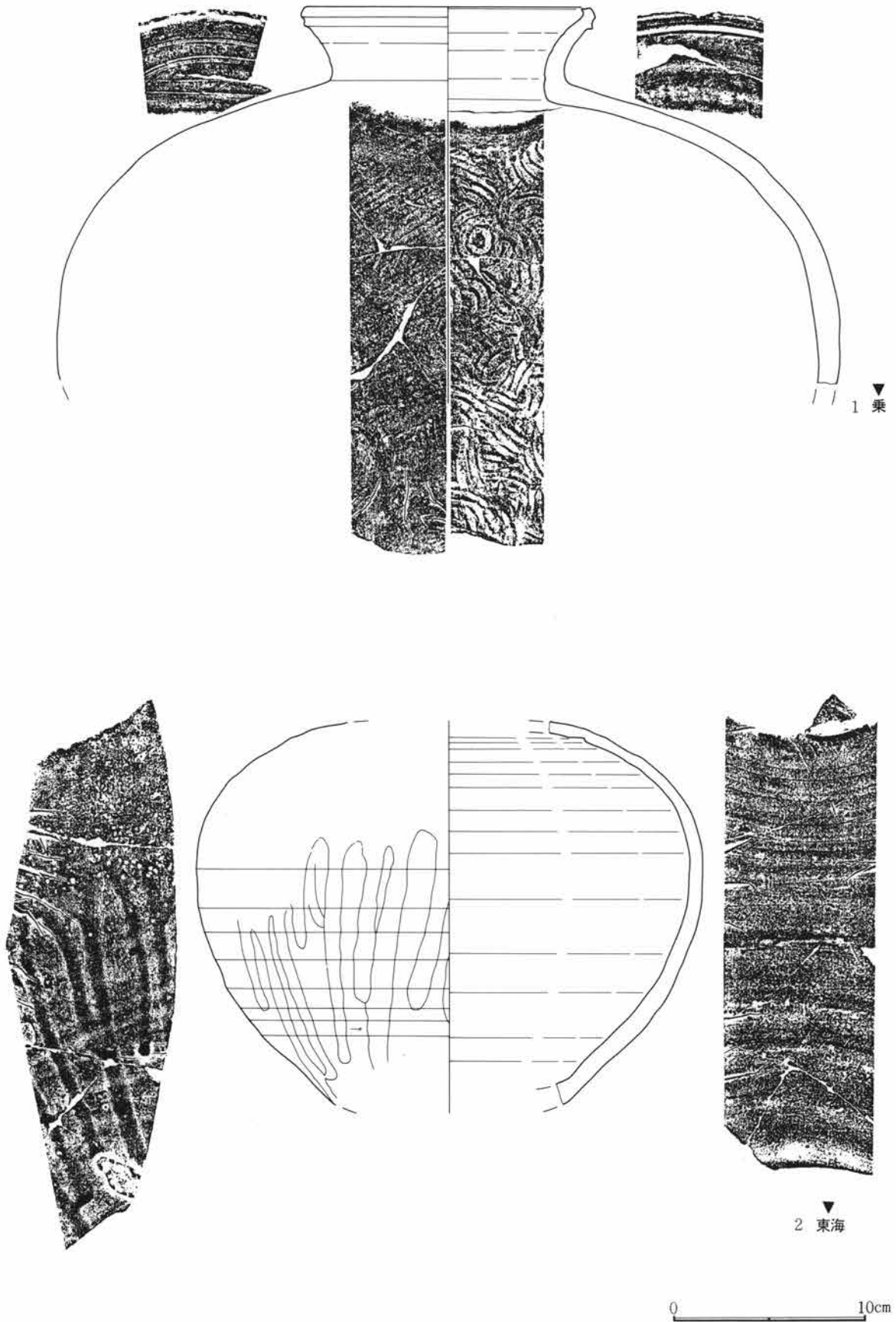
## 第6節 追 補 (2)

本節の追補は、染谷川河川敷部の出土遺物で掲載漏れの遺物を掲載し補うものである。

第4章 検出された遺構・遺物

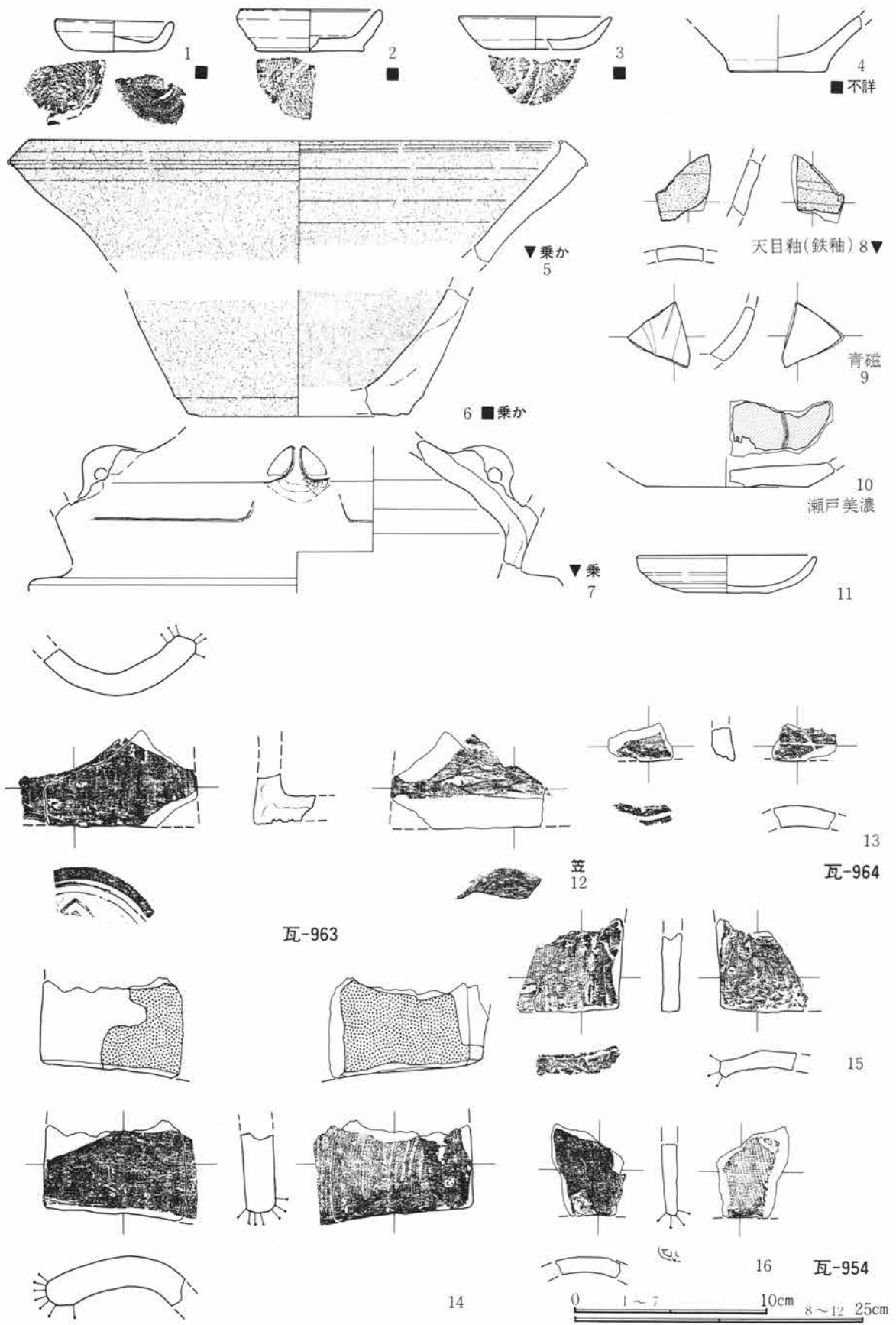


第208図 追補2—染谷川河川敷追補(1)



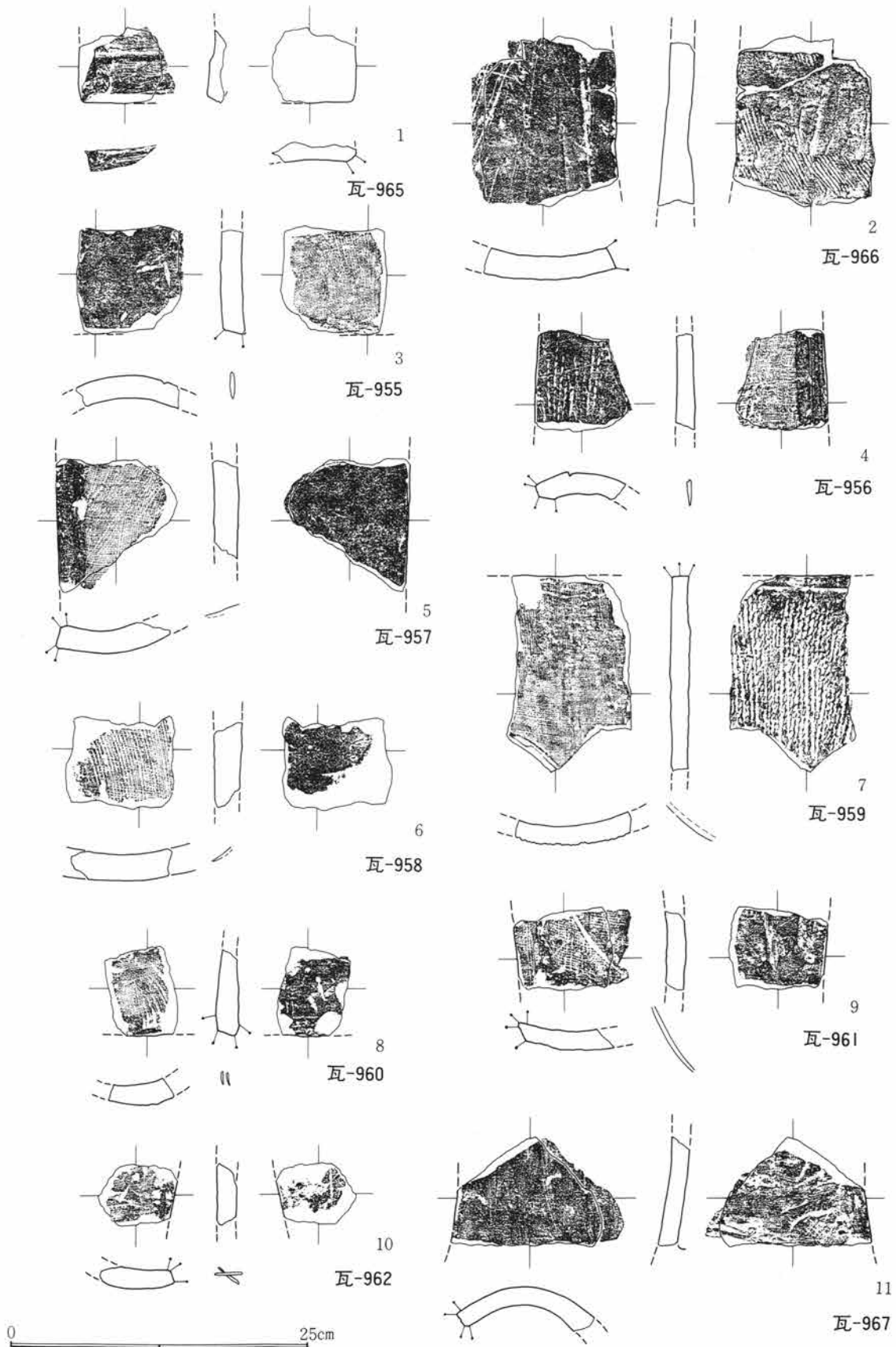
第209図 追補2—染谷川河川敷追補(2)

第4章 検出された遺構・遺物

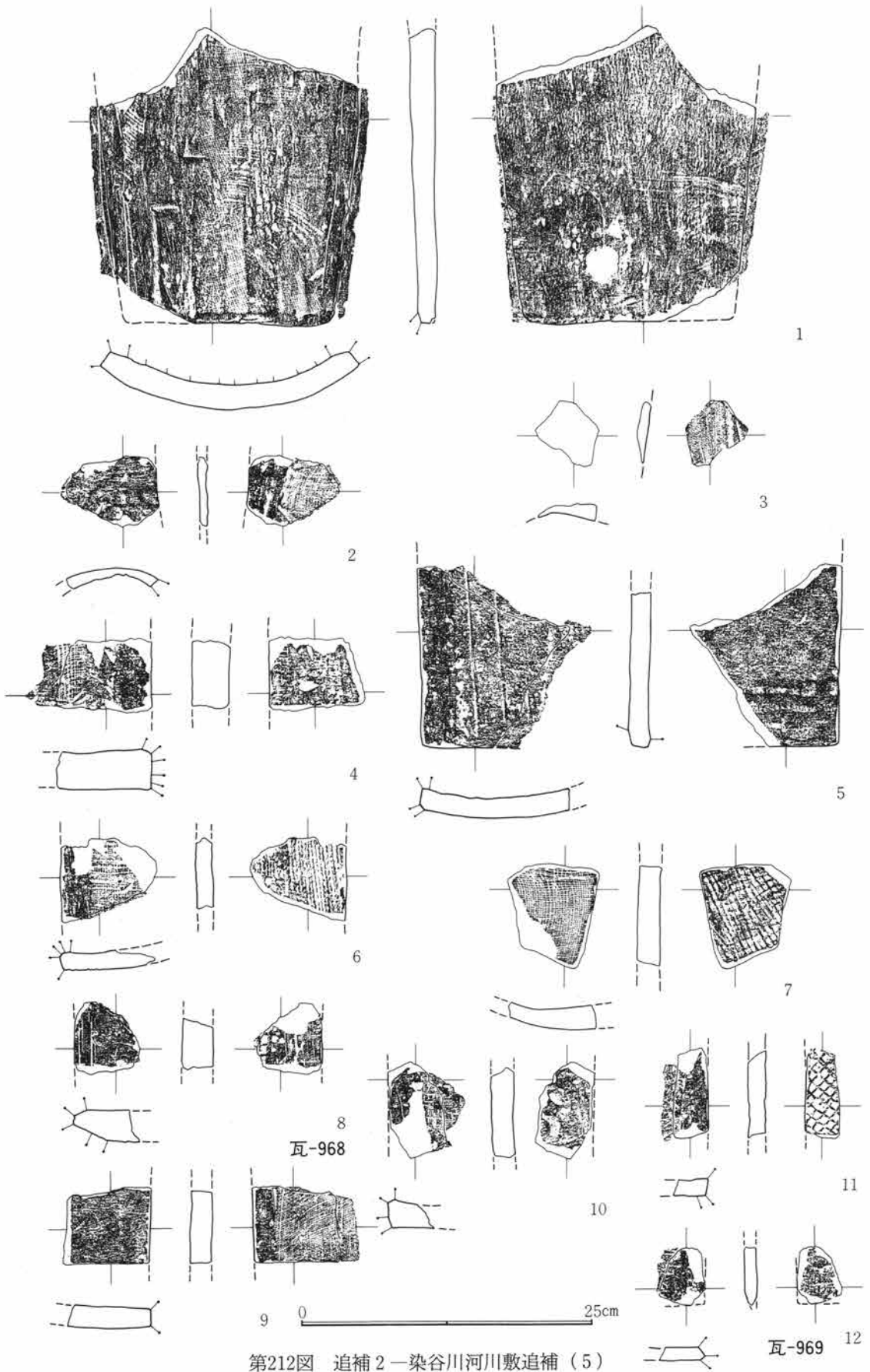


第210図 追補2一染谷川河川敷追補(3)



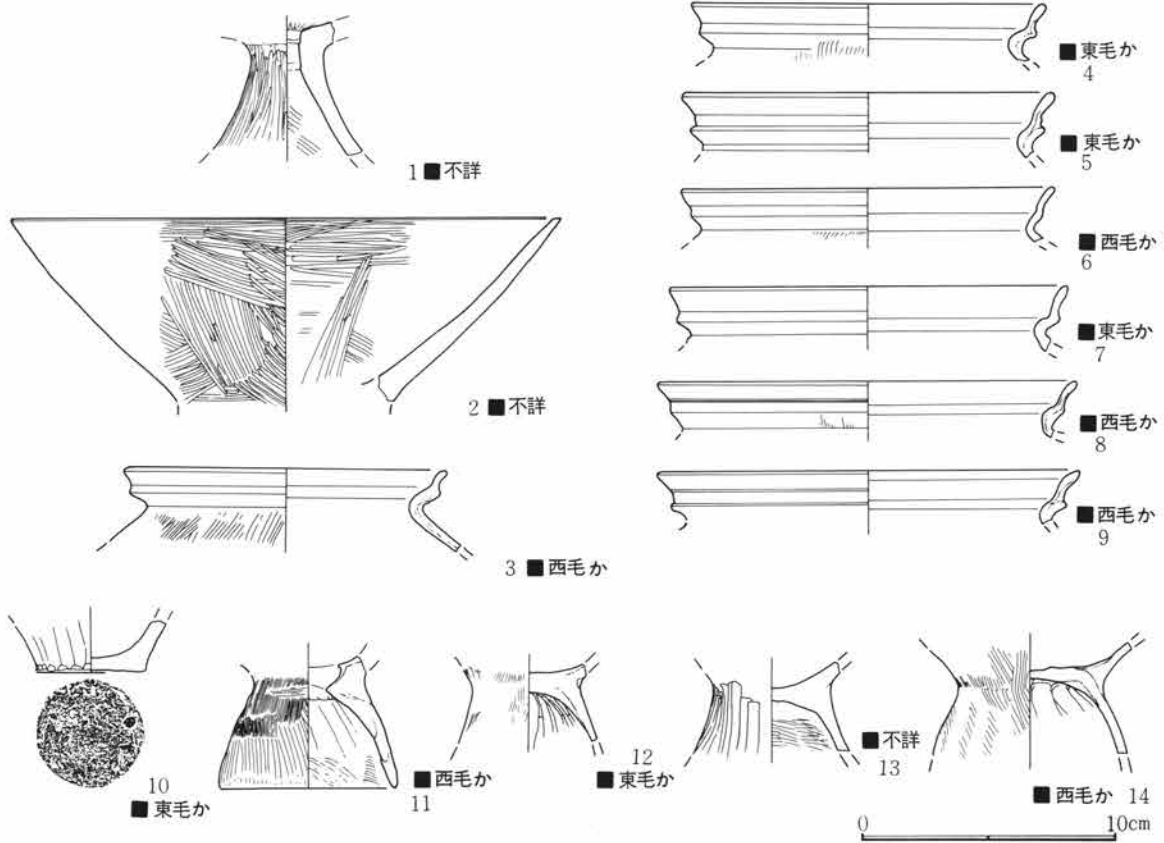


第211図 追補2—染谷川河川敷追補(4)



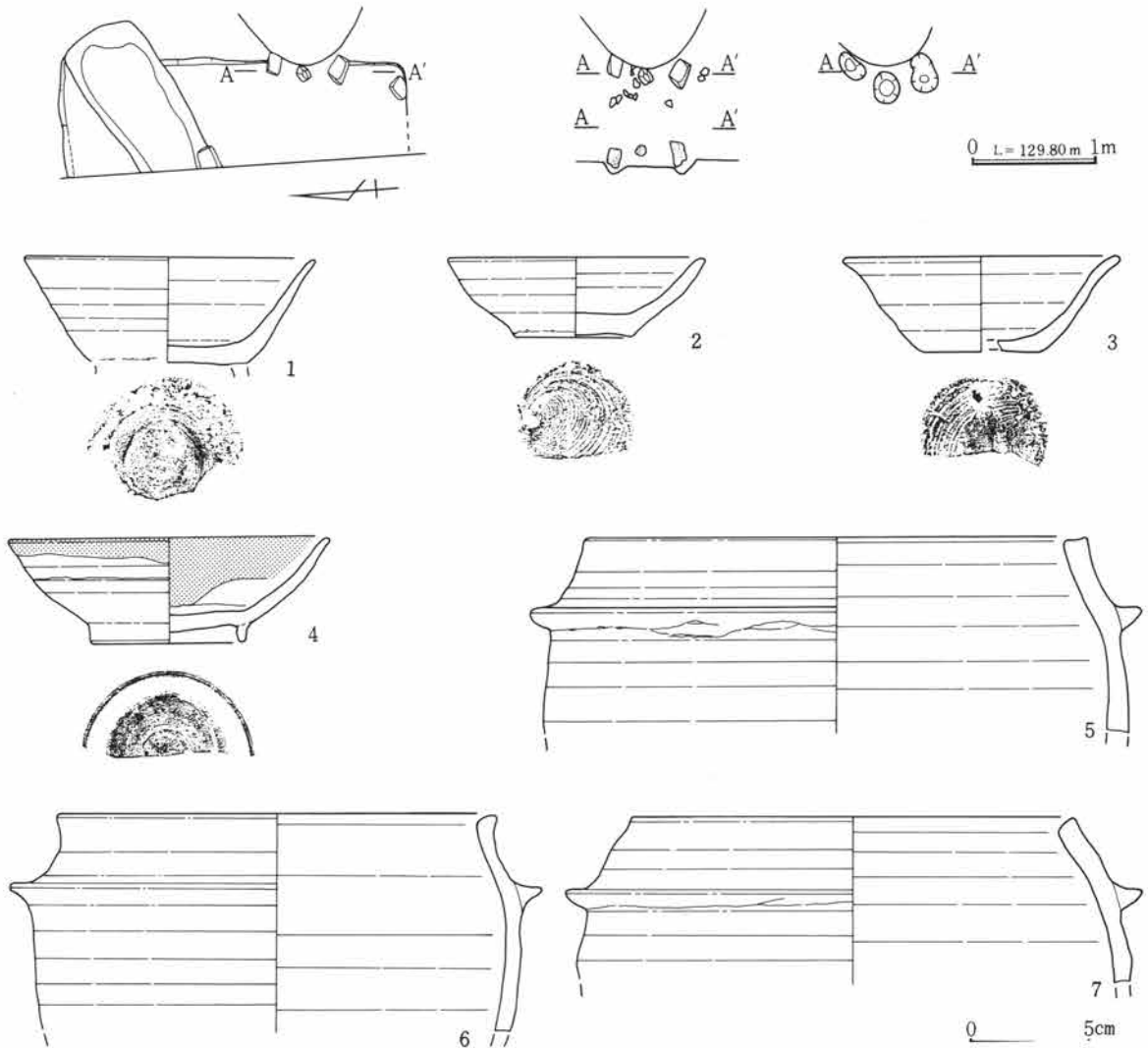
第212図 追補2—染谷川河川敷追補(5)

第6節 追 補 (2)



第213図 追補2—染谷川河川敷追補(6)

遺構名称	I区第169号住居跡	位置	42・43-I-59グリッド内。		
平面形態	—	規模	—m×2.70m	主軸方位	東-0度-
				残存深度	約 5cm程



第214図 追補1—I区第169号住居跡出土遺物実測図

**所見** 当住居跡は、本来は『上野国分僧寺・尼寺中間地域(7)』に掲載すべき遺構であったが、未掲載であったので当巻に掲載することにした。遺構の西半分は、南北農道下にかかっていたために、東側区画の調査終了後に農道下の調査を行った。しかし、この調査においては、東側区画との確認面の違いによるものか、西半部分を検出することはできなかった。カマド部分で第240号土坑と、北側部分で第301号土坑とそれぞれ重複しているが、いずれも当住居跡が古い段階であることを示している。

カマドは、焚口部から燃焼部付近だけが残存していた。馬蹄形状の平面形を持つタイプと思われ、袖は両袖共に角柱状の截石を、やや内側に傾けて据えていた。この袖間に想定される燃焼部の幅は、約40cmである。また、袖間からは礫が1点出土しているが、位置的にこれを支脚とは考えられない。

遺物は、すべてカマドの周辺から出土したもので、当住居跡の遺物として認定した。

## 第5章 考 察

### 第1節 検出遺構に就いて

#### 第1項 古墳時代の祭祀

##### 1. 古墳時代の祭祀について

古墳時代の祭祀遺構として祭祀跡としての性格付けの理由と根拠把握したのは、染谷川河川敷部第2区(以下、2区と略称)で検出された、石組み遺構及び土器溜りの状況である。

調査時点では、石組み遺構と井戸と考え、石組み遺構上層で検出された獣骨頭部及び玉類や土器等の出土は、井戸の廃絶に伴う祭祀と考えていた。しかし、整理を実施する過程に於いて、石組み自体が井戸の機能を有してしたか否かという問題に直面した。この問題に対して、井戸跡を否定する要因として、当時の湧水位がもっと下位であったろうと考えられる点と、覆土・埋土及び周辺部1生活面には、砂層乃至砂の検出が無かった点により、井戸跡としての当跡の性格は否定的になった。

そして、上述のことから、当跡は、周辺状況を生じせめる主体遺構として“石組み、のみの名称とし、周辺状況から全体を祭祀跡として捉えることにした。尚、周辺状況で祭祀を示唆する状況(根拠)は以下の1～6である。

1. 土器類が土師器坏類を主体とし、単時間に非常に多量の土器類を廃棄していること。
2. 土器類(特に土師器坏類)が破片化しているが、この破片化した土器類の接合率が高く、当該所での破片化が想定出来、当所へは、破片化した土器を持ち込んだのは無いという点で、当所へは形状保持された土器が何らかの理由によって廃棄されたことが考えられる点。
3. 玉類の出土が、石組み周辺に限定されて出土したこと。
4. 火中した木材の出土により、当所で火を焚いたことが想定される点。

以上である。

又、石組みでの状況として次の2点が特殊な状況とし把握出来る。

5. 石組み内部を埋設して、上位に切断された獣骨(頭部)を供献している点。
6. 土器類の出土がほとんど無い点。

以上である。

##### 2. 祭祀跡に伴う造成とその意義と目的

染谷川河川敷部に於ける造成の痕跡に就いては前段(文化層)で述べたが、ここで、再び古墳時代後期段階の造成の痕跡とその意義に就いて述べてみたい。

当該部の造成の痕跡は第7図下段の断面に認められている。この造成として認められる状態は、この土層断面のみでの状況であり、造成そのものを確実視させる根拠は薄弱であるが、上位層の状況等を勘案して造成の痕跡として判断した。

造成は、下位のFA層直上層のピート質の濁暗灰褐色土層(18層)と同層直上の火山灰層の大半を削平している。この為、FAの上位で認められた火山灰層は部分的にしか残存していない。この火山灰層は、FA層との間に確実に間層を介していることから、FA降下以降、若干の期間を置いて堆積したことは明らかで

## 第5章 考 察

ある。そして、この火山灰層を、群馬大学教授新井房夫先生（当時）に現地で、テフラの同定を御願ひしたが、確実な同定は行えなかった。然し、榛名山給源であることは確実に層的にはFA-BTの間で、考古学の所見に基づけば、FP以前でFA降下後の榛名山の小規模爆発に伴う降灰物であろうとのことであった。

これらのことから、この火山灰降下直後に造成と祭儀が行われたことになる。

ところで、当遺跡北側の牛池川河川敷部（J区）では、牛池川を流下したFA泥流（FAF-I）が厚く堆積しており、FPに伴う降下堆積物層は認められていないが、FPに伴い降下した軽石を含有する土層が泥流を被覆する土層に混入している。

このことは、染谷川下流域で認められるFA泥流堆積物は、染谷川上流域から直接に流下したのでは無く、牛池川を流下した泥流が、染谷川に合流して下流域に達したことが指摘出来る。

已ち、染谷川河川敷部に堆積したFAの上位層の火山灰層は、下限にFPの堆積頃が想定される。又、牛池川河川敷部で検出されたFP軽石を含有する土層は、当該地区では認められなかった。この点に就いては、18層の存在、則、造成により、含FP層は失われた可能性も想定される。そして、この想定を拠所とするならば、FPの降下以降に造成と祭祀の開始時期が見込まれる。

この染谷川河川敷部での造成とは、台地で行えない何らかの特定される祭祀の為に、その場所の確保の為に行われたと解釈せねばならない。そして、この染谷川河川敷部を占地する要因は、祭祀対象が、河川敷という地でなければならない必然性が存在した筈である。

通常、河川敷部の祭祀跡の場合、水との係わりが重要な要因が見込まれ、水を主体とする対象や水田等に対する祭祀行為が想定出来、水の場合、水害との係わりを最も推定させるところである。しかし、染谷川河川敷部は、FA降下前後共に水害・水田等の存在した痕跡は認められていない。又、対岸の鳥羽遺跡<sup>(註)</sup>でも同様な状況である。だが、この両遺跡で異なる点は、当該地からは染谷川の崖線の間には榛名山が一望出来るが鳥羽遺跡では榛名山を背にした状況である。

一方、FAは、榛名山の爆発による降下火山灰（火砕流）であって、2区に堆積の認められたFA直後の火山灰の堆積や、J区の牛池川河川敷のFA泥流等、一連の榛名山の火山活動に伴うものであり、その活動自体には多くの祭祀を行わせたことが推察出来、渋川市中筋遺跡<sup>註1</sup>での祭祀跡等、FA直下からの検出例には、榛名山の火山活動と有機的係わりを示唆している。そして、このことから、FAの推定降下年代～FPの推定降下年代の間には最も祭祀が行われた可能性があることを推定させる。

上述してきた様に、染谷川河川敷部での占地要因は、極特定される特殊な対象に対することを推定することは可能であろうと考える。そして、推定される時期として、FA降下直後からFP降下の間が考えられたが、造成面直下の堆積状況からすればよりFP降下頃に近いと想起される。

この様に2区での祭祀跡は、FP降下以降（直後か）に近い頃に何らかの特殊な状況に対する祭祀を行ったと考えられ、この特殊な状況とは、やはり、榛名山の火山活動に対する状況であったと考えられ、恐らく、FP降下の前後頃の榛名山に対する祭祀であったと類推される。これが、染谷川河川敷部の2区であった概然性であったことを推定したい。

### 3. 土器溜りの遺物の在り方

土器溜りからは多量の土器類が出土している。出土した層位は、第7図下段の17層土に相当すると判断される。

出土した器種は、土師器坏・鉢・小型短頸壺・壺形・甕があり、須恵器では、坏身・坏蓋・高坏・短頸壺・

横瓮・大甕等がある。この土師器・須恵器の両者では、図示した如く、土師器が9割以上を占めている。この土器類の中で、土師器坏が土師器の中でも8割以上を占有し、全体の中では、7割以上を占めている。この器種構成の在り方は、土師器坏が最大量をもって用いられた点を特徴として指摘出来る。このことは、祭祀を行う際、土器の中では、土師器坏が最も多用され、儀式の中での重要な位置付けがあったことが窺知される。本段では、この土師器坏の在り方に就いて若干検討してみたい。

この土師器坏を胎土・色調（器面色）の二項目で観察する次の点が指摘出来る。

### 1. 胎土

- イ、水簸土を思わせる緻密な生地土を直接使用する一群で、生地土の夾雑鉱物の石英雲母片岩（三波川帯）から、藤岡古窯跡群の生産品が搬入されたと判断出来るもの。
- ロ、夾雑物に白色粒子・白色微粒子を多く混入し“ボソボソ”した感を受けさせ、生産地域が東毛地区に推定される一群。
- ハ、上述二者以外で埼玉県北部域をも含める様な生産地が不確定な一群。
- ニ、夾雑物に粗粒の透明鉱物を含有し、生産地域が北毛地区に推定されるもの。

### 2. 色調

- イ、1-イの一群は、橙色・黄橙色を基調とする“赤”を心象させるもの。
- ロ、1-ロで、色調イの黄橙色がやや黄色味を強くさせ、くすんだ様な色調の一群。
- ハ、断面の発色が2-ロの状態である色調に燻し処理を施した、内黒土器・黒色土器の一群。
- ニ、1-イの胎土で、内面を燻し処理を施したと考えられる内黒土器、ただし量的には微量。
- ホ、1-ハで2-ハと同様に黒色処理を施した内黒土器。

以上の5点が指摘出来る。

出土した土師器坏の中で、2-ロ・ハ・ニに就いて該当するものは、作図可能な個体（口径推定が可能な個体）に就いてはその全てを図化掲載したが、1-イ及び2-イに該当する個体は、口縁部が3分之1以上残存する個体を基本とし、口縁部及び、底部上半に成・整形の特徴が見い出せる個体の場合は、4分之1以下の破片であっても図化掲載した。この1-イ・2-イに該当する個体で図化掲載した個体は、出土量の約10分之1程で、これらの図化掲載の比率は1-イ・2-イを100とした場合、2-ロが5、2-ハが8、2-ニが0.5、1-ホが0.5、2-ホが0.8であり、1-イ・2-イと他では100：15程であり、全体の主体は、藤岡系（産）の水簸土と思われる様な緻密な胎土を使用する坏が使用されている。又、この藤岡産の赤色味の強い一群に対して、内黒土器・黒色土器（産地混合）の一群が、100：10の割合で用いられており、この中でも、東毛系のものが、10の内8を占めるという特徴が認められる。

この藤岡系の赤味の強い一群（赤い土器）と他の内黒・黒色土器（黒い土器）とは、“赤と黒、という色彩上で相対する様相が認められる。

一方、前者の藤岡系の土師器坏の最大の特徴に、大半のものがこの場所だけで使用された如くの、新鮮な器面と割れ口も新鮮な感を受けるものが多く存在している。しかし、他方、藤岡系以外の内黒・黒色土器は、全体に磨滅していたり、口唇部の小単位の欠損が多いという逆の現象が認められ、両者間には色調（彩）面以外での部分でも相対する状況が看取される。

上述した土器の“赤と黒、という関係を東毛地区の二之宮東遺跡・五目牛清水田遺跡<sup>註2</sup>での状態と対比させると、両遺跡では、内黒・黒色の“黒、と、通有焼成の“赤、の比率が、当遺跡例とは大きく異なり、黒に対し、赤である。

## 第5章 考 察

この東毛地区での“赤と黒、との色彩占有率の逆転は、単に、当遺跡での東毛系“黒、が“黒、の中での占有率が高い点から、東毛地区では必然的に“黒、を多く占有させる要因とも考えられる。

いずれにしても、今後に残す課題の一つであるが、この状況は古墳時代後期に於ける祭祀での土器の在り方を示唆する要件の一つと考えられる。そして、藤岡系の1-I・2-Iの使用状況は、当該の一群と同種のものが住居に伴って出土する場合、住居内に於ける他の遺物との関係に於いて、在り方自体も再考の余地はあると思われる。

### 4. 結 語

当該の2区での状況は、遺構・遺物の在り方から、祭祀跡として、榛名山の火山活動に係わる性格付けを推論したのであるが、状況からの推定であり、今後の検討余地は大である。そして、註 1 の中でも述べたが、今後他の遺跡例との対比等を含め、再考したいと考えている。

#### 註

註1 大塚昌彦「IV古墳時代」・「Xまとめ」渋川市教育委員会「中筋遺跡第2次発掘調査概要報告書」渋川市発掘調査報告書第18集 昭和63年(1988)3月

註2 二之宮東・五日牛清水田両遺跡共に、現在整理作業の途上であり、確実な数量把握が行われていないが、整理担当の大西雅広・藤巻幸男の両氏が整理中での所見として大略的な数値として御教示戴いた。

両整理担当者も、祭祀跡に伴う土師器坏には、水箆様の“赤、と、粗い胎土で内黒・黒色土器の“黒、との両者により大半が構成される点に注意を引かれるとのことである。

後年、この2遺跡と当跡を含めた3者での土師器坏の在り方に就いて、3人で検討を加えたいと考えている。



## 第2項 平安時代の井戸跡に就いて

## はじめに

染谷川河川敷部の本調査に於いて、明確な遺構として確認されたのが第3区1号・3号井戸跡である。本項では、この両井戸跡の性格に就いて若干の考察を加えてみたい。

## 1. 井戸跡としての検証

当該の染谷川河川敷部3区第1号井戸跡及び第3号井戸跡（以下1号井戸・3号井戸で略称する）は、壁中位より河原円礫を積み上げる石積み構造の井戸である。

この両者を井戸と認定した最大の根拠は以下の2点である。

1. 冬期の調査期間に於いても比較的多い湧水が認められたこと。
2. 両井戸周辺には、両井戸から排出されたと考えられる砂が、砂層として堆積していたこと。

以上の2点が両跡を井戸跡と結論付けた根拠である。

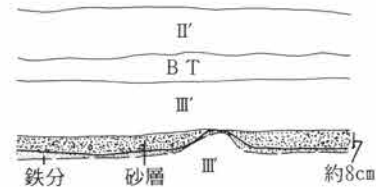
## 2. 両井戸跡の性格

両井戸跡は、構築に当たって、崖線下の斜面を造成して構築しており第7図下段中の第2層群（2・4層）中乃至第2層群底面での構築である。又、第2層群は造成面に堆積土層群を総称している（P104参照）。

この両井戸跡を井戸跡とする根拠は前述した。そして、その根拠の2、本文中での両井戸跡で検出された周辺砂層の性格は、両井戸から排出された水に混入した砂が堆積したものと判断された。このことは、井戸跡より下位の部分に水を導水したことが推定出来る。

染谷川河川敷部の調査進行途中、調査区壁断面には、水田の存在を濃厚に示唆する状況が看取されている。この水田と考えられる状況は、前述したとおり、調査区内の断面部分のみでの確認であり、平面露呈出来なかった為言及し得ないのであるが、断面観察をする限りに於いて、第215図に示した見取り図の如く、上面を蓋う砂層は、両井戸跡の周辺砂層と同質の砂が堆積していた。この断面状況から、水田跡の存在した可能性は大と考える。

若し、染谷川河川敷部に水田が存在したとすると、井戸跡は、この水田に水を供給する「溜井」であったことを推定させる。唯し、水田耕作を行っていたとしても、断面の状況から、永続的な状況とは考え難い。このこと自体、両井戸跡が比較的短期間での使用で、後出井戸跡が認められない点に指摘出来る。又、水田の広がりやを染谷川河川敷部の下段部とした場合、その耕作面積は約5,000㎡を計測することが出来る。



第215図 調査区壁断面に認められた推定水田跡模式図

染谷川河川敷部へは、国分僧寺南面・南東隅部から南東部緩斜面を下り調査区西端に至り、崖線下に沿って3区の階段状遺構の上端に達し、下って当該両井戸跡に至ることは前述した。このことは、当該の両井戸跡が国分僧寺と係わる所産であることが類推される。だが、出土遺物を見る限りに於いて、国分僧寺の推定存続期（8世紀中頃～11世紀中頃）で、国分僧寺との係わりを示唆する遺物は、瓦以外には無く、瓦自体も台地上の住居跡内から出土する如く当遺跡では通有の遺物種として認識せざるを得ない。唯し、台地上の井戸跡との出土遺物で大きく異なるのは、土師器・須恵器の甕類や瓶類が非常に少ないという点があげられる。だが遺物からの国分僧寺との係わりを論述するには無理である。

染谷川河川敷部という極限られた地区に水田耕作を行っていたと仮定した時、この水田の管理はだれが行ったかという問題がある。特に、当該地域周辺では、水田耕作可能地という所は河川敷部位しか無く、更

に、この河川敷部といっても水田耕作可能地は限定されてくる。この状況の中で、染谷川河川敷部の場合、単に台地上の竪穴住居跡に居住した下級階層民(?)の墾田とも考え難く、ここに、この染谷川河川敷部に係わる最低限の規制として、「公」(「官」)の介在を想定させざるを得ない。

この「公」(「官」)の介在を想定し、当該井戸跡への経路を考慮すれば、国分僧寺との強い係わりが惹起する。そして、染谷川河川敷部の地区は、国分僧寺に係わる何らかの施設の一端として理解することが可能となると考える。

一方、国分僧寺には、天平13年(741)の詔によれば、寺田10町、後、天平18年を経て天平勝宝元年(749)には、寺田1000町が認められている。この1000町と言えば膨大な面積である。それに比較して染谷川河川敷部の水田耕作可能面積は5町程であり、この少ない面積に対して「公」(「官」)として係わるのは矛盾を感じる。しかし、この染谷川河川敷部に何らの意義付け出来る状況=特殊状況が存在すれば、この地に対する係わりも何とか解釈出来よう。そして、この特殊な状況を想定するならば、前述した古墳時代に於ける祭祀や、後述する7世紀末~8世紀前半の祭祀行為等が行われていた地としての特殊性が、この地に存在した特殊状況として想定される。

この様に、想定として、9世紀代に至っても当該地区には、何らかの特殊な状況が付加されていたと推察される。更に、この地の水田耕作により得られた収穫物には、自ずと特殊な状況が転化されていたと想起され、その特殊を転化した収穫物自体が、二次的に特殊な使用に供せられたとも思われ、国分僧寺での何らの儀式等に用いられる可き性格を内包していたのかも知れない。

上述してきたことは、あくまでも推定を越える想像でもある。しかし、当該地区の特殊な状況は、何らかの行為の具現物であり、それが、当該の井戸跡であることは確実であろう。

## 第2節 出土遺物に就いて

### 第1項 文化層とその出土遺物

#### はじめに

当該調査区に於ける遺構は、前述した2区石組み・3区第1・3号井戸跡の外に土坑がある。他方、出土遺物は、確実な遺構に伴って出土した遺物と、前章で文化層出土遺物として扱った二者の在り方がある。このうち前者、遺構という具体的な存在により両者を結び合わせて考えられるが、後者は、漠然としている。ここで本項では、前章で述べた文化層をより明瞭な形で明らかにし、文化層＝造成面と遺物との係わりを考究し前述三者の遺構の係りや、造成面自体の性格に就いて言及してみたい。

#### 1. 文化層の概要

文化層は、第7図下段に示した2区の土層断面で明瞭に区分出来る。この区分に就いては前章で述べたが本項を進めるに当たり再録しておく。

- 第1層群 1層土の粒状C軽石を多量に含有する茶褐色砂質土。
- 第2層群 2層土の粒状C軽石を多量に含有し鉄分を多量に含有する茶褐色砂質土と、4層土の粒状C軽石を含有する暗灰褐色土からなる。
- 第3層群 3層土の粒状C軽石を微量に含有すると考えられ(原因に記載が無いが、必然性から)、鉄分を若干含有する茶褐色砂質土。2層に類似するが、堆積状態特に4層との対比から設定。
- 第4層群 6層土の鉄分を微量に含有する茶褐色砂質土と、7層土のIII'層に近質の黒褐色土からなるが、両層共に上位第2・3層群及び下位第5層群との堆積状態の対比から設定した。
- 第5層群 5層土の茶褐色砂質土・8層の粒状C軽石を含有し少量の鉄分を含有する茶褐色砂質土・12層土の暗濁灰色土・13層土の鉄分を多量に含有する硬質(硬化)の暗濁灰色土及び、9層土・10層土(未注記)からなる。
- 第6層群 14層土の鉄分を若干含有し上面が硬化している暗濁灰色土と、14層土同質の15層土と、濁暗褐色砂質土からなる。
- 第7層群 濁暗茶褐色土の17層土からなる。

以上の7層群は、発色・含有物質による分別ではなく、堆積状態に不整合の状態を思わせる分層線や、上位よりの削り込み(造成)や連続する様な堆積状態から「群」という単位で捉えた。

又、第7図の上段と下段での矛盾があるが、上段は調査開始直後に、台地上の基本土層と対比させることを主眼に置いた為「III'」の追求を行い、その結果、堆積状況が複雑なことにより図の右側は細分させざるを得なかったことに要因がある。この為、上段の図は、下段に対比させる様に心懸け群の把握を試みた為である。

この第1～7層群の文化層の年代の上限は、第7層群の2区祭祀跡の年代で6世紀後半頃。下限の年代は第1層群と接するII'層であるが、1層自体にB軽石の混入が認められないことからすれば、B軽石の降下年代、天仁元年(1108)(?)に比定される。

#### 2. 出土遺物の分類

## 第5章 考 察

出土遺物には、土師器坏を主体に同高坏・小形短頸壺・鉢・甕等があり、須恵器では、坏・壺を主として、同高坏・短頸壺・横瓮・甕・瓶類等がある。これらの中で、第7層群（2区祭祀跡・土器溜り）に伴う同種のものを除き第216図～第223図に分類を行ってみた。尚、第7層群の遺物は別途行いたい。

又、分類の基準は、筆者既刊書第3～5分冊で行った方法をとる（上野国分僧寺・尼寺中間地域（3）・（4）・（5）を参照していただきたい。）。

土師器（坏）を分類した結果は第216図に示したとおりである。この分類を第5分冊で得られた所見と対比させると次の2点が指摘出来る。（分類の基本は型式学的方法であり層位は考慮している。）。

1. 設定は、イ・ロ段階は第218～223図に別図にしたが、ハ～ヌの9類系7段階の設定が出来た。この内、西毛（吉井・藤岡）系は5類系で前刊第5分冊の分類と変わらないが、MA類系の分類には一部根拠を欠く。この為、図中では破線にしてある。この点に就いて、MA類系に就いて再検討を必要とする。
2. 今回新たに設定したのが東毛系の一群で4類系を設定した。既刊書中ではこの東毛系と考えられる一群の胎土は殆ど認められなかった。今回図示した東毛系の一群は、遺物抽出時に、どんな細片であっても、図示可能な個体全てを実測し掲載した為、量的に占有率が高く思われるが、全体量の内では1%以下である。東I類系等の類系の設定はM類系と同様の視点で行った（円面の篋撫で整形の「クセ」により分類）。この結果、東毛地区の生産と推定される一群には、M類系＝緑野系の一群と技法を同じくすることが指摘出来る（この点は後述）。一方、M類系には認められない一群の存在もあり、これが、東4類系とした一群であるが、2類系の様相もある点では、2類系からの派生種としても考えられるが、新たな種の生成としても考えられる。
3. ホ・ヘ段階の坏には篋描き記号を刻むものが多い点があげられる。尚、この篋描き記号に就いては、第2項を参照されたい。

以上3点が今回の分類での要点である。

第216図の分類のハ～リ段階は、第5分冊のロ～チ段階に対比させられる。この点から、各段階の年代観は、前刊第5分冊の分類年代観を用い対照させておきたい。尚、第216図中の各年代観は以下のとおりである。

ハ段階——7世紀前半。      ニ段階——7世紀中頃～後半。

ホ段階——7世紀末頃～8世紀初頭。      ヘ段階——8世紀前半。      ト段階——8世紀中頃。

チ段階——8世紀後半。      リ段階——9世紀前半。      ヌ段階——9世紀中頃。

以上に比定しておきたい。

須恵器（坏）の分類は第217図に示したとおりである。この分類を、前刊第5分冊で得られた所見と対比させると、以下の2点が指摘出来る。

1. 第5分冊でのハ・ニ段階の手持ち篋削りを伴う底部調整の分類が無い点がある。この段階に対比される土師器坏の今回の分類はニ・ホ段階であるが、この段階自体も量的には土師器坏の全体の中でも非常に少ない点が上げられる。
2. F類の東毛（笠懸・桐生古窯跡群の一群の設定である。この一群に対比されるものは、第5分冊中でも図化したが、量的にも微量であったことから分類は行わなかった。

この一群の分類上の特徴は以下のとおりである。














































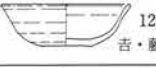
体部の立ち上がり部（腰部）に段状（刳り込状）のくびれを備える器形であり、底部は回転糸切り後周辺部に回転篋調整を施す。

現在、当該種の類例で、窯跡出土例では、笠懸古窯跡山際支群からの採集品があり、760年代の年

西毛（吉井・藤岡）系					東毛（か）系			
M1類系	M2類系	M3類系	MA1類系	MA2類系	東1類系	東2類系	東3類系	東4類系
		30 藤 31 32 藤						
1 藤		33 藤 34 藤 35 藤						
2 藤	14 藤 15 藤	36 藤 37 藤	45 藤 46 藤	53 藤 54 藤		67 東毛か 68 東毛か 69 東毛か 70 東毛		
3 藤 4 藤	16 吉・藤 17 西毛か 18 藤 19 藤	38 藤 39 吉・藤 40 藤	47 藤 48 藤 49 藤	55 藤 56 藤				
5 藤 6 吉・藤 7 藤	20 藤 21 吉・藤 22 藤 23 藤	41 藤 42 藤 43 藤	50 藤 51 藤 52 藤	57 藤 58 藤 59 藤	東毛 61	東毛 71	81 東毛か 82 東毛か	
8 藤 9 藤 10 吉・藤	24 藤 25 藤 26 藤	44 藤			東毛 62	東毛 72	東毛 83 84 東毛か 東毛 85	
11 藤 12 藤	27 藤			60 藤	63 東毛 64 東毛 65 東毛	73 東毛か 74 東毛 75 東毛 76 東毛 77 東毛か 78 東毛か 79 東毛 80 東毛	74 77 80	
13 藤	28 藤 29 西毛か				66 東毛			

第216図 文化層出土土師器坏分類図



	A類系	B類系	C類系	D類系	E類系	F類系	その他
口							 127
ハ							 128
ニ							 129 吉・藤
ホ	 86  87	 96  97  98	 113  114			 笠 130  笠 131	
へ	 88  89	 99  100  101				 笠 132  笠 133	
下	 90  91  乗92	 102  乗103  104				 笠 134  135 東毛か  太 136	
チ	 93  94	 105  106	 115	 126		 笠 137	
リ		 107  108	 乗116  乗117	 藤 122  123			
ヌ	 95	 109  110  111  112	 118  119	 124  125 吉・藤		 笠 138  139 東毛か	
ル			 120 吉・藤				
ヲ			 121 吉・藤				

第217図 文化層出土須恵器坏分類図

## 第5章 考 察

代観が与えられている。<sup>註1</sup>この類例に外形的に類似するのが第217図135であるが、底部調整は134である。

以上である。

これらの土器群は、時期的に7世紀前半から9世紀中頃及び10世紀前半頃の年代観が与えられ、必然的にこの年代観が、河川敷部における各文化層群の年代観を示している。

第7層群は2区の祭祀に伴うと考えられ、6世紀後半代の年代が与えられる。

第2層群は、3区に3号井戸の年代9世紀代が比定される。第215図30が、第6図上段8層中より出土して、遺存状態からもこの遺物が示す年代と考えられる。

第1層群、及び第3層群～第6層群は、上述の両者以外であることは確定的であるが、第1層群は、層位上第147図—4・5の吉井型羽釜の示す10世紀前半代と考えられる。このことから、第3～6層群は、第215図の土師器坯の分類上、ニ～チ乃至トの5乃至6段階に対比される。だが、土師器及び須恵器の中で、7世紀後半代が量的に少ない点から主体は、7世紀末頃～9世紀初頭頃の土師器分類のホ～リ段階が凡第3～6層群に対比されると考えられる。これをまとめると、各層群の年代観は以下のとおりである。

第1層群—10世紀前半。 第2層群—9世紀。 第3層群—8世紀末頃～9世紀初頭。 第4層群—8世紀後半。

第5層群—8世紀中頃。 第6層群—7世紀末頃～8世紀前半。

この様に、染谷川河川敷部の土層群＝造成面覆土に対して与えられる年代観は6世紀後半から10世紀前半頃である。

### 3. 第7層群に伴う土器（2区祭祀跡出土遺物）

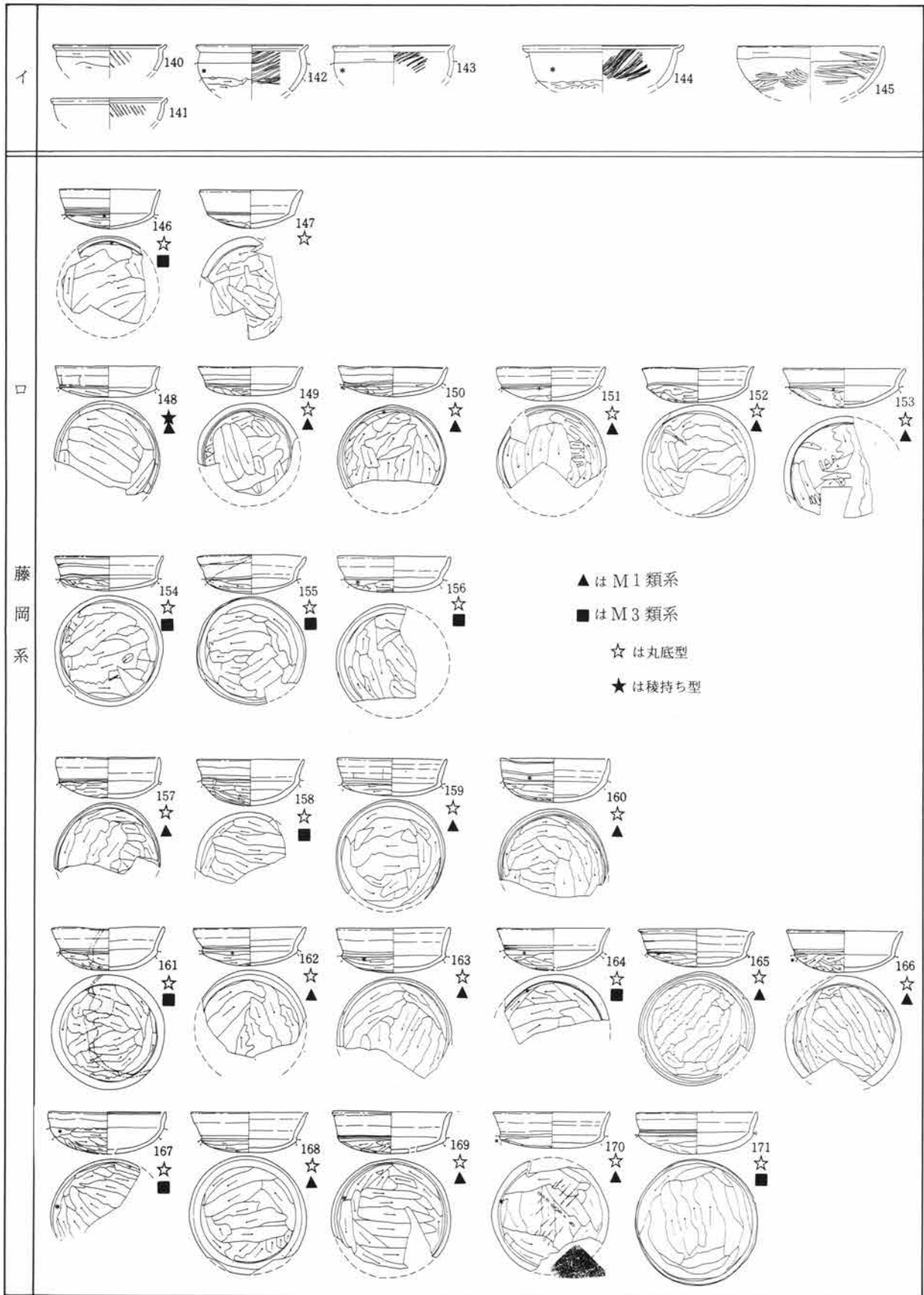
この第7層群に伴う土器は、2区祭祀跡出土遺物は石組及び周辺土器溜りの出土遺物である。この祭祀跡出土の遺物は、染谷川河川敷部に於いて最も一括性が高く、恐らく、調査全体の中でも最も一括性の高い一群の一つであろう。第218～223図には、恐らく、この祭祀場で使用された土器等の組成を図化したもので、土師器坯は推定生産地が種別に図にしたものである。

第218～223図の中主体的位置を占めるのが第218図下段の一群であり前節では「赤い土器」とした一群である。又、第219図及び第220図の一部に「黒い土器」を図示した。更に、第218図には、前述の第216図のハ段階の前段階としてイ段階を最上段に、ロ段階は、第222・223図の須恵器を除く土師器を一括しておきたい。これら土師器の成・整形技法に就いては次項及び第4・5分冊で述べたので参照して戴きたい。以下、これらの土師器の年代観に就いて若干述べておきたい。

古墳時代後期の土器型式名として「鬼高式」があるが、近年のこの土器型式名を用いることが非常に少なくなっており、代わりに4分1世紀をもって表現する「年代観表示方式」とも言える土器型式名と異なる表現になってきている。この背景には、「鬼高式」自体の内容検討が不充分であったのと、大阪陶邑窯跡群の型式の確立（陶邑編年）により、共伴した須恵器を検討し、その須恵器の器形を陶邑編年に対照させることにより、土師器に対し年代観を付し土師器の編年とする試みである。しかし、県下の須恵器の既出例を見る限り、陶邑窯跡出土の須恵器に類すると考えられるものは極少数であって、在地の強い様相が認められると考えられるものが多い。

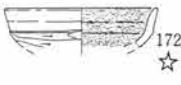



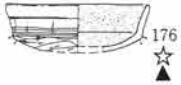






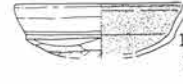


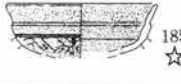
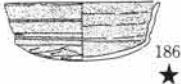





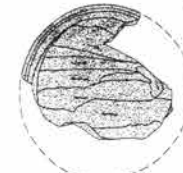
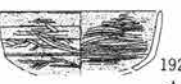
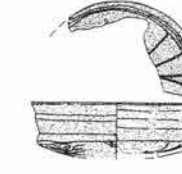
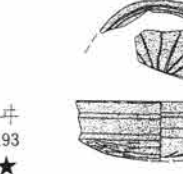


染谷川河川敷部2区祭祀跡出土の須恵器第222・223図に図示したが、これらの器形を直接的に陶邑編年に対照し得るものが無く、寧ろ、東海地域等の須恵器生産が地方化した段階での主要生産地の様相に対比し得るものである。





第218図 染谷川河川敷部第1号祭祀出土土師器類分類図(1)

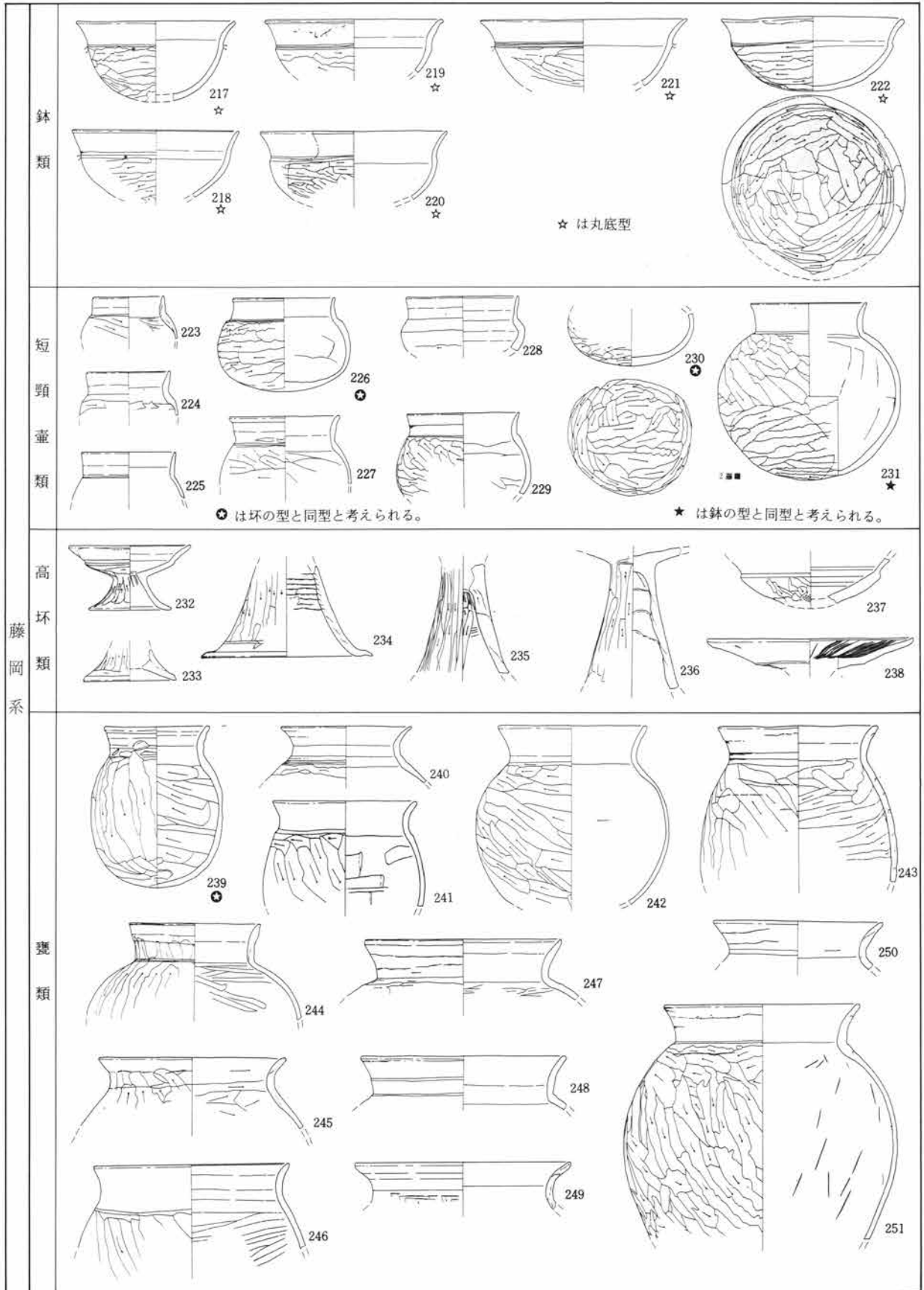
第5章 考 察

内 黒 土 器	北		172 ☆				
	毛 暗 文		173 ☆▲				
	藤 岡	 	174 ★■	175 ☆			
東 毛	東	    	176 ☆▲	177 ★	178 ☆▲	179 ☆	180 ★▲
	毛	    	181 ☆	182 ☆	183 ☆	184 ☆	180 ★▲
黒 色 土 器	藤 岡		185 ☆				
	東	    	186 ★	187 ☆	188 ★	189 ★	190 ☆■
	毛	 	191 ★	<p>▲はM・東1類系 ■はM・東3類系 ★は稜持ち型 ☆は丸底型</p>			
暗 文	   	192 ☆	193 ★▲	194 ★▲	195 ☆■		
搬 入 品		196 ★	<p>☆ ★</p>				

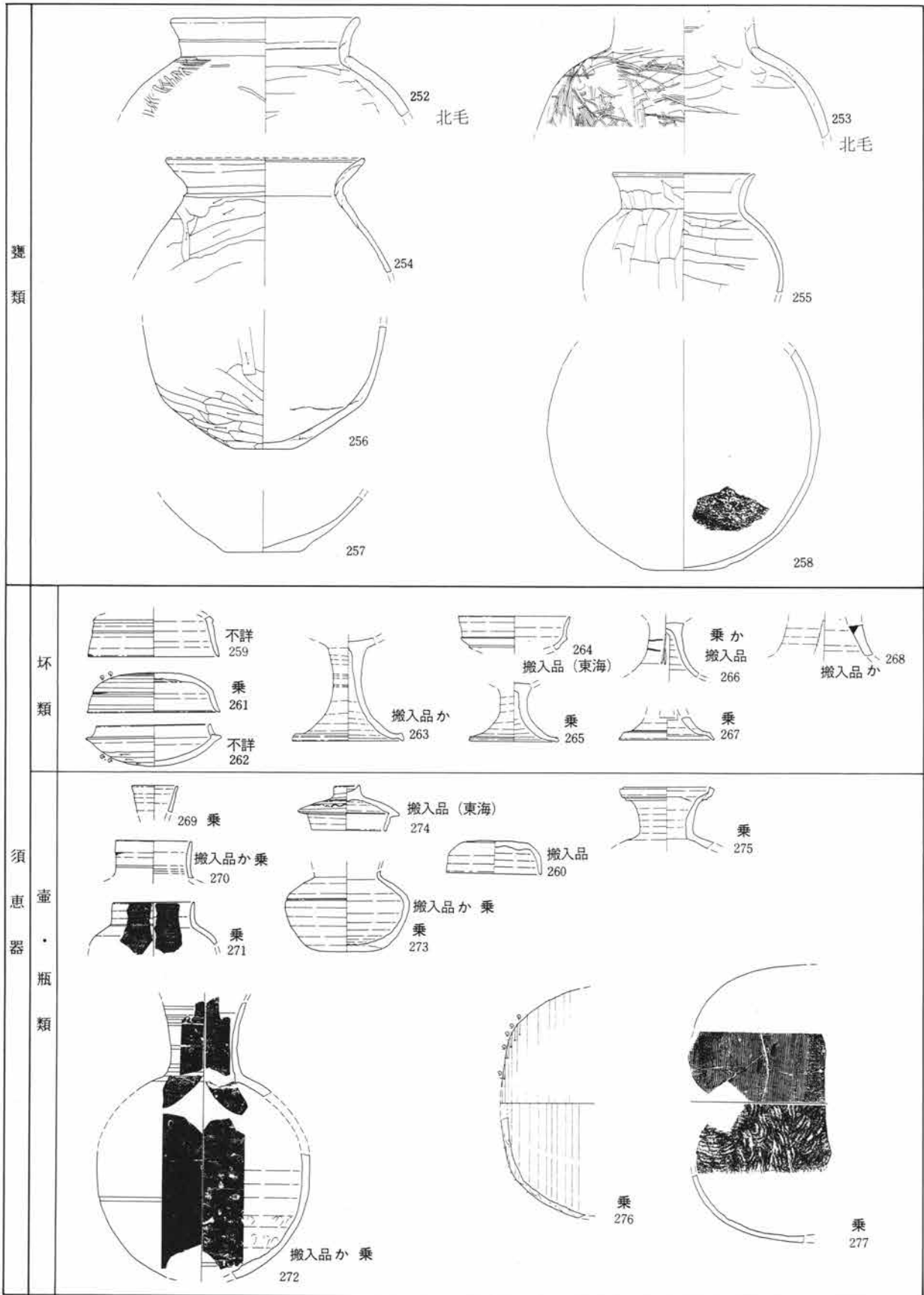
第219図 染谷川河川敷部第1号祭祀出土土師器類分類図(2)

藤岡系	<p>197 M1 類系 ★ 198 M3 類系 ★ 199 M2 類系 ☆ 200 M3 類系 ★</p>
	<p>黒色</p> <p>201 M3 類系 ★</p>
東毛系	<p>202 東1 類系 ☆ 203 東1 類系 ★</p>
	<p>内黒</p> <p>204 東1 類系 ★</p>
	<p>黒色</p> <p>205 ★ 206 ★ 207 ★</p>
八藤岡系	<p>208</p>
	<p>209 M1 類系 ☆ 210 M1 類系 ★ 211 M3 類系 ☆</p>
	<p>212 M1 類系 ★ 213 M3 類系 ☆ 214 M3 類系 ☆</p>
	<p>215 M1 類系 ★ 216 M3 類系 ★</p>

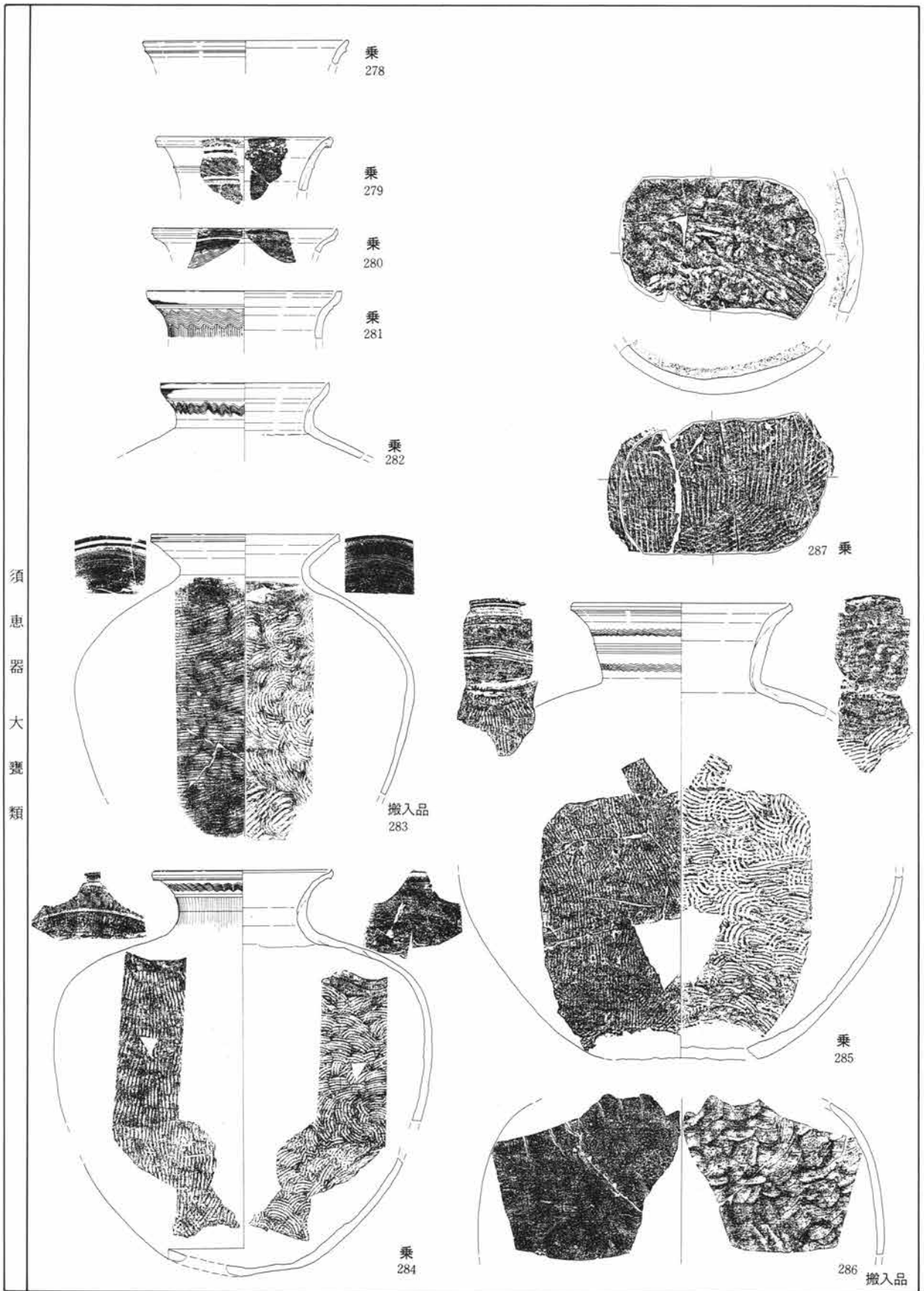
第220図 染谷川河川敷部第1号祭祀出土土師器類分類図(3)



第221図 染谷川河川敷部第1号祭祀出土土師器類分類図(4)



第222図 染谷川河川敷部第1号祭祀出土土師器類・須恵器類分類図



第223図 染谷川河川敷部第1号祭祀出土須恵器類分類図

この点から、檜崎彰一氏の編年と田辺昭三氏の陶器編年を概念的に対比させて検討を加えてみた。この結果が、第2表のとおりである。

第2表 土器類成形方法一覧表

No	器種	推定生産地	檜崎編年		田辺編年		摘要
			型式	年代	型式	年代	
259	無蓋高坏?	不詳	第二型式1・2段階	6C後半	II期3段階	6C後半	
261	坏蓋	乗附	第二型式2段階	6C末	II期2・3段階	6C中～後	
262	坏身	不詳	第二型式2乃至3段階	6C末～7C初頭	II期2・3段階	6C中～後	
263	高坏脚部	搬入品か	第二型式3段階乃至第三型式1段階	7C前			
264	無蓋高坏	搬(東海)	第二型式1段階	6C3/4	II期2・3段階	6C中～後	
265	高坏脚部	乗附	第二型式3段階か	7C初頭			
266	高坏脚部	乗附か搬入	第二型式か	6C後～7C初頭			
267	高坏脚部	乗附か搬入	第一型式3段階か	6C2/4	II期前半か	6C前?	
268	台坏壺乃至瓶の脚部	搬入品か	第二型式1段階	6C3/4	II期か	6C	
269	小型の瓶類	乗附	第三型式か	7Cか	II期以降	6C後以降	
270	短頸壺	搬入か乗附			II期後半か	6C後?	
271	短頸壺	乗附	第二型式1段階か	6C3/4	II期2・3段階か	6C中～後半	
272	フラスコ形提瓶	搬入か乗附	第二段階か	6C後～7C初頭	II期か	6C	
274	台付有蓋直口壺蓋	搬(東海)	第二型式後半か	6C後半	II期前半か	6C前～中	
273	短頸壺	搬入か乗附	第二型式2段階	6C末	II期後半	6C後半～7C初	
260	短頸壺蓋	搬入品	第二型式	6C後～7C初頭	II期前半	6C前～中	
275	横瓶乃至細頸瓶の口縁	乗附	第二型式2段階	6C末	II期前半か	6C前～中	
276	横瓶	乗附	第二型式か				
277	横瓶	乗附	第二型式か				

第223図の須恵器大甕を県下の古墳出土例を対比させると、概ね、河原石乃至自然石積み両袖型の石室を具備する古墳からの出土例に対比出来6世紀後半から7世紀前半の年代観を得られるが、古墳の場合追葬に伴う供献も想定出来詳細な区分は現状では分明になし得ない。このことから、6世紀後半～7世紀前半の年代観を与えておきたい。

これらでは、凡、6世紀後半から7世紀初頭頃の年代観である。土師器では、具体的に年代観を示すことが不能である点から、第218～222図の内、ロ段階とした一群に6世紀後半代、ハ段階(第220図下段)に7世紀初頭から前半頃の年代観を想定しておきたい。

上述してきたとうり、2区の祭祀跡の出土遺物かは、6世紀後半から7世紀前半の年代観が得られたが、土器溜りの状況からすれば、ロ段階の一群をもって祭祀の年代観としたい。又、ハ段階の7世紀代の遺物には第6層群の切り込みか当該部で連続された祭祀に伴う一群として考えたい。

## 註

註1 綿貫邦男・木津博明「新田郡笠懸町山際窯跡採集遺物」

【研究紀要】8 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 平成3年(1991)

当該書中で、山際窯跡で採集された須恵器坏の年代観に就いては、綿貫が、埼玉県南窯跡群の資料と対比させ8世紀中頃の年頃の年代観、得え、筆者は続日本紀等の記事(上野国佐位朝臣老刀自関係)から神護景雲年間(760年代の末年頃)と推定した。

第5章 考 察

出典一覽

- |             |             |             |             |             |
|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 119-2    | 2. 123-3    | 3. 120-21   | 4. 119-19   | 5. 119-7    |
| 6. 120-20   | 7. 119-13   | 8. 116-5    | 9. 116-4    | 10. 119-16  |
| 11. 120-1   | 12. 121-2   | 13. 121-3   | 14. 119-9   | 15. 120-11  |
| 16. 122-2   | 17. 122-1   | 18. 109-1   | 19. 120-26  | 20. 120-3   |
| 21. 119-8   | 22. 120-24  | 23. 122-5   | 24. 119-1   | 25. 119-4   |
| 26. 119-12  | 27. 120-2   | 28. 121-5   | 29. 121-4   | 30. 121-9   |
| 31. 121-11  | 32. 121-12  | 33. 121-10  | 34. 120-9   | 35. 122-4   |
| 36. 121-14  | 37. 121-15  | 38. 121-17  | 39. 121-18  | 40. 109-2   |
| 41. 120-17  | 42. 120-22  | 43. 122-3   | 44. 116-1   | 45. 124-1   |
| 46. 124-2   | 47. 124-8   | 48. 124-5   | 49. 124-6   | 50. 122-17  |
| 51. 125-3   | 52. 125-1   | 53. 122-15  | 54. 125-5   | 55. 122-16  |
| 56. 124-7   | 57. 123-14  | 58. 123-9   | 59. 123-11  | 60. 122-11  |
| 61. 126-7   | 62. 126-8   | 63. 126-10  | 64. 126-14  | 65. 126-13  |
| 66. 126-17  | 67. 125-12  | 68. 125-16  | 69. 121-22  | 70. 125-11  |
| 71. 126-4   | 72. 126-12  | 73. 125-17  | 74. 126-9   | 75. 126-3   |
| 76. 126-1   | 77. 126-16  | 78. 126-11  | 79. 126-2   | 80. 126-15  |
| 81. 125-14  | 82. 125-13  | 83. 125-15  | 84. 126-5   | 85. 126-6   |
| 86. 128-17  | 87. 128-16  | 88. 129-18  | 89. 128-14  | 90. 128-10  |
| 91. 129-7   | 92. 128-13  | 93. 131-20  | 94. 131-4   | 95. 131-18  |
| 96. 129-13  | 97. 129-8   | 98. 128-15  | 99. 109-7   | 100. 128-12 |
| 101. 128-11 | 102. 129-6  | 103. 129-9  | 104. 129-10 | 105. 131-5  |
| 106. 130-16 | 107. 130-18 | 108. 131-3  | 109. 134-2  | 110. 130-14 |
| 111. 130-10 | 112. 131-19 | 113. 132-2  | 114. 134-3  | 115. 132-8  |
| 116. 131-2  | 117. 109-11 | 118. 130-13 | 119. 130-11 | 120. 130-8  |
| 121. 130-7  | 122. 131-6  | 123. 132-6  | 124. 130-15 | 125. 130-9  |
| 126. 131-1  | 127. 128-7  | 128. 128-6  | 129. 128-8  | 130. 129-15 |
| 131. 129-19 | 132. 129-22 | 133. 131-16 | 134. 130-5  | 135. 129-20 |
| 136. 130-4  | 137. 130-19 | 138. 130-12 | 139. 130-6  | 140. 117-8  |
| 141. 117-9  | 142. 117-7  | 143. 84-2   | 144. 84-3   | 145. 84-4   |
| 146. 58-7   | 147. 68-2   | 148. 67-31  | 149. 58-24  | 150. 68-6   |
| 151. 68-9   | 152. 59-11  | 153. 62-19  | 154. 59-4   | 155. 59-7   |
| 156. 70-5   | 157. 67-27  | 158. 68-3   | 159. 59-6   | 160. 68-11  |
| 161. 60-24  | 162. 60-21  | 163. 70-7   | 164. 70-10  | 165. 61-2   |
| 166. 60-23  | 167. 61-13  | 168. 61-14  | 169. 71-16  | 170. 79-22  |
| 171. 62-3   | 172. 74-1   | 173. 74-8   | 174. 74-2   | 175. 74-3   |
| 176. 64-13  | 177. 64-19  | 178. 64-14  | 179. 64-17  | 180. 64-22  |
| 181. 64-21  | 182. 64-20  | 183. 74-6   | 184. 74-7   | 185. 65-2   |
| 186. 65-3   | 187. 65-4   | 188. 65-6   | 189. 65-5   | 190. 80-20  |
| 191. 65-8   | 192. 65-7   | 193. 74-5   | 194. 74-4   | 195. 80-22  |
| 196. 65-9   | 197. 80-13  | 198. 73-14  | 199. 63-24  | 200. 64-1   |



第2節 出土遺物に就いて

201. 73-18	202. 64-3	203. 80-16	204. 80-17	205. 65-1
206. 80-14	207. 80-15	208. 73-21	209. 73-19	210. 73-15
211. 63-23	212. 73-13	213. 73-20	214. 73-23	215. 63-19
216. 64-4	217. 126-22	218. 74-11	219. 65-10	220. 74-12
221. 74-14	222. 65-11	223. 75-1	224. 75-2	225. 75-3
226. 65-20	227. 75-5	228. 80-23	229. 66-1	230. 75-9
231. 66-2	232. 65-14	233. 74-15	234. 74-18	235. 74-17
236. 126-27	237. 126-23	238. 65-16	239. 75-11	240. 66-3
241. 66-6	242. 75-13	243. 76-1	244. 75-12	245. 66-7
246. 76-4	247. 83-4	248. 66-8	249. 77-2	250. 76-2
251. 76-6	252. 66-9	253. 77-3	254. 77-1	255. 127-4
256. 77-6	257. 77-4	258. 66-10	259. 85-2	260. 89-7
261. 85-1	262. 85-5	263. 89-5	264. 85-6	265. 94-3
266. 94-2	267. 109-14	268. 89-4	269. 89-1	270. 85-7
271. 87-1	272. 135-18	273. 89-3	274. 94-1	275. 93-1
276. 86-2	277. 86-1	278. 90-2	279. 86-3	280. 86-4
281. 90-3	282. 90-4	283. 89-10	284. 91-1	285. 96-1
286. 95-2	287. 97-2			

第2項 染谷川河川敷部出土の刻書土器について

はじめに

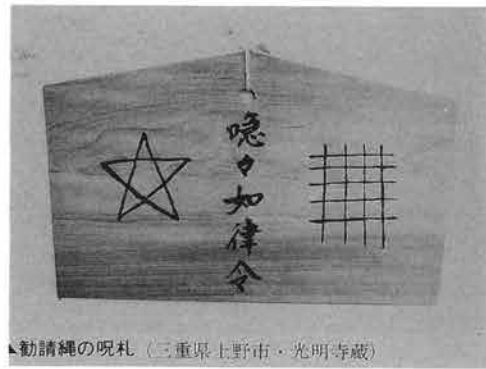
今回報告する刻書土器は十七点で、いずれも八世紀前半代の土師器坏である。内訳は、「☆」形を線刻するものが一点、多角形の記号様のものが一点(12)、「井」ないし、小片ではあるがそれと推測できるものが六点(4~7, 14, 16)、「×」が六点(2, 3, 8~10, 11)「全」が一点(17)、その他(13, 15)である(表1)。これらはいずれも記号様のものであるが、とくに「☆」形および「井」を線刻するものについては、古代の祭祀に関わるものとして、高い意義を有する資料と考えられるので、ここに若干の検討を試みたいと思う。

1. 「☆」形を線刻する土器

「☆」形を線刻する土器は、八世紀前半代と考えられる放射状および螺線状暗文を有する在地産の畿内模倣土師器であり、「☆」形は底部内面の体部寄りの部分に刻書されている(図225)。線刻は土器焼成後になされたもので、一筆書きとみられる。



①天型星 疫鬼を食らう図



②現代の勸請繩の呪札

出典

- ①「地獄草子」『日本の絵巻7』小林茂美 中央公論社 昭和62年(1987)
- ②「まじないとひながたの祭具」『特別テーマ展 まつりといのり』奈良県立民俗博物館平成2年(1990)
- ③現代の子供の虫封じ呪符例 大教正 棟田彰成「新修 まじない秘法大全集 日本運命学会 神明館蔵版」修学館平成元年(1989)



③現代の呪符

第224図 呪符の各様

さて、この「★」マークであるが、これは、呪符等に用いられる独特の符号である「五芒星」(ペンタグラム)に他ならない。

この五芒星は、陰陽道や修験道では「五行」と称され、陰陽五行説の五行、すなわち木・火・土・金・水を象徴するものとされている。また「清明桔梗印」とも呼ばれ、平安時代中期の陰陽家として名高い安倍清明(921~1005)が作った文様と言われているが、元来、西アジア地方に起源を有するマークであり、我国へもかなり古くから伝わっていたとみられている。もともとは道教における北斗星信仰を象徴する文様であったらしいが、後世になると次第に北斗星そのものを意味する文様と言うよりは、むしろ、呪符等によく見られる他の呪号である「ㄨ」(四方四仏を意味する呪号)や梵字・符録などと同様、悪霊・邪神を払い、願意の達成を確実にする呪号として認識されるようになる。

中世以降の呪符木簡や、江戸時代に編纂されたまじない書にみられる呪符の例には、この文様が無数にみられ、現代に至ってもなお、祭具や呪符・御札などの類に多く用いられており、呪号としては極めて普遍的なものと言える。ここではその一例として、群馬県伊勢崎市上植木壺町田遺跡出土の中世呪符木簡(第229図-1・2)、<sup>註1</sup>14~16世紀頃のものともみられる新潟県馬場屋敷遺跡出土の呪符木簡(第229図-3~18)、<sup>註2</sup>慶長16(1611)年3月14日書写の奥書をもつ『まじなひ秘伝』(国立国会図書館蔵)中にみられる「八万四千六百五十四神王呪符・牛頭天王呪符」<sup>註3</sup>(第224図-1)、三重県上野市の勸請繩の神事で現在でも用いられている祈禱札<sup>註4</sup>(第224図-2)、および現在のまじない書に載せる小児疳の虫封じの呪符<sup>註5</sup>(第224図-3)などを掲げておく。

以上みてきたように、この符号の性格からみて、今回報告する「★」形を線刻する土器も何らかの呪術的な祭祀に用いられたものと考えてよいだろう。

さて実際のところ、この「★」形が呪術的な文様として、いつごろから我国でも用いられるようになったのかは定かではない。呪符木簡には、八世紀代にまで遡り得るものも存在するが、<sup>註6</sup>現在までの出土例でみる限り、「★」形を記すものはいずれも中世以降の事例である。

ただ、本例と同じく、古代において土器に「★」形を記した例は他にも存在する。管見に触れた限りではあるが、二・三紹介してみよう。

群馬県新田郡新田町市野井萩原では、八世紀中葉のものともみられる須恵器環の底部外面に「★」形を墨書したものが1点出土している<sup>註5</sup>(第226図-8)。また、千葉県柏市船戸の花前I・II遺跡からも、「★」形を記した土器が18点出土している<sup>註8</sup>(表二・第227図-1~18)。同遺跡は利根岸右岸の支谷に形成された標高10~17mの台地上に営まれた奈良・平安時代を中心とする集落遺跡で、「★」形を記した土器はいずれも九世紀中葉頃のものと考えられるもので、みな住居跡から他の土器等の遺物と混じって出土しているということである。墨書のもの九点、刻書のもの九点であり、墨書のものはいずれも土師器で、体部外面に記しており、また刻書はすべて須恵器で、体部外面に記すもの及び内外面双方に記すものが各一点ずつある他は、七点とも体部内面に記されている。土師器・須恵器の別、さらにその種別によって記載方法・記載部位が異なっており、意図的にそうした区別がなされたものとみてよいだろうが、それらの出土状況は同一遺構内および別遺構いずれにしても同質であり、今のところそのような区別がいかなる意図の下に行なわれたか、それが祭祀の方法や形態における若干の差異を示しているのかどうかは、今のところ明らかにしがたい。

また、長岡京左京南一条二坊十一町の宅地築地塀雨落溝からも、八世紀末の土師器皿に「★」形を刻書したものがみられ、<sup>註9</sup>当然のごとく宮都においてもこの「★」形を用いる祭祀が行なわれていたことがわかる。

以上のように、複数の出土事例からみて、すでに八世紀代から「★」形が用いられてきたことが判明する

のであり、本例によってまた一つ資料が蓄積されたわけである。本例による祭祀が、何を目的とし、いかなる形態のものであったかは判明しないが、先述したようにこの符号は中世以降の呪符木簡やまじない書にひく呪符には通例よくみられる普遍的なものであり、元来は道教で用いられたものである。おそらくは「急々如律令」など他の道教系の呪号・呪文とともに中国大陸や朝鮮半島からもたらされたものと考えられる。なお、付言するならば多角形の記号様のものを線刻する例(12)についても、一筆書きであり、字形からみて、「☆」形を意識し、それに似せて記したという可能性が高いであろう。

## 2. 「井」を線刻する土器

ここで、もう一種類の刻書「井」について考えてみたい。今回報告する事例は、六例でいずれも八世紀とみられる土師器杯の体部内面の底部寄りか、もしくは底部に線刻されている。これらが「井」という記号であるのか、それとも漢字の「井」の字であるのかがまず問題となろうが、筆勢から判断して記号とみて間違いないだろう。

この「井」の記号は、全国的にも古代の出土文字資料に、墨書・刻書を問わずかなり普遍的にみられるが、具体的に何を意味するものであるのかは不明である。そこで注目したいのは、やはり道教の呪号の一つである「𠄎」すなわち「九字」の存在である。陰陽道や修験道では、一般的に「臨・兵・闘・者・皆・陳(陣)・烈(列・裂)・在・前」の九字を意味するとしており、四世紀、中国・東晋時代の葛洪(284~363)が著した道教の理論書『抱朴子』巻17・登涉篇にみえる、山に入る際の呪文「臨兵闘者皆陣列前行」(敵の刃物にひるまずに戦う勇士が前列に陣どっているという意)からとられたものと<sup>註10</sup>言われ、基本的には縦四本、横五本の格子状で表わされる。<sup>註11</sup>九は陽の満数であり、陰である邪気を伏すとする発想によるものであり、「𠄎」印自体、悪霊を払い、願意が確実に果されるとの効力を有するものと言われる。先にみた「☆」形同様、呪符木簡やまじない秘伝書の類に「急々如律令」や「蘇民将来子孫也」など除災招福の呪句と併記される場合が多い、非常にポピュラーな呪号の一つである。呪符などでは、この「𠄎」(九字)はしばしば「☆」形と対にして用いられており、先に掲げた三重県上野市の勧請縄に用いる祈禱札(第224図-2)や現代のまじない書に掲げる小児疳の虫封じの呪符(第224図-3)にも一対で記されている。また、現代でも志摩の海女が海中に潜る際に身につける手拭には、「☆」形と「𠄎」とが黒糸で縫いつけてある。<sup>註12</sup>これらはそのほんの一例にすぎず、他にも「☆」と「𠄎」が一対で用いられている例は無数にあると言ってよい。

古代の呪符木簡では、現在までのところ九字を記したものはみられないが、埼玉県の揚榎木遺跡からは九世紀後半とみられる須恵器杯の底部内外面に九字そのものを墨書したものが出土しており(図第226図-9)、やはりこの九字もすでに古代より用いられていたことが知られる。また長岡京跡左京三条二坊一町他でも九字が線刻された土器がかなり出土しているが(第228図)、<sup>註14</sup>その中には完全な九字符号「𠄎」に混じって「井」あるいは「卍」・「井」などの符号もみられる。この他にも「卍」「井」などの記号も多いので全部が全部そうであるとは言い切れないだろうが、これらの線刻記号は四縦五横の「𠄎」の省略形と推測することが可能なのではないだろうか。

実際のところ、こうした呪号の一部を省略した例は決して少なくない。特に呪符木簡の出土例では「急々如律令」とあるべき呪句を「急々律令」「急々如律」あるいは「急如律」などと略記する事例は数多く、例えば先掲『まじない秘伝』所収の「八万四千六百五十四神王呪符・牛頭天王呪符」(第224図-4)でも、本来「急々如律令」とあるべきところが「急如律」と略記されている。また九字符号を記す際にも、きちんと九本の線引きがなされているものばかりとは限らず、例えば、やはり先掲した新潟県馬場屋敷遺跡出土の呪符

木簡(第227図一1~18)にみられる九字符号は、縦横ともに五本ずつ記されているし、滋賀県甲賀郡水口町松尾に所在する願隆寺に伝わる記録、『願隆寺年中行事日記』(文化14年の奥書あり)にみえる勧請(カンジョウツリ)の木札の模式図に記されている九字符号は、縦六本横五本の十一本の符号となっている<sup>註15</sup>、など、厳密さを欠く例が、まま見受けられるのである。これらの他にも呪句や呪号、種子などの字句や記号の一部ないし全部を省略するものは随所に多くみられ、さらには平城京跡出土の胞衣壺では、本来、錢五枚を供えるべきところを一枚だけにしたりあるいは全く入れないなど、すでに古代より呪句や呪号のみならず祭儀の内容や過程すら省略する例が存在する。

上述の諸点を勘案するならば、あくまでも一つの案であるが、本遺跡出土の刻書土器の記号「井」は、この九字符号「井」を略記したものであるとは考えられないだろうか。今回報告する刻書土器五点が、出土地点は若干異なるもののいずれも染谷川の河川敷から出土していることや、「☆」と「井」の記号に限られ、他の種類の墨書・刻書土器が全く存在しないことからみても「☆」と「井」とはセット関係であると考えられ、さらに九字の符号には厳密に記さない例も存在していることを考え併せるならば、おそらく「井」は、「☆」と密接な関係を有する九字符号「井」の略号とみてよいのではないか。なお、志摩の海女が使う鰻取りの道具の柄には、「井」が線刻されており、魔除けの意味を有しているという<sup>註16</sup>が、この点も本遺跡出土の「井」を考える上で重要な示唆を与えるものと言えるだろう。以上の点はあくまで推測の域を出ないが、今回報告する「井」の記号の意味するところとして、可能性の一つとして敢て提案しておきたい。

### 3. その他

他に、「×」印が六点(第225図8~10、第226図1・2)、「全」が一点(第226図一7)、一画の棒状の線刻2点(第226図一4・5・6)がある。

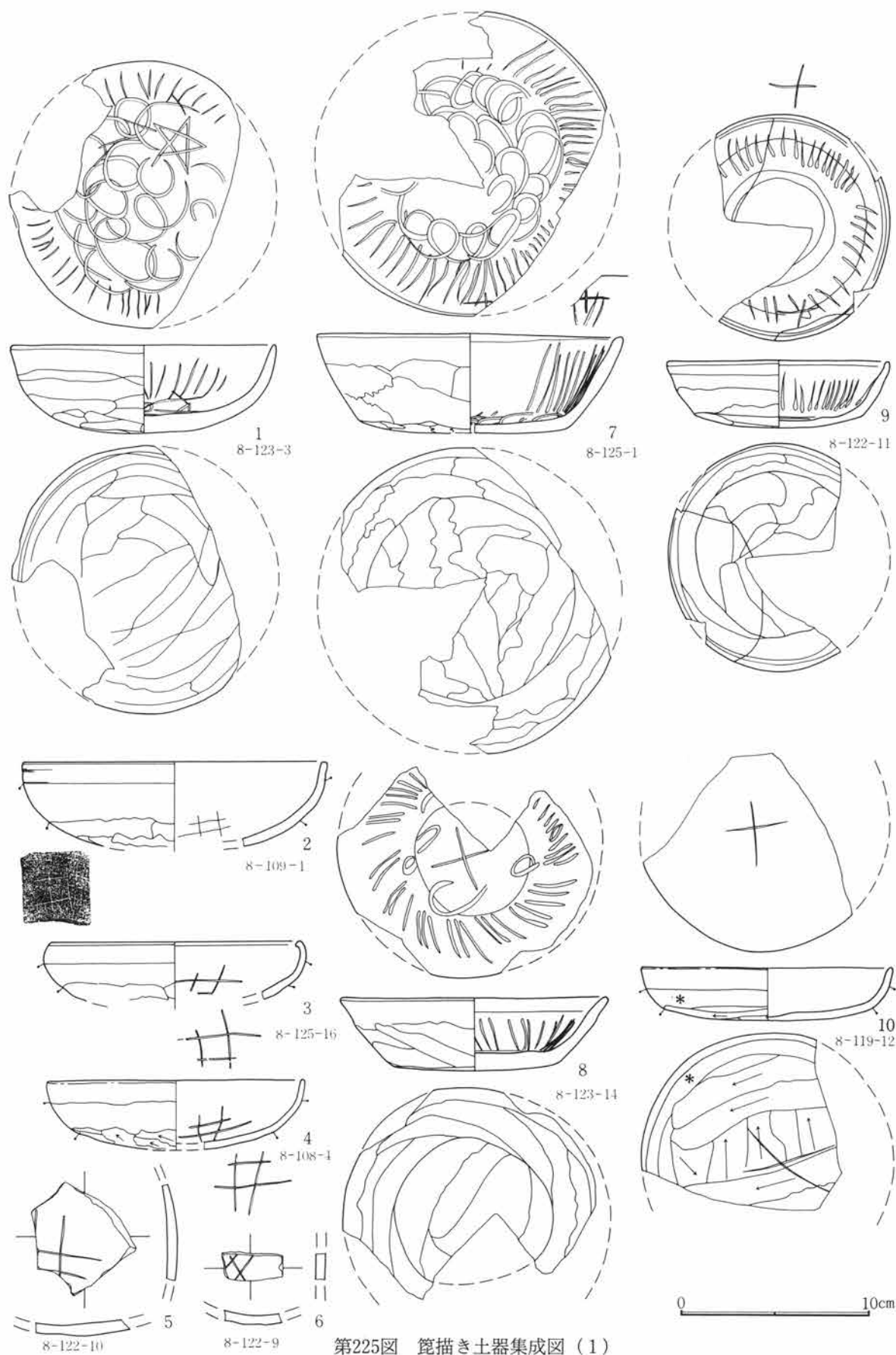
それらの意味するところは、現段階においては判明しがたいが、「×」印については「井」との関連性が注目できよう。ただ「×」印を線刻するものはこれまでも全国各地から、かなり普遍的かつ大量に出土しているので、かなりポピュラーな記号であったと考えられる。少なくとも本遺跡においては、出土状況や共伴遺物からみて、祭祀に関わるものとみてよいだろうが、もし、そのように使用状態が限定できるならば、「井」を九字符号の略号とみた場合、これらの「×」印はそれに対応するものとして悪霊、厄、鬼神の類の封じ込めを意味するとみて大過ないと考えられる。

「全」については、何らかの文字とみて間違いなく、字形から察するに「金」と釈読してよいだろうが、その意味するところは不明である。

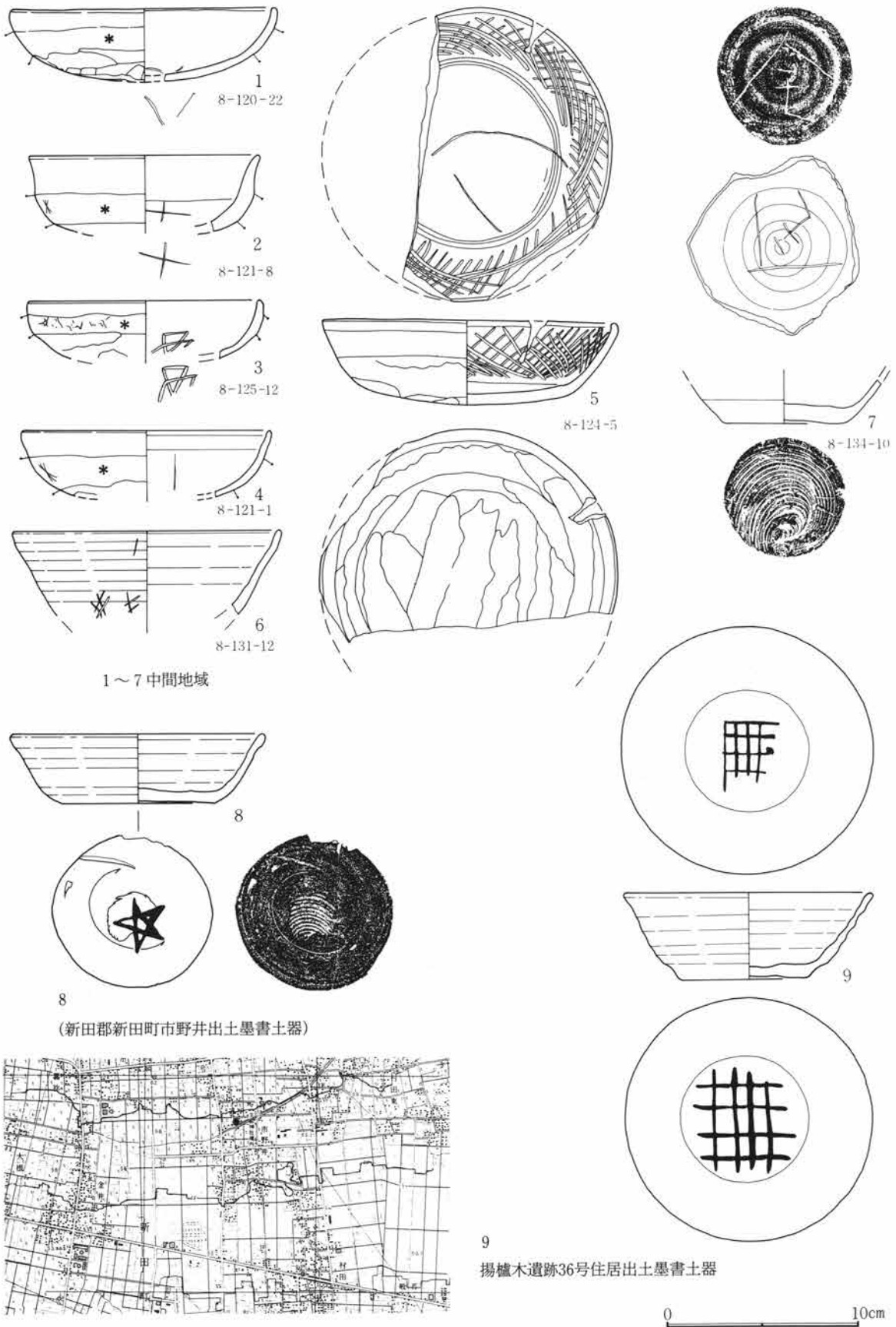
#### おわりに

上述してきたところにより、今回報告する五点の刻書土器は、いずれも祭祀に用いられたものとみてよいだろう。その祭祀の具体的な目的や内容・形態については、現時点において明らかにしがたいが、その当時としては最先端の道教の影響下にあるまつりであったことには間違いなく、そのような祭儀がこの地にもたらせられたのは律令官人層の手によってであったと考えられる。周知のようにこの地は律令制前段階からの上毛野地域の中心的部分であり、律令制下には国府・国分僧寺・尼寺が近接して造営される古代上野国の中枢地域であったから、八世紀代に先進的な祭祀様式であった道教系のそれを受け入れる素地は充分であったろう。

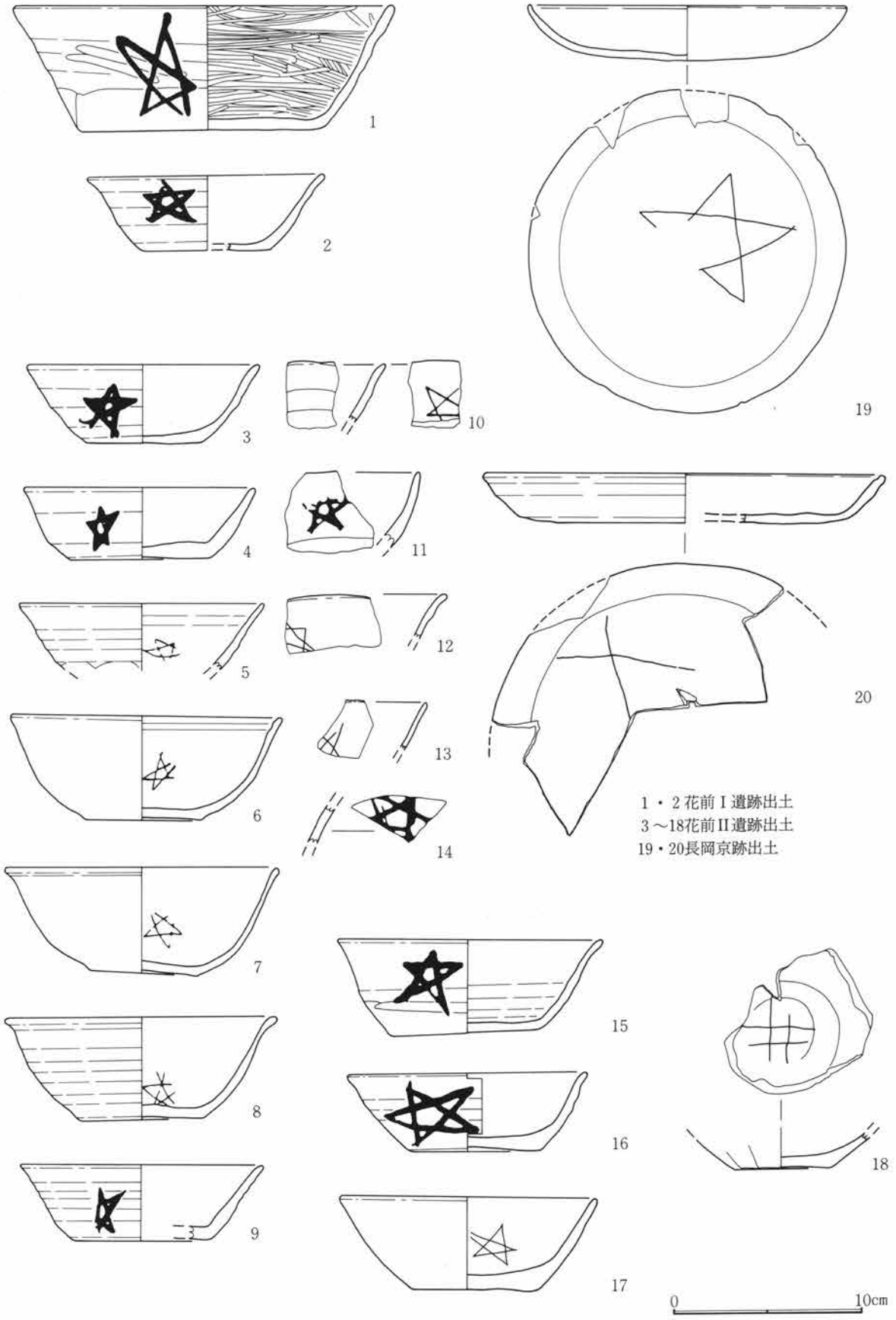
出土地点の様相からみれば、水のまつりに関わるものとするのが自然であり、また国分二寺の造営との



第225図 篋描き土器集成図(1)

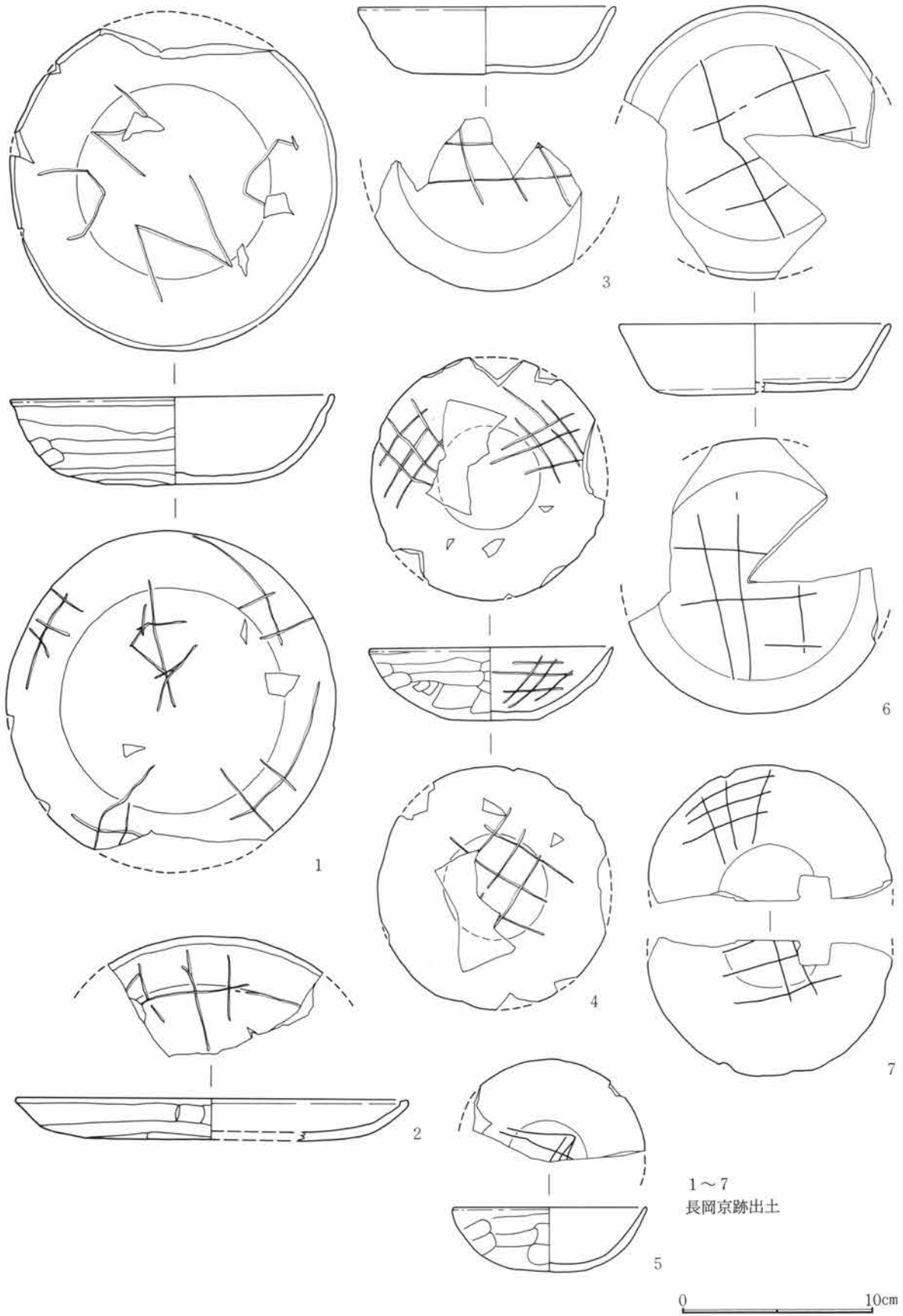


第226図 篋描き土器・墨書記号集成図(1)



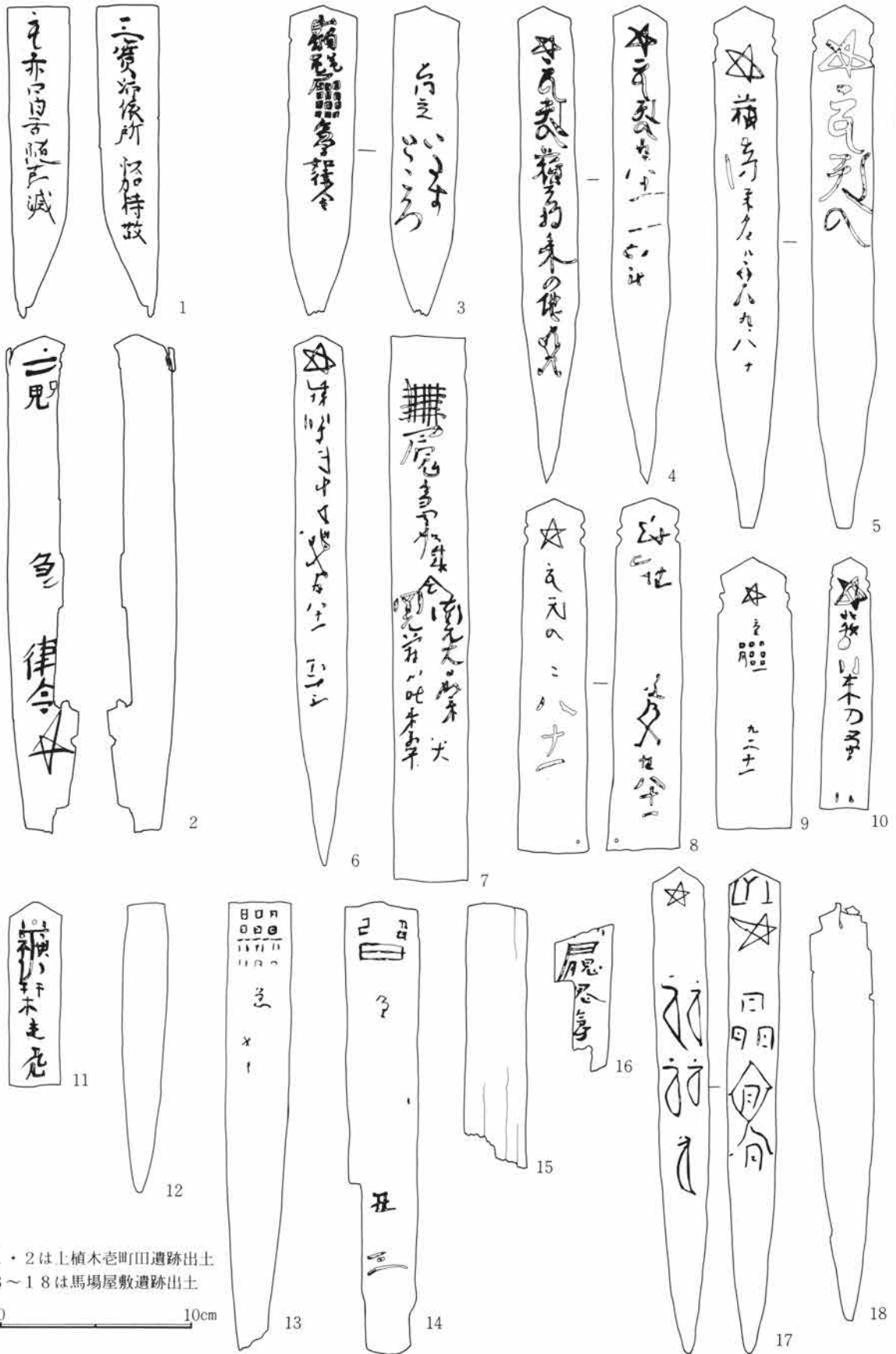
第227図 篋描き土器・墨書記号集成図(2)





1~7  
長岡京跡出土

第228図 篋描き土器集成図(2)



1・2は上植木老町田遺跡出土  
3～18は馬場屋敷遺跡出土

第229図 呪符木簡集成図

関連も想定できそうであるが、出土層位や土器自体の年代観からみるならば、国分二寺の造営よりはやや遡るとの調査担当者の見解もあるので、むしろ国分二寺よりは、それ以前から存在していた国府との関連を重視した方がよさそうである。調査担当者の教示によれば、これらの刻書土器が出土した染谷川河川敷では、すでに六世紀の段階から祭祀が行なわれていたことを示す遺構・遺物が存在しているということであるから、それ以前から連綿と続いていた水辺のまつりに、八世紀段階に至って道教の影響下にある最先端の祭祀様式の要素が持ち込まれたわけであり、その契機となったのは直接的にせよ間接的にせよ律令制のこの地への進入に他ならないと言えるだろう。

## 註

- 1 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「書上下吉祥寺遺跡・書上上原之城遺跡・上植木宅町田遺跡」1988
- 2 川上貞雄「馬場屋敷遺跡出土の中世木簡と呪術資料」(『日本歴史』441、1985)、同「新潟・馬場屋敷遺跡」(『木簡研究』7 1985)
- 3 水野正好「八万四千六百五十四神王呪符の語り」(『古代研究』18 1979)
- 4 奈良県立民俗博物館「まじないとひながたの祭具」1990。なお、本例のみならず、こうした「カンジョウツリ」の習俗に用いられるさげ物には、この「☆」形が非常に多くみられる。境界からの悪疫や邪霊の侵入を防禦する意味で、この呪号が用いられているのだろう。
- 5 棟田彰城「まじない秘法大全集」修学社 1989、239頁。
- 6 例えば平城宮跡出土のもの(八世紀前半)、藤原京左京六条三坊出土のもの(八世紀初～中葉)、伊場遺跡出土のもの、多賀城跡出土のもの(八世紀末)、など。
- 7 この土器は、同町新田在住の松井孝司氏が、1985年頃、畑の抜桑作業中に採集されたものであるため、遺跡自体の様相は詳らかにしがたい。なお本例は、今回、はじめて公表されるものであり、公表を快諾された、所蔵者の松井孝司氏、ならびに紹介にあたって懇切な御教示と数々の御高配を賜った(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の須田茂氏に、この場をお借りして篤く御礼申し上げる次第である。
- 8 (財)千葉県文化財センター「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書」II・III 1984～85
- 9 山中章「古代都城の線刻土器・記号 墨書土器」(『古代文化』41 1989)。
- 10 本田済訳注「抱朴子一内篇」平凡社 1990、357頁。
- 11 なお、流儀によって、書き順や縦横の線の数が入れ替わることもあるという。
- 12 萩原秀三郎「目でみる民俗神一境と辻の神」東京美術 1988年、78頁。
- 13 仲山英樹「古代集落遺跡出土の墨書土器一埼玉県揚楯木遺跡の検討一」(『古代集落の諸問題』玉口時雄先生古稀記念事業会 1988)。
- 14 山中章氏註(9)前掲論文。
- 15 中野登任「呪符と境界」(『祝儀・吉書・呪符一中世村落の祈りと呪術一』吉川弘文館 1988)
- 16 国立歴史民俗博物館平川南教授の御教示による。

## 参考文献

- 和田萃「呪符木簡の系譜」(『木簡研究』4 1982)  
 水野正好「招福・除災一その考古学一」(『国立歴史民俗博物館研究報告』7 1985)  
 水野正好「鬼神と人とその動き一招福除災のまじなひ」(『文化財学報』4 1986)  
 藤沢一夫「古代の呪咀とその遺物」(『帝塚山考古学』1 1968)  
 広島県立歴史博物館「中世の民衆とまじない」1990  
 岐阜市歴史博物館「鬼神とまじない」1990

## (補註)

小稿の脱稿後、平川南氏の論考「墨書土器とその字形一古代村落における文字の実相一」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集)に接したが、その中で平川氏も、「井」印の墨書を魔除けの記号と考えておられる。しかしながら脱稿後であったため、小稿では平川氏の見解を成果としてとり入れることができなかった。この点、平川氏並びに読者の方々に御寛恕を乞うとともに、読者の方々には、併せて平川氏の論考をご参照賜るようお願いしたい。

## 出典一覧

## 第227図

- 1・2 柏市花前I遺跡  
 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書』II・III 財団法人千葉文化財センター 昭和59～60年(1984～85)  
 3～18 柏市花前II遺跡  
 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書』II・III 財団法人千葉文化財センター 昭和59～60年(1984～85)  
 19・20 長岡京遺跡  
 『日向市埋蔵文化財調査報告書第27集〈本文編〉』日向市教育委員会 平成元年(1989)

## 第228図

- 1～7 長岡京遺跡  
 『日向市埋蔵文化財調査報告書第18集』日向市教育委員会 昭和61年(1986)

第5章 考 察

第229図

1・2 上植木杵町田遺跡

『書上下吉祥寺遺跡・書上上原之城遺跡・上植木杵町田遺跡』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和63年（1988）

3～8 馬場屋敷遺跡

『馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』 馬場屋敷下層遺跡 白根市教育委員会 昭和59年（1984）

『新潟県・馬場屋敷遺跡』『木簡研究』7 昭和60年（1985）

第3表 染谷川河川敷出土刻書土器一覽表

掲 載 図	本文挿図	土器種	器種	刻 書	出 土 位 置	刻 書 部 位	摘 要
第225図-1	第123図-3	土師器	坏	☆	3区III'層	器内面底部	
-2	第109図-1	〃	〃	井	3区暗濁黒色粘質土層	〃	
-3	第125図-16	〃	〃	井	2区III'層	〃	
-4	第108図-4	〃	〃	井	3区暗濁黒色粘質土層	〃	
-5	第122図-10	〃	〃	井	2区III'層	〃	
-6	第122図-9	〃	〃	井か	〃	〃	
-7	第125図-1	〃	〃	+	〃	器内面口縁部	
-8	第123図-14	〃	〃	+	〃	器内面底部	
-9	第122図-11	〃	〃	+	〃	器内面口縁部	
-10	第119図-12	〃	〃	+×	3区III'層	器内・外面底部	
第226図-1	第120図-22	〃	〃	+	2区III'層	器内面底部	
-2	第121図-8	〃	〃	+	調査区内	器内面体部	
-3	第125図-12	〃	〃	☆か	調査区III'層	〃	☆を誤記か。
-4	第121図-1	〃	〃	1	2区III層	〃	
-5	第124図-5	〃	〃	-	〃	器内面底部	
-6	第131図-12	須恵器	〃	井・一	調査区III'層	器外面体部	
-7	第134図-10	〃	〃	☆	3区内	器内面底部	金か。

第4表 千葉県柏市 花前I・II遺跡出土「☆」形墨書・刻書土器一覽

	番 号	出 土 遺 構	器 種	施 文 部 印	種 別	年 代
花	1	011住居跡	土師器坏	体部外面	墨書	9世紀中
2	040	〃	〃	〃	〃	
前	3	006 〃	〃	〃	〃	〃
4	〃	〃	〃	〃	〃	〃
I	5	〃	〃	〃	〃	〃
	6	015住居跡	須恵器坏	体部内外面	刻書	〃
	7	〃	〃	体部外面	〃	〃
	8	013・031・032 〃	〃	体部内面	〃	〃
花	9	〃	〃	〃	〃	〃
	10	〃	〃	〃	〃	〃
前	11	〃	〃	〃	〃	〃
	12	〃	〃	〃	〃	〃
	13	〃	土師器坏	体部外面	墨書	〃
	14	〃	〃	〃	〃	〃
II	15	〃	〃	〃	〃	〃
	16	〃	〃	体部内面	刻書	〃
	17	〃	〃	〃	〃	〃
	18	〃	〃	体部外面	墨書	〃

## 第2項 古墳時代後期の土師器坏の成・整形技法に就いて

## はじめに

現代の窯業産業は、近年のコンピューター技術により各方面で目覚ましい機械技術の革新がおこっている。他方、地方窯の小規模陶磁器生産では、焼成窯等の部分での革新は従前より行われているものの、作陶の部分では、従来の伝統を色濃く残している。この作陶部分での基本的成形技法には、機械化を除けば轆轤水挽き・紐作り・型作りの三者である。

凡そ、作陶に於けるこの三者の技法は、古代から連綿と続く伝統的技法として考えられ、手工業という生産大系の中では、寧ろ、一般的技法として捉えることが出来る。

古代窯業生産品の中で須恵器に就いては、成形技法・整形技法・焼成技法等概説書の中では、通論と扱われる如くの種々の定義付けが成されている。然し、考古学を修学する者が、この通論のとおり須恵器の復原を試み成功したという例は筆者の知る範囲にはない。しかし、実験考古学という分野の中で、唯一、通論とは異なる焼成技法を古典に習い復原し成功した例がある。<sup>註1</sup>

こと土師器に至っては、古墳時代から平安時代に専らに非常に多くの製品が焼造されていたにも拘、通論では手捏・粘土紐巻き上げという成形技法で解釈されている。<sup>註2</sup>

本報告の中で、染谷川河川敷部出土で、古墳時代の土師器坏の成形技法を「型作り成形」とした。そして、この型作り成形に就いては、既刊第4分冊で土師器坏の成・整形技法に就いて記述し、同第5分冊では土師器甕の成・整形技法に就いて記述した。この中で、土師器坏に就いては本項で述べる所謂「模倣坏」の成・整形技法に就いては触れなかった。この外稜を強く有する器形は、第4分冊で扱った無稜の一群とは若干異なる技法が観察され、通論的にも、外稜を顕著に残す一群を「型作り成形」という認識も無いであろうと考えられることと、無稜の一群との技法差等に就いて明らかにすることを目的に本項を設けた。又、本稿では、既説の部分と重複するものがあるが、大まかな点は添図に差したので、要点等に就いて記述したい。

## 1. 「型作り成形」とは

上述の通論に対し筆者は、既刊書の中での、土師器坏及び古墳時代後期以降の甕類等大半の器種が「型作り」であろうことを述べた。しかし、模式図等により説明付けした器種は極限られたものであったので、他の器種での言及には至っていなかった。この点に就いては後段に委ねたい。ここでは、「型作り」判断根拠に就いて述べてみたい。

「型作り成形」とは、粘土板・粘土紐・粘土粗形（この三者の折衷様のものがあるが、一応基本からは除外した。）を、男形の場合には内面側を、女形の場合に外面側を型に押し入れ、基本的な形状を形作る成形作業である。そして、前者は外面側に当たる部分を整形し、後者は内面側に当たる部分を整形する。

この両者の場合共通する器面状態には、<sup>〃</sup>型膚、が型面側に認められることである。この<sup>〃</sup>型膚、は押し入れる時の粘土の状態によって異なった器面が認められる。それは、坏の場合に於いて粘土板の場合には、平らな状態を曲面に合わせ押し入れる為、この時の無理な延びに対して亀裂・小ヒビ等が生じ、全面に未整形状態の滑らかな面として認められる。粘土紐の場合は、粘土紐の一単位がある程度まで遺存し、紐の紐との間に寄った側には縦位側に延びる小単位のヒビ割れが認められる。粘土粗形では、ある程度まで「型」に合う如くの状態に成形されている為、粘土板使用時の如くの顕著な亀裂・ヒビ等は多くの場合生じないと考えられる。この場に於いては、比較的滑らかな面が認められる。

この様に、「型膚」は、「型」に押し入れる直前の粘土の形状によって異なっていると考えられる。

土器の器面は、多くの場合成形後の篋使用等の整形が加えられている。この為、上述した「型膚」が遺存しない場合も多い。だが、この篋使用等の整形は、坏類の場合は、外面側に篋削り・横撫で・磨き等の整形が行われるが、内面側は比較的丁寧な横撫でが施されている。この両者の相反する如くの器面調整は、それが行われる条件が異なることを示唆していると考えられる。そして、実際の坏の器内面は、底部・体部の撫でに後行する状態で口縁部の横撫で整形が施されている。更に、外面底部体部の篋削りは、口縁部横撫でを切る状態で明らかに後行している。又、器外面を如何なる理由により篋削りを施さねばならないかという基本的問題もあり、篋削り後何故内面同等の撫でを行わないのという問題もある。

この問題点の一つの解釈として、器内面側と器外面側の性格付けにより理解されると考える。則、器内面側は盛付面で、器外面は地面や台に置く設置面であることである。このことにより、自ずと内側器面に丁寧整形状態が生ずるのである。これは、坏の製作段階から器外面側より器内面側に対して丁寧に作り上げる意識が反映してのことであって、製作時には、内面を平滑に作らせる条件が必要であった筈でもある。この器内面を平滑に作るには、器内面側から篋等によりやや強く撫でつける様に成形せねばならない（この時粘土は軟らかい状態で、口縁部等の器厚から、この作業時時点でも器厚は全体にある程度まで薄くなっており、器外面側にはしっかりした宛具がない限りこの篋による平滑にするやや強い撫では出来得ない。これは、須恵器の場合でも同様で、大甕等の紐作り後の叩き整形は、内面宛具があることにより、外面側の叩きが可能となることに共通する。）。この器内面整形に伴う器外面側は、しっかりとした宛具状の存在が無ければ成形物は形崩れを起こしてしまう。これらの状況を勘案すれば、「型膚」の遺存が無くも、「型作り成形」を判断出来ると考える。

続いて土師器甕に就いて「型作り成形」の根拠を補っておく。

土師器甕の成・整形技法に就いては第5分冊で既述したが、上述した「型作り成形」を判断する外観上の根拠たる「型膚」の残す類例が非常に少ない為、「型膚」以外での判断根拠を述べてみたい。

土師器甕の「型作り成形」には二者の技法がある。このことを図化したのが第5分冊第635図である。この図には、下半部のみに「型」の使用を伴う段階と全体を3分割された「型」により成形する段階を示したものである。この両者の共通点として、胴下半部と上半部の間に、必ず帯状の接合痕があることが指摘出来、「武蔵型」と呼称させる要点でもある。そして、この帯状接合部は成形時に成されたものであり、これ自体を丁寧に平滑する例が比較的少ない点から、成形時に何らかの目的をもって作られたと考えねばならない。この解釈の一つとして次の点があげられる。

1. 下半部の断面及び器内外面を観察する限り、粘土の走行が認められても、明確な形で粘土紐の単位を捉えられる個体が非常に少なく、成形が単純な紐作りでは無かったと考えられる点。
2. 上記1から、下半部が短時間で成形された可能性がある点。
3. 部分的に粘土を厚く接合する技法は、両者間の粘土の含水量が異なると考えられる点。
4. 器形形状、強度が弱い部分を補う為と考えられる点。

以上の4点が考えられる。これらのことを総合すると次の解釈が成り立つ。

下半部の成形は、短時間内に帯状接合部迄成形され、粘土紐の単位が明確でない点から、成形は「型」の使用が考えられ、帯状接合部は、下半部がある程度まで安定（乾燥）する迄時間を置き、上半部の成形に際して含水量違いによる脱落を防止した処置であることが考えられる。

又、外観上6世紀～7世紀の甕のこの帯状接合部の器外面側を堺として、上半部と下半部には、妙にくび

れたり、急に上半部が脹れたりすることがあり、(8世紀以降の器厚の薄い一群にもある)更に、この時期の上半部には、紐作りの接合痕跡と明瞭に残すものの、下半部では殆ど認められない点と、器外面の縦位の篋削りにより粘土紐の接合痕単位が認められなくても、外器面を横帯に波立つ状態が認められる。そして、この横帯に波立つ単位が粘土紐の1単位に考えられる点が指摘出来、上半部は確実に紐作り成形であることが判断出来る。

かかるに、8世紀以降の薄手の作りの甕には、外観上縦位の篋削りが施されていても上半部に粘土紐の1単位を示す痕跡(横帯状に波立つ状態)が一切認められないのである。唯、頸部から口縁部にかけての部分には、不規則な波状の粘土紐単位が認められる場合は多いものの、器内面側は、丁寧な篋及びその他の方法による撫でが施されている状態が全に近い。この不規則な波状単位の粘土紐は、前述した「型膚」の紐を用いた場合の状況に類似しており、あれ程に不規則な波状になっても頸部・口唇部が平坦にされていることから、上半部にはやはり「型」を用いていたことが推定され、破片化した甕片を見る限り、粘土紐単位の平行面をもつ割れ口を残す破片はほぼ皆無である点からも推定視される。

又、丸底や球形胴部の個体の場合、下方からおさえる台状乃至「型」が存在しない限り、上半部の粘土紐の積み上げる(両者共に断面観察では上述1の点が指摘出来る。)ことはやや困難である。これは、外面整形の篋削り等が上半部のそれを切る状態、即、上から下への篋削り工程があり、この時の削り方・状態を観察すると、粘土の含水量が上下共にほぼ等しい状態である。単に紐作りで、下半部が安定した状態から上位への粘土紐の積み上げを行い、器形全体が、篋削り状態まで落ち着いたとすれば、この時、下半は、篋削りのタイミングが遅れ気味になっていると考えられ、この状態での上から下の篋削り(土器外面に残る様な状態)の工程は、土器側と矛盾した関係になってしまう。だが、篋削り自体、かなり乾燥した状態の個体を一旦水の中に浸し(器外面側のみ)、土器(粘土)に水を吸わせて軟らかくなった部分のみを削るということも考えられなくもないが、器面から観察される状況では、やはり、早い積み上げ成形によると判断出来る。則、「型」の存在を推定させる。

以上、上述して来た点が土師器甕成形技法であり、凡、6・7世紀は下半部迄が、8世紀以降は全体が「型作り成形」に依り成形されたことが推定出来る。

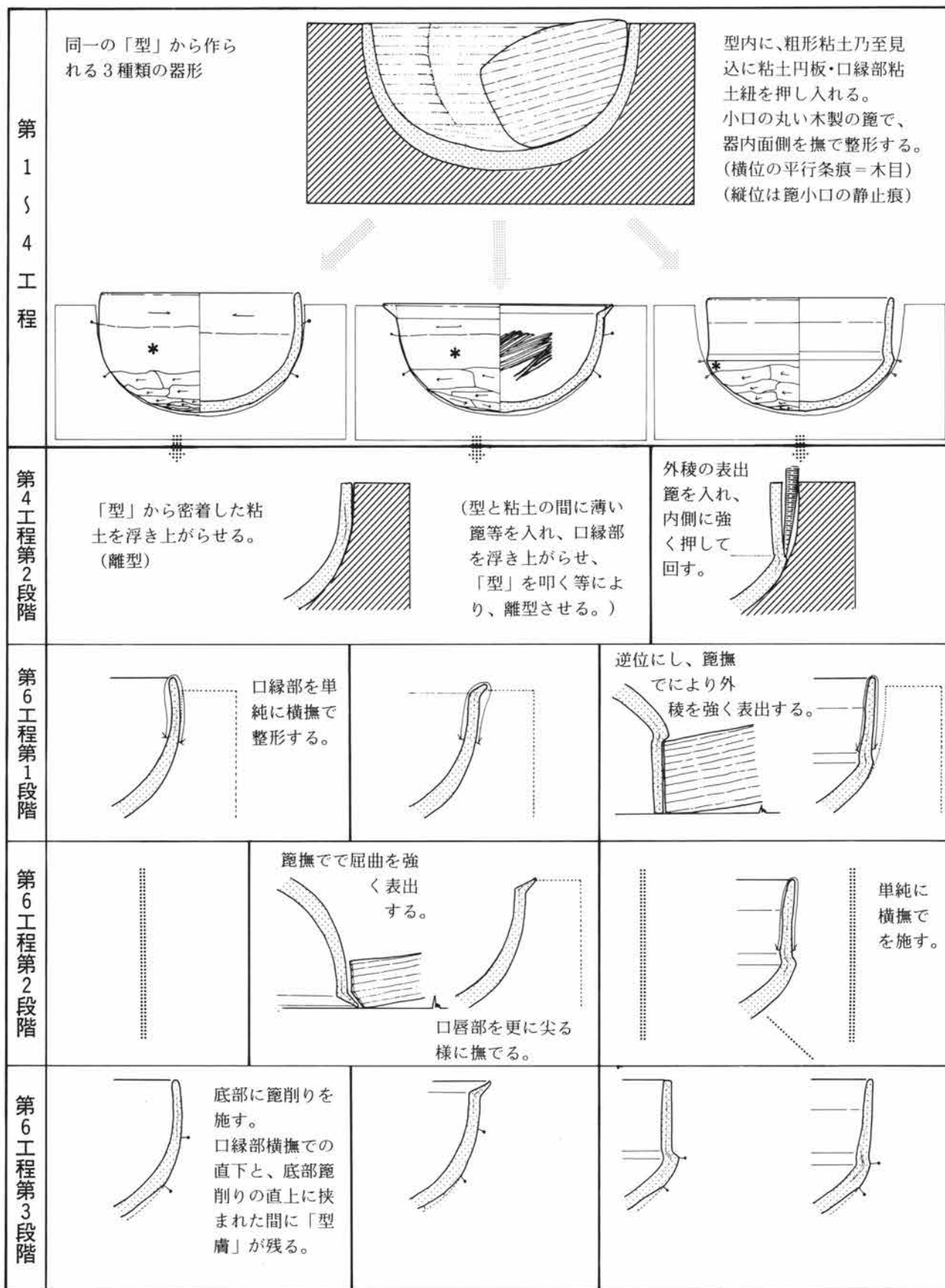
## 2. 土師器坏の「型作り成形」—その2—外稜を有する器形の場合

既刊第4分冊では、8世紀を中心とする土師器坏の成形技法に就いて記述した。本段で記述する土師器坏は6世紀を中心とする「型作り成形」に就いて記述したい。

6世紀を代表する土師器坏の器形の最大特徴は、強い外稜を有することである。これは、6世紀の土師器坏が、5世紀末に開始されたであろう須恵器坏の模倣が製作工人側乃至社会全体に浸透し、常に須恵器写しを製作するのでは無く、土師器として独自の系統種として確立した器形として捉えることが出来る。

先ず、土師器坏の成・整形技法の工程を以下に概略を示しておく。そして、その後各器種(形)毎に補足説明をしたい。

- 第1工程 成形型・粘土を用意する。この時の粘土の状態は、板状・紐状・粗形状の三者が考えられる。
- 第2工程 成形型に粘土を押し入れる。
- 第3工程 成形型への粘土の圧着。
- 第4工程 トンボ様の篋を使用し内面を整える(トンボは陶芸のトンボの意味が異なる。8世紀代の坏の器厚は均一で且薄い、これは、「型」内で器内面整形を行う際に、篋自体のどの所を器内面の中



第230図 土師器坏型作り製作工程模式図 (1)



心（「型」の中心）宛れば薄く均一な器厚が得られるか、ということ工人は体得していた筈であり、篋自体には器内面口径を計り出させる道具としての側面が含まれていたと考えた為に「トンボ様の篋」としたが、第4分冊本文では様子が状となっており誤字であった。この段階で「型」の外面に喰み出した粘土（喰み出し粘土＝バリ粘土）を削り取る。この作業で、器厚が明瞭に認められる。

第5工程 粗形の離型（粘土粗形とこの場合の粗形は意味が異なる）。

第6工程 器外面及び口縁部の整形。

以上の基本6工程がある。

第230図には、5世紀後半頃から6世紀初頭頃の内斜口縁の坏の基本成・整形と。それを成形した同一の「型」から製作可能な所謂模倣坏と丸底形坏の成・整形技法を図にしたものである。

内斜口縁の坏は、口縁部の横撫でと底部篋削りの間に認められる、両者の整形以前の器面がある。この器面の状態は、前述の粗形粘土を押し入れた時に生成する器面状態である。この器面状態から「型作り成形」と判断出来る（成・整形の概要は第4・5分冊を参照して戴きたい）。

内斜口縁の坏と共伴する模倣坏の器形の特徴は、直立気味の口縁と丸く深目の底部を備えていることである。この器形は、内斜口縁の坏の数値比に類似する傾向がある。このことは、両者の「型」の口径・器高が類似するか同一「型」による成・整形と考えられ、若し、工人側に新たな器形を創意しようとした場合、新たな「型」というよりも、従来の「型」により少々の技法を変えて作ろうとする意識の方が優先したと思われることから、ある特定される「坏」は、当初内斜口縁の坏と同じ「型」により作られた可能性もあるだろうとの推定から第230図を作製した。

第230図での両者の共通する手法は第4工程迄で、模倣坏では第5工程時に「型」と粘土の間の奥まで篋を入れ、「型」内の粘土をはがすより強く、内面側へ押し入れる位の状態で篋を回せば（離型の最初の工程は、細く薄い篋により、「型」面から粘土をはがす様にし、次にやや厚味のある篋を入れ、粗形を浮かせる様にする）外稜が生成出来、この時円面側にも外から押された分により内稜が生成される。そして離型後、第6工程では口縁部整形として、指撫でにより（布乃至革等を使用したと推定される）口縁を引き出し気味に延ばすか、逆位にして篋の直線部分を口縁外面に押し宛て篋撫でを施す（篋撫で後、更に口縁部の指撫でを行う場合もある）かの二者の整形が考えられる。この場合前者は、外稜が緩くやや鈍く、後者は強く鋭くなる。

内斜口縁の坏の場合、第5工程の離型（細く薄い篋で全体を「型」から浮かせる様にする）後、第6工程で口縁部を引き出し気味に撫でを施し、端部を折り、更に撫でにより口唇部が尖る様にする。この時、篋による口縁成（整）形も考えられる範囲であるが、出土遺物に篋を止めた時の痕跡が殆ど認められないことから、筆者としては積極的な技法とは考えていないが、模倣坏には認められる技法であることからあげておいた（篋使用後、更に指等の撫でを行えば篋痕は大半が消滅する）。

塊形の場合は、第5工程の離型迄は内斜口縁と同様で、第6工程口縁部整形は内斜口縁の前段階で止めた状態。

第6工程の体部・底部の整形は、上述三者共に、どの部位から篋削りを行うかという点だけが相違点であり、それによって「型膚」が残る。唯、模倣坏の場合外稜部分が篋削りを施すと「型膚」は失せてしまうが、外稜から底部中心側に向かい離れた位置から篋削りを施すことにより「型膚」も遺存する。

上述した様に、同一の「型」からは三者の坏の器形が出来ることと、前述した丸底系の小型製品等の坩の成形も可能であることを指摘しておきたい。唯し、模倣坏の場合、後出する形状（底部は丸底であるが、底

## 第5章 考 察

部高が低くなった段階の坏)の模倣坏と大きく異なるのは、底部高の差である。この底部高の差自体、底部丸味の強く見えるか否かの問題である。前述した様に、厳密には、模倣坏と呼べるのは、須恵器坏蓋を模倣して作ろうとする工人側の創意がはたらいっている段階迄で、これにより生じた当該の系統種とすれば、それは模倣ではなく、確立された土師器坏の基本型式として認定され正統的な用語の設定も必要であろう。

次に、当該報告書の中で主体を占めた6世紀後半に比定される一群の坏を中心に第231・232図の補足説明を行っておきたい。

第231図は報文中の第60図-22を元に成・整形技法の復原をした。唯し、第1・3工程は割愛した。第232図上段は、報文中の第68図-11を、下段は第61図-9を各々元に成・整形技法の復原を行った。又、この両者の場合も第1・3工程を割愛してある。第233図では、6世紀前半の坏を想定しているが、元になる遺物は無く、筆者の心象により作図したものである。ここでは、第1～4工程を割愛した。第234図では第233図同様6世紀前半～中頃の黒色土器坏を心象して作図した。ここでは第1～5工程を割愛した。第236図は、6世紀中頃～後半の須恵器身の模倣坏系の坏を心象して作図した。ここでは、第1～3工程を割愛してある。

これらの図の中で、第5工程時の状況を2分して図解した。これは、どの坏も口縁部下端と外稜部の間に浅い沈線様の整(成)形が周している為、この沈線様のものがどの段階で廻らされるかという観点から作図したのであるが、これと同様の沈線様のものは須恵器坏でも頻繁に行われている(例として第231図を参照していただきたい)。恐らく、土師器坏と須恵器坏に認められるこの沈線様のものは、両者共に成・整形に係る重要な技法であって、行われる条件も同じであった可能性が示唆される。この沈線様の整(成)形の一部と考えられるものは、図中では、第5工程のA解釈2の段階で先端の丸い棒状工具で外稜表出の為に行われたか、第5工程のB解釈1の段階で、離型と外稜表出の為篋の宛がい角度を変えながら行うことにより生じたか、又は、第6段階の中での外稜表出の為に逆位にされた時に沈線を施す如くに先端の丸い棒状工具等で行われたか、又、同工程中の篋撫で整形時の篋の先端により外稜表出を意図して行われたか結論は言及し難いが、行われる部位から、外稜表出に係わることは確実と考える。

又、第232図の上段及び、第234図は、口縁部に稜を有し(稜の強弱はある)段状に成形された坏がある。そして、この口縁部をどの様にして表出させたかという点に就いて次に述べてみたい。

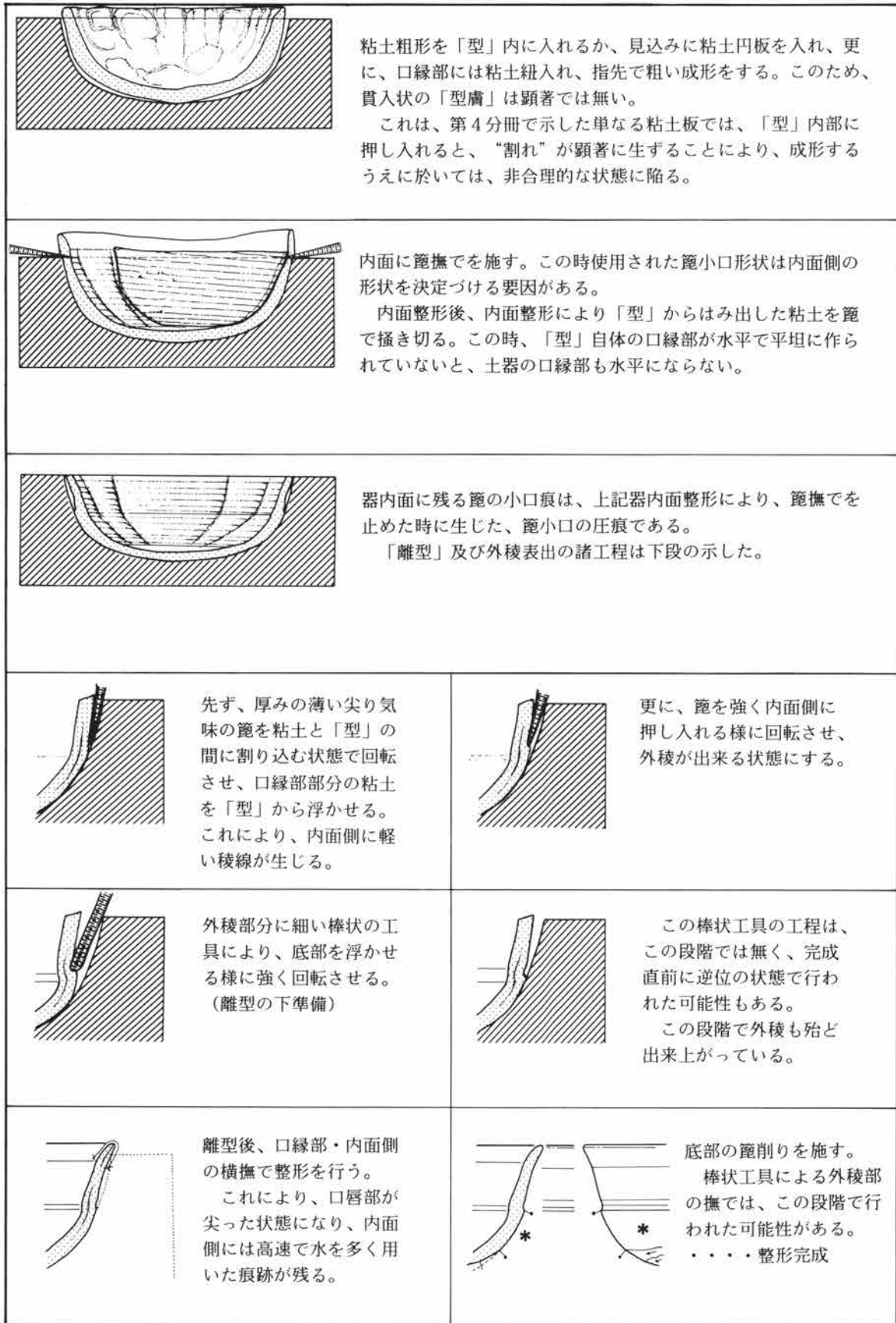
第231図の場合は、2区土器溜り出土の他例の坏と胎土焼成が大きさも共通する一群の土器である。然し、口縁部に段を有する点が一群中でも異なる点であり、この坏と同様なものが少量ある。唯し、この少量のもの、全てが、第234図例の様な、強い稜として表出されているものではない。この点で、この第231図例の如くの場合は、第5工程段階での離型作業過程で、篋を「型」と粘土の間隙を回す間に、篋が上下にずれることによって生じた状況と考えられる。

他方、第234図の状況は、黒色土器坏に多く見られる状態であり、稜線が強いことから、作為的に表出された段と判断することが出来る。

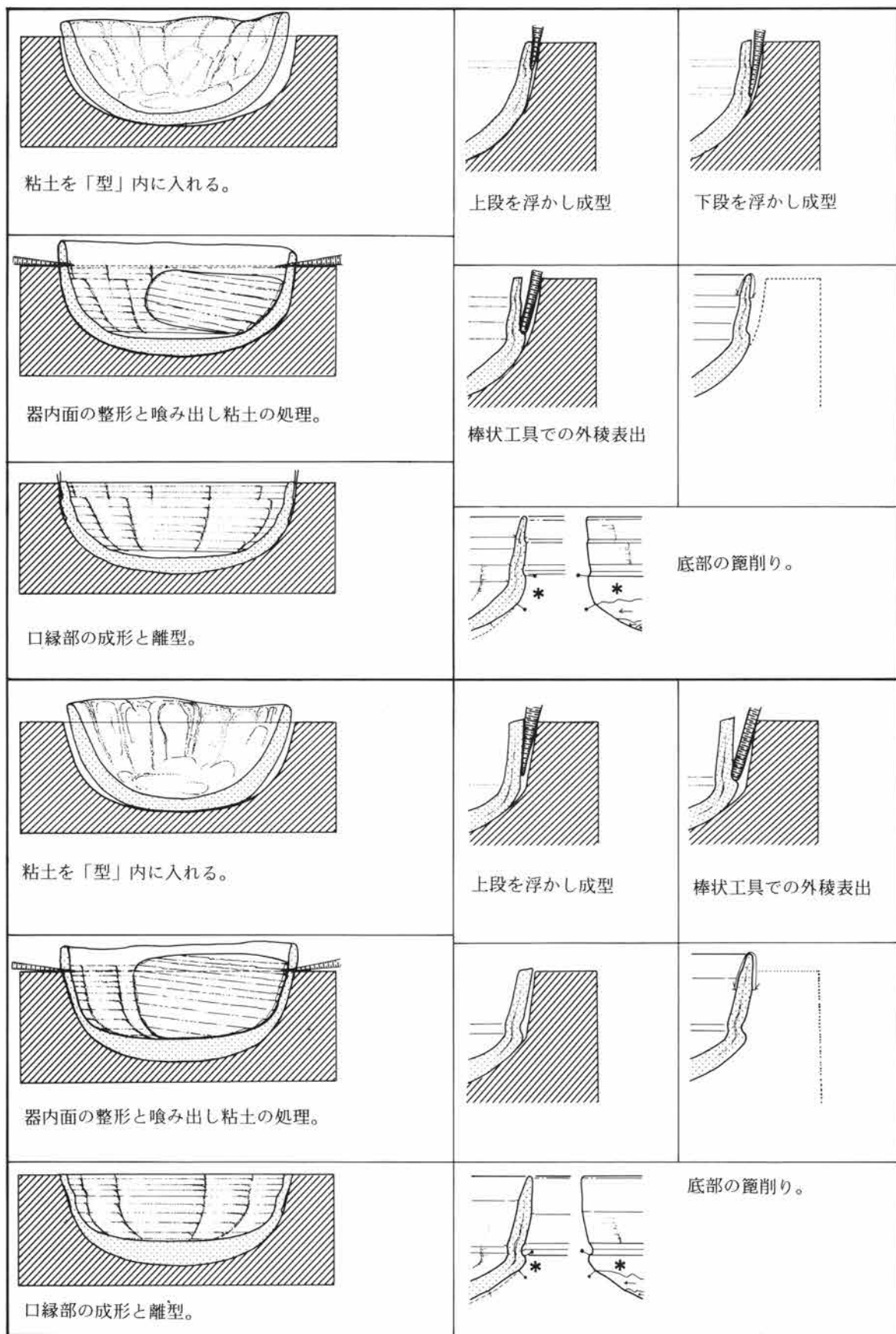
この段の表出は三者の技法が考えられるが、第234図には、二者の方法を図示し、第6工程の中での坏を逆位にして行う成(整)形方法である。

上段では、篋自体に段が刻まれており、1回の作業で段の表出が可能である。下段は、上下に分けて表出する方法であるが、この場合、上段と下段とでは立ち上がりの角度が異なることが想起され、段の部分には、上下別々の回転に伴う擦痕が認められる筈である。しかし、多くの場合は前者に伴う回転擦痕が認められることから、第234図上段が通有技法と考えられる。

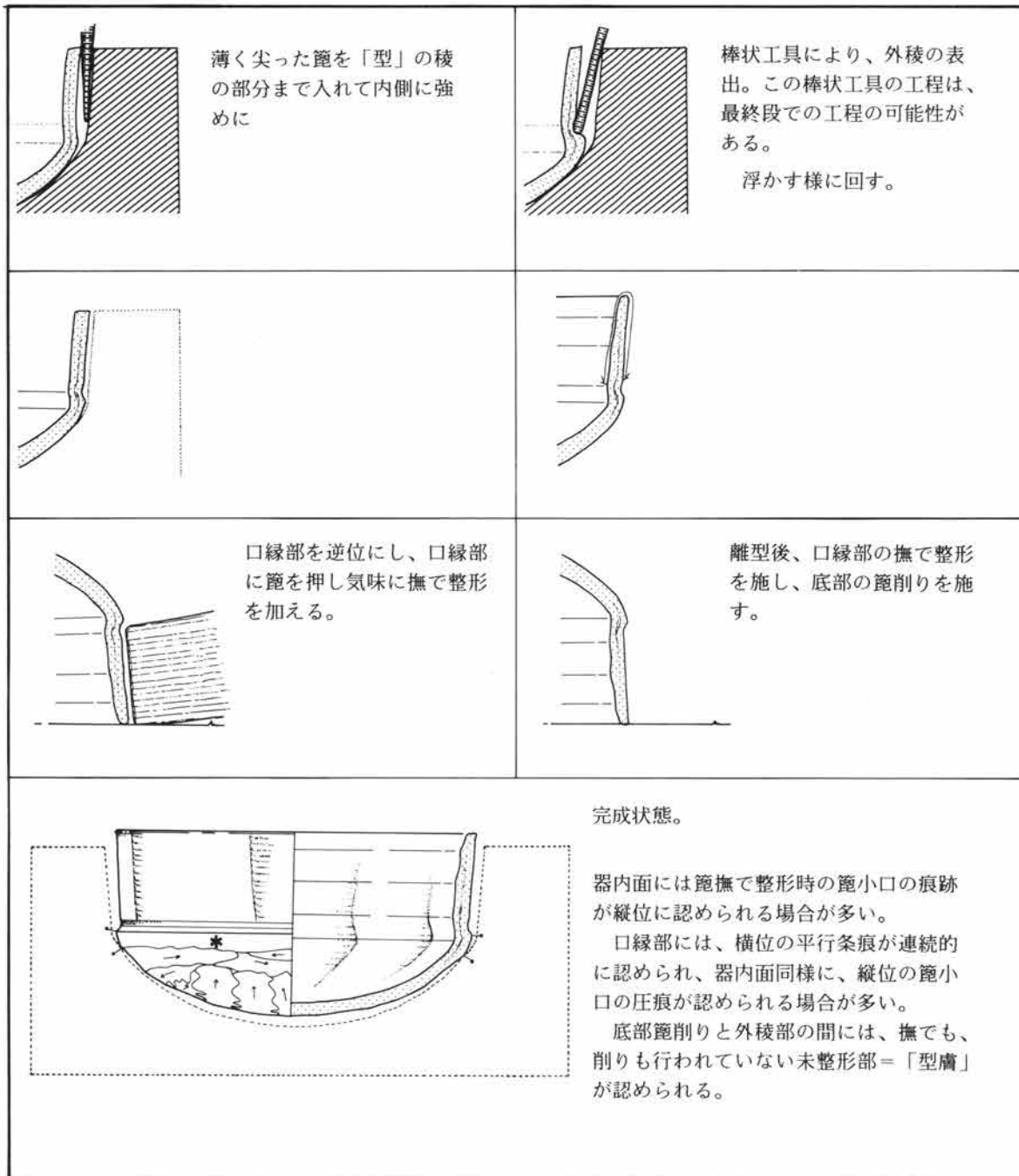
第235図は、基本的には第231図と同様であるが、当該の器形の場合、外稜と強く表出させようとする傾向



第231図 土師器坏型作り製作工程模式図(2)



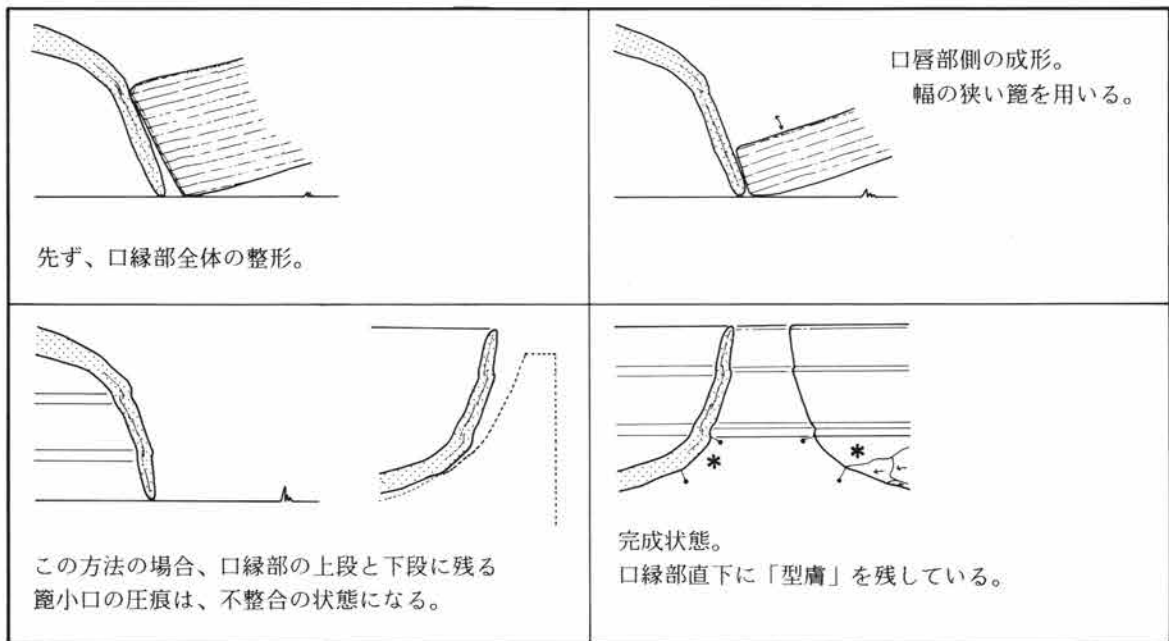
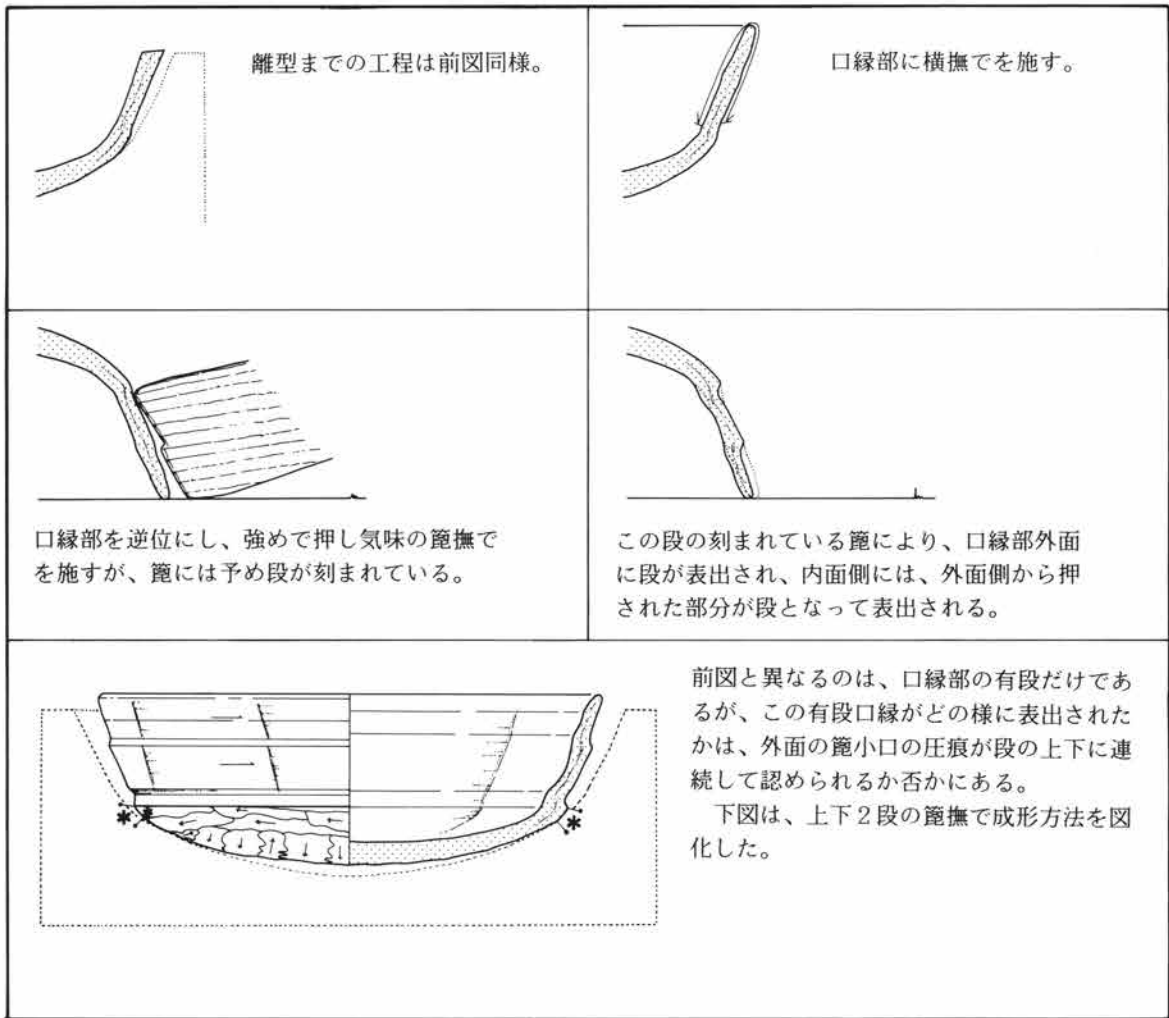
第232図 土師器坏型作り製作工程模式図 (3)



第233図 土師器坏型作り製作工程模式図（4）

があり、この為に「型」内での外稜表出も重要であったと思われるが、図中（第235図下段右列）の作業の時に強く押し付け様に行われたと考えられる。この点は、外面側が窪んだ分が内面に強く稜として認められる点で明らかである。

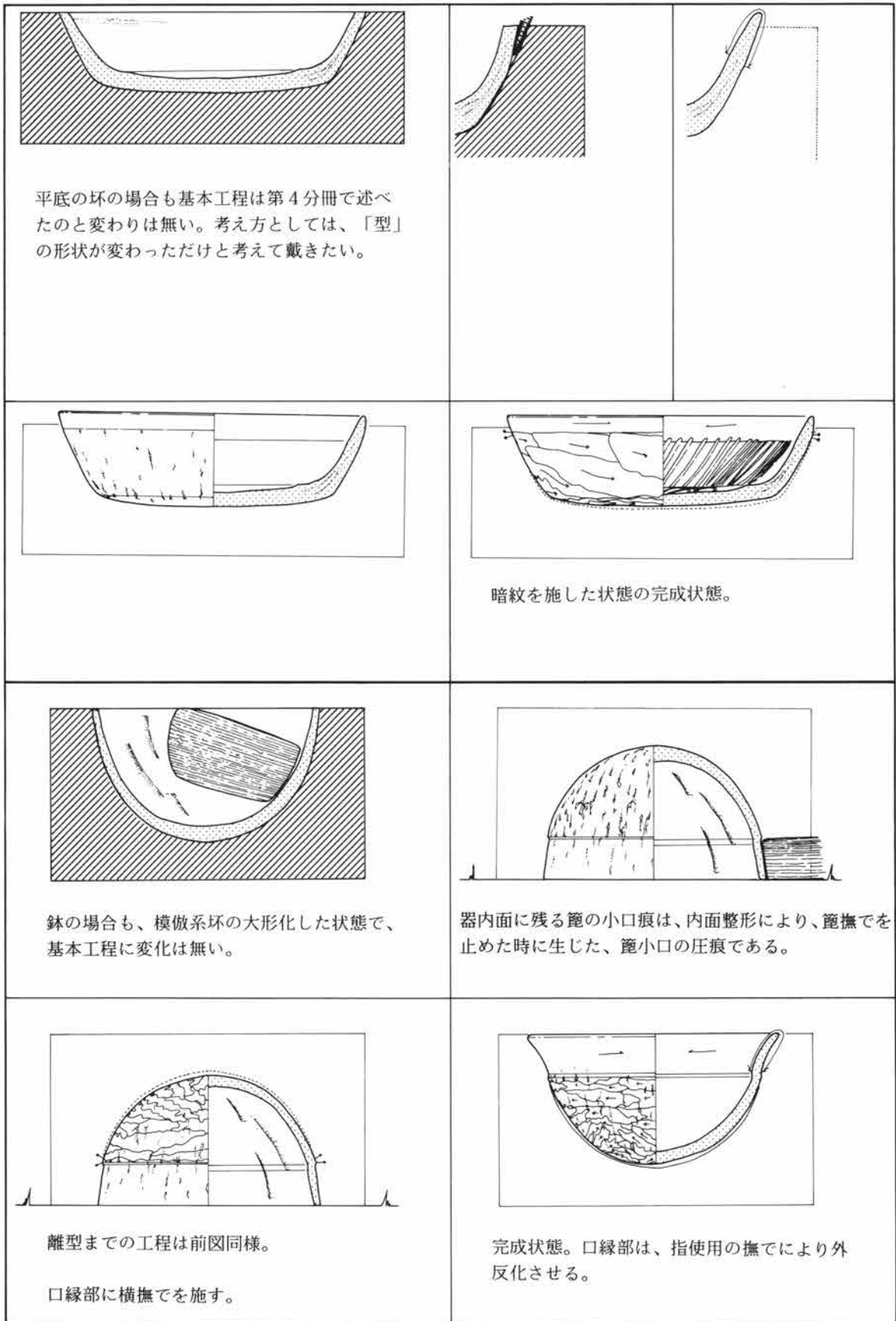
第236図には、暗文を施す8世紀の平底の坏を類例として第1・2工程を割愛して図示した。この種の坏の場合、第6工程時の篋削りが、斜上方向から行われる場合が主体で、逆位にしての削りが想定される。逆の例は量的に少ないと考えられる。又、前の方向は図上右斜上方向からであることから、工人に右利きが多かったことが類推される。



第234図 土師器坏型作り製作工程模式図(5)

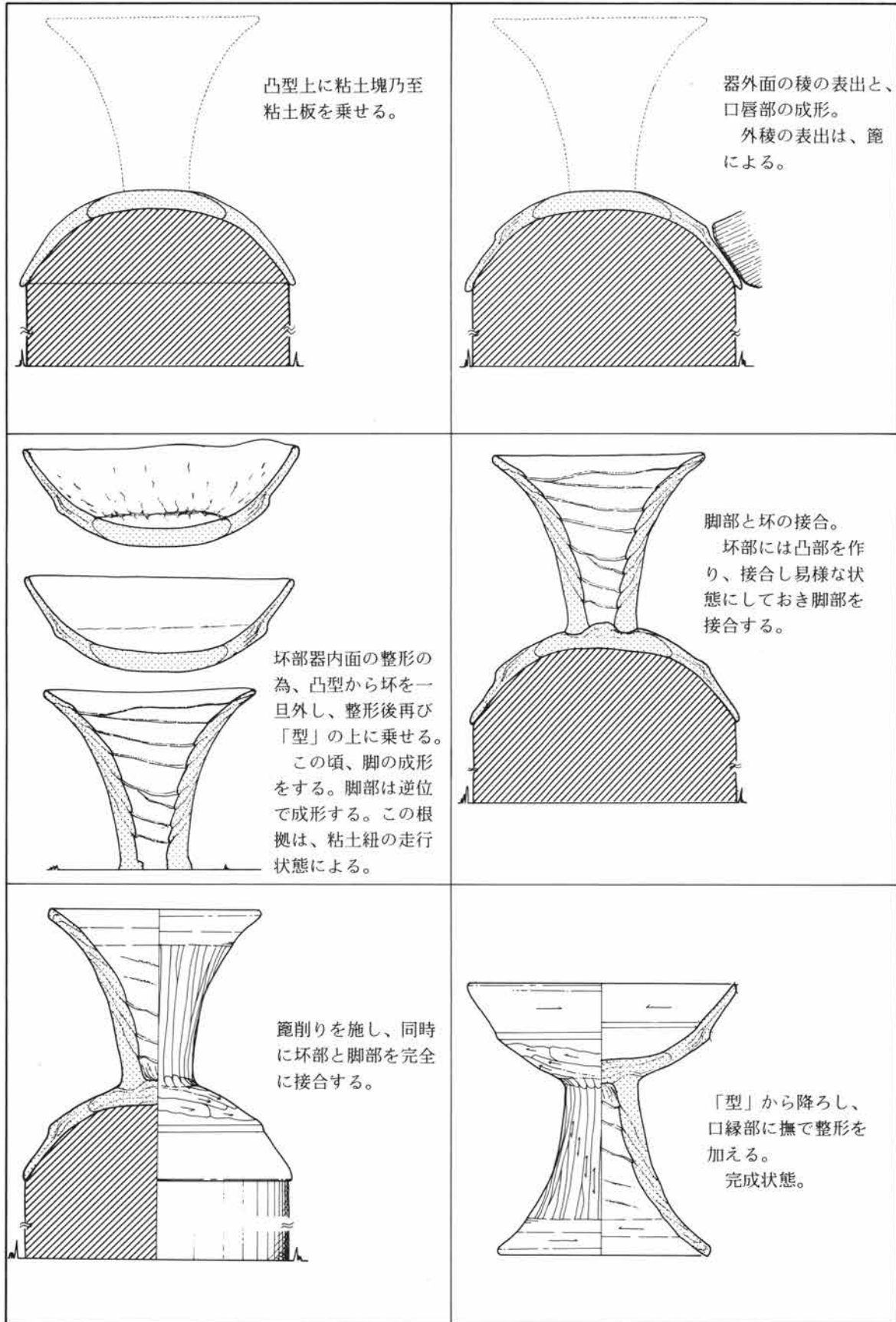
	<p>須恵器杯身模倣系の土師器杯も、前掲図の成・整形技法と殆ど変化は無い。</p>
	<p>「型」から密着した粘土を浮き上がらせる。</p>
	<p>外稜部分に細い棒状の工具により、底部を浮かせる様に強く回転させる。 (離型の下準備)</p>
	<p>この段階で、前述した成・整形技法と同様に2者の成形方法に別れる。</p>
	<p>離型後、口縁部・内面側の横撫で整形を行う。 これにより、口唇部が尖った状態になり、内面側には高速で水を多く用いた痕跡が残る。</p>
	<p>外稜の表出</p>
	<p>底部の篋削りを施す。</p>
	<p>口縁部を単純に横撫で整形する。</p>
	<p>棒状工具による外稜部の撫では、この段階で行われた可能性がある。</p>

第235図 土師器杯型作り製作工程模式図(6)



第236図 土師器杯鉢型作り製作工程模式図(7)





第237図 土師器高坏型作り製作工程模式図(9)

同図の下段は6世紀後半の鉢形を約6分1程の縮尺で図化した。基本は第225図と同様であるが、大きさが大と小ということ以外には相違は無い。

第237図には高坏の例をあげた。高坏の成形では坏部と脚部では成形が大きく異なり坏部は「男型」により成り、脚部は紐作りにより成形されている。

坏部の成形では、従来より底部が粘土板により作られ、坏部・脚部を各々別に成形した後に両者を接合するとされている。<sup>註3</sup>この点は第236図と同様である。唯、脚部は、粘土紐の痕跡と顕著に残す脚を観察すると、粘土の走行が、外面側が下がり、内面側が上がるという状態で、通有の紐作り（須恵器瓶・甕類）とは逆の方向になる点があげられる。これは、脚部自体が逆位に置かれる状態で成形されたと解釈出来る。

坏部を「型作り成形」と判断出来る根拠は、外稜を強く表出する点と、器外面底部の整形がやや粗雑である点である。根拠としては積極的ではないが、成形時の大きな坏部の形状保持等、他の器種並びに簡易に成形するという前提と理論上の点という点から「型作り」と考えている。

この外、小型丸底埴に代表される如くの器形などは、下半部が「型」で上半部は紐作り様と考えられる。だが時期と器形により様々な成形・整形があると考えられ一様には語り尽くせない。今回は、一応当該報告区の出土遺物に就いて主眼を置く為後年詳述したいと考えているが、第2表には、4世紀から5世紀の成・整形技法に就いて一覧化させておく。

### 3. 「型」三 種

模倣系坏（前述した模倣坏の名称的問題点を考慮し「系」を付したが、現段階としては固有名詞として用いるものではなく、便宜的に用いた仮称である）は、染谷川河川敷部2区土器溜りから多量に出土している。これらの模倣系坏の「型膚」と口縁部の立ち上がりには、大きい二者の状態が看取される。これは、「型膚」部の立ち上がり角度と、器内面の口縁部立ち上がり部のくびれの状態である。

「型作り成形」による土器の成形は、使用される形の形状が器形自体を大きく左右する。逆説すれば、作ろうとする器形の形状を意識した「型」を用意して製作に当たるのが本来の「製作創意」であろう。このことは、製作工人側に須恵器坏の器形がどのような「形」として心象されていたかという問題が内在している。この製作工人側の「形」に対する心象、則、土器から製作工人の「製作創意」を如何に解釈するかが、土器の本質を研究する上に於ける一つの要件であると捉えられ、生産体制を推量する場合に於いても重要な要件であると考えられる。

欺而、「製作創意」を解釈するに重要な観察視点として、上述の器面に於ける状態が「型」の形を実像にさせるのである。

上述の「型膚」・器内面のくびれの両者は、「型」の形と、器内整形の状態により作られる。この推定される可き「型」の形は、三者がある。この三者の「型」の形は、第230図・第231・232図・第233図に想定したものである。以下、器形と「型」の相関的關係に就いて略記する。

1. 第230図例 土器は底部の丸味が模倣坏・模倣系坏の中では最も強く、底部高も高い。「型膚」の角度も底部全体の曲率に近いと考えられ、「型」は、土器の底部の丸味から、全体的に丸味が強い点が判断出来、口縁部内面のくびれの状態は鈍角である。

土器は底部の丸味状態は、1とは異なりかなり底平化の傾向が認められる。「型膚」は、外稜部直下から底部中心方向に向かうが不定形な状態で残存するが、底部中心側の篋削りにより生じた段の状態により「型」の形状が概ね推定出来る。又、この篋削りと「型

膚」部の段の高さには、第4工程時に成形された器内面側の底部の器厚に大きな係わりが看取される。則、第4工程時に「型」の底面から器厚と厚く成形すれば、底部外面の篋削り自体厚く削られ、これにより、「型膚」の底部中心側の段も深味を増すことになる。このことは、製作工人側が、成形時に器厚の調整をどの様に思考したかが問題となるが、出土した数量からは、相当の大量生産が想起され、底部の器厚の状態は、工人の意識による創出では無く、量産段階に於ける必然的結果により生じたと解釈されるが、寧ろ、このこと自体が逆に製作工人側の意識の反映として捉えられるとも思われる。「型膚」では、「型」自体の立ち上がり部の角部がかなり丸味を帯びている状態であるが、底部全体の形状からは、底部の中心側は1の如くの丸味では無く、やはり底平化の傾向が推定される。

2. 第231図・器内面のくびれ部の状態は、1と同様で鈍角気味である。  
 第232図例 器形は底部の丸味が1よりは丸味が少なく、2と同様か或は2よりやや丸味が強い（略1・2の中間様）。口縁部は直立気味でやや口縁部高が高い。「型膚」は2に同様か、やや鋭角的な場合が多い。
3. 第233図例 器内面口縁部のくびれは、1・2より鋭くなっている。この鋭くなっている状態は、「型」の形を推定する大きな要件である。これは、「型」の口縁部側が予め直立気味に成形されていて、底部の丸味から口縁部立ち上がり部分が、1・2の如く丸味が強く無く、鋭角的になっている。この「型」自体に立ち上がり部分が鋭角的な場合、極端な例として須恵器坏身の模倣坏乃至模倣系坏の状態となる。

この三者の形の「型」から作られる坏は、「型」により成形された整形以前の形状が、しあがりの形状を大きく左右する。だが1の例の如く、四種の土器（坏三種・坩一種）の成形が可能であるが、坏の場合、全体の口径・最大径（口縁部形状により生ずる数値は除外）・器高等は、凡の数値に差違は無く、特に器高を大きく左右している。この器高は、土器の編年序列の中では、坏の大きさの中での器高値の割合が、高いものから低いものへと変化していくことが通有である。この観点に立って土師器坏の成・整形技法の変化を捉えるならば以下の図式が想定され、前述した、偽製の模倣という点が明確になると考える。

尚、以下の図示の設定の前に上述した1～3「型」に対する名称を設定しておきたい。

土師器坏「型」A類 成形面が丸味を強く帯びた「型」（前述1・2）。

土師器坏「型」B類 成形面が口縁部の立ち上がり部分が、屈曲乃至屈曲気味で変換部を有するもの（前述3）。

土師器坏「型」C類 平底の状態のもの。

土師器坏「型」D類 上述三者以外で折衷様であったり、成形面が一樣ではなかったりする様な一群のその他のな「型」。

この三者に、a～dの四者を付す。

- a. 器高の深いもの           ただし、これらを数値的に裏付けるものは無く、  
 b. 器高の浅いもの           5～9世紀に至る段階毎にも異なる為、目安的なも  
 c. 両者の中間様             のである。又、その他は、後年、想定される全ての  
 d. bより更に浅いもの       状態を明らかにする段階で設定したい。

又、土師器全体の「型」の中では、以下の分類を設けておきたい。

第5章 考 察

土師器「型」1種 器形全体を成形する「型」(坏類など)。

土師器「型」2種 器形全体を分割して成形する「型」(前刊5分冊で記述した「コ、の字状口縁の甕等)

土師器「型」3種 器形の半分(下半部のみの使用例)を成形する「型」。

以上を組み合わせる表現したい。

第I段階

- 1種坏A類a 模倣坏の出現段階。従来より使用している「型」で、模倣指向の強い創意により無理矢理
- 5C後半 成形した感がある。この段階で忠実に模倣していれば、「型」も自ずと成形したのであろうが、
- ↓ 出土品を見る限りに於いて、同段階の形状とは異なっている(模倣段階)。

第II段階

- 1種坏B類c 前段階の強烈な模倣指向が無くなり、製作工人側で心象した「形」の為「型」が成形され
- 5C後半～6C前半 る段階。製作地側では多量生産に入ったと考えられ、これによる成・整形の合理的に創意された「型」の形となったと類推される(量産化段階)。

第III段階

- 1種坏A類b 「型」は丸味を帯び、離形を考慮したとも思われる形状になる。丸味は第I段階の状態とは異なり幾分平坦気味になる。第II段階の量産化は更に顕著に成ったと考えられる。染谷
- 6C後半 川河川敷部2区土器溜り出の坏は、外稜部の表出が雑な感が認められる(量産段階)。

第IV段階

- 1種坏A類b 「型」は全体に浅くなり、口縁部整形が指で全体を行うようになる(減少段階)。
- 7C前半以降

この様に土師器坏(模倣坏・模倣系坏)は、5世紀後半から6世紀前半まで成形技法には際立った変化が認められない。唯し、外観の器形や細部に於ける形状等整形技法では細分が可能であろうと考えるが、本稿の主題では無いので後年に期したい。

第5表 土師器・須恵器成・整形技法一覧表

	男型	女	型		摘	要
			分割	組		
古墳時代前期	器・有脚?	○				
	高・環	○	下半	上半	脚・环部を別々に成形。	
	須・瓶	○	下半	上半		
同中期	S字台	○			器内面の4本指撫では型使用での技法。脚は紐か。	
	付口縁	○?			製品によっては分割も考慮される。	
同中期	高・環	○	下半	上半	円盤と紐の坏。脚は紐か。	
	須・瓶	○	下半	上半	下半部のみが型。	

	雌	紐作	女	型		紐	要
				雌	紐		
丸底	須・环	○			?		丸底の場合には下に受状の台か型が無ければ成形不能。唯、削り出しの場合は別。
	須・瓶	○			?		
	須・壺	○			?		
平底	須・环	○				○	
	須・瓶	○					

4. 口縁部整形の二者

坏の外稜の表出方法の二者に就いては第230～235図中と前段で述べた。この表出には「型内」と「型外」での成形と整形での二段階がある。口縁部もこの外稜と同じである。この口縁部の整形には第231～233図で示した、篋と撫での方法と指撫だけでの二者の技法がある。前者の場合、口縁部に直線的な篋の小口の痕跡を、その上に更に指撫で行われる技法と、後者の指撫でだけによる技法がある。この両者による整形で仕上げられた口縁部は形状が異なっており、前者が外傾、後者が外反の差違がある。

今報告で2区土器溜りから出土した坏の口縁整形には、前が殆どであり、後者の外反例は皆無に等しい。この当遺跡での「外傾、の傾向は上述のとおり、篋を主体に用いた整形に依って生ずると考えられる。だが

一方では、篋の小口が丸味を帯びたもの整形を行えば“外反、になるが、この篋の痕跡を留めるものは皆無であった。

県下では、北毛地区の遺跡で出土する同種の坏（内黒が主体）で顕著で多数認められる。この“外反、は指撫でによる形状であり、北毛地区の山間部と西毛・東毛地区での主体的な“外傾、には技法上大きな違いとして両者を特徴付けられる。今回は、両者間の相違は整形技法により生ずる形状として特徴付け、詳細な検討は後日に期したい。

## 5. ま と め

土師器の成・整形技法に就いては、多くの場合「型作り成形」後の諸作による整形であることを本稿を含め、既刊書で既述してきた。そして、この土師器の「型作り」成形技法の背景には、専業工人の存在と集中生産体制等の存在を指摘した。このことは、地方に於ける状況として解釈しているが、中央では最も顕著な形態があった筈である。特に奈良県・大坂府・京都府での需供関係には、様々な史料を含め研究するに好対象の地である。所謂奈良盆地内の「畿内産土師器」も主要二地域からの搬入と考えている。この二地域の背景となる部分は、史的には“土師部、”雀部、の存在であり、大坂府古市周辺・奈良県御所市周辺での生産が主要な場であったと考えている。

群馬県下では、この“土師部、”と“雀部、”共に史料中に見い出される。これが、緑野郡土師郷と佐位郡雀部郷であり、前者が現在の藤岡市、後者が伊勢崎市周辺である。しかし、この両地域で、土師器を作っていたことを示す具体的な資・史料は無いが、土器の胎土を観察する中では、両地域は、生産地として主体的な位置を占めていると考えている。今後、この点に就いても一論を記述する考えであるので詳細な点に就いては後日にしたい。

土師器に限らず、土器の成・整形技法は、当時の「技術」の一端である。この「技術」の存在無くして土器の「形」は生まれず、同じ土器を多量に作るには、それなりの「技術」の存在なくしては決して出来ない筈である。

「型作り」成形に就いては、かつて、横山浩一氏が略述されただけであり、通論では、安易に民俗例を参考にし、土器そのものの器面状況から技法を論ずること無く、「手捏」・「紐作り」・「巻き上げ」等で論じられている。然し、筆者が述べてきた様に、土師器の基本を成す成形は「型」であり、「紐作り」等は、器種により用いられている部分的なものであって、背景たる、大量生産という点が如実に語っていると考えている。考古学に於ける「土器」の研究は、大きく3つの重要な問題を解決し歴史研究の材料と成しうる筈である。この3つの問題とは、「年代観」・「生産地」・「製作技法」であり、付言すれば「誰が」がある。これは、「いつ」・「どこで」・「たれが」・「なにを（した）」であり所謂“4W、”である。則、大系だった研究の必要性である。

一連の「型作り成形」は、この中で「製作技法」の一部であり、生地土（素地土）・仕込み、そして「焼成」の問題が残っている。この内生地土に就いては、第2篇中で述べる。又、焼成に就いては、報文中の図に示した“赤斑、の範囲から推定出来るが、場を改めて記述したい。

一連の成・整形技法は、横山浩一・故新井司郎両氏の研究に啓発された部分が大であることを申し添えておきたい。



# 遺物觀察表





## 3区1号井戸

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
12-1 17	土師器 坏	埋土内 破片	口 (14.6) 底 (11.2)	微粒長石 微粒砂	酸化焰	橙	型作り。口縁部外傾する。口縁直下に型膚を残す。底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系
12-2 17	須恵器 坏	上層 破片	口 (12.0) 底 (7.6) 高 (4.0)	透明鉍物粒子	還元焰	外・白灰 内・黒灰	轆轤成形 (右回転)。底部は回転篋削り。	不詳
12-3 17	須恵器 坏	上層 破片	口 (12.9) 底 (7.5) 高 4.8	微粒雲母	還元焰	外黒 内明青 灰	轆轤成形 (右回転)、底部は回転糸切り。器内面、有機質付着	藤岡系
12-4 17	須恵器 坏	上層 破片	口 (13.0)	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。	藤岡系
12-5 17	須恵器 坏	上層 破片	口 (13.0)	白色微粒子 微粒雲母 デイスait	還元焰	灰	轆轤 (右回転)、底部は回転糸切り。	藤岡系
12-6 17	須恵器 坏	上層 破片	口 (13.0)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。	秋間系
12-7 17	須恵器 坏	上層 破片	口 (13.6) 底 6.2 高 3.6	白色微粒子	還元焰	暗灰	轆轤成形 (右回転)、底部は回転糸切り。	乗附系
12-8 17	須恵器 坏	上層 破片	口 (14.0) 底 (7.4) 高 2.9	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰白	轆轤成形 (右回転)、底部は回転糸切り。	秋間系
12-9 17	須恵器 坏	上層 完形	口 13.8 底 8.1 高 3.0	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)、底部は回転糸切り。	秋間系
12-10 17	須恵器 坏	上層 破片	口 (13.8) 底 (7.6) 高 (2.9)	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	灰白	轆轤成形 (右回転)、底部は回転糸切り。	秋間系
12-11 17	須恵器 坏	同辺砂層 破片	口 (13.8) 底 (9.0) 高 (3.3)	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	オリ ブ灰	轆轤成形 (右回転)。底部は回転篋削り。	乗附系
12-12 17	須恵器 塊	上層 破片	口 (14.0) 底 (7.1) 高 (4.1)	白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。	秋間系
12-13 17	須恵器 塊	上層 破片	口 (14.5)	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	灰白	轆轤成形 (右回転)。	秋間系
12-14 17	須恵器 坏	上層 破片	口 (14.8) 底 9.2 高 4.1	赤褐色粒子 シルト粗粒子	還元焰	外・黒褐 内・黄橙	轆轤成形 (右回転)、底部は回転糸切り。	乗附系か
12-15 17	須恵器 墨書土器 塊	上層 破片	口 (17.0)	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。	秋間系
12-16 17	須恵器 坏	上層 破片	底 5.8	白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)、底部は回転糸切り。	乗附系
12-17 17	須恵器 塊	上層 体部欠損	底 6.3	白色鉍物粒子 白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	乗附系
12-18 17	須恵器 墨書土器 坏	周辺砂層 破片	底 (6.2)	細粒砂 微粒雲母	還元焰	黄灰	轆轤成形 (右回転)。底部は回転篋削り。	藤岡系
12-19 17	須恵器 坏	上層 破片	底 6.2	白色微粒子 微粒雲母	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)、底部は回転糸切り。	藤岡系
12-20 17	須恵器 坏	上層 破片	底 6.5	白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)、底部は回転糸切り。	乗附系
12-21 17	須恵器 塊	覆土内 破片	口 14.4 底 7.6 高 5.5	微粒雲母	還元焰	白灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	藤岡系
12-22 17	須恵器 墨書土器 塊	上層 底部	底 6.0	デイスait 白色鉍物粒子 微粒雲母	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。墨書は不詳。	吉井・藤岡系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
12-23 17	須恵器 壺	上層 体部欠損	底 6.8	微粒雲母 白色粒子	還元焰	灰白	轆轤成形 (右回転)。付高台。	藤岡系
12-24 17	須恵器 壺	埋土内 体部欠損	底 (6.9)	白色粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	乗附系
12-25 17	須恵器 壺	上層 破片	底 (7.2)	微粒雲母	還元焰	褐灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	藤岡系
12-26 17	須恵器 壺	上層 体部欠損	底 7.6	微粒雲母	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	藤岡系
13-1 17	須恵器 壺	上層 破片	底 (7.8)	微粒雲母 白色微粒子	還元焰	外・黒 断・灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	藤岡系
13-2 17	須恵器 壺	上層 破片	底 (9.0)	白色微粒子	還元焰	白灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	秋間系
13-3 17	須恵器 坏蓋	上層 破片	口 (16.0)	白色鉍物粒子 白色微粒子 微粒雲母	還元焰	褐灰	端部は下方に折り返す。轆轤成形 (右回転)。上半部は回転斲削り。	吉井・藤岡系
13-4 17	須恵器 高坏	上層 破片	基部 6.4	白色粒子	還元焰	外・灰 断・褐	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	乗附系
13-5 17	須恵器 高坏	上層 破片	基部 5.6	白色微粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。3単位の透しを有する。	乗附系
13-6 17	須恵器 長頸壺	上層 破片	頸 8.0	白色微粒子 白色鉍物粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	乗附系
13-7 18	須恵器 広口壺	上層 破片	口 20.0	微粒雲母	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	藤岡系
13-8 18	須恵器 壺	上層 破片	頸 15.3 鏝 29.0	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。鏝は貼り付け。	吉井・藤岡系
13-9 18	須恵器 壺	上層及び III層中 破片	口 (14.8)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	秋間系 3点の接合
13-10 18	須恵器 甕	周辺砂層 破片	口 (25.0)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	秋間系
13-11 17	須恵器 甕	上層 破片	頸 18.7	白色微粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	秋間系
13-12 18	須恵器 甕	上層 破片	頸 18.0	白色鉍物粒子 白色微粒子	還元焰	暗灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	乗附系
14-1 18	須恵器 甕	上層 破片	厚 0.6	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	紐作り。轆轤成形 (右回転)。後叩き整形 (外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。	秋間系
14-2 18	須恵器 甕	上層 破片	厚 1.4	黒色粒子 白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り。叩き整形 (外面叩き不詳・内面宛具は素文)。外面自然釉付着。	秋間系
14-3 18	須恵器 甕	上層	厚 1.0	白色微粒子	還元焰	断・橙 外・暗灰	紐作り。轆轤成形 (右回転?) 後。叩き整形 (外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。	乗附系
14-4 18	須恵器 甕	上層 破片	厚 1.2	白色微粒子	還元焰	灰	紐作り。叩き整形 (外面平行叩き・内面宛具は素文)。	乗附系
14-5 18	施釉陶器 か 灰釉小瓶	上層 破片	最大径4.5	密	良好 焼締め まる	オリブ 灰	水挽き成整形。原始灰釉か。	美濃系
14-6 18 瓦-886	瓦 鏡瓦	覆土内 瓦当面%	厚 2.2	透明鉍物粒子 白色微粒子	還元焰	灰	瓦当意匠は創建統一意匠 (単弁5葉蓮華文。中房の子葉は1+5。)	笠懸系
14-7 18 瓦-887	瓦 鏡瓦	覆土内 瓦当面%	厚 2.0	白色微粒子 透明鉍物粒子 チャート角礫	還元焰	灰白	一本作り。瓦当意匠は、創建統一意匠。(単弁5葉蓮華文。中房の子葉は1+5。)	笠懸系
14-8 18 瓦-888	瓦 鏡瓦	覆土内 瓦当面%	厚 2.7 面径 16.0	デイサイト 白色鉍物粒子	還元焰	灰・ 赤褐色	一本作り。瓦当意匠は単弁4葉蓮華文。中房の子葉は1+4。	吉井系
15-1 18 瓦-889	瓦 鏡瓦	覆土内 破片	厚 1.4	黒色粒子 白色粒子	還元焰	灰	瓦当部接合は印籠付。瓦当意匠の類例はない。	秋間系
15-2 18 瓦-890	瓦 鏡瓦	覆土内 破片	厚 1.7	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 硬質	暗灰	一本作りか。瓦当意匠は不分明。男瓦部は半截作り。凸面の撫で整形。側面取り2回。	吉井系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
15-3 18 瓦-891	瓦 宇瓦	覆土内 破片	厚 2.5	白色微粒子 白色鉍物粒子 チャート丹粒	還元焰	灰	瓦当意匠は創建統一意匠(右扁行唐草文)。女瓦部は一枚作りか。凹面布目擦り消し。側部面取り2回。	笠懸系
15-4 18 瓦-892	瓦 宇瓦	覆土内 瓦当面 $\frac{1}{2}$	厚 4.1	白色微粒子 透明鉍物粒子	還元焰 焼締め	灰	瓦当意匠は創建統一意匠(右扁行唐草文)。女瓦部凹面は横撫で、凸面は縦位の撫で整形。凸面頸部に赤色顔料が残存する。	笠懸系
15-5 19 瓦-893	瓦 宇瓦	覆土内 瓦当面 $\frac{2}{3}$	厚 1.7 面高 5.0	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 焼締	黒灰	瓦当意匠は右扁行唐草文。女瓦部の作りは不詳。凹面粘土板剥ぎ取り痕。	吉井系
15-6 19 瓦-894	瓦 宇瓦	覆土内 破片	厚 2.2	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰褐色	瓦当意匠は右扁行唐草文。瓦当部接合は印籠付け。	吉井系
15-7 19 瓦-895	瓦 宇瓦	覆土内 破片	厚 1.8	白色鉍物粒子 黒色粒子	還元焰	灰	瓦当部は折り曲げ技法。瓦当意匠は不詳。	秋間系
16-1 19 瓦-896	瓦 宇瓦	覆土力 破片	厚 2.2	白色微粒子 黒色粒子	還元焰 焼締	灰	瓦当部は印籠付。瓦当意匠は抽象文。頸部に赤色顔料が残存する。	笠懸系
16-2 19 瓦-845	瓦 男瓦	覆土内 破片	厚 1.9	白色微粒子	還元焰	灰	半載作り。凸面轆轤整形。側部面取り1回。凹面に3本1単位の筧傷がある。	笠懸系
16-3 19 瓦-846	瓦 男瓦	上層 破片	厚 1.9	白色鉍物粒子 黒色粒子	還元焰 焼締め	灰白	半載作り。凸面縦位の撫で整形。側部面取り4回。筧描き文字瓦「己」(凸面)。凸面自然袖付着。	吉井系か 乗附系
16-4 19 瓦-847	瓦 男瓦	上層 破片	厚 2.2	白色鉍物粒子 白色粒子 赤褐色粒子	還元焰	灰白	半載作りか。凸面縦位の撫で整形。凹面布目擦り消し。側部面取り4回・端部面取り2回。筧描き文字瓦「十」か(凹面)。	乗附系
16-5 19 瓦-848	瓦 男瓦	上層 破片	厚 1.7	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰	半載作りか。凸面縦位の撫で整形。凹面粘土板剥ぎ取り痕。側部面取り4回・端部面取り3回。筧描き文字瓦「㊦」(凹面)。	吉井系
16-6 19 瓦-849	瓦 男瓦	上層 破片	厚 1.5	白色鉍物粒子 白色粒子 黒色粒子	還元焰 焼締め	灰	半載作りか。凸面轆轤整形。側部面取り1回・端部面取り2回。筧描き文字瓦「未」(凸面)。	乗附系
16-7 19 瓦-850	瓦 男瓦	上層 破片	厚 2.1	白色鉍物粒子 白色粒子 黒色粒子	還元焰	灰	半載作り。凸面縦位の撫で整形。凹面粘土板剥ぎ取り痕。筧描き文字瓦「丈」か(凸面)。	吉井系
16-8 19 瓦-851	瓦 男瓦	上層 細片	厚 1.7	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	暗灰	半載作りか。凸面縦位の撫で整形。端部面取り1回。筧描き文字瓦「不詳」(凸面)。筧傷か。	吉井系
16-9 19 瓦-852	瓦 男瓦	上層 破片(細片)	厚 1.9	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰	半載作りか。凸面縦位の撫で整形。側部面取り5回。筧描き文字瓦「不詳」(凸面)。	吉井系
17-1 20 瓦-853	瓦 女瓦	上層 $\frac{1}{4}$	厚 2.0	白色微粒子	還元焰 焼締め	暗灰	一枚作り。粘土板剥ぎ取り痕。凸面縦位の撫で整形。刻印文字瓦「廣山」(左文字)(凸面)。	笠懸系
17-2 19 瓦-854	瓦 女瓦	上層 破片(細井)	厚 1.0	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面撫で整形後格子叩き整形。刻印文字瓦「雀」(凸面)。	笠懸系
17-3 19 瓦-855	瓦 女瓦	上層 $\frac{1}{4}$	厚 1.9	白色微粒子	還元焰 焼締め	暗灰	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面撫で整形後正格子叩き整形。刻印文字瓦「雀」(凸面)。	笠懸系
17-4 20 瓦-856	瓦 女瓦	上層 破片	厚 1.5	白色微粒子	還元焰	白灰	一枚作り。凹面布合せ目。凸面撫で整形後正格子叩き整形。叩きは2種以上の叩具。側部面取り2回。刻印文字瓦「勢」(凸面)。	笠懸系
17-5 20 瓦-857	瓦 女瓦	埋土内 上層 破片	重 2.0	白色微粒子	還元焰	灰黄褐	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面撫で整形後斜格子叩き整形。端部面取り2回。刻印文字瓦「山田」(凸面)。	笠懸系
17-6 19 瓦-858	瓦 女瓦	埋土内 上層 破片	重 2.2	白色微粒子	還元焰 並質	黄灰	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面撫で整形後斜格子叩き整形。刻印文字瓦「山田」(凸面)。	笠懸系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
17-7 20 瓦-859	瓦 女 瓦	上層 瓦	厚 1.9	白色粒子 白色鉾物粒子	還元焰 軟質	黄灰	一枚作りか。両面粘土板剥ぎ取り痕。面縦位の撫で整形。篋描き文字瓦「辛子三」(凸面)。	吉井系
17-8 20 瓦-860	瓦 女 瓦	上層 瓦	厚 1.9	白色微粒子	中性焰	浅黄	一枚作り。凹面布目擦り消し・粘土板剥ぎ取り痕。凸面撫で整形後縄叩き整形。側部面取り2回・端部面取り2回。篋描き文字瓦「二」(凹面)。	笠懸系
18-1 20 瓦-861	瓦 男 瓦	上層 瓦	厚 1.6	白色鉾物粒子	還元焰	灰	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。側部面取り1回・端部面取り1回。凹面粘土板剥ぎ取り痕。篋描き文字瓦「家」(凸面)。	吉井系
18-2 20 瓦-862	瓦 女 瓦	上層 瓦	厚 1.8	白色鉾物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。側部面取り2回・端部面取り2回。自然軸付着。篋描き文字瓦「大家」(凸面)。	吉井系
18-3 20 瓦-864	瓦 女 瓦	上層 瓦	厚 1.8	白色鉾物粒子 白色粒子	還元焰	灰黄	一枚作り。凸面撫で整形。側部面取り3回・端部面取り2回。篋描き文字瓦「大」(凸面)。	吉井系
18-4 20 瓦-865	瓦 女 瓦	上層 瓦	厚 2.5	白色鉾物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。側部面取り4回・端部面取り3回。篋描き文字瓦「大」(凸面)。	吉井系
18-5 20 瓦-863	瓦 女 瓦	上層 細片	厚 1.8	夾雑物殆どなし	還元焰 軟質	白黄	一枚作り。凸面縄叩き(密)。篋描き文字瓦「大」か(凹面)。	秋間系
18-6 20 瓦-866	瓦 女 瓦	埋土内 瓦	厚 1.8	白色鉾物粒子	中性焰 か	黄灰	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。篋描き文字瓦「長立か口衣立」(凸面)。	吉井系
18-7 20 瓦-867	瓦 女 瓦	上層 破片	厚 2.0	白色鉾物粒子 白色粒子	還元焰	灰白	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。端部面取り1回。篋描き文字瓦「大」か(凸面)。	吉井系
18-8 20 瓦-868	瓦 女 瓦	上層 破片	厚 1.9	白色鉾物粒子 白色粒子	還元焰	褐灰	一枚作りか。凸面木目叩き後縦位の撫で整形。側部面取り2回。篋描き文字瓦「田」(凸面)。	吉井・藤岡系
19-1 21 瓦-869	瓦 女 瓦	上層 破片	厚 2.5	白色鉾物粒子 白色粒子	還元焰	灰	一枚作りか。凸面縦位の撫で整形。側部面取り2回。篋描き文字瓦「伴」か(凸面)。	吉井系
19-2 21 瓦-870	瓦 女 瓦	上層 破片	厚 1.7	白色鉾物粒子 白色粒子	中性焰	鈍橙	一枚作りか。凸面縦位の削り整形。篋描き文字瓦「生」の左文字(凹面)。	吉井系
19-3 21 瓦-871	瓦 女 瓦	上層 破片	厚 1.4	白色鉾物粒子 透明鉾物粒子	還元焰	白灰	一枚作りか。凸面縦位の撫で整形。篋描き文字瓦「不詳」(凸面)。	吉井・藤岡系か乗附系
19-4 21 瓦-872	瓦 女 瓦	上層 瓦	厚 1.9	白色鉾物粒子 白色粒子	還元焰 軟質	黄灰	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。側部面取り3回。篋描き文字瓦「成」(凸面)。	吉井系
19-5 21 瓦-873	瓦 女 瓦	上層 破片(細片)	厚 2.4	白色微粒子 白色粒子	還元焰	暗灰	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。篋描き文字瓦「大」か(凸面)。	吉井系
19-6 21 瓦-874	瓦 女 瓦	上層 瓦	厚 2.6	白色鉾物粒子 白色粒子	酸化焰	橙	一枚作りか。凹面粘土板剥ぎ取り痕。凸面縦位の撫で整形。篋描き文字瓦「子」(凹面)。	吉井系
19-7 21 瓦-875	瓦 女 瓦	上層 破片	厚 1.6	白色微粒子 白色鉾物粒子	還元焰	灰	一枚作り。凸面不定の撫で整形。側部面取り4回。粘土板剥ぎ取り痕。篋描き文字瓦「丈」か(凸面)。	笠懸系か
19-8 21 瓦-876	瓦 女 瓦	上層 細片	厚 1.8	白色鉾物粒子 白色粒子	還元焰	暗灰	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。粘土板剥ぎ取り痕。側部面取り1回。篋描き文字瓦「t」(凸面)。	吉井系
20-1 21 瓦-877	瓦 女 瓦	上層 瓦	厚 1.8	夾雑物殆どなし(肉眼)。	還元焰 軟質	白灰	一枚作り。凸面縄叩き(密)。凹面粘土板剥ぎ取り痕。側部喰出し段有り。篋描き文字瓦「大」か(凹面)。	秋間系
20-2 21 瓦-878	瓦 女 瓦	上層 破片	厚 2.0	白色鉾物粒子 白色粒子	還元焰	暗灰	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。端部面取り2回。篋描き文字瓦「不詳」(凸面)。	吉井系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
20-3 21 瓦-879	瓦 女 瓦	覆土内 ¼	厚 1.8	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め		桶巻き造り。凹面粘土板剥ぎ取り痕。凸面轆轤整形後縄叩き(密)。側部面取り3回。篋描き文字瓦「不詳」(凹面)。	吉井系
20-4 21 瓦-880	瓦 女 瓦	埋土内 ¼	厚 2.0	白色粒子 透明鉍物粒子	還元焰	灰褐	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。側部面取り3回・端部面取り2回。篋描き文字瓦「不詳」(凹面)。	吉井系
20-5 21 瓦-881	瓦 女 瓦	上層 破片	2.3	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰	一枚作り。凹面粘土板剥ぎ取り痕・粘土板剥ぎ取り痕。凸面縦位の撫で整形。篋描き文字瓦「不詳」(凸面)。	吉井系
20-6 21 瓦-882	瓦 女 瓦	上層 破片	厚 2.2	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰白	桶巻き作り。凹面模骨痕。粘土板剥ぎ取り痕。凸面轆轤整形痕。側部面取り3回。端部面取り2回。篋描き文字瓦「判読不能」(★面)。	吉井系
20-7 22	瓦 男 瓦	上層 破片	厚 2.5	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰		半截作り。凸面轆轤整形。側部面取り3回・端部面取り2回。玉縁接合はA類。	吉井系
20-8 22	瓦 玉縁付男 瓦	上層 破片	厚 2.2	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰	半截作り。凸面縄叩き(密)。側部面取り2回・端部面取り2回。玉縁接合はA類。	吉井系
20-9 22 瓦-883	瓦 瓦製円盤 (女瓦)	覆土内 破片	厚 2.1	白色鉍物粒子	還元焰 焼締め	灰	桶巻き造り。凸面轆轤整形。凸面模骨痕。篋描き文字瓦判読不能(凹面)。	吉井系
21-1 22	瓦 女 瓦	上層 破片	厚 1.4	白色粒子 黒色粒子	還元焰	灰	紐作り。凸面轆轤整形。側部面取り3回。	乗附系
21-2 22	瓦 男 瓦	上層 破片	厚 2.2	白色微粒子 白色鉍物粒子	還元焰		紐作り。凸面轆轤整形。後正格子叩き。側部面取り2回。	秋間系か 乗附系
21-3 22	瓦 男 瓦	上層 破片	厚 1.8	黒色粒子 白色微粒子	還元焰 焼締め	灰白 白灰	半截作り。凸面縄叩き整形(密)後縦位の撫で再整形。側部面取り2回・端部面取り1回。布目密。	秋間系
21-4 22	瓦 男 瓦	上層 破片	厚 1.5	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰白	半截作り。凸面縄叩き整形(密)後轆轤再整形。粘土板剥ぎ取り痕。側部面取り3回。	秋間系
21-5 22	瓦 男 瓦	上層 破片	厚 1.9	白色鉍物粒子 白色微粒子	還元焰	灰	半截作り。凸面縄叩き整形(密)後轆轤再整形。側部面取り2回・端部面取り3回。凹面粘土板剥ぎ取り痕。	吉井系
21-6 23	瓦 男 瓦	上層 破片	厚 2.0	白色微粒子	還元焰	灰	半截作り。凸面轆轤整形。凹面粘土板剥ぎ取り痕。側部面取り2回・端部面取り1回。	笠懸系
21-7 22	瓦 男 瓦	上層 破片	厚 1.9	白色微粒子 黒色粒子	還元焰		半截作り。凸面轆轤整形。側部面取り1回・端部面取り1回。	笠懸系
21-8 22	瓦 男 瓦	上層 破片	厚 1.4	黒色粒子 白色微粒子	還元焰 焼締め	暗灰	半截作り。凸面轆轤整形。側部面取り3回・端部面取り1回。	笠懸系
21-9 22	瓦 男 瓦	上層 破片	厚 1.5	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	半截作り。凸面轆轤整形。側部面取り1回・端部面取り1回。	笠懸系
22-1 22	瓦 男 瓦	上層 ¼	厚 1.8	黒色粒子	還元焰	黄灰	半截作り。凸面轆轤整形。側部面取り2回。	秋間系
22-2 22	瓦 男 瓦	上層 破片	厚 1.5	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰色	半截作り。凸面轆轤整形。凹面布合せ目痕。側部面取り2回・端部面取り2回。	秋間系
22-3 22	瓦 男 瓦	上層 覆土内 ¼	厚 1.7	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	褐灰	半截作り。凸面羽状の撫で整形。側部面取り4回・端部面取り2回。	吉井系
22-4 22	瓦 男 瓦	No164 ¼	厚 1.9	白色鉍物粒子 白色粒子 黒色粒子	還元焰 並質	灰	半截作り。凸面轆轤整形。側部面取り3回。粘土板接合は「S」。	吉井系
23-1 23	瓦 女 瓦	上層 破片	厚 2.2	白色鉍物粒子 白色微粒子 赤褐色粒子	還元焰	黒灰	一枚作りか。凹面粘土板剥ぎ取り痕。凸面平行叩き。端部面取り2回。	乗附系か
23-2 23	瓦 女 瓦	上層 破片	厚 2.5	白色微粒子	還元焰	褐灰	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面木目叩き。側部面取り2回・端部面取り2回。	笠懸系
23-3 23	瓦 女 瓦	上層 破片	厚 1.2	夾雑物特に目 立たない。	還元焰 焼締め	灰白	桶巻き造りか。凹面模骨痕。凸面平行叩き。端部面取り1回。自然釉付着。	不詳
23-4 23	瓦 女 瓦	上層 破片	厚 2.1	白色微粒子 細粒砂	還元焰	灰白	一枚作り。凸面平行叩き。側部面取り4回・端部面取り1回。	笠懸系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
23-5 23	瓦 女瓦	上層 瓦	厚 1.5	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	一枚作り。凹面布目擦り消し。両面粘土板剥ぎ取り痕。側部面取り2回・端部面取り2回。	笠懸系
23-6 23	瓦 女瓦	上層 破片	厚 1.7	微粒砂	酸化焰	橙	一枚作り。両面粘土板剥ぎ取り痕。凸面木目叩き。側部面取り2回。	笠懸系か 乗附系
24-1 23	瓦 女瓦	埋土内 上層 破片	—	白色微粒子 黒色粒子	酸化焰 硬質	灰	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面撫で整形後斜格子叩き整形。	笠懸系
24-2 23	瓦 女瓦	上層 破片	厚 1.6	白色微粒子 黒色鉱物粒子	酸化焰 硬質	灰	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面撫で整形後正格子叩き整形。	笠懸系
24-3 24	瓦 女瓦	上層 覆土内 破片	厚 1.0	白色微粒子	酸化焰 焼締め	鈍褐	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面撫で整形後斜格子叩き整形。側部面取り3回。	笠懸系
24-4 24	瓦 女瓦	上層 破片	厚 2.2	白色微粒子 微粒雲母	還元焰 軟質	灰白	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面撫で整形後斜格子叩き整形。側部面取り2回・端部面取り2回。	笠懸系
24-5 24	瓦 女瓦	埋土内 上層 破片	厚 2.3	白色微粒子 黒色鉱物粒子	酸化焰 か	明黄褐	一枚作り。凹面粘土板剥ぎ取り痕。凸面撫で整形後正格子叩き。	笠懸系
24-6 24	瓦 女瓦	埋土内 上層 破片	厚 1.4	白色微粒子 微粒雲母 黒色粒子	還元焰 焼締め	灰	桶巻き造り。凹面粘土板剥ぎ取り痕。模骨痕？。凸面斜格子叩き(密)。側部面取り3回。	雷電山系
24-7 24	瓦 女瓦	埋土内 上層 破片	厚 1.6	白色鉱物粒子 白色微粒子	還元焰 並質	灰白	一枚作り。凹面寄木痕。凸面不整格子叩き。側部面取り2回・端部面取り2回。	秋間系
24-8 24	瓦 女瓦	覆土内 上層 覆土内	厚 1.7	白色鉱物粒子 白色微粒子	還元焰 硬質	黄灰	一枚作り。凹面粘土板剥ぎ取り痕。凸面不整格子叩き。側部面取り1回。側部喰出し段有り。	秋間系
24-9 24	瓦 女瓦	埋土内 上層 破片	厚 1.5	白色微粒子 微粒雲母	還元焰 並質	灰黄	一枚作り。凸面斜格子叩き。側部面取り2回。	吉井・藤岡系
25-1 24	瓦 女瓦	上層 破片	厚 1.6	白色微粒子 透明鉱物粒子	酸化焰 か	黄橙	一枚作り。凹面布目擦り消し・粘土板剥ぎ取り痕。凸面縄叩き。側部面取り2回・端部面取り2回。	笠懸系
25-2 24	瓦 女瓦	1号井戸 東 覆土内 破片	厚 1.6	白色微粒子 透明鉱物粒子	還元焰	黒灰	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面縄叩き(単)。端部面取り3回。	笠懸系
25-3 24	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 1.7	白色微粒子 白色鉱物粒子 透明鉱物粒子	還元焰 焼締め	灰	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面縄叩き。側部面取り3回。	笠懸系
25-4 24	瓦 女瓦	上層 破片	厚 2.6	白色微粒子 赤褐色粒子	中性焰 か	灰黄	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面撫で整形後縄叩き。側部面取り2回・端部面取り2回。	笠懸系
25-5 25	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.8	黒色粒子	還元焰	黄灰	一枚作り。凹面寄木痕。凸面縄叩き(密)(T字状)。側部面取り3回・端部面取り1回。	秋間系
25-6 24	瓦 女瓦	上層 破片	厚 2.0	白色微粒子 黒色粒子	還元焰 焼締め	灰	一枚作り。凹面寄木痕。凸面縄叩き(密)(T字状)。凸面離砂痕有り。側部面取り3回・端部面取り2回。	秋間系
26-1 24	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 2.3	黒色粒子	還元焰 焼締め	灰	一枚作り。凹面寄木痕。凸面縄叩き(密)(T字状)。両面離砂痕有り。側部面取り4回・端部面取り2回。	秋間系
26-2 25	瓦 女瓦	上層 細片	厚 1.2	白色微粒子	還元焰	白灰	一枚作り。凸面縄叩き(密)。凹面布目擦り消し(一部)。側部面取り3回・端部面取り1回。布目密。	秋間系
26-3 25	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.4	白色粒子 黒色粒子 白色鉱物粒子	還元焰 焼締め	暗灰	桶巻き作り。凹面模骨痕。粘土板剥ぎ取り痕。凸面縄叩き(密)整形後轆轤撫での再整形。凸面布目付着。側部面取り3回・端部面取り2回。	秋間系か
26-4 25	瓦 女瓦	上層 破片	厚 1.5	白色鉱物粒子 白色粒子 黒色粒子	還元焰 焼締め	暗灰	桶巻き造り。凹面布合せ目痕・模骨痕。凸面轆轤整形後縄叩き(密)。	乗附系

## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
26-5 25	瓦 女 瓦	覆土内 細片	厚 1.8	白色粒子 白色鉍物粒子	酸化焰 軟質	橙	一枚作りか。凸面縄叩き(密)後撫消整形。 後再び縄叩き(密)整形。	乗附系
26-6 25	瓦 女 瓦	上層 破片	厚 1.1	白色鉍物粒子	還元焰	黄灰 黒灰	作り不詳。凸面縄叩き(密)。端部面取り1回。	吉井系
26-7 25	瓦 女 瓦	覆土内 破片	厚 1.9	白色鉍物粒子 白色微粒子	還元焰	灰	桶巻き作り。凹面模骨痕。粘土板剥ぎ取り痕。 凸面縄叩き(密)整形後轆轤撫での再整形。	吉井系
26-8 25	瓦 女 瓦	上層 破片	厚 1.3	白色鉍物粒子	還元焰	黄灰	桶巻き造りか。凹面粘土板剥ぎ取り痕。凸面 縄叩き(密)縦位の撫で整形。側部面取り1 回・端部面取り1回。	吉井系
26-9 25	瓦 女 瓦	上層 破片	厚 2.3	白色粒子 白色鉍物粒子	還元焰	灰	桶巻作り。凹面模骨痕。粘土板剥ぎ取り痕。 凸面縄叩き(密)整形後轆轤撫での再整形。 凸面に布目付着。側部面取り2回・端部面取 り2回。	吉井系
27-1 26	瓦 女 瓦	上層 破片	厚 1.6	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	褐灰	桶巻作り。凹面模骨痕。凹面布目擦り消し。 凸面縄叩き(密)整形後轆轤撫での再整形。 側部面取り4回・端部面取り1回。	吉井系
27-2 25	瓦 女 瓦	覆土内 破片	厚 1.7	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰褐	桶巻作り。凹面模骨痕。布目の篋撫で消し。 凸面縄叩き(密)整形後轆轤撫での再整形。 側部面取り2回・端部面取り3回。	吉井系
27-3 25	瓦 女 瓦	上層 覆土内 破片	厚 1.6	白色鉍物粒子 微粒雲母	還元焰	灰黄	紐作り。凸面縄叩き(密)。凹面縦位の撫で整 形。側部面取り4回・端部面取り2回。	北毛系か 乗附系
27-4 25	瓦 女 瓦	上層 破片	厚 2.3	白色鉍物粒子 黒色鉍物粒子 白色粒子	酸化焰	黄橙	桶巻作り。凹面模骨痕。粘土板剥ぎ取り痕。 凸面縄叩き(密)整形後轆轤撫での再整形。 側部面取り3回。	吉井・藤 岡系
27-5 26	瓦 女 瓦	覆土内 上層 破片	厚 2.3	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 硬質	灰白	一枚作り。凸面縦位の撫で整形・凹面布目擦 り消し。側部面取り2回。端部面取り2回。	笠懸系
27-6 26	瓦 女 瓦	覆土内 上層 破片	厚 2.0	白色鉍物粒子 半透明鉍物粒 子 白色粒子	還元焰	灰白	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。側部面取り 1回。両面粘土板剥ぎ取り痕。	乗附系
28-1 26	瓦 女 瓦	上層 破片	厚 2.2	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 軟質	褐灰	紐作り。凹面横撫で。凸面轆轤整形。側部面 取り3回・端部面取り2回。	乗附系か 北毛系
28-2 26	瓦 女 瓦	覆土内 上層 破片	厚 2.1	白色微粒子 微粒雲母	還元焰 焼締め	灰褐	桶巻き造り。凹面模骨痕。凸面板叩き。側部 面取り2回・端部面取り2回。	乗附系
28-3 26	瓦 女 瓦	上層 破片	厚 1.4	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰	桶巻作り。凹面模骨痕。粘土板剥ぎ取り痕。 側部面取り3回・端部面取り3回。	乗附系
28-4 26	瓦 女 瓦	上層 破片	厚 1.6	白色鉍物粒子 白色粒子 透明鉍物粒子	還元焰 軟質	灰	紐作り。凹面横撫で。凸面縦位の撫で整形。 側部面取り1回・端部面取り1回。	北毛系
28-5 26	瓦 女 瓦	覆土内 破片	厚 2.5	白色鉍物粒子 黒色粒子 白色粒子	還元焰 硬質	灰	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。側部面取り 6回・端部面取り2回。	乗附系
28-6 26	瓦 女 瓦	上層 破片	厚 1.7	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り。凹面縦位の撫で。凸面轆轤整形。側 部面取り2回。	北毛系
28-7 26	瓦 女 瓦	覆土内 上層 破片	厚 1.8	白色微粒子 黒色粒子	還元焰 硬質	灰	一枚作り。両面粘土板剥ぎ取り痕。凸面縦位 の撫で整形。凹面寄木痕。	乗附系
28-8 26	瓦 女 瓦	埋土内 上層 破片	厚 2.0	白色鉍物粒子 白色粒子 微粒雲母	還元焰 並質	灰白	紐作り。凹面撫で整形。面縦位の撫で整形。 側部面取り3回・端部面取り1回。	北毛系
29-1 27	瓦 女 瓦	埋土内 上層 破片	厚 1.3	白色鉍物粒子 白色粒子 微粒雲母	還元焰 軟質	灰黄	桶巻作り。凹面模骨痕。粘土板剥ぎ取り痕。 凸面轆轤整形。側部面取り2回・端部面取り 4回。	吉井系か 笠懸系
29-2 26	瓦 女 瓦	1号井戸 覆土内 破片	厚 2.3	白色鉍物粒子 白色粒子 黒色粒子	還元焰 並質	灰白	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。側部面取り 2回・端部面取り1回。	吉井・藤 岡系
29-3 27	瓦 女 瓦	覆土内 上層 破片	厚 3.0	白色鉍物粒子 黒色粒子	還元焰 硬質	灰白	一枚作り。凹面粘土板剥ぎ取り痕。凸面縦位 の撫で整形。側部面取り4回・端部面取り2 回。	吉井・藤 岡系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
29-4 26	瓦 女瓦	上層 破片	厚 1.8	白色鉱物粒子 白色粒子	還元焰 硬質	灰白	紐作り。凹面横撫で。凸面轆轤整形。側部面取り3回・端部面取り2回。	北毛系
29-5 27	瓦 女瓦	覆土内 上層 破片	厚 2.0	白色鉱物粒子 白色粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り。凹面横撫で。凸面轆轤整形。	北毛系
29-6 27	瓦 女瓦	覆土内 上層 破片	厚 1.5	白色鉱物粒子 白色粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り。凹面横撫で。凸面轆轤整形。	北毛系
29-7 27	瓦 女瓦	覆土内 上層 破片	—	白色鉱物粒子 白色粒子 黒色粒子	還元焰 軟質	灰	一枚作りか。凸面側に植物の押圧痕がある。	乗附系
29-8 27	瓦 男瓦	埋土内 上層 破片	厚 1.1	黒色粒子 白色鉱物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰	半載作り。凸面縦位の撫で整形。側部面取り4回。	乗附系
30-1 18	礫 器	上層 完存	長 4.3 幅 3.1 厚 2.7	粗粒安山岩	—	—	特徴的な使用痕は認められない。	重61g
30-2 18	礫 擦石	上層 完存	長 12.0 幅 5.0 厚 3.3	ホルンフェルス	—	—	平坦面が使用に伴ない磨滅する。	重378g
30-3 18	礫 擦石	上層 完存	長 13.6 幅 7.5 厚 3.4	粗粒安山岩	—	—	平坦面が使用に伴ない磨滅する。	重634g
30-4 18	礫 擦石	上層 完存	長 18.2 幅 5.6 厚 3.9	石英閃緑岩	—	—	平坦面が使用に伴ない磨滅する。	重738g

染谷川河川敷3区1井戸

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
31-1 17	土師器 坏	1井戸南 砂層 破片	口 (14.0)	微粒雲母 デイスait (F1類)	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は篋状工具の横撫でを施す。口縁直下に型膚を残す。底部は篋削りを施す。器内面に放射状暗文を施す。	藤岡系
31-2 17	須恵器 坏	周辺砂層 破片	口 (12.6) 底 (7.8) 高 3.6	黒色粒子 白色粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)。底部は回転篋削り。	秋間系か 乗附系
31-3 17	須恵器 蓋 摘み部	周辺砂層 破片	摘 4.8	白色微粒子	還元焰 焼締め	明青灰	轆轤成形(右回転?)。周辺を打ち欠いている。	乗附系
31-4 17	須恵器 盖	周辺砂層 破片	—	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)。	秋間系
31-5 17	須恵器 長頸壺	周辺砂層 破片	肩 18.0	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	白灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間系
31-6 17	須恵器 甕	周辺砂層 破片	頸 12.4	白色微粒子 シルト粗粒子 白色鉱物粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。	乗附系
31-7 17	須恵器 壺	周辺砂層・上層 破片	厚 0.7	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰白	紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間系

染谷川河川敷3区1井戸

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
32-1 27	須恵器 横瓶	周辺砂層 破片	最大径 25.3 厚0.5~0.8	白色鉱物粒子 白色粒子	還元焰	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。	搬入品 (東海)
32-2 27	須恵器 甕	埋土内 底部片	底 11.2	白色鉱物粒子 白色微粒子	還元焰	黄灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。底面に窯印「X」が篋描きされている。	乗附系
32-3 27	須恵器 甕	埋土内 破片	底 12.0	白色鉱物粒子 白色微粒子	還元焰 並質	灰褐	紐作り後轆轤整形(右回転)。	乗附系



遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
33-1 27 瓦-897	瓦 鏡瓦	埋土内 破片	厚 2.0	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰	一本作り。凹面粘土板剥ぎ取り痕。凸面縦位の撫で整形。	吉井系
33-2 27 瓦-884	瓦 男瓦	埋土内 1/4	厚 1.6	白色粒子 白色鉍物粒子	還元焰	外・黒断・橙	半載作り。凸面縦位の撫で整形。側面取り3回。篋描き文字瓦「十」か(凹面)。	吉井系
33-3 27 瓦-885	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.7	白色微粒子	酸化焰 並質	浅黄橙	一枚作り。粘土板剥ぎ取り痕。凸面撫で整形後正格子叩き整形。端面取り2回。刻印文字瓦「雀」(凸面)。	笠懸系
33-4 27	瓦 男瓦	上層 破片	厚 1.7	黒色粒子 白色粒子	還元焰 軟質	白灰	半載作り。凸面縦位の撫で整形。凸面正格子叩き。凹面粘土板剥ぎ取り痕。側面取り3回。	秋間系
33-5 28	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.4	白色微粒子	還元焰 硬質	暗灰	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面撫で整形後正格子叩き整形。	笠懸系
33-6 27	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 2.4	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	一枚作り。両面粘土板剥ぎ取り痕。凸面粗い平行叩き。	笠懸系
33-7 28	瓦 女瓦	上層 1/4	厚 1.5	白色鉍物粒子 透明鉍物粒子	還元焰 焼締め	灰	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面縄叩き(密)。側面取り3回・端面取り1回。	笠懸系
34-1 28	瓦 女瓦	覆土内 1/4	厚 1.8	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面縄叩き(密)。端面取り1回。	笠懸系
34-2 28	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.6	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面縄叩き(密)。側面取り3回。	笠懸系
34-3 28	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.7	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰・橙	作り不詳。凸面縦位の撫で整形。(縄叩き(密)後か)。凹面粘土板剥ぎ取り痕。	吉井系
34-4 27	瓦 女瓦	上層 破片	厚 1.7	白色鉍物粒子 白色粒子 デイスait	還元焰 硬質	灰黄	桶巻き造りか。凹面模骨痕凸面轆轤整形・縄叩き(密)後撫で整形。凸面に布目圧痕が顕著に認められる。	吉井系
34-5 28	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.9	細粒砂 透明鉍物粒子	還元焰 硬質	外・黒断・白灰	桶巻き造り。凹面模骨痕。凸面縄叩き。側面取り2回。	中之条系か
34-6 28	瓦 熨斗瓦か	覆土内 破片	厚 1.7	微粒雲母 白色鉍物粒子	還元焰	黒灰	桶巻き造り。凹面模骨痕。凸面轆轤整形。	藤岡系
35-1 28 瓦-898	瓦 鏡瓦	埋土内 瓦当面1/4	厚 2.3	白色微粒子	還元焰 焼締め	黒灰	一本作り。単弁5葉蓮華文。中房の子葉は1+4と考えられる。男瓦部は半載作りか。	笠懸系

染谷川河川敷3区3号井戸

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
36-1 29	土師器 坏	周辺砂層 破片	口 (14.0)	微粒雲母 黒色鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り。口縁部直立気味。口縁直下に型膚を残す。底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系
36-2 29	土師器 坏	周辺砂層 破片	口 (14.0)	微粒雲母 白色鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
36-3 29	土師器 坏	周辺砂層 破片	口 (14.0)	微粒雲母 白色鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
36-4 29	土師器 坏	周辺砂層 破片	口 (13.0)	白色鉍物粒子 微粒雲母	酸化焰	橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、体部・底部は篋削り整形。口縁部器内面放射状暗文を施す。	藤岡系
36-5 29	須恵器 短頸壺	周辺砂層・2区 セクション ンペルト カーボン 層 破片	口 (9.4)	黒色粒子 白色粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間系
36-6 29	須恵器 甕	周辺砂層 破片	口 (16.0)	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間系
36-7 29	須恵器 坏	周辺砂層 破片	口 (14.0)	白色微粒子	硬質 中性焰	灰褐	轆轤成形(右回転)。	秋間系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
36-8 28	須 惠 器 甕か	1・3井戸 周辺砂層 破片	厚 0.8	白色鉍物粒子 白色粒子 黒色粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り。叩き整形（外面平行叩き・内面宛具は青海波文）。底部に脚（高台）を有する。	乗附系
36-9	施釉陶器 灰 釉 碗	周辺砂層 破片	底 ( 6.2)	密	良好	灰白	轆轤成形（右回転）。付高台。施釉は不詳。	

染谷川河川敷 3 区 3 号井戸

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
37-1 29	土 師 器 坏	砂層 破片	口 (16.0)	バミス 黒色鉍物粒子	酸化焰	鈍赤褐	型作り成形。口縁部は強く外傾し、体部から底部にかけては球体状を呈する。口縁部直下に型膚を残す。	甲種粘土
37-2 29	土 師 器 坏	砂層 破片	口 (14.0)	赤褐色粒子 白色鉍物粒子	酸化焰	黄橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
37-3 29	土 師 器 坏	埋土内 破片	口 10.2	白色微粒子 黒色鉍物粒子 微粒長石	酸化焰	橙	型作り。口縁部外傾気味。底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
37-4 29	土 師 器 坏	周辺砂層 破片	口 (12.8)	黒色鉍物粒子 微粒長石	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系
37-5 29	土 師 器 坏	周辺砂層 破片	口 (14.0)	微粒長石	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
37-6 29	土 師 器 坏	砂利層 破片	口 (13.5)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り。口縁部直立気味。底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系
37-7 29	土 師 器 坏	埋土内 破片	口 (13.9)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。器内面に有機質が付着する。	藤岡系
37-8 29	土 師 器 坏	埋土内 破片	口 (15.0)	白色微粒子	酸化焰	橙	型作り。口縁部内湾気味。体部は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系
37-9 28	土 師 器 坏	3 井戸 破片	口 (17.0)	微粒長石 白色微粒子 雲母石英片岩	酸化焰	黄橙	型作り成形。内・外面器面の風化が著しい。	藤岡系
37-10 29	土 師 器 甕	埋土内 破片	口 (23.6)	微粒長石 細粒砂	酸化焰	橙	口縁部は外傾する。紐作り。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	藤岡系
37-11 29	須 惠 器 墨書土器 坏	周辺砂層 破片	底 ( 9.0)	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形(右回転)。底部は回転篋削り。底面に墨書「法」か。	秋間系
37-12 28	須 惠 器 坏	埋土内 破片	口 (12.0) 底 ( 7.4) 高 ( 4.0)	黒色粒子 白色粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形（右回転）、底部は回転糸切り。	秋間系
37-13 28	須 惠 器 坏	埋土内 ほぼ完形	口 12.5 底 6.0 高 4.0	黒色鉍物粒子 微粒雲母	還元焰 並質	白灰	轆轤成形（右回転）、底部は回転糸切り。	吉井系か
37-14 29	須 惠 器 瓶類の口 縁部か坏	覆土内 埋土内 破片	口 (14.9)	白色微粒子	還元焰	青灰	轆轤成形（右回転）。	秋間系
37-15 29	須 惠 器 坏	埋土内 破片	口 (16.0)	黒色粒子 黒色鉍物粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形（右回転）。	秋間系
37-16 28	須 惠 器 坏	砂利層 底部	底 8.4	黒色粒子	還元焰 焼締め	白灰	轆轤成形（右回転）。底部は回転篋削り。	乗附系か
37-17 28	須 惠 器 坏	埋土内 1/2	底 9.0	白色粒子 黒色粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形（右回転）、底部は回転糸切り。	秋間系
37-18 28	須 惠 器 坏	埋土内 破片	底 ( 9.4)	白色粒子 黒色粒子	還元焰	灰	轆轤成形（右回転）、底部は回転糸切り。	秋間系
37-19 28	須 惠 器 塊	埋土内 1/2	底 7.4	微粒雲母	還元焰 硬質	灰	轆轤成形（右回転）。付高台。	藤岡系
37-20 29	須 惠 器 塊	埋土内 破片	底 ( 7.6)	微粒雲母 白色微粒子	酸化焰 並質	外・黒褐 内・鈍橙	轆轤成形（右回転）。付高台。	藤岡系
37-21 28	須 惠 器 塊	埋土内 底部	底 7.6	黒色粒子	還元焰	灰	轆轤成形（右回転）。付高台。	秋間系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
37-22 28	須恵器 壺	埋土内 底部	底 (7.6)	黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子	酸化焰	鈍橙	轆轤成形(右回転)。付高台。目込みに宝相華 状の暗文を施す。	北毛 (月夜野) 系
37-23 29	須恵器 坏蓋	砂層 破片	口 (19.2)	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形(右回転)。	秋間系
37-24 29	須恵器 壺	埋土内 破片	口 (12.2)	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間系
37-25 29	須恵器 壺	埋土内 破片	口 (16.2)	白色微粒子	還元焰 焼締め	暗灰黄	紐作り後轆轤整形(右回転)。	乗附系
38-1 29	須恵器 甕	砂り層 破片	厚 0.8	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。	乗附系
38-2	須恵器 瓶類	埋土内 破片	厚 0.8	白色粒子 黒色粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。外面自然釉付着。	搬入品 (湖西) か
38-3 29	須恵器 甕	埋土内 破片	厚 0.6	白色鉍物粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具 は不詳)後轆轤再整形。	乗附系
38-4 29	須恵器 甕	7土坑 2区集石 3井戸 破片	厚 1.4	白色微粒子	還元焰 並質	灰褐	紐作り後轆轤整形(右回転)。3本1単の波状 文を2段に廻らす。	吉井・藤 岡系か 乗附系
38-5 29	須恵器 甕	埋土内 破片	厚 1.3	白色鉍物粒子 黒色粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具 は青海波文)。	乗附系
38-6 29	須恵器 壺	埋土内 破片	底 (12.0)	白色鉍物粒子	還元焰 焼締め	暗灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。器外面は平行叩 きによる整形。	乗附系か 吉井系
38-7 29	須恵器 羽釜	覆土内 破片	口 (24.0) 鏝 (27.6)	白色鉍物粒子 細粒砂	還元焰 並質	鈍黄橙	口縁部は内傾する。紐作り後轆轤整形(右回 転)。鏝は貼り付け。	吉井型羽 釜 甲壺 種伊類
38-8 29	円盤	砂り層 完形	長 3.6 幅 3.6 厚 0.7	黒色鉍物粒子 細粒砂	酸化焰	橙	土師器甕胴部片を転用している。全体上磨滅 している感があるが、縁部の割れ口はきれいに 磨かれている。	
38-9 29	施釉陶器 灰釉碗	埋土内 底部	底 (5.6)	密	良好	白灰	轆轤成形(右回転)。付高台。施釉は不詳。	
38-10 29	石製品 紡錘車	埋土内 部分欠損	径 5.0 孔径 0.8	砥沢石	—	—	側部の面取り整形痕が顕著に残る。	500g
39-1 29	石製品 置砥	埋土内 瓦	長 10.2 幅 6.8 厚 5.8	粗粒安山岩	—	—	4面以上の使用面が認められる。規模の点か ら置砥と考えられる。	重600g
39-3 29	石製品 手持砥石	覆土内 一部欠損	長 7.8 幅 1.9 厚 1.3	砥沢石	—	—	使用に共なる磨滅から手持砥と考えられる。	重500g
39-4 30 瓦-831	瓦 鏡瓦	上層 破片	厚 1.9	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰	瓦当意匠は不分明。男豆部は半載作りか。凹 面粘土板剥ぎ取り痕。側部面取り2回。	
39-5 30 瓦-834	瓦 字瓦	上層 女瓦部瓦	厚 2.6	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰	瓦当意匠は不詳。女瓦部は一枚作りか。凹面 粘土板剥ぎ取り痕。凸面縦位の撫で整形。側 部面取り4回。	吉井系
39-6 30 瓦-832	瓦 鏡瓦	覆土内 瓦当面 ほぼ完存	面径 15.0	白色鉍物粒子	還元焰 焼締め	灰褐	単弁8葉蓮華文。中房の子葉は1+4。瓦当 部は印籠付。全体的に肉置きは高い。	吉井系
40-1 30 瓦-833	瓦 鏡瓦	埋土内 瓦当面瓦	厚 2.0	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	灰白	単弁8葉蓮華文。弁間に間弁を配する。中房 の子葉は1+4。背面は撫で整形。	秋間系
40-2 30 瓦-835	瓦 字瓦	覆土内 瓦当面瓦	厚 2.8	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	瓦当意匠は右扁行唐草文。外区に珠点を配す る。女瓦部は一枚作り。凹面布目擦り消し凸 面縄叩き・縦位の撫で整形。	笠懸系
40-3 30 瓦-836	瓦 字瓦	上層 瓦当面瓦	厚 3.2	白色微粒子 透明鉍物粒子	還元焰	灰	瓦当意匠は上野国分寺創建統一意匠(笠字第 1型式)。頸は曲線頸。女瓦は一枚作りか。凹 面布目擦り消し。	笠懸系
40-4 30 瓦-837	瓦 字瓦	上層 瓦当面瓦	厚 3.2	白色粒子	還元焰 焼締め	灰黒	瓦当意匠は均整唐草文。頸は曲線頸。頸部に 赤色顔料が遺存する。凹面布目擦り消し。側 部面取り4回。	秋間系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
40-5 30 瓦-838	瓦 宇瓦	覆土内 女瓦部 瓦当部	厚 1.5	白色鉾物粒子 白色粒子	酸化焰	灰赤	右扁行唐草文。段頸。女瓦部は一枚作り。凹面粘土板剥ぎ取り痕。凸面縦位の撫で整形。	吉井系 1号井戸 出土品と 接合
40-6 瓦-839	瓦 宇瓦	上層 破片		白色微粒子	還元焰 焼締め	灰黒	40-4と同一個体。	秋間系
41-1 30 瓦-840	瓦 宇瓦	覆土内 瓦	厚 2.1	半透明鉾物粒子 白色粒子 赤褐色粒子	酸化焰	灰褐	瓦当意匠は重郭文。女瓦部は桶巻き造り。凹面細い竹管状の模骨痕。凸面縄叩き。側部面取り3回。	吉井系
41-2 30 瓦-841	瓦 宇瓦	上層 破片	厚 1.9	白色鉾物粒子	還元焰 焼締め	灰黒	瓦当意匠は不詳。全体に自然釉付着。頸は段頸。女瓦部の作りは不詳。凹面粘土板剥ぎ取り痕。凸縦位の撫で整形。	吉井系
41-3 31 瓦-816	瓦 男瓦	埋土内 瓦	厚 2.3	白色鉾物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	暗灰	半載作り。凸面縦位の撫で整形。側部面取り4回・端部面取り2回。粘土板接合は「S」。篋描き文字瓦「判読不能」(凸面)。	吉井系 布目密
41-4 31 瓦-817	瓦 男瓦	埋土内 破片	厚 2.1	白色鉾物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	暗灰	作り不詳。凸面縦位の篋撫で整形。凹面縦位の撫で整形。篋描き文字瓦「子」(両面)。	吉井系
41-5 31 瓦-818	瓦 男瓦	埋土内 破片	厚 1.9	白色鉾物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	暗灰	半載作り。凸面斜位の撫で整形。側部面取り1回。篋描き文字瓦「子□」(凸面)。	吉井系
41-6 31 瓦-819	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 2.6	白色鉾物粒子 白色粒子	還元焰	黒褐	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。側部面取り3回刻印文字瓦「當」(凸面)。	吉井系
41-7 31 瓦-820	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.6	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	一枚作り。両面粘土板剥ぎ取り痕。凸面斜格子叩き。刻印文字瓦「佐位」(凸面)。	笠懸系
42-1 31 瓦-821	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.9	白色鉾物粒子 白色粒子	還元焰	褐灰	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。側部面取り2回。篋描き文字瓦「伏」(凸面)。	吉井系
42-2 31 瓦-822	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 2.0	白色鉾物粒子 白色粒子 半透明鉾物粒子	還元焰	褐灰	一枚作り。凸面木目叩き。側部面取り4回。篋描き文字瓦「千」(凸面)。	
42-3 31 瓦-823	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 2.2	白色鉾物粒子 白色粒子	還元焰 硬質	灰	半載作りか。凸面縦位の撫で整形。篋描き文字瓦「平」か「本」(凹面)。	吉井系
42-4 32 瓦-824	瓦 女瓦	埋土内 破片	—	白色鉾物粒子 黒色粒子	還元焰 並質	灰	一枚作りか。凹面欠損。凸面縦位の撫で整形。篋描き文字瓦「長」(凸面)。	吉井系
42-5 31 瓦-825	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.7	白色鉾物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰	一枚作り。両面粘土板剥ぎ取り痕。凸面は撫で整形。篋描き文字瓦「手」(凸面)。	吉井系
42-6 32 瓦-826	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 3.0	白色鉾物粒子 白色粒子	還元焰	黒褐	一枚作り。両面粘土板剥ぎ取り痕。凸面縦位の撫で整形。端部面取り2回。篋描き文字瓦「乙」か(凸面)。	吉井系
42-7 32 瓦-827	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.4	白色鉾物粒子 白色粒子	還元焰	褐灰	桶巻き造り。凹面粘土板剥ぎ取り痕・模骨痕。凸面轆轤整形後縦位の撫で整形。篋描き文字瓦「判読不詳」(凸面)。	吉井系
42-8 32 瓦-828	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.6	白色鉾物粒子 透明鉾物粒子 赤褐色粒子	還元焰	橙	紐作り。凹面横位の撫で整形。凸面轆轤整形。篋描き文字瓦「土」か(凹面)。	吉井系か 乗附系
43-1 31 瓦-829	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 2.0	白色鉾物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰	一枚作り。凹面粘土板剥ぎ取り痕。凸面木目叩き後縦位の撫で整形。側部面取り3回。篋描き文字瓦「里」か(凸面)。	吉井系
43-2 32 瓦-830	瓦 女瓦	III破層周 辺 破片	厚 1.5	白色微粒子	還元焰	黒褐	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面縄叩き。側部面取り2回。篋描き文字瓦「判読不能」(凹面)。	笠懸系
43-3 32 瓦-831	瓦 男瓦	上層 破片	厚 1.2	白色鉾物粒子 白色粒子 細円粒砂	還元焰 焼締め	灰	半載作り。凸面縄叩き。凹面布合せ目痕。側部面取り3回。	北毛系 (月夜野 系か)

## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
43-4 32	瓦 男瓦	埋土内 破片	厚 2.0	白色微粒子	還元焰 軟質	黄灰	半截作り。凸面轆轤整形。凹面布合せ目痕。 端部面取り3回。	笠懸系か
43-5 32	瓦 男瓦	埋土内 破片	厚 1.3	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	半截作り。凸面轆轤整形。側部面取り1回。	笠懸系
44-1 32	瓦 男瓦	埋土内 破片	厚 2.2	白色粒子 白色鉱物粒子 デイスイト	酸化焰	鈍褐	半截作り。凸面平行叩き。側部面取り2回。 布目密。	吉井系
44-2 32	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.5	白色鉱物粒子 白色粒子 黒色粒子	還元焰	灰	紐作り。凸面轆轤整形。凹面横位の撫で整形。 側部面取り2回。	乗附系
44-3 32	瓦 男瓦	埋土内 破片	厚 1.8	白色微粒子 デイスイト	酸化焰	黒褐	紐作り。凸面平行叩き。側部面取り1回。	吉井系
44-4 32	瓦 男瓦	埋土内 破片	厚 1.5	白色鉱物粒子 白色粒子 黒色粒子	還元焰	灰	半截作り。凸面轆轤整形。側部面取り2回。 凹面布合せ目痕。	吉井系か 乗附系
44-5 32	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.6	白色鉱物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰	半截作り。凸面縄叩き整形(密)後縦位の撫 で再整形。側部面取り3回。	乗附系か 吉井系
44-6 33	瓦 男瓦	埋土内 破片	厚 1.0	白色鉱物粒子	還元焰 軟質	灰	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。側部面取り 1回。端部面取り3回。	吉井系
44-7 33	瓦 男瓦	埋土内 破片	厚 1.1	微粒雲母 白色微粒子	還元焰 並質	灰黄	半截作り。凸面轆轤整形。側部面取り2回。	吉井・藤 岡系か
45-1 33	瓦 男瓦	埋土内 破片	厚 1.8	白色鉱物粒子 微粒雲母	還元焰 軟質	灰白	半截作りか。凸面粘土板剥ぎ取り痕・縦位の 撫で整形。	吉井・藤 岡系
45-2 33 瓦-899	瓦 宇瓦	埋土内 破片	厚 3.2	白色鉱物粒子 白色粒子	還元焰 並質	外・灰 断・鈍黄橙	半截作りか。凸面縦位の撫で整形。赤色顔料 痕が認められる。	吉井系
45-3 33	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.6	白色微粒子 赤褐色粒子	還元焰 焼締め	断・赤褐 外・灰	一枚作り。凹面粘土板剥ぎ取り痕。凸面縄叩 き(密)。側部に布目及び粘土板剥ぎ取り痕。	秋間系
45-4 33	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.8	白色微粒子 赤褐色粒子	還元焰 (黒色 燻し)	断・赤褐 外・黒褐	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面縄叩き。 端部面取り2回。	笠懸系
45-5 33	瓦 女瓦	埋土内 細片	厚 1.5	白色微粒子	還元焰 焼締め	黒灰	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面縄叩き。 側部面取り2回。	笠懸系
45-6 33	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.6	白色微粒子 石灰岩か	還元焰 焼締め	灰	一枚作り。凸面縄叩き(密)。凹面粘土板剥ぎ 取り痕・布目擦り消し。側部面取り3回・端 部面取り2回。	笠懸系
45-7 33	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.5	白色微粒子 透明鉱物粒子	還元焰 (黒色 燻し)	断・浅黄橙 外・黒褐	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面縄叩き(密) か。側部面取り1回。	笠懸系
46-1 33	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 2.0	白色微粒子 微粒雲母	還元焰 並質	灰	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面撫で整形 後正格子叩き整形。側部面取り2回・端部面 取り1回。	笠懸系
46-2 33	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 2.0	透明鉱物粒子 白色微粒子	酸化焰 並質	浅黄橙	一枚作り。凸面正格子叩き。側部面取り4回・ 端部面取り2回。	笠懸系
46-3 33	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 2.8	白色微粒子 透明鉱物粒子	酸化焰 硬質	橙	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面斜格子叩 き・縦位の寛撫で整形。	笠懸系
46-4 34	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 2.0	白色微粒子	酸化焰 並質	橙	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面粘土板剥 ぎ取り痕・不整格子叩き。側部面取り2回・ 端部面取り2回。	笠懸系
46-5 33	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 2.2	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	一枚作り。凹面布目擦り消し・粘土板剥ぎ取 り痕。凸面木目叩き後縦位の撫で整形。	笠懸系
47-1 34	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.3	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	一枚作り。凹面布目擦り消し・寄木痕。凸面 縦位の撫で整形。側部面取り2回。端部面取 り2回。	笠懸系
47-2 34	瓦 男瓦	埋土内 破片	厚 2.7	白色微粒子	還元焰 並質	灰	半截作り。凸面縦位の寛撫で整形。凹面粘土 板剥ぎ取り痕。	笠懸系
47-3 34	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 2.0	白色鉱物粒子 白色粒子	還元焰	灰	一枚作り。凹面粘土板剥ぎ取り痕。凸面縦位 の撫で整形。後木目叩き(一部)側部面取り 3回・端部面取り2回。	吉井系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 量目 (cm) (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
47-4 34	瓦 女瓦	埋土内 1/4	厚 2.5	白色鉍物粒子 白色粒子 デイスait	酸化焰 並質	橙褐	桶巻作り。凹面模骨痕。粘土板剥ぎ取り痕。 凸面平行叩き。側部面取り3回。	吉井系
47-5 34	瓦 女瓦	埋土内 1/4	厚 2.2	白色鉍物粒子	吉井系	黒灰	桶巻き造りか。凹面布目粗と布目密の二者を 併用する。凸面平行叩き。側部面取り1回。	吉井系
48-1 34	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 2.1	白色鉍物粒子 白色粒子 赤褐色粒子	酸化焰 並質	赤褐	桶巻き造り。凹面模骨痕。凸面平行叩き。側 部面取り3回。	吉井系
48-2 34	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 2.8	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰	桶巻き造り。凹面模骨痕。凸面平行叩き。側 部面取り6回・端部面取り4回。	吉井系
48-3 35	瓦 女瓦	周辺 破層 細片	厚 1.3	白色鉍物粒子	還元焰 硬質	白灰	桶巻き作り。凹面模骨痕。凸面縄叩き(密) 整形後轆轤撫での再整形。	吉井系か
48-4 35	瓦 女瓦	埋土内 1/4	厚 2.5	白色鉍物粒子 デイスait 微粒雲母	還元焰	白灰	桶巻作り。凹面模骨痕。粘土板剥ぎ取り痕。 凸面縄叩き(密)整形後轆轤撫での再整形後 縄叩き(密)の再整形。	吉井・藤 岡系
48-5 34	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 2.4	白色鉍物粒子	還元焰 硬質	灰	桶巻き造りか。凹面布目擦り消し・粘土板剥 ぎ取り痕。凸面縄叩き(密)後縄目撫で消し (轆轤整形か)。側部面取り3回・端部面取り 3回。	吉井系
48-6 35	瓦 女瓦	埋土内 1/4	厚 1.3	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	白灰	桶巻き造り凸面轆轤整形。凹面模骨痕。側部 面取り2回・端部面取り2回。	吉井・藤 岡系
49-1 35	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.7	白色鉍物粒子 デイスait	酸化焰 並質	浅黄橙	紐作り。凹面模骨痕。粘土板剥ぎ取り痕。凸 面欠損。	吉井系
49-2 35	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 2.0	白色鉍物粒子	中性焰	褐灰	桶巻き造り。凹面模骨痕布目擦り消し。凸面 轆轤回転の窺撫で整形。	吉井系
49-3 35	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 3.6	白色鉍物粒子	還元焰 焼締め	黒褐	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。側部面取り 4回・端部面取り2回。両面自然釉付着。	吉井系
49-4 35	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 2.3	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面縦位の撫 で整形。側部面取り4回・端部面取り4回。	吉井系
49-5 35	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.8	微粒雲母 白色鉍物粒子	還元焰	灰	紐作り。凸面轆轤整形後縦位の撫で整形。側 部面取り2回・端部面取り2回。	藤岡系
49-6 35	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 2.4	黒色粒子 白色粒子	還元焰 並質	白灰	桶巻き造りか。凹面模骨痕・粘土板剥ぎ取り 痕。	秋間系
50-1 35	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.5	白色粒子	還元焰 焼締め	外・灰 断・暗 赤褐	一枚作り。凹面寄木痕。凸面縄叩き(密)。自然 釉両面付着。側部面取り1回・端部面取り 1回・側部面取り段有り。	秋間系
50-2 35	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.7	黒色粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰白	一枚作り。凹面粘土板剥ぎ取り痕。凸面縄叩 き(密)側部面取り1回・端部面取り1回・ 側部喰出し段有り。	秋間系
50-3 36	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.8	白色粒子 黒色粒子	還元焰 焼締め	灰	一枚作り。凸面縄叩き(密)T字状。凹面寄 木痕・粘土板剥ぎ取り痕。側部面取り2回・ 端部面取り2回。	秋間系
50-4 36	瓦 女瓦	埋土内 1/4	厚 2.4	白色微粒子 透明鉍物粒子	酸化焰	浅黄橙	一枚作りか。凸面縄叩き。凹面に靱の圧痕が ある。	笠懸系
50-5 36	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.5	黒色粒子 白色粒子	還元焰	暗灰	紐作り。凸面轆轤整形。側部面取り2回・端 部面取り3回。	乗附系か 藤岡系
51-1 36	瓦 女瓦	埋土内 1/4	厚 1.7	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	暗灰	一枚作りか。凸面平行叩き。側部面取り1回・ 端部面取り1回。	乗附系か
51-2 36	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.7	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り。凸面縦位の撫で整形。凸面轆轤整形 後縦位の撫で整形。側部面取り3回。	乗附系
51-3 36	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.5	白色鉍物粒子 白色粒子 黒色粒子	還元焰 焼締め	灰	桶巻き造り。凸面轆轤整形。側部面取り4回・ 端部面取り3回。	乗附系
51-4 36	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 1.2	黒色粒子 白色粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り。凹面横位の撫で整形。凸面轆轤整形 後縦位の撫で整形。端部面取り1回。	乗附系
51-5 36	瓦 女瓦	埋土内 破片	厚 2.1	白色鉍物粒子	還元焰 並質	白灰	桶巻き造り。凹面模骨痕。凸面平行叩き。端 部面取り2回。	北毛系か (中之条) 布目密

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
51-6 36	瓦 女 瓦	覆土内 ¼	厚 2.5	白色鉍物粒子 赤褐色粒子	酸化焰 並質	灰	桶巻き造りか。凸面縄叩き。端面面取り2回。 篋描き文字瓦か(凸面)。	北毛(中 之条)系 か

## 染谷川河川敷3区階段状遺構

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
52-1 36	土 師 器 坏	覆土内 ¾	口 (13.0) 高 2.6	黒色鉍物粒子 白色微粒子 微粒長石	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。器内面に有機 質付着。	藤岡系
52-2 36	須 恵 器 壺	覆土内 破片	口 (14.2) 底 ( 7.6) 高 ( 4.2)	黒色粒子 白色微粒子 白色鉍物粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形(右回転)。付高台。	秋間系
52-3 36	須 恵 器 坏	覆土内 破片	口 (20.0)	白色鉍物粒子 白色粒子 黒色粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)。底部は回転篋削りか。	秋間系
52-4 36	須 恵 器 瓶 類	覆土内 破片	頸 ( 5.0)	白色微粒子 シルト粗粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。	乗附系
52-5 36	須 恵 器 甕	覆土内 破片	口 (20.0)	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。	不詳 (東毛系か)
52-6 36	施釉陶器 緑 釉 壺	覆土内 破片	口 (15.0)	硬質	良好	オリ ブ灰	轆轤成形(右回転)。釉調は明るく小貫入が多 く入る。	
52-7 37	須 恵 器 大 甕	3区 III'層 破片	厚 0.6	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰白	紐作り。叩き整形(外面正格子叩き・内面宛 具は青海波文)。器外面に自然釉付着。	搬入品 (東海系か)
52-8 37	須 恵 器 大 甕	南III'層 破片	厚 0.8	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰	52-7と同一個体。	搬入品 (東海系か)
52-9 37	須 恵 器 大 甕	III'層	厚 0.7	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰	52-7と同一個体。	搬入品 (東海系か)
52-10 37	須 恵 器 大 甕	三層 破片	厚 0.6	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰	52-7と同一個体。	搬入品 (東海系か)
52-11 37	須 恵 器 大 甕	覆土内 破片	厚 0.7	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰	52-7と同一個体。	搬入品 (東海系か)
52-12 37	須 恵 器 大 甕	III'層 破片	厚 0.7	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰	52-7と同一個体。	搬入品 (東海系か)
52-13 37	須 恵 器 大 甕	南III層 破片	厚 0.6	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰	52-7と同一個体。	搬入品 (東海系か)
53-1 37	須 恵 器 大 甕	III'層 破片	厚 0.7	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰	52-7と同一個体。	搬入品 (東海系か)
53-2 37	須 恵 器 大 甕	III'層 破片	厚 0.5	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰	52-7と同一個体。	搬入品 (東海系か)
53-3 36	礫 器	覆土内 完存	長 7.5 幅 3.3 厚 2.5	粗粒安山岩	—	—	特別な使用痕等は認められない。	重140g
53-4 37	瓦 宇 瓦	覆土内 破片	—	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰	段頸の頸部が剥りたもの。作り不詳。	吉井系
53-5 37	瓦 女 瓦	覆土内 破片	厚 2.1	白色微粒子	還元焰	灰	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。刻印文字瓦 「三」(凹面)。	笠懸系
53-6 37	瓦 女 瓦	覆土内 ¼	厚 1.9	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 硬質	暗灰	一枚作り。凹面粘土板剥ぎ取り痕。凸面縦位 の撫で整形。側部面取り3回・端面面取り4 回。篋描き文字瓦「大」(凸面)。	吉井系
53-7 37	瓦 男 瓦	覆土内 破片	厚 2.2	白色鉍物粒子 白色粒子 透明鉍物粒子	還元焰 硬質	灰白	半載作り。凸面轆轤整形。側部面取り5回。	吉井系
53-8 37	瓦 男 瓦	覆土内 破片	厚 1.9	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰	紐作り。凸面轆轤整形。	吉井系
53-9 37	瓦 男 瓦	破片	厚 1.9	白色粒子 赤褐色粒子	還元焰	灰黄	半載作り。凸面轆轤整形。側部面取り3回。 凹面布合せ目痕。粘土板接合は「Z」。	乗附系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
53-10 37	瓦 女 瓦	覆土内 破片	厚 1.7	白色鉱物粒子 シルト粗粒子 白色粒子	還元焰	灰白	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。側部面取り 3回。	吉井系
53-11 37	瓦 女 瓦	覆土内 破片	厚 1.1	白色粒子	還元焰	外・黒褐 断・黄灰	桶巻き造り。凹面模骨痕。凸面轆轤整形。	吉井系
53-12 37	瓦 女 瓦	覆土内 破片	厚 1.5	白色鉱物粒子 白色粒子	中性焰	黄灰	一枚作り。凹面粘土板剥ぎ取り痕。凸面縄叩 き(密)後縦位の撫で再整形。側部面取り2 回。	吉井系

染谷川河川敷2区河祭

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
58-1 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (10.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
58-2 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (10.0)	微粒長石 微粒雲母 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
58-3 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (10.0) 底 — 高 —	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は直立気味。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
58-4 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (9.4)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。	不詳
58-5 37	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 10.4 高 3.4	微粒雲母 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
58-6 37	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (10.6) 高 3.6	微粒雲母 白色鉱物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
58-7 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (10.6) 高 4.1	微粒雲母 水簸土	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
58-8 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (11.6)	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
58-9 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (11.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
58-10 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (11.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
58-11 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (11.0) 高 (3.0)	微粒長石 黒色粒子	酸化焰	鈍褐	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。	不詳
58-12 37	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (11.0)	微粒雲母 水簸土	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
58-13 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (11.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	浅黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	西毛系か
58-14 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (11.0)	微粒長石 赤褐色粒子	酸化焰	鈍黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
58-15 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (11.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
58-16 47	土 師 器 内黒土器 坏	土器溜り 破片	口 (11.0)	赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	内・黒褐 外・橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
58-17 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (11.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系



遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
58-18 47	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (11.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
58-19 47	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (11.0) 高 3.9	微粒長石 赤褐色粒子 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
58-20 47	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (11.0)	雲母石英片岩 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
58-21 47	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (11.0)	赤褐色粒子 微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
58-22 37	土師器 坏	土器溜り ¼	口 (11.0)	微粒長石 赤褐色粒子 水箴土か	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
58-23 47	土師器 坏	覆土内 破片	口 (11.6)	微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
58-24 37	土師器 坏	土器溜り ⅔	口 11.2 高 3.0	微粒雲母 水箴土	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
58-25 47	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (11.2)	微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
58-26 47	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (11.2)	微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
58-27 37	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (11.2) 高 ( 3.3)	微粒雲母 黒色鉱物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により外反する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
58-28 37	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (11.2) 高 2.5	微粒雲母	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
58-29 47	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (11.2)	微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
58-30 37	土師器 坏	土器溜り ⅔	口 (11.5)	微粒長石 微粒雲母	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
59-1 47	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (11.6)	微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
59-2 47	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (11.8)	微粒長石 赤褐色粒子 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
59-3 47	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (11.8)	微粒長石 赤褐色粒子 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
59-4 37	土師器 坏	土器溜り ほぼ完形	口 11.6 高 3.6	微粒雲母 水箴土	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は2段階の篋撫でにより外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
59-5 37	土師器 坏	土器溜り 暗灰褐色 砂層 ⅔残存	口 11.6	微粒雲母 水箴土	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は3段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
59-6 38	土師器 坏	土器溜り 暗灰褐色 砂層 ¼	口 11.6 高 3.9	微粒雲母 赤褐色粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
59-7 38	土師器 坏	土器溜り ほぼ完形	口 11.6 高 4.0	白色鉱物粒子 微粒雲母	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
59-8 47	土 師 器 坏	暗灰褐色層 土器溜り 1/2	口 (11.6) 高 (4.2)	微粒雲母 赤褐色粒子 水簸土	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外反上半分は直立気味。 外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。 口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
59-9 38	土 師 器 坏	土器溜り 1/2	口 (11.6) 高 4.3	微粒雲母 微粒長石 水簸土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
59-10 38	土 師 器	土器溜り 暗灰褐色 砂層 1/2	口 (11.8)	微粒雲母	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
59-11 38	土 師 器 坏	土器溜り 1/2	口 11.8 高 3.5	石英雲母片岩	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
59-12 38	土 師 器 坏	土器溜り 1/2	口 (11.8) 高 (4.0)	雲母石英片岩 微粒長石 水簸土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
59-13 38	土 師 器 坏	土器溜り 1/2	口 (11.8) 高 4.4	微粒雲母 水簸土	酸化焙	黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
59-14 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
59-15 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
59-16 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0)	微粒雲母	酸化焙	鈍橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	東毛系か
59-17 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0)	微粒雲母	酸化焙 硬質	橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の 横撫により外傾する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
59-18 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0) 高 (3.2)	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外側し口唇部は直立す る。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は 篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
60-1 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
60-2 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0)	白色鉱物粒子 微粒長石 白色微粒子	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
60-3 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
60-4 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0)	微粒長石 白色微粒子	酸化焙	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
60-5 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0)	微粒長石 白色鉱物粒子	酸化焙	鈍橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
60-6 47	土 師 器 坏	土器溜り 1/2	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焙	黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
60-7 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
60-8 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系
60-9 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0)	微粒長石 赤褐色粒子	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	藤岡系

## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
60-10 47	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0)	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。器面の風化顕著。	藤岡系
60-11 38	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0) 高 ——	微粒雲母	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
60-12 47	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0)	微粒長石 赤褐色粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
60-13 38	土師器 坏	土器 <sup>No.32</sup> <sup>No.53</sup> 破片	口 (12.0) 底 —— 高 ——	微粒長石 赤褐色粒子 細粒砂 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
60-14 47	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (11.2)	微粒長石 白色鉱物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
60-15 38	土師器 坏	土器溜り 1/2	口 12.0	微細粒雲母 水簸土	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
60-16 47	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
60-17 38	土師器 坏	土器溜り 1/3	口 (12.0)	微粒雲母 水簸土か	酸化焰	浅黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
60-18 47	土師器 坏	土器溜り 破片	口 12.0)	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
60-19 47	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
60-20 47	土師器 坏	土器溜り 1/3	口 (12.0)	微粒雲母 水簸土	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
60-21 38	土師器 坏	土器溜り 1/2	口 (12.0) 高 4.0	微粒雲母 赤褐色粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
60-22 47	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
60-23 38	土師器 坏	土器溜り 1/4	口 12.0 高 4.4	微粒雲母 水簸土	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
60-24 38	土師器 坏	土器溜り 完形	口 12.0 高 4.4	微粒雲母 微粒長石 水簸土	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
60-25 38	土師器 橙	土器溜り 破片	口 (12.0) 高 ( 4.6)	微粒雲母 白色鉱物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
60-26 38	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (12.1)	微粒雲母	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
60-27 47	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (12.2)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
60-28 47	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (12.2)	微粒雲母 微粒長石	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
60-29 47	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (12.2)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
60-30 47	土 師 器	土器溜り 破片	口 (12.2)	微粒長石 微粒雲母 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系

染谷川河川敷 2 区祭祀土器溜り

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
61-1 38	土 師 器 坏	土器溜り ㊦	口 (12.2)	微粒雲母 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
61-2 38	土 師 器 坏	土器溜り ほぼ完形	口 12.2 高 4.1	微粒雲母 白色粒子 水簸土	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は2段の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
61-3 47	土 師 器 坏	土器溜り ㊦	口 (12.2)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作校成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
61-4 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (12.2)	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
61-5 47	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (12.6)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
61-6 38	土 師 器 坏	土器溜り ㊦	口 (12.4)	微粒雲母	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
61-7 47	土 師 器 坏	土器溜り ㊦	口 (12.4)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
61-8 48	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (12.4)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	にぶい橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
61-9 38	土 師 器 黑色土器 坏	土器溜り ㊦残	口 (12.4)	白色微粒子 黑色鉾物粒子	酸化焰	鈍黄橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。器内・外面を吸炭させている。口縁直下に型膚を残す。	東毛系
61-10 38	土 師 器 坏	土器溜り ㊦	口 (12.4)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。外器面風化する。	藤岡系
61-11 38	土 師 器 坏	土器溜り ㊦	口 (12.4)	微粒長石	酸化焰	浅黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	東毛系 (太田系)
61-12 38	土 師 器 坏	土器溜り 完形	口 11.8 高 3.5	白色鉾物粒子 微粒雲母	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
61-13 38	土 師 器 坏	土器溜り ㊦	口 (12.4)	微粒雲母 赤褐色粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により直立気味。底部は篋削り。口縁直下に稜を有し型膚を残す。	西毛系か
61-14 38	土 師 器 坏	土器溜り ほぼ完形	口 12.4 高 4.2	微粒雲母 水簸土	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
61-15 38	土 師 器 坏	土器溜り ㊦	口 (12.4) 高 (4.8)	微粒雲母 水簸土	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。作り全体が雑である。	藤岡系
61-16 38	土 師 器 坏	土器溜り ほぼ完形	口 12.6 高 4.5	微粒長石 水簸土	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
61-17 38	土 師 器 坏	土器溜り ㊦	口 12.7 高 4.1	細粒砂 微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系

## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
61-18 48	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (12.8)	微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
61-19 38	土師器 坏	土器溜り 1/2残	口 12.8 高 4.0	赤褐色粒子 白色微粒子	酸化焰	浅黄橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	東毛系か
61-20 38	土師器 坏	土器溜り 1/2	口 (12.8)	微粒雲母 赤褐色粒子 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
62-1 48	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (12.8) 高 (2.4)	黒色鉱物粒子 透明鉱物粒子	酸化焰	鈍褐	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	東毛系か
62-2 48	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (12.8)	微粒雲母 白色微粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部の篋削は深い。	藤岡系
62-3 38	土師器 坏	土器溜り 完形	口 12.8 高 4.4	微粒雲母 赤褐色粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部はやや外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
62-4 48	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (13.0) 高 (2.8)	微粒長石 水箴土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
62-5 48	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (13.0)	微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
62-6 48	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (13.0)	微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
62-7 48	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (13.0) 高 (3.3)	黒色鉱物粒子 白色微粒子	酸化焰	鈍黄橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	不詳
62-8 48	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (13.0)	白色微粒子 微粒雲母	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系か
62-9 48	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (13.0)	微粒長石 水箴土か	酸化焰	黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。器面の風化顕著。	藤岡系
62-10 48	土師器 黒色土器 坏	土器溜り 破片	口 (13.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	暗褐	型作り成形。口縁部は2段以上の篋撫でにより強い稜を有し外傾する。底部は篋削を施し、口縁直下に型膚を残す。器内・外面を吸炭させている。	東毛系
62-11 48	土師器 内黒土器 坏	土器溜り 破片	口 (13.0)	微粒長石 赤褐色粒子	酸化焰	外橙 内黒	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	西毛系か
62-12 48	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0)	微粒長石 水箴土か	酸化焰	浅黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。内外面イテハゼが顕著。	東毛系か
62-13 38	土師器 坏	土器溜り 1/2	口 13.0 高 (3.9)	微粒長石 微粒雲母 水箴土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
62-14 48	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (13.0)	微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
62-15 38	土師器 坏	土器溜り 1/2	口 (13.0)	微粒雲母	酸化焰	黄褐	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。	東毛系か
62-16 48	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (13.0) 高 (4.2)	微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	
62-17 38	土師器 坏	土器溜り 1/2	口 (13.0)	微粒雲母 赤褐色粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
62-18 38	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (13.0)	微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	東毛系か
62-19 38	土 師 器 坏	土器溜り ¼	口 (13.0) 高 4.2	微粒長石 微粒雲母 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
62-20 38	土 師 器 坏	土器溜り ⅔	口 13.0 高 4.2	微粒雲母	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
62-21 38	土 師 器 坏	土器溜り ⅔	口 (13.0) 高 4.3	微粒雲母 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反気味。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	西毛系か
62-22 48	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (13.0)	微粒雲母 白色鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に稜を有する。底部は篋削り。	吉井・藤岡系
62-23 38	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (13.0)	微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
62-24 48	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0)	微粒長石 赤褐色粒子 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
62-25 38	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (14.0)	微粒長石 細粒砂 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
62-26 39	土 師 器 坏	土器溜り ¼	口 (13.2)	微粒雲母	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下の一部に型膚を残す。	藤岡系
62-27 48	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (13.3) 底 (11.2) 高 (4.0)	透明鉍物粒子 黒色鉍物粒子	酸化焰	褐	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	東毛系
63-1 48	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (13.4)	微粒長石 赤褐色粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
63-2 39	土 師 器 坏	土器溜り ほぼ完形	口 13.4 高 4.5	赤褐色粒子 微粒長石粒 水箴土	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系か
63-3 48	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (13.4)	黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子	酸化焰	浅黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	吉井・藤岡系
63-4 39	土 師 器 坏	土器溜り ⅔	口 (13.6) 高 4.3	微粒長石 白色鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
63-5 39	土 師 器 坏	土器溜り ⅔	口 13.8 高 4.5	黒色鉍物粒子 軽石粒	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は直立気味。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	北毛系か
63-6 48	土 師 器 坏	土器溜り ¼	口 (14.0) 高 (4.0)	微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
63-7 48	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (14.0)	黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
63-8 48	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (14.0)	微粒長石 赤褐色粒子 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
63-9 48	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (14.0)	微粒長石 微粒雲母	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。器面の風化顕著。	藤岡系
63-10 39	土 師 器 坏	土器溜り ⅔	口 (14.0)	微粒雲母 水箴土	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
63-11 48	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (13.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系

## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
63-12 39	土 師 器 坏	土器溜り ⅓	口 (14.5)	白色粒子 赤褐色粒子 甲種	酸化焙	赤褐	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により外傾し、段を有し、強い稜を有している。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	不詳
63-13 48	土 師 器 小形甕か	土器溜り 破片	口 (15.0) 高 (2.5)	白色粒子 黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子	酸化焙	鈍黄橙	紐作り成形。内外面共に横撫でを施す。	吉井・藤岡系
63-14 48	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 土器溜り 破片	口 (14.4) 高 (3.7)	微粒長石 水箴土か	酸化焙	にぶい 褐、内・ 外・黒 褐、断・ 浅黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。(器内・外面を吸炭?)。	東毛系
63-15 48	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (15.0) 高 (3.2)	微粒雲母 水箴土	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は3段以上の篋状工具の横撫により外傾する。	藤岡系
63-16 39	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (15.0)	微粒雲母 シルト粗粒子	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に甘い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
63-17 39	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (13.0) 高 (5.5)	微粒長石 水箴土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
63-18 48	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (11.0)	微粒長石 水箴土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
63-19 39	土 師 器 坏	土器溜り ⅓	口 (11.4) 高 3.2	微粒雲母 デイスait	酸化焙	橙	型作り。口縁部内湾気味。体部・底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
63-20 48	土 師 器 黒 色 坏	土器溜り 破片	口 (12.0) 高 (2.9)	白色微粒子 微粒雲母 赤褐色粒子	酸化焙	褐灰	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により直立気味。口縁直下に強い稜を有し型膚を残す。底部は篋削り。内外面を燻している。	西毛系か
63-21 48	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (11.8)	微粒雲母 赤褐色粒子	酸化焙	浅黄橙	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により直立気味。口縁直下に強い稜を有し型膚を残す。底部は篋削り。	藤岡系か
63-22 48	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0)	微粒雲母 白色微粒子	酸化焙	断・鈍褐 内・外・ 暗灰褐	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により直立気味。口縁直下に強い稜を有し型膚を残す。	不詳
63-23 39	土 師 器 坏	土器溜り ⅓	口 12.0 高 4.0	微粒長石 微粒雲母	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
63-24 39	土 師 器 坏	土器溜り ⅓	口 (12.0)	微粒雲母 白色粒子	酸化焙	鈍橙	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により内傾気味。口縁直下に強い稜と型膚を残す。底部は篋削り。	藤岡系
64-1 39	土 師 器 坏	土器溜り ほぼ完形	口 12.0 高 4.1	白色鉍物粒子 微粒雲母	酸化焙	鈍黄橙	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により直立気味。口縁直下に稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
64-2 39	土 師 器 坏	土器溜り ⅓	口 (12.0)	白色粒子 黒色鉍物粒子	酸化焙	鈍黄橙	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により直立する。口縁直下に稜を有する。	吉井・藤岡系か
64-3 39	土 師 器 坏	土器溜り ⅓	口 12.0 高 4.9	黒色鉍物粒子 微粒雲母	酸化焙	浅黄橙	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により直立気味。口縁直下に稜を有する。底部は篋削り。	東毛か
64-4 39	土 師 器 坏	土器溜り フク土 ⅓	口 12.4 高 3.6	微粒雲母 白色粒子	酸化焙	橙	型作り。口縁部直立気味。体部・底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系 M2類系
64-5 39	土 師 器 坏	土器溜り ⅓	口 12.6	白色鉍物粒子 黒色鉍物粒子	酸化焙	浅黄橙	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により直立気味。口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	吉井・藤岡系
64-6 48	土 師 器 黒 色 坏	土器溜り 破片	口 (13.0)	微粒雲母 白色微粒子	酸化焙	断・橙 内・外・ 黒褐	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により直立気味。底部は篋削り。	不詳 (東毛か)
64-7 48	土 師 器 坏	土器溜り ⅓	口 (13.0)	黒色鉍物粒子 白色鉍物粒子	酸化焙	鈍橙	型作り成形。口縁部は段を有し、直下に強い稜を有する。器厚は薄く、口縁直下に型膚を残し底部は篋削り。	東毛乃至 西毛系
64-8 39	土 師 器 坏	土器溜り ⅓	口 (13.0) 高 (3.0)	微粒長石 微粒雲母 黒色鉍物粒子	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は短く外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
64-9 48	土 師 器 坏	土器溜り ¼	—	微粒雲母 微粒長石 水簸土か	酸化焙	橙褐	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部・ 体部は篋削り。	藤岡系か
64-10 48	土 師 器 内黒土器 坏	土器溜り 破片	口 (11.0) 高 ( 3.2)	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焙	鈍橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。器内面 を吸炭させている。	東毛系
64-11 48	土 師 器 内黒土器 坏	暗灰褐色 砂層 土器溜り 破片	口 (11.0) 高 ( 3.5)	透明鉱物粒子 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。器内面 を吸炭させている。	東毛系
64-12 48	土 師 器 内黒土器 坏	土器溜り 破片	口 (11.1) 高 ( 3.2)	微粒長石 水簸土か	酸化焙	橙 内・黒褐 外・浅 黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。器内面 を吸炭させている。	東毛系
64-13 39	土 師 器 内黒土器 坏	土器溜り ¼	口 (11.4)	微粒長石 水簸土か	酸化焙	外・浅 黄橙 内・黒褐	型作り成形。口縁部は2段以上の篋撫でによ り強い稜を有し外傾する。底部は篋削を施し、 口縁直下に型膚を残す。器内面を吸炭させて いる。	東毛系
64-14 39	土 師 器 内黒土器 坏	土器溜り ¼	口 (11.5) 底 10.2 高 4.2	白色鉱物粒子 透明鉱物粒子 水簸土か	酸化焙	内・黒褐 外・浅 黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。内面見込みに貫入が入る。 器外面は風化が著しい。器内面を吸炭させて いる。	東毛系か
64-15 48	土 師 器 内黒土器 坏	土器溜り 破片	口 (11.0) 高 ( 3.2)	微粒長石 白色微粒子	酸化焙	内・黒褐 外・浅 黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。器内面を吸炭させている。	東毛系
64-16 48	土 師 器 内黒土器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焙	内・黒褐 外・橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。器内面を吸炭させている。	東毛系
64-17 48	土 師 器 内黒土器 坏	土器溜り ¼	口 (12.0) 高 ( 4.1)	微粒長石 水簸土か	酸化焙	橙 内・黒褐 外・浅黄 橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。器内面を吸炭させている。	東毛系
64-18 39	土 師 器 内黒土器 坏	土器溜り 暗灰褐色 砂層 ¼残	口 (12.4)	黒色鉱物粒子 赤褐色粒子 白色微粒子	酸化焙	浅黄橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の 横撫により外傾する。底部は篋削り。器内面 を吸炭させている。口縁直下に型膚を残す。	不詳
64-19 48	土 師 器 内黒土器 坏	土器溜り 破片	口 (12.6)	微粒長石 水簸土か	酸化焙	内・黒褐 外・浅黄 橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。器内面を吸炭させている。	東毛系
64-20 39	土 師 器 内黒土器 坏	土器溜り 暗灰褐色 砂層 破片	口 (13.0) 高 ( 4.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焙	内・黒褐 外・浅黄 橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。器内面を吸炭させている。	東毛系
64-21 48	土 師 器 内黒土器 坏	土器溜り 破片	口 (13.0)	白色微粒子 赤褐色粒子	酸化焙	鈍橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の 横撫により外傾する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	東毛系
64-22 39	土 師 器 内黒土器 坏	土器溜り 破片	口 (12.7) 高 ( 4.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焙	外・橙 内・黒褐	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。器内面を吸炭させている。	東毛系
64-23 48	土 師 器 内黒土器 坏	土器溜り 破片	底 (10.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焙 硬質	内・黒褐 外・浅黄 橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。器内面に暗文を施し、吸炭 させている。	東毛系
65-1 48	土 師 器 黒色土器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0)	微粒長石 微粒雲母?	酸化焙	内外・黒 断・鈍黄 橙	型作り成形。口縁部は内湾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。器内外 面は有機質の物質により黒色処理されてい る。	東毛系か
65-2 48	土 師 器 黒色土器 坏	土器溜り 破片	口 (12.0)	バミス? 微粒雲母	酸化焙	赤褐	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の 横撫により外傾する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。器内面を吸炭させている。	不詳 (西毛か)



遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
65-3 39	土師器 黒色土器 坏	土器溜り ½	口 (12.6) 高 4.6	白色微粒子 黒色鉱物粒子	酸化焙	断・橙 内外・ 黒褐	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。器内・外面を吸炭させている。	東毛系
65-4 48	土師器 黒色土器 坏	土器溜り 破片	口 (14.6)	白色微粒子 微粒雲母	酸化焙	鈍橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫を施すが直立気味。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。器内・外面を吸炭させている。	東毛系
65-5 39	土師器 黒色土器 坏	土器溜り ½残	口 (13.8) 高 4.6	白色粒子 赤褐色粒子	酸化焙	鈍赤褐	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。器内外面を黒色に燻している。	東毛系
65-6 39	土師器 黒色土器 坏	土器溜り ½	口 13.2	透明鉱物粒子 黒色鉱物粒子	酸化焙	褐灰	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	東毛系か
65-7 48	土師器 内黒土器 坏	土器溜り 暗灰褐色 砂層 破片	口 (13.0)	微粒長石 微粒雲母 水簸土か	酸化焙 硬質	内・黒褐 外・鈍黄 橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。器内・外面に暗文を施し、器内面を吸炭させへいる。	東毛系
65-8 39	土師器 黒色土器 坏	土器溜り No274 ½	口 (14.0) 高 4.0	微粒雲母 白色粒子 黒色鉱物粒子	酸化焙	浅黄橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。器内・外面を吸炭させている。	東毛系
65-9 39	土師器 黒色土器 坏	土器溜り ½残	口 (14.4) 高 3.9	微粒長石 微粒雲母	酸化焙	内・黒褐 外・浅黄 橙	型作り成形。口縁は横撫でを施す。器内面は暗文を充填する。器外面体部・底部に顕著に型膚を残すが、底部には一部篋削りが施されている。器内・外面を燻し処理をする。	搬入品か
65-10 48	土師器 鉢	土器溜り 暗灰褐色 砂層	口 (19.0)	微粒長石 微粒雲母	酸化焙 硬質	黄橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
65-11 39	土師器 鉢	土器溜り 暗灰褐色 砂層 暗灰褐色 土層	口 19.6 高 7.8	白色粒子 微粒長石 微粒雲母	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
65-12 49	土師器 高坏	土器溜り 細片	基 5.3	微粒長石 微粒雲母 水簸土	酸化焙	橙	紐作り成形。器外面は篋削り整形を施す。	藤岡系
65-13 49	土師器 高坏	土器溜り 細片		微粒長石 微粒雲母 水簸土	酸化焙	橙	紐作り成形。器外面は篋削り整形。	藤岡系
65-14 39	土師器 高坏	土器溜り 濁黒色砂 層 暗灰褐色 砂層 ½	口 (13.0) 底 ( 8.8) 高 6.8 基部 3.5	微粒長石 微粒雲母	酸化焙	橙	坏部は型作り成形、口縁部は強く外傾する。脚部の成形は不詳。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
65-15 49	土師器 高坏	土器溜り 破片	基 6.0	微粒雲母 微粒長石	酸化焙	橙	紐作り成形。器外面は縦位の篋削り整形。器内面は篋撫でを施す。	藤岡系
65-16 49	土師器 高坏	土器溜り 破片	口 (22.0)	微粒長石 雲母石英片岩 藤岡畑土	酸化焙	橙	型作り成形。内面は丁寧な撫で整形。外面はやや雑な撫で整形。器内面に暗文を施す。	藤岡系
65-17 49	土師器 短頸壺	土器溜り 暗灰褐色 砂層 破片	口 ( 9.6)	微粒長石 微粒雲母 赤褐色粒子	酸化焙	橙褐	下半部は型作成形の可能性があり、上半部は紐作り成形と考えられる。器外面は篋削り整形。器内面は撫で整形。	東毛系か
65-18 49	土師器 壺	土器溜り 破片	口 (11.4)	微粒長石 細粒砂	酸化焙	橙	下半部は型作り成形。上半部は紐作り成形。器外面肩部周辺は篋削りを施す。器内面・口縁部は横撫でを施す。	藤岡系
65-19 39	土師器 短頸壺	土器溜り 破片	口 (10.0)	微粒長石 微粒雲母 水簸土か	酸化焙 硬質	黄橙	下半部は型作成形の可能性があり、上半部は紐作り成形と考えられる。器外面は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
65-20 39	土 師 器 短 頸 壺	土器溜り 3区暗灰 褐色砂層 ㄥ	口 (11.0) 高 9.9	微粒長石 微粒雲母 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	下半部は型作り成形の可能性が高い。上半部は紐作り成形。器外面は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系
66-1 49	土 師 器 短 頸 壺	Ⅲ層 土器溜り 暗灰褐色 砂層 ㄥ	口 (12.0) 高 ( 8.6)	微粒長石 微粒雲母 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	下半部は型作成形の可能性があり、上半部は紐作りと考えられる。器外面は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系
66-2 39	土 師 器 短 頸 壺	土器溜り 暗灰褐色 土層 破片	最大径 (19.4)	微粒長石 微粒雲母 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	下半部は型作成形の可能性があり、上半部は紐作り成形と考えられる。器外面は篋削り整形。器内面で撫で整形。	藤岡系
66-3 39	土 師 器 甗	暗灰褐色 土 濁黒色砂 層 土器溜り 破片	口 (14.0)	黒色鉍物粒子 白色鉍物粒子	酸化焰 硬質	内外・ 橙 断・灰	口縁部は外傾する。紐柁。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	吉井・藤岡系
66-4 49	土 師 器 甗	土器溜り 破片	口 (15.0)	黒色鉍物粒子 微粒長石	酸化焰	橙	口縁部は外傾する。紐作り。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	藤岡系
66-5 49	土 師 器 甗	土器溜り 破片	口 (15.0)	微粒長石 白色微粒子	酸化焰	橙褐	口縁部は短く外傾する。紐作り。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	藤岡系か
66-6 40	土 師 器 甗	土器溜り 暗灰褐色 砂層 ㄥ	口 15.4	微粒雲母 微粒長石	酸化焰	鈍橙	口縁部は外反する。紐作り。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	藤岡系
66-7 49	土 師 器 甗	土器溜り 破片	口 (20.0)	雲母石英片岩 微粒長石	酸化焰	橙	口縁部は外傾する。紐作り。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	藤岡系
66-8 49	土 師 器 甗	土器溜り 破片	口 (22.0)	透明鉍物粒子 白色粒子 黒色鉍物粒子	酸化焰	橙	口縁部は段を有外傾する。紐作り。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	吉井・藤岡系
66-9 40	土 師 器 甗 口 縁	土器溜り 暗灰褐色 砂層 破片	口 (20.0) 高 (10.0)	透明鉍物粒子 白色鉍物粒子	酸化焰	褐	口縁部は外傾する。紐作り。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	不詳 (西毛系 か)
66-10 40	土 師 器 甗	土器溜り ㄥ	底 ( 9.0)	黒色鉍物粒子 微粒長石	酸化焰	橙	紐作り成形。器面の風化が著しい。器外面は篋削り整形・器内面は篋撫で整形。	藤岡系
66-11 40	土 師 器 甗	土器溜り 破片	底 8.0	微粒長石 微粒雲母 白色微粒子	酸化焰	黄橙	型作り成形か、底面の粘土の動きが型作りの状態を示している。器面が風化している。	吉井・藤岡系
66-12 40	土 師 器 甗	土器溜り 破片	底 ( 9.2)	赤褐色粒子 微粒長石	酸化焰	橙褐	底部の磨滅が顕著である。	不詳

染谷川河川敷2区祭祀

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
67-1 49	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (10.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子 水簸土か	酸化焰	鈍黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	不詳
67-2 49	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (10.4)	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	浅黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
67-3 49	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (10.6)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙褐	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
67-4 49	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (10.8)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系

## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 量目 (cm) (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
67-5 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.2) 高 (3.6)	微粒長石 水箴土か	酸化焙	褐	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
67-6 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.0)	微粒長石 水箴土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
67-7 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.0)	微粒長石 水箴土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
67-8 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.0)	微粒長石 水箴土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
67-9 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.0)	微粒長石 水箴土か	酸化焙	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
67-10 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.0)	微粒長石 微粒雲母 水箴土か	酸化焙	赤褐	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
67-11 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.0)	微粒長石 微粒雲母 水箴土か	酸化焙	浅黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
67-12 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.0)	雲母石英片岩 微粒長石 水箴土か	酸化焙	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
67-13 40	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.0)	雲母石英片岩 微粒長石 水箴土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
67-14 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.0)	微粒長石 水箴土か	酸化焙	褐	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	西毛系か
67-15 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.0)	微粒長石 水箴土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
67-16 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.0)	微粒長石 水箴土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
67-17 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.0)	黒色鉱物粒子 白色微粒子	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
67-18 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.0)	微粒長石 水箴土か	酸化焙 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
67-19 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.0)	雲母石英片岩 微粒長石 水箴土か	酸化焙 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
67-20 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.0)	微粒長石 水箴土	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は細い沈線状の篋撫痕が認められ外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系か
67-21 49	土師器 内黒坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.0)	微粒長石 赤褐色粒子	酸化焙	内・黒灰 外・断 浅黄橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。器内面には漆状の有機質を塗布している。	不詳
67-22 40	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (10.0)	白色鉱物粒子 透明鉱物粒子	酸化焙 発泡して いる。	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
67-23 40	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.0) 高 3.7	微粒長石 水箴土か	酸化焙 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
67-24 40	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.0) 高 ( 4.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
67-25 49	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 ( 9.8)	微粒長石 水簸土か	酸化焰 硬質	黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
67-26 49	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.2)	微粒長石 白色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
67-27 40	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 11.2 高 4.2	赤褐色粒子 水簸土	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
67-28 49	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.4)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
67-29 40	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.4) 高 3.6	微粒長石 水簸土か	酸化焰 軟質	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
67-30 40	土 師 器 坏	2区暗灰 褐色砂層 破片	口 (11.5)	微粒長石 白色微粒子 白色鉱物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
67-31 40	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 11.1 高 3.3	微粒長石 水簸土	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
67-32 40	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.0) 高 4.5	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	橙褐	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
68-1 40	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.0) 高 4.3	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。化粧土の痕跡が認められる。	藤岡系
68-2 40	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片残	口 (11.0) 高 4.0	微粒長石	酸化焰	橙褐	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	不詳
68-3 40	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (10.4) 高 4.9	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土	酸化焰	黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
68-4 49	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.6)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
68-5 49	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.6)	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
68-6 40	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 11.6 高 3.1	微粒長石 赤褐色粒子 白色微粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
68-7 40	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.6)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
68-8 40	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.6) 高 ( 3.5)	微粒長石 白色微粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
68-9 40	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 11.6 高 3.5	微粒長石 水簸土	酸化焰	黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
68-10 49	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.6)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
68-11 40	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 11.6 高 4.6	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は成形未完成の状態の為丸味を強く帯びる。底部は篋削りを施す。口縁直下に強い稜を有し直下に型膚を残す。	藤岡系

## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
68-12 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.8)	微粒長石 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
68-13 40	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.8)	微粒長石	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
68-14 40	土師器 坏	暗灰褐色 砂質 破片	口 (11.8) 高 3.8	黒色鉱物粒子 微粒長石	酸化焰	灰	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により直立気味。口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	不詳
68-15 40	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 11.8	微粒長石 白色微粒子 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
68-16 40	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 11.8	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。作りは雑。	藤岡系
68-17 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 赤褐色粒子	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
68-18 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
68-19 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
68-20 40	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (10.9) 高 (3.7)	微粒長石 微粒砂	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
68-21 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 12.2 高 (4.7)	微粒長石 微粒雲母 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋撫により強い稜を有し外傾する。底部は篋削を施し、口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
68-22 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-1 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	酸化焰
69-2 40	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 12.0	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-3 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0) 高 (3.4)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-4 40	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	褐灰	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-5 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-6 49	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-7 50	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0)	白色鉱物粒子 微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-8 50	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 12.0	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か 雲母石英片岩	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-9 50	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
69-10 50	土 師 器	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焙 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-11 50	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (10.8)	微粒長石 水簸土か	酸化焙	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-12 50	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 白色鉱物粒子 水簸土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-13 50	土 師 器 坏	暗褐色砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 赤褐色粒子	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	東毛系か
69-14 40	土 師 器	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0) 高 3.6	微粒長石 水簸土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-15 50	土 師 器	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-16 50	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 雲母石英片岩 水簸土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-17 41	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 12.0	赤褐色粒子 細粒砂 水簸土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外反気味。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-18 41	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焙 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-19 50	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焙 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-20 50	土 師 器	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焙 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-21 41	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 微粒雲母 水簸土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-22 50	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (13.4)	微粒長石 白色鉱物粒子 水簸土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-23 50	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-24 50	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0) 高 ( 4.1)	微粒長石 水簸土か	酸化焙	褐	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	西毛系か
69-25 50	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-26 41	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 12.0 高 ( 4.2)	微粒雲母 水簸土か	酸化焙 硬質	橙	型作り成形。口縁部は3段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-27 41	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 一部欠損	口 12.0 高 4.3	微粒長石 微粒雲母	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
69-28 41	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
70-1 41	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 ほぼ完形	口 12.0 高 4.5	微粒雲母 微粒長石 水簸土か	酸化焙 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
70-2 41	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 %	口 12.0 高 4.3	赤褐色粒子 微粒長石 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
70-3 50	土師器 内黒土器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0) 高 (3.5)	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	不詳
70-4 50	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0) 高 (3.7)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	褐	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
70-5 41	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 %	口 (12.0) 高 3.7	赤褐色粒子 微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
70-6 50	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0) 高 (4.2)	微粒雲母	酸化焰	鈍黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	不詳
70-7 41	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 %	口 12.0 高 4.7	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
70-8 41	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 %	口 12.0 高 3.9	微粒長石 チャート円粒 水簸土	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
70-9 41	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 %	口 (12.1) — —	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
70-10 41	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 %	口 (12.2) 高 (4.4)	微粒長石 デイスaito 水簸土か	酸化焰	黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
70-11 41	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 12.0	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
70-12 50	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 %	口 (12.3)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	鈍黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
70-13 41	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 %	口 (12.4) 高 4.2	微粒長石 雲母 水簸土	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
70-14 41	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.4)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
70-15 41	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 %	口 (12.4)	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
70-16 41	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 %	口 12.4	微粒長石	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。器面全体にハゼが多い。	藤岡系

染谷川河川敷2区河祭

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
71-1 50	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.6)	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
71-2 50	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.6)	黒色鉱物粒子 透明鉱物粒子 白色粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。作りは丁寧。	藤岡系
71-3 50	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.6)	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	明灰	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。器面が風化している。	西毛系か

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
71-4 50	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.6)	微粒長石 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
71-5 50	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.6)	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
71-6 41	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 %	口 12.6 高 4.2	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系か
71-7 41	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 %	口 12.6 高 4.6	赤褐色粒子 微粒雲母 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
71-8 50	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.6) 高 4.3	微粒長石 白色鈹物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
71-9 41	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 %	口 (12.8) 高 ( 3.7)	微粒長石	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
71-10 41	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 %	口 (12.8)	微粒長石 赤褐色粒子	酸化焰	浅黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	不詳
71-11 50	土 師 器 黒色土器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.8)	白色微粒子 微粒雲母 黒色鈹物粒子	酸化焰	黄橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。器内・外面を吸炭させている。	東毛系
71-12 41	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 %	口 12.8 高 4.1	微粒雲母 微粒長石	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系 胎土分析
71-13 50	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.8)	微粒雲母 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
71-14 41	土 師 器 坏	暗灰褐色 層 %	口 12.8 高 4.7	細粒砂	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
71-15 41	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 %	口 (12.8) 高 4.8	微粒長石	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	東毛系か
71-16 41	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 %	口 12.8 高 4.4	微粒長石	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
71-17 41	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 %	口 12.8 高 4.7	微粒長石 微粒長石 水簸土か	酸化焰	黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
71-18 50	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (13.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
71-19 50	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 13.0	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
71-20 50	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (13.0)	微粒長石 白色微粒子 水簸土か	酸化焰	浅黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
71-21 50	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (13.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
71-22 50	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (13.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰 硬質	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
72-1 50	土 師 器	暗灰褐色 砂層 破片	口 (13.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系



## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
72-2 41	土 師 器 高 杯	暗灰褐色 砂層 ㄨ	口 (13.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焙	褐	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。脚部は欠損する。	不詳
72-3 50	土 師 器 黒色土器 杯	暗灰褐色 砂層 破片	口 (13.0)	黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子 白色粒子	酸化焙	断・黒褐 外・鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	東毛系か
72-4 50	土 師 器 杯	暗灰褐色 砂層 破片	口 (13.0)	雲母石英片岩 微粒長石 水簸土か	酸化焙	黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
72-5 50	土 師 器 杯	暗灰褐色 砂層 破片	口 (13.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焙	黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
72-6 50	土 師 器 杯	暗灰褐色 砂層 破片	口 (13.0)	白色微粒子 黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子	酸化焙	褐	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
72-7 41	土 師 器 杯	暗灰褐色 砂層 ㄨ	口 (13.5)	微粒長石 水簸土か	酸化焙	黄灰	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	東毛系か
72-8 41	土 師 器 杯	暗灰褐色 砂層 ㄨ	口 13.0 高 3.9	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焙	橙褐	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
72-9 50	土 師 器 杯	暗灰褐色 砂層 破片	口 (13.2)	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焙	浅黄橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	東毛系か
72-10 50	土 師 器 杯	暗灰褐色 砂層 ㄨ	口 (13.0)	赤褐色粒子 微粒透明鉍物 粒子	酸化焙	黄橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	不詳
72-11 50	土 師 器 杯	暗灰褐色 砂層 破片	口 (13.0)	雲母石英片岩 微粒長石	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
72-12 50	土 師 器 杯	暗灰褐色 砂層 ㄨ残	口 (13.2)	微粒長石 水簸土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
72-13 41	土 師 器 杯	暗灰褐色 砂層 ㄨ	口 (13.0)	微粒長石 白色鉍物粒子 水簸土か	酸化焙	鈍橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
72-14 50	土 師 器 内黒土器 杯	暗灰褐色 砂層 破片	口 (13.2)	微粒長石 水簸土か	酸化焙	内・黒褐 外・浅黄 橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。器内面を吸炭させている。	東毛系
72-15 41	土 師 器 杯	暗灰褐色 砂層 ㄨ	口 13.2 高 4.0	赤褐色粒子 微粒長石 水簸土か	酸化焙	鈍黄橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	不詳
72-16 41	土 師 器 杯	暗灰褐色 砂層 ㄨ	口 (13.2) 高 4.3	微粒雲母 白色鉍物粒子	酸化焙	鈍橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
72-17 41	土 師 器 杯	暗灰褐色 砂層 ㄨ	口 13.2 高 4.5	赤褐色粒子 微粒長石	酸化焙	橙褐	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	東毛系か
72-18 41	土 師 器 杯	暗灰褐色 砂層 ㄨ	口 (13.4)	微粒長石 白色鉍物粒子 水簸土	酸化焙	黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
72-19 41	土 師 器 杯	暗灰褐色 砂層 ㄨ以上	口 (13.4)	黒色鉍物粒子 白色微粒子	酸化焙	鈍橙	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。内外面の整形痕から、高速回転の回転台乃至轆轤の使用がある。	吉井・藤岡系
72-20 41	土 師 器 杯	暗灰褐色 砂層 ほぼ完形	口 13.6 高 5.1	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系か
72-21 50	土 師 器 杯	暗灰褐色 砂層 破片	口 (14.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焙 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
73-1 50	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (14.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。	藤岡系
73-2 50	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (14.0)	微粒長石 赤褐色粒子	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
73-3 50	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (13.0)	黒色鈹物粒子	酸化焰	橙 浅黄橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。	吉井・藤岡系
73-4 41	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 14.0 高 4.5	赤褐色粒子 白色微粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系か
73-5 41	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (14.8) 高 (4.2)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	褐	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	西毛系か
73-6 50	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (14.2)	微粒長石 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
73-7 50	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	—	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰 硬質	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
73-8 41	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	—	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
73-9 51	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.2)	微粒長石 雲母石英片岩	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
73-10 42	土 師 器 坏	暗灰褐色 土砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 黒色鈹物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。口縁直下に型膚を残す。底部は篋削り。	藤岡系
73-11 51	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 白色微粒子	酸化焰 硬質	明赤褐	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
73-12 51	土 師 器 坏	暗灰褐色 土砂層 破片	口 (12.0)	白色鈹物粒子 微粒長石	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
73-13 42	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (10.4)	微粒長石 黒色鈹物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り。口縁部内傾気味。体部・底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系
73-14 51	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 11.0	白色微粒子 黒色鈹物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は内傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
73-15 42	土 師 器 坏	濁黒色砂 層 破片	口 11.2 高 4.0	白色鈹物粒子 微粒長石	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により直立気味。底部は篋削り。口縁直下に型膚を若干残す。	藤岡系
73-16 42	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.6)	白色粒子 微粒長石	酸化焰 (還元 焰 気 味)	褐灰	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により直立気味。口縁直下に強い稜を有し型膚を残す。底部は篋削り。器内外面に漆状の有機質を塗布する。	東毛系か
73-17 42	土 師 器 黒 色 坏	暗灰褐色 砂層 破片	—	白色微粒子 微粒長石 黒色鈹物粒子	酸化焰	灰黄	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により直立気味。口縁直下に強い稜を有し型膚を残す。	東毛系か
78-18 51	土 師 器 黒 色 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (14.0)	白色微粒子 赤褐色粒子	酸化焰	断・橙 内外・黒	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により直立気味。口縁直下に強い稜を有し型膚を残す。内外面に漆状の有機質を塗布している。	吉井・藤岡系か
73-19 42	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.0)	微粒長石 黒色鈹物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により直立気味。底部は篋削り。	藤岡系
73-20 42	土 師 器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.4)	微粒長石 黒色鈹物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により直立気味。底部は篋削り。	藤岡系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
73-21 51	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	□ (11.0)	白色微粒子 微粒長石	酸化焰	明赤褐	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により外傾気味。口縁周辺に型膚を残す。底部は篋削り。	藤岡系
73-22 42	土師器 坏	暗灰褐色 土砂層 残	□ (13.6)	白色微粒子 黒色鋳物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は内傾する。口縁直下に型膚を残し、下半部は篋削り。底部は篋削り。	東毛系
73-23 42	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	□ (14.0) 高 (4.0)	微粒長石 黒色鋳物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部直立気味。体部・底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。口縁直下に稜を有し型膚を残す。	藤岡系
73-24 51	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	□ (13.0)	微粒長石 黒色鋳物粒子	酸化焰	橙	型作り。口縁部外傾気味。体部・底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系
73-25 42	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 残	□ (14.0)	微粒長石極多 細粒砂	酸化焰	明黄橙	型作り。口縁部直立気味。体部・底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。見込みに焼成以前の篋傷がある。	搬入品 (埼玉)
73-26 51	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 残	—	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	器内面には、器内面口縁部の篋撫で整形時に付いた、篋端部の条痕が残る。又、見込み部の撫で整形時の稜(轆轤痕状)も残る。	藤岡系
74-1 51	土師器 黒色土器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	□ (12.2)	白色微粒子	酸化焰	黒灰	型作り成形。口縁部は直立気味。口縁直下に型膚を残し、下半部は篋削り。底部は篋削り。	北毛系か
74-2 42	土師器 黒色土器 坏	暗灰褐色 砂層 残	□ (13.2)	微粒長石 白色微粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は2段以上の工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。内面口唇部の整形は丁寧である。器内・外面を吸炭させている。	藤岡系か
74-3 51	土師器 黒色土器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	□ (13.4)	白色微粒子 微粒長石 白色鋳物粒子	酸化焰	黄橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。器内・外面を吸炭させている。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系か
74-4 42	土師器 黒色土器 坏	暗灰褐色 砂層 残	□ (13.8)	透明鋳物粒子 白色粒子	酸化焰	内・黒褐 外・浅黄 橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。器内面を吸炭させている。	東毛系
74-5 42	土師器 黒色土器 坏	濁黒色砂 層 残	□ (13.4)	黒色鋳物粒子 微粒長石	酸化焰	鈍橙	第74図-6と同一個体	東毛系か
74-6 42	土師器 黒色土器 坏	暗灰褐色 土砂層 残	□ (13.6)	黒色鋳物粒子 微粒長石	酸化焰	鈍黄橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。見込みに放射状暗文を施す。	東毛系か
74-7 51	土師器 黒色土器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	□ (14.0)	微粒長石 白色微粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。器内・外面を吸炭させている。	東毛系か
74-8 42	土師器 内黒土器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	□ (14.0)	白色鋳物粒子	酸化焰	断・黄灰 内黒・褐	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。内面には研磨を施し、口縁直下に型膚を残す。	北毛系
74-9 42	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	□ (15.0)	微粒長石	(還元 している)	内・灰 外・黒灰	型作り成形。口縁部は外反口唇部は直立気味。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
74-10 51	土師器 黒色土器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	□ (19.0)	白色粒子	酸化焰	鈍黄橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。器内・外面を吸炭させている。	東毛系
74-11 51	土師器 鉢	暗灰褐色 砂層 破片	□ (15.0) 高 (7.6)	微粒長石 微粒雲母 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
74-12 51	土師器 鉢	暗灰褐色 砂層 破片	□ (20.0) 高 (7.2)	微粒長石 微粒雲母 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
74-13 51	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	□ (21.0)	石英粒 微粒長石 赤褐色粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
74-14 51	土 師 器 鉢	暗灰褐色 砂層 破片	口 (22.0)	微粒長石 微粒雲母 水箴土か	酸化焰 硬質	黄橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
74-15 51	土 師 器 台付甕	暗灰褐色 砂層 脚部	底 (10.0)	透明鋳物粒子 黒色鋳物粒子	酸化焰	褐	紐作り。器内面は指撫でを施し、器外面は篋削りを施す。	北毛系か
74-16 51	土 師 器 高 坏	暗灰褐色 砂層 破片	—	微粒長石 雲母石英片岩 微粒雲母	酸化焰	鈍黄橙	紐作り成形。器外面は風化が進行しているが、縦位の撫で整形痕が認められる。器内面は横位の撫で整形を施す。	藤岡系
74-17 42	土 師 器 高 坏	暗灰褐色 砂層 脚部	—	透明鋳物粒子	酸化焰	にぶい 黄橙	紐作り成形。器内面は撫で整形。器外面は縦位の篋撫で整形。	北毛系か
74-18 42	土 師 器 高 坏	暗灰褐色 砂層 脚部	底 18.2	微粒長石	酸化焰	橙	紐作り成形。器内面は横位の撫で整形。器外面は縦位の篋削りを施す。	藤岡系
75-1 51	土 師 器 小 型 壺	暗灰褐色 砂層 破片	口 (7.7)	微粒長石 微粒雲母 水箴土か	酸化焰 硬質	橙	下半部は型作成形の可能性があり、上半部は紐作り成形と考えられる。器外面は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系
75-2 51	土 師 器 小 型 壺	暗灰褐色 砂層 破片	口 (9.0)	微粒長石 微粒雲母	酸化焰	橙	下半部は型作成形の可能性があり、上半部は紐作り成形と考えられる。器外面は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系
75-3 51	土 師 器 小 型 甕	暗灰褐色 砂層 破片	口 10.0	微粒雲母 微粒長石	酸化焰	鈍橙	口縁部は外傾する。器外面は篋削りを施す。	藤岡系
75-4 51	土 師 器 小 型 甕	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.0) 頸 (10.1)	微粒長石 微粒雲母	酸化焰	鈍橙	下半部は型作成形の可能性があり、上半部は紐作り成形と考えられる。器外面は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系
75-5 42	土 師 器 短 頸 壺	暗灰褐色 砂層 破片	口 (11.6)	微粒長石 微粒雲母 水箴土か	酸化焰 硬質	橙	下半部は型作成形の可能性があり、上半部は紐作り成形と考えられる。器外面は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系
75-6 51	土 師 器 短 頸 壺	暗灰褐色 砂層 破片	口 (12.0)	微粒長石 微粒雲母 水箴土か	酸化焰 硬質	橙	口縁部は外反する。下半部は型作成形の可能性があり、上半部は紐作り成形と考えられる。器外面は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系
75-7 42	土 師 器 短 頸 壺	暗灰褐色 砂層 口縁部	口 (12.4) 高 (5.5)	微粒長石 微粒雲母	酸化焰	橙	口縁部は直立する。下半部は型作成形の可能性があり、上半部は紐作り成形と考えられる。器外面は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系
75-8 51	土 師 器 短 頸 壺	暗灰褐色 砂層 破片	口 (13.0)	透明鋳物粒子 黒色鋳物粒子	酸化焰	灰黄	口縁部は短かく直立する。紐作り。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	西毛系か
75-9 42	土 師 器 短 頸 壺	暗灰褐色 砂層 破片	高 (3.2)	微粒長石 微粒雲母 水箴土か	酸化焰 硬質	橙	下半部は型作成形の可能性があり、上半部は紐作り成形と考えられる。器外面は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系
75-10 42	土 師 器 坏	暗灰褐色 土砂層 ½	高 (3.5)	白色粒子 赤褐色粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反か。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	東毛系
75-11 42	土 師 器 小 型 甕	暗灰褐色 砂層 ¾	口 (11.2) 高 17.0	石英雲母片岩 黒色鋳物粒子 チャート粒	酸化焰	褐灰	口縁部は外傾する。紐作り。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	藤岡系
75-12 42	土 師 器 甕	暗灰褐色 砂層 ½	口 14.0 高 (9.0)	微粒長石 黒色鋳物粒子	酸化焰	橙	口縁部は直立気味。紐作り。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。器外面・口縁部内面の器面にのみ粗粒の砂礫が認められる(離れ砂的)。	藤岡系
75-13 42	土 師 器 甕	暗灰褐色 砂層 ¾	口 (15.8)	微粒雲母 微粒長石 白色鋳物粒子	酸化焰	鈍橙	口縁部は外反する。紐作り。口縁部は横撫で後、外面胴部は篋削り、内面胴部は篋撫で。	藤岡系
76-1 42	土 師 器 甕	暗灰褐色 砂層 破片	口 (17.0) 高 (16.5)	白色鋳物粒子 黒色鋳物粒子 透明鋳物粒子	酸化焰	外・黄灰 内・灰黄	口縁部は外傾する。紐作り。外面胴部は上半な篋撫で下半は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	吉井・藤岡系
76-2 51	土 師 器 甕	暗灰褐色 砂層 破片	口 (18.0)	黒色鋳物粒子 微粒長石	酸化焰	浅黄橙	口縁部は外傾する。紐作り。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	吉井・藤岡系

## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
76-3 51	土師器 甕	暗灰褐色 砂層 破片	口 (21.0)	黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子	酸化焰	橙褐	口縁部は外傾する。紐作り。外面胴部は篔削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篔撫で。	藤岡系
76-4 43	土師器 甕	暗灰褐色 砂層 破片	口 (21.0)	黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子 白色粒子	酸化焰	浅黄橙	口縁部は外傾する。紐作り。外面胴部は篔削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篔撫で。胴部に最大径を有する。	藤岡系
76-5 43	土師器 甕	暗灰褐色 砂層 ¼	口 21.0	黒色鉍物粒子 赤褐色粒子 白色粒子	酸化焰	橙	口縁部は外傾する。紐作り。外面胴部は篔削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篔撫で。	吉井・藤岡系
76-6 43	土師器 甕	暗灰褐色 砂層 ½	口 20.9 胴最 29.5	黒色鉍物粒子 白色粒子 赤褐色粒子	酸化焰	鈍橙	口縁部は外傾する。紐作り。外面胴部は篔削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篔撫で、手撫での再整形を施す。	吉井・藤岡系
77-1 43	土師器 甕	濁黒色砂層 暗灰褐色 砂層 破片	口 (21.2)	白色粒子 長石粒	酸化焰	橙褐	口縁部は外傾する。紐作り。外面胴部は篔削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篔撫で。	北毛系
77-2 42	土師器 甕	暗灰褐色 砂層 破片	口 (23.0)	雲母石英片岩 白色鉍物粒子	酸化焰	鈍褐	口縁部は外傾する。紐作り。外面胴部は篔削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篔撫で。	藤岡系
77-3 43	土師器 甕	暗灰褐色 砂層 ½	頸 15.5	長石粒 白色粒子	酸化焰	灰黄	紐作り。外面胴部は篔削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篔撫で。	北毛系
77-4 42	土師器 甕	暗灰褐色 砂層 破片	底 (7.8)	黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子 チャート円粒	酸化焰	黄灰	紐作り成形か。器面の風化が著しい。	吉井・藤岡系
77-5 51	土師器 甕	暗灰褐色 砂層 破片	底 (12.0)	黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子 白色粒子	酸化焰	灰	紐作り成形。外面は雑な篔撫でを施し、器内面は丁寧な篔撫でを施す。	吉井・藤岡系
77-6 43	土師器 甕	暗灰褐色 砂層 破片	底 (6.0)	黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子 白色鉍物粒子	酸化焰	灰黄	紐作り成形。外面胴部は篔削り、内面胴部は篔撫で。	吉井・藤岡系か
78-1 43	土師器 甕	暗灰褐色 砂層 破片	最大径 (31.4)	黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子	酸化焰	橙	紐作り。外面胴部は篔削り、内面胴部は篔撫で。	西毛系か
78-2 43	土師器 甕	暗灰褐色 砂層 ½	最径 35.6	白色粒子 赤褐色粒子	酸化焰	橙	紐作り成形。外面胴部は篔削り、内面胴部は篔撫で。	吉井・藤岡系
78-3 51	土師器 形象埴輪	土器溜り 破片	厚 0.9~1.4	雲母石英片岩 白色鉍物粒子	酸化焰	橙	紐作り成形。垂下する装飾具を貼り付いているが欠損している。	吉井・藤岡系
78-4 51	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	厚 0.4	微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	外器面には、離型時の回転に伴ううひびが認められる。又、焼成に直接火を受けた部分と他の器種(坏)の口縁部がかぶっている状態が認められる。	藤岡系
78-5 51	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	厚 0.4	微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	14003に同じ	藤岡系
78-6 51	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	厚 0.3~0.8	微粒長石 赤褐色粒子	酸化焰	鈍橙	器外面には型から離す時に回しながら、離型させた時に生じたひびが認められる。	藤岡系

## 染谷川河川敷2区祭祀

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
79-1 43	土師器 坏	暗灰褐色 土層 破片	口 (11.0) 高 3.5	微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篔削り。	酸化焰
79-2 51	土師器 坏	暗灰褐色 土層 破片	口 (11.0)	微粒長石	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篔削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
79-3 51	土 師 器 坏	暗灰褐色 土層 破片	口 (11.0)	微粒長石 白色粒子	酸化焰	橙褐	型作り成形。口縁部は2段以上の篋無でにより強い稜を有し外傾する。底部は篋削を施し、口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
79-4 43	土 師 器 坏	暗灰褐色 土層 ½	口 (11.1)	微粒長石 白色鉱物粒子 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
79-5 51	土 師 器 坏	暗灰褐色 土層 破片	口 (11.4)	微粒長石 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
79-6 51	土 師 器 坏	暗灰褐色 土層 破片	口 (11.6) 高 3.4	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
79-7 51	土 師 器 坏	暗灰褐色 土層 破片	口 (11.7)	微粒長石 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
79-8 43	土 師 器 坏	暗灰褐色 土層 破片	口 (11.8)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
79-9 51	土 師 器 坏	暗灰褐色 土層 破片	口 (11.8) 高 ( 3.8)	微粒長石 白色鉱物粒子 水簸土か	酸化焰	褐	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
79-10 51	土 師 器 内黒土器か 坏	暗灰褐色 土層 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
79-11 51	土 師 器 坏	暗褐 覆土内 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系か
79-12 51	土 師 器 内黒土器 坏	暗灰褐色 土層 破片	口 (12.0) 高 ( 3.5)	微粒長石 微粒雲母 水簸土か	酸化焰	内・浅黄 橙 外・黒褐	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	西毛系か
79-13 51	土 師 器 坏	暗灰褐色 土層 破片	口 (12.0)	雲母石英片岩 微粒長石	酸化焰	橙 鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
79-14 51	土 師 器 坏	暗灰褐色 土層 破片	口 (12.0)	微粒長石 微粒雲母 チャート 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	不詳
79-15 43	土 師 器 坏	暗灰褐色 土層 ½	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
79-16 43	土 師 器 坏	暗灰褐色 ½	口 (12.0) 高 ( 4.2)	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
79-17 43	土 師 器 坏	暗灰褐色 土層 ½	口 (12.0) 高 4.0	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰 硬質	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
79-18 43	土 師 器 坏	暗灰褐色 土 ½	口 (12.1)	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
79-19 52	土 師 器 坏	暗灰褐色 土層 破片	口 (12.6)	白色鉱物粒子 微粒長石	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
79-20 52	土 師 器 坏	暗灰褐色 土層 破片	口 (12.8) 高 ( 3.8)	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
79-21 43	土 師 器 坏	暗灰褐色 土 ½	口 12.2 高 4.2	微粒長石 赤褐色粒子	酸化焰 硬質	内外・橙 断灰	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
79-22 44	土 師 器 坏	暗灰褐色 土 ½	口 12.5 高 3.8	微粒長石 微粒長石 水簸土	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
79-23 44	土師器 坏	暗灰褐色 土層 1/2	口 (12.8) 高 4.5	微粒長石 水箴土か	酸化焰	断・黒褐 内外・橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
79-24 52	土師器 坏	暗灰褐色 土層 1/2	口 (13.0) 高 (2.9)	微粒長石 白色鋳物粒子 微粒雲母 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
80-1 52	土師器 坏	暗灰褐色 土層 破片	口 (13.0)	微粒長石 赤褐色粒子 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
80-2 52	土師器 坏	暗灰褐色 土層 破片	口 (13.0)	微粒長石 水箴土か	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
80-3 52	土師器 坏	暗灰褐色 土層 破片	口 (13.0)	微粒長石 水箴土か	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
80-4 44	土師器 坏	暗灰褐色 土 1/2	口 (13.0) 高 4.7	微粒長石	酸化焰	鈍黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
80-5 44	土師器 坏	暗灰褐色 土 破片	口 (13.0)	微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
80-6 52	土師器 坏	暗灰褐色 土層 破片	口 (13.6)	黒色鋳物粒子 透明鋳物粒子 水箴土か	硬質 酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
80-7 44	土師器 坏	暗灰褐色 土層 1/2	口 (13.6) 高 4.2	微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
80-8 44	土師器 坏	暗灰褐色 1/4	口 12.9 高 4.3	微粒長石 白色微粒子 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は3段以上の篋状工具の横撫により外反気味。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
80-9 52	土師器 坏	暗灰褐色 土層 破片	口 (14.2)	微粒長石 水箴土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
80-10 52	土師器 坏	暗灰褐色 土層 破片	口 (14.6)	微粒長石	酸化焰	鈍黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	西毛系か
80-11 52	土師器 坏	暗灰褐色 土 破片	口 (15.0)	微粒長石 黒色鋳物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により強い稜を有し外傾する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
80-12 52	土師器 坏	暗灰褐色 土層 破片	—	微粒長石 シルト粗粒子 赤褐色粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
80-13 52	土師器 坏	暗灰褐色 土 破片	口 (11.0)	微粒長石 白色微粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により直立気味。口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
80-14 52	土師器 内黒 坏	暗灰褐色 破片	口 (12.0)	微粒長石 白色微粒子	酸化焰	黒・橙 橙	型作り成形。口縁部横撫により内傾する。口縁直下に強い稜を有し底部は篋削り。	東毛系か
80-15 52	土師器 坏	暗灰褐色 破片	口 (12.0)	白色微粒子	酸化焰	断・黄灰 内外・黒	型作り成形。口縁部は外反し口唇部は直立気味。外面口縁直下に強い稜を有する。口縁直下に型膚を残す。底部は篋削り。内外面に漆状の有機質を塗布する。	不詳 (東毛系 か)
80-16 52	土師器 坏	暗灰褐色 破片	口 (12.0)	黒色鋳物粒子 微粒長石	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により直立気味。底部は篋削り。口縁直下に強い稜を有し、型膚を残す。	東毛系
80-17 44	土師器 内黒塗 彩 坏	暗灰褐色 1/4	口 (12.0)	白色微粒子 微粒雲母 透明鋳物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により直立気味。口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。器内面は漆状の有機質が塗彩(黒色)されている。	東毛系か

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
80-18 52	土師器 坏	暗灰褐色 土 破片	口 (13.0)	透明鉍物粒子 黒色鉍物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は内傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	東毛系
80-19 52	土師器 坏	暗灰褐色 土層 破片	厚 0.3~0.5	微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	14003と同じ。	藤岡系
80-20 52	土師器 黒色土器 坏	暗灰褐色 土層 破片	口 (13.9)	赤褐色粒子	酸化焰	断・鈍橙 内外・黒 褐	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。器内・外面を吸炭させている。	東毛系
80-21 52	土師器 黒色土器 坏	暗灰褐色 土 破片	口 (14.0)	白色微粒子 黒色鉍物粒子	酸化焰	黄灰	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。見込みと外面に研磨が施されている。器内・外面を吸炭させている。	不詳
80-22 44	土師器 黒色土器 坏	暗灰褐色 層 ほぼ完形	口 14.0 高 3.8	白色微粒子 微粒長石	酸化焰	灰黄	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。見込みに放射状暗文を施す。	東毛系か
80-23 44	土師器 短頸壺	暗灰褐色 土層 破片	口 (12.0) 高 (5.7)	微粒長石 微粒雲母 水箴土か	酸化焰	橙	下半部は型作成形の可能性があり、上半部は紐作り成形と考えられる。器外面は篋削り整形。器内面は撫で整形。器形は須恵器に類似。	硬質
80-24 52	土師器 短頸壺	暗灰褐色 土層 破片	口 (11.0)	微粒雲母 水箴土か	酸化焰 硬質	黄橙	下半部は型作成形の可能性があり、上半部は紐作り成形と考えられる。器外面は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系
81-1 52	土師器 鉢	暗灰褐色 土層 破片	口 (20.5)	微粒長石 微粒雲母	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
81-2 52	土師器 甕	暗灰褐色 土層 破片	底 (5.4)	透明鉍物粒子 白色粒子	酸化焰	褐灰	紐作り成形。器外面は風化が著しい。内面及び断面に多量の有機質が附着する。	北毛系
81-3 44	土師器 甕	暗灰褐色 土層 破片	口 (19.0)	白色粒子 黒色鉍物粒子	酸化焰	灰黄	口縁部は外傾する。紐作り。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	東毛系か

河川敷2区No.29

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
82-1 44	土師器 坏	濁黒色砂 層 ¼	口 (11.9)	黒色鉍物粒子 白色粒子	酸化焰	灰白	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	不詳 (北毛系 か)
82-2 44	土師器 坏	濁黒色砂 層 ¾	口 12.2 高 4.4	微粒長石 白色微粒子	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系 胎土分析
82-3 44	土師器 坏	濁黒色砂 層 ¾	口 (12.5) 高 4.1	微粒長石 水箴土	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
82-4 44	土師器 坏	濁黒色砂 層 ¾	口 (12.8) 高 4.2	微粒長石 赤褐色粒子	酸化焰	黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
82-5 52	土師器 坏	濁黒色砂 層 ¾	口 (13.0)	白色鉍物粒子 微粒長石	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
82-6 44	土師器 坏	暗濁黒褐 色 ½	口 12.4 高 3.7	赤褐色粒子 微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
82-7 44	土師器 坏	濁黒色砂 層 完形	口 12.8 高 4.3	微粒雲母 微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
82-8 44	土師器 坏	暗濁黒褐 色 ¾	口 12.6 高 4.4	赤褐色粒子 微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系



遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
82-9 44	土 師 器 坏	祭祀 %	口 (12.0)	微粒長石	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋状工具の横撫により外傾する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を顕著に残す。	藤岡系
83-1 52	土 師 器 坏	灰褐色砂層 破片	口 (13.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	鈍黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	西毛系か
83-2 44	土 師 器 坏	暗濁黒褐色砂層 %	口 14.0 高 5.2	微粒雲母 微粒長石 水簸土	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系 胎土分析
83-3 44	土 師 器 手 捏	濁黒色砂層 完形	口 6.5 底 5.2 高 5.7	微粒長石 微粒雲母	酸化焰	灰	紐作り成形。器外面は平滑に撫で仕上げられ、器内面は撫でを施す。	不詳
83-4 44	土 師 器 甕	濁黒色砂層 破片	口 (21.0)	白色微粒子 微粒長石	酸化焰 硬質	鈍黄橙	口縁部は外傾する。紐作り。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	藤岡系

染谷川河川敷2区河祭

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
84-1 52	土 師 器 坏	暗灰褐色砂層 破片	—	黒色鉱物粒子 石英粒	酸化焰	暗橙	型作り成形。口縁部は短く外傾する。底部は篋削りを施し、体部に型膚を残す。器内面に暗文を施す。	不詳
84-2 52	土 師 器 小 型 甕	暗灰褐色砂層 破片	口 (13.0)	黒色鉱物粒子 白色粒子	酸化焰	褐	型作り成形。口縁部は短く外傾し横撫でを施す。底部は篋削りを施し、体部に型膚を残す。器内面に暗文を施す。	不詳 (西毛系か)
84-3 52	土 師 器 坏	暗灰褐色土層 破片	口 (17.2)	黒色鉱物粒子 透明鉱物粒子 甲種粘土	酸化焰	鈍赤褐	型作り成形。口縁部は短く突出し横撫でを施す。底部は篋削りを施す。体部に型膚を残す。器内面に暗文を施す。	不詳
84-4 52	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (15.6) 高 ( 5.0)	白色微粒子 微粒雲母	酸化焰	橙	型作り。口縁部直立気味。体部・底部は篋削り整形後内外面に横位の磨きを施す。器内面は撫で整形。	不詳 (在地系か)
85-1 44	須 恵 器 坏 蓋	土器溜り 一部欠損	口 14.2 高 4.2	白色鉱物粒子 透明鉱物粒子	還元焰 焼締め	灰	轆轤成形(右回転)。天上部は回転篋削り。	乗附系
85-2 52	須 恵 器 坏	土器溜り 細片	口 (14.0)	白色鉱物粒子 白色粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)。	不詳
85-3 52	須 恵 器 坏 蓋	土器溜り 破片		黒色粒子 白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。天上部は回転篋削り。	搬入品か 乗附系
85-4 52	須 恵 器 坏 蓋	土器溜り 破片	厚 0.6	白色微粒子 白色鉱物粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形。天上部は回転篋削り(左回転)。	乗附系
85-5 44	須 恵 器 坏	暗灰褐色砂層 %	口 (12.0) 高 4.4	黒色粒子 白色粒子	還元焰	灰白 灰	轆轤成形(右回転)。底部は回転篋削り。	搬入品か (埼玉か)
85-6 52	須 恵 器 高 坏	土器溜り 破片	口 (12.0)	非常に密	還元焰 焼締め	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。器外面に厚く自然釉付着。	東海系
85-7 52	須 恵 器 短 頸 壺	土器溜り 破片	口 ( 8.2)	白色微粒子	還元焰 硬質	暗灰	轆轤成形(右回転)。	搬入品か 乗附系
86-1 44	須 恵 器 横 瓮	土器溜り 破片	最 (29.2)	白色粒子	還元焰		紐作り。叩き整形(外面叩き不詳・内面宛具は青海波文)後印毛撫で。器内面に指撫の痕跡が認められる。	乗附系
86-2 44	須 恵 器 横 瓮	土器溜り 破片	口 ( 0.7)	白色鉱物粒子 白色粒子	還元焰 硬質	外・灰 内・オリ ーブ黒	轆轤整形(右回転)。側部は回転篋削り。	乗附系
86-3 52	須 恵 器 甕	土器溜り 破片	口 (19.0)	白色粒子 白色鉱物粒子	還元焰	灰	口縁部は外反し、11本1単位の波状文を廻らす。紐作り後轆轤整形(右回転)。	乗附系
86-4 52	須 恵 器 甕	土器溜り 破片	口 (20.0)	シルト 白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	口縁部は外反し、11本以上1単位の波状文を廻らす。紐作り後轆轤整形(右回転)。	乗附系
86-5 52	須 恵 器 甕	土器溜り 破片	厚 0.9	黒色粒子 白色粒子	還元焰	白灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。	搬入品か 乗附系

## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
86-6 45	石製品 白玉	土器溜り 完形	長 1.0 幅 1.0 厚 0.4	滑石	—	—	全体に丁寧な整形を施してあり、断面の附角30度程を備える。	重0.9g 孔径 0.3cm
86-7 45	石製品 白玉	土器溜り 完形	長 1.2 幅 1.1 厚 0.4	滑石	—	—	全体に比較的丁寧な整形を施す。	重0.9g 孔径 0.3cm
86-8 45	石製品 白玉	土器溜り 完形	長 1.1 幅 1.0 厚 0.4	滑石	—	—	外面は丁寧な磨き整形。	重0.9g 孔径 0.25cm
86-9 45	石製品 白玉	土器溜り FA土 完形	長 1.3 幅 1.3 厚 0.7	滑石	—	—	外面は丁寧な磨き整形。断面10度程の附角を備える。	重2.2g 孔径 0.3cm
86-10 45	石製品 白玉	土器溜り FA土 1/4	長 1.2 幅 1.2 厚 0.3	滑石	—	—	外面は粗い磨き出し整形で、断面の附角は10度程を備える。	重0.7g 孔径 0.3cm
86-11 45	石製品 白玉	土器溜り 完形	長 1.3 幅 1.2 厚 0.5	滑石	—	—	外面は粗い研ぎ整形。断面は15度程の附角を有する。	重1.7g 孔径 0.3cm
86-12 45	石製品 白玉	土器溜り FA直上層 完形	長 1.3 幅 1.2 厚 0.5	滑石	—	—	全体的に比較的丁寧な磨き整形を施し、断面の附角10度程を備える。	重1.2g 孔径 0.4cm
86-13 45	石製品 白玉	土器溜り 完形	長 1.3 幅 1.6 厚 0.4	滑石	—	—	外面は粗い磨き整形。	重1.5g 孔径 0.3cm
86-14	石製品 白玉	土器溜り FA上 1/4	長 1.0 幅 0.5 厚 0.7	滑石	—	—	外面の整形はやや粗い磨き整形。	重0.6g
86-15 52	礫器 敲石	暗灰褐色 砂層 ほぼ完形	長 9.8 幅 3.9 厚 2.7	頁岩	—	—	小口側に敲打に伴う欠損(?)が認められる。	重160g
86-16 52	礫器 敲石	土器溜り 完形	長 14.5 幅 5.3 厚 4.2	粗粒安山岩	—	—	小口側に敲打痕が認められる。	重580g

## 染谷川河川敷2区石組

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
87-1 52	須恵器 短頸壺	石組 覆土内 細片	口 ( 8.6)	白色微粒子 (極少)	還元焰 焼締め	暗灰	轆轤成形(右回転)。	搬入品 (東海)
87-2 52	須恵器 小瓶	上層 細片	厚 0.4	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。内・外面有機質 付着。	秋間系
87-3 52	須恵器 壺	上層 細片	厚 0.7	白色微粒子 黒色粒子	還元焰 硬質	灰白	紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間系
87-4 52	須恵器 甕	上層 破片	口 (25.4) — —	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。	乗附系か 秋間系
87-5 52	須恵器 甕	上層 破片	厚 0.9	白色粒子 白色鉍物粒子	還元焰 硬質	灰白	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具 は不詳)。	乗附系か 秋間系
87-6 44	石造品 凹石	2号集石 ほぼ完形	長 14.7 幅 12.7 厚 6.0	粗粒安山岩	—	—	礫の中央部が窪む。	重1,570g
87-7 45	礫器	上層 完形	長 19.5 幅 14.0 厚 5.8	角閃石安山岩	—	—	特徴的に使用痕は認められない。	重2,280g
88-1 45	礫器	上層 完形	長 13.2 幅 4.5 厚 4.1	流紋岩	—	—	//	重340g

## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
88-2 45	礫器	上層 完形	長 11.7 幅 4.5 厚 4.0	ひん岩	—	—	〃	重350g
88-3 45	礫器 擦石	上層 完形	長 13.2 幅 6.5 厚 5.2	粗粒安山岩	—	—	平坦面が使用に伴ない磨滅する。	重770g
88-4 45	礫器 擦石	上層 完形	長 14.4 幅 4.0 厚 2.7	黒色頁岩	—	—	〃	重320g
88-5 45	礫器 擦石	上層 完形	長 14.0 幅 5.4 厚 3.7	デイサイト	—	—	〃	重540g
88-6 45	礫器 擦石	上層 完形	長 19.2 幅 7.3 厚 5.2	石英閃緑岩	—	—	〃	重1,420g
88-7 45	礫器 擦石	上層 完形	長 14.4 幅 7.1 厚 4.0	石英閃緑岩	—	—	〃	重720g

## 染谷川河川敷2区祭祀

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
89-1 53	須恵器 瓶	暗灰褐色 砂層 細片	口 (5.0)	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。	乗附系
89-2 53	須恵器 壺	暗灰褐色 砂層 破片	厚 0.5	白色鋳物粒子 白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)。	乗附系
89-3 45	須恵器 短頸壺	暗灰褐色 砂層 老	最大径 13.2 頸 7.1	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	轆轤成形(右回転)(底部粘土板成形)。	搬入品か 乗附系
89-4 53	須恵器 台か 高坏か	暗灰褐色 砂層 破片	—	白色鋳物粒子 黒色粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。窓を施す。	搬入品か
89-5 44	須恵器 高坏	暗灰褐色 砂層 脚部	底 10.8	白色鋳物粒子 透明鋳物粒子	還元焰	灰白	轆轤成形(右回転)。	搬入品か
89-6 53	須恵器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	—	白色鋳物粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形(右回転)。天上部は手持ち篋削り。 自然釉付着。	搬入品か
89-7 44	須恵器 坏蓋	暗灰褐色 砂層 老	口 (10.4) 高 3.4	黒色粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形(右回転)。天上部は回転篋削り。	搬入品
89-8 53	須恵器 甕	暗灰褐色 砂層 細片	—	白色鋳物粒子 白色粒子 石英粒	還元焰 硬質	灰	口縁部は外傾し、波状文を廻らす。紐作り後 轆轤整形(右回転)。	搬入品か
89-9 53	須恵器 壺	暗灰褐色 砂層 破片	口 (19.0) — —	白色鋳物粒子 白色微粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。	乗附系
89-10 45	須恵器 甕	暗灰褐色 砂層 FA直上 層 %	口 20.0 最大径 36.2	白色微粒子	還元焰	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具 は青海波文)。	搬入品
90-1 53	須恵器 甕	暗灰褐色 砂層 破片	口 (20.6)	雲母石英片岩 微粒長石	酸化焰 硬質	橙	紐作り後轆轤整形(右回転)。	吉井・藤 岡系
90-2 53	須恵器 甕	暗灰褐色 砂層 細片	口 (22.0)	白色鋳物粒子 白色粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。口唇部直下に隆 線状横帯を廻らす。	乗附系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
90-3 53	須 惠 器 甕	暗灰褐色 砂層 破片	口 (21.0)	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。口縁部は縦位の 櫛無後10本1単位の波状文を廻らす。	乗附系
90-4 45	須 惠 器 甕	暗灰褐色 砂層 破片	口 (18.0)	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 硬質	灰	口縁部は外傾し、9本1単位の波状文を廻ら す。紐作り後轆轤整形(右回転)。	乗附系
90-5 53	須 惠 器 甕	暗灰褐色 砂層 破片	厚 0.5	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	外白灰 内灰黄	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具 は青海波文)。内面自然袖付着。	東海系
90-6 53	須 惠 器 壺	暗灰褐色 砂層 破片	厚 0.7	白色鉍物粒子 白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具 は青海波文)。	秋間系
90-7 53	須 惠 器 甕か瓶	暗灰褐色 砂層 破片	厚 0.7	白色鉍物粒子 白色微粒子	還元焰	灰白	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具 は青海波文)。	搬入品か 乗附系
90-8 53	須 惠 器 甕	暗灰褐色 砂層 破片	厚 0.7	白色微粒子 白色鉍物粒子 赤褐色粒子	還元焰	外灰 内褐	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具 は青海波文)。外面に横位の条線を廻らす。	乗附系
90-9 53	須 惠 器 甕	暗灰褐色 砂層 破片	厚 0.9	黒色粒子 白色粒子	還元焰	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具 は青海波文)。外面は叩き整形後撫での再整 形を施す。	秋間系
91-1 46	須 惠 器 大 甕	暗灰褐色 砂層 破片	口 19.4 高 42.9 厚 0.7~0.8	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 硬質	暗灰	口縁部は外反し、8本1単位の波状文を廻ら す。紐作り後轆轤整形(右回転)。頸部下は紐 作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は 青海波文)。	乗附系
92-1 53	須 惠 器 甕	暗灰褐色 砂層 破片	厚 0.8	白色粒子 黒色粒子	還元焰	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具 は青海波文?)後器内面撫での再整形。	不詳
92-2 53	須 惠 器 甕	暗灰褐色 砂層 破片	厚 1.0	白色鉍物粒子 白色微粒子	還元焰 焼締め	外暗灰 内灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具 は青海波文)。器外面に自然袖付着。	乗附系か 搬入品

染谷川河川敷2区祭祀

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
93-1 44	須 惠 器 提 瓶	暗灰褐色 土層 破片	口 (10.0)	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 硬質	暗灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。口縁・口唇部に 微隆線帯を廻らす。	乗附系
93-2 46	須 惠 器 長 頸 壺	暗灰褐色 土 脚部	—	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰白	紐作り後轆轤整形(右回転)。	搬入品か 秋間系
93-3 53	須 惠 器 甕	暗灰褐色 土層 破片	厚 0.9	白色微粒子 白色鉍物粒子	還元焰 硬質	外暗灰 内灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具 は青海波文)。青海波文が通有例とは天地が逆 になっている。	乗附系

河川敷2区濁黒色砂層

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
94-1 46	須 惠 器 坏 蓋	濁黒色砂 層 ほぼ完形	摘 2.1 口 7.8 高 4.7	白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)。天井部に4本1単位の波 状文を廻らす。	搬入品 (東海系)
94-2 46	須 惠 器 高 坏	濁黒色砂 層 破片	—	黒色微粒子	還元焰 硬質	灰白	轆轤成形(右回転)。二条の横線を施し、沈線 で窓を表出する(2単位)。	乗附系か 搬入品か
94-3 46	須 惠 器 高 坏	濁黒色砂 層 脚部	底 9.3	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形(右回転)。脚端部に隆線帯を施す。	乗附系

## 染谷川河川敷 2 区祭祀

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
95-1 53	須恵器 瓶類か	濁暗灰砂層 破片	厚 0.7	黒色粒子 白色微粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り。叩き整形（外面平行叩き・内面宛具は青海波文）。	搬入品か
95-2 53	須恵器 大甕	2区濁暗 灰砂層 破片	最大径 43.5	白色鈹物粒子 白色微粒子	酸化焰	黄橙	紐作り。叩き整形（外面平行叩き？・内面宛具は粗い青海波文）。	搬入品か

## 黒褐色粘質土層

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
96-1 54	須恵器 大甕	黒褐色粘 質土層 破片	口 23.6 厚 1.0	白色鈹物粒子 白色粒子	還元焰 硬質	暗灰	口縁部は外傾し、4本1単位の波状文を廻らす。紐作り後轆轤整形(右回転)。胴部は叩き整形（外面平行叩き・内面宛具は青海波文）。	乗附系

## 染谷川河川敷 2 区祭祀

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
97-1	須恵器 甕	濁暗灰砂層 破片	最 40.0	シルト粗粒子 白色微粒子	酸化焰	鈍橙	紐作り。叩き整形（外面平行叩き・内面宛具は素文）。	乗附系
97-2 54	須恵器 大甕	暗濁黒褐色 粘質土 破片	—	白色鈹物粒子 白色粒子	還元焰	灰白	紐作り。叩き整形（外面平行叩き・内面宛具は素文）。破片としての何らかの転用も考慮される。	乗附系

## 染谷川河川敷 3 区 7 号井戸

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
99-1 46	須恵器 坏	覆土内 完形	口 11.4 底 7.0 高 3.2	白色鈹物粒子 シルト粗粒子 黒色鈹物粒子	酸化焰	浅黄橙	轆轤成形（右回転）、底部は回転糸切り。	乗附系か
99-2 46	須恵器 埴	覆土内 底部	底 (8.0)	微粒長石 白色粒子	還元焰	白灰	轆轤成形（右回転）。付高台。	藤岡系
99-3 53	須恵器 甕	覆土内 破片	厚 1.0	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰白	紐作り。叩き整形（外面平行叩き・内面宛具は素文）。	乗附系
99-4 53	礫器 敲石	覆土内 完形	長 12.1 幅 5.0 厚 4.4	溶結凝灰岩	—	—	小口側に敲打痕が認められる。	重420g
99-5 46	瓦 男瓦	覆土内 破片	厚 1.5	白色鈹物粒子 白色粒子	還元焰 硬質	灰	半截作り。凸面縦位の撫で整形。側部面取り3回。	吉井系
99-6 46 瓦-900	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 1.6	白色鈹物粒子 白色粒子	還元焰 硬質	灰	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。側部面取り2回。篋描き文字瓦「+」と「 」（篋傷か）（凸面）。	吉井系
99-7 46 瓦-901	瓦 女瓦	覆土内 細片	厚 1.8	白色鈹物粒子 白色粒子	酸化焰	灰黄	一枚作りか。凸面縦位の撫で整形。凸面に篋傷。	吉井系
99-8 46	瓦 女瓦	覆土内 細片	厚 1.4	白色鈹物粒子	還元焰 焼締め	灰	一枚作り。凹面粘土板剥ぎ取り痕。凸面横位の撫で整形。凸面米格子叩き。	搬入品か (埼玉北部)
100-1 46	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 2.1	白色微粒子	還元焰	白灰	一枚作り。凹面粘土板剥ぎ取り痕。凸面縄叩き(密)。後縦位の撫で再整形。凹面布目擦り消し。	笠懸系
100-2 46	瓦 宇瓦	覆土内 破片	厚 3.2	白色鈹物粒子	還元焰 焼締め	暗灰	瓦当面欠損。女瓦部は桶巻き造り。凹面模骨痕。凸面縄叩き(密)。	吉井系

遺物観察表

染谷川河川敷3区1号落ち込み

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
102-1 54	土師器 坏	覆土内 破片	口 (13.0)	白色粒子 微粒長石	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系
102-2 53	土師器 坏	覆土内 破片	口 (14.0)	白色粒子 微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系
102-3 53	須恵器 坏	覆土内 破片	底 (9.5)	白色微粒子	還元焰 焼締め	外・白灰 内・褐灰	轆轤成形(右回転)。底部は回転篋削り。	秋間系
102-4 53	須恵器 甕	暗濁黒褐色 破片	口 (22.6)	黒色粒子 白色粒子	還元焰 硬質	白灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。	乗附系
103-1 54	須恵器 横瓮	覆土内 破片	頸 19.6	白色鉱物粒子 白色微粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。	乗附系
103-2 53	須恵器 甕	覆土内 破片	—	白色鉱物粒子 白色微粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り。口縁部は外反する。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。	乗附系

染谷川河川敷3区1号集石

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
104-1 54	土師器 坏	覆土内 破片	口 (12.0) 底 — 高 —	微粒長石 黒色鉱物粒子 白色微粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M2類系
104-2 54	土師器 坏	覆土内 破片	口 (12.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。口縁直下に型膚を残し、底部は篋削り。	藤岡系 M1類系
104-3 54	土師器 坏	覆土内 破片	口 (13.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。体部に型膚を残し、底部は篋削り。	藤岡系 M2類系
104-4 54	土師器 坏	覆土内 破片	口 (13.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子 白色微粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M1類系
104-5 54	土師器 坏	覆土内 破片	口 (13.0) 底 (10.8) 高 (3.2)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M2類系
104-6 54	土師器 甕	覆土内 破片	口 (16.0)	微粒長石 白色微粒子 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系

染谷川河川敷3区1井周辺砂層

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
105-1 54	土師器 坏	覆土内 破片	口 (11.0) 高 (3.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M1類系
105-2 54	土師器 坏	覆土内 破片	口 (12.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M1類系
105-3 54	土師器 坏	覆土内 破片	口 (13.0)	微粒長石	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M2類系
105-4 54	土師器 坏	覆土内 破片	口 (14.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子 赤褐色粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M3類系
105-5 54	土師器 坏	暗灰褐色 砂層 破片	口 (14.0) 高 (2.8)	微粒長石 白色微粒子	酸化焰	橙	型作り。口縁部直立気味。体部・底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系
105-6 54	土師器 坏	覆土内 破片	口 (14.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M1類系
105-7 54	土師器 坏	破片	口 (15.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M1類系
105-8 54	土師器 坏	覆土内 破片	口 (16.0)	白色微粒子 微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M2類系

## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
105-9 54	土師器 坏	覆土内 口縁部	口 (12.8)	微粒長石 黒色鉱物粒子 白色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。口縁直下に型膚を残し、下半部は篔削り。底部は篔削り。	藤岡系 M2類系
105-10	土師器 坏	覆土内 破片	口 (13.4) 高 (3.7)	赤褐色粒子 白色鉱物粒子	酸化焰	内・黄橙 外・灰	型作り。口縁部内湾気味。体部・底部は篔削り整形。器内面は無で整形。口縁直下に型膚を残す。	西毛系か
105-11 54	土師器 坏	覆土内 破片	口 (14.0)	微粒長石 雲母石英片岩	酸化焰	鈍橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篔削り、底部は篔削り整形。口縁部器内面放射状暗文を施す。	藤岡系 MA2類系

## 染谷川河川敷3区階段状遺構

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
106-1 54	土師器 坏	覆土内 1/4	口 (14.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子 白色鉱物粒子	酸化焰	鈍褐	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篔削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M3類系

## 染谷川河川敷2区土器溜り

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
107-1	土師器 坏	土器溜り 破片	口 (12.4)	微粒長石 水箴土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篔撫でにより強い稜を有し外傾する。底部は篔削りを施し、口縁直下に型膚を残す。	不詳 (東毛系か)

## 染谷川河川敷3区祭祀

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
108-1 55	土師器 坏	3区暗濁 黒褐粘質土 破片	口 (11.7) 高 (3.7)	微粒雲母 白色微粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に稜を有する。底部は篔削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
108-2 55	土師器 坏	暗濁黒褐 粘質土 破片	口 (13.4) 高 (3.9)	白色微粒子 微粒雲母	酸化焰	鈍橙	型作り。口縁部外傾気味。体部・底部は篔削り整形。器内面は無で整形。	藤岡系
108-3 55	土師器 坏	暗濁黒褐 色粘質土 破片	口 (13.0) 底 (10.6)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篔削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M1類系
108-4 54・80	土師器 坏	暗濁黒褐 色粘質土 1/4	口 (13.3) 高 (3.6)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篔削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M1類系
108-5 55	土師器 鉢	暗濁黒褐 色粘質土 破片	口 (18.6)	微粒長石 微粒雲母 水箴土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篔削り。	藤岡系
108-6 54	土師器 坏	暗濁黒褐 色粘質層 破片	口 (16.0)	微粒雲母 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篔削り。体部に型膚を残す。	東毛系
108-7 54	土師器 坏	暗濁黒褐 色粘質土 1/4	口 (16.2)	黒色鉱物粒子 透明鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篔削り。体部に型膚を残す。	藤岡系
109-1 54・55・80	土師器 坏	暗濁黒色 粘質土層 破片	口 (17.0)	黒色鉱物粒子 透明鉱物粒子 微粒長石	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篔削り。体部に型膚を残す。器内面に焼成後の「井」字状の刻線が施されている。	藤岡系
109-2	土師器 坏	暗濁黒褐 色粘質土 破片	口 (18.0)	黒色鉱物粒子 微粒雲母	酸化焰 硬質	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篔削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M2類系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
109-3 54	土 師 器 坏	暗濁黒褐色 粘質土 %	口 14.5 底 8.5 高 3.9	微粒長石 雲母石英片岩 畑土	酸化焰	鈍橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、 底部は篋削整形。器内面に二重暗文を施す。	藤岡系 MA2類系
109-4 54	土 師 器 壺	III層、暗 濁黒褐色 粘質土 破片	口 (17.0)	雲母石英片岩 微粒雲母	酸化焰	灰黄	口縁部は外傾する。紐作り。外面胴部は篋削 り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	藤岡系
109-5 55	土 師 器 壺	暗濁黒褐色 粘質土 破片	口 (17.0)	微粒長石 白色鉍物粒子 雲母石英片岩	酸化焰	褐	口縁部は短く外傾する。紐作り。外面胴部は 篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	藤岡系
109-6 55	土 師 器 壺	暗濁黒褐色 粘質土 破片	口 (24.0) 高 ( 6.5)	微粒長石 微粒雲母 白色微粒子	酸化焰	褐	口縁部は外傾する。紐作り。外面胴部は篋削 り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	吉井・藤 岡系
109-7 54	須 恵 器 坏	暗濁黒褐色 粘質土	口 (12.4) 底 7.8 高 ( 3.7)	白色粒子 黒色粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。底上部は手持ち篋削り。	秋間系
109-8 55	須 恵 器 坏	3区暗濁 黒褐色粘質 土 破片	底 (10.0)	白色微粒子	還元焰	鈍赤褐	轆轤成形 (右回転)。底部は回転篋削り。	秋間系
109-9 55	須 恵 器 坏	暗濁黒褐色 粘質土 破片	口 (14.2)	透明鉍物粒子 黒色鉍物粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。底部は回転篋削り。	秋間系
109-10 55	須 恵 器 坏	暗濁黒褐色 粘質土 層 破片	口 (11.8) 底 ( 6.6)	黒色粒子	還元焰	白灰	轆轤成形 (右回転)、底部は回転糸切り。	秋間系
109-11 55	須 恵 器 坏	暗濁黒褐色 粘質土 底部全周	底 ( 7.2)	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形 (左回転)、底部は回転糸切り。	乗附系
109-12 55	須 恵 器 壺	暗濁黒褐色 粘質土	口 (14.0)	白色鉍物粒子 黒色粒子	還元焰 焼締め	灰	轆轤成形 (右回転)。高台欠損 (付高台)。	秋間系
109-13 55	須 恵 器 壺	暗濁黒褐色 粘質土		白色微粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形 (右回転)、底部は回転糸切り。高台 欠損 (付高台)。	搬入品 (埼玉北 部か)
109-14 55	須 恵 器 短脚一段 透 高 坏	暗濁黒褐色 粘質土 破片	底 (10.0)	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。窓を施す。	乗附系
109-15 55	須 恵 器 壺	暗濁黒褐色 粘質土 破片	口 (13.0)	白色鉍物粒子 白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	搬入品か 乗附系
109-16 55	須 恵 器 壺	暗濁黒褐色 粘質土 破片	口 (20.0)	白色粒子	還元焰 焼締め	黒灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。自然釉付着。	乗附系
110-1 55	須 恵 器 壺	暗濁黒褐色 粘質土 破片	口 (12.4)	黒色粒子 白色粒子	還元焰 硬質	灰白	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	秋間系
110-2 55	須 恵 器 壺	暗濁黒褐色 粘質土 層 破片	厚 0.6	シルト粗粒子 赤褐色粒子 黒色鉍物粒子	酸化焰	黄灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	搬入品か
110-3 55	須 恵 器 壺	暗濁黒褐色 粘質土 層 破片	厚 0.6	黒色粒子 白色粒子	還元焰	白灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	秋間系
110-4 55	須 恵 器 瓶 類	暗濁黒褐色 粘質土 破片	厚 1.0	白色微粒子 白色鉍物粒子 シルト粗粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。	乗附系



## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
110-5 55・80	須恵器 甕 横 瓮	暗灰褐色 破片	厚 0.7	白色微粒子	還元焰 焼締め	白灰	紐作り。叩き整形（外面平行叩きの擬似格子状・内面宛具は青海波文）外器面には篋描き文字「貴」が刻まれ、全体に自然釉をかぶっている。	東海系
110-6 55	須恵器 甕	暗濁黒褐色粘質土層 破片	厚 0.9	白色微粒子 白色鉍物粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形（右回転）。	乗附系
110-7 55	須恵器 甕	暗濁黒褐色粘質土 破片	厚 0.9	白色微粒子 黒色粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り。叩き整形（外面平行叩き・内面宛具は青海波文）器外面に自然釉付着。	乗附系
111-1 55	須恵器 大 甕	暗濁黒褐色粘質土 破片	厚 1.5	白色鉍物粒子 雲母石英片岩	還元焰	内外・橙 断・灰	紐作り。叩き整形（外面格子叩きか平行叩き・内面宛具は青海波文）後内面を撫で再整形。	吉井・藤岡系か

## 染谷川河川敷 3 区遺構外扱祭祀

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
112-1 55	須恵器 坏	暗灰褐色土層 破片	底 ( 8.0)	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	轆轤成形（右回転）、底部は回転糸切り。	乗附系
112-2 55	須恵器 坏	暗灰褐色土 破片	口 ( 8.0)	白色微粒子	還元焰	白灰	轆轤成形（右回転）。底部は回転篋起し。	秋間系
112-3 55	須恵器 塊	暗灰褐色土 破片	底 ( 9.2)	白色粒子 黒色粒子	還元焰	白灰	轆轤成形（右回転）。付高台。	秋間系
112-4 55	須恵器 壺	暗灰褐色土層 破片	頸 (20.0)	白色鉍物粒子 白色粒子	中性焰 軟質	断・灰 オリープ 内・外黒 褐	紐作り後轆轤整形（右回転）。	吉井系

## 染谷川河川敷祭祀

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
113-1 55	須恵器 坏	暗灰褐色砂層 破片	口 (12.2) 底 ( 3.2) 高 ( 6.4)	白色微粒子	還元焰	暗灰	轆轤成形（右回転）、底部は回転糸切り。	秋間系
113-2 55	須恵器 坏	暗灰褐色土砂層 破片	底 ( 8.2)	白色鉍物粒子 黒色粒子	還元焰 焼締め	灰	轆轤成形（右回転）。底部は回転篋起しか。自然釉付着。	秋間系
113-3	須恵器 横 瓮	暗灰褐色土砂層 破片	厚 0.7	白色微粒子 白色鉍物粒子	還元焰	オリープ 灰	紐作り後轆轤整形。	東海系

## 染谷川河川敷濁灰褐色粗粒土

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
114-1 55	土師器 坏	濁灰褐色粗粒土	口 (18.0) 底 (13.0)	赤褐色粒子 白色微粒子 水簸土か	還元焰	鈍橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、底部は篋削整形。口縁部器内面放射状暗文を施す。	藤岡系 MA1類系
114-2 55	土師器 坏	濁灰褐色粗粒土 破片	口 (11.3) 底 ( 8.0)	黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	吉井・藤岡系
114-3 55	須恵器 坏	濁灰褐色粗粒土 破片	口 (11.5) 底 ( 6.6)	雲母石英片岩 微粒長石	還元焰 焼締め	灰	轆轤成形（右回転）、底部は回転糸切り。	乗附系

## 遺物観察表

## 濁黒褐色粘質土

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
115-1 55	土師器 甕	3区濁黒 褐色粘質 土層 破片	口 (24.2)	黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子 白色粒子	酸化焰	橙	口縁部は外反する。型作り成形。外面胴部は 篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	吉井・藤 岡系

## 2区セクションベルトカーボン層中

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
116-1 56	土師器 坏	セクシ ョンベ ルトカ ーボン 層中 破片	口 (12.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	T	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M1類系
116-2 56	土師器 坏	2区セク ションベ ルトカ ーボン 層中 破片	口 (12.1)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	D, K	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M1類系
116-3 55	土師器 坏	2区セク ションベ ルトカ ーボン 層中 破片	口 (13.3) 底 (10.4) 高 (3.0)	黒色鉍物粒子 微粒長石 白色微粒	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M1類系
116-4 55	土師器 坏	2区セク ションベ ルトカ ーボン 層中 破片	口 (14.1) 高 (3.3)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。口縁直下に 型膚を残し、下半部は篋削り。底部は篋削り。	藤岡系 M1類系
116-5 56	土師器 坏	2区セク ションベ ルトカ ーボン 層 破片	口 (13.5) 高 2.9	微粒長石 黒色鉍物粒子 白色微粒	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M1類系
116-6 55	土師器 坏	2区セク ションベ ルトカ ーボン 層中 破片	口 (12.2) 高 (3.5)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰 M2類 系	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。口縁直下に 型膚を残し、下半部は篋削り。底部は篋削り。	藤岡系 M2類系
116-7 56	須恵器 坏	2区セク ションベ ルトカ ーボン 層中 破片	口 (13.0)	黒色粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形 (右回転)。	秋間系
116-8 56	須恵器 坏	2区セク ションベ ルトカ ーボン 層中 破片	口 (13.8)	透明鉍物粒子 白色鉍物粒子	還元焰	灰白	轆轤成形 (右回転)。	吉井系

## 3区遺構外

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
117-1 56	縄文式土 器 深鉢	III層 口縁部片	厚 0.8	透明鉍物粒子 ハミングトン 閃石 甲1類	酸化焰	鈍橙	諸磯c式。横位・斜位の条痕を施し、ボタン 文を貼付する。口唇部は刻みを施す。器内面 は横撫でを施す。	

## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
117-2 56	縄文式土器 深鉢	砂層 破片	厚 0.8	透明鉱物粒子 黒色鉱物粒子 白色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	諸磯C式。横位平行の条線を施し、棒状貼付文を施す。	
117-3	縄文式土器 深鉢	砂層 破片	厚 0.9	微粒長石 微粒雲母 透明鉱物粒子	酸化焰	橙	加曾利E式系連弧文状に隆帯文を施し、上面にRL原体を施す。	西毛系か
117-4 56	縄文式土器 器台	A1溝 覆土内 破片	厚 (21.0)	白色粒子 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍黄橙	脚部に透しを施す。透しは鋭い窪に穿たれやや方形気味。図上でこの透しを複製した場合14単位になる。	
117-5 56	石器 定角磨製 石斧	砂層 一部欠損	長 12.3 幅 4.9 厚 3.6	変質安山岩	—	—	刃部側を欠損する。	重300g
117-6 56	石器 打製石斧	調査区内 完存	長 4.8 幅 3.5 厚 1.5	—	—	—	短冊形石斧、片面側に部分的な自然面を残す。表裏面には被熱割れが認められる。	重51.6g
117-7 62	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (12.0)	石英粒 パミス 甲種粘土	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。口縁直下に型膚を残し、下半部は篋削り。	不詳
117-8 62	土師器 小型甕	III'層 破片	口 (12.0)	黒色鉱物粒子 透明鉱物粒子	酸化焰	褐	型作り成形。口縁部は短く外傾し、横撫でを施す。体部に型膚を残す。器内面に暗文を施す。	不詳
117-9 62	土師器 坏	埋土内 破片	口 (12.6)	透明鉱物粒子 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍褐	型作り成形。口縁部は強く外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。体部に型膚を残す。	不詳
117-10 56	土師器 高坏	III'層 破片	基 4.0	黒色鉱物粒子 微粒長石	酸化焰	橙	脚部は「八」の字状に開き、器外面には縦位の暗文が施されている。坏部は型作りと考えられ、器外面は篋等の撫で整形が施されている。	不詳
117-11 62	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (10.0)	微粒長石 赤褐色粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	西毛系か
117-12 62	土師器 坏	調査区内 破片	口 (10.0) 高 (4.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
117-13 62	土師器 坏	3区III'層 破片	口 (11.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰 硬質	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
117-14 56	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (11.0) 高 (4.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
117-15 62	土師器 坏	2区III層 破片	口 (11.2)	微粒長石 水簸土か	硬質 酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
117-16 62	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (11.4)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
117-17 62	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (11.4)	微粒雲母 微粒長石	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
117-18 56	土師器 坏	III'層 破片	口 (12.0)	微粒長石 白色鉱物粒子 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
117-19 62	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
117-20 62	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
117-21 62	土師器 坏	III'層 破片	口 (12.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
117-22 62	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (14.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
117-23 62	土 師 器	2区Ⅲ'層 破片	口 (12.6)	微粒長石 雲母石英片岩 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
117-24 62	土 師 器 坏	2区Ⅲ'層 破片	口 (12.4) 底 (11.0)	微粒長石 透明鉱物粒子 微粒雲母	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	西毛系か
117-25 62	土 師 器 高坏坏部	Ⅲ'層 破片	口 (13.0)	微粒長石 赤褐色粒子	酸化焰	褐	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り(坏部)。脚部は欠損する。	藤岡系
117-26 62	土 師 器 坏	3区Ⅲ'層 破片	口 (13.2)	微粒長石 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
117-27 62	土 師 器 坏	2区Ⅲ'層 破片	口 (13.0) 底 (11.6)	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	西毛系か
117-28 62	土 師 器 坏	Ⅲ'層 破片	口 (13.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
118-1 62	土 師 器 坏	2区Ⅲ'層 破片	口 14.0)	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	西毛系か
118-2 62	土 師 器 坏	2区Ⅲ'層 破片	口 (14.0) 高 4.3	微粒長石 白色鉱物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	不詳 (西毛系か)
118-3 62	土 師 器 坏	Ⅲ'層 破片	口 14.0	微粒長石 水簸土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
118-4 62	土 師 器 坏	Ⅲ'層 破片	口 (14.0)	微粒雲母 赤褐色粒子 水簸土	酸化焰	褐	型作り成形。口縁部は2段以上の篋撫でにより外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系か
118-5 62	土 師 器 坏	2区Ⅲ'層 破片	口 (14.2)	微粒長石 微粒雲母	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系か
118-6 56	土 師 器 坏	Ⅲ'層 片	口 (15.0)	微粒長石 赤褐色粒子	酸化焰	橙褐	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	東毛系か
118-7 62	土 師 器 坏	2区Ⅲ'層 破片	口 (16.0)	微粒長石 雲母石英片岩 赤褐色粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
118-8 62	土 師 器 坏	2区Ⅲ'層 破片	口 (12.0)	微粒長石 赤褐色粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は篋撫でにより稜を有し直立する。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
118-9 62	土 師 器 坏	2区Ⅲ'層 破片	口 (13.0)	白色微粒子	酸化焰	断・鈍褐 外・灰	型作り成形。口縁部は直立する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	不詳
118-10 62	土 師 器 坏	2区Ⅲ'層 破片	口 (12.8) 高 ( 3.6)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	淡橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	東毛系か
118-11 62	土 師 器 坏	調査区内 破片	口 (13.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	東毛系か
118-12 56	土 師 器 坏	2区Ⅲ'層 片	口 (13.0) 底 (11.3) 高 4.3	微粒長石 赤褐色粒子	酸化焰	鈍黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	東毛系か
118-13 56	土 師 器 黒色土器 坏	2区Ⅲ'層 破片	口 (14.0)	微粒長石 白色微粒子	酸化焰	鈍黄褐	型作り成形。口縁部は2段以上の篋撫でにより強い稜を有し外傾する。底部は篋削を施す。	東毛系
118-14 62	土 師 器 黒色土器 坏	3区Ⅲ'層 破片		黒色鉱物粒子 赤褐色粒子	酸化焰	鈍褐	型作り成形。口縁部は2段以上の篋撫でにより弱い稜を有し外傾する。底部は篋削を施し、口縁直下に型膚を残す。	東毛系
118-15 56	土 師 器 黒色土器 坏	3区Ⅲ'層 片	口 (14.0) 底 (11.6) 高 4.0	白色微粒子 黒色鉱物粒子	酸化焰	褐灰	型作り成形。口縁部は2段以上の篋撫でにより、強い稜を有し外傾する。底部は篋削を施し、口縁直下に型膚を残す。器内面共に燻す。	東毛系

## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
118-16 62	土師器 黒色土器 坏	2区III'層 破片	口 (14.0)	微粒長石 白色微粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋撫でにより強い稜を有し外傾する。底部は篋削を施し、口縁直下に型膚を残す。内外面を軽く燻した状態。	東毛系か
118-17 62	土師器 黒色土器 坏	2区III'層 破片	口 (14.0) 高 (3.1)	微粒長石 白色微粒子	酸化焰	赤褐	型作り成形。口縁部は2段以上の篋撫でにより、強い稜を有し外傾する。底部は篋削を施し、口縁直下に型膚を残す。器内・外面を吸炭させている。	東毛系
118-18 62	土師器 黒色土器 坏	2区III'層 破片	口 (13.0)	微粒長石 白色粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は2段以上の篋撫でにより強い稜を有し外傾する。底部は篋削を施し、器内・外面を吸炭させている。	東毛系
118-19 56	土師器 黒色土器 坏	2区III'層 破片	口 (13.4)	透明鉍物粒子 微粒長石	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により直立気味。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	東毛系
118-20 62	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (10.6) 高 (2.5)	微粒長石 雲母石英片岩	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
118-21 62	土師器 坏	3区III'層 破片	口 (10.0) 底 (9.2)	微粒長石 水箴土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
118-22 62	土師器 坏	III'層 破片	口 (12.0)	微粒長石 水箴土か	酸化焰 硬質	橙	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。焼成による焼歪みが著しい。	西毛系か
118-23 62	土師器 坏	3区III'層 破片	口 (12.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	吉井・藤岡系 M2類系
118-24 62	土師器 坏	覆土内 破片	口 (12.0)	微粒長石 水箴土か	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
118-25 62	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (11.6)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M3類系
118-26 62	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (12.0) 底 (11.0)	白色鉍物粒子 黒色鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	吉井・藤岡系
118-27 62	土師器 坏	覆土内 破片	口 (13.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰 硬質	鈍橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。外器面に型膚を残す。	藤岡系
119-1 56	土師器 坏	暗濁黒褐色粘質土 破片	口 (11.3)	微粒長石	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。器内面全面に漆が付着する。	藤岡系
119-2 56	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (11.2) 高 3.2	微粒雲母 微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	M1類系 藤岡系
119-3 62	土師器 坏	3区III'層 破片	口 (11.6)	微粒長石 水箴土か	酸化焰	褐	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系
119-4 56	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (12.0)	黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子 微粒長石	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M2類系
119-5 56	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (13.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り。口縁部直立気味。体部・底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系 M1類系
119-6 62	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (13.0)	長石粒 黒色鉍物粒子 白色粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M1類系
119-7 56	土師器 坏	3区III'層 破片	口 (13.2)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。篋描き記号「井」(内面)。	藤岡系 M1類系
119-8 56	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (13.2)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	暗赤褐	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	吉・藤系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
119-9 56	土 師 器 坏	III'層 破片	口 (12.4)	微粒長石 透明鉍物粒子 黒色鉍物粒子	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M1類系
119-10 56	土 師 器 坏	3区暗濁 黒褐色粘 質土 破片	口 (12.5) 高 3.4	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	吉井・藤 岡系 M1類系
119-11 56	土 師 器 坏	3区南III' 層 破片	口 (13.0) 高 ( 3.2)	微粒雲母 微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。使用期間が短い。	藤岡系
119-12 56・80	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (16.2) 高 2.3	黒色鉍物粒子 微粒雲母	酸化焙	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。器内外面に焼成後「×」の篋記号を施してある。	藤岡系
119-13 56	土 師 器 坏	3区III'層 破片	口 (13.6) 高 3.3	微粒雲母 微粒長石	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M1類系へ
119-14 62	土 師 器 坏	2区III'層 破片	口 (14.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系
119-15 62	土 師 器 坏	濁暗灰砂 層 破片	口 (14.0)	透明鉍物粒子 黒色鉍物粒子	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。器内面に暗文を施す。	吉井・藤 岡系
119-16 56	土 師 器 坏	III'層 破片	口 (14.4) 高 ( 3.1)	透明鉍物粒子 黒色鉍物粒子 白色鉍物粒子	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	吉井・藤 岡系 M1類系
119-17 62	土 師 器 坏	3区内 破片	口 (15.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焙	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M1類系
119-18 62	土 師 器 坏	2区III'層 破片	口 (15.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焙	褐	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M2類系
119-19 56	土 師 器 坏	土器溜り 破片	口 (15.0) 高 ( 3.9)	黒色鉍物粒子 微粒雲母	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部内湾気味。体部・底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系 M1類系
119-20 56	土 師 器 坏	III'層 破片	口 (15.0) 高 3.7	黒色鉍物粒子 微粒雲母	酸化焙	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M1類系
119-21 56	土 師 器 坏	3区III層 破片	口 (18.0) 高 ( 5.2)	微粒長石 黒色鉍物粒子 白色粒子	酸化焙	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系
120-1 62	土 師 器 坏	2区III'層 破片	口 (11.0) 底 ( 9.2)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焙	黄橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M1類系
120-2 56	土 師 器 坏	3区内 破片	口 (12.2)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焙	鈍黄橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は平底で篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M1類系
120-3 56	土 師 器 坏	III'層 破片	口 (13.2)	黒色鉍物粒子 微粒長石	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M1類系
120-4 56	土 師 器 坏	3区III'層 破片	口 (12.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M1類系
120-5 62	土 師 器 坏	2区III'層 破片	口 (11.8) 底 ( 7.0) 高 ( 3.4)	微粒長石 雲母石英片岩	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。下半部は篋削り。底部は篋削り。	藤岡系 M1類系
120-6 62	土 師 器 坏	3区III'層 破片	口 (12.6) 底 ( 9.0)	微粒長石 雲母石英片岩	酸化焙	浅黄橙	型作り。口縁部は外傾する。体部・底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系 M2類系
120-7 56	土 師 器 坏	3区III'層 破片	口 (12.6) 高 3.6	微粒長石 白色微粒子 微粒雲母	酸化焙	黄橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、底部は篋削り整形。器内面に二重暗文を施す。器内外面風化の為、暗文等微弱な痕跡を留めるのみか。	藤岡系 MA2類系
120-8 56	土 師 器 坏	3区III'層 破片	口 (16.0) 高 4.5	微粒雲母 微粒長石 畑土か 水簸土か	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。口縁直下に型膚を残し、下半部は篋削り。底部は篋削り。暗文は認められない。	藤岡系 MA1類系
120-9 56	土 師 器 坏	2区III'層 破片	口 (10.0) 高 3.2	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焙	鈍橙	型作り。口縁部は外傾する。体部・底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系
120-10 56	土 師 器 坏	2区III'層 破片	口 (13.8)	微粒長石 透明鉍物粒子 黒色鉍物粒子	酸化焙	黄灰	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M1類系

## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
120-11 56	土師器 坏	2区III'層 ⅔	□ (12.6)	石英粒 長石粒 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は笥削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M2類系
120-12 62	土師器 坏	3区III'層 破片	□ (12.6)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は笥削り。体部に型膚を残す。	藤岡系
120-13 62	土師器 坏	3区III'層 ⅔	□ (12.6)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍黄橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は笥削り。体部に型膚を残す。	西毛系か
120-14 62	土師器 坏	2区III'層 破片	□ (13.0)	微粒長石 白色微粒子 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部は笥撫でにより稜を有し外傾する。	藤岡系 M2類系
120-15 62	土師器 坏	2区III'層 破片	□ (13.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子 白色微粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は笥削り。体部に型膚を残す。	不詳
120-16 63	土師器 坏	3区III'層 破片	□ (13.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子 透明鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は笥削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M2類系

## 2区遺構外

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
120-17 63	土師器 坏	河川敷2区 III'層 破片	□ (13.0)	黒色鉱物粒子 微粒長石 透明鉱物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は笥削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M3類系
120-18 63	土師器 坏	3区III'層 破片	□ (13.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は笥削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M2類系
120-19 56	土師器 坏	III'層 ⅔	□ (13.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は笥削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M3類系
120-20 57	土師器 坏	2区III'層 ⅔	□ (13.0) 高 3.2	黒色鉱物粒子 微粒長石 白色粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は笥削り。体部に型膚を残す。	吉井・藤岡系
120-21 63	土師器 坏	2区III'層 破片	□ (14.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は笥削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M2類系
120-22 57・80	土師器 坏	III'層 破片	□ (14.0)	黒色鉱物粒子 透明鉱物粒子 微粒長石	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は笥削り。体部に型膚を残す。	藤岡系
120-23 63	土師器 坏	3区III'層 破片	□ 14.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は笥削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M2類系
120-24 57	土師器 坏	2区III'層 破片	□ (14.0) 高 (2.8)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍赤橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は笥削り。口縁部に型甘帯を残し、体部に型膚を残す。	藤岡系 M2類系
120-25 57	土師器 坏	2区III'層 ⅔	□ (14.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	橙褐	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は笥削り。体部に型膚を残す。	M2類系
120-26 57	土師器 坏	暗濁黒褐色 破片	□ (16.2)	黒色鉱物粒子 微粒雲母	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は笥削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M2類系
120-27 63	土師器 坏	3区III'層 破片	□ (17.2)	微粒長石 黒色鉱物粒子 白色微粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は笥削り。体部に型膚を残す。	西毛系か
121-1 63・80	土師器 坏	2区III'層 ⅔	□ (13.0)	黒色鉱物粒子 白色微粒子 微粒長石	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は笥削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M2類系
121-2 63	土師器 坏	2区III'層 破片	□ (12.0)	雲母石英片岩 微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は笥削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M2類系
121-3 63	土師器 坏	3区III'層 破片	□ (12.0) 底 (8.2) 高 3.5	微粒長石 黒色鉱物粒子 白色微粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は平底で笥削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M2類系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
121-4 63	土師器 坏	3区Ⅲ'層 破片	口 (13.0) 底 ( 9.2)	微粒長石 黒色鉍物粒子 白色粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は平底で篋削り。体部に型膚を残す。	西毛系か
121-5 63	土師器 坏	3区Ⅲ'層 破片	口 (13.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	橙褐	型作り。口縁部は外傾する。体部・底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系 M2類系
121-6 57	土師器 坏	Ⅲ'層 片	口 (11.0) 底 ( 7.6) 高 4.0	赤褐色粒子 白色微粒子 水簸土か	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部下半に型膚を残す。	吉井・藤岡系 MA1類系
121-7 63	土師器 坏	2区Ⅲ'層 破片	口 (13.0)	微粒長石 白色微粒子	酸化焰	橙		藤岡系 MA2類系
121-8 63・81	土師器 坏	調査区内 破片	口 (14.6) 底 ( 9.6)	微粒長石 雲母石英片岩	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。篋描き記号瓦「十」(内面)。	藤岡系 M2類系
121-9 57	土師器 坏	2区Ⅲ'層 破片	口 (10.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り。口縁部直立気味。体部・底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系 M3類系
121-10 63	土師器 坏	2区Ⅲ'層 破片	口 (10.8)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により直立気味。底部は篋削り。	藤岡系 M1類系
121-11 57	土師器 坏	FA直上 3区Ⅲ'層 片	口 10.6 高 3.4	微粒長石 黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。バーजन个体。	藤岡系 M3類系
121-12 57	土師器 坏	Ⅲ'層 片	口 (11.4)	微粒雲母 白色鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部篋状工具の横撫により直立気味。口縁直下に稜を有し、型膚を残す。底部は篋削り。	藤岡系
121-13 63	土師器 坏	3区Ⅲ'層 破片	口 (12.0)	微粒長石 白色鉍物粒子	酸化焰	褐	型作り。口縁部内湾気味。体部・底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系 M3類系
121-14 57	土師器 坏	3区南Ⅲ' 層 片	口 (12.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M3類系
121-15 57	土師器 坏	3区南Ⅲ' 層 破片	口 (12.0) 高 ( 3.6)	黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子 微粒長石	酸化焰	褐灰	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M3類系
121-16 63	土師器 坏	3区南Ⅲ' 層 破片	口 (11.0) 高 ( 3.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	暗橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M3類系
121-17 57	土師器 坏	3区南Ⅲ' 層 片	口 (13.0) 高 3.4	微粒長石 透明鉍物粒子 黒色鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M3類系
121-18 57	土師器 坏	3区Ⅲ'層 片	口 (13.4)	黒色鉍物粒子 白色微粒子 微粒長石	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	吉井・藤岡系 M3類系
121-19 57	土師器 坏	2区Ⅲ'層 片	口 (13.6) 高 ( 3.2)	黒色鉍物粒子 微粒長石 微粒雲母	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M3類系
121-20 63	土師器 坏	Ⅲ'層 破片	口 (14.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰 硬質	鈍橙	型作り。口縁部は外傾する。体部・底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系 M3類系
121-21 63	土師器 坏	2区Ⅲ'層 破片	口 (14.0)	微粒長石 白色微粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系
121-22 63	土師器 坏	3区Ⅲ'層 破片	口 (10.0) 高 ( 3.2)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	鈍黄橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系か
122-1 57	土師器 坏	2区Ⅲ'層 片	口 (14.2) 高 ( 4.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子 雲母粒	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	西毛系か (M3類系)
122-2 57	土師器 坏	2区Ⅲ'層 破片	口 (14.2)	黒色鉍物粒子 白色微粒子 微粒長石	酸化焰	鈍黄橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	吉・藤系 M3類系
122-3 57	土師器 坏	2区Ⅲ'層 片	口 (15.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M3類系



## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
123-4 63	土師器 坏	2区III'層 ㄨ	口 (16.0)	雲母粒 雲母石英片岩 微粒長石	酸化焰	橙	型作り。口縁部直立気味。体部・底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系 M3類系
122-5 57	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (16.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子 透明鉱物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M1類系
122-6 63	土師器 坏	3区区内 破片	口 (16.4)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M3類系
122-7 63	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (15.2)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で。体部に型膚を残す。	藤岡系
122-8 63	土師器 坏	3区III'層 破片	高 (6.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍黄橙	型作り成形。器内面は横撫で、底部は平底気味篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M2類系
122-9 63・86	土師器 坏	2区III'層 破片	厚 0.5	微粒長石 黒色鉱物粒子 白色微粒子	酸化焰	橙	篋描き記号「#」と考えられる。(内面)。	藤岡系
122-10 63・80	土師器 坏	2区III'層 破片	口 0.6	微粒長石 白色微粒子	酸化焰	橙	篋描き記号「#」(内面)。	藤岡系
122-11 57・80	土師器 坏	2区III'層 ㄨ残	口 (11.6) 高 3.6	微粒長石 白色微粒子 水簸土か	酸化焰	鈍橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、底部は篋削整形。口縁部器内面放射状暗文を施す。	藤岡系 MA2類系
122-12 63	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (12.0)	微粒長石 白色微粒子	酸化焰	鈍橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、底部は篋削整形。口縁部器内面放射状暗文を施す。	東毛系か
122-13 63	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (12.4) 底 (5.8) 高 3.6	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、底部は篋削整形。器内面に二重暗文を施す。	藤岡系 MA2類系
122-14 63	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (12.0) 底 (7.6)	微粒長石 雲母石英片岩	酸化焰	鈍橙	型作り成形。器内外面は風化により整形痕等の詳細は不詳。	藤岡系 MA2類系
122-15 57	土師器 坏	III'層 ㄨ	口 (13.0) 底 (9.0)	雲母石英片岩 微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙 鈍黄橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、底部は篋削整形。器内面は二重暗文を施す。	藤岡系 MA1類系
122-16 57	土師器 坏	2区III'層 ㄨ残	口 (12.6) 高 4.3	微粒長石 雲母石英片岩 畑土か	酸化焰	鈍橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、底部は篋削整形。口縁部器内面放射状暗文を施す。	藤岡系 MA2類系
122-17 57	土師器 坏	2区III'層 ㄨ	口 (13.0) 高 3.6	微粒長石 微粒雲母 雲母石英片岩	酸化焰	橙褐	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、底部は篋削整形。器内面に二重暗文を施す。	藤岡系 (畑土) MA2類系
123-1 57	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (13.4)	微粒長石 白色微粒子 畑土	酸化焰	黄灰	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、底部は篋削整形。器内面に二重暗文を施す。	藤岡系 MA2類系
123-2 57	土師器 坏	3区III'層 ㄨ残存	口 (13.0)	微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、底部は篋削整形。器内面に二重暗文を施す。	藤岡系 MA2類系
123-3 57・80	土師器 坏	3区III'層 ㄨ	口 (14.0) 高 4.6	微粒長石 雲母石英片岩 白色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、底部は篋削整形。器内面に二重暗文を施す。目込みに焼成後篋描き「☆」を刻む。	藤岡系 MA1類系
123-4 63	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (13.2)	微粒長石 白色微粒子	酸化焰	橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、底部は篋削整形。口縁部器内面放射状暗文を施す。	藤岡系 MA2類系
123-5 63	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (13.0)	微粒長石 畑土か	酸化焰	橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、底部は篋削整形。口縁部器内面放射状暗文を施す。	藤岡系
123-6 63	土師器 坏	2区セク ション ベルト ㄨ	口 (13.4) 底 (9.2) 高 (3.6)	微粒長石 白色微粒子 白色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、底部は篋削整形。器内面に二重暗文を施す。	藤岡系
123-7 63	土師器 坏	3区III'層 破片	口 (14.0)	微粒長石 デイサイト 雲母石英片岩	酸化焰	橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、底部は篋削整形。器内面に二重暗文を施す。	藤岡系 MA2類系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
123-8 57	土師器 坏	III'層 暗濁黒褐 粘質土 1/2残	口 (13.8)	微粒長石 透明鉍物粒子 水簸土か	酸化焰	鈍橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、 底部は篋削整形。器内面に二重暗文を施す。	藤岡系 MA 2類系
123-9 57	土師器 坏	3区III'層 破片	口 (14.0) 高 3.9	微粒雲母 微粒長石 水簸土か	酸化焰	橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、 底部は篋削整形。器内面に二重暗文を施す。	藤岡系 MA 2類系
123-10 63	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (12.0) 底 (5.4) 高 3.6	微粒長石 白色微粒子 水簸土か	酸化焰	橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、 底部は篋削整形。口縁部器内面放射状暗文を 施す。	藤岡系 MA 2類系
123-11 57	土師器 坏	3区III'層 破片	口 (14.0)	微粒長石 雲母石英片岩 畑土	酸化焰	橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、 底部は篋削整形。器内面に二重暗文を施す。	藤岡系 MA 2類系
123-12 57	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (14.0)	雲母粒 微粒長石 (比重値高い)	酸化焰	黄橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、 底部は篋削整形。器内面に二重暗文を施す。	東毛系か
123-13 63	土師器 坏	3区III'層 破片	口 (14.4)	微粒長石 白色微粒子	酸化焰	橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、 底部は篋削整形。口縁部器内面放射状暗文を 施す。	藤岡系 MA 2類系
123-14 57・80	土師器 坏	2区III'層 1/2	口 (14.0) 底 8.4 高 3.8	微粒長石 雲母石英片岩	酸化焰	鈍橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、 底部は篋削整形。器内面に二重暗文を施す。	藤岡系
124-1 57	土師器 坏	2区III'層 1/2	口 14.4 底 9.4 高 4.3	微粒長石 雲母石英片岩	酸化焰	橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、 底部は篋削整形。器内面に二重暗文を施す。	藤岡系 MA 2類系
124-2 57	土師器 坏	2区III'層 ほぼ完形	口 14.5 底 9.5 高 3.9	雲母石英片岩 微粒長石 雲母粒	酸化焰	橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、 底部は篋削整形。器内面に二重暗文を施す。 口縁部に篋痕が認められる。	藤岡系 MA 2類 系
124-3 63	土師器 坏	暗濁黒褐 粘質土 破片	口 (15.0)	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、 底部は篋削整形。口縁部器内面放射状暗文を 施す。	藤岡系
124-4 63	土師器 坏	3区南III' 層 破片 1/2	口 (15.3) 底 (10.2)	雲母石英片岩 白色鉍物粒子 水簸土か	酸化焰	黄橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、 底部は篋削整形。口縁部器内面放射状暗文を 施す。器内面に紐疔痕が認められる。	藤岡系 MA 2類系
124-5 57・80	土師器 坏	2区III'層 1/2	口 (15.2) 底 — 高 4.3	微粒長石 雲母石英片岩 水簸土か	酸化焰	橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、 底部は篋削整形。口縁部器内面放射状暗文を 施す。	藤岡系 (畑土) MA 2類系
124-6 57	土師器 坏	III'層 1/2	口 (16.0)	微粒長石 雲母石英片岩	酸化焰	橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、 底部は篋削整形。口縁部器内面放射状暗文を 施す。	藤岡系 MA 2類系
124-7 57	土師器 坏	2区III'層 1/2残	口 (16.0) 底 (12.2) 高 (4.2)	微粒長石 雲母石英片岩 水簸土か	酸化焰	橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、 底部は篋削整形。器内面に二重暗文を施す。 底部縄目痕が認められる。	藤岡系 MA 2類系
124-8 57	土師器 坏	2区III'層 1/2	口 (15.4) 高 4.5	微粒長石 雲母石英片岩	酸化焰	鈍橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、 底部は篋削整形。器内面に二重暗文を施すが、 風化により鮮明ではない。	藤岡系 MA 1類系
125-1 57・80	土師器 坏	2区III'層 1/2残	口 16.0 高 5.1	黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子 微粒長石	酸化焰	鈍橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、 底部は篋削整形。器内面に二重暗文を施す。	藤岡系 MA 2類系
125-2 57	土師器 坏	III'層 破片	底 7.5	微粒長石 微粒雲母 黒色鉍物粒子	酸化焰	黄橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、 底部は篋削整形。器内面に二重暗文を施す。	藤岡系 MA 1類系
125-3	土師器 坏	2区セク ションベ ルト 1/2	口 (16.1) 底 (11.8) 高 3.9	赤褐色粒子 白色鉍物粒子 微粒長石	酸化焰	浅黄橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、 底部は篋削整形。器内面に二重暗文を施す。	藤岡系か
125-4 63	土師器 坏	3区III'層 破片	口 (18.0) 高 (3.8)	微粒長石 畑土か 水簸土か	酸化焰	橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、 底部は篋削整形。器内面に二重暗文を施す。	藤岡系

## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
125-5 58	土師器 坏	3区III'層 破片	口 (16.0) 底 (8.8) 高 5.1	微粒長石 白色鉍物粒子 水箠土か	酸化焰 硬質	橙	型作り。口縁部は外傾し体部は斜位の篋削り、 底部は篋削整形。器内面に二重暗文を施す。	藤岡系 MA1類系
125-6 63	土師器 坏	III'層 破片	口 (12.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子 白色粒子	酸化焰	褐	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。	東毛系
125-7 63	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (12.0) 底 (11.6)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	淡褐	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直 下に強い稜を有する。底部は篋削り。口縁直 下に型膚を残す。	東毛系か
125-8 63	土師器 坏	3区III'層 破片	口 (12.6)	黒色鉍物粒子 微粒長石	酸化焰	褐	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系か
125-9 63	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (14.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	褐	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系
125-10 63	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (14.0)	微粒長石 透明鉍物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系か
125-11 58	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (15.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部篋削整形の横撫により直 立気味。底部は篋削り。	東毛系か (M2類系)
125-12 63・80	土師器 坏	III'層 破片	口 (12.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。篋描き記号意 味不明(内面)(焼成後)。	東毛系か
125-13 63	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (12.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系か
125-14 63	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (12.4)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系か
125-15 63	土師器 坏	3区III'層 破片	口 (12.0) 高 (2.7)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	鈍褐	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系
125-16 63・80	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (13.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。篋描き記号「井」 (内面)。	東毛系か
125-17 57	土師器 坏	III'層 破片	口 (11.0) 高 3.0	黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は平底で篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系か
126-1 63	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (12.0)	黒色鉍物粒子 白色微粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系
126-2 63	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (12.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系
126-3 63	土師器 坏	III'層 破片	口 (12.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子 白色粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系
126-4 63	土師器 坏	III'層 破片	口 12.6	白色微粒子 黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系
126-5 63	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (12.6)	微粒長石 黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系か
126-6 63	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (13.0)	微粒長石 酸化焰	酸化焰	褐	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系
126-7 63	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (14.0)	微粒長石 白色微粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系
126-8 63	土師器 坏	3区III'層 破片	口 (15.0)	黒色鉍物粒子 雲母粒	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系
126-9 64	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (11.4)	微粒長石 微粒雲母	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系
126-10 64	土師器 坏	3区内 破片	口 (12.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系
126-11 64	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (12.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系か
126-12 64	土師器 坏	3区III'層 破片	口 (12.6)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系
126-13 64	土師器 坏	III'層 破片	口 (13.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	橙褐	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部 は篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
126-14 58	土師器 坏	III'層 破片	口 (13.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は平底で篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系
126-15 64	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (13.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は平底気味で篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系
126-16 64	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (12.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	橙	型作り。口縁部直立気味。体部・底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。	東毛系か
126-17 64	土師器 坏	3区III'層 破片	口 (11.0) 底 (7.0)	黒色鉱物粒子 白色微粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系
126-18 64	土師器 坏	3区III'層 破片	口 (14.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系
126-19 64	土師器 坏	口(14.4) 高(2.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子 白色微粒子	酸化焰	酸化焰	鈍黄橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は平底で篋削り。体部に型膚を残す。	東毛系
126-20 64	土師器 坏	2区III'層 破片	口 (13.0)	微粒長石 微粒雲母	酸化焰	鈍褐	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、体部に型膚を残す。	搬入品か
126-21 58	土師器 坏	3区III'層 破片	口 (12.2) 底 (9.1) 高 4.0	微粒雲母 微粒長石	酸化焰	鈍黄橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は平底で篋削り。	搬入品か (埼玉か)
126-22 58	土師器 短頸壺	調査区内 破片	口 (17.0) 高 (8.3)	微粒長石 微粒雲母 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰 硬質	褐	型作り成形。口縁部は外反する。外面口縁直下に稜を有する。底部は篋削り。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
126-23 64	土師器 鉢	2区III'層 破片		赤褐色粒子 黒色鉱物粒子 透明鉱物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形か。外面は軽い篋削りを施す。内面は丁寧な横撫で轆轤を施す。	不詳
126-24 58	土師器 高坏	III'層 脚部	基部 4.0	白色粒子 透明鉱物粒子	酸化焰	赤褐	坏部は型作り。脚部は紐作りか。脚部外面は縦位の篋撫後、横位の撫で整形。内面は横位の篋撫で。	不詳
126-25 58	土師器 高坏	2区III'層 破片	基部 5.2	黒色鉱物粒子 透明鉱物粒子 白色粒子	酸化焰	橙	紐作り成形。外面は縦位の篋削り整形。内面は篋撫で整形。	吉井・藤岡系
126-26 64	土師器 高坏	III'層 破片	—	微粒長石 雲母石英片岩 藤岡畑土	酸化焰	赤褐	紐作り成形。器内面は紐積み痕を顕著に残す。器外面は縦位の篋撫を施し、一部篋削りを施す。	藤岡系
126-27 58	土師器 高坏	3区 脚部破片	基 4.8	微粒長石 雲母石英片岩 赤褐色粒子	酸化焰	淡橙	紐作り成形。脚部器内面には紐の痕跡を残す。外面は縦位の篋撫で乃至篋削り整形。	藤岡系 畑土
127-1 64	土師器 小型壺	暗灰褐色 砂層 破片	口 11.0 頸 9.8	細砂粒	酸化焰 二次焼成を受ける。	鈍赤褐	紐作り成形。器面の風化が顕著な為詳細不詳。	不詳
127-2 64	土師器 壺	2区III'層 破片	口 (12.0)	微粒長石 赤褐色粒子 水簸土か	酸化焰	明赤褐	下半部は型作り。上半部は紐作り。肩部は横位の篋削り、口縁部は横位の撫でを施す。	藤岡系
127-3 64	土師器 罎	2区暗灰 褐色 破片	底 4.0	黒色鉱物粒子 透明鉱物粒子 白色粒子	酸化焰	灰黄褐	下半部は型作り成形。上半部は紐作り成形。内面頸部にしぼりの痕跡が認められる器内面は撫で整形。外面下半は横位の篋削り、上位は磨きを施すが風化している。	吉井・藤岡系か
127-4 58	土師器 甕	破片	口 (15.2)	微粒長石 微粒雲母 白色微粒子	酸化焰	橙	口縁部は外傾する。紐作り。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	吉井・藤岡系
127-5 64	土師器 甕	2区III'層 破片	口 (16.2)	白色粒子 黒色鉱物粒子 透明鉱物粒子	酸化焰	黄橙	「コ」の字状口縁。型作り成形、外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	吉井・藤岡系
127-6 64	土師器 甕	3区III'層 破片	口 (15.8)	微粒長石 雲母石英片岩 藤岡畑土	酸化焰	鈍橙	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	藤岡系
127-7 58	土師器 甕	3区III'層 破片	口 (19.0)	微粒長石 黒色鉱物粒子	酸化焰	灰黄	口縁部は外反する。紐作り。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	西毛系か

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
127-8 64	土師器 甕口縁	III層 破片	口 (19.0)	雲母石英片岩 微粒長石 微粒雲母	酸化焰	橙	口縁部は外反する。紐作り。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	藤岡系
127-9 64	土師器 甕	2区III'層 破片	口 (23.0)	雲母石英片岩 微粒長石 藤岡畑土	酸化焰	橙	口縁部は外傾する。型作り成形。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	藤岡系
127-10 64	土師器 甕	3区III'層 破片	口 (21.0)	黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子 白色粒子	酸化焰	明赤褐	口縁部は外傾する。型作り成形。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	吉井・藤岡系
127-11 64	土師器 甕	III'層 破片	口 (21.6)	黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子 白色粒子	酸化焰	黄灰	口縁部は直立後外傾する。紐作り。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	月夜野系
127-12 58	土師器 甕	2区III'層 破片	底 3.5	黒色鉍物粒子 白色鉍物粒子 白色粒子	酸化焰	鈍黄橙	成形不分明。製作時全体をしぼる様に整形している。	吉井・藤岡系
127-13 58	土師器 甕	3区III'層 破片	底 3.5	粗粒砂 粗粒黒色鉍物 粒子	酸化焰	鈍黄橙	紐作り成形。外面は横位の篋削りを施す。内面は撫で整形。	縄文後期
128-1 58	土師器 小型甕	3区III'層 破片	底 (6.0)	黒色鉍物粒子 白色微粒子 透明鉍物粒子	酸化焰	浅黄橙	紐作り成形。器外面は縦位の篋削り整形を施し、器内面は篋撫でを施す。	吉井・藤岡系
128-2 58	土師器 台付甕	3区III'層	底 (11.0)	細砂粒 密	酸化焰 硬質	鈍黄橙	紐作り成形。脚部は貼り付けか。	不詳
128-3 58	土師器 甕	III'層	底 (8.0)	黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子 白色粒子	酸化焰	橙	紐作り成形。脚部は貼り付。	吉井・藤岡系
128-4 58	土師器 脚付鉢	2区III'層 脚部欠損	底 10.5	黒色鉍物粒子 白色粒子	酸化焰	浅黄橙	轆轤成形(右回転)。	吉井系
128-5 58	土師器 甕	カーボン 層中 破片	—	白色粒子 黒色鉍物粒子	酸化焰	外・黄橙 内・黒褐	型作り成形。外面は篋削り。内面は篋撫でを施す。	吉井・藤岡系
128-6 58	須恵器 坏身	表土層 一部欠損	口 9.2 最 11.0 高 3.1	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)。底部は手持ち篋削り。	秋間系
128-7 64	須恵器 坏身	2区III'層 破片	口 (10.2)	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	轆轤成形(右回転)。	乗附系
128-8	須恵器 堦	2区III'層 破片	底 (11.2)	白色鉍物粒子 白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)。底部は回転篋削り。高台は削り出し高台。	吉井・藤岡系
128-9 64	須恵器 坏	2区III'層 破片	—	白色微粒子 白色鉍物粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)。	乗附系
128-10 58	須恵器 坏	2区III'層 欠	口 (11.4) 底 (7.4) 高 3.7	黒色粒子	還元焰 焼締め	灰白	轆轤成形(右回転)、底部は回転篋削り。	秋間系か
128-11 58	須恵器 坏	3区南 III'層 ほぼ完形	口 12.0 底 7.8 高 3.5	黒色粒子 白色微粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形(右回転)。底部は回転篋削り。	秋間系
128-12 58	須恵器 坏	3区III'層 破片	口 (12.2) 底 8.0 高 3.8	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転篋削り。	秋間系
128-13 58	須恵器 坏	土器溜り 欠	口 12.6 底 7.2 高 3.5	透明鉍物粒子 石英粒?	還元焰 焼締め	灰	轆轤成形(右回転)。底部は回転篋削り。	乗附系
128-14 58	須恵器 坏	3区III'層 欠	口 (12.7) 底 7.1 高 3.7	白色鉍物粒子 黒色粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転篋削り。	秋間系
128-15 58	須恵器 坏	3区III'層 欠	口 (13.6) 底 (9.2) 高 (3.8)	白色微粒子	中性焰 硬質	灰褐	轆轤成形(右回転)、底部は回転篋削り。	秋間系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
128-16 58	須 惠 器 坏	3区III'層 %	口 (13.8) 底 (9.0) 高 3.7	白色微粒子 黒色粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形 (右回転)、底部は回転筥起し。	秋間系
128-17 58	須 惠 器 坏	3E 南III' 層 口縁 $\frac{1}{2}$ 欠	口 14.4 底 9.0 高 3.3	—	還元焰	黄灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り後、底部周縁を回転筥調整を施す。	秋間系

遺構外

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
129-1 58	須 惠 器 坏	3区III'層 底部	底 7.6	白色微粒子	還元焰	明褐灰	轆轤成形 (右回転)、底部は回転筥起し。	秋間系
129-2 58	須 惠 器 坏	2区III'層 底部	底 8.0	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	白灰	轆轤成形 (右回転)、底部は回転筥起し。	秋間系
129-3 58	須 惠 器 坏	調査区内 %	底 8.0	白色微粒子	還元焰 硬質	赤褐	轆轤成形 (右回転)。底部は回転筥起し。	秋間系
129-4 58	須 惠 器 坏	2区III'層 破片	底 (9.0)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰 硬質	灰白	轆轤成形 (右回転)、底部は回転筥起し。	秋間系か
129-5 64	須 惠 器 坏	調査内 破片	口 (10.8)	白色微粒子	還元焰 硬質	灰白	轆轤成形 (右回転)。底部は回転筥削りか。	秋間系
129-6 58	須 惠 器 坏	2区III'層 %	口 (12.0) 底 (7.8) 高 3.6	黒色粒子 白色微粒子 白色鉍物粒子	還元焰 焼締め	暗灰	轆轤成形 (右回転)、底部は回転筥起し。	秋間系
129-7 58	須 惠 器 坏	3区III'層 %	口 (12.0) 底 6.4 高 (3.1)	白色鉍物粒子 白色微粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形 (右回転)、底部は回転筥起し。	秋間系
129-8 58	須 惠 器 坏	2区III'層 %	口 (13.3) 底 (8.4) 高 (3.5)	白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)、底部は回転筥削り。	秋間系
129-9 58	須 惠 器 坏	3区内 破片	口 (12.0) 底 (6.6) 高 (3.5)	白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。底部は回転筥削り。	乗附系
129-10 59	須 惠 器 坏	2区III'層 破片	口 (12.1) 底 (7.0)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	白灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転筥起し。器内面に有機質付着。	秋間系
129-11 59	須 惠 器 坏	2区III'層 破片	口 (13.0) 底 (9.0) 高 (3.3)	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。底部は回転筥削りか。	秋間系
129-12 64	須 惠 器 坏	2区III'層 破片	口 (13.0) 底 (7.6) 高 (3.8)	白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。底部は回転筥削り。	秋間系
129-13 59	須 惠 器 坏	2区III'層 %	口 (13.0) 底 (7.9) 高 (3.5)	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形(右回転)。底部立ち上がり部は回転筥削り。	秋間系
129-14 59	須 惠 器 坏	2区III'層 破片	底 (9.7)	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰赤	轆轤成形 (右回転)。底部は回転筥削り。	搬入品か 秋間系
129-15 59	須 惠 器 坏	2区III'層 %	口 (15.2) 底 10.0 高 2.8	白色微粒子 透明鉍物粒子	還元焰	灰黄	轆轤成形 (右回転)、底部は回転筥削り。	笠懸系
129-16 59	須 惠 器 坏	3区III'層 破片	底 (8.0)	白色鉍物粒子 白色微粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形 (右回転)。底部は回転筥削り。	吉井系
129-17 59	須 惠 器 坏	2区III'層 %	底 6.2	黒色粒子	還元焰	白灰	轆轤成形 (右回転)。底部は手持ち筥削り。	秋間系
129-18 59	須 惠 器 坏	2区III'層 %	口 (13.4) 底 (8.6) 高 3.8	白色微粒子 白色鉍物粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り後、底部周縁に回転筥調整を施す。	秋間系か
129-19 59	須 惠 器 坏	3区III'層 %	口 (13.9) 底 (9.3) 高 (3.4)	白色微粒子	還元焰	黒	轆轤成形(右回転)。底部は回転筥削り乃至周縁部の回転筥調整。	笠懸系

## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
129-20 59	須恵器 坏	3区内 破片	口 (12.1) 底 (3.7) 高 (6.3)	微粒長石 チャート角粒 白色鉍物粒子	還元焰	灰白	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り後立ち上がり部に回転筥調整を施す。	東毛系か
129-21 64	須恵器 坏	2区III'層 破片	口 (13.0) 底 (8.9) 高 (3.8)	透明鉍物粒子 黒色鉍物粒子 白色微粒子	還元焰	灰黄	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	東毛系
129-22 59	須恵器 坏	3区III'層 底部	口 (13.5) 底 (7.2) 高 (3.9)	白色微粒子 白色鉍物粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	笠懸系
130-1 59	須恵器 坏	2区III層 底部	底 6.5	白色微粒子 黒色鉍物粒子	還元焰	灰白	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り後、底部周縁に回転筥削り調整を施す。	笠懸系
130-2 59	須恵器 坏	2区III'層 体上部欠損	底 7.5	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り後、周辺部を回転筥調整を施す。	秋間系
130-3 59	須恵器 坏	2区III'層 破片	底 8.0	白色微粒子	酸化焰	鈍黄褐	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り後、底部周縁及び立ち上がり部に回転筥調整を施す。	笠懸系
130-4 59	須恵器 坏	3区表採 破片	底 (8.0)	白色微粒子 白色鉍物粒子	還元焰	黄灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り後、底部周縁を回転筥調整を施す。	太田系か
130-5 59	須恵器 坏	調査区内 III'層 破片	底 8.0	白色微粒子 透明鉍物粒子	還元焰	褐灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り後、底部周縁・立ち上がり部に回転筥調整を施す。	笠懸系
130-6 59	須恵器 坏	3区III'層 一部欠損	口 11.6 底 6.8 高 4.6	白色粒子	還元焰 酸化焰 硬質	鈍橙	轆轤成形(右回転)。底部は手持ち筥削り。	東毛系か
130-7 59	須恵器 坏	3区III'層 1/2	口 (8.5) 底 (5.1) 高 2.6	白色鉍物粒子 黒色鉍物粒子	還元焰	にぶい 橙	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	吉井・藤岡系か
130-8 59	須恵器 坏	調査内 完形	口 (10.4) 底 4.4 高 3.2	微粒長石 黒色鉍物粒子 白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	吉井・藤岡系
130-9 59	須恵器 坏	2区III'層 完形	口 10.5 底 6.0 高 4.0	微粒長石 白色鉍物粒子 シルト粗粒子	還元焰	灰黄	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	吉井・藤岡系
130-10 59	須恵器 坏	3区III'層 1/2	口 (11.0) 底 (6.0) 高 (3.2)	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	秋間系
130-11 59	須恵器 坏	2区III'層 破片	口 (11.0) 底 (5.9) 高 (4.2)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰白	轆轤成形(右回転)、底部は回転筥起し。	秋間系
130-12 59	須恵器 坏	III'層 破片	口 (11.0) 底 5.8 高 3.5	白色鉍物粒子 透明鉍物粒子 白色微粒子	還元焰 硬質	外・白灰 内・黒灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	笠懸系
130-13 59	須恵器 坏	3区III'層 破片	口 (10.6) 底 (5.2) 高 (4.1)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰 焼締め	灰	轆轤成形(右回転)。	秋間系
130-14 59	須恵器 坏	2区III'層 1/2	口 11.2 底 6.0 高 3.4	白色微粒子 黒色粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	秋間系
130-15 59	須恵器 坏	調査区内 III'層 1/2	口 (12.2) 底 (6.4) 高 (3.2)	白色微粒子 白色鉍物粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	秋間系
130-16 59	須恵器 坏	2区S B カーボン 層中 1/2	口 (12.4) 底 (8.0) 高 (3.7)	黒色粒子 白色粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	秋間系
130-17 59	須恵器 坏	2区III'層 口縁1/2欠	口 (12.4) 底 7.0 高 3.7	黒色粒子	還元焰 軟質	灰白	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	秋間系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
130-18 59	須 惠 器 坏	2区III'層 破片	口 (12.6) 底 ( 7.8) 高 ( 3.4)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰白	轆轤成形 (右回転)、底部は回転糸切り。	秋間系
130-19 59	須 惠 器 坏	2区III'層 ほぼ完形	口 (12.6) 底 6.8 高 3.4	白色微粒子 石英粒	還元焰	暗灰	轆轤成形 (右回転)、底部は回転糸切り。	笠懸系
131-1 59	須 惠 器 坏	2区III'層 部分欠損	口 12.6 底 8.0 高 3.1	白色微粒子	還元焰	灰黄	轆轤成形 (右回転)、底部は回転糸切り。	秋間系
131-2 59	須 惠 器 坏	2区III'層 完形	口 13.0 底 7.0 高 3.7	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	灰黄	轆轤成形 (右回転)、底部は回転糸切り。	乗附系
131-3 59	須 惠 器 坏	2区集石 破片	口 (13.0) 底 ( 7.0)	白色微粒子 白色鋳物粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)、底部は回転糸切り。	秋間系
131-4 59	須 惠 器 坏	2区III'層 破片	口 (13.4) 底 ( 8.0) 高 ( 4.1)	白色微粒子	還元焰	内・白灰 外・黒灰	轆轤成形 (右回転)、底部は回転糸切り。	秋間系
131-5 59	須 惠 器 坏	3区内 1/2	口 (13.6) 底 ( 8.0) 高 3.7	白色微粒子	還元焰	断・白灰 外・黒灰	轆轤成形 (右回転)、底部は回転糸切り。	秋間系
131-6 64	須 惠 器 坏	調査区内 1/2	口 (14.0) 底 7.6 高 4.0	雲母石英片岩 微粒長石	還元焰	暗灰	轆轤成形 (右回転)、底部は回転糸切り。	藤岡系
131-7 64	須 惠 器 坏	3区III'層 底部	底 6.5	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形 (右回転)、底部は回転糸切り。	秋間系か 乗附系
131-8 59	須 惠 器 坏	3区III'層 口縁欠損	底 7.2	白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)、底部は回転糸切り。	秋間系
131-9 59	須 惠 器 坏	3区III'層 破片	底 ( 7.4)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形 (右回転)、底部は回転糸切り。	秋間系
131-10 64	須 惠 器 坏	2区III'層 破片	口 (12.0)	白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。	乗附系か 搬入品
131-11 64	須 惠 器 坏 か	濁灰 破片	口 (13.0)	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形 (右回転)。	乗附系
131-12 64・80	須 惠 器 坏	III'層 破片	口 (14.0)	微粒長石 白色粒子	還元焰 軟質	灰白	轆轤成形(右回転)。器外面に細い線刻記号を 施す(「井」か)。	藤岡系
131-13 64	須 惠 器 坏	III'層 破片	口 (14.2)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。	秋間系
131-14 64	須 惠 器 坏	覆土内 破片	口 (14.4)	白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。	不詳 (秋間系か)
131-15 64	須 惠 器 坏	2区III'層 破片	口 (16.0)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。	秋間系
131-16 59	須 惠 器 坏	2区カー ボン層中 1/2	口 (14.4) 底 ( 9.0) 高 ( 3.9)	透明鋳物粒子 黒色鋳物粒子	還元焰	内・断・ 灰白 外・黒灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り後周辺 部を回転筥調整。	笠懸系
131-17 64	須 惠 器 塊	3区III'層 破片	口 (17.0)	白色微粒子	還元焰	白灰	轆轤成形 (右回転)。	吉井系か
131-18 59	須 惠 器 坏	2区III'層 一部欠損	口 11.3 底 6.0 高 4.6	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰白	轆轤成形 (右回転)。付高台。	秋間系
131-19 60	須 惠 器 塊	3区III'層 1/2	口 (11.6) 底 7.5 高 4.5	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	秋間系
131-20 60	須 惠 器 塊	3区III'層 破片	口 (12.0) 底 ( 9.4) 高 ( 4.9)	黒色粒子 白色微粒子 白色鋳物粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	秋間系
132-1 60	須 惠 器 塊	3区III'層 1/2	口 14.4 底 7.0 高 6.0	雲母石英片岩 透明鋳物粒子 白色微粒子	還元焰 硬質	白灰	轆轤成形 (右回転)。高台欠損 (付高台)。	搬入品か
132-2 60	須 惠 器 塊	3区南III' 1/2強	口 (15.8) 底 (10.4) 高 4.3	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	白灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	乗附系



## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
132-3 64	須恵器 埴	2区III'層 破片	口 (16.0)	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形 (右回転)。高台欠損 (付高台)。	秋間系か 乗附系
132-4 64	須恵器 坏	2区III'層 破片	口 (16.0)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。	秋間系
132-5 64	須恵器 埴か	3区内 破片	口 (16.0)	黒色粒子 白色微粒子 白色鉱物粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形 (右回転)。	乗附系か
132-6 60	須恵器 埴	2区III'層 高台及び 一部欠損	口 16.3	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	白灰	轆轤成形 (右回転)。高台欠損 (付高台)。	秋間系
132-7 65	須恵器 埴	3区III'層 破片	口 (17.0)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。高台欠損 (付高台)。	秋間系
132-8 60	須恵器 埴	2区III'層 弱	口 19.0 底 8.5 高 11.4	白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	秋間系
132-9 65	須恵器 埴	III'層 破片	底 (6.0)	黒色粒子 白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	秋間系
132-10 60	須恵器 埴	2区III'層 破片	底 (6.4)	白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	笠懸系か
132-11 60	須恵器 埴	上層 体・口欠	底 7.0	微粒雲母 ダイサイト	還元焰 並質	灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	藤岡系
132-12 60	須恵器 転用円盤 (埴)	調査区内 底部	底 6.6	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。体部を打ち欠き 円盤状に成形している。	秋間系
132-13 60	須恵器 埴	3区内III' 層 破片	底 7.0	白色微粒子 白色鉱物粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	乗附系
132-14 60	須恵器 埴	3区III'層 破片	底 (7.0)	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	秋間系
132-15 60	須恵器 転用円盤 (埴)	3区III'層 底部	底 7.4	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。体部を打ち欠き 円盤状に成形している。	秋間系
133-1 60	須恵器 埴	3区南III' 層 底部	底 8.0	黒色粒子	還元焰	外・暗灰 内・白灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	秋間系
133-2 65	須恵器 埴	III'層 破片	底 (8.0)	シルト粗粒子 白色微粒子	還元焰	白灰 外・黒灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	秋間系
133-3 60	須恵器 埴	2区III'層 底部	底 8.4	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	外・灰白 内・白灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	秋間系
133-4 60	須恵器 埴	表土 破片	底 (8.8)	黒色粒子	還元焰 焼締め	灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	秋間系
133-5 60	須恵器 埴	暗灰褐色 砂層 破片	底 (8.6)	黒色粒子 白色粒子	還元焰	白灰 外・黒灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	秋間系
133-6 60	須恵器 埴	3区南III' 底部	底 8.8	白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	秋間系
133-7 60	須恵器 埴	2区III'層 体上部欠 損	底 8.8	白色鉱物粒子 黒色鉱物粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	秋間系
133-8 60	須恵器 埴	3区 底部	底 8.8	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	秋間系
133-9 60	須恵器 埴	3区III'層 破片	底 (9.0)	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	乗附系か
133-10 60	須恵器 埴	2区III'層 底部	底 9.0	黒色粒子	還元焰	灰白	轆轤成形 (右回転)。付高台。	秋間系
133-11 60	須恵器 埴	3区内 破片	底 (9.0)	黒色粒子	還元焰 焼締め	白灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	秋間系
133-12 60	須恵器 埴	2区III'層 底部	底 9.2	黒色粒子 微粒長石	還元焰	白灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	秋間系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
133-13 60	須恵器 転用円盤 (境)	3区III'層 底部	底 10.0	黒色粒子	還元焰	淡白灰	轆轤成形(右回転)。付高台。体部を打ち欠き円盤状に成形している。	秋間系
133-14 60	須恵器 境	2区III'層 破片	底 (10.0)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	暗緑灰	轆轤成形(右回転)。付高台。器外面に自然釉付着。	秋間系
133-15 60	須恵器 境	2区III'層 境	底 (9.2)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	外・黒灰 内・灰白	轆轤成形(右回転)。付高台。	秋間系
133-16 60	須恵器 境	3区III'層 底部	底 10.2	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)。付高台。	秋間系
134-1 60	須恵器 境	3区 破片	口 (11.0)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰 焼締め	灰	轆轤成形(右回転)。付高台。	秋間系か 乗附系
134-2 60	須恵器 皿	2区III'層 完形	口 13.6 底 7.2 高 2.7	白色微粒子 白色粒子	還元焰	暗灰	轆轤成形(右回転)。付高台。	秋間系
134-3	須恵器 盤	2区III'層 破片	口 (22.2) 底 (15.4)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)。付高台。腰部は回転篋削り。	秋間系
134-4 65	須恵器 盤	3区III'層 破片	底 (18.2)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰白	轆轤成形(右回転)。付高台。	秋間系
134-5 60	須恵器 境	調査区 底部破片	底 (6.8)	微粒長石 雲母粒 雲母石英片岩	酸化焰	内・黒 外・ふい 橙	轆轤成形(右回転)。付高台。器内面に暗文を施し吸炭させている。	藤岡系
134-6 60	須恵器 内黒土器 境	2区III'層 底部	底 7.4	微粒長石 白色微粒子	酸化焰	橙	轆轤成形(右回転)。付高台。	東毛系か
134-7 65	須恵器 内黒土器 境	2区III'層 破片		微粒長石 白色微粒子	還元焰	浅黄橙	轆轤成形(右回転)。高台欠損(付高台)。器内面に磨きを施し燻している。	藤岡系か
134-8 65	須恵器 不詳	2区 破片	厚 0.7	白色鉍物粒子 白色微粒子	還元焰	灰白	轆轤成形(回転不詳)。小形の器種と考えられ、内面(?)側に篋記号「X」を刻む。	吉井系
134-9 60	須恵器 黒色土器 耳皿	2区III'層 境	底 5.3	白色微粒子 白色鉍物粒子	還元焰	断・鈍黄 橙 内・外・ 黒灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	笠懸系か 吉井系
134-10 60・80	須恵器 黒色土器 坏	3区 底部	底 6.2	透明鉍物粒子 白色鉍物粒子	還元焰	黒	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。篋描き文字「全か全か金」(内面)。	吉井・藤 岡系
134-11 65	須恵器 坏蓋	2区III'層 破片	口 (11.6)	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	轆轤成形(右回転)。天上部は回転篋削り。	秋間系
134-12 60	須恵器 坏蓋	表土 一部欠損	口 11.0 高 2.9	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)。天上部は回転篋削り。	秋間系
134-13 65	須恵器 坏蓋	2区III'層 破片	口 (10.0)	白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)。天上部は回転篋削り。	秋間系
134-14 60	須恵器 坏蓋	2区III'層 摘み部完存	摘 4.4	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	白灰	轆轤成形(右回転)。	秋間系
134-15 60	須恵器 坏蓋	III'層 摘み部完存	摘 5.6	白色微粒子	還元焰	白灰	轆轤成形(右回転)。	吉井系
134-16 60	須恵器 坏蓋	2区III'層 摘み部完存	口 3.6	白色鉍物粒子 白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	轆轤成形(右回転)。	乗附系
134-17 60	須恵器 坏蓋	2区III'層 摘み部完存	口 3.7	白色微粒子 白色鉍物粒子	還元焰	灰白	轆轤成形(右回転)。	秋間系か 乗附系
134-18 60	須恵器 坏蓋	3区 摘み部完存	摘 4.0	白色鉍物粒子 白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)。	吉井系
134-19 60	須恵器 坏蓋	2区III'層 摘み部完存	摘 4.6	黒色粒子	還元焰	白灰	轆轤成形(右回転)。	秋間系
134-20 61	須恵器 坏蓋	III'層 摘み部	摘 6.0	白色鉍物粒子 白色微粒子	還元焰 焼締め	暗灰	轆轤成形(右回転)。	乗附系か 吉井系
134-21 61	須恵器 坏蓋	2区III'層 一部欠損	口 17.5 高 4.8	白色鉍物粒子 白色微粒子	還元焰	灰白	轆轤成形(右回転)。天上部は回転篋削り。	秋間系
134-22 65	須恵器 坏蓋	2区III'層 破片	摘 3.2	白色微粒子 白色鉍物粒子	還元焰	白灰	轆轤成形(右回転)。天上部は手持ち篋削り。摘部は貼り付け。	吉井系

## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
134-23	須恵器 坏蓋	南III'層 ㄗ		白色微粒子 黒色粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形(右回転)。上半部は回転篋削り。	秋間系か 乗附系
135-1 65	須恵器 坏蓋	2区III'層 破片	口 (12.4)	白色鉾物粒子 白色粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)。	乗附系
135-2 65	須恵器 坏蓋	3区III'層 細片	口 (14.6)	白色鉾物粒子 白色粒子	還元焰	浅黄	轆轤成形(右回転)。	吉井系
135-3 65	須恵器 坏蓋	2区III'層 破片	口 (15.2)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形(右回転)。	秋間系
135-4 65	須恵器 坏蓋	2区III'層 破片	口 (15.4)	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)。	秋間系
135-5 65	須恵器 坏蓋	2区III'層 破片	口 (16.6)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)。天上部は回転篋削りで天 上頂部に回転糸切り(右回転)の痕跡を留め る。	秋間系
135-6 65	須恵器 坏蓋	暗濁黒褐 色粘質土 破片	口 (17.5)	白色粒子 白色鉾物粒子 黒色粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)。天上部は回転篋削り。	乗附系
135-7 61	須恵器 薬壺蓋	暗濁黒褐 色粘質土 層 ㄗ	口 (12.3) 最 高 (13.3) 摘 (4.4)	白色粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)。	秋間系
135-8 61	須恵器 薬壺蓋	3区III'層 破片	口 (11.4) 鏝 (11.4)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)。鏝は貼り付け。	秋間系
135-9 61	須恵器 高坏	3区III'層 脚部	基 5.4	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。基部の接合は不 詳。	秋間系
135-10 61	須恵器 高坏	3区南III' 層 破片	基 3.6	白色微粒子 黒色粒子 微粒長石	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)。(脚部は紐作り)。	秋間系
135-11 65	須恵器 高坏	3区III'層 破片	基 (5.0)	黒色粒子	還元焰 硬質	灰白	紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間系
135-12 65	須恵器 甕	2区III'層 破片	口 (7.8)	白色微粒子	還元焰	暗灰	口縁部は外反し、波状文を廻らす。紐作り後 轆轤整形(右回転)。	太田系か 搬入品
135-13 65	須恵器 長頸壺	2区III'層 脚部破片	口 (7.0)	白色鉾物粒子 白色微粒子	還元焰 焼締め	暗灰	紐作り轆轤整形(右回転)。頸部をしぼってい る。	乗附系
135-14 65	須恵器 小型壺	2区III'層 破片	口 (7.8)	黒色粒子	還元焰 焼締め	灰白	紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間系
135-15 65	須恵器 壺	3区III'層 破片	最 9.4	シルト粗粒子	還元焰	灰	紐作り轆轤整形(右回転)。	搬入品 (尾張か)
135-16 65	須恵器 小型壺	2区III'層 破片	厚 0.4	白色微粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。器外面に有機質 付着。	秋間系
135-17 65	須恵器 瓶	3区III'層 破片	厚 0.8	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。器外面自然釉付 着。	乗附系
135-18 61	須恵器 フラスコ 形提瓶	覆土内 ㄗ	最 (22.6)	白色微粒子	還元焰 焼締め	暗灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。側部側器内面に 指頭痕を残す。	搬入品
136-1 65	須恵器 壺	2区III'層 破片	最 26.4	白色粒子 黒色粒子	還元焰	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具 は青海波文)及び轆轤掻き撫で整形。	搬入品 (湖西か)
136-2 65	須恵器 長頸壺	2区III'層 破片	口 (4.4) 底 高	白色微粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。上端は欠損後磨 いている。	乗附系
136-3 61	須恵器 長頸壺	2区III'層 頸部	頸 6.2	白色微粒子 黒色粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。口縁下方に条線 を施す。	秋間系
136-4 61	須恵器 長頸壺	2区III'層 頸部	頸 5.6	白色微粒子 黒色粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。口縁中位に条線 を施す。	秋間系
136-5 65	須恵器 灰釉 壺	3区III'層 破片	頸 5.6	白色鉾物粒子 白色微粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。内外面に自然釉 付着。	秋間系か 搬入品
136-6 65	須恵器 壺	3区III'層 破片	厚 1.2	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。	乗附系
136-7 65	須恵器 壺	3区III'層 破片	頸 10.2	白色微粒子 白色鉾物粒子	還元焰 焼締め	灰白	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具 は青海波文)。	不詳 (搬入品か)

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
136-8 65	須 惠 器 甕	2区III'層 破片	厚 0.7	黒色粒子 白色微粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	秋間系
136-9 65	須 惠 器 壺	2区III'層 破片	肩 18.6	白色微粒子 白色鉍物粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	乗附系
136-10 65	須 惠 器 壺	サブトレ 破片	肩 19.6	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	乗附系か 搬入品
136-11 65	須 惠 器 壺	2区III'層 破片	肩 (19.2)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	秋間系
137-1 65	須 惠 器 壺	3区南III' 層 破片	—	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	灰	紐作り後 <sup>1</sup> 整形 (右回転)。	秋間系
137-2 65	須 惠 器 壺	暗灰褐色 砂層 破片	最 20.8	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。器外面に靱疔痕。	搬入品か 乗附系
137-3 61	須 惠 器 壺	2区III'層 破片	底 8.4	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	東海系か 秋間系
137-4 65	須 惠 器 壺	3区III'層 破片	厚 0.7	白色微粒子	還元焰	灰白	紐作り後轆轤整形 (右回転)。器外面に自然釉 付着。	搬入品 (東海系)
137-5 65	須 惠 器 瓶	暗灰褐色 土砂層 破片	口 (10.9)	白色微粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	乗附系
137-6 65	須 惠 器 甕	3区III'層 破片	口 (12.0)	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	吉井系
137-7 65	須 惠 器 甕	2区III層 破片	口 (13.0)	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	不詳 (搬入品か)
137-8 61	須 惠 器 横 瓮	3区III'層 破片	口 (13.8)	白色微粒子 白色鉍物粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	搬入品か 乗附系
137-9 66	須 惠 器 甕	3区III'層 破片	口 (14.0)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰 焼締め	灰白	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	秋間系
137-10 66	須 惠 器 甕	2区III'層 破片	口 (22.0)	白色粒子 黒色粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。受け口状口縁を 呈する。	搬入品か
137-11 66	須 惠 器 壺	2区III'層 破片	最 20.4	シルト粗粒子 白色微粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。外面自然釉付着。	乗附系
137-12 66	須 惠 器 壺	2区III'層 破片	口 (13.6)	白色微粒子 シルト粗粒子	還元焰 焼締め	赤灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	乗附系
137-13 66	須 惠 器 壺	3区III'層 破片		白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰白	紐作り轆轤整形 (右回転)。	秋間系
138-1 66	須 惠 器 短 頸 壺	2区III'層 破片	厚 0.7	白色鉍物粒子 微粒長石 黒色粒子	還元焰	灰白	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	吉井・藤 岡系
138-2 66	須 惠 器 壺	3区III'層 破片	厚 0.7	白色微粒子 白色鉍物粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。2条線間に6本 1単位の波状文を2段に施す。	乗附系
138-3 66	須 惠 器 甕	2区III'層 破片	厚 0.7	白色粒子 シルト粗粒子	還元焰	灰黄	紐作り後轆轤整形 (右回転)。下半部は回転篋 削り後斜格子叩きを施す。	乗附系か
138-4 66	須 惠 器 甕	2区III'層 破片	厚 0.6	白色微粒子 チャート角粒	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	東毛系 (太田系)
138-5 66	須 惠 器 壺	2区III'層 破片	厚 1.0	白色微粒子 シルト粒子	還元焰	白灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	乗附系

遺構外扱

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
138-6 66	施釉陶器 緑 釉 瓶	2区III'層 破片	厚 0.7	白色鉍物粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。釉はややかせて いる。	猿投系
138-7 61	須 惠 器 長 頸 壺	2区III'層 底部	—	黒色粒子 白色粒子 シルト粗粒子	還元焰 硬質	灰	轆轤成形 (右回転)。底部は回転篋整形。	乗附系か
138-8 61	須 惠 器 壺	3区III'層 破片	底 (12.6)	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。脚は貼り付け。	乗附系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
138-9 61	須 惠 器 甕	2区III層 破片	底 (16.2)	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。脚を欠損する。	乗附系
138-10 61	須 惠 器 播 鉢	2区III層 破片	底 (12.6)	黒色粒子 デイスait	還元焰	灰黄褐	紐作り後轆轤整形 (右回転)。器内面が著しく磨滅する。	吉井系
138-11 61	須 惠 器 甕	2区III層 破片	底 (13.6)	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤筥撫で整形 (右回転)。器内面に粘土紐の痕跡を顕著に残す。底面には板の木目痕を残す。	吉井系
139-1 61	須 惠 器 甕	3区III層 破片	底 (15.8)	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	吉井系
139-2 66	須 惠 器 甕	3区III層 破片	底 (18.0)	白色微粒子	還元焰 硬質	外・暗灰 内・黄灰	紐作り。叩き整形 (外面不詳・内面宛具は青海波文) 後、横位に轆轤使用の筥撫でを施す。	秋間系か 乗附系
139-3 66	須 惠 器 横 瓶	2区S B カーボン 層中 破片	厚 0.6	白色鉍物粒子 黒色粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。器外面に自然釉付着。	猿投系か
139-4 66	須 惠 器 横 甕	2区III層 破片	厚 0.6	白色鉍物粒子 白色微粒子	還元焰	暗灰 オリーブ	紐作り成形後叩き整形か。外面轆轤再整形、内面は撫でが認められる。	乗附系
139-5 61	須 惠 器 横 甕	3区III層 破片	最 (32.4)	白色鉍物粒子 雲母粒子	還元焰	断・白灰 外・黄橙	紐作り。叩き整形 (外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。	搬入品か
139-6 66	須 惠 器 横 甕	3区III層 破片	厚 1.3	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	吉井系か 乗附系
140-1 66	須 惠 器 甕	3区 破片	口 (14.5)	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	暗灰	口縁部は外傾し、15本1単位の波状文を廻らし、口唇部にも加飾する。紐作り後轆轤整形 (右回転)。	乗附系
140-2 66	須 惠 器 甕	5区表土 破片	厚 1.0	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰	口縁部は外傾し、6本1単位の波状文を廻らす。紐作り後轆轤整形 (右回転)。	搬入品か
140-3 66	須 惠 器 甕	2区III層 破片	口 (21.4)	白色鉍物粒子 黒色粒子 白色微粒子	還元焰 硬質	灰	口縁部は外傾し、12本1単位の波状文を廻らす。紐作り後轆轤整形 (右回転)。	乗附系か 吉井系
140-4 66	須 惠 器 甕	2区III層 破片	口 (15.5)	白色微粒子	酸化焰	にぶい 橙	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	東毛系
140-5 68	須 惠 器 甕	3区III層 破片	—	白色微粒子 黒色粒子	還元焰 硬質	灰	口縁部は外傾し、7本1単位の刺突状の波状文を廻らす。紐作り後轆轤整形 (右回転)。胴部は紐作り。叩き整形 (外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。	乗附系
140-6 66	須 惠 器 壺	III層 破片	口 (19.2)	白色微粒子 白色鉍物粒子	還元焰	暗灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	乗附系か 吉井・藤 岡系
140-7 66	須 惠 器 甕	2区III層 破片	口 (19.8)	白色微粒子 白色鉍物粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	乗附系か 秋間系
140-8 66	須 惠 器	暗灰褐色 砂層 破片	口 (21.0)	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	乗附系
141-1 66	須 惠 器 甕	2区III層 破片	口 (23.0)	白色鉍物粒子 黒色粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。口縁部に轆轤整形以前に縦位の櫛掻を施している。	東海系
141-2 66	須 惠 器 甕	2区III層 破片	口 (23.0)	白色鉍物粒子 透明鉍物粒子	還元焰 焼締め	白灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	吉井系
141-3 66	須 惠 器 甕	2区III層 破片	口 (24.0)	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰白	紐作り後轆轤整形 (右回転)。器内面自然釉付着。	秋間系
141-4 66	須 惠 器 甕	3区III層 破片	口 (25.2)	白色鉍物粒子 白色微粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	乗附系か 秋間系
141-5 66	須 惠 器 甕	2区III層 破片	口 (17.0)	白色微粒子 黒色粒子	還元焰 焼締め	青灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	乗附系
141-6 66	須 惠 器 甕	3区 破片	口 (27.0)	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	秋間系
141-7 66	須 惠 器 甕	2区III層 破片	口 (30.0)	白色微粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	秋間系
141-8 66	須 惠 器 甕	3区III層 口縁部 破片	口 (32.0)	白色微粒子 黒色鉍物粒子 黒色粒子	還元焰	灰白	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	吉井・藤 岡系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
142-1 66	須恵器 甕	3区III'層 破片	口 (28.0)	白色鉍物粒子 白色針状鉍物	還元焰 焼締め	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。器内面自然釉付着。	比企系
142-2 66	須恵器 甕	2区III'層 破片	厚 1.0 頸 (7.2)	白色鉍物粒子 白色微粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。	乗附系
142-3 66	須恵器 壺	2区III'層 破片	頸 (14.0)	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。	吉井系
142-4 61	須恵器 甕	2区III'層 破片	頸 (14.0)	白色微粒子	還元焰	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。頸部周辺は轆轤整形。	乗附系か 吉井系
142-5 68	須恵器 甕	2区III'層 破片	頸 (18.2)	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。	乗附系か 搬入品
142-6 66	須恵器 甕	2区III'層 破片	頸 (25.0)	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰白	紐作り後轆轤整形(右回転)。	吉井系
143-1 68	須恵器 甕	3区III'層 破片	厚 1.3	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。	搬入品か
143-2 66	須恵器 甕	3区III'層 破片	厚 1.1	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。	乗附系
143-3 67	須恵器 甕	覆土内 破片	厚 0.8	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。	乗附系
143-4 67	須恵器 甕	2区III'層 破片	厚 1.3	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	灰白	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。	乗附系か 秋間系
143-5 67	須恵器 甕	3区III'層 破片	厚 0.8	白色微粒子	還元焰	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。	搬入品 (東海系か)
143-6 67	須恵器 甕	一括表土 破片	厚 1.6	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。	乗附系
143-7 67	須恵器 甕	覆土内 破片	厚 0.9	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。	搬入品
144-1 67	須恵器 甕	III'層	厚 1.0	白色鉍物粒子 白色針状鉍物	還元焰	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は素文)。割れ口の一端を直線的に磨き出している。	搬入品 比企系
144-2 67	須恵器 甕	2区III'層 破片	厚 0.9	白色微粒子 黒色粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。器内面は叩き後撫での再整形。	乗附系
144-3 67	須恵器 釉 甕	3区III'層 破片	厚 1.1	白色微粒子 白色鉍物粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。器外面に自然釉付着。	搬入品
144-4 67	須恵器 甕	2区III'層 破片	厚 1.0	白色微粒子	還元焰 焼締め	白灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。内外面に自然釉付着。	搬入品
144-5 67	須恵器 甕	3区III'層 破片	—	白色鉍物粒子 白色粒子 黒色粒子	還元焰	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は素文)。	吉井系
145-1 67	須恵器 甕	3区III'層 破片	厚 1.1	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰白	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は素文)。	秋間系
145-2 67	須恵器 灰 釉 甕	III'層 破片	厚 0.7	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は素文)。	搬入品 (東海系)
145-3 67	須恵器 甕	3区III'層 破片	厚 0.6	白色微粒子	還元焰 焼締め	外・黒 内・灰褐	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。	東毛系か 乗附系
145-4 67	須恵器 甕	III'層 破片	厚 1.1	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り後轆轤撫で整形(右回転)。	乗附系か
145-5 67	須恵器 甕	3区南III' 層 破片	厚 0.5	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は青海波文)後轆轤再整形(右回転)。	秋間系
145-6 67	須恵器 甕	濁灰褐色 粗粒土 破片	厚 0.9	白色鉍物粒子 微粒長石(?)	還元焰 硬質	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は素文)。	乗附系
146-1 67	須恵器 甕	2区III'層 破片	厚 0.8	白色鉍物粒子 白色微粒子	還元焰 焼締め	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。	乗附系
146-2 67	須恵器 不 詳	濁灰褐色 粗粒土 破片	—	白色鉍物粒子 透明鉍物粒子	還元焰	灰	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具は素文)。	吉井系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
146-3 67	須恵器 甕	2区III'層 破片	厚 1.2	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	外・灰 内・灰白	叩き整形 (外面平行叩き・内面宛具は素文)。	秋間系
146-4 67	須恵器 甕	2区III'層 破片	厚 1.8	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	にぶい 橙	紐作り。叩き整形 (外面正格子叩き・内面宛具は青海波文)。後内面は撫での再整形が施される。14165・24326と同一個体。	乗附系
146-5 67	須恵器 甕	2区III'層 破片	厚 1.9	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	明赤褐	24325と同一個体。	乗附系
146-6 67	須恵器 甕	2区III'層 破片	厚 1.8	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	外・灰 内・橙	24325と同一個体。	乗附系
147-1 68	須恵器 甕	3区III'層 破片	厚 1.5	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 硬質	白灰	紐作り。叩き整形 (外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。内面磨減する。	吉井系
147-2 68	須恵器 甕	2区III'層 破片	厚 1.1	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰	紐作り。叩き整形 (外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。	乗附系
147-3 68	須恵器 甕	2区III'層 破片	厚 1.9	白色微粒子 シルト粗粒子	還元焰	灰	紐作り。叩き整形 (外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。内面磨減する。	乗附系
147-4 68	須恵器 羽釜	III'層 破片	口 (17.4)	デイスイト 透明鉍物粒子 白色鉍物粒子	還元焰	橙	口縁部は内傾する。紐作り後轆轤整形 (右回転)。鏝は貼り付け。	吉井型羽釜 甲壹種伊類
147-5 68	須恵器 羽釜	III'層 破片	口 (22.4)	微粒長石 黒色鉍物粒子	還元焰	にぶい 黄橙	口縁部は内傾する。紐作り後轆轤整形 (右回転)。鏝は貼り付け。	吉井型羽釜 甲壹種呂類
147-6 68	施釉陶器 灰釉皿	2区III'層 破片	口 (13.8)	密	良好	灰白	轆轤成形 (右回転)。	東濃系
147-7 68	施釉陶器 緑釉皿	2区S B カーボン 層中 破片	口 (14.0)	密	還元焰	オリー ブ灰	轆轤成形 (右回転?)。	美濃系か
147-8 68	施釉陶器 灰釉皿	III'層 破片	口 (13.4) 底 (7.4) 高 (2.7)	密	良好	灰白	轆轤成形 (右回転)。付高台。施釉は浸掛。	東濃系
147-9 68	施釉陶器 灰釉塊	III'層 破片	底 (8.7)	密	良好	灰白	轆轤成形 (右回転)。付高台。	
147-10 68	施釉陶器 灰釉塊	2区III'層 破片	—	密	良好	灰白	轆轤成形 (右回転)。付高台。	東濃系
147-11 68	施釉陶器 灰釉塊	3区III'層 破片	底 (7.0)	密	良好	灰白	轆轤成形 (右回転)。付高台。体部下半は回転篋削り。	東濃系
147-12 68	施釉陶器 灰釉瓶	2区III'層 破片	底 (9.2)	密	良好	灰白	紐作り後轆轤整形 (右回転)。体部下半は回転篋削り。	東濃系
147-13 68	灰釉 長頸壺	暗灰褐色 砂層 破片	口 (9.2)	密	良好	G	轆轤成形 (右回転)。	
148-1 68	石器 磨製石斧	完形	長 1.20 幅 4.4 厚 2.3	細粒安山岩	—	—	全体に不均整。粗雑な作り。	重225g
148-2 68	礫器 敲石	III'層 1/2		黒色頁岩	—	—	小口側に敲打痕が認められし、著しい剝離が認められる。	重 (180g)
148-3 68	石器 石皿	III'層 破片	厚 3.0	緑色片岩	—	—	顕著な使用痕は認められない。	重 (520g)
148-4 68	礫器 敲石	暗灰褐色 土砂層	幅 4.5 厚 3.0	変珉岩	—	—	両小口側に敲打痕が認められる。	重 (180g)
148-5 68	礫器 擦石	調査区内 完存	長 5.4 幅 5.4 厚 2.4	粗粒安山岩	—	—	平坦面が使用に伴ない磨減する。	重100g
148-6 68	礫器 擦石	暗灰褐色 砂層 完存	長 6.2 幅 5.6 厚 3.1	粗粒安山岩	—	—	平坦面が使用に伴ない磨減する。	重160g
148-7 68	礫器 敲石擦石	表土 完存	長 9.3 幅 4.3 厚 2.6	粗粒安山岩	—	—	平坦面が使用に伴ない磨減し、小口側に敲打痕が認められる。	重170g
148-8 68	礫器	III'層 完存	長 10.4 幅 4.6 厚 2.6	変質安山岩	—	—	顕著な使用痕は認められない。	重210g

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
148-9 68	磬 器	表土 完存	長 10.4 幅 5.6 厚 2.8	変質安山岩	—	—	顕著な使用痕は認められない。	重240g
148-10 68	磬 器	III'層 完存	長 10.8 幅 4.0 厚 2.2	粗粒安山岩	—	—	平坦面が使用に伴ない磨滅する。	重160g
148-11 68	磬 器	暗濁黒褐色粘質土 完存	長 11.1 幅 5.3 厚 2.6	粗粒安山岩	—	—	顕著な使用痕は認められない。	重300g
148-12 68	磬 器	調査区内 完存	長 11.2 幅 4.0 厚 2.7	角閃石安山岩	—	—	顕著な使用痕は認められない。	重160g
148-13 68	磬 器 敲 石	暗濁黒褐色粘質土 完存	長 11.3 幅 5.8 厚 3.3	粗粒安山岩	—	—	小口側に打痕が認められ、剥離がある。	重310g
148-14 68	磬 器	III'層 完存	長 11.4 幅 5.3 厚 3.3	粗粒安山岩	—	—	顕著な使用痕は認められない。	重350g
148-15 68	磬 器	III'層 完存	長 11.7 幅 4.3 厚 3.7	溶結凝灰岩	—	—	顕著な使用痕は認められない。	重300g
149-1 68	磬 器	調査区内 完存	長 11.7 幅 4.9 厚 4.0	かこう岩	—	—	顕著な使用痕は認められない。	重430g
149-2 68	磬 器	暗灰褐色粘質土 完存	長 11.9 幅 5.4 厚 2.7	石英閃緑岩	—	—	顕著な使用痕は認められない。	重370g
149-3 68	磬 器	III'層 完存	長 12.1 幅 5.9 厚 3.9	—	—	—	顕著な使用痕は認められない。	重440g
149-4 69	磬 器 擦 石	調査区内 完存	長 12.6 幅 6.4 厚 4.0	石英閃緑岩	—	—	平坦面が使用に伴ない磨滅し、小口側に敲打痕が認められる。	重590g
149-5 69	磬 器	調査区内 完存	長 12.6 幅 4.6 厚 2.7	粗粒安山岩	—	—	顕著な使用痕は認められない。	重400g
149-6 69	磬 器	III'層 完存	長 13.0 幅 5.7 厚 4.1	砂岩	—	—	顕著な使用痕は認められない。	重600g
149-7 69	磬 器	暗灰褐色砂層 完存	長 13.5 幅 6.3 厚 3.6	溶結凝灰岩	—	—	顕著な使用痕は認められない。	重550g
149-8 69	磬 器 敲 石	暗濁褐色粘質土層 完存	長 13.7 幅 7.5 厚 3.5	粗粒安山岩	—	—	小口側に敲打痕が認められる。	重590g
149-9 69	磬 器	III'層 完存	長 14.0 幅 4.1 厚 3.0	緑色片岩	—	—	顕著な使用痕は認められない。	重290g
150-1 69	磬 器	暗灰褐色砂層 完存	長 14.3 幅 8.3 厚 3.9	輝緑岩	—	—	顕著な使用痕は認められない。	重 1,030g
150-2 69	磬 器 敲 石	調査区内 完存	長 14.1 幅 7.1 厚 6.5	粗粒安山岩	—	—	両小口側に敲打痕が認められる。	重 1,120g
150-3 69	磬 器 敲 石	暗灰褐色砂層 完存	長 15.1 幅 6.3 厚 3.7	ひん岩	—	—	小口側に敲打痕が認められる。	重600g
150-4 69	磬 器	III'層 完存	長 15.6 幅 5.8 厚 3.4	変質戸山岩	—	—	顕著な使用痕は認められない。	重470g



## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
150-5 69	礫器 擦石	暗灰褐色土 完存	長 15.8 幅 6.8 厚 3.8	変質安山岩	—	—	平坦面が使用に伴ない磨滅する。	重740g
150-6 69	礫器	暗灰褐色土 完存	長 17.0 幅 6.8 厚 4.0	ホルンフェルス	—	—	顕著な使用痕は認められない。	重750g
150-7 69	礫器	暗灰褐色土 完存	長 17.8 幅 6.0 厚 5.6	粗粒安山岩	—	—	顕著な使用痕は認められない。	重900g
150-8 68	石製品 砥石	暗灰褐色砂層 破片	長 8.4 幅 7.2 厚 1.8	頁岩	—	—	鳴滝砥の被熱(火中)したもので、ほぼ縦位の割れている。中央に向かい使用痕が認められる。	重210g
151-1 69 瓦-917	瓦 鏡瓦	表土 破片	厚 2.2	白色鉱物粒子	酸化焰	灰褐	一本作りか。瓦当部一部のみ残存。全体の作りより、意匠は単弁5葉蓮華文(創建統一意匠)。男瓦部凸面は縦位の撫で整形。	笠懸系
151-2 69 瓦-918	瓦 鏡瓦	表土 瓦当面 $\frac{1}{2}$	厚 2.1	白色鉱物粒子 白色粒子	還元焰	灰	一本作り。瓦当意匠は単弁四葉蓮華文。中房の飾りは「十」字。弁間に「T」字状間弁を配する。男瓦部は半載作りか。凸面縦位の撫で整形。	吉井・藤岡系
151-3 69 瓦-919	瓦 鏡瓦	II層 破片	厚 1.5	白色鉱物粒子	酸化焰	明褐灰	一本作り。瓦当部欠損背面は布目。	吉井系
151-4 69 瓦-920	瓦 鏡瓦	埋土内 破片	—	白色鉱物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰黒	一本作りか。瓦当部欠損の為詳細不分明。	吉井系
151-5 69 瓦-921	瓦 鏡瓦	覆土内 破片	厚 1.0	白色鉱物粒子 白色粒子	酸化焰	灰白	瓦当部欠損。瓦当部は印籠付。詳細不詳。	吉井系
151-6 69 瓦-922	瓦 鏡瓦	覆土内 破片	厚 1.6	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰黒	瓦当部欠損。男瓦部は半載作りか。凸面縦位の撫で整形。	笠懸系
151-7 69 瓦-923	瓦 字瓦	III層 瓦当面 $\frac{1}{2}$	厚 2.7	白色微粒子	還元焰	灰	瓦当意匠は「創建統一意匠」(右扁行唐草文)。女瓦部は一枚作りか。凹面布目擦り消し。凸面縦位の寛撫で整形。側部面取り4回。	笠懸系
151-8 69 瓦-924	瓦 字瓦	III層 瓦当面 $\frac{1}{2}$	厚 3.7	白色微粒子	還元焰	灰黒	瓦当意匠は右扁行唐草文。女瓦部は凹面布目擦り消し凸面横位の撫で整形。	笠懸系
151-9 69 瓦-935	瓦 字瓦	表土 破片	—	白色微粒子	酸化焰	灰赤	瓦当意匠は右扁行唐草文。(24426と同範)	笠懸系
151-10 70 瓦-925	瓦 字瓦	III層 瓦当面 $\frac{1}{2}$	—	白色鉱物粒子 白色粒子	還元焰	灰	瓦当意匠は左右向き一對の唐草文を配する。女瓦部は、凸面縦位の撫で整形。	吉井・藤岡系
151-11 70 瓦-926	瓦 字瓦	表土 瓦当面 $\frac{1}{2}$	厚 4.0	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰白	瓦当意匠は稜杉文。女瓦部の両面は縦位の撫で整形。	秋間系
151-12 70 瓦-927	瓦 字瓦	表土 瓦当面 $\frac{1}{2}$	厚 3.7	白色鉱物粒子 白色粒子 黒色粒子	還元焰	灰	瓦当意匠は重廓文。女瓦部は一枚作りか。凹面粘土板剥ぎ取り痕・縦位の撫で整形。凸面縄叩き(密)。側部面取り4回。	吉井・藤岡系
152-1 70 瓦-928	瓦 字瓦	表土 瓦当面 $\frac{1}{2}$	厚 3.6	白色鉱物粒子 チャート亜角粒	還元焰	灰	瓦当意匠は重廓文か。女瓦部は、凹面粘土板剥ぎ取り痕。凸面縦位の撫で整形。	吉井・藤岡系
152-2 70 瓦-929	瓦 字瓦	覆土内 破片	厚 2.0	白色鉱物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰	瓦当部欠損。意匠は不分明。頸部端に赤色顔料残存。	吉井系
152-3 70 瓦-930	瓦 鏡瓦	III層 $\frac{1}{4}$ 瓦当意匠 欠失	厚 2.8	白色鉱物粒子 黒色粒子	還元焰	灰白	瓦当部欠損。女瓦部は、凹面粘土板剥ぎ取り痕。凸面縦位の撫で整形。	吉井・藤岡系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
152-4 70 瓦-931	瓦 字瓦	埋土内 破片	厚 2.0	白色鉍物粒子 白色粒子	中性焰	灰赤	瓦当面欠損、意匠は重弧文の可能性ある。	乗附系
152-5 70 瓦-932	瓦 字瓦	III'層 破片		白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	瓦当部等大半欠損。顎部の赤色顔料の塗彩部片。	笠懸系
152-6 70 瓦-933	瓦 隅切り 女瓦	調査区内 破片	厚 1.7	白色鉍物粒子 黒色粒子 雲母石英片岩	還元焰	灰	桶巻作り。凹面模骨痕。粘土板剥ぎ取り痕。凸面縄叩き(密)整形後轆轤・縦位の撫で再整形。隅切り角度37度。	吉井系
152-7 70 瓦	瓦 男瓦	III'層 破片	厚 1.5	黒色鉍物粒子 黒色粒子	還元焰	灰黄	半截作り。凸面轆轤整形。端部面取り3回。	笠懸系
152-8 70 瓦-902	瓦 男瓦	覆土内 破片	厚 2.1	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	橙	紐作り成形。凸面轆轤整形後縦位の撫で整形。凹面縦位の指撫で整形。	吉井・藤岡系
153-1 70 瓦-903	瓦 男瓦	覆土内 破片	厚 3.2	白色鉍物粒子 白色粒子	酸化焰	鈍黄橙	一枚作りか。凹面粘土板剥ぎ取り痕。凸面縦位の撫で整形。刻印文字瓦「當」(凸面)。	吉井・藤岡系
153-2 70 瓦	瓦 玉縁付 男瓦	III'層 破片	厚 3.5	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	鈍橙	半截作り。凸面轆轤整形後縄叩き(密)。側部面取り2回。	吉井・藤岡系
153-3 70 瓦	瓦 玉縁付 男瓦	III'層 破片	厚 2.9	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰	半截作り。凸面轆轤整形。端部面取り3回。	吉井系
153-4 71 瓦	瓦 男瓦	III'層 破片	厚 1.1	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰 硬質	灰	半截作り。凸面縄叩き(密)後縦位の撫で整形。側部面取り3回・端部面取り1回。	吉井系か 乗附系
153-5 71 瓦	瓦 男瓦	III'層 破片	厚 2.5	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰	半截作り。端部面取り2回。詳細不詳。	吉井系
153-6 71 瓦-904	瓦 男瓦	調査区内 破片	厚 2.0	白色微粒子 白色鉍物粒子	還元焰	灰白	半截作り。凸面平行叩き。篋描き判読不能文字瓦か何かの圧痕。(凸面)。	乗附系
153-7 71 瓦-905	瓦 男瓦	B区内 破片	厚 1.3	白色微粒子	還元焰	灰白	半截作り。凸面縄叩き整形(密)後縦位の撫で再整形。	秋間系
153-8 71 瓦	瓦 男瓦	III'層 破片	厚 1.7	白色微粒子 黒色粒子	還元焰 硬質	灰	半截作り。凸面縦位の撫で整形。粘土板接合は「S」。	秋間系
153-9 71 瓦	瓦 男瓦	覆土内 破片	厚 2.1	白色微粒子 シルト粗粒子	還元焰	灰黄	半截作り。凸面轆轤整形。凹面寄木痕か。	秋間系
153-10 71 瓦	瓦 玉縁付男瓦	覆土内 破片	厚 1.5	白色微粒子 白色鉍物粒子	還元焰 焼締め	暗青灰	半截作り。凸面縦位の撫で整形。玉縁接合はA類。側部面取り1回。粘土板接合は「S」。	秋間系
154-1 71 瓦-906	瓦 女瓦	III'層 破片	厚 1.4	白色微粒子	酸化焰	橙	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面撫で整形後斜格子叩き整形。篋描き文字瓦「十」(凸面)。	笠懸系
154-2 71 瓦-907	瓦 女瓦	表土 破片	厚 1.8	白色微粒子	酸化焰	褐	一枚作り。凸面木目叩き。刻印文字瓦「山田」(凸面)。	笠懸系
154-3 71 瓦-908	瓦 女瓦	III'層 破片	厚 1.9	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	一枚作り。凸面木目叩き。側部面取り2回。端部面取り1回。刻印文字瓦「蘭田」(凸面)。	太田系か
154-4 71 瓦	瓦 女瓦	調査区内 破片	厚 2.3	白色微粒子	還元焰	灰黄	一枚作り。凹面粘土板剥ぎ取り痕。凸面正格子叩き。端部面取り1回。	笠懸系
154-5 71 瓦	瓦 女瓦	3区III'層 破片	厚 1.7	白色微粒子	還元焰	灰	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面撫で整形後木目叩き後更に斜格子叩き整形。側部面取り3回。	笠懸系
154-6 71 瓦	瓦 女瓦	III'層 破片	厚 1.7	白色微粒子	還元焰	灰	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面縄叩き。	笠懸系
154-7 71 瓦	瓦 女瓦	III'層 破片	厚 1.7	白色微粒子	還元焰	灰	一枚作り。凸面正格子叩き。	笠懸系
154-8 71 瓦	瓦 字瓦か	表土 破片	厚 2.9	白色微粒子 透明鉍物粒子	酸化焰 か	灰褐	作り不詳。両面縦位の撫で整形。厚味が非常に厚い。側部面取り2回。	笠懸系
154-9 71 瓦	瓦 女瓦	III'層 破片	厚 2.2	白色微粒子	還元焰	灰橙	一枚作り。凹面布目擦り消し・粘土板剥ぎ取り痕。凸面縄叩き(密)。側部面取り2回。	笠懸系

## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 量目 (cm) (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
155-1 72	瓦 女 瓦	調査区内 破片	厚 2.1	雲母石英片岩 白色鉱物粒子 微粒長石	酸化焰	橙	桶巻き造り。凹面模骨痕。凸面轆轤整形後縄 叩き(密)。側部面取り3回。	藤岡系
155-2 72	瓦 女 瓦	III'層 破片	厚 2.5	白色鉱物粒子 白色微粒子	還元焰	灰白	一枚作り。凸面正格子叩き。側部面取り3回。	吉井・藤 岡系
155-3 72 瓦-910	瓦 女 瓦	III' 破片	厚 2.7	白色鉱物粒子 白色粒子	還元焰	灰	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。側部面取り 3回か。篋描き文字瓦「武美」(凹面)。	吉井・藤 岡系
155-4 72 瓦-911	瓦 女 瓦	III'層 ¼	厚 2.3	白色鉱物粒子 白色粒子	還元焰	灰	一枚作り。両面粘土板剥ぎ取り痕。側部面取 り4回。篋描き文字瓦「大」(凸面)。	吉井・藤 岡系
155-5 72 瓦-912	瓦 女 瓦	III'層 破片	厚 2.3	白色鉱物粒子 白色粒子	還元焰 硬質	灰黒	一枚作り。凸面縦位の撫で整形自然釉付着。 側部面取り篋描き文字瓦「十」(凸面)。	吉井・藤 岡系
155-6 72 瓦-913	瓦 女 瓦	III'層	厚 1.4	白色鉱物粒子	還元焰 焼締め	白灰	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。側部面取り 4回・端部面取り3回。篋描き文字瓦「三か 武の一部」(凹面)。	吉井・藤 岡系
155-7 72 瓦-914	瓦 女 瓦	覆土内 ¼	厚 2.6	白色鉱物粒子 白色粒子	還元焰	灰	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。刻印文字瓦 「十」か(凹面)。	吉井・藤 岡系
156-1 72 瓦-915	瓦 女 瓦	攪乱 破片	厚 1.9	白色鉱物粒子 雲母石英片岩	還元焰	灰	一枚作りか。凸面撫で整形。側部面取り1回・ 端部面取り4回。篋描き判読不能文字瓦(凹 面)。	吉井系
156-2 72	瓦 女 瓦	III'層 ¼	厚 2.0	白色鉱物粒子	還元焰 硬質	灰黒	桶巻き造り。凹面模骨痕。凸面縄叩き(密)。	吉井系
156-3 72	瓦 女 瓦	III'層 破片	厚 2.5	白色鉱物粒子 白色微粒子	還元焰 焼締め	黒	一枚作りか。凸面縦位の撫で整形・整形後縄 圧痕が付く。	吉井系
156-4 72	瓦 女 瓦	III'層 ¼	厚 2.7	白色鉱物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰黒	桶巻き造りか。凹面模骨痕。凸面縄叩き(密) 後篋削り再整形。	吉井系
156-5 72	瓦 女 瓦	III'層 ¼	厚 2.1	雲母石英片岩 白色鉱物粒子	還元焰	灰	桶巻き造り。凹面模骨痕。粘土板剥ぎ取り痕。 凸面縄叩き(密)整形後轆轤撫での再整形。 側部面取り3回・端部面取り4回。粘土板接 合は「Z」。	吉井系
156-6 72	瓦 女 瓦	調査区内 ¼	厚 2.1	白色鉱物粒子 雲母石英片岩	還元焰	灰	桶巻き造り。凸面平行叩き。側部面取り2回。	吉井系
157-1	瓦 女 瓦	III'層 破片	厚 1.7	白色鉱物粒子 雲母石英片岩	酸化焰	灰橙	桶巻き造り。凹面模骨痕。凸面轆轤整形。	吉井系
157-2 72	瓦 女 瓦	III'層 ¼	厚 2.0	白色鉱物粒子	酸化焰	黒 灰褐	桶巻き造りか。凹面模骨痕・布目擦り消し。 凸面縦位の削り整形。端部面取り2回。	吉井系
157-3 73	瓦 女 瓦	III'層 破片	厚 1.6	黒色鉱物粒子 白色微粒子	中性焰	黄灰	一枚作り。凸面寄木痕・斜格子(全面)。側部 喰出し段有り。	秋間系か 乗附系
157-4 73 瓦-916	瓦 女 瓦	II'層 破片	厚 1.7	白色微粒子 黒色粒子	中性焰 軟質	黄灰	一枚作り。凸面縄叩き(密)側部喰出し段有 り。篋描き文字瓦か(凹面)。	秋間系
157-5 73	瓦 女 瓦	調査区内 破片	厚 1.5	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	一枚作り。凹面寄木痕。凸面縄叩き(密)。両 面に粘土板剥ぎ取り痕。側部面取り7回。	秋間系
157-6 73	瓦 女 瓦	破片	厚 1.7	白色微粒子	還元焰	灰赤	一枚作り。凸面不整格子叩き。端部面取り3 回。	秋間系
157-7 73	瓦 女 瓦	III'層 破片	厚 2.0	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰黒	一枚作り。凹面粘土板剥ぎ取り痕・寄木痕。 凸面縄叩き(密)・離砂痕。側部面取り1回・ 端部面取り2回。側部面取り段有り。	秋間系
157-8 73 瓦-934	瓦 宇 瓦	C区III層 15B32 ¼	厚 2.2	黒色粒子 シルト粗粒子	還元焰	白灰	一枚作り。瓦当部側欠損する。瓦当意匠は榎 杉系と考えられる。両面縦位の撫で整形。側 部喰出し段有り。側部面取り4回。	秋間系
158-1 73	瓦 鬼 瓦	2区ベル ト内 (III'層) ¼	厚 5.0	白色鉱物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め		塊状粘土を型に押し入れている。この際、粘 土は布で包む様にして扱われている。	吉井・藤 岡系
158-2 73	瓦 女 瓦	砂層直上 破片	厚 2.0	雲母石英片岩 白色微粒子	酸化焰	橙	桶巻き造り。凹面模骨痕・布目擦り消し。凸 面轆轤整形。	搬入品 北部埼玉

## 遺物観察表

## D区48号住居

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
186-1 75	土 師 器 坏	カマド内 破片	口 (11.2) 高 (3.2)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は笥削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M1類系
186-2 75	土 師 器 坏	カマド内 破片	口 (14.0)	黒色鉍物粒子 微粒長石	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は笥削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M3類系
186-3 75	土 師 器 坏	ホリ方 No10 %	口 13.8 高 4.4	黒色鉍物粒子 微粒長石 白色粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は笥削り。体部に型膚を残す。	藤岡系 M3類系
186-4 75	土 師 器 坏	No3 %	口 13.9 高 4.2	黒色鉍物粒子 微粒長石 白色粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は笥削り。体部に型膚を残す。焼成時の赤斑が認められる。	藤岡系 M3類系
186-5 75	土 師 器 坏	カマド内 %	口 (18.4) 高 6.7	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り。口縁部直立気味。体部・底部は笥削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系 M1類系
186-6 75	土 師 器 甕	No1 ほぼ完形	口 14.5 底 7.2 高 12.6	白色粒子 微粒長石	酸化焰	鈍橙	口縁部は外反する。紐作り。外面胴部は笥削り、口縁部は横撫で、内面胴部は笥撫で。全体に至んでいる。	不詳
187-1 75	土 師 器 甕	カマド 右袖 底部欠損	口 22.0	黒色鉍物粒子 微粒長石 白色粒子	酸化焰	鈍橙	口縁部は外反する。紐作り下半部は型作り成形。外面胴部は笥削り、口縁部は横撫で、内面胴部は笥撫で。	吉井・藤岡系
187-2 75	土 師 器 甕	No6 底部破損	口 21.8 底 — 高 (25.8)	黒色鉍物粒子 微粒長石 白色粒子	酸化焰	鈍橙	口縁部は外反する。紐作り。下半部は型作り成形。外面胴部は笥削り、口縁部は横撫で、内面胴部は笥撫で。	吉井・藤岡系

## D区27号住居

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
39-2	石 造 品	覆土内	—	角閃石	—	—	四面を平坦に加工している。国分二寺の基壇化粧等のものか。	1,240g

## D区6号土坑

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
189-1	須 恵 器 坏	覆土内 完形	口 9.0 底 5.4 高 2.8	白色粒子 赤褐色粒子 透明鉍物粒子	還元焰	黄橙	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。口唇部内外面に有機質付着。	吉井・藤岡系

## 中世遺物

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
190-1 75	軟質陶器 播 鉢	A区23号 土坑 覆土内 No3 %	口 (31.7) 高 (11.3) 底 (19.2)	白色粒子	中性焰	外・黒灰 断暗灰 褐	紐作り後轆轤整形(左回転)。	乗附系か
190-2	軟質陶器 鉢	A区1号 集石 覆土内 破片	底 (19.2)	白色微粒子 赤褐色粒子	酸化焰	浅黄橙	紐作り後轆轤整形(左回転)。	乗附系か
190-3	軟質陶器 内 耳	不詳	底 (20.0)	白色微粒子 微粒長石	中性焰	浅黄橙	紐作り後轆轤整形(左回転)。	藤岡系か 乗附系
190-4	焼締陶器 甕	1溝 破片	口 (35.2)	白色鉍物粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形(左回転)。口縁部は「N」字状。	常滑系

## C区住居内

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 量目 (cm) (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
191-1	須恵器	C区67住 床直層	口 8.3 底 5.8 高 1.6	白色粒子	還元焰	橙	轆轤成形（右回転）、底部は回転糸切り。	吉井・藤岡系
191-2	須恵器 坏	C区19住 完形	口 12.3 底 5.4 高 3.9	白色鉍物粒子	還元焰	灰黄	轆轤成形（右回転）、底部は回転糸切り。	吉井・藤岡系
191-3	須恵器 壺	C19住 完形	口 12.9 底 6.8 高 5.4	白色粒子 白色鉍物粒子	還元焰	灰	轆轤成形（右回転）。付高台。	吉井・藤岡系
191-4	須恵器 壺	C19住 高台欠損	口 13.1	白色粒子 白色鉍物粒子	還元焰	灰	轆轤成形（右回転）。高台欠損（付高台）。	吉井・藤岡系か
191-5	須恵器 破片	No40 破片	口 (32.0)	白色粒子 白色鉍物粒子	還元焰	灰白	紐作り後轆轤整形（右回転）。	乗附系か 藤岡系
191-6	石製品 砥石	C19住 1/2	幅 8.3 厚 4.5	—	—	—	中央に向かい使用に伴う磨減が著しい。置砥。	
191-7	施釉陶器 緑釉	C21住 覆土内 破片	—	密	良好	白灰	轆轤整形（右回転か）。	
191-8	施釉陶器 緑釉	C21住 覆土内 破片	—	密	良好	白灰	轆轤整形（右回転）か。	
191-9	土師器 甕	C23住 覆土内 破片	口 (17.0)	白色微粒子 微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	鈍橙	「コ」の字状口縁。型作り成形、外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	吉井・藤岡系
191-10	須恵器 壺	C103住 掘り方 破片	底 6.8	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰白	轆轤成形（右回転）。付高台。	乗附系
191-11	鉄器 釘	C139住 一部欠損	残長 14.7 幅 0.4	—	—	—	大きい一群に入る鉄釘。鍛えは普通。	
191-12	土師器 甕	覆土内 破片	口 (20.0)	白色微粒子 微粒長石	酸化焰	鈍橙	「コ」の字状口縁。型作り成形、外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。	
192-1 76	瓦 男瓦	C30住 完存	長 39.3 広 25.0 狭 17.5	白色鉍物粒子	還元焰 焼締	暗灰	半載作り。凸面縦位の篋撫で整形。側部面取り3回・端面面取り1回。	吉井系
192-2 80	瓦 字瓦	C98住 破片	厚 3.3	白色粒子	酸化焰	浅黄橙	創建統一意匠字瓦。右偏行唐草文。	笠懸系
192-3 76	瓦 女瓦	C36住 破片	厚 2.3	白色粒子 白色鉍物粒子	還元焰	暗灰	一枚作りか。篋描き文字瓦「山」（凸面）。	吉井系
192-4 76	土師器 台付甕	不詳（試 掘時出土） 1/2	口 12.3 底 (9.0) 高 (14.5)	白色粒子 黒色鉍物粒子	酸化焰	鈍橙	口縁部は外反する。紐作り。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は篋撫で。脚部は貼り付け。	吉井・藤岡系
192-5	鉄器 不詳	C区内 破片	残長 3.4 幅 0.4 厚ね 0.2	—	—	—	利器の茎と思われる。鍛えは普通。	
192-6	鉄器 針	C区内 両端欠損	残長 7.8 径 0.2	—	—	—	断面は多角形状のほぼ円形と考えられる。鍛えは普通。	
192-7	施釉陶器 緑釉	C79住 破片	—	密	良好	オリーブ黄	轆轤整形（右回転か）。	
192-8	施釉陶器 緑釉	覆土内 破片	—	密	良好	オリーブ灰	轆轤整形（右回転）か。	
192-9	施釉陶器 緑釉壺	C79住 破片	底 (8.0)	密	良好	オリーブ灰	轆轤成形（右回転）。付高台。	

## 遺物観察表

## B区177号住

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
193-1	土師器 甕	B177住 破片	口 (22.0)	白色微粒子 微粒長石	酸化焙	鈍橙	口縁部は外反する。紐作り。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で。内面胴部は篋撫で。	吉井・藤岡系
193-2	土師器 甕	B177住 破片	—	白色微粒子 微粒長石	酸化焙	鈍橙	型作り成形。外面胴部は篋削り、内面胴部は篋撫で。	藤岡系
193-3	土師器 坏	B区40住 覆土内 ほぼ完形	口 13.0 高 3.6	黒色鈹物粒子 白色微粒子	酸化焙	鈍黄橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系か
193-4	土師器 坏	覆土内 ⅔	口 12.8 高 3.2	微粒長石 白色微粒子	酸化焙	鈍黄橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系か
193-5	土師器 鉢	一括 ⅔	口 15.6	白色微粒子 微粒長石	酸化焙	鈍橙	下半部は型作り成形。口縁部は撫で整形。体部・胴部は撫で整形。	藤岡系
193-6	須恵器 埴	B43住 破片	口 (14.0)	白色微粒子	還元焙	黒褐	轆轤成形 (右回転)。	吉井・藤岡系
193-7	須恵器 坏	B43住 破片	底 6.0	殆ど無し	還元焙	白灰	轆轤成形 (右回転)、底部は回転糸切り。	秋間系
193-8	須恵器 蓋	B43住 破片	—	黒色粒子	還元焙	白灰	轆轤成形 (右回転)。天上部は回転篋削り。	秋間系
193-9	須恵器 埴	完形	口 14.1 底 7.8 高 5.5	白色微粒子	還元焙	灰白	轆轤成形 (右回転)。付高台。	
193-10	須恵器 皿	No124 ⅔	口 14.4 底 8.1 高 2.8	黒色粒子 白色微粒子	還元焙	灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	秋間系
193-11	鉄器 釘	B17住 破片	幅 0.4	—	—	—	大きい釘の一群に含まれる。鍛えは普通。	
193-12	鉄器 釘	B6住 破片	幅 0.3	—	—	—	頭部欠損。鍛えは普通。	
193-13	鉄器 釘	B48住 頭部欠損	残長4.9 幅 0.3	—	—	—	鍛え目での割れが見られる。鍛えは普通。	
193-14	須恵器 高坏	B46住 脚部完存	底 11.8	白色微粒子	還元焙	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。器外面にはしほりによる粘土のたわみが認められる。	秋間系

## A区165号住

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
194-1	土師器 坏	A165住 ⅔	口 12.8 高 5.6	微粒雲母 白色微粒子	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。器内面に暗文を施す。	藤岡系
194-2	須恵器 壺	覆土内 破片	底 (9.0)	白色微粒子 黒色粒子	還元焙	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。胴部外面は回転篋削り。	秋間系
194-3	施釉陶器 灰釉皿	A216住 破片	口 (15.0)	密	良好	オリーブ 灰	轆轤整形 (右回転)。施釉は浸掛。	
194-4	土師器 坏	A6土坑 破片	口 (10.0)	白色微粒子 微粒長石	酸化焙	橙	型作り。口縁部直立気味。体部・底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。	
194-5	土師器 坏	A6土坑 破片	口 (10.2)	白色微粒子 微粒長石	酸化焙	橙	型作り。口縁部内湾気味。体部・底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系
194-6	土師器 坏	A6土坑 破片	口 (12.2)	白色微粒子 微粒長石	酸化焙	橙	型作り。口縁部内湾気味。体部・底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系
194-7	土師器 坏	A6土坑 破片	口 (13.6)	白色微粒子 微粒長石	酸化焙	橙	型作り。口縁部内湾気味。体部・底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。	
194-8	土師器 坏	A6土坑 破片	口 (12.0)	白色微粒子 微粒長石	酸化焙	橙	型作り成形。口縁部は外傾する。口縁直下に型膚を残す。	藤岡系
194-9	須恵器 埴	A6土坑 破片	口 (17.0)	白色微粒子	還元焙	鈍黄褐	轆轤成形 (右回転)。	秋間系か
194-10	須恵器 坏	A6土坑 破片	—	黒色粒子 白色微粒子	還元焙	灰	轆轤整形 (右回転) か。底部は篋削り。	秋間系
194-11	須恵器 甕	A6土坑 破片	厚 0.6	白色微粒子	還元焙	灰白	紐作り。叩き整形 (外面平行叩き・内面宛具は青海波文)。	秋間系

## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
194-12	須恵器 蓋	A 6土坑 破片	口 (31.8)	白色微粒子	還元焰	灰	轆轤整形 (右回転)。	秋間系
194-13	須恵器 壺	A 6土坑 破片	最大径 (13.6)	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	乗附系

## A区133号土坑

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
196-9	須恵器 壺か坏	A 133土坑 破片	口 (12.0)	白色鉍物粒子 微粒長石	還元焰	黄橙	轆轤整形 (右回転)。	吉井・藤岡系
195-1	須恵器 甕	A 6土坑 破片	厚 1.2	白色鉍物粒子	還元焰	灰	紐作り。叩き整形 (外面平行叩き・内面宛具は青海波文)	乗附系か
195-2	土師器 坏	A10土坑 %	口 (11.0)	微粒長石 白色微粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系
195-3	土師器 坏	A10土坑 %	口 11.2	微粒長石 白色微粒子 黒色鉍物粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系
195-4	土師器 坏	A10土坑 破片	—	白色微粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。	藤岡系
195-5	土師器 坏	A10土坑 破片	口 (13.0)	微粒長石 白色微粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。	
195-6	土師器 坏	A10土坑 破片	口 (12.6)	微粒長石 白色微粒子	酸化焰	鈍橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系
195-7	須恵器 坏	A10土坑 破片	口 (19.0)	白色微粒子	還元焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。器内・外面に暗文を施す。	畿内系
195-8	須恵器 坏	A10土坑 破片	—	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	灰白	轆轤成形 (右回転)。底部は回転篋削り。	秋間系
195-9	須恵器 坏	A10土坑 破片	口 (11.3)	白色微粒子	還元焰	暗灰	轆轤成形 (右回転)。	乗附系か 藤岡系
195-10	須恵器 足高高台 壺	A10土坑 破片	—	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	轆轤成形 (右回転)。付高台。	吉井・藤岡系
195-11	須恵器 短頸壺	A10土坑 破片	口 (22.4)	黒色粒子 白色微粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。胴部は回転篋削り。	秋間系
195-12	土師器 坏	A47土坑 破片	口 14.0	白色微粒子 微粒長石	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系
195-13	土師器 甕	覆土内 破片	口 19.0	赤褐色粒子 白色微粒子 黒色鉍物粒子	酸化焰	橙	口縁部は外反する。型作り成形。外面胴部は篋削り、口縁部は横撫で、内面胴部は横撫で。	藤岡系
195-14	須恵器 壺	A47土坑 破片	—	白色粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。底部周辺は回転篋削り。	秋間系
195-15	須恵器 壺	覆土内 破片	厚 1.0	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	黄灰	紐作り後轆轤整形 (右回転)。	

## A区土坑遺構外

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
196-1	土師器 坏	A48土坑 破片	口 (16.2) 底 — 高 —	微粒長石 白色微粒子	酸化焰	橙	型作り。口縁部内傾気味。体部・底部は篋削り整形。器内面は撫で整形。	藤岡系
196-2	土師器 高坏	A48土坑 破片	口 (22.2) 底 — 高 —	白色粒子 赤褐色粒子	酸化焰	鈍黄微 粒長石	型作り成形か。	藤岡系
196-3	須恵器 壺	A49土坑 %	口 12.4 底 8.4 高 5.1	黒色鉍物粒子 白色粒子 赤褐色粒子	酸化焰	鈍黄橙	轆轤成形 (右回転)。付高台。	吉井系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
196-4	須恵器 壺	A49土坑 片	口 17.0 底 6.0 高 5.5	白色微粒子 微粒長石	還元焰	灰黄	轆轤成形（右回転）。付高台。	藤岡系
196-5	須恵器 坏 蓋	A57土坑 破片	口 11.0	白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形（右回転）。	秋間系
196-6	須恵器 壺	A50土坑 破片	口 (15.0)	白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形（右回転）。	吉井・藤岡系
196-7	須恵器 壺	A130土坑 破片	厚 0.8	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形（右回転）。	秋間系
196-8	須恵器 大 甕	A60土坑 破片	厚 1.3	白色粒子	中性焰	黄灰	紐作り。叩き整形（外面平行叩き・内面宛具は素文）	秋間系

A区24号土坑

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
196-10	石製品 砥 石	A24土坑 一部欠損	長 (11.2) 幅 2.2 厚 4.0	—	—	—	右利きの手持使用が主体的であったと考えられる。	
196-11	石製品 砥 石	A区表土 片	厚 2.8	—	—	—	使用の全体は右利きの手持ちと考えられる。	
196-12	石製品 砥 石	A区外 片	厚 3.1	—	—	—	使用の主体は右利きによる手持ちと考えられる。	
196-13	石製品 砥 石	1号集石 片位	長 15.0 幅 7.1 厚 5.8	—	—	—	使用の主体は設置による使用と考えられる。	960g

A区3号サク状遺構

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
197-1	土師器 鉢	破片	口 (14.2)	白色微粒子	酸化焰	黄橙	型作り成形。口縁部は外傾する。外面口縁直下に強い稜を有する。底部は篋削り。	藤岡系
197-2	縄文土器 深 鉢	A区表土 口縁片	口 20.0	微粒長石 雲母石英片岩	酸化焰	黒褐	紐作り成形。器面全体の篋削り後篋磨きを施す。篋磨きは、外面が横方向を主体とし、内面は縦横に施す。	吉井・藤岡系
197-3	縄文土器 注口土器	調査内 注口部	—	白色微粒子	酸化焰	橙	注口部の穿孔は、成形時に円形の棒に巻き付けている。	

調査区内

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
198-1	土師器 坏	調査区内 試掘時出土 完形	口 12.9 高 3.2	黒色鉍物粒子 白色粒子	酸化焰	橙	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。体部に型膚を残す。	藤岡系
198-2	土師器 坏	調査区内 試掘時出土 片	口 14.7 高 4.3	白色微粒子 微粒長石	酸化焰	鈍褐	型作り成形。口縁部・器内面は横撫で、底部は篋削り。	
198-3	土師器 坏	調査区内 試掘時出土 完形	口 10.3 高 5.4	黒色鉍物粒子 白色微粒子	酸化焰	鈍黄橙	型作り成形か。口縁部は横撫で器内面に暗文を施す。底部体部は篋削り。	藤岡系か
198-4	須恵器 坏	調査区内 試掘時出土 完形	口 11.0 高 3.7	白色微粒子 黒色粒子	還元焰	灰白	轆轤成形後底部手持ち篋削り。	秋間系



## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 量目 (cm) (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
198-5	須恵器 坏	調査区内 試掘時出 土 %	口 9.4 底 4.3 高 2.4	微粒長石 透明鉱物粒子	還元焰	橙	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	
198-6	須恵器 坏	調査区内 出土 %	口 12.0 底 5.5 高 3.8	白色微粒子 透明鉱物粒子	還元焰	灰黄	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。底部 板目痕有り。内面燻り。	吉井・藤 岡系
198-7	須恵器 坏	調査区内 ほぼ完形	口 13.4 底 7.0 高 4.4		還元焰	白灰	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	秋間系
198-8	須恵器 境	調査区内 ほぼ完形	口 10.8 底 6.8 高 5.4	白色粒子 黒色粒子	還元焰	灰	轆轤成形(右回転)。付高台。底部は回転篋削 り。	
199-1	須恵器 境	調査区内 %	口 11.6 底 6.2 高 4.1	白色微粒子	還元焰	灰黄	轆轤成形(右回転)。付高台。	乗附系か 藤岡系
199-2	須恵器 境	調査区内 %	口 12.7 底 6.4 高 4.7	白色粒子 微粒長石	還元焰	黄灰	轆轤成形(右回転)。付高台。内面煤附着。	
199-3	須恵器 坏	C区7号 ピットか %	口 12.7 底 5.4 高 4.3	白色鉱物粒子 微粒長石	還元焰	黄橙	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。	乗附系か 吉井・藤 岡系
199-4	須恵器 境	C区住居 跡 %	口 13.6 底 6.1 高 5.2		中性焰	灰黄	轆轤成形(右回転)。付高台。外面墨書。	
199-5	須恵器 境	B区内 %	口 14.2 底 6.2 高 5.5	白色微粒子 透明鉱物粒子	還元焰	淡黄	轆轤成形(右回転)。付高台。	吉井・藤 岡系か
199-6	須恵器 境	調査区内 %	—	白色粒子 透明鉱物粒子	還元焰	鈍黄橙	轆轤成形(右回転)。高台欠損(付高台)。	藤岡系
199-7	土製品 防垂車か	調査区内 完形	長 5.0 幅 5.2 厚 1.0	白色粒子	酸化焰	橙	土器片を転用し両面から穿孔する。	藤岡系か
199-8	施釉陶器 灰釉耳皿	不明 %	底 5.4	密	良好	灰オリー ーブ	轆轤成形(右回転)。付高台。施釉は浸掛か。	
199-9	施釉陶器 灰釉長頸 壺	破片	—	密	良好	白灰	轆轤成形(右回転)。	美濃系
199-10	施釉陶器 灰釉小瓶	不明 %	底 5.0 最大径7.4	密	良好	灰白	轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り。施釉 は浸掛。	
199-11	施釉陶器 灰釉境	不明 %	口 16.5 底 8.5 高 4.4	密	良好	灰白	轆轤成形(右回転)。付高台。施釉は浸掛。	
199-12	施釉陶器 灰釉境	不明 破片	—	密	良好	灰白	轆轤成形(右回転)。高台欠損(付高台)。施 釉は浸掛か。	
199-13	須恵器 硯 (転用か)	完形	長 17.6 幅 11.0 厚 0.9	黒色鉱物粒子 白色粒子 黒色粒子	還元焰	灰	裏面側に布圧痕を残す。表面は全面が磨滅す る。	吉井・藤 岡系

## 2区遺構外

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 量目 (cm) (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
200-1 76	石製品 研石	染谷川河 川敷2区 III層 完存	長 22.4 幅 13.0 厚 7.0	粗粒安山岩	—	—	全体的に顕著な使用面は認められない。恐ら く荒砥と思われる。	重 2,400g
200-2	石造品 不詳	III層 破片	—	二ツ岳軽石	—	—	全体に丁寧に8面体に成形され、各面は磨き 整形されている。国分二寺の基段化粧か。	重 2,500g

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
200-3 76	石 造 品 カマド袖 石	B区外 完形	—	角閃石安山岩	—	—	全体的に粗雑な成形である。何らかの使用に伴う磨減が全体に及んでいる。	重 6,850g
200-4	石 造 品 カマド袖 石	B62住 カマド 破片	—	二ツ岳軽石	—	—	国分二寺の基段化粧等のものと考えられる。成形面の一面が残存する。	重700g
201-1 76	石 造 品 不 詳	B区外 完形	厚 10.3	角閃石安山岩	—	—	全体を8面体に成形し磨き整形されている。国分二寺の基段化粧に伴うものか。	重 4,000g
202-1	石 造 品 建築部材	不詳 完形	長 26.4 幅 24.0 厚 10.8	二ツ岳軽石	—	—	丁寧な8面体に成形し、全体を磨き整形している。国分二寺の基段化粧材と考えられる。	重 13,600g
203-1 77	石 造 品 カマド焚 口 材	不詳 ほぼ完形	長 32.0 幅 24.2 厚 10.2	地石の砂質 固結物	—	—	全体を丁寧な成形し、表面は磨き仕上げで平滑。他の7面は鑿痕を残す。	重 20,800g
204-1 77	石 造 品 建築部材	B区外 破片	—	角閃石安山岩	—	—	国分二寺の基段化粧の石材が考えられる。平鑿整形。3面が残存する。	重 2,060g
204-2 77	石 造 品 建築部材	B区外 破片	—	二ツ岳軽石	—	—	国分二寺の基段化粧材と考えられる。平鑿整形。	重710g

G区6井戸

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
205-1 78 瓦-936	瓦 鏡 瓦	埋土内 破片	厚 1.7	白色微粒子	還元焰	暗灰	一本作り。瓦当意匠は単弁5葉蓮華文。中房の子葉は1+4。背面布目。男瓦部は縦位篋の撫で整形。	笠懸系

C区遺構

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
205-2 77 瓦-937	瓦 女 瓦	埋土内 破片	厚 1.4	白色微粒子	還元焰 硬質	灰	一枚作り。凸面縄叩き(密)。側部面取り3回・端部面取り2回。篋描き文字瓦「二」(凹面)。	笠懸系
205-3 77 瓦-938	瓦 女 瓦	III層 破片	厚 2.0	白色微粒子	酸化焰 硬質	赤	一枚作り。凸面縄叩き。側部面取り2回・端部面取り2回。篋描き文字瓦「二」(凹面)。	笠懸系
205-4 77 瓦-939	瓦 女 瓦	埋土内 破片	厚 2.6	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。端部面取り4回。篋描き判読不能文字瓦(凸面)(大千か)。	吉井系
205-5 77 瓦-940	瓦 男 瓦	表土 破片	厚 1.4	白色鉍物粒子 白色粒子	還元焰	灰白	半載作り。凸面轆轤整形。側部面取り2回。篋描き判読不能文字瓦(凸面)。	笠懸系
206-1 78 瓦-941	瓦 女 瓦	III層 破片	厚 1.5	白色微粒子	酸化焰	黄橙	一枚作りか。凹面布目擦り消し。凸面斜格子叩き。側部面取り2回・刻印文字瓦不詳(凸面)。	笠懸系
206-2 78 瓦-942	瓦 女 瓦	表土 瓦	厚 1.8	白色微粒子	不詳 二次焼 成を被 る。	明赤褐	一枚作り。凹面一部布目擦り消し。凸面撫で整形後正格子叩き整形。篋傷か篋描き判読不能。文字瓦(凸面)。	笠懸系
206-3 77 瓦-951	瓦 女 瓦	埋土内 破片	厚 1.3	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰オリ ーブ	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面米格子叩き。端部面取り2回。	笠懸系
206-4 78 瓦-952	瓦 女 瓦	埋土内 破片	厚 1.3	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰オリ ーブ	一枚作り。凹面布目擦り消し。凸面撫で整形後米格子叩き整形。側部面取り4回。	笠懸系
206-5 78 瓦-953	瓦 女 瓦	B1溝 覆土内 破片	厚 1.7	白色微粒子	還元焰 焼締め	灰白	一枚作り。凸面斜格子叩き。側部面取り3回。	笠懸系

## 遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 量目 (cm) (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
206-6 78 瓦-943	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 2.1	微粒長石 雲母石英片岩	酸化焰	鈍黄橙	一枚作りか。凸面木目叩き。側部面取り1回 篋描き判読不能文字瓦(凸面)。	吉井・藤 岡系
206-7 78 瓦-944	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 1.7	白色鉱物粒子 雲母石英片岩	中性焰	黄灰	一枚作りか。凸面斜位の撫で整形。端部面取 り1回か。篋描き判読不能文字瓦(凹面)。	吉井系
206-8 78 瓦-945	瓦 男瓦	攪乱 破片	厚 1.5	白色鉱物粒子 白色粒子	還元焰 焼締め	灰黒	一枚作りか。両面粘土板剥ぎ取り痕。凸面縦 位の撫で整形。篋描き文字瓦「大」(凸面)。	乗附系
206-9 78 瓦-946	瓦 女瓦	III層 破片	厚 2.0	白色鉱物粒子 白色微粒子	還元焰 硬質	暗灰	一枚作り。凸面縦位の撫で整形。篋描き文字 瓦「十」(凹面)。	吉井系
207-1 78 瓦-947	瓦 女瓦	覆土内 破片	厚 2.1	白色粒子 白色鉱物粒子	還元焰	暗灰	作り不詳。凸面木目叩き。側部面取り4回。 篋描き判読不能文字瓦(凹面)。	吉井系
207-2 78 瓦-948	瓦 女瓦	表土 破片	厚 2.3	白色鉱物粒子	還元焰	灰	一枚作りか。凸面縦位の撫で整形。篋描き判 読不能文字瓦(凸面)。	吉井系
207-3 78 瓦-949	瓦 女瓦	49-B-32 IV層 破片	厚 2.0	白色鉱物粒子 雲母石英片岩	還元焰	灰	一枚作り。凹面粘土板剥ぎ取り痕。凸面縄叩 き(密)後縦位の撫で再整形。篋描き文字瓦 「二」か篋傷(凸面)。	吉井系
207-4 78 瓦-950	瓦 女瓦	破片	厚 2.5	白色鉱物粒子 白色粒子	還元焰	灰	一枚作り。凸面斜位の撫で整形。篋描き判読 不能文字瓦(凸面)。	吉井系

## 3区3号井戸

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 量目 (cm) (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
208-1	円盤	砂利層 完形	長 3.2 幅 3.5 厚 0.7	黒色鉱物粒子 白色微粒子	酸化焰	明赤褐	38図-8と同一個体。	藤岡系の 土師器片
208-2	石製模造 品か 不詳	土器溜り 破片	長 2.1 幅 8.0 厚 4.0	滑石	—	—	石製模造品の断片と考えられ、長辺の3辺が 研かれた痕跡がある。	重900g
208-3	須恵器 不詳	2・3区 破片	口 17.0	白色粒子 白色鉱物粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。	乗附系
208-4	円筒埴輪 か	砂層上 破片		白色鉱物粒子 白色粒子	酸化焰	浅黄橙	紐作り成形。器外面は縦位の段毛撫で。内面 は指撫で整形。	吉井系
208-5	須恵器 大甕	土器溜り 破片	厚 1.1	白色微粒子	還元焰	灰白	紐作り。叩き整形(外面平行叩き・内面宛具 は青海波文)。器外面に稲穂の脱穀後の穂先の 圧痕が認められる。	搬入品か
208-6	土製品 羽口	3区III層 破片	厚 2.4 孔径 2.4	白色粒子 黒色鉱物粒子	酸化焰	明褐	円垂形状の羽口。外面下半に圭酸分が融着す る。	東毛系か
208-7	土製品 羽口	III層 破片	厚 1.4	白色粒子 黒色鉱物粒子	酸化焰	明褐	208図-6に同じ。	東毛系か
208-8	石製品 研石	2区III層 片	幅 4.3 厚 1.9	粗粒安山岩	—	—	手持研。研面は丸味を帯びている。	重400g
208-9	石製品 研石	3区III層 破片	—	安山岩 粗粒安山岩	—	—	断面「V」字状の研き減りが直線的に延びる。	重620g
208-10	礫器	2区III層 完存	長 5.2 幅 4.3 厚 2.2	粗粒安山岩	—	—	平坦面が使用に伴ない磨滅する。	重900g
208-11	礫器	2区III層 完存	長 4.7 幅 4.5 厚 3.6	粗粒安山岩	—	—	全面が使用に伴ない磨滅する。	重100g
208-12	礫器	2区III層 完存	長 6.3 幅 5.7 厚 3.0	粗粒安山岩	—	—	全面が使用に伴ない磨滅する。	
209-1 75	須恵器 甕	上層	口 (14.6)	白色微粒子	還元焰	断・橙 外・暗灰	14図-3と接合。	乗附系

遺物観察表

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
209-2 75	須 惠 器 壺	3区III層 2区III層	最 26.2	黒色粒子 白色粒子 白色鉍物粒子	還元焰 硬質	灰	紐作り後轆轤整形(右回転)。外面胴部下半は 回転篋削り。器外面自然釉付着。	東海系 (湖西か)

C区表土

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
210-1	土師質土 器 カワラケ	C区表土 ⅓	口 ( 6.2) 高 1.6	白色微粒子	酸化焰	浅黄橙	轆轤成形(左回転)、底部は回転糸切り。	14C後半
210-2	土師質土 器 カワラケ	表土 破片	口 ( 7.3) 底 ( 5.6) 高 2.2	白色粒子 黒色粒子	酸化焰	鈍黄橙	轆轤成形(左回転)、底部は回転糸切り。破片 化後火中している。	14C末
210-3	須 惠 器 小 皿	2区III層 ⅓	口 ( 8.0) 底 ( 4.8) 高 1.8	石英粒 黒色鉍物粒子 赤褐色粒子	酸化焰	鈍橙	轆轤成形(右回転)、底部は回転篋起しか。	15C前半
210-4	土師質土 器 カワラケ	表土 破片	底 ( 5.2) 高 ( 2.3)	白色微粒子	酸化焰	橙	轆轤成形(左回転)か。	15C前半 不詳
210-5	軟質陶器 播 鉢	表土 破片	口 (30.2) 高 ( 6.2)	白色微粒子	還元焰	灰	轆轤成形(左回転)。	乗附系か
210-6	軟質陶器 播 鉢	表土 破片	底 (11.6)	白色微粒子 微粒長石	酸化焰 硬質		轆轤成形(左回転)、底部は回転糸切り。内面 の磨滅は顕著。	乗附系
210-7	軟質陶器 茶 釜	表土 破片	肩 (35.6)	白色微粒子 黒色鉍物微粒 子	還元焰	灰	紐作り後轆轤整形(左回転)。器外面には、耳 と把手を付けている(単位不詳)。	乗附系
210-8	施釉陶器 天目碗	表土 破片	厚 0.7	白色微粒子 黒色粒子	還元焰 焼締め	釉・黒 断灰	轆轤成形(左回転?)。釉調は薄い。	舶載品 (中国)
210-9	施釉磁器 青 磁	3井戸周 辺砂層 破片	厚 0.7	密	良好	オリ ーブ灰	鎚手蓮弁文碗。釉の気泡は非常に細かい。釉 調はくすんだオリーブ色を呈する。	越州窯流 南宋青磁
210-10	施釉陶器 灰 釉 皿	表土 破片	底 ( 8.4)	やや密	良好	白灰	轆轤成形(左回転)、底部は回転糸切り。見込 みに条線を施し目跡が残る。	瀬戸・美 濃系
210-11	施釉陶器 灯 明 皿	表土 ⅓	口 9.5 底 4.4 高 1.9	密	良好	赤褐	轆轤成形(左回転)。内外面に鉄釉を施釉する。 腰部・底部は回転篋削り。	
210-12 78 瓦-963	瓦 鏡 瓦	濁黒褐色 砂層 破片	厚 2.0	白色微粒子	還元焰	灰	単弁5葉蓮華文。上野国分寺式創建統一意匠。	笠懸系

染谷川河川敷遺構外扱

挿図番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎 土	焼 成	色 調	器 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	備 考
213-1	土 師 器 器 台	III層 ⅓	高 ( 5.2)	白色微粒子 微粒長石	酸化焰	橙	脚部器外面、器受部は磨き整形を施す。脚内 面は篋撫で後印毛撫でを施している。	不詳
213-2	土 師 器 高 坏	45-C-41 破片	口 (22.0)	微粒長石 黒色鉍物粒子	酸化焰	浅黄橙	内外面に磨きを施す。	不詳
213-3	土 師 器 台 付 甕	III層 破片	口 (13.0)	白色鉍物粒子 黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子	酸化焰	鈍橙	「S」字状口縁を呈する。器外面には印毛撫 でを施し、器内面は撫で整形。断面の粘土の 動きから「型作り成形」が考えられる。	西毛系か
213-4	土 師 器 台 付 甕	土器溜り 破片	口 (14.2)	白色鉍物粒子 黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子	酸化焰	鈍黄橙	「S」字状口縁。	東毛系か
213-5	土 師 器 台 付 甕	III層 破片	口 (15.0)	白色鉍物粒子 黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子	酸化焰	鈍黄橙	「S」字状口縁。	東毛系か
213-6	土 師 器 台 付 甕	土器溜り 破片	口 (15.0)	白色鉍物粒子 白色微粒子	酸化焰	鈍黄橙	「S」字状口縁。	西毛系か

## 遺物観察表

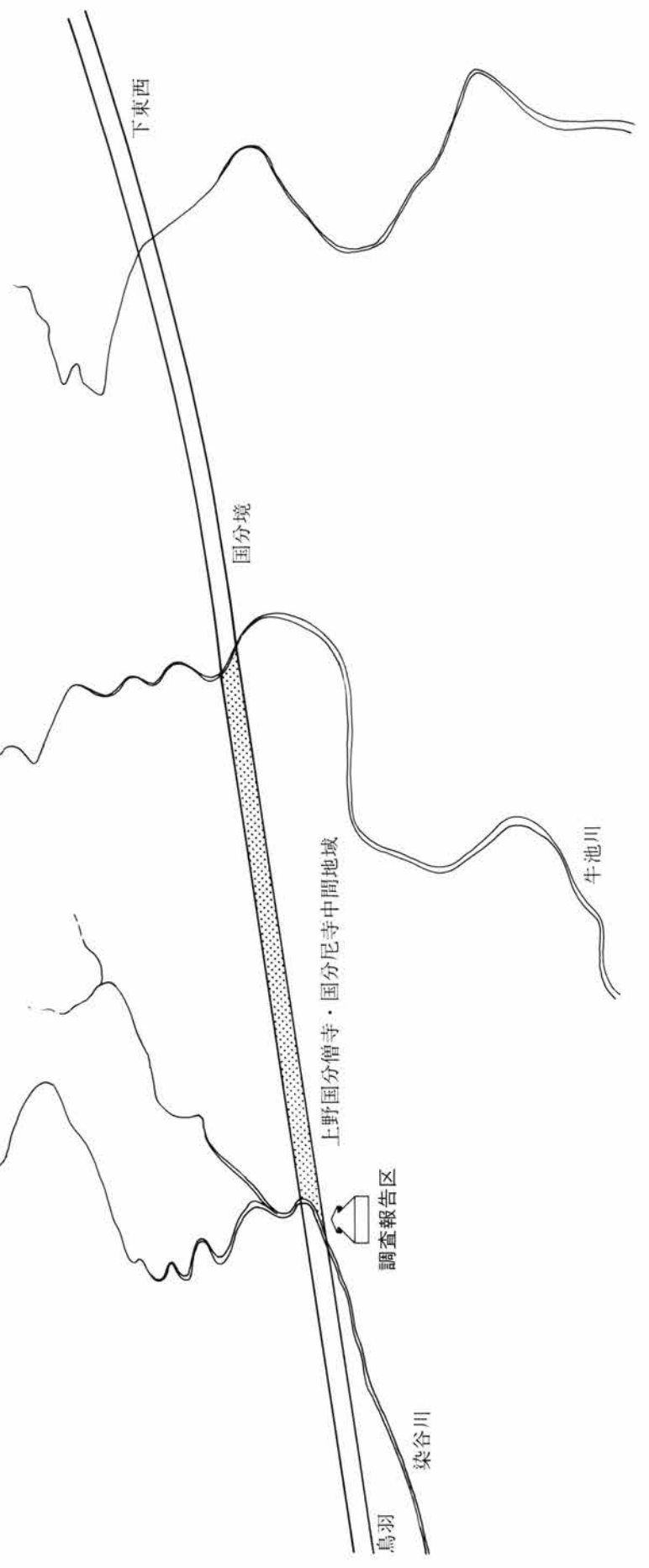
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	度目 (cm) 量目 (g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
213-7	土師器 台付甕	III層 破片	口 (18.0)	白色鉍物粒子 黒色鉍物粒子 透明鉍物粒子	酸化焰	灰黄	「S」字状口縁。	東毛系か
213-8	土師器 台付甕	土器溜り 破片	口 (13.0)	白色微粒子 黒色鉍物粒子	酸化焰	鈍黄橙	「S」字状口縁。	西毛系か
213-9	土師器 台付甕	暗灰褐色 土層 破片	口 (14.0)	白色微粒子 黒色鉍物粒子	酸化焰	鈍黄橙	「S」字状口縁。	西毛系か
213-10	土師器 壺底部	III層 破片	底高 (4.4 1.9)	白色微粒子	酸化焰	褐	器外面は縦位の篋撫で整形を施す。	東毛系か
213-11	土師器 台付甕	III層 破片	底 (7.0)	白色鉍物粒子 黒色鉍物粒子 チャート円粒	酸化焰	橙	脚部の印毛撫では二種の工具による。付加粘土は、底部を穿孔する状態で付加している。	西毛系か
213-12	土師器 台付甕 脚部	III層 破片	—	白色微粒子 白色鉍物粒子 微粒長石	酸化焰	灰黄	付加粘土の砂量はやや少ない。	東毛系か
213-13	土師器 台付甕	III層 破片	基 4.6	白色微粒子	酸化焰	灰	器内面は印毛撫でを横位に施すが、外面は縦位の篋撫である。	不詳
213-14	土師器 台付甕 脚部	III層 破片	基 5.8	白色微粒子 黒色鉍物粒子	酸化焰	鈍黄橙	甕部側の付加粘土は脚部側の付加粘土より砂粒が粗い。	西毛系か



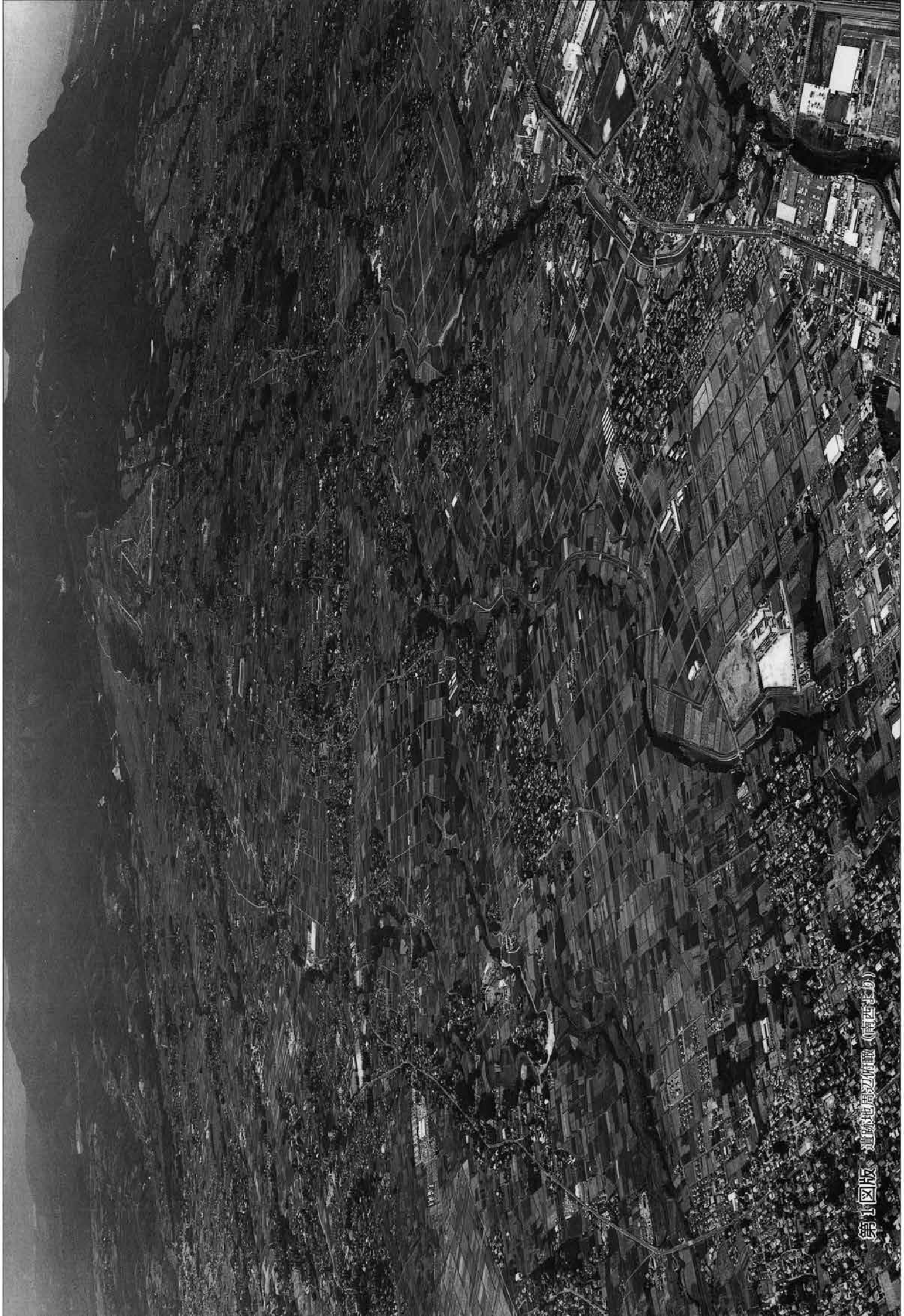
# 写 真 图 版



二ツ丘







第11图版 通称地層之俯瞰（南西北向）

宝塔山古墳  
蛇穴山古墳

山王庵寺(放光寺)

牛池川

国分尼寺

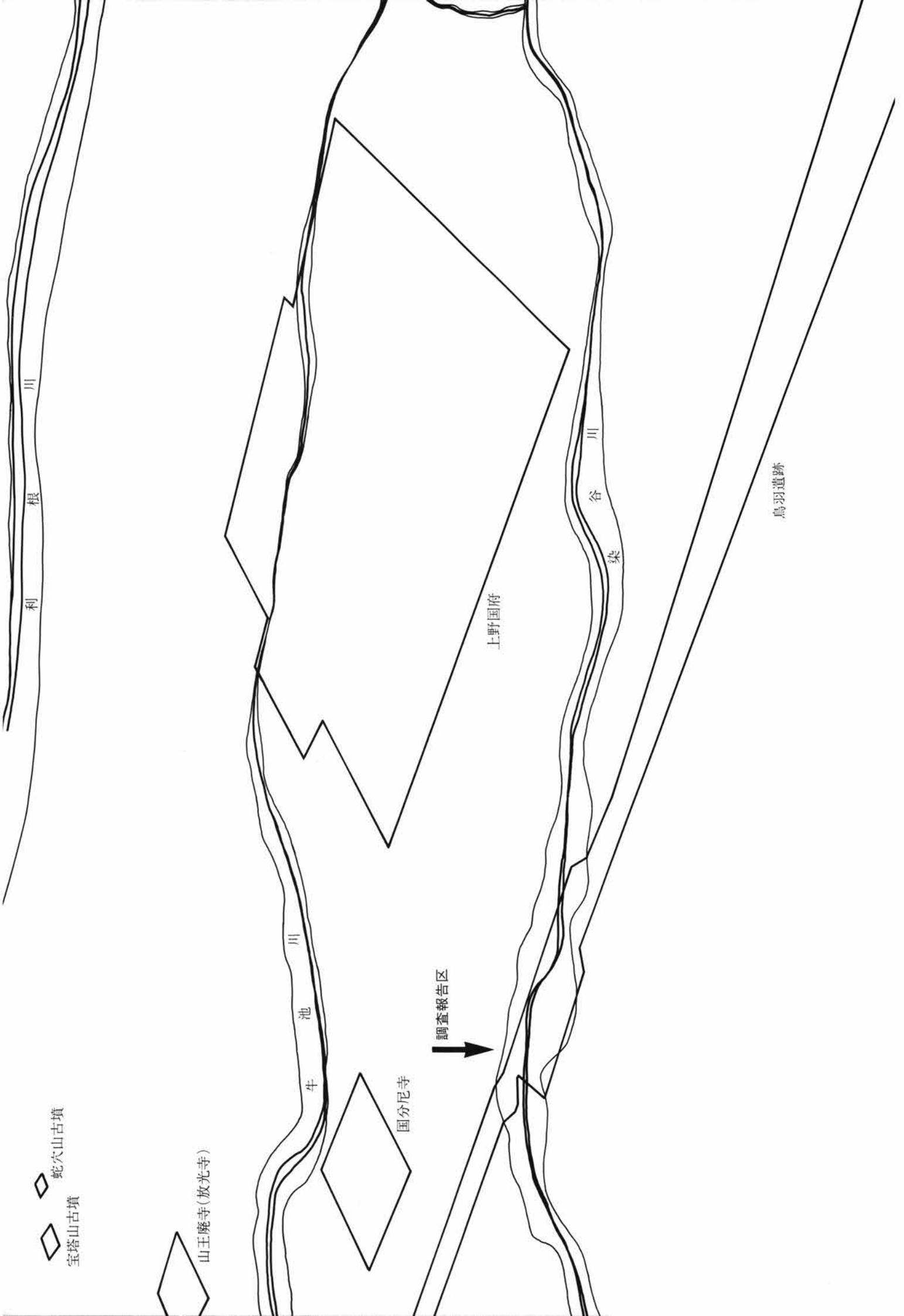
調査報告区

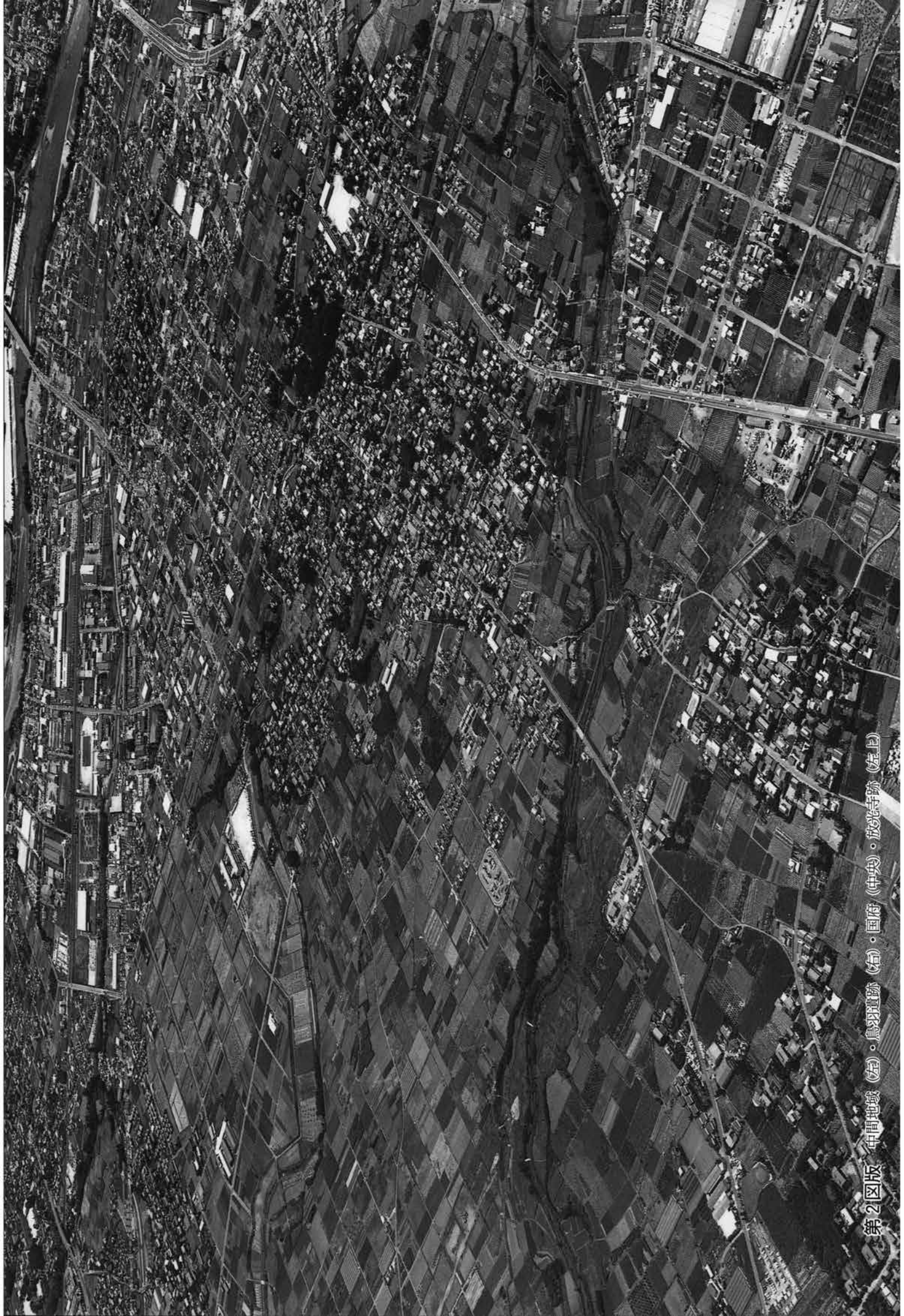
上野国府

染谷川

鳥羽遺跡

根利川





第2図版 中岡地域 (左)・鳥羽遺跡 (右)・国府 (中央)・比叡寺跡 (右上)





第4図版



1. 染谷川河川敷1区



2. 染谷川河川敷3・4・5・6区全景



1. 染谷川河川敷2・3区全景



2. 染谷川河川敷1・2区境

第 6 図版



1. 染谷川河川敷3区セクションベルト上



2. 染谷川河川敷3区地山断面





1. 染谷川河川敷2号集石階段



2. 染谷川河川敷階段

第 8 図版



1. 染谷川河川敷1区集石



2. 染谷川河川敷1区井戸



1. 染谷川河川敷1号井戸



2. 染谷川河川敷1・3号井戸掘り方

第10図版



1. 染谷川河川敷 号土坑



2. 染谷川河川敷3区1号井戸周辺

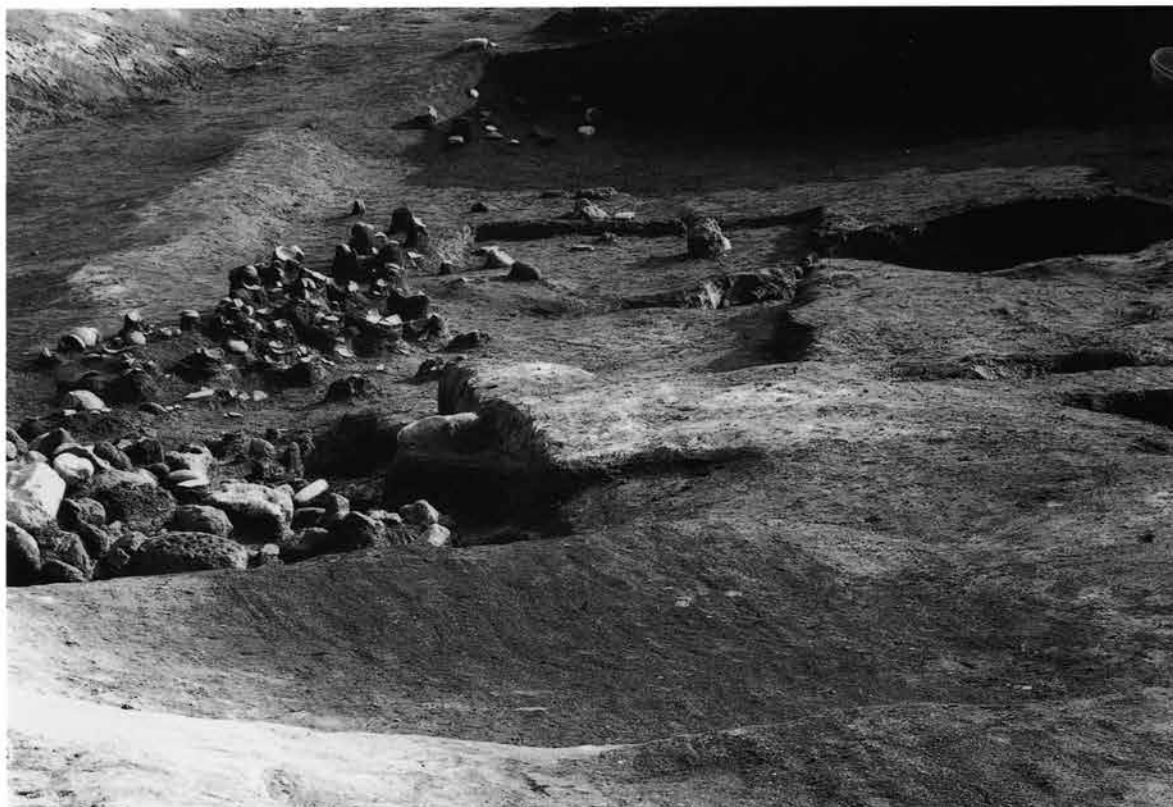


1. 染谷川河川敷2区セクションベルトF層



2. 染谷川河川敷2区セクションベルトF A部 up

第12図版



1. 染谷川河川敷土器溜り



2. 染谷川河川敷2区2号井戸確認時土器溜り



1. 染谷川河川敷2区土器溜り



2. 染谷川河川敷2区土器溜り

第14図版

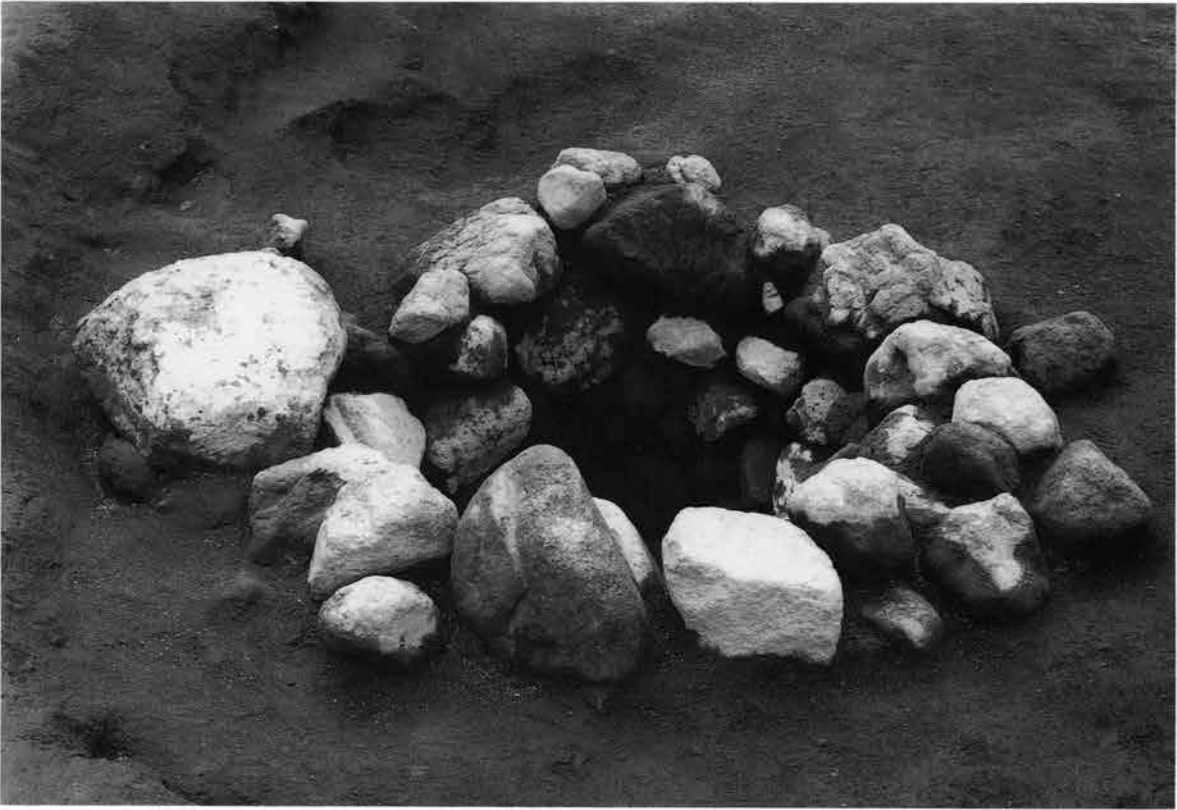


1. 染谷川河川敷2号井戸周辺全景



2. 染谷川河川敷2号井戸





1. 染谷川河川敷2号井戸



2. 染谷川河川敷2号井戸

第16図版



1. 染谷川河川敷2号井戸掘り方



2. 染谷川河川敷3号井戸FA上木材



Y1井 12-2



Y1井 12-3



Y1井 12-7



Y1井 12-9



Y1井 12-8



Y1井 12-11



Y1井 12-14



Y1井 12-16



Y1井 12-20



Y1井 12-21



Y1井 12-23



Y1井 12-24



Y1井 12-17



Y1井 12-26



Y1井 12-22



Y1井 13-1



Y1井 13-2



Y1井 13-4



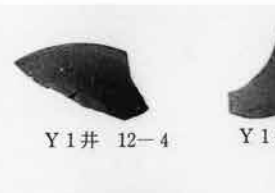
Y1井 13-11



Y1井 31-2



Y1井 12-1



Y1井 12-4



Y1井 12-6



Y1井 12-10



Y1井 12-12



Y1井 12-13



Y1井 12-15



Y1井 12-18



Y1井 12-5



Y1井 12-25



Y1井 12-19



Y1井 13-3



Y1井 13-5



Y1井 13-6



Y1井 31-1



Y1井 31-3



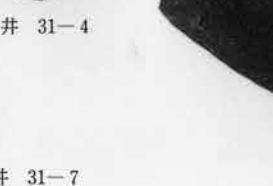
Y1井 31-4



Y1井 31-5

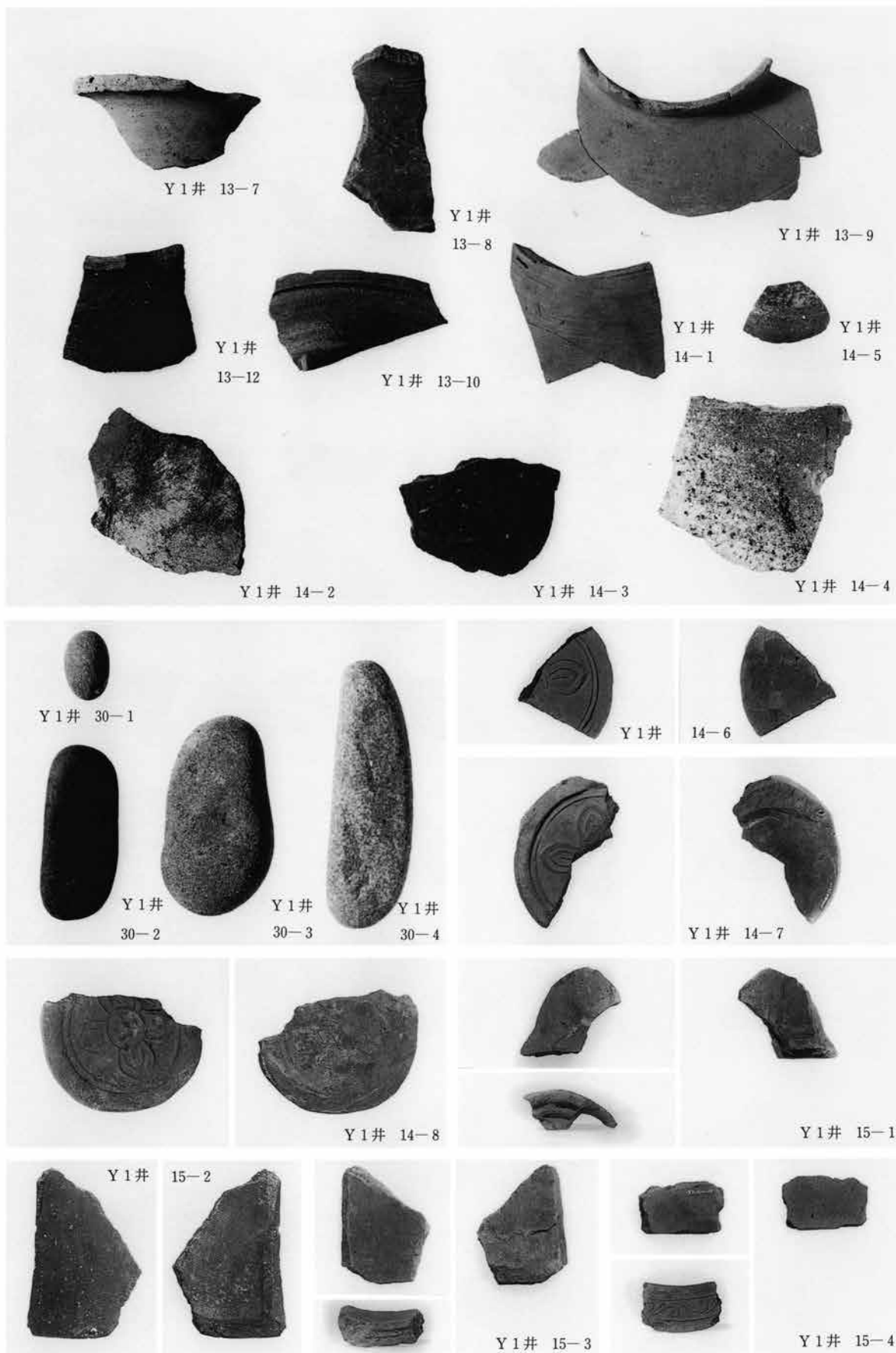


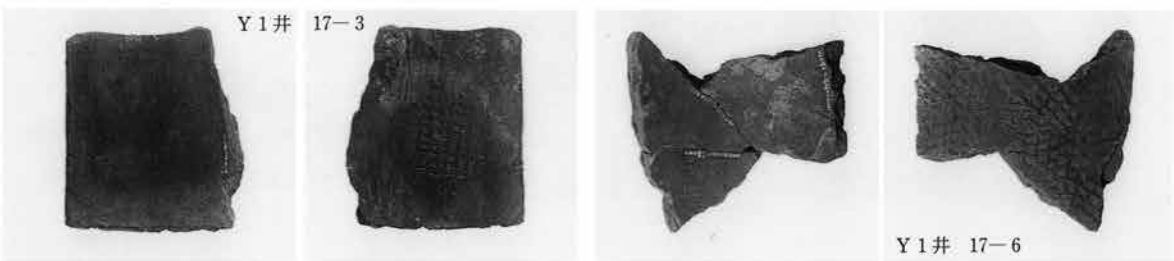
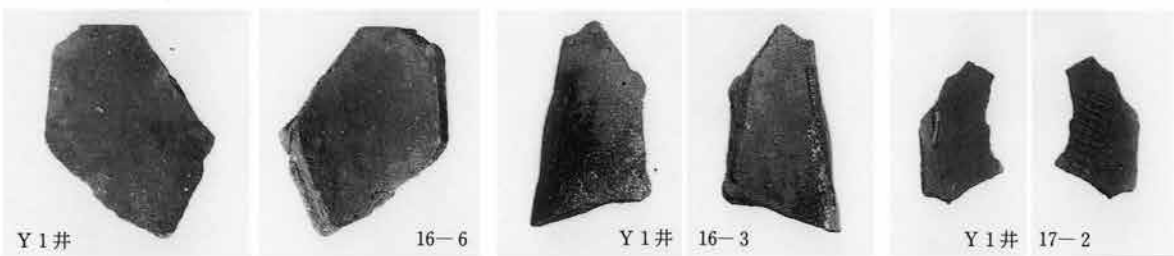
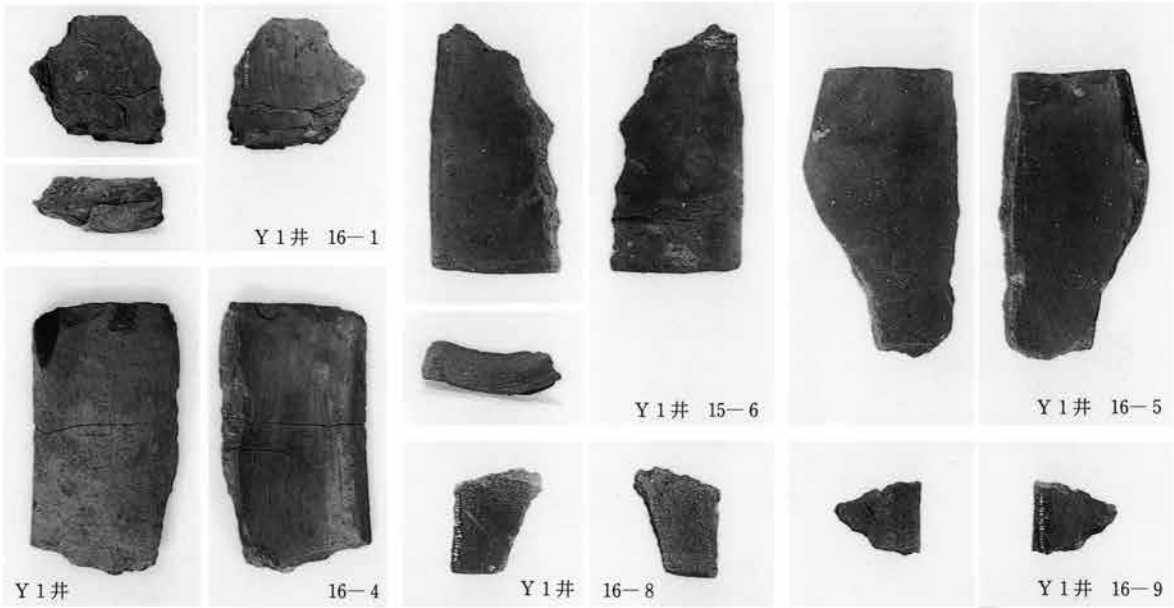
Y1井 31-7



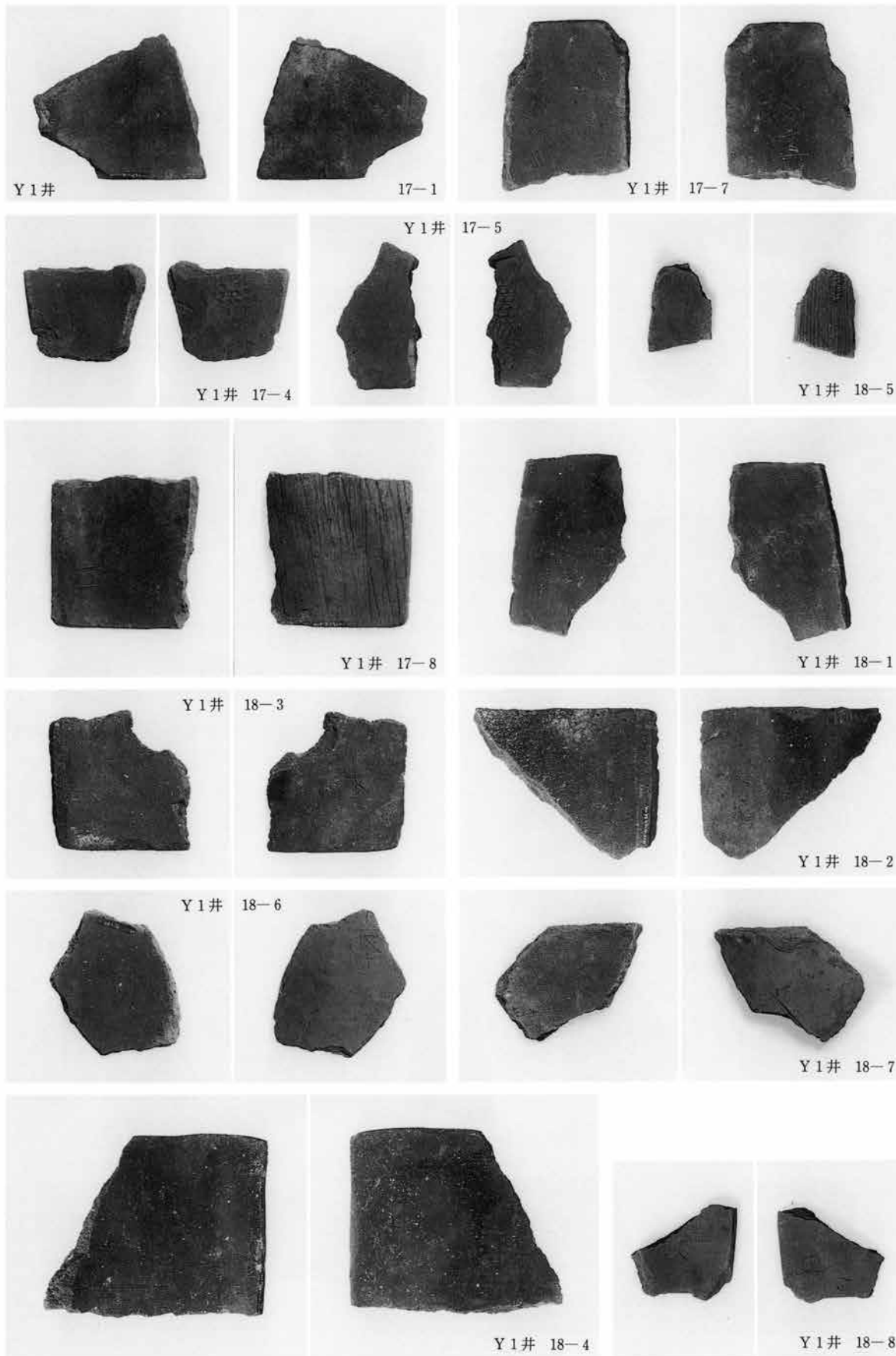
Y1井 31-6

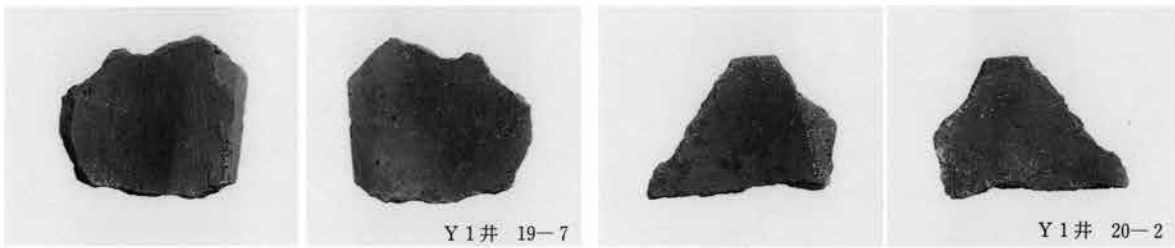
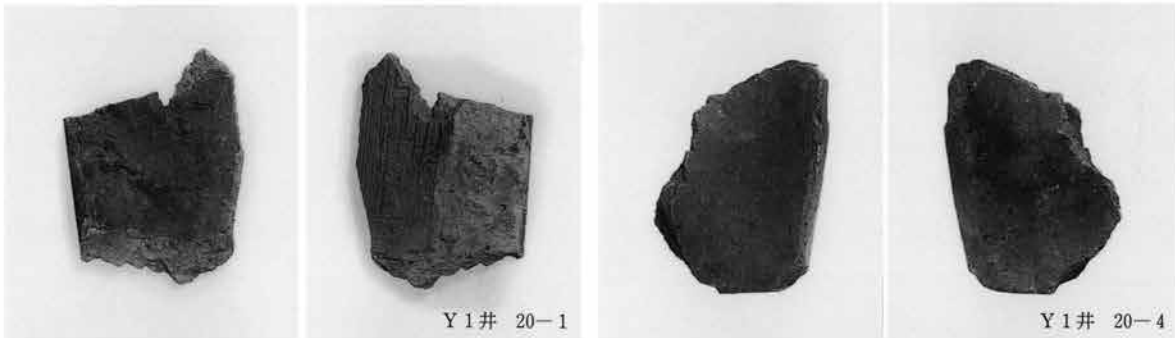
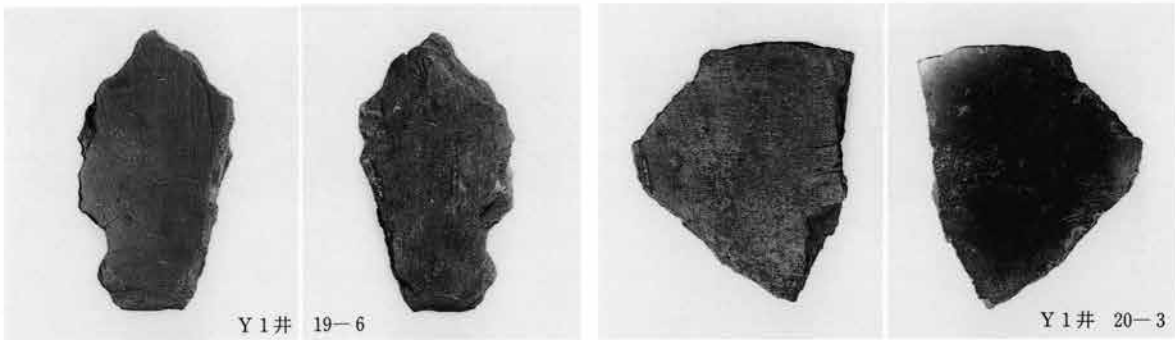
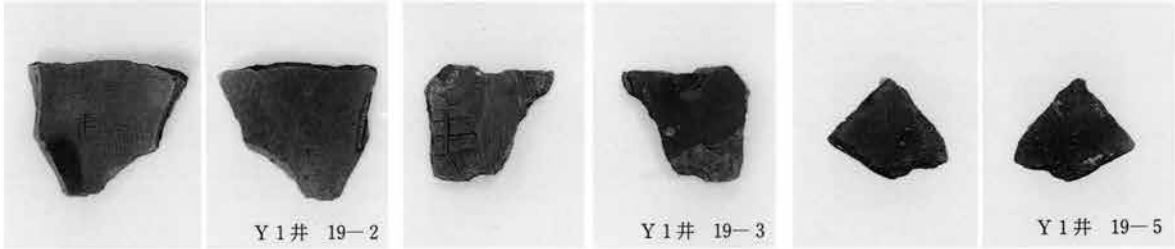
第18図版



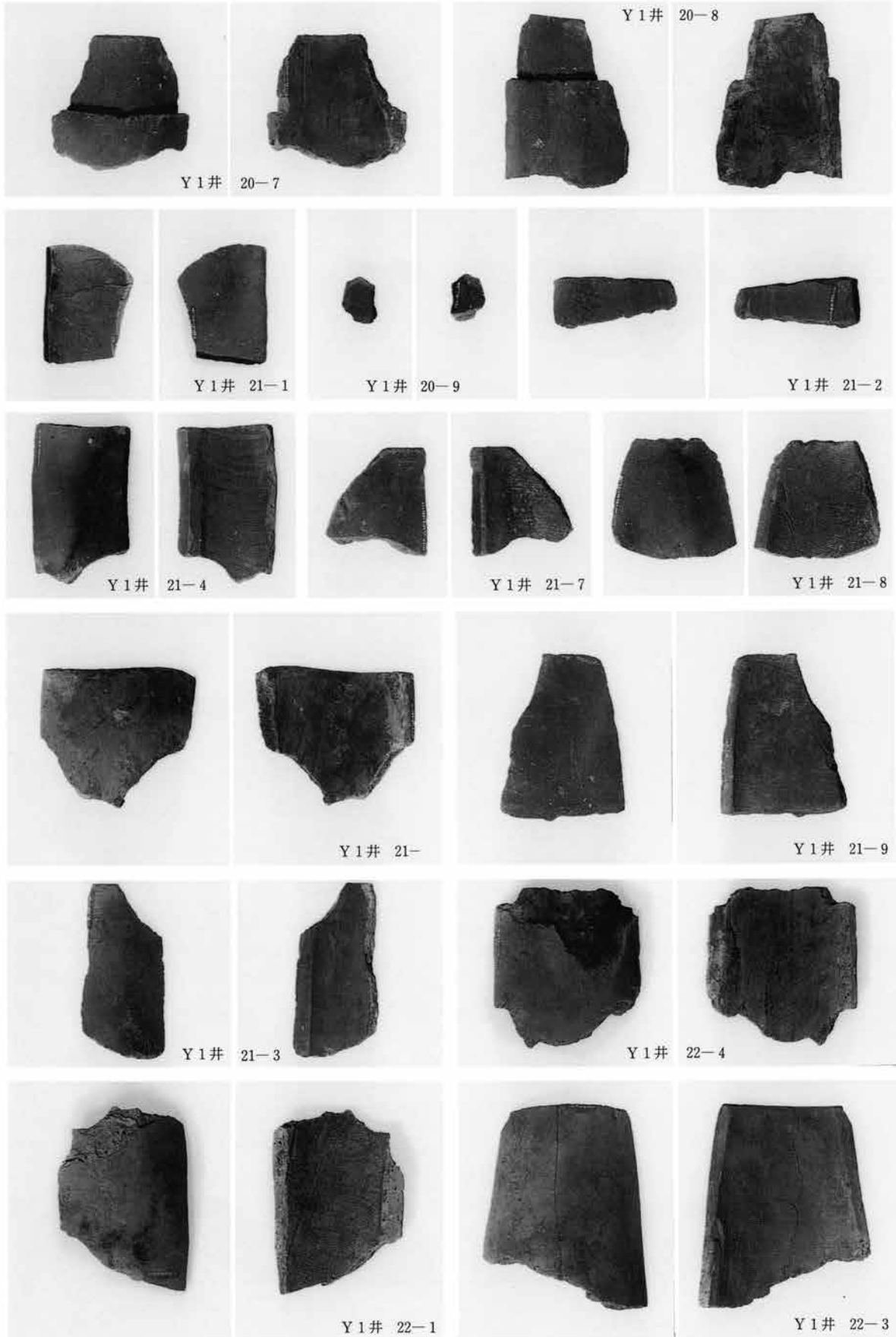


第20図版





第22図版







Y1井 21-6



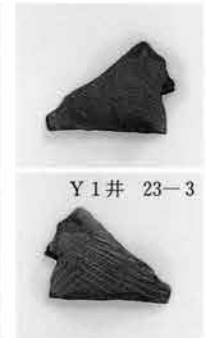
Y1井 23-1



Y1井 22-2



Y1井 23-2



Y1井 23-3



Y1井 23-4



Y1井 23-6



Y1井 24-1

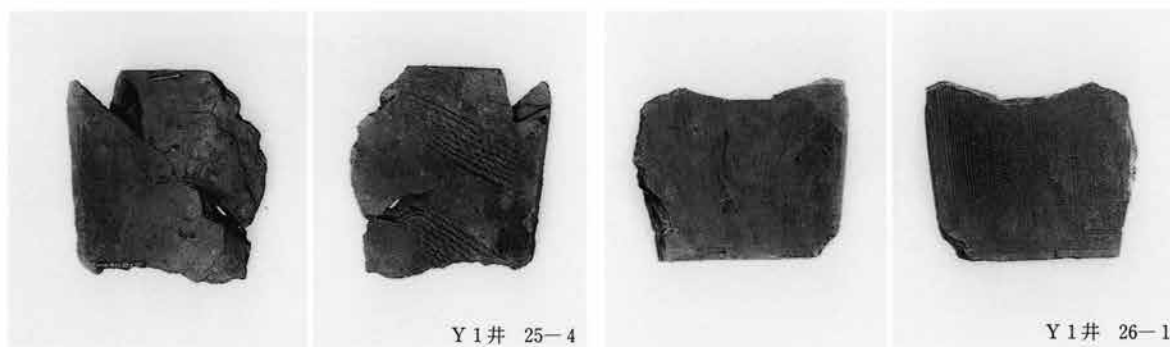
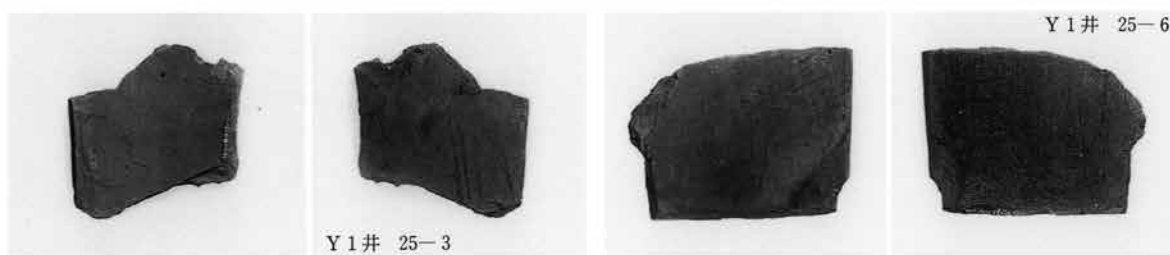
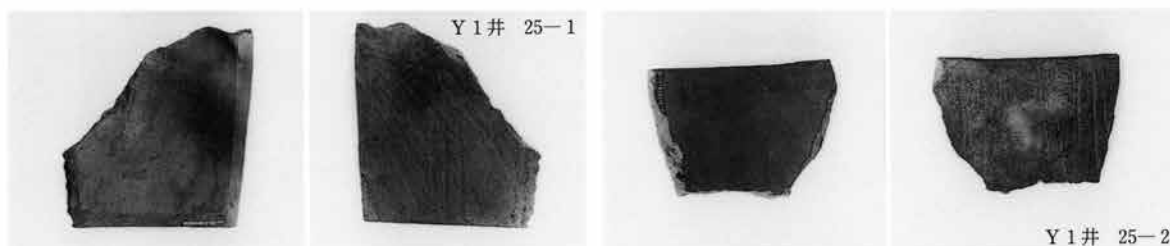
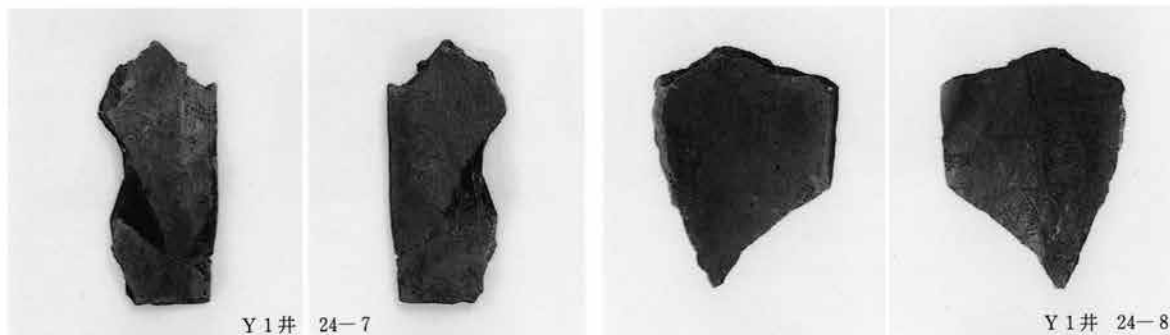
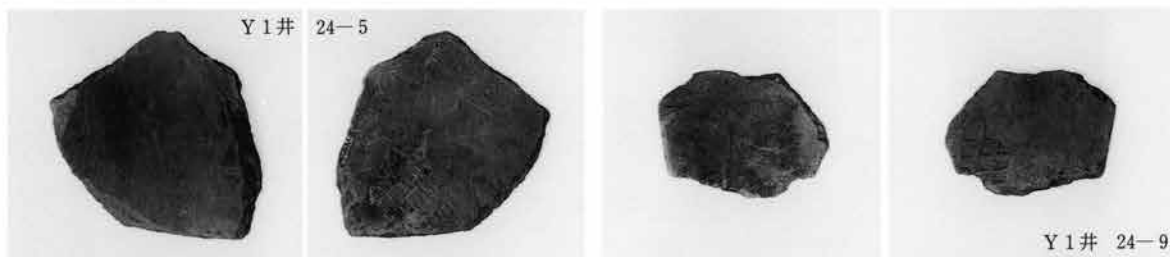
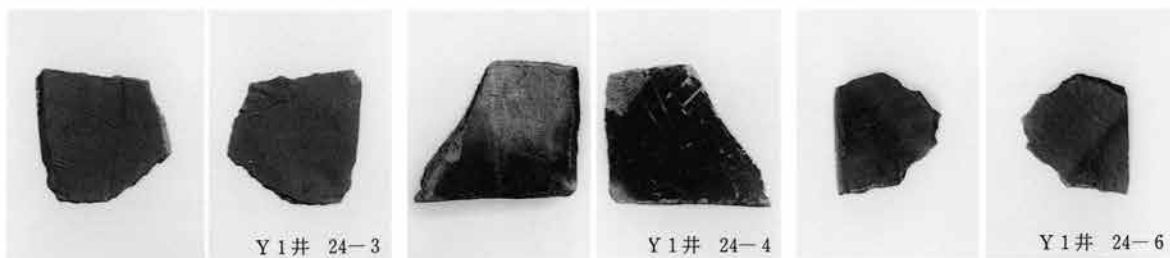


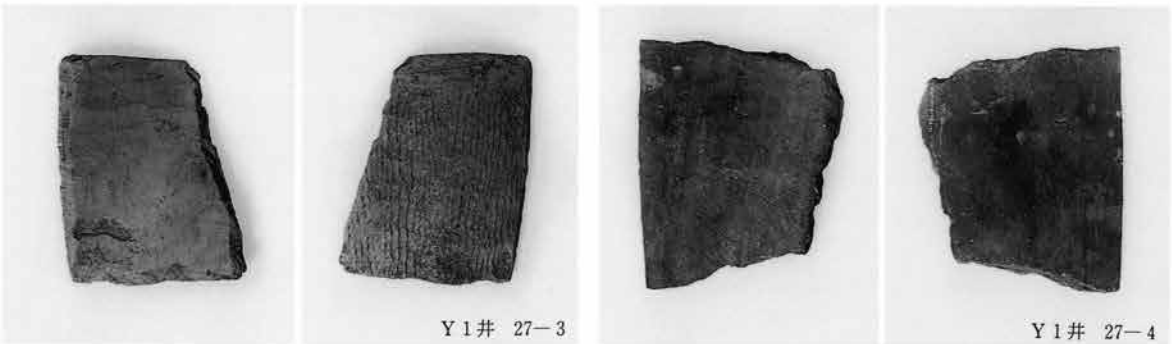
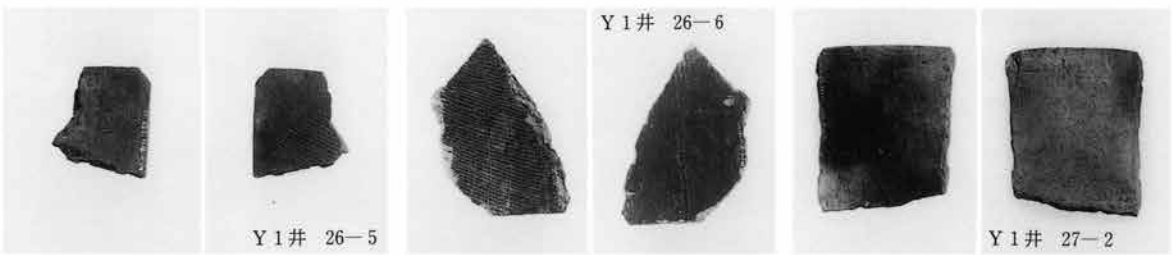
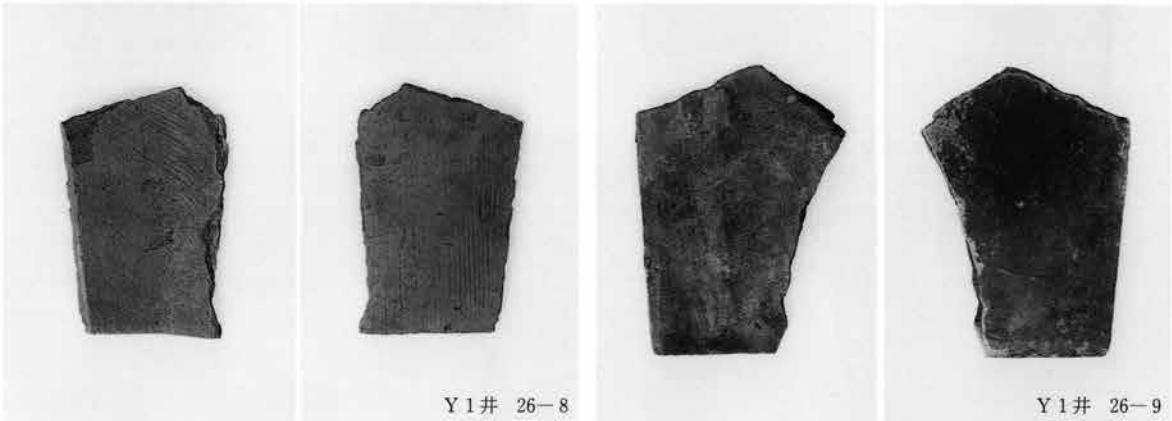
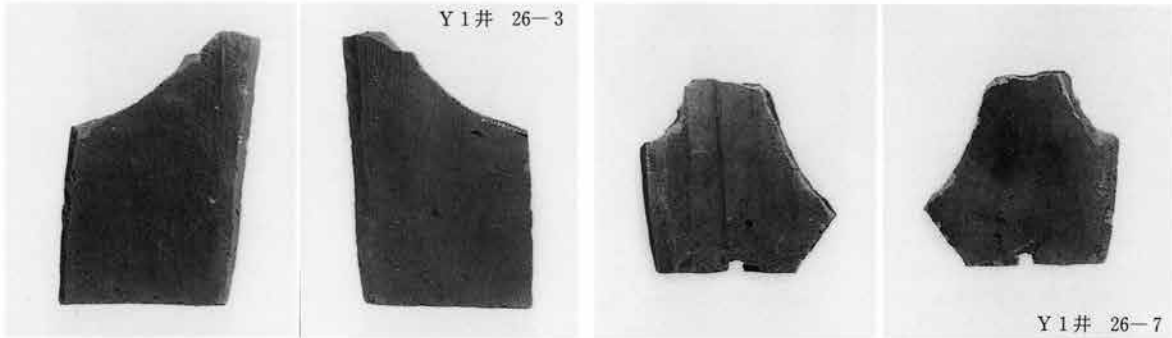
Y1井 24-2



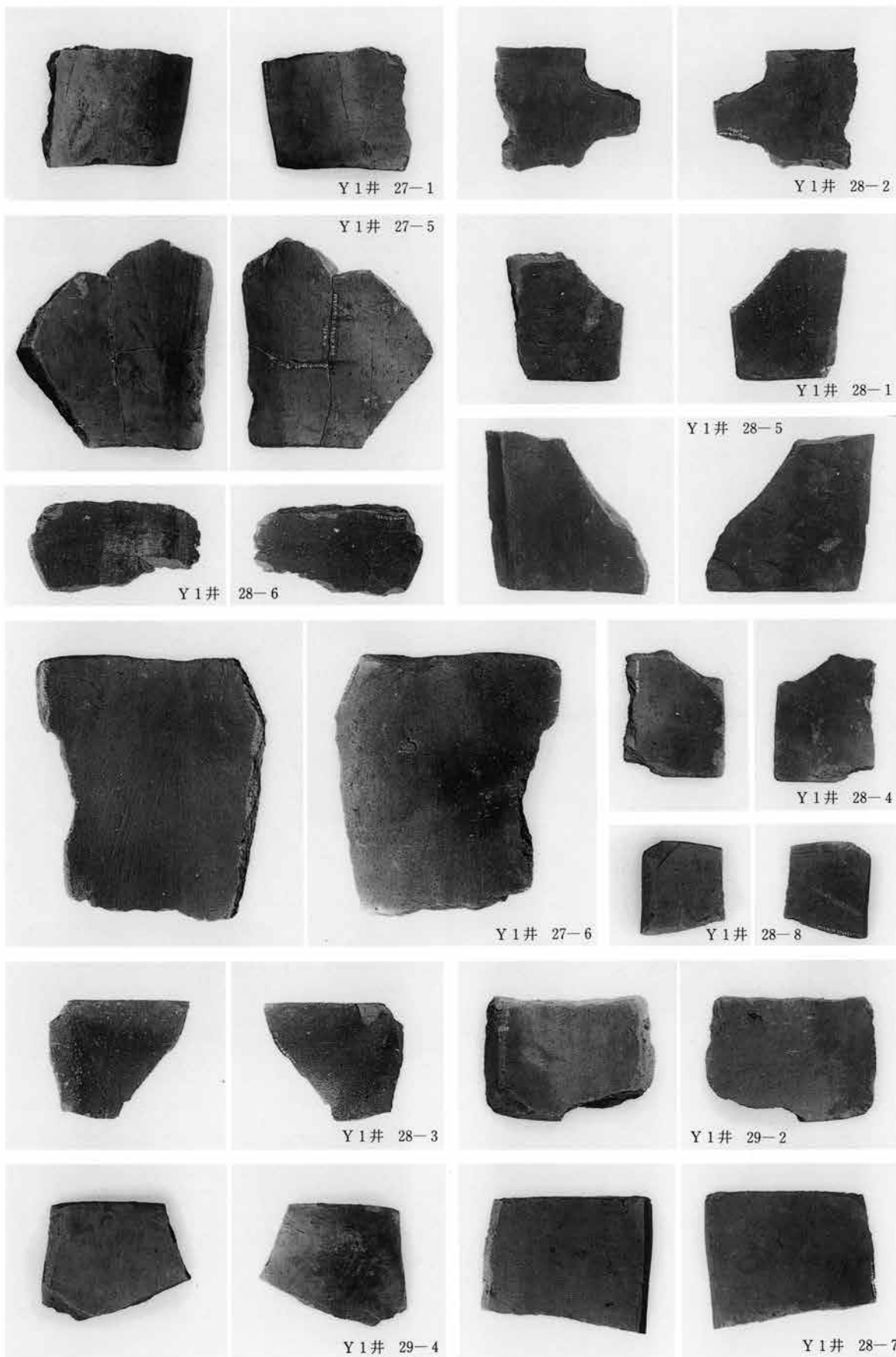
Y1井 23-5

第24図版

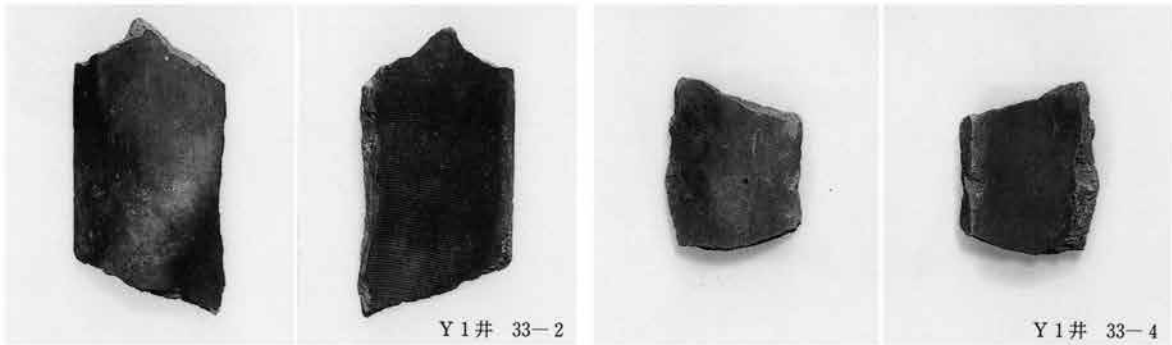
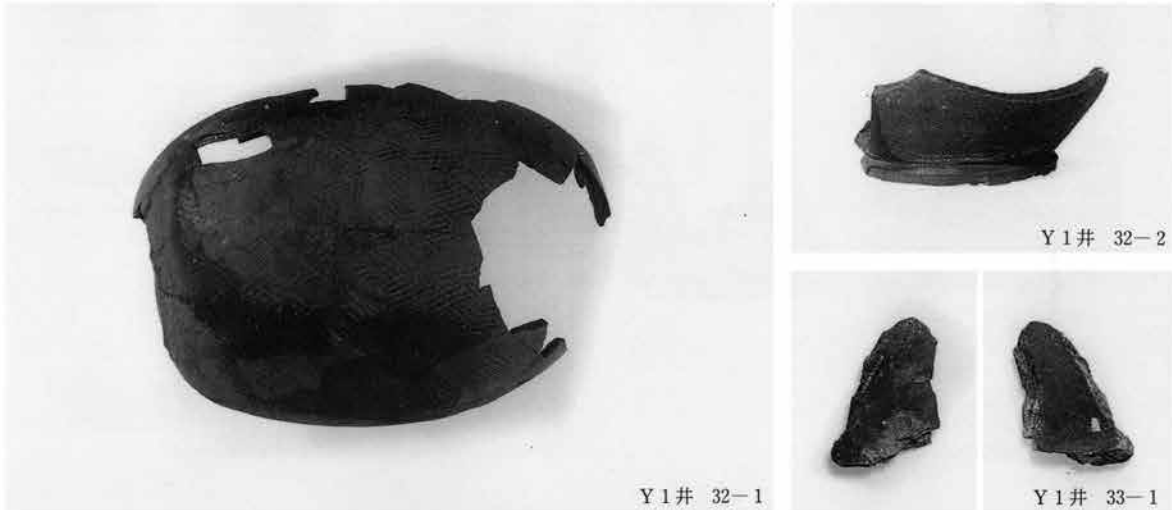
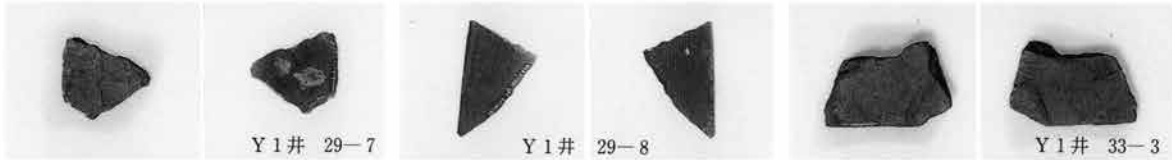
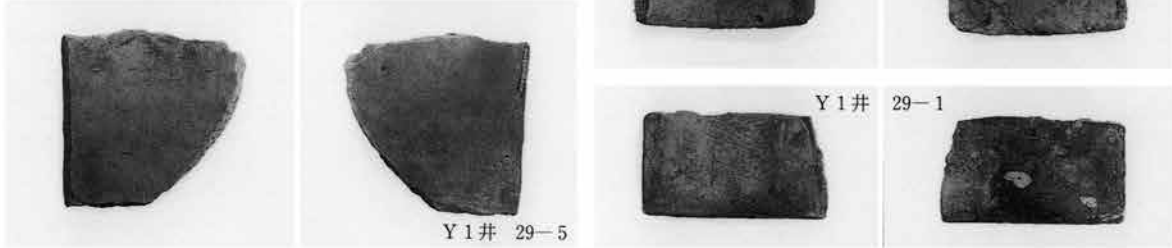
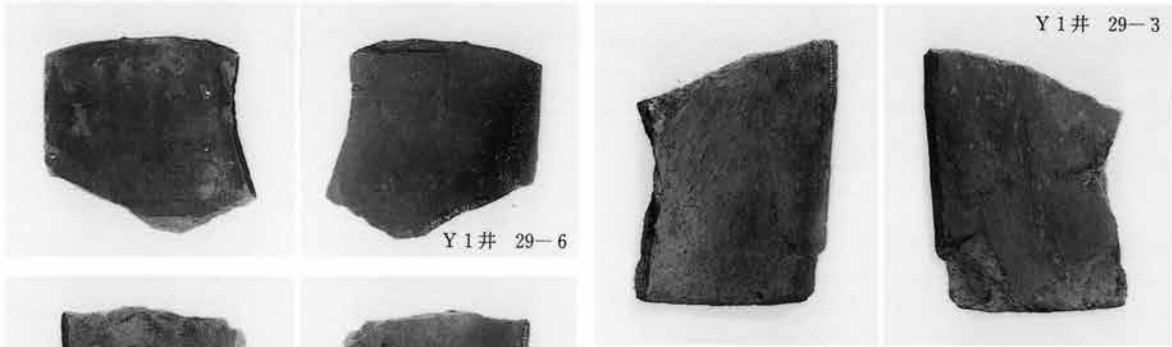




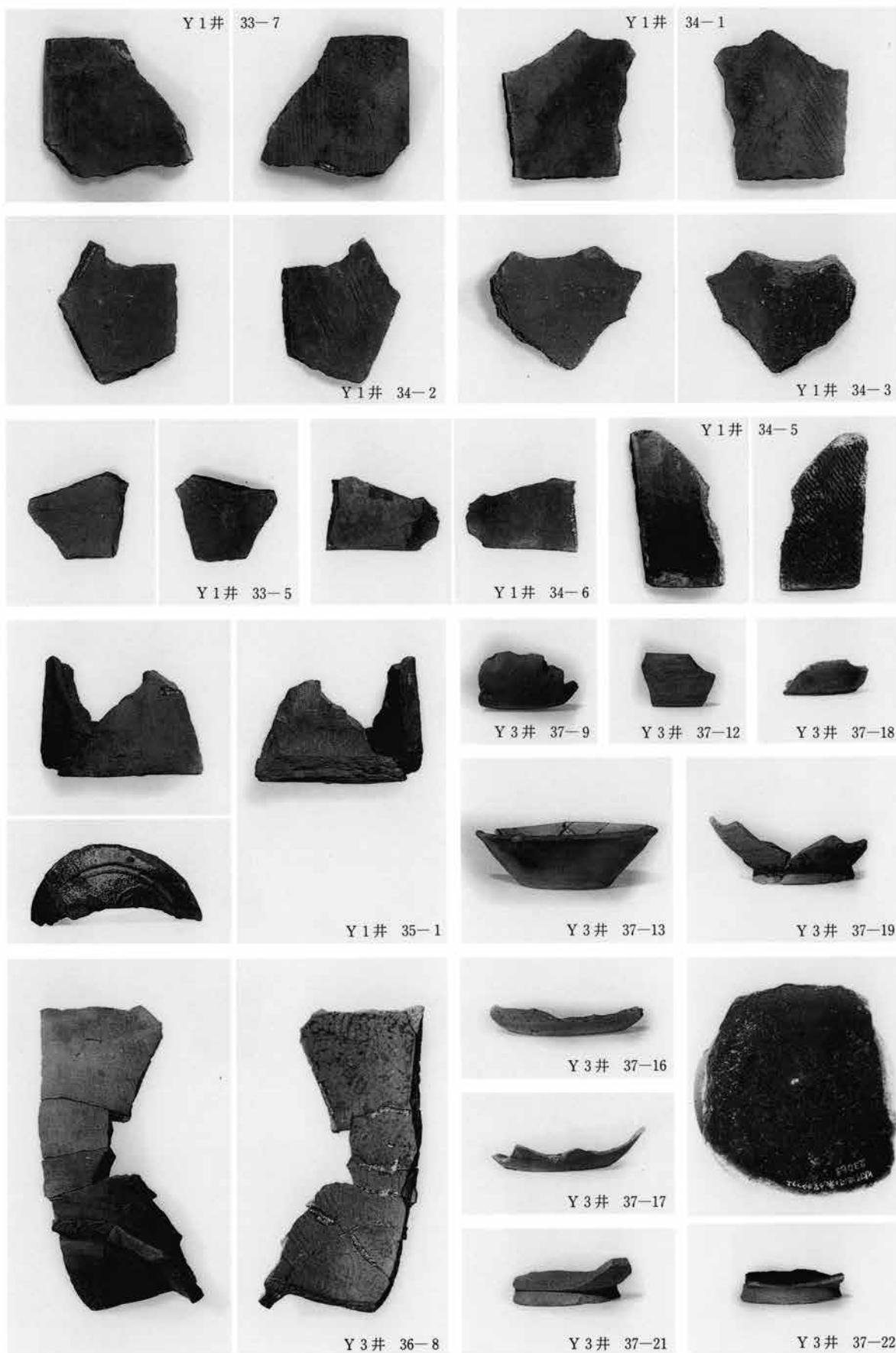
第26図版

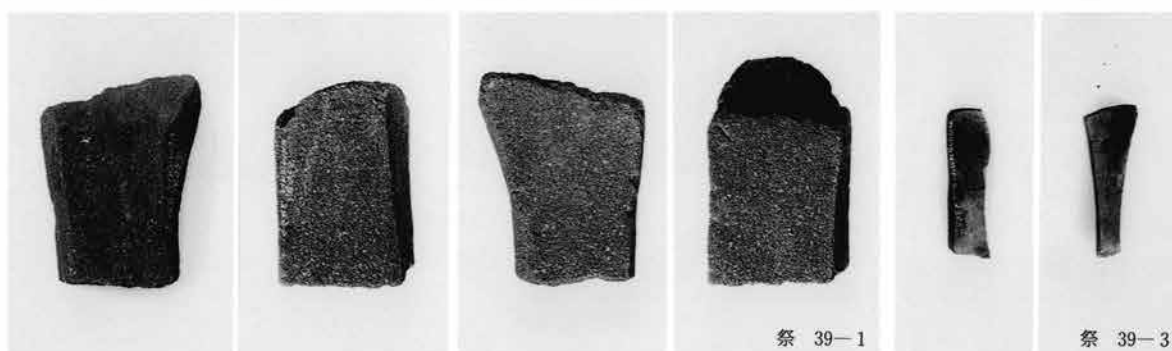
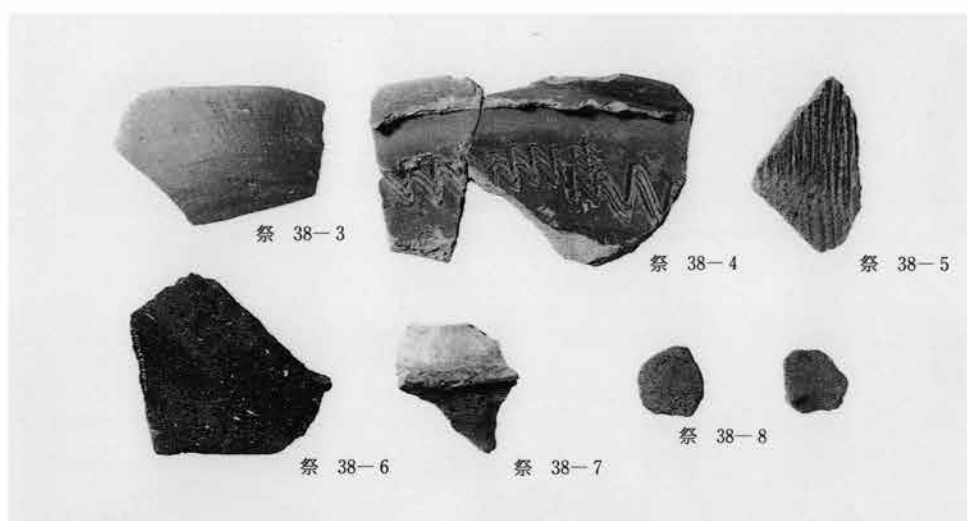
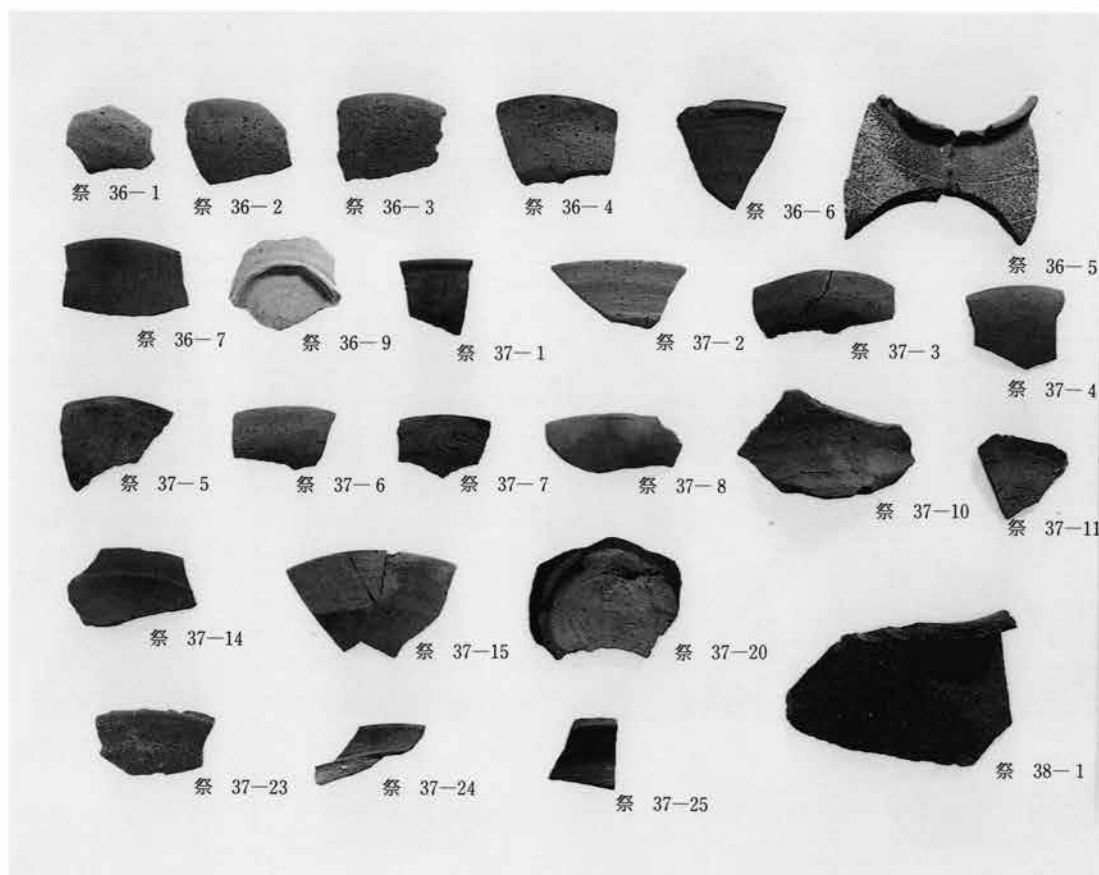


第27図版

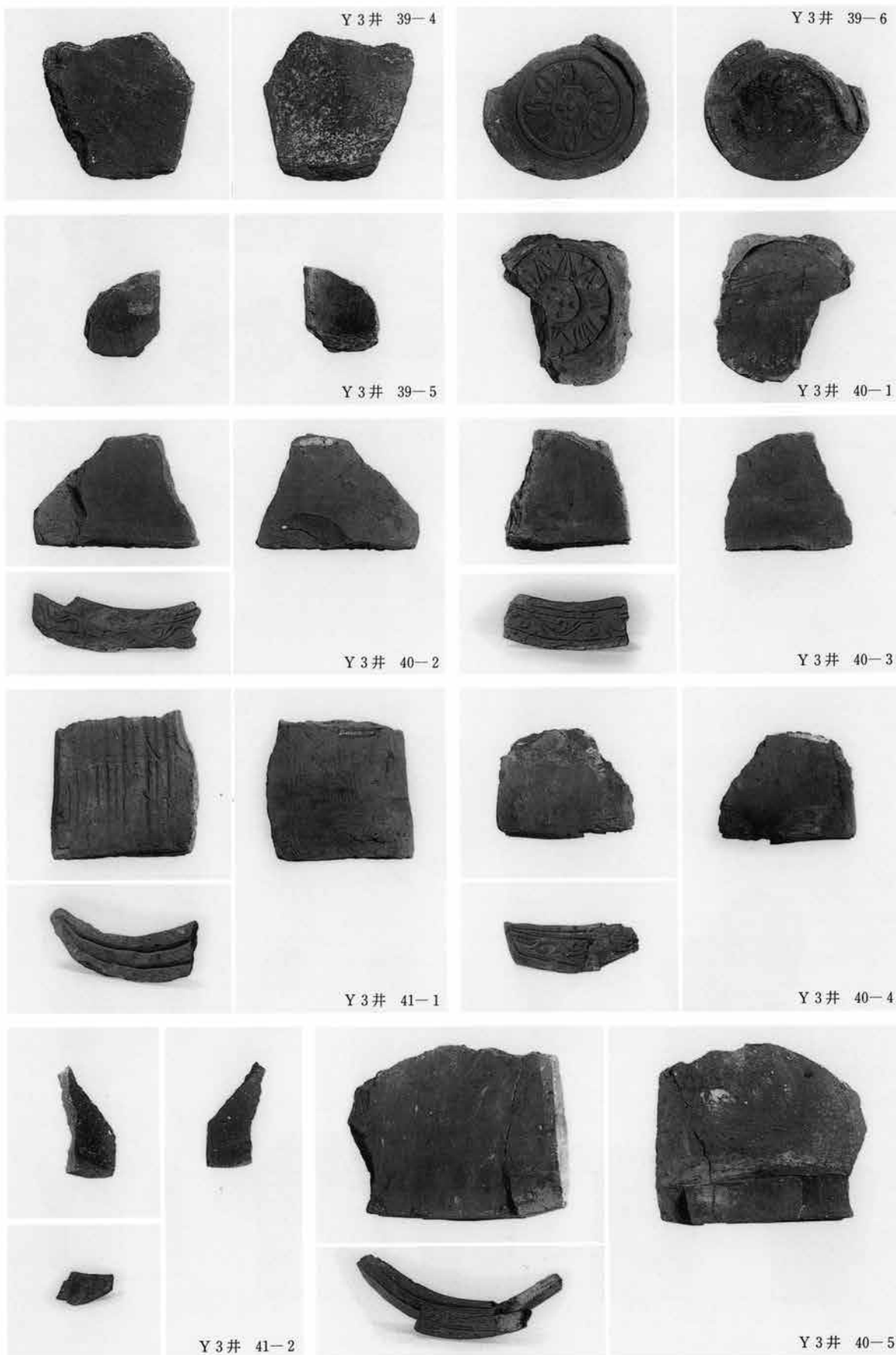


第28図版





第30図版







Y 3 井 41-3



Y 3 井 41-4



Y 3 井 41-5



Y 3 井 41-6



Y 3 井 41-7



Y 3 井  
42-3



Y 3 井 42-1



Y 3 井 42-2

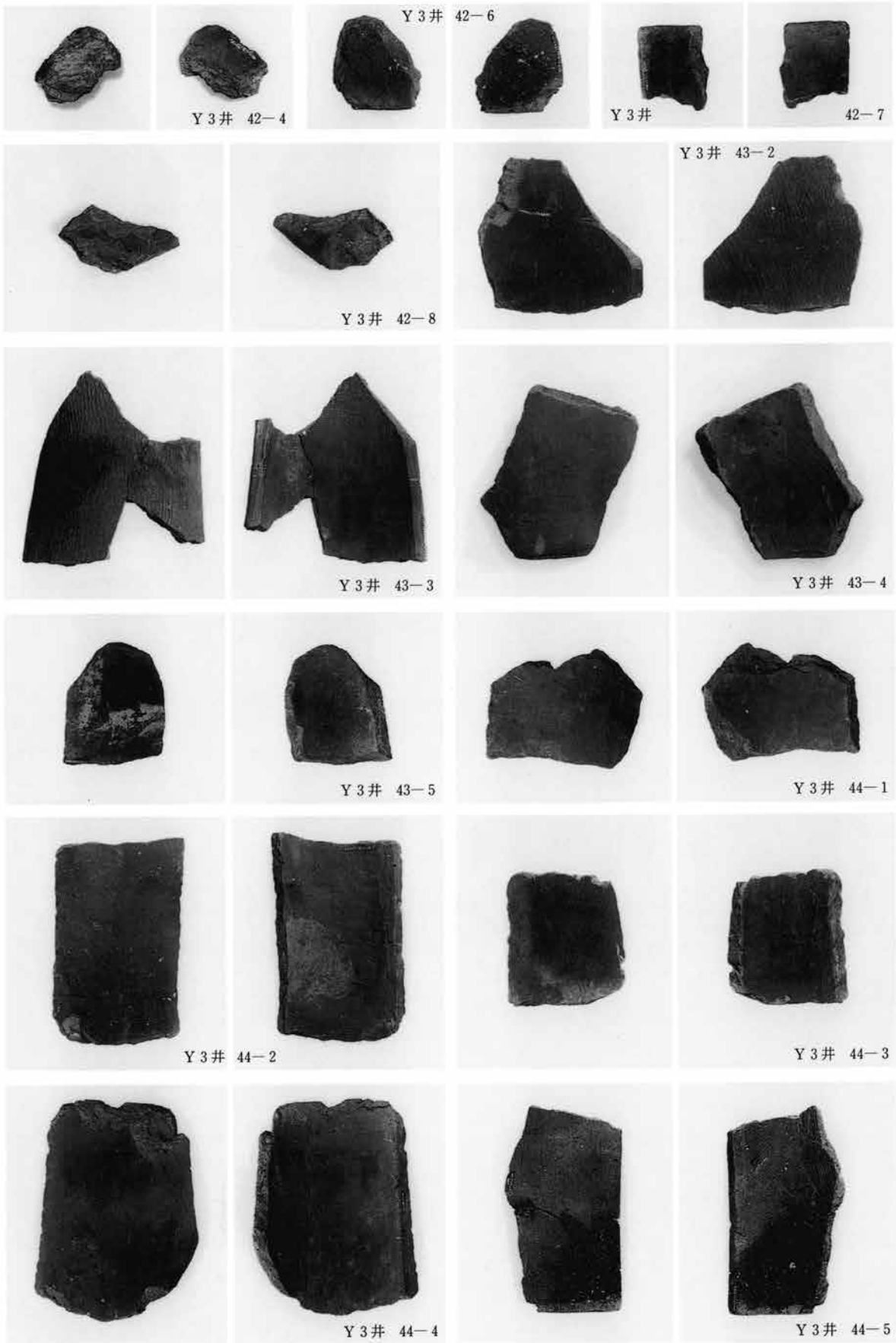


Y 3 井 42-5

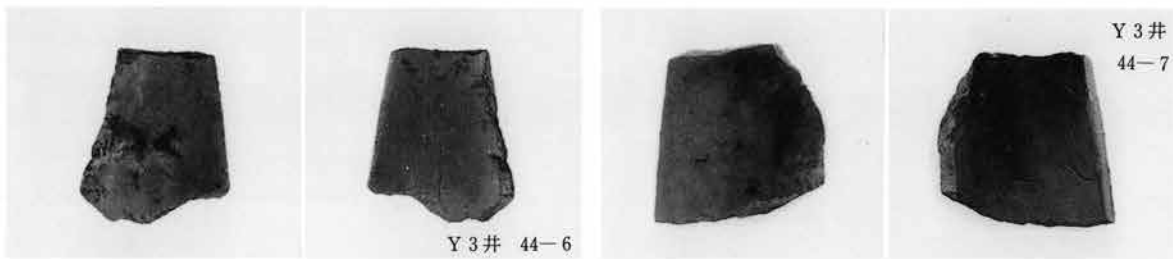


Y 3 井 43-1

第32図版

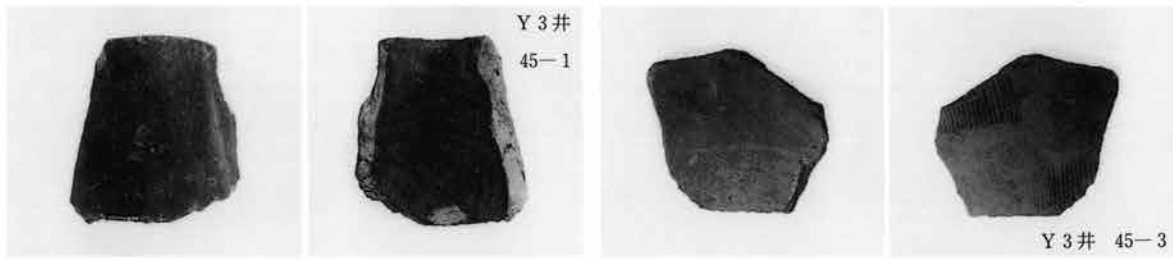


第33图版



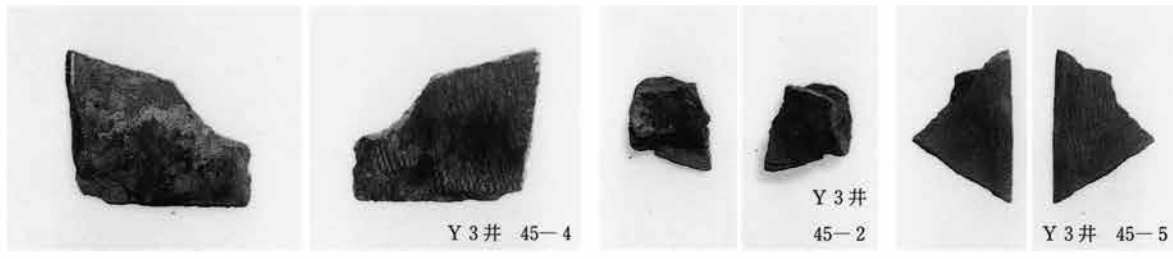
Y 3井 44-6

Y 3井  
44-7



Y 3井  
45-1

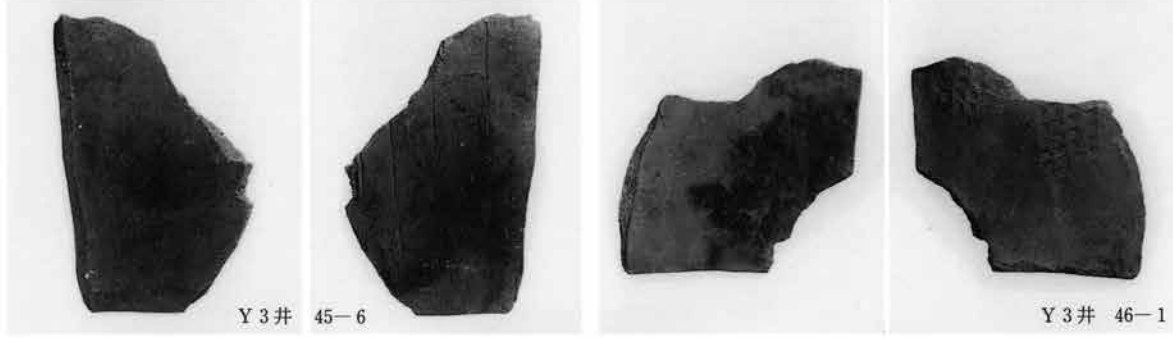
Y 3井 45-3



Y 3井 45-4

Y 3井  
45-2

Y 3井 45-5



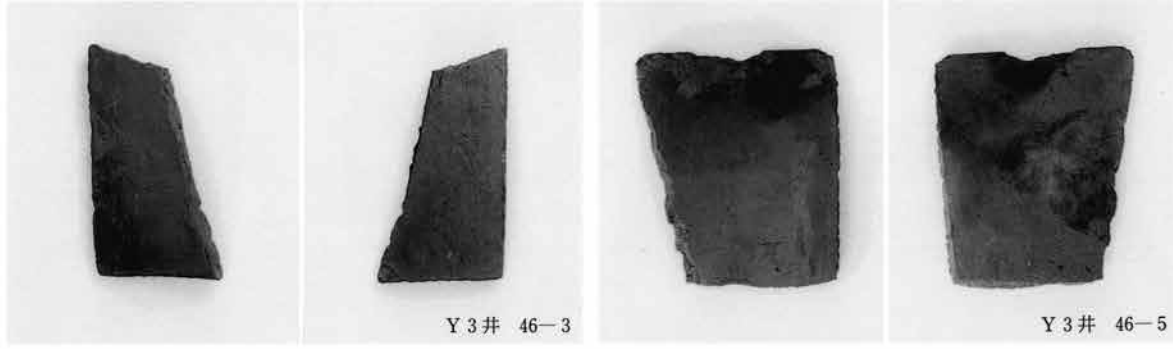
Y 3井 45-6

Y 3井 46-1



Y 3井 45-7

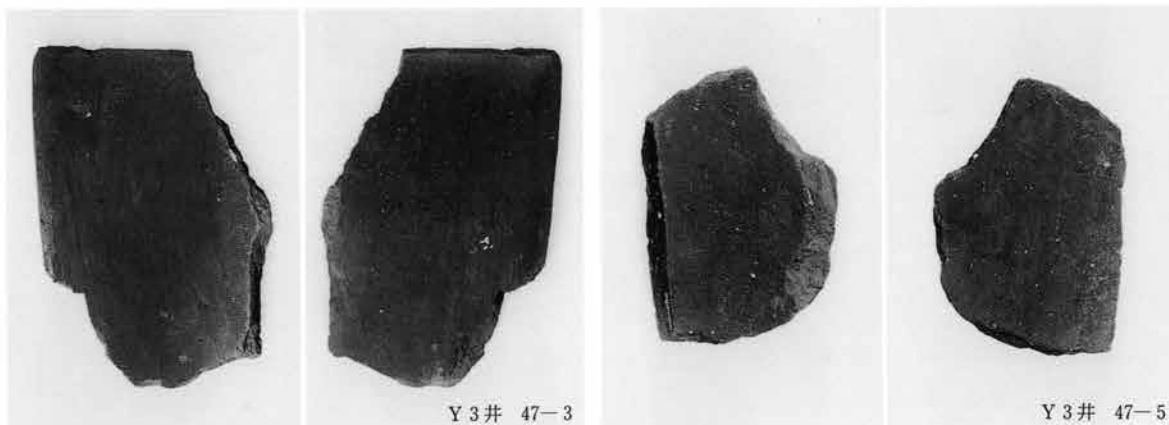
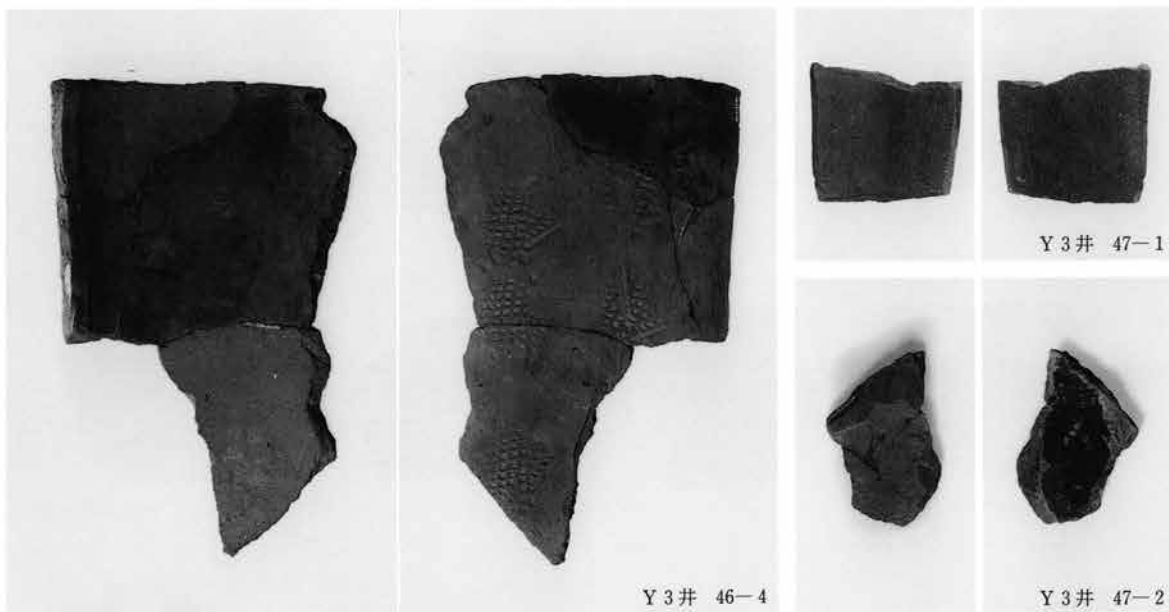
Y 3井 46-2

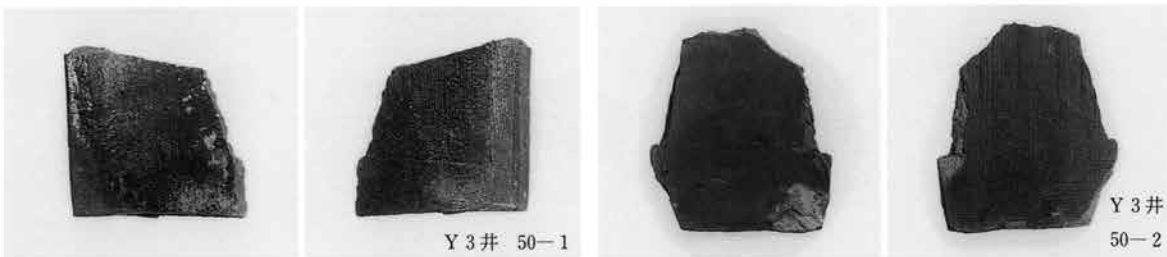
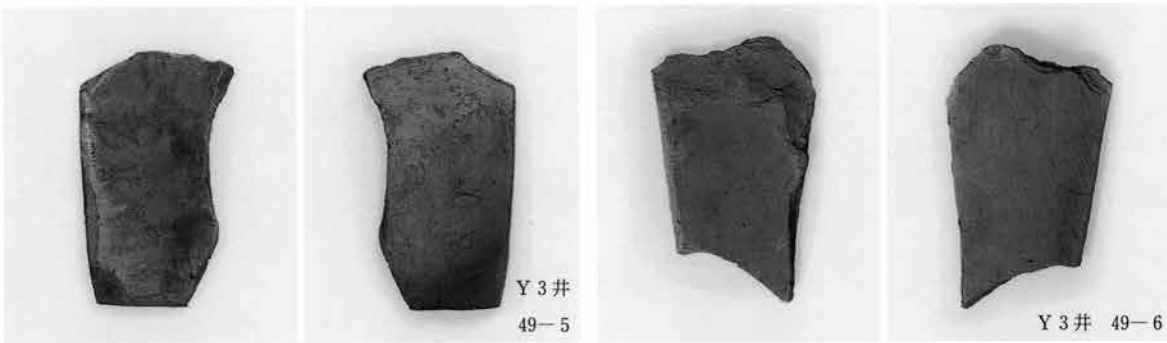
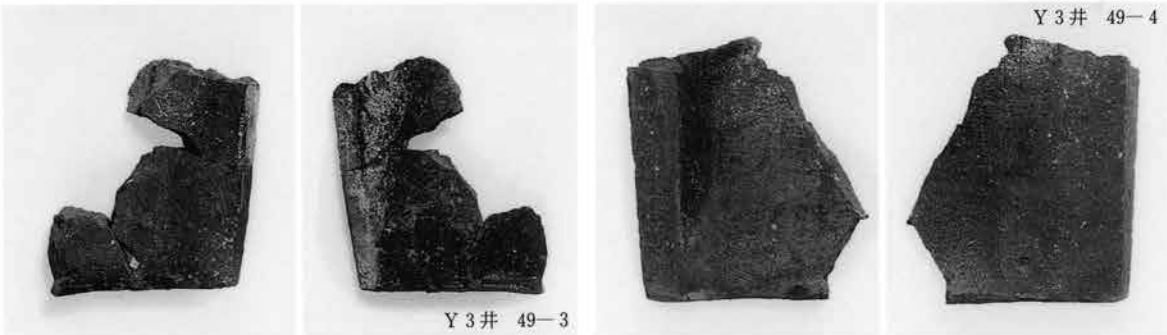
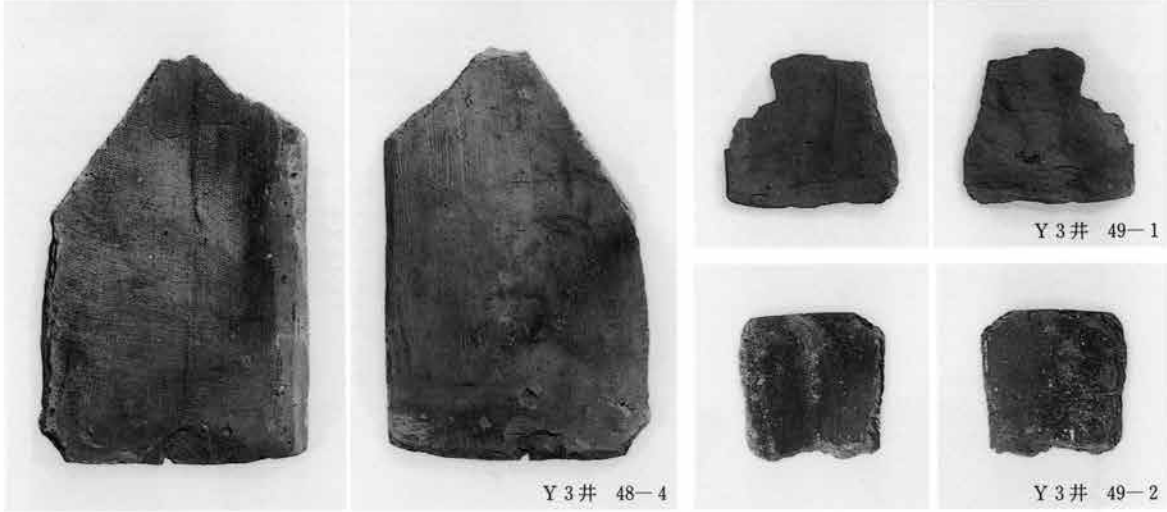


Y 3井 46-3

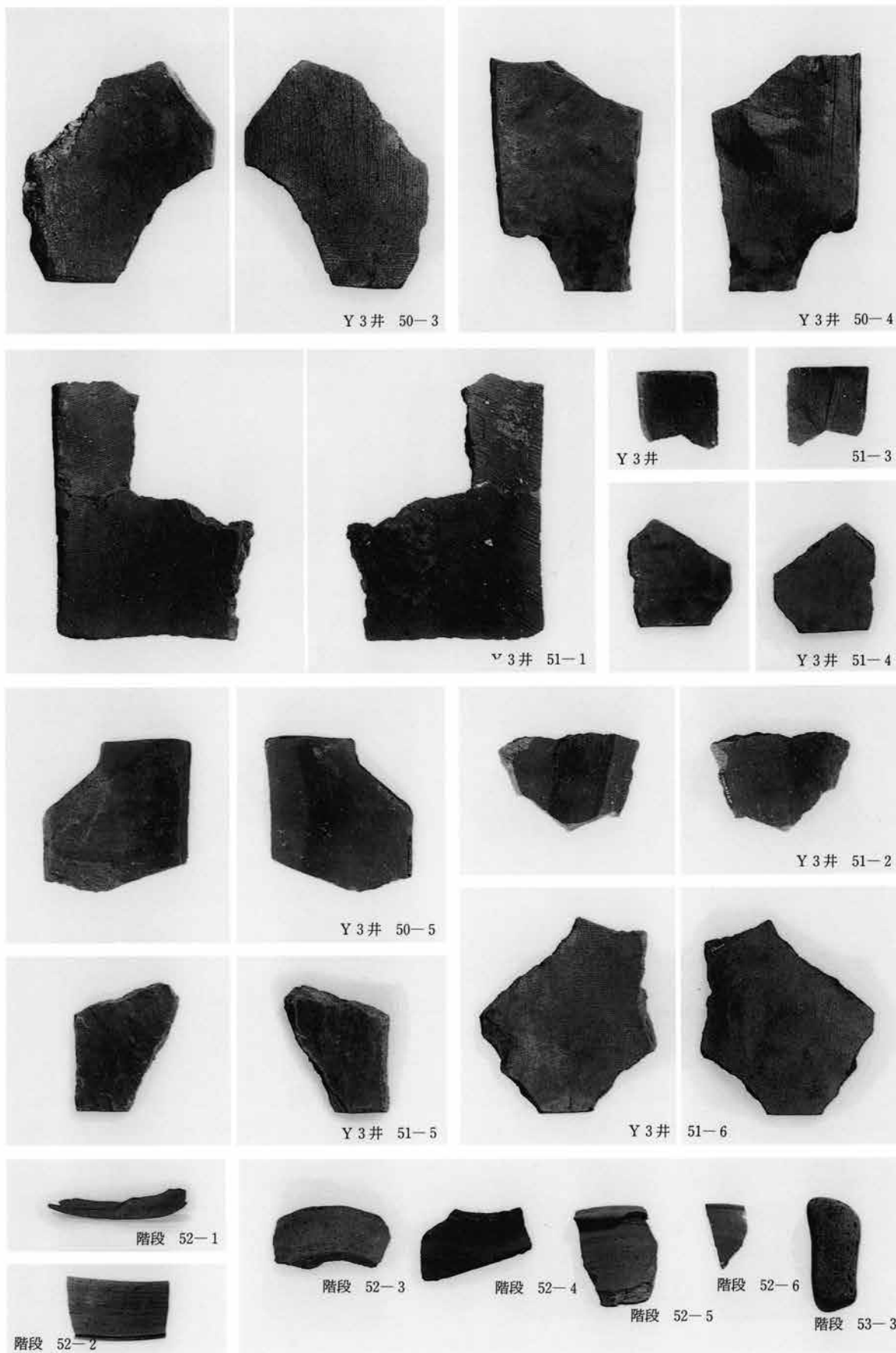
Y 3井 46-5

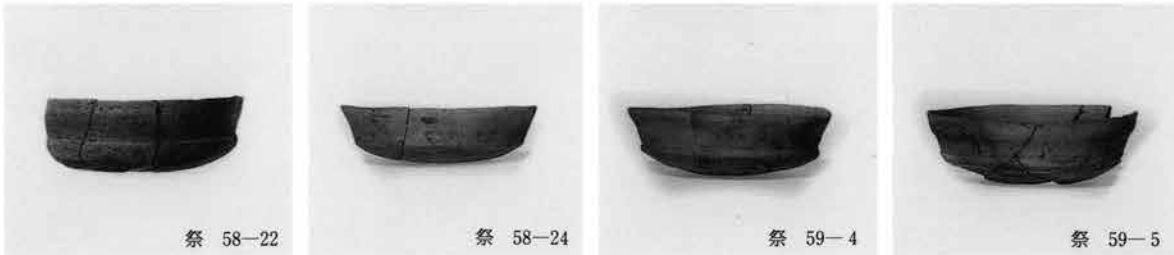
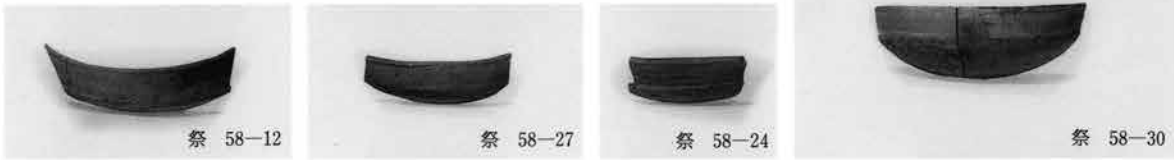
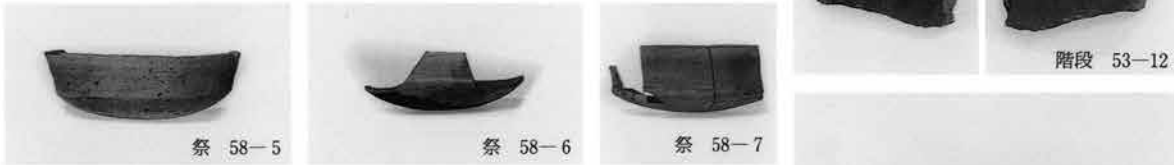
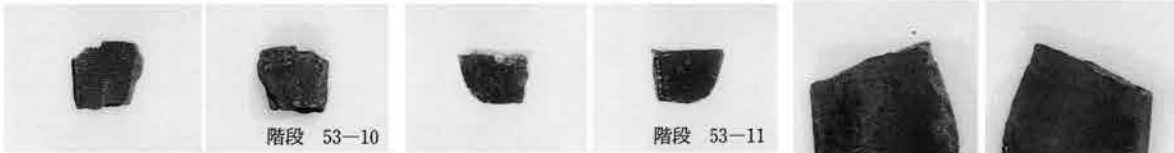
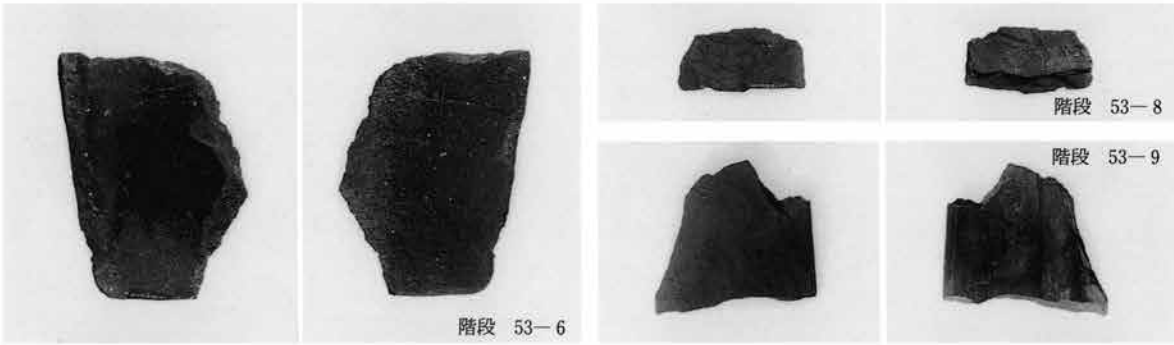
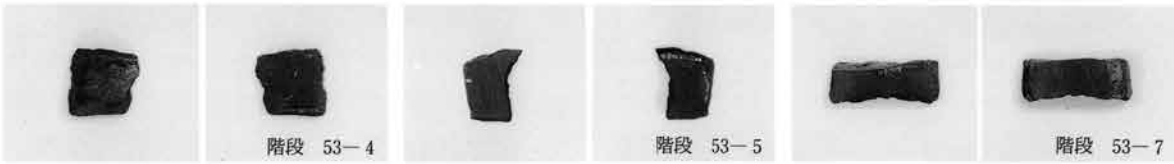
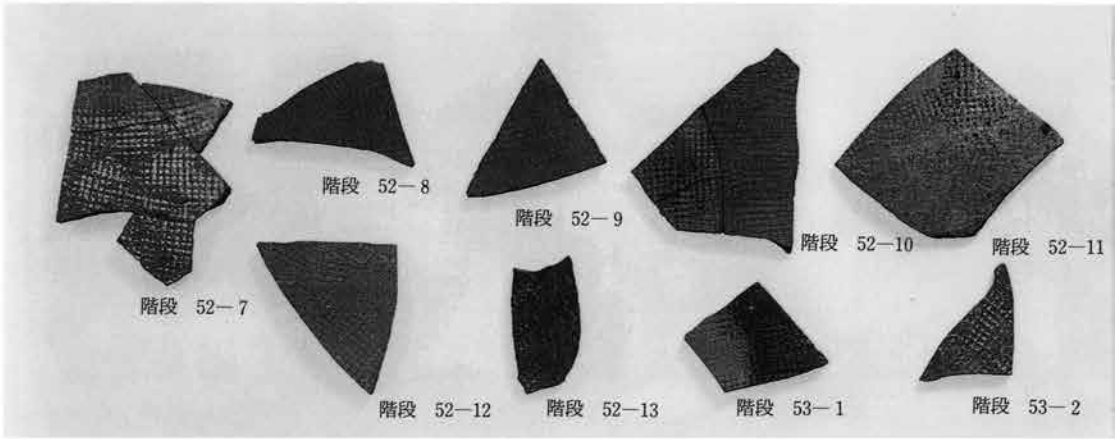
第34図版





第36図版

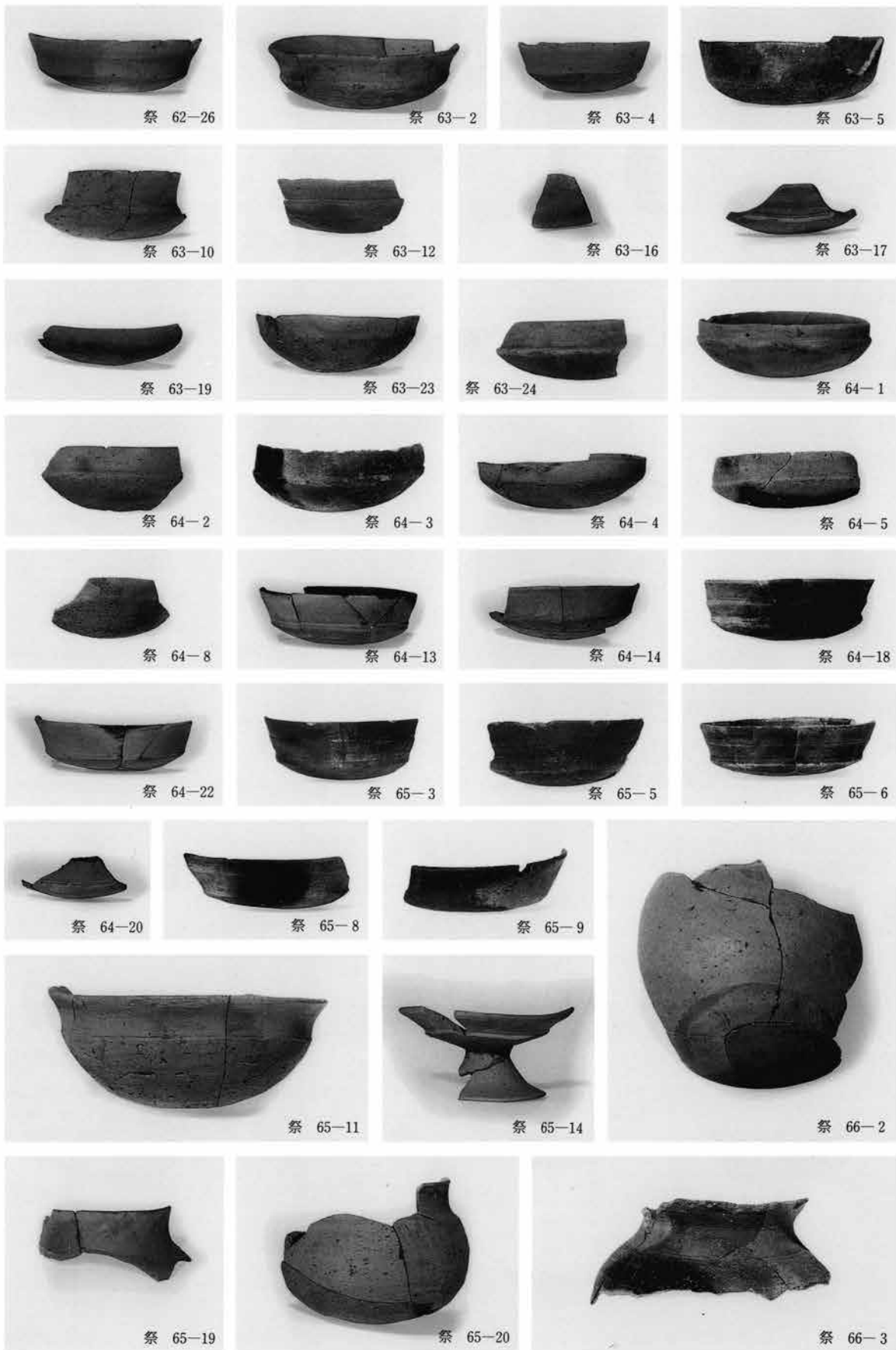




第38図版







第40図版



祭 66-6



祭 66-9



祭 67-13



祭 67-22



祭 66-11



祭 66-12



祭 67-23



祭 66-10



祭 67-24



祭 67-27



祭 67-29



祭 67-30



祭 67-31



祭 67-32



祭 68-1



祭 68-2



祭 68-3



祭 68-6



祭 68-7



祭 68-8



祭 68-9



祭 68-11



祭 68-13



祭 68-14



祭 68-15



祭 68-16



祭 68-20



祭 69-2



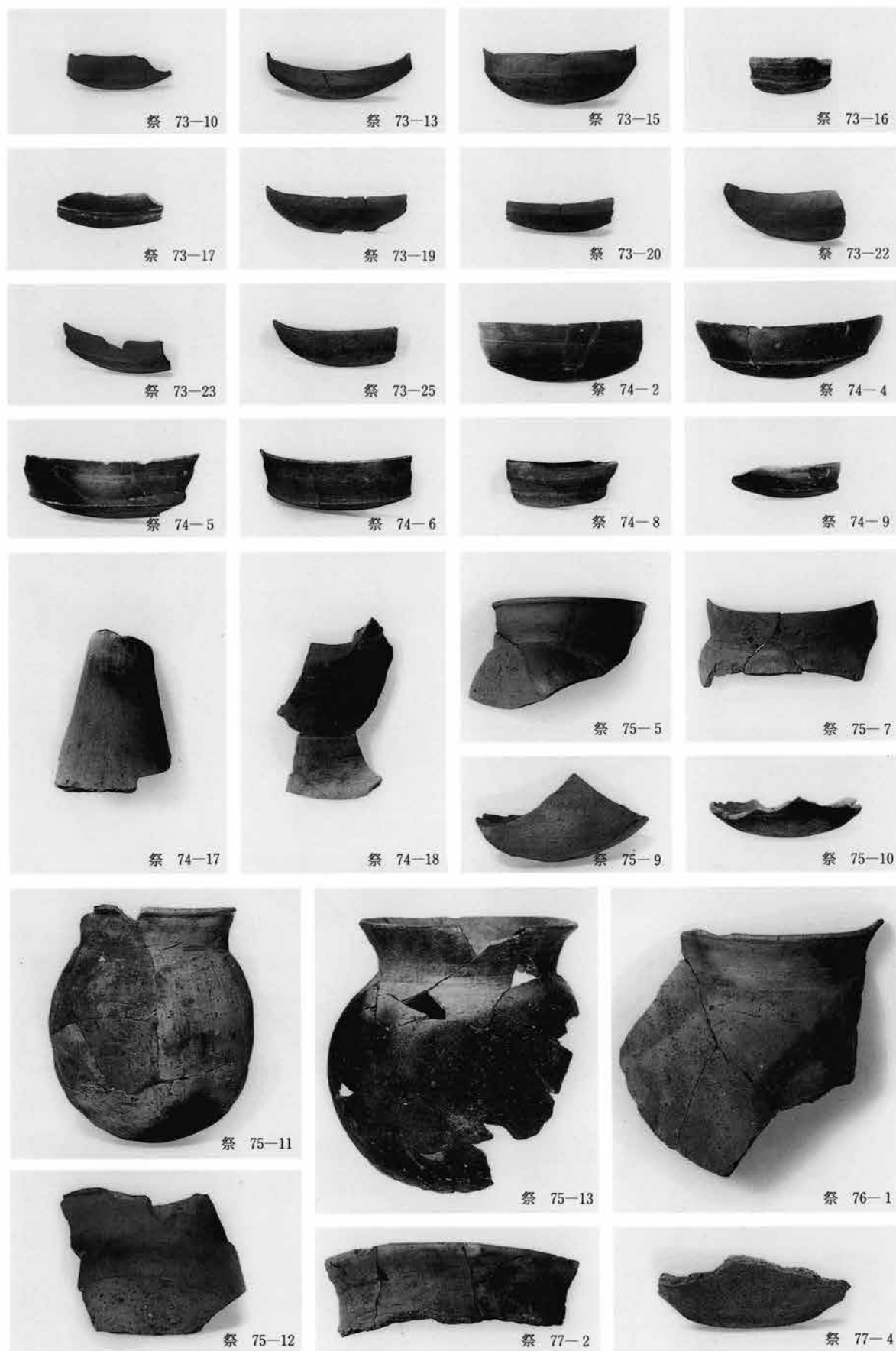
祭 69-4



祭 69-14



第42図版





祭 76-4



祭 76-6



祭 76-5



祭 78-1



祭 78-2



祭 77-1



祭 77-3



祭 79-8



祭 79-15



祭 77-6



祭 79-1



祭 79-4



祭 79-16



祭 79-17

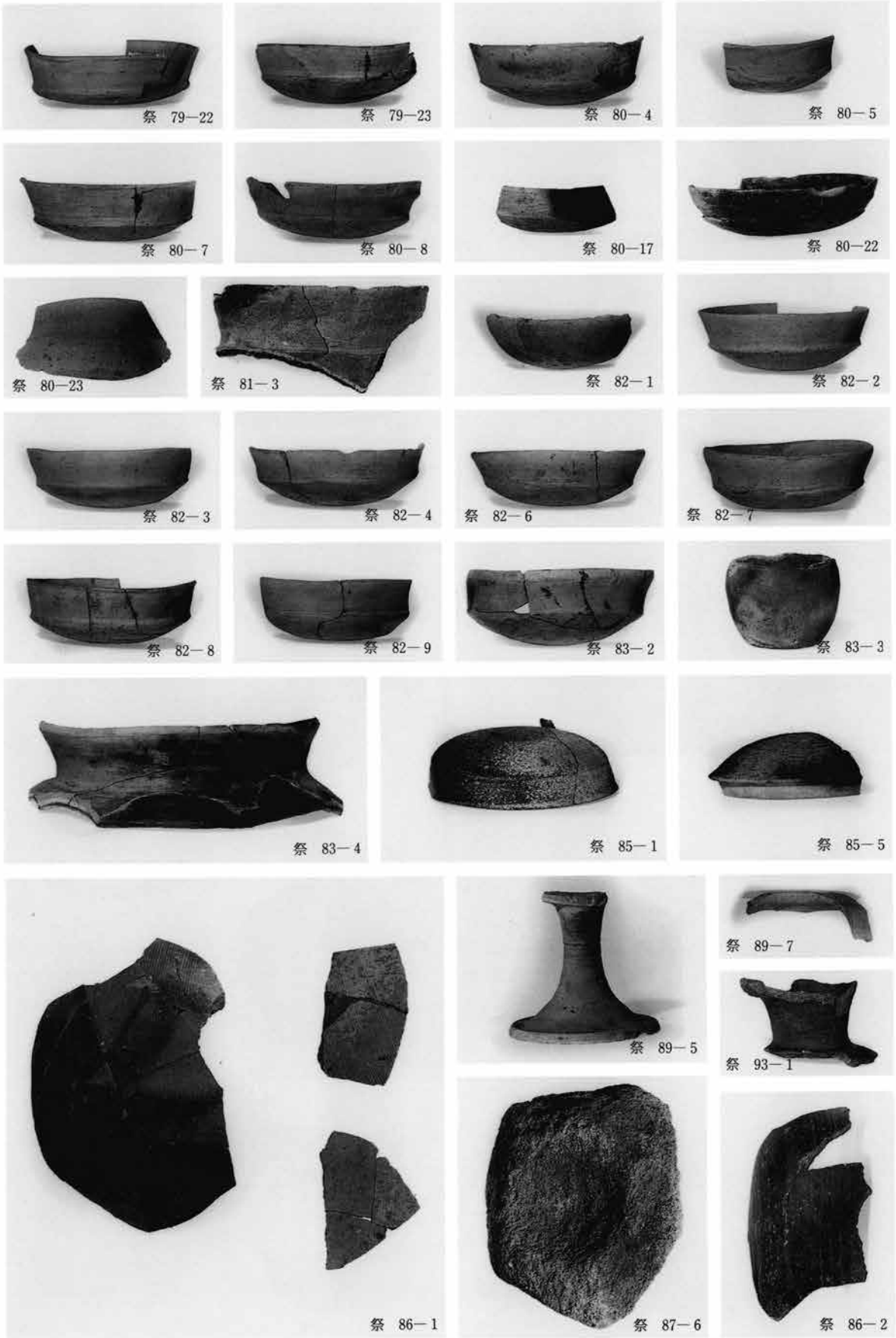


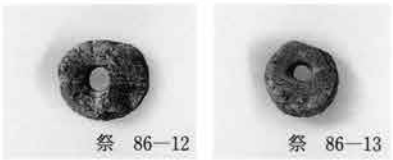
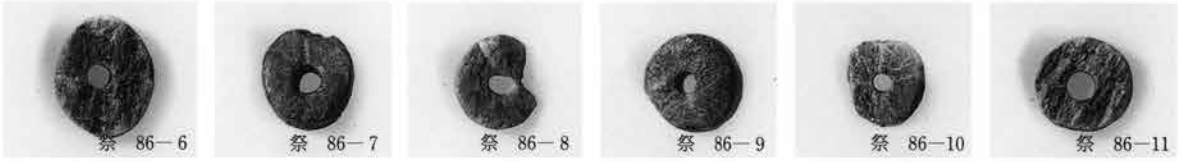
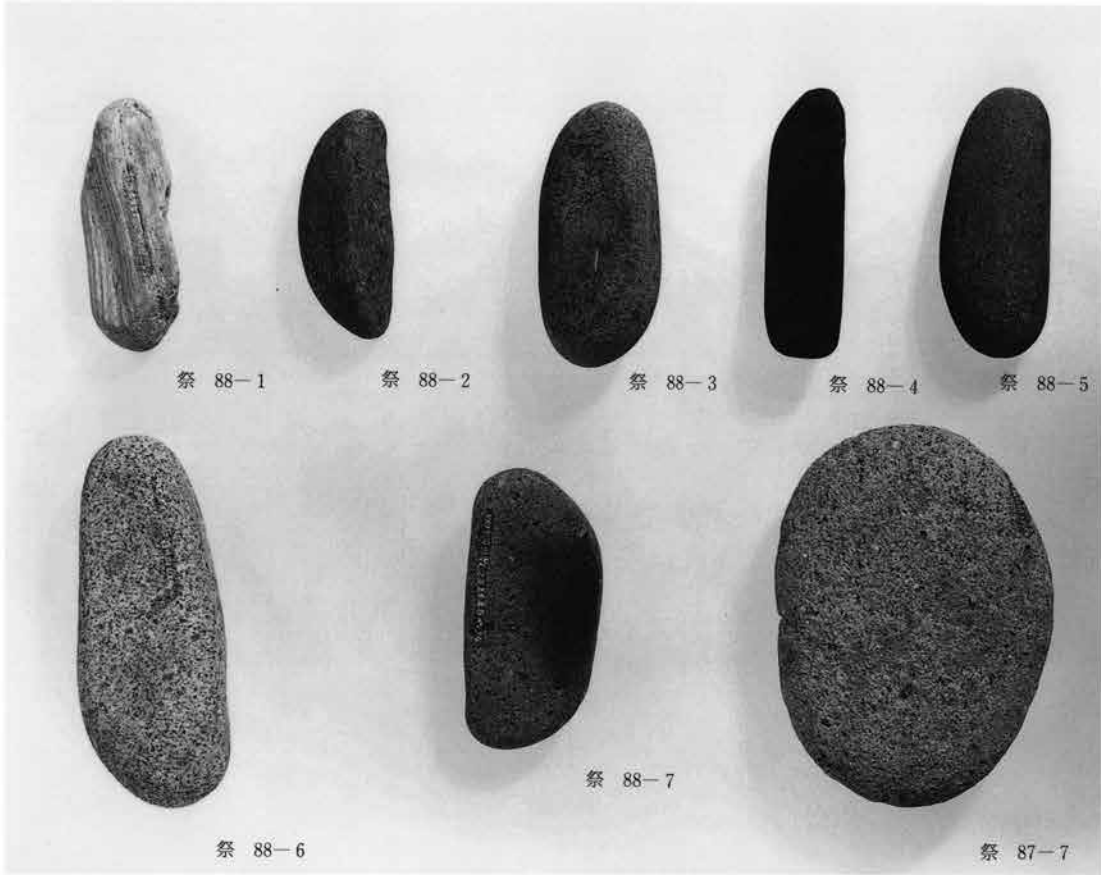
祭 79-18



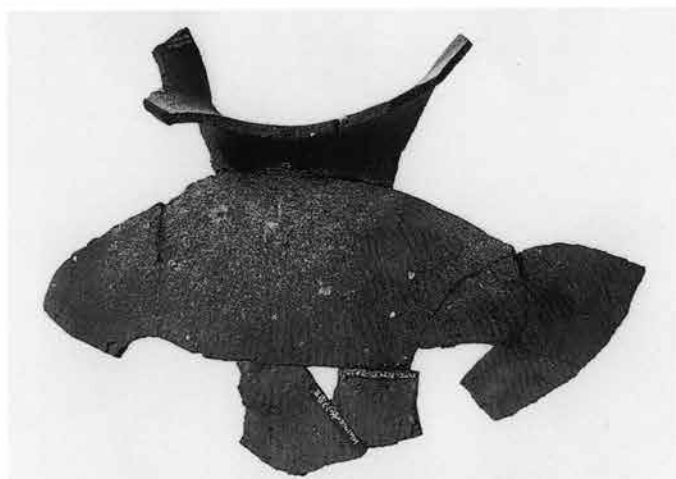
祭 79-21

第44図版

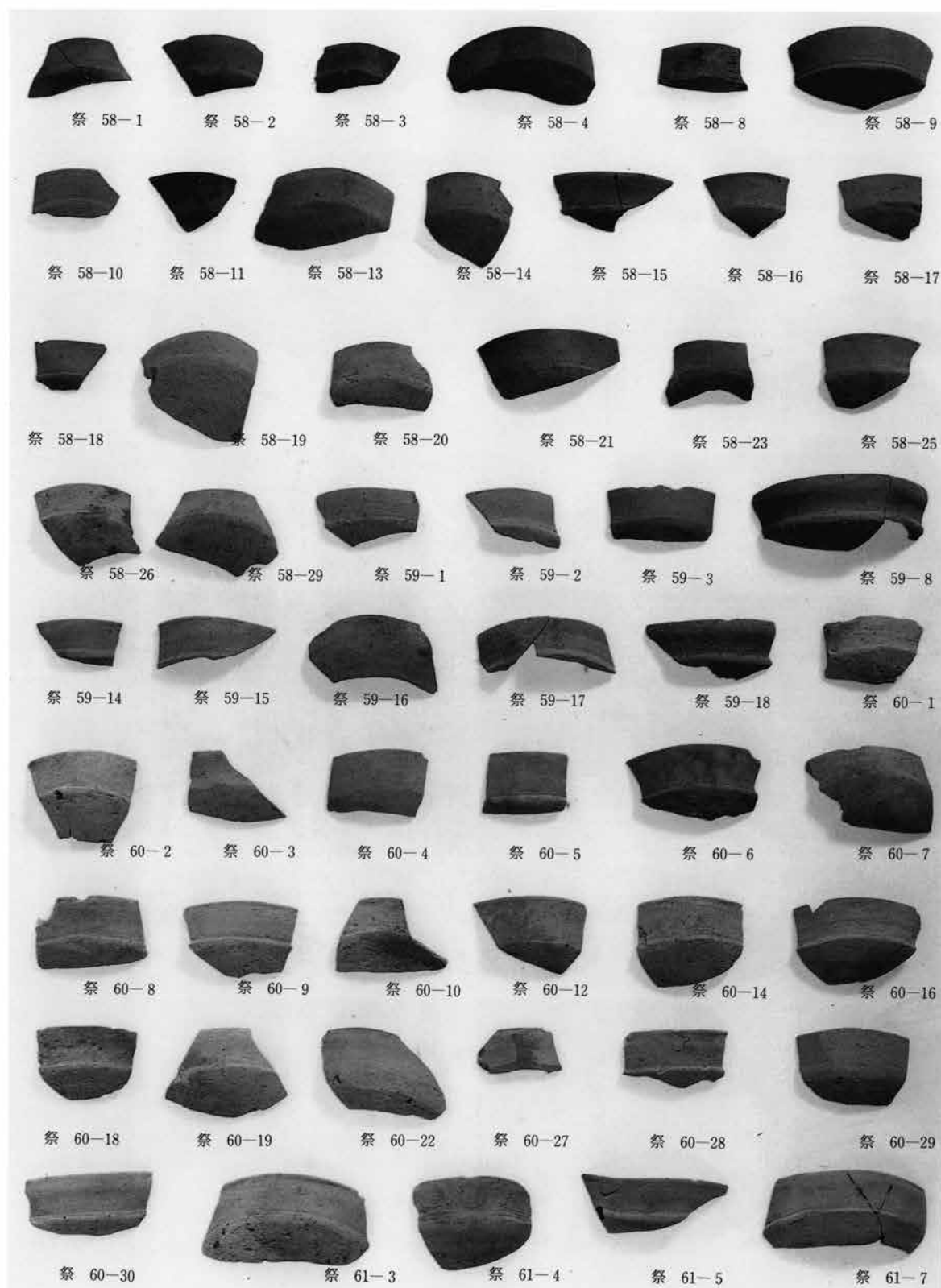




第46図版

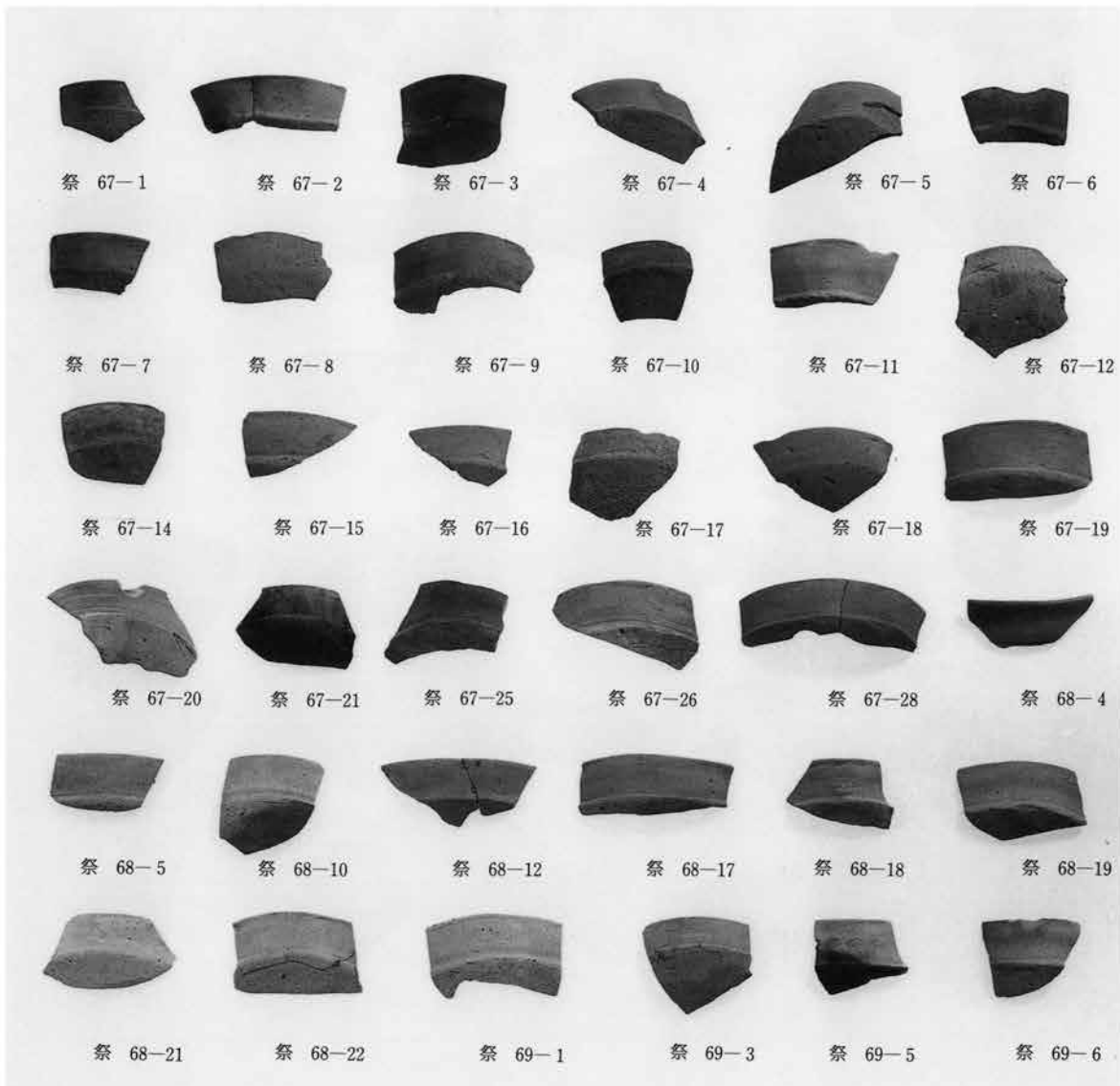
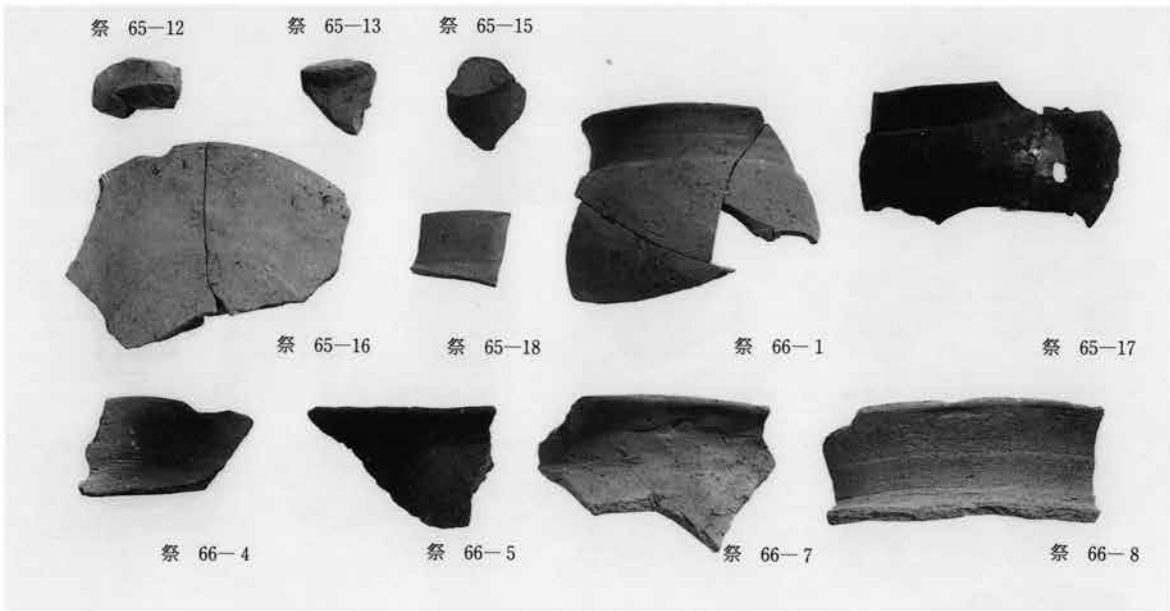




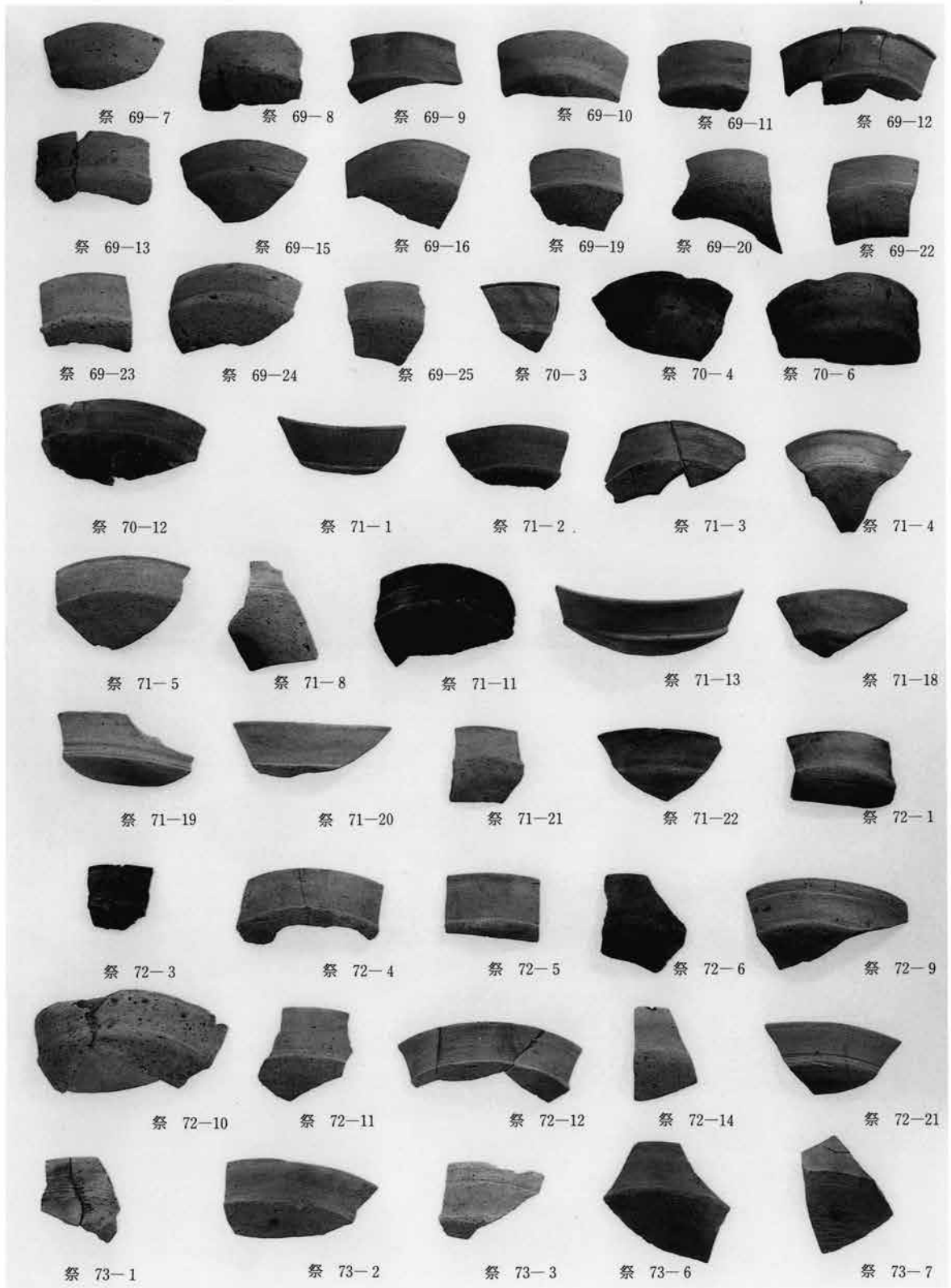


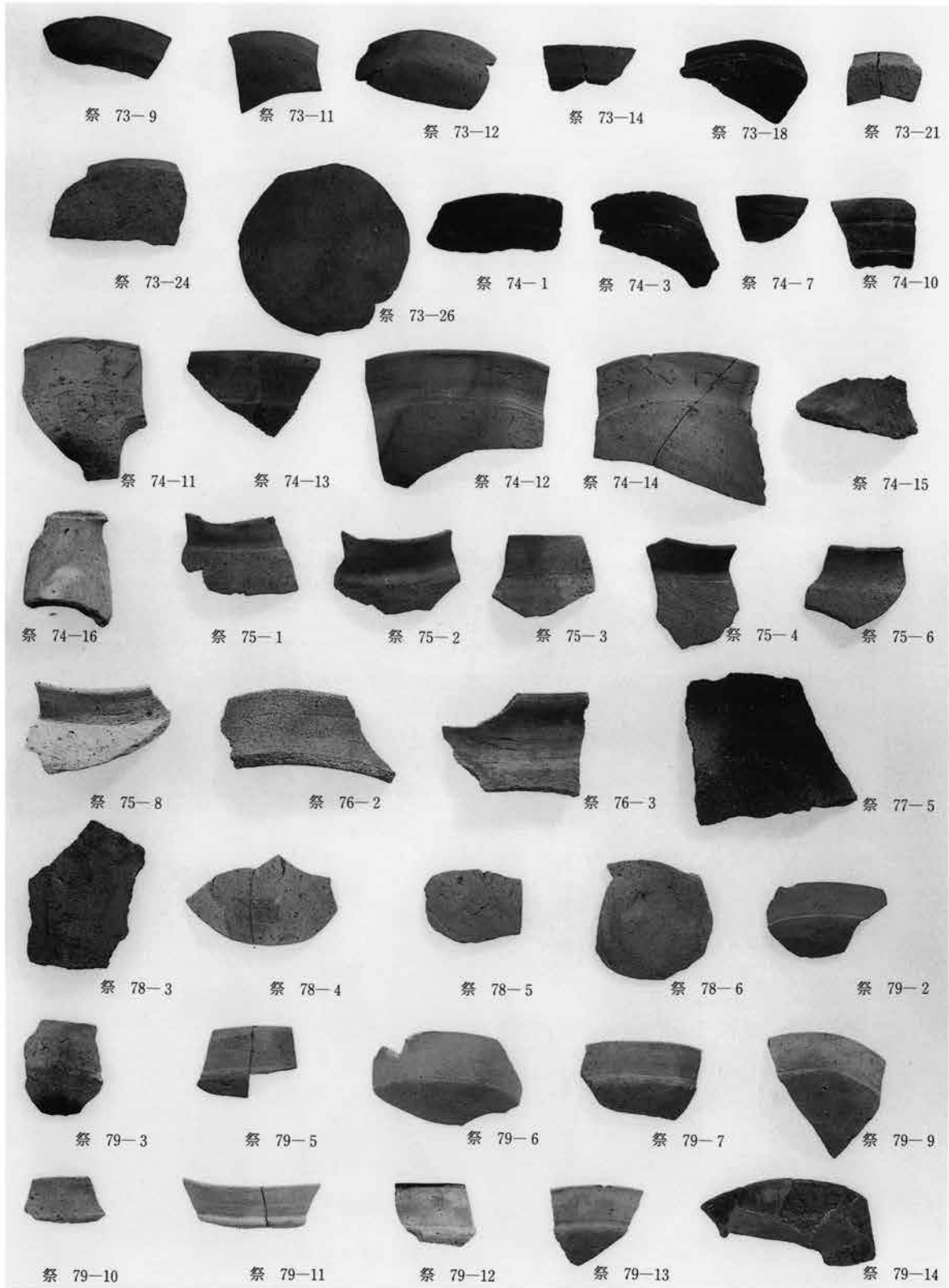
第48図版





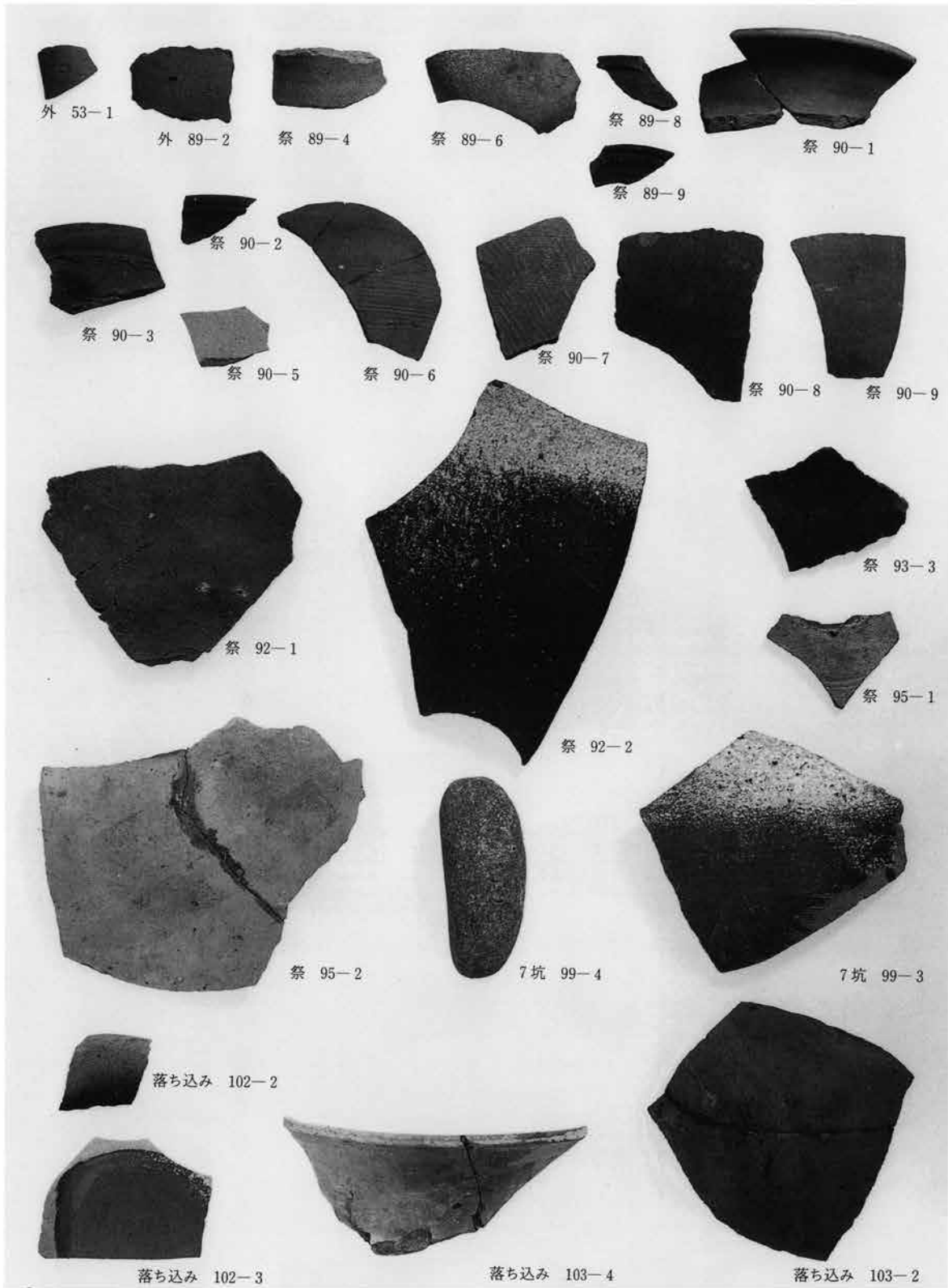
第50図版



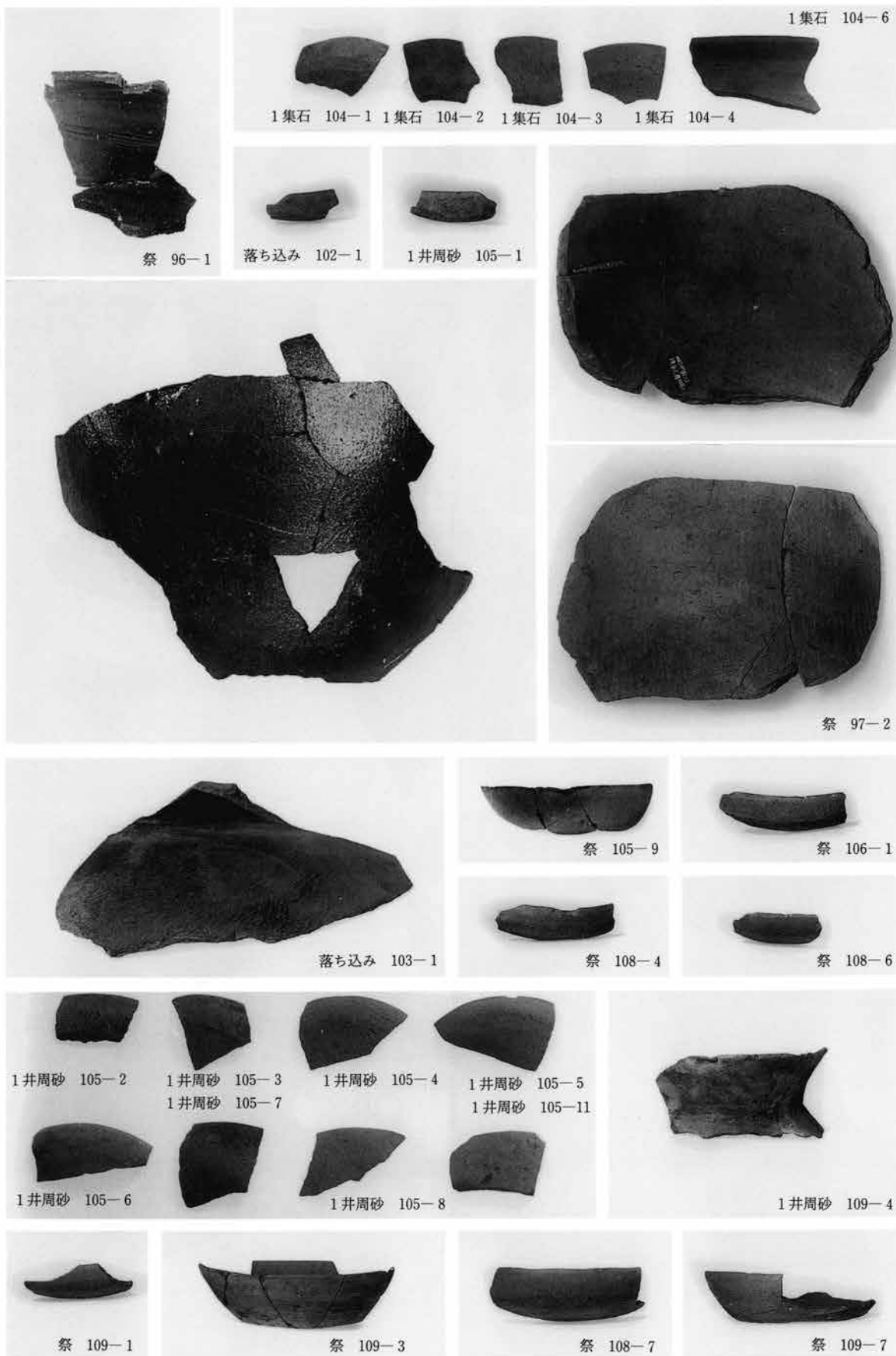


第52図版

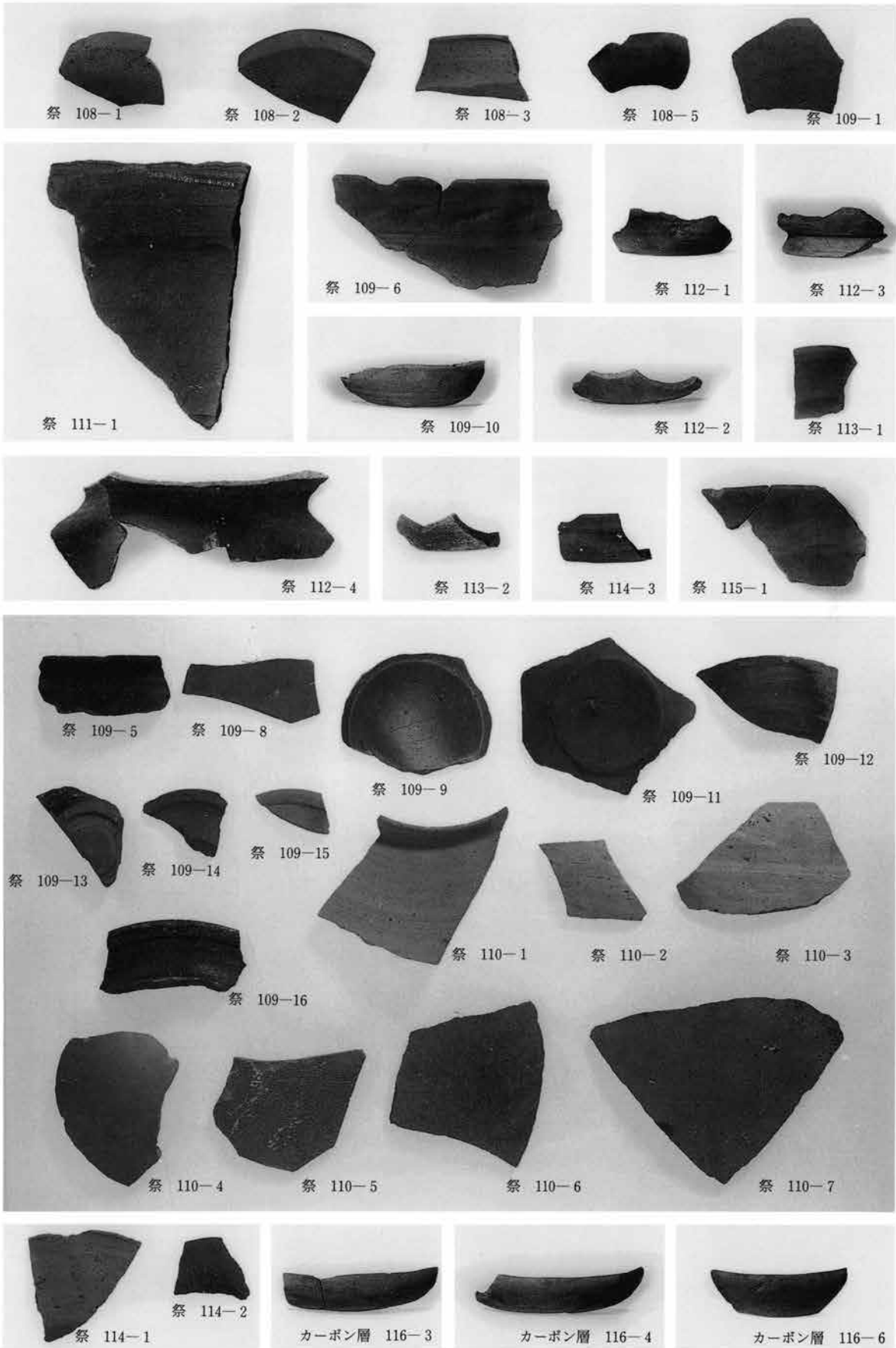




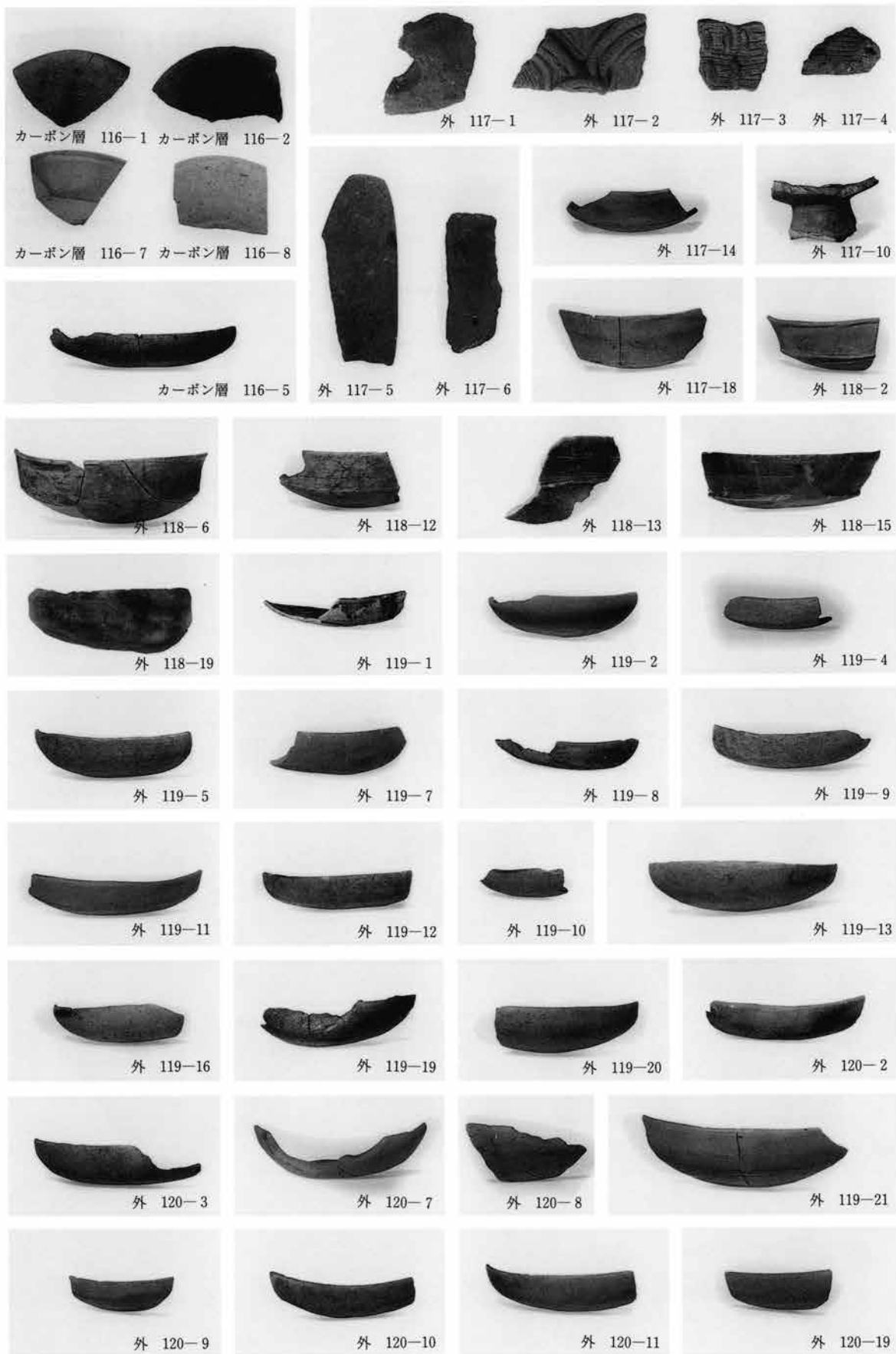
第54図版







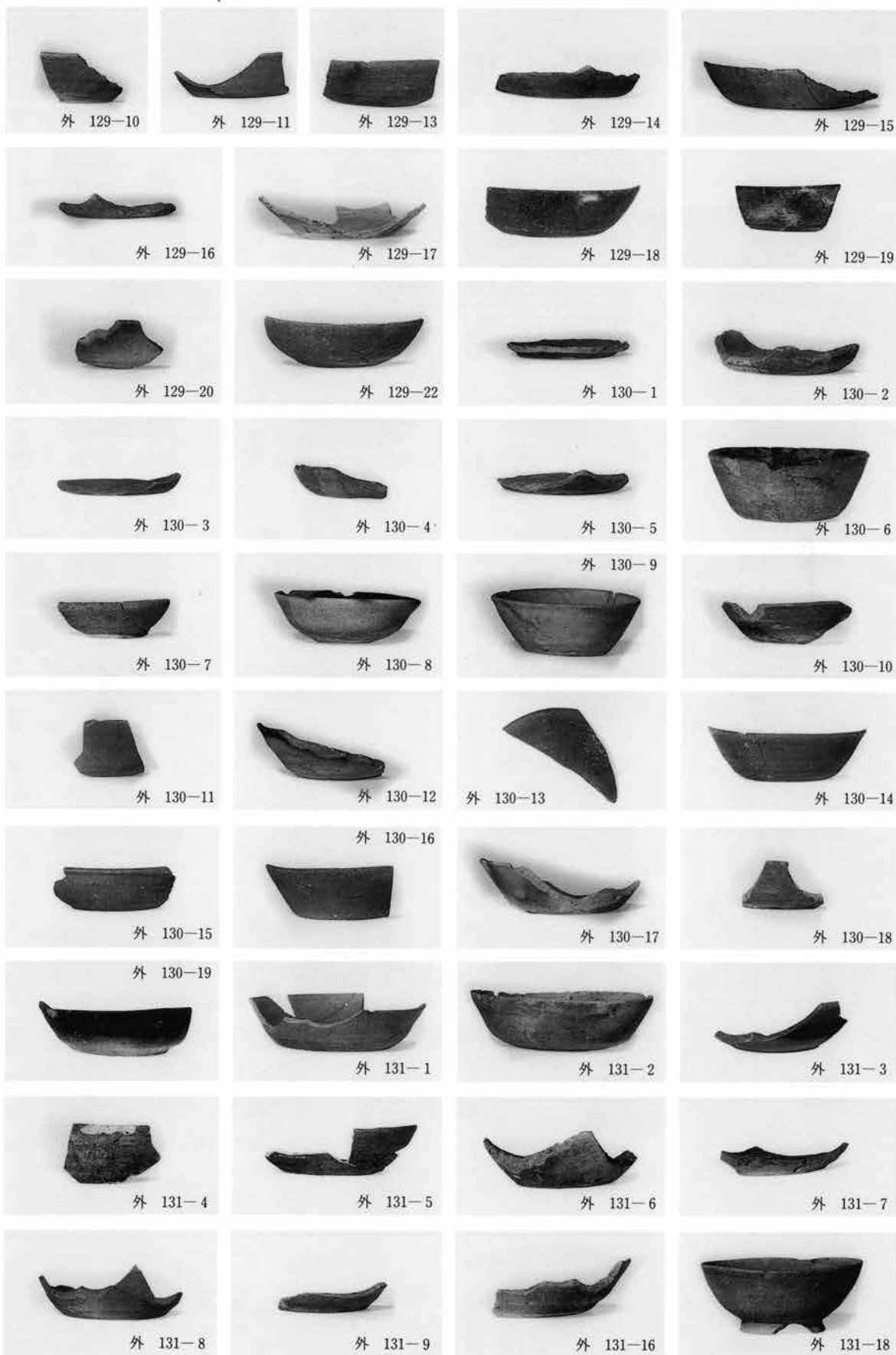
第56図版



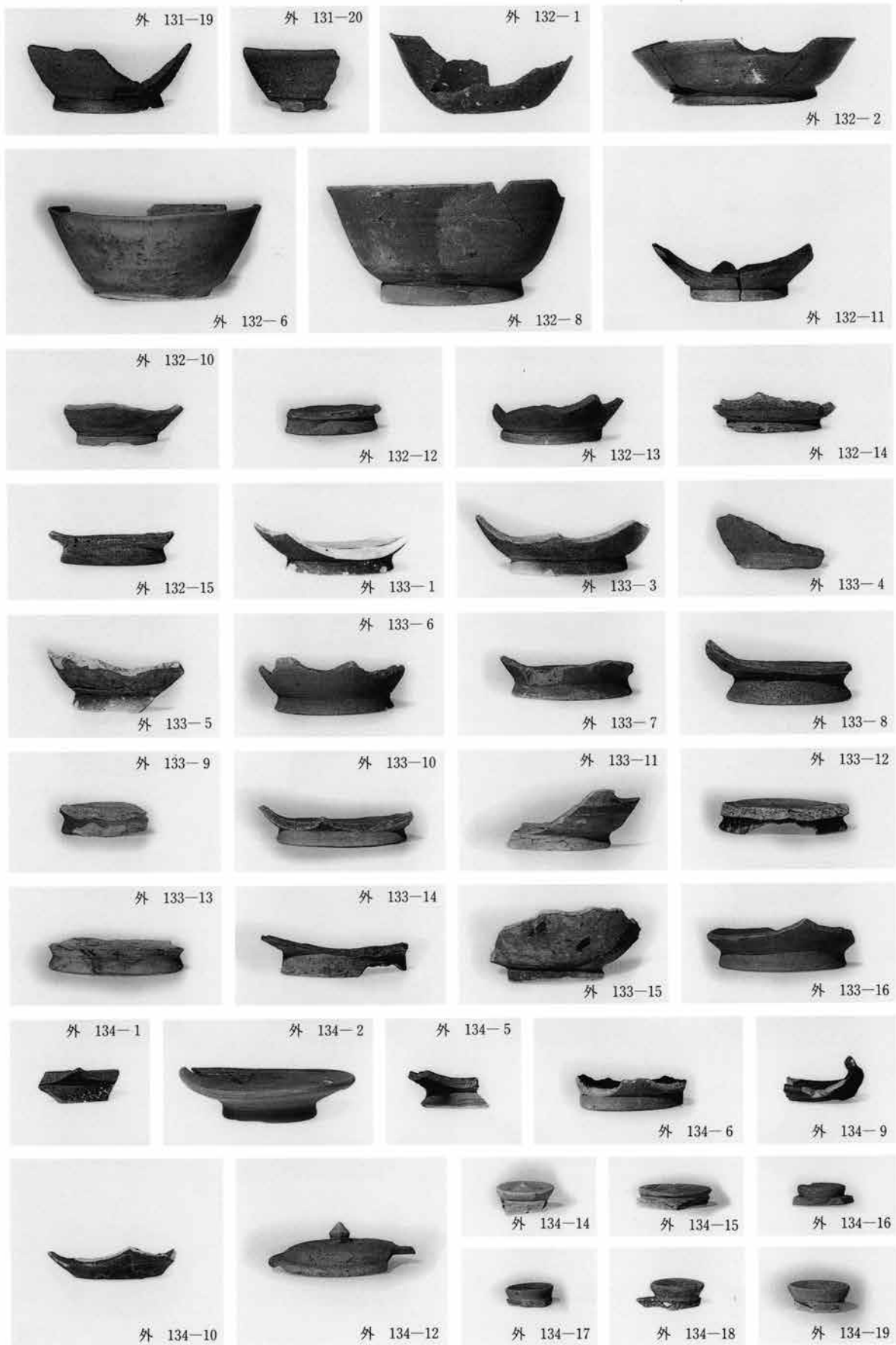


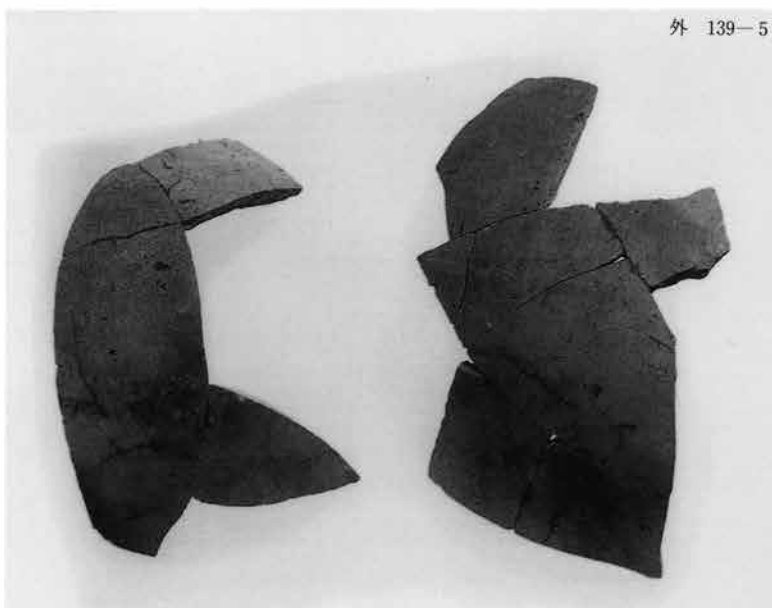
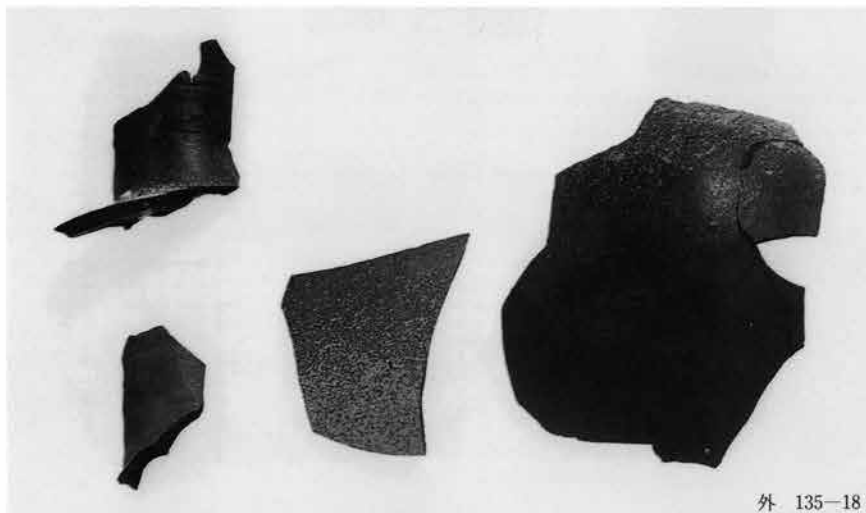
第58图版



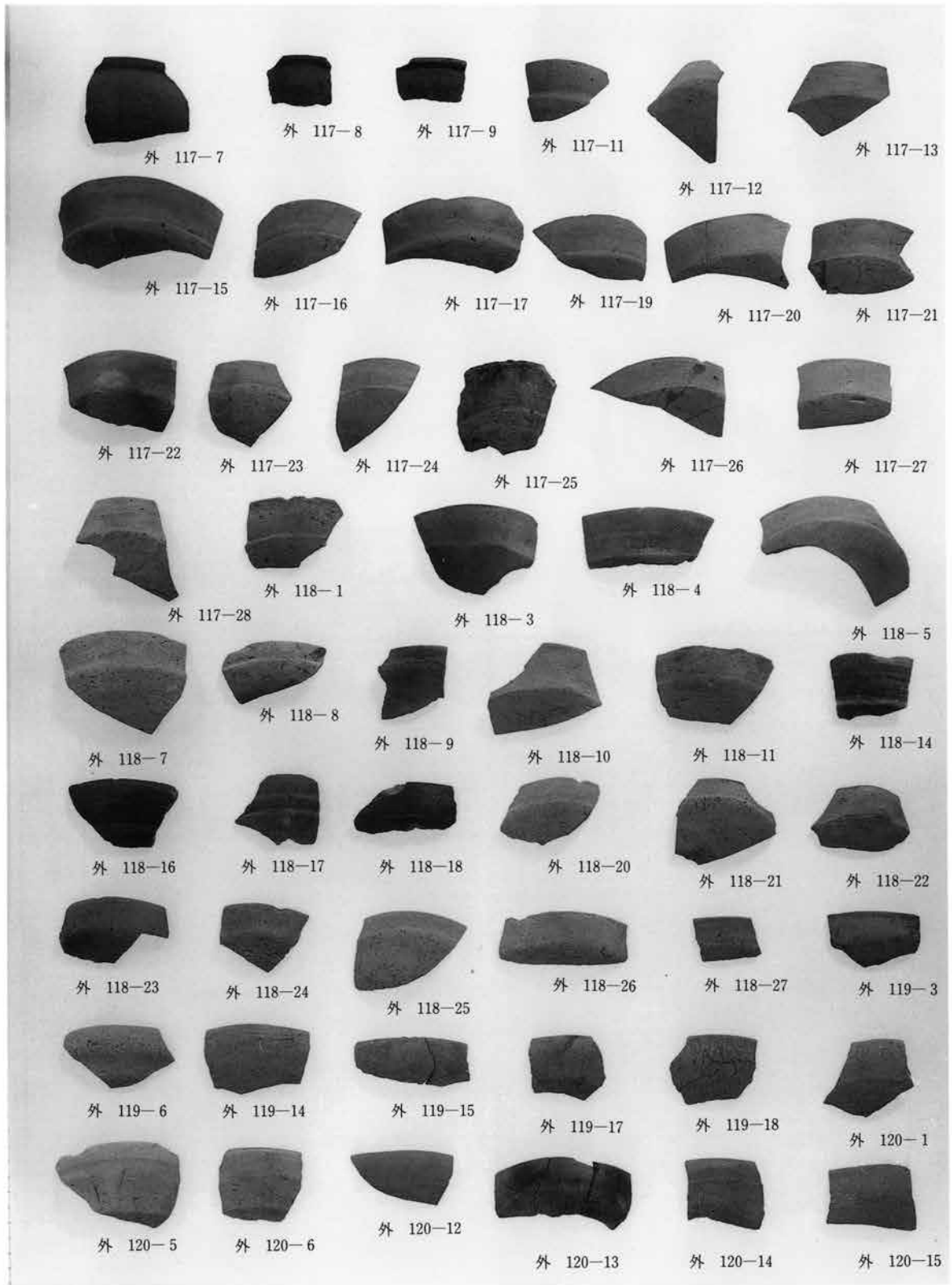


第60図版

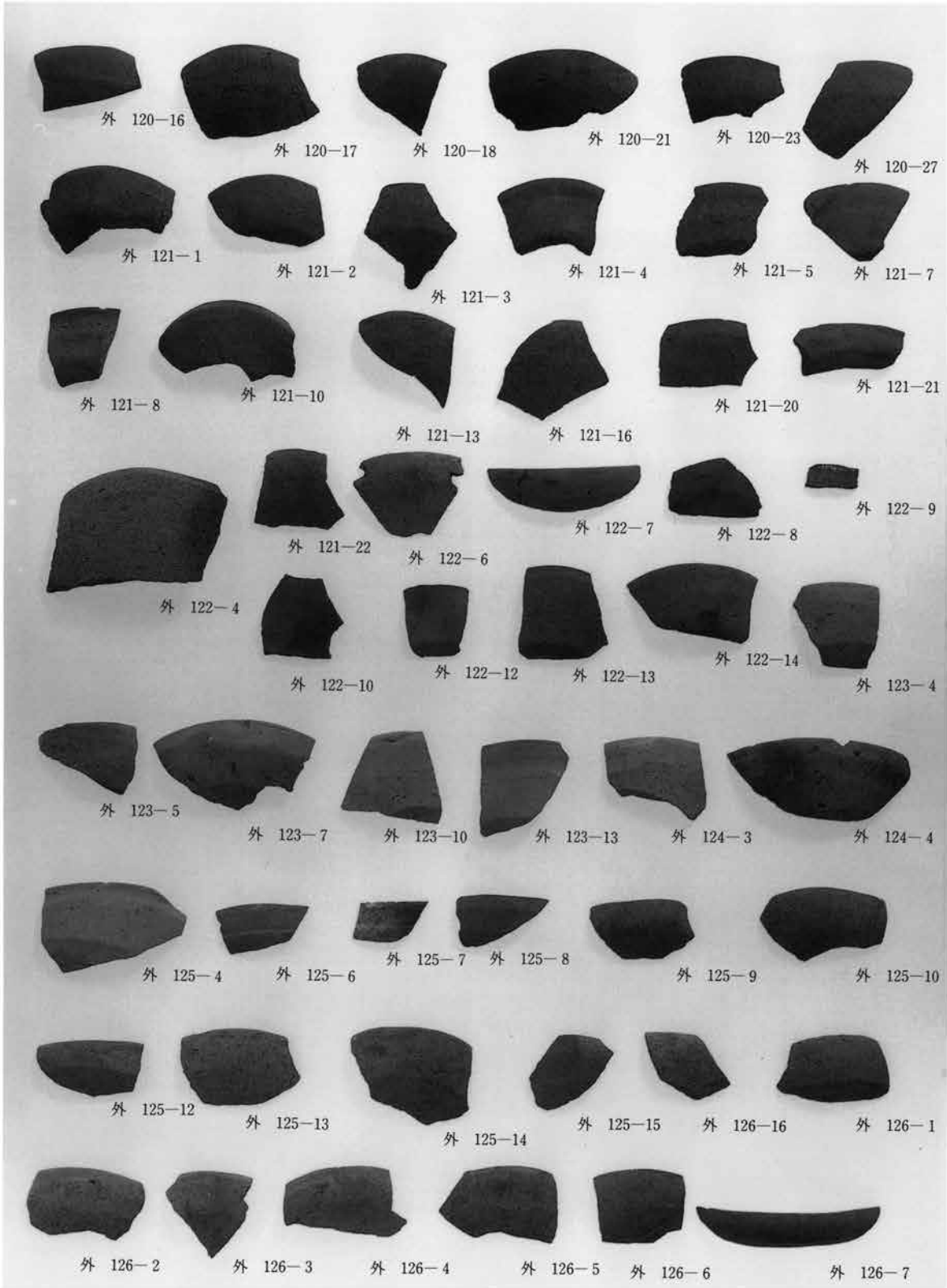




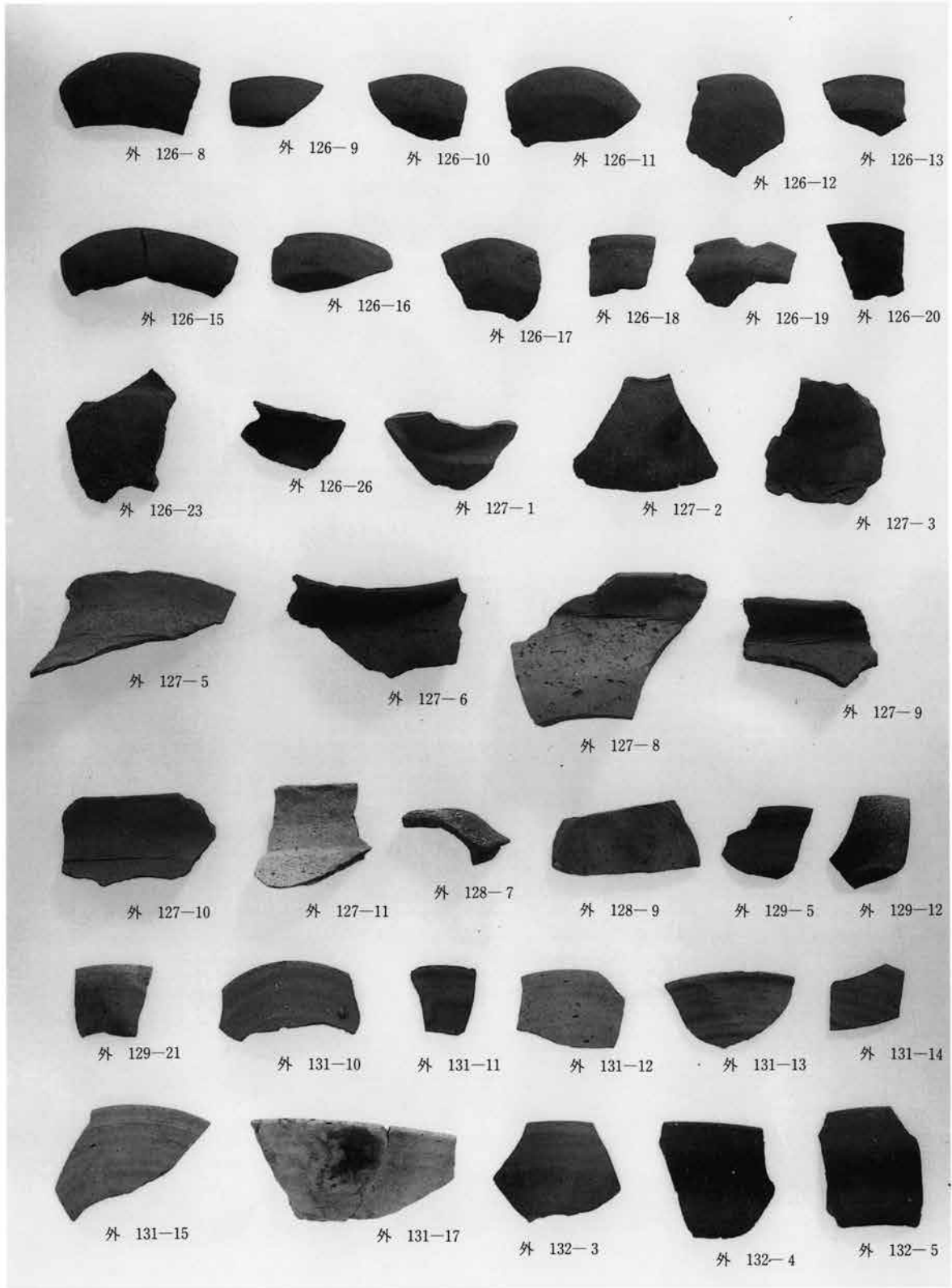
第62图版

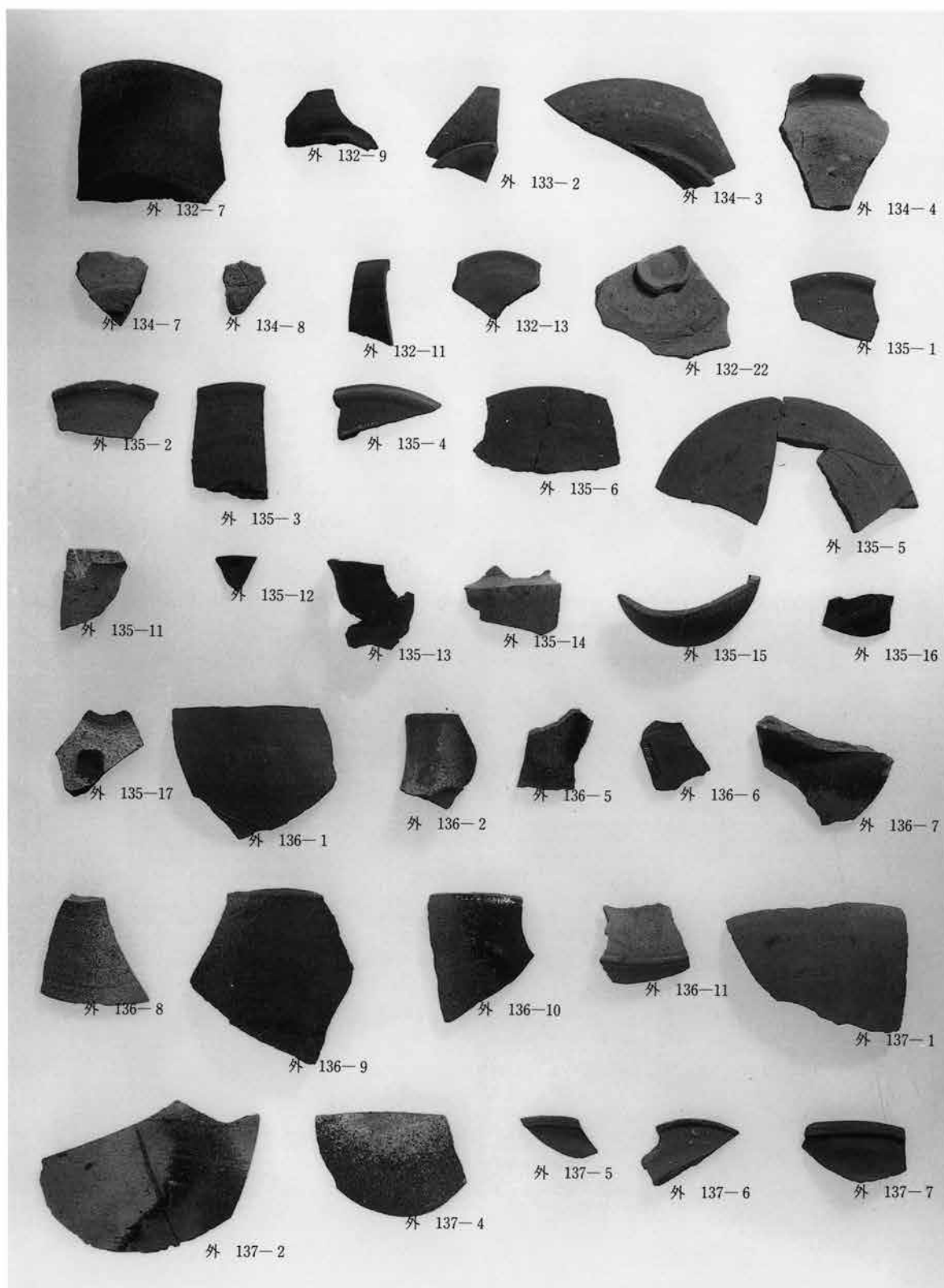




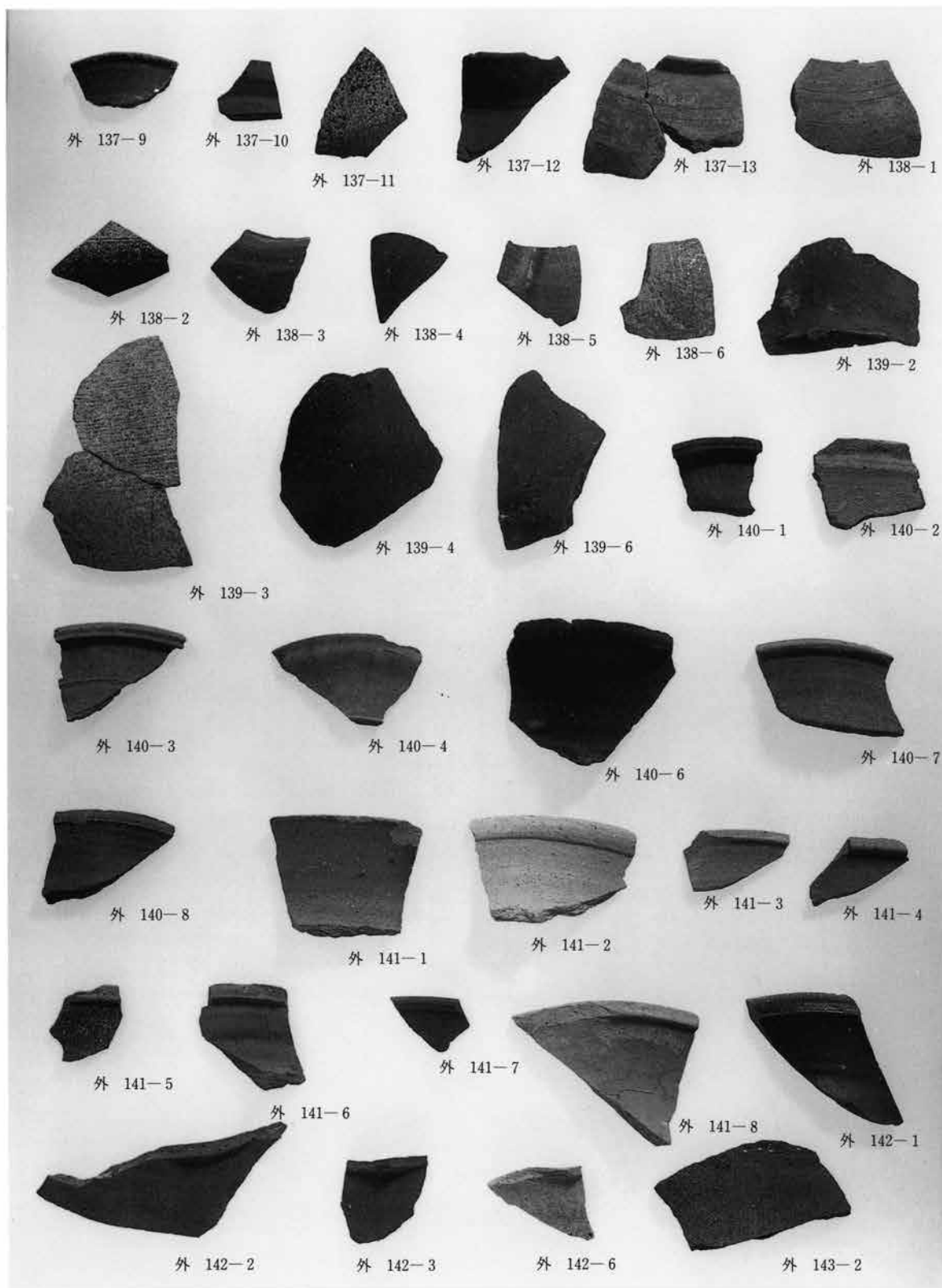


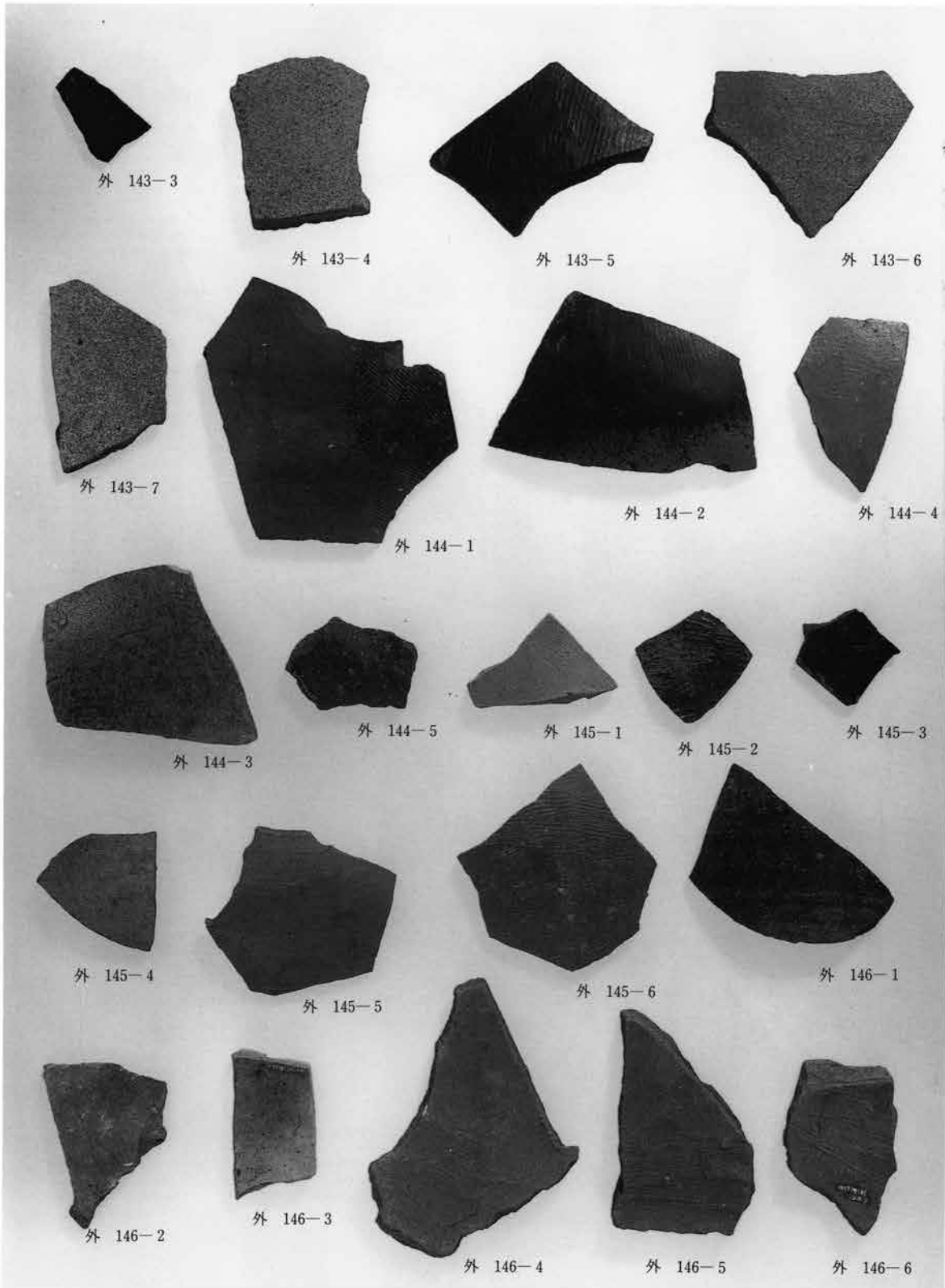
第64图版



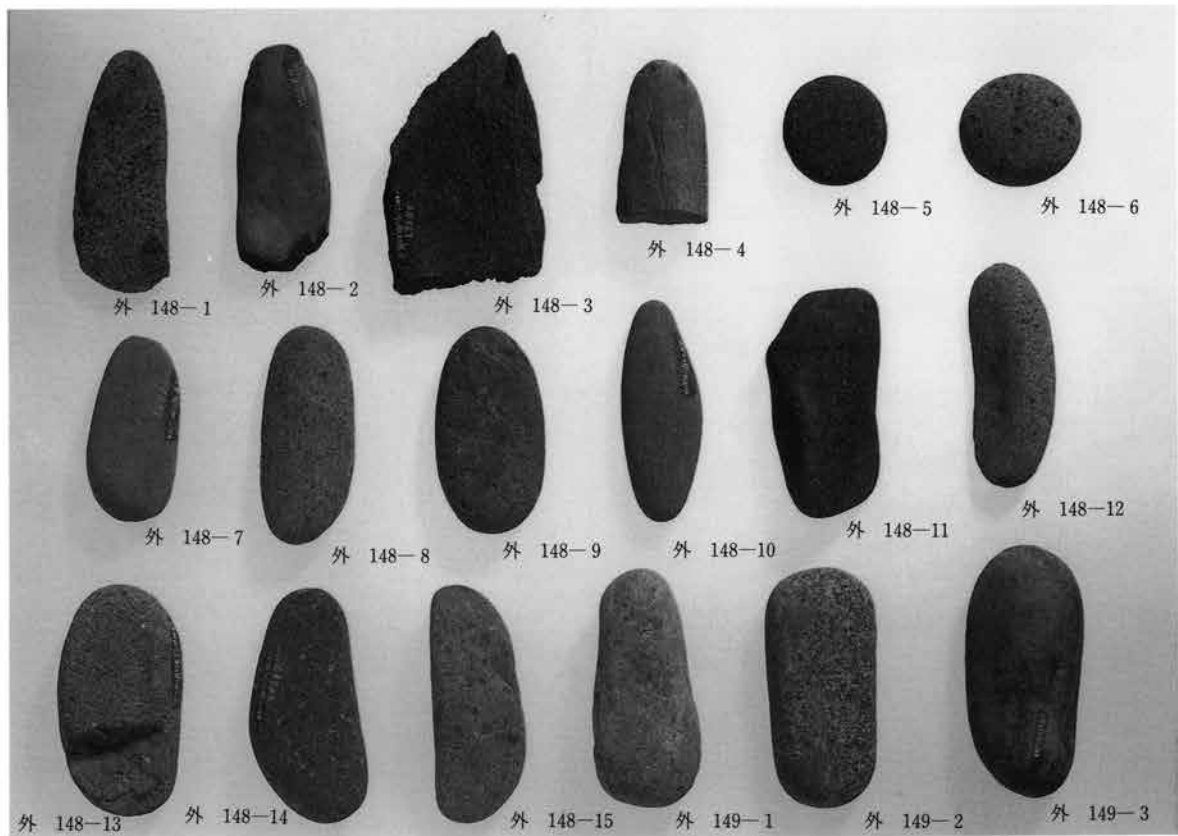
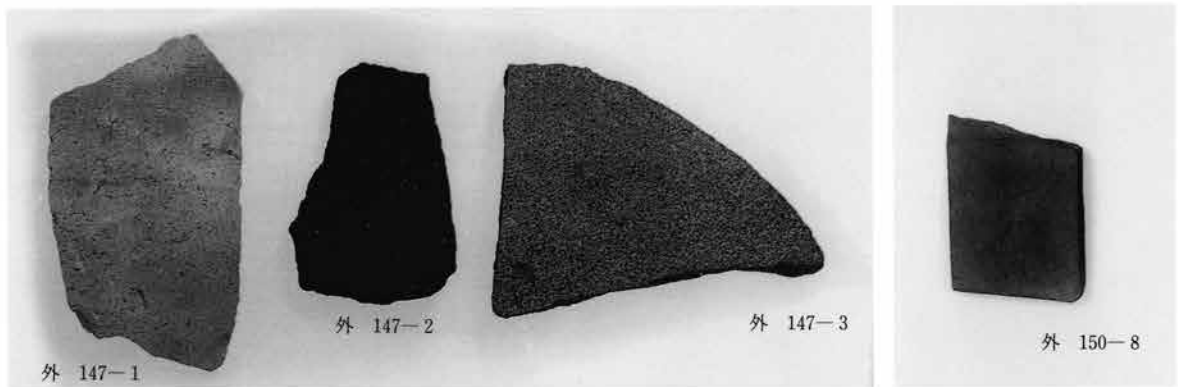
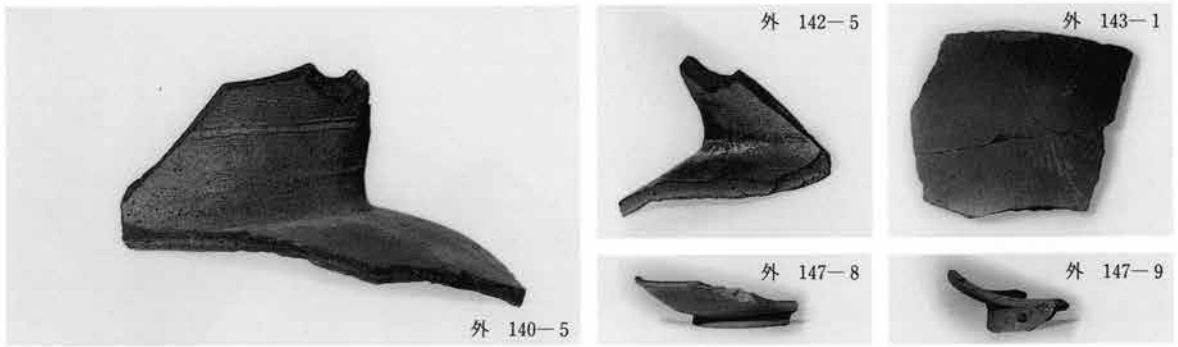


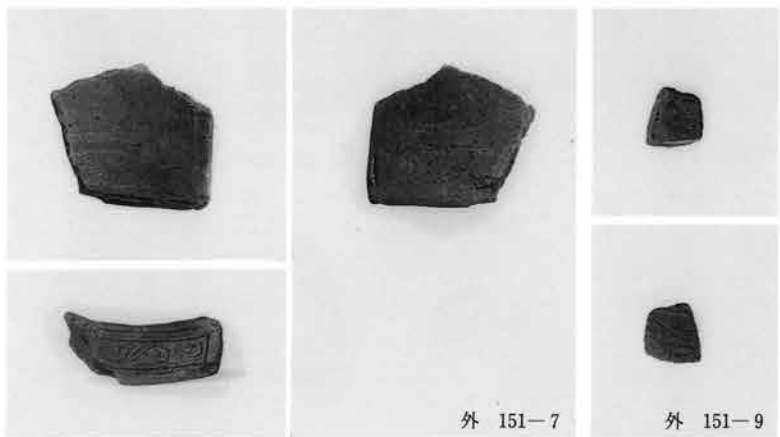
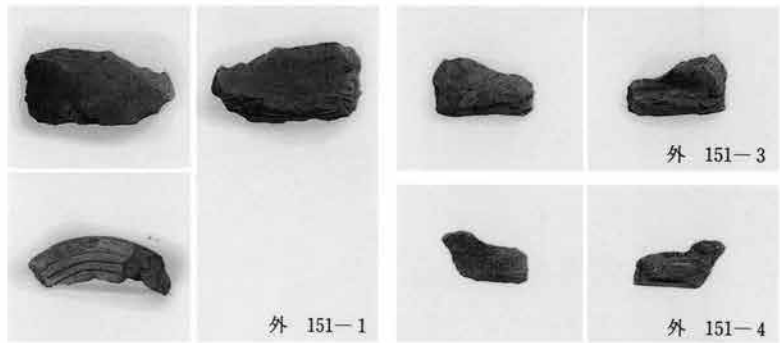
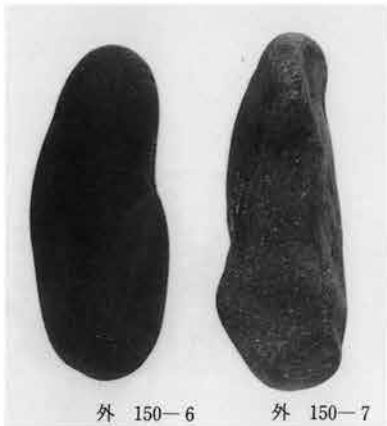
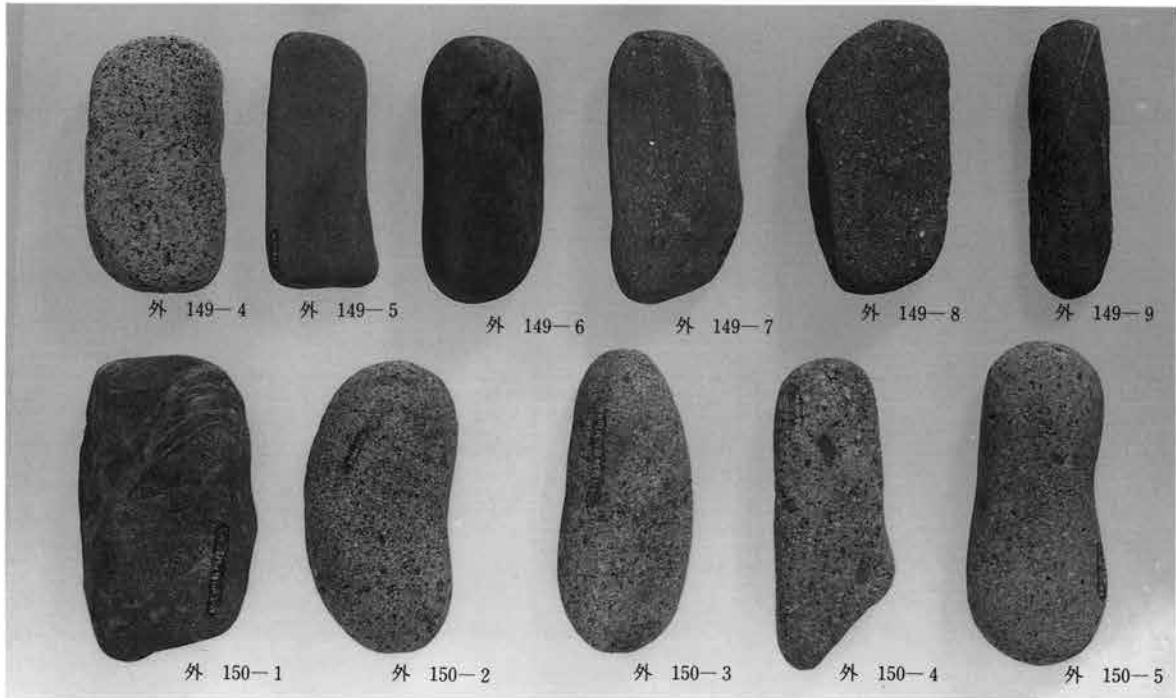
第66图版



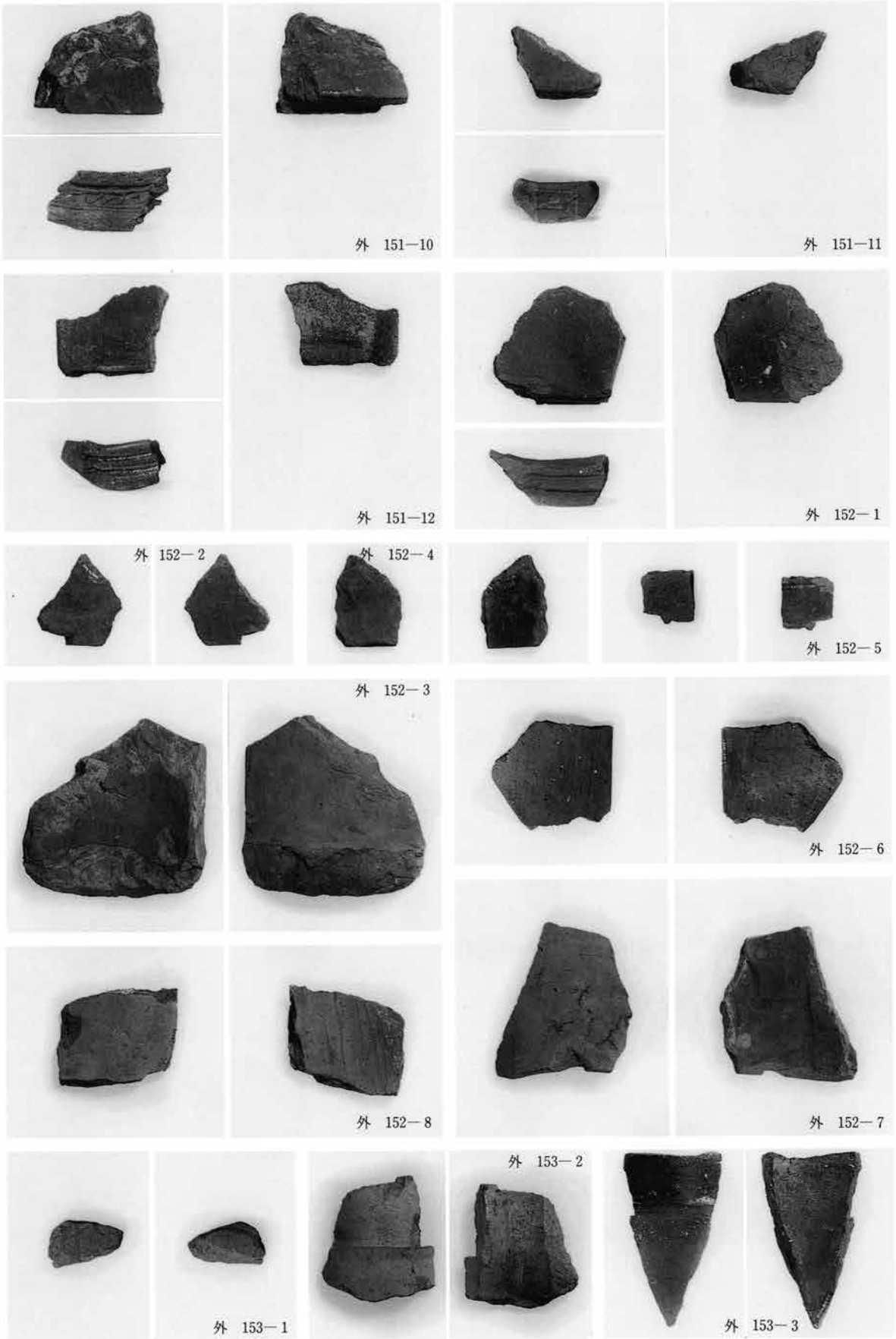


第68図版

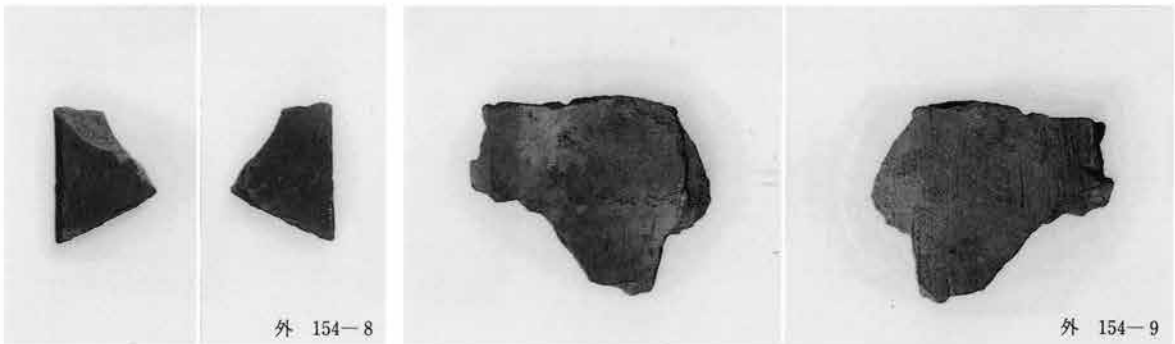
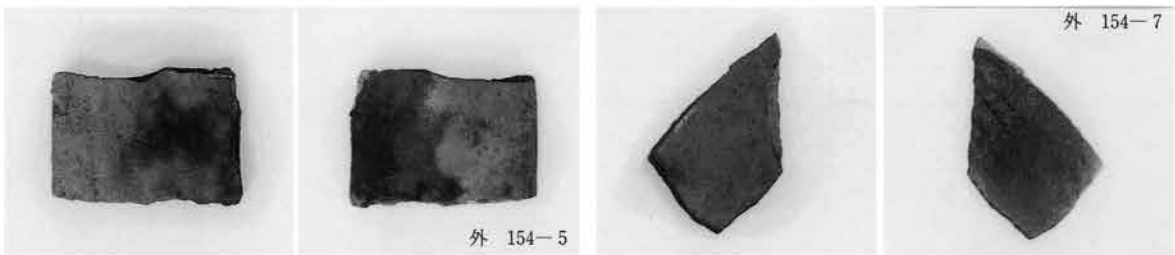
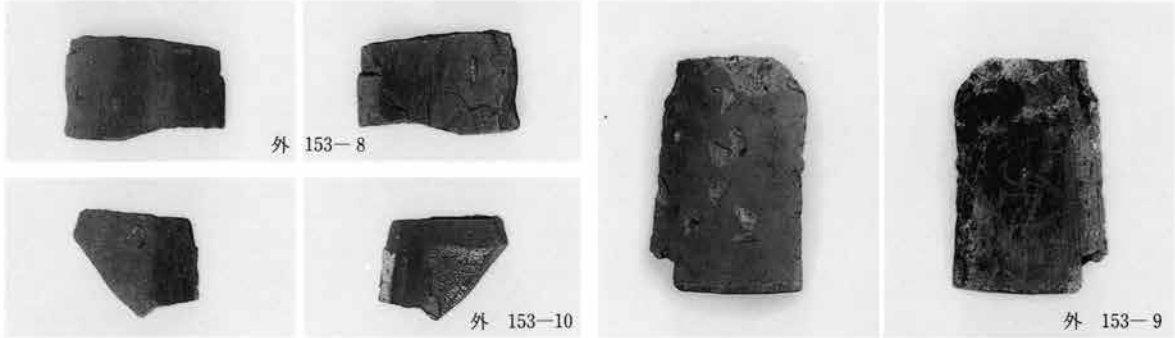
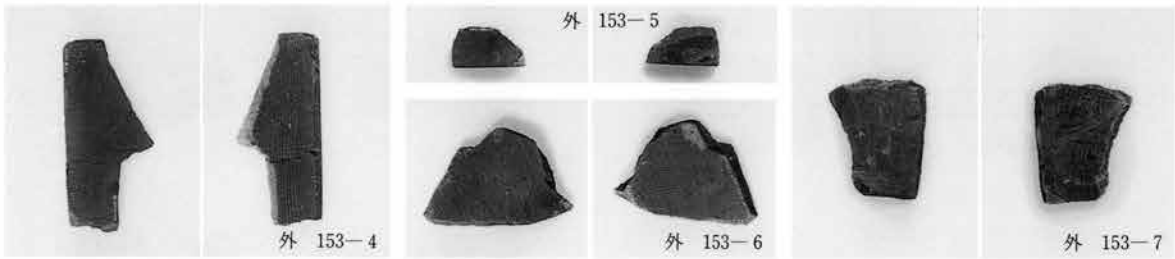




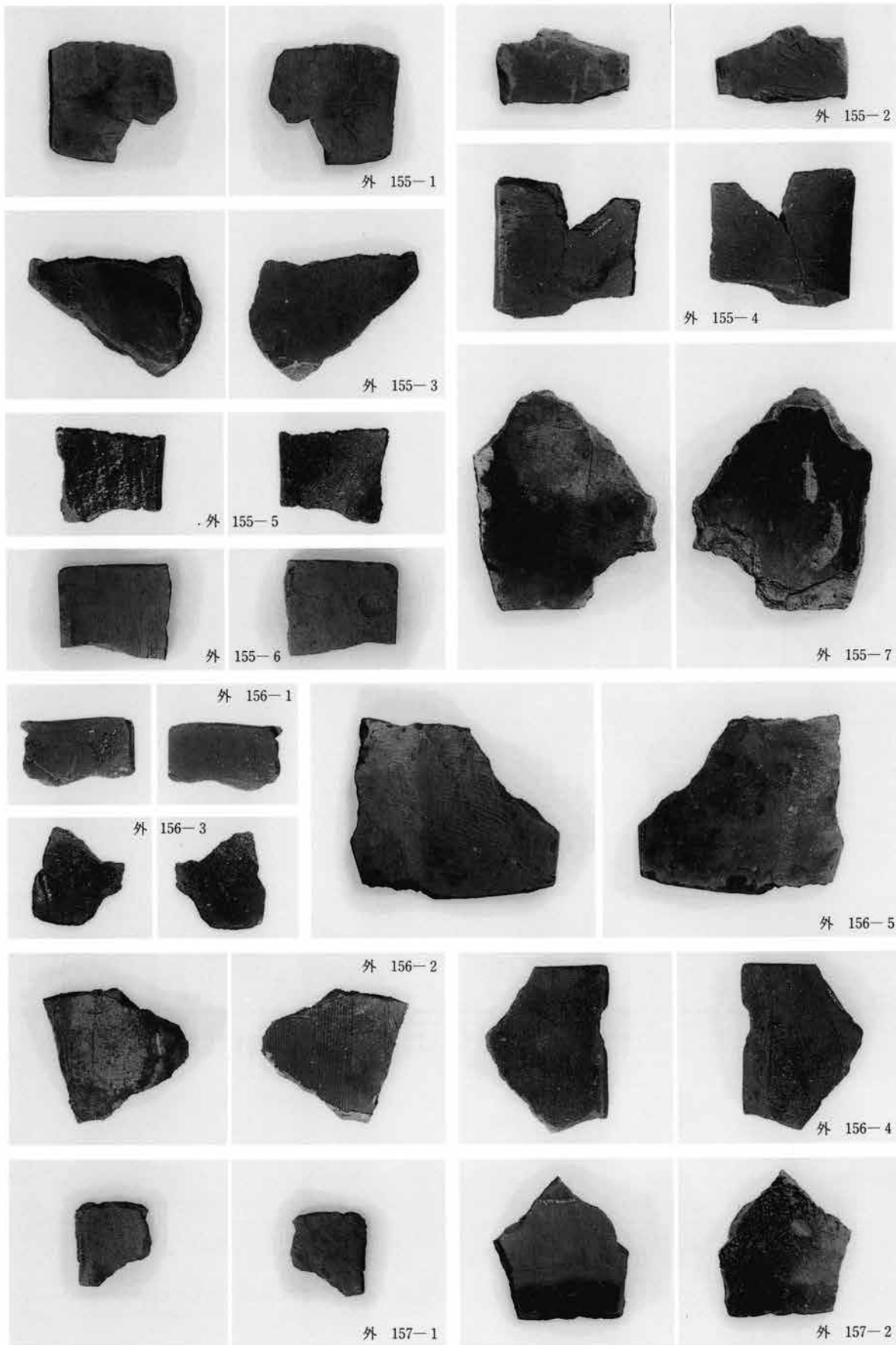
第70図版







第72図版





外 156-6



外 157-3



外 157-4



外 157-5



外 157-6



外 157-7



外 157-8



外 158-2



外 158-1



植 182-26



植 182-34

第74図版



植 182-32



植 182-33



植 183-41



植 183-35



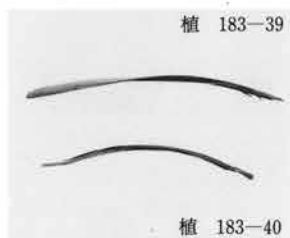
植 183-36



植 183-37



植 185-46



植 183-39

植 183-40



植 185-45



植 185-47



植 184-44



植 183-38



植 185-49



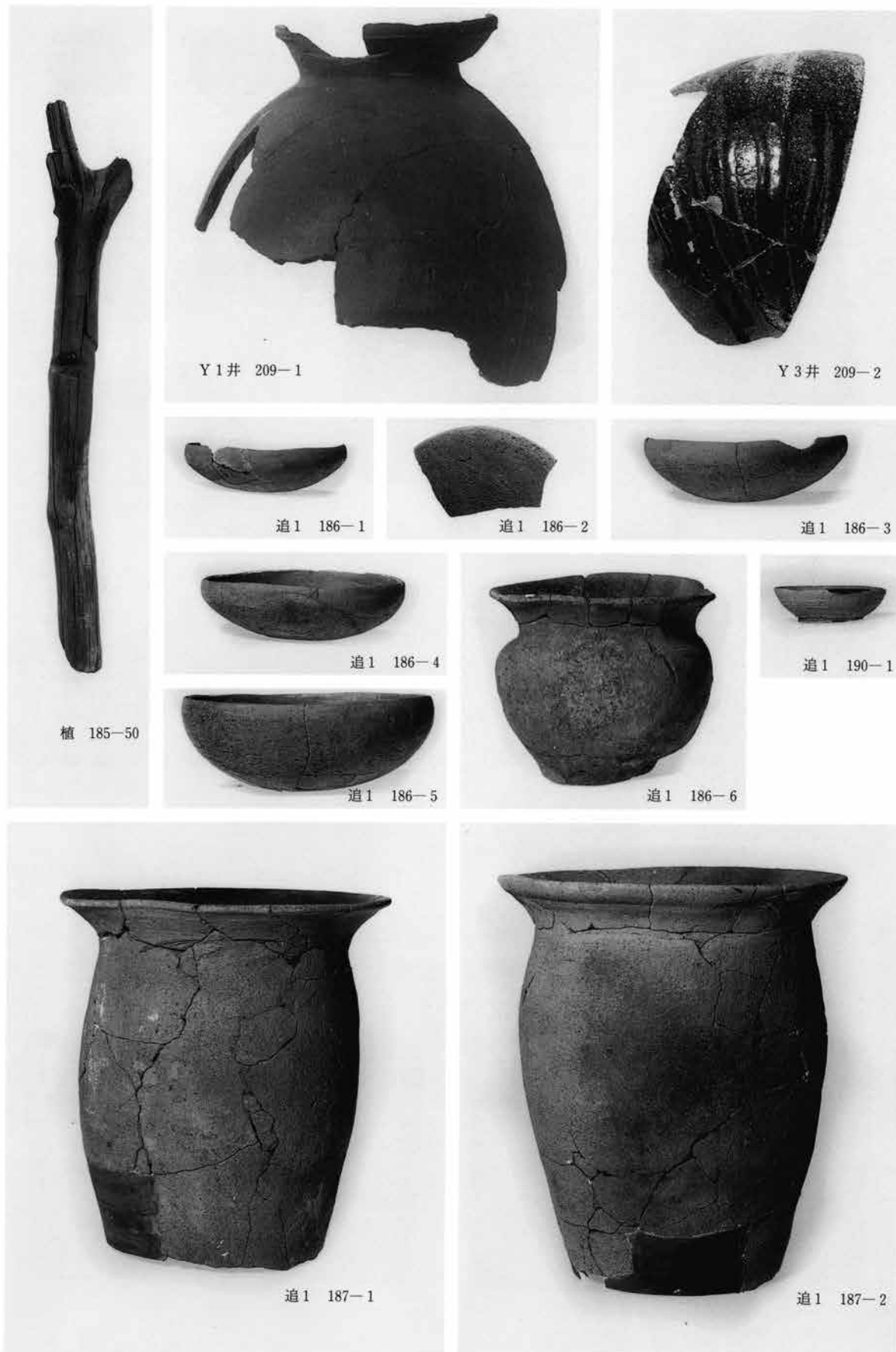
植 185-48



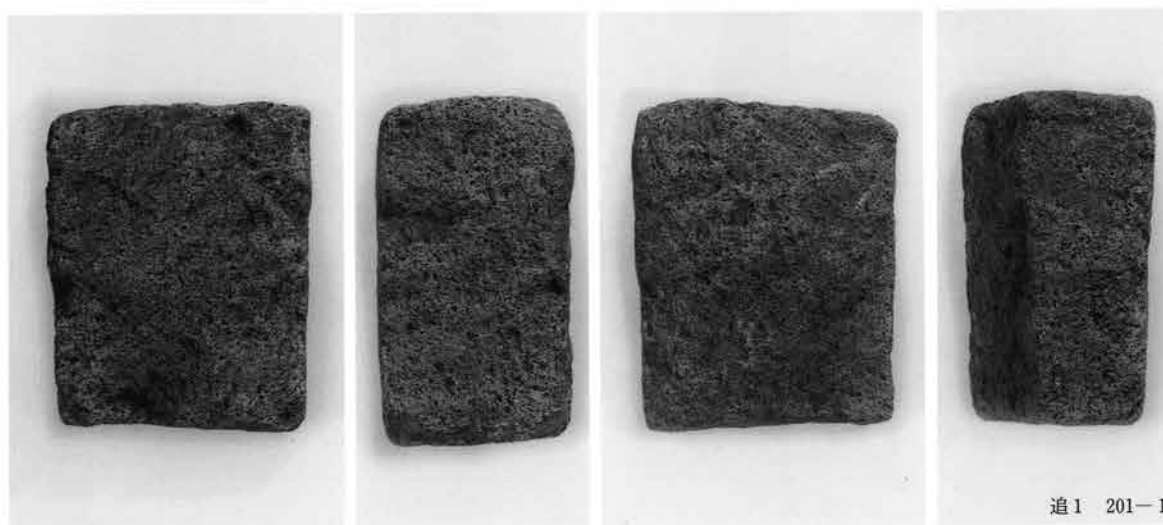
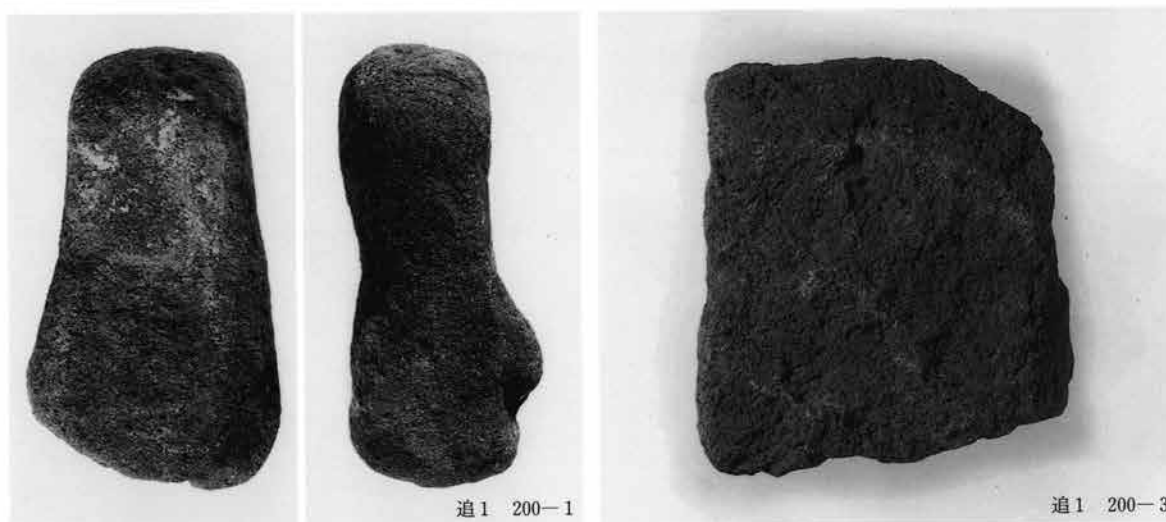
植 184-43



植 184-42



第76図版





追1 203-1



追1 205-3



追1 205-2



追1 204-1



追1 205-5



追1 206-3



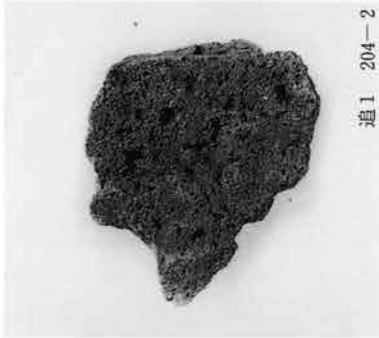
追1 205-4



追1 205-2



追1 205-4

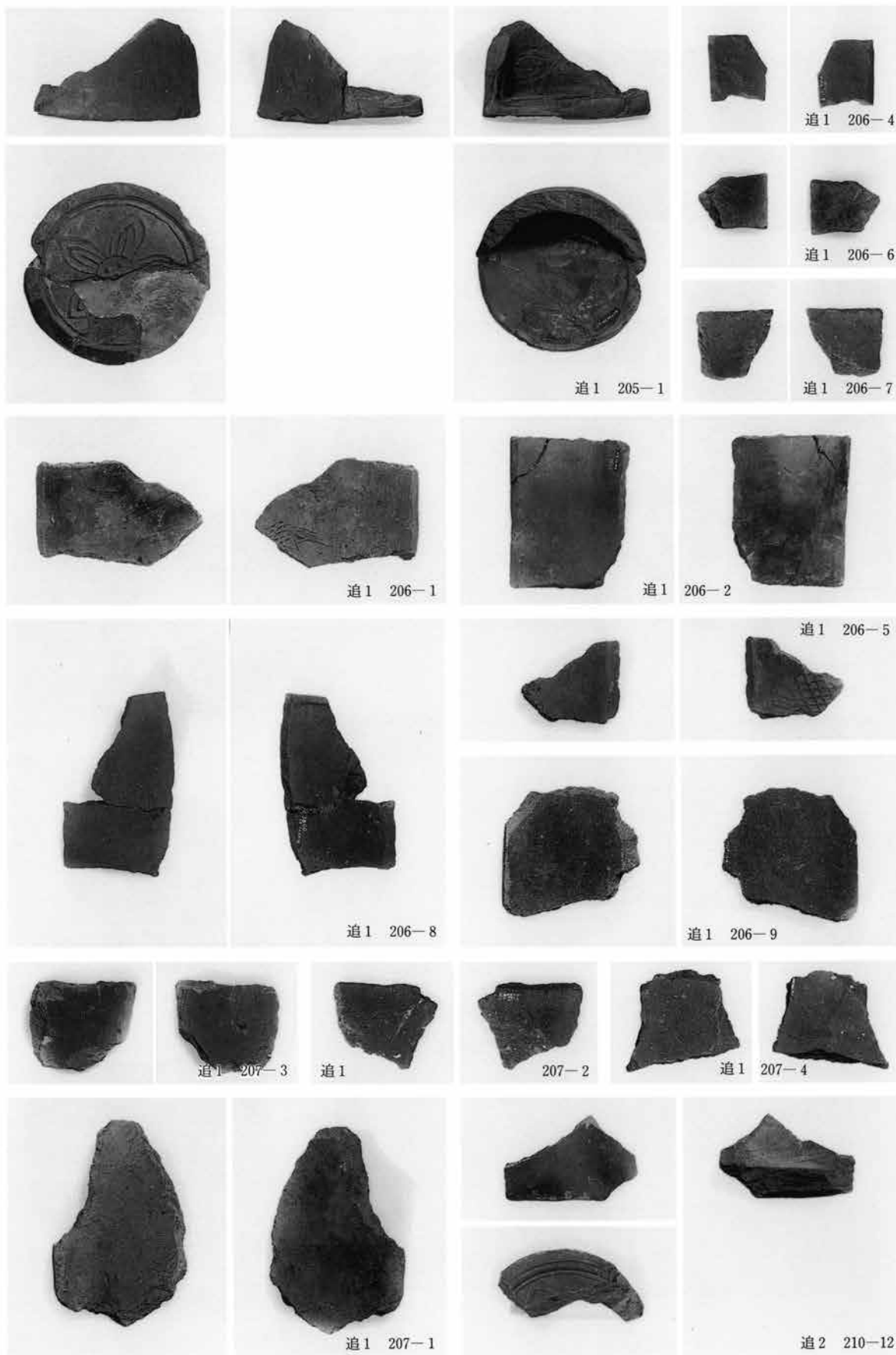


追1 204-2

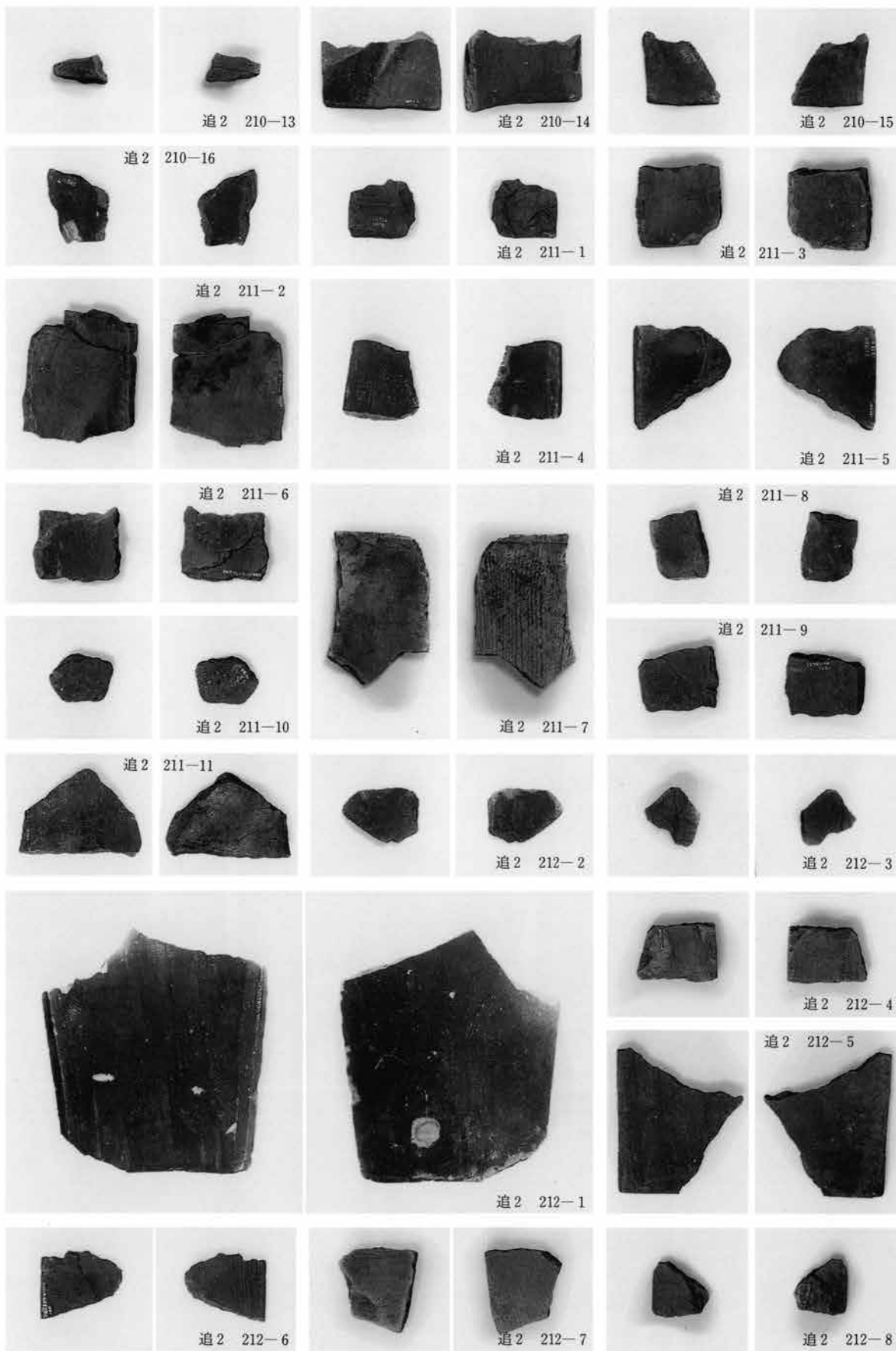


追1 204-1

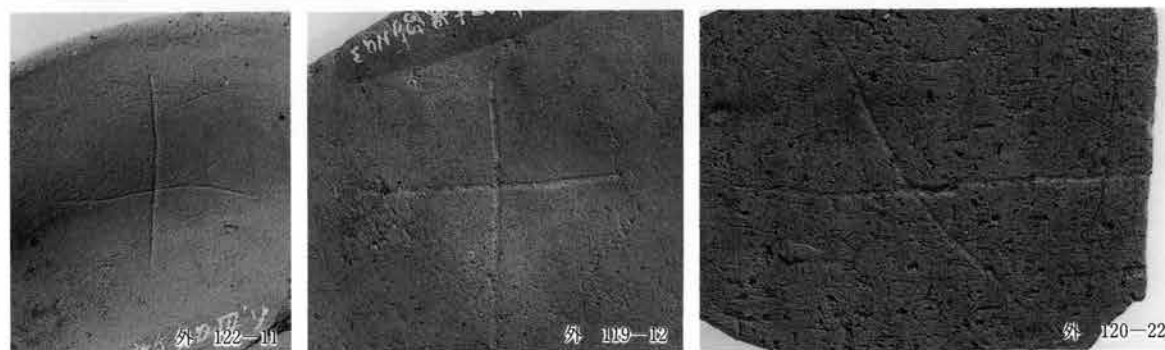
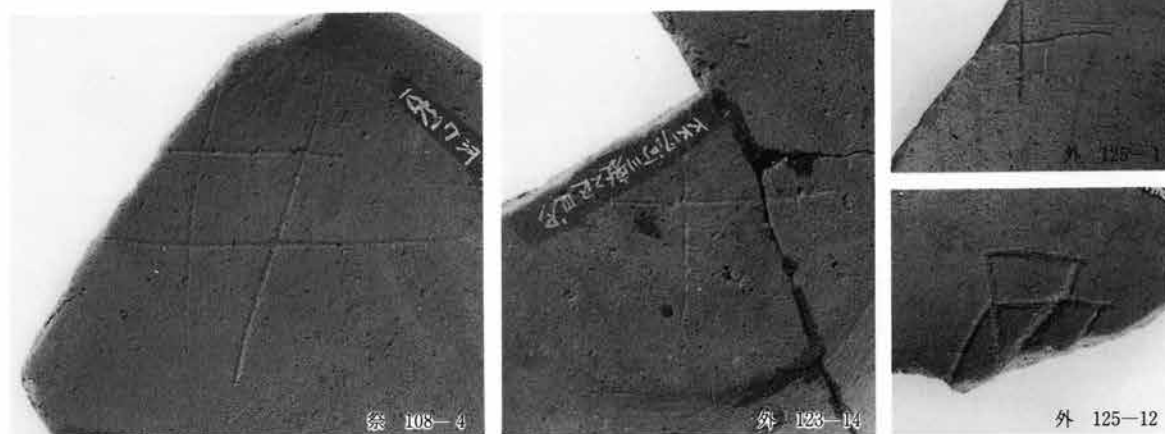
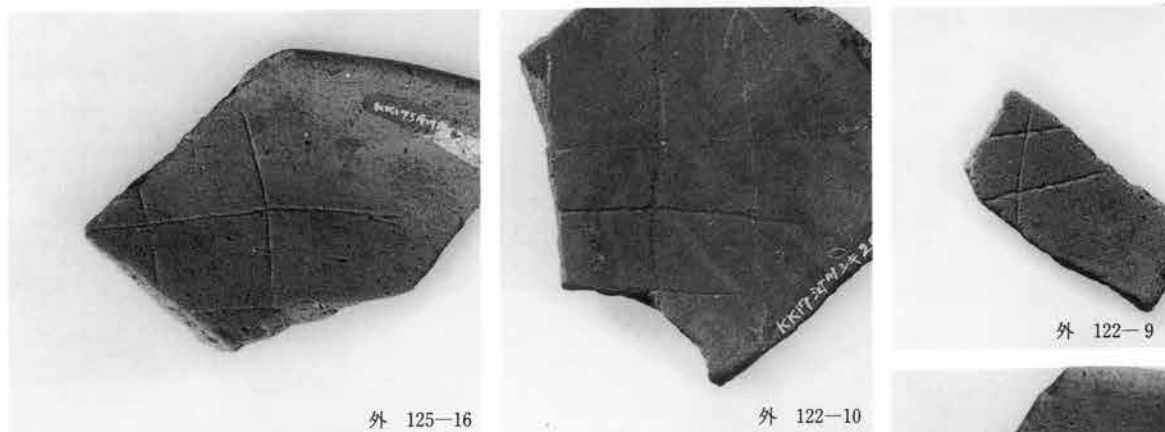
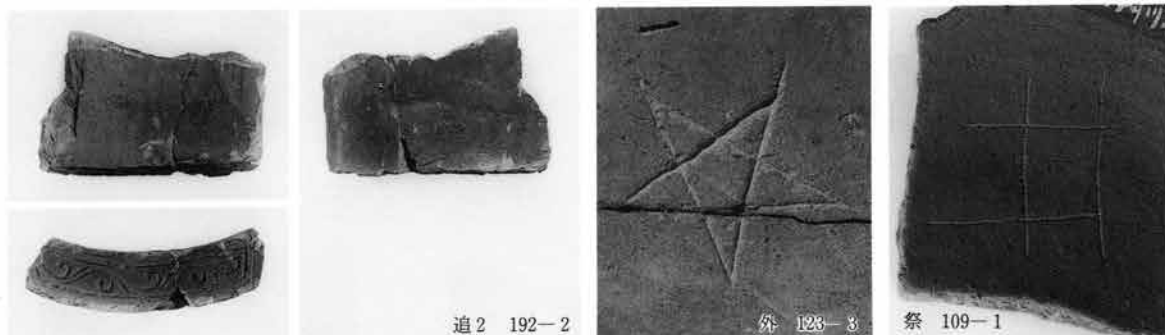
第78図版

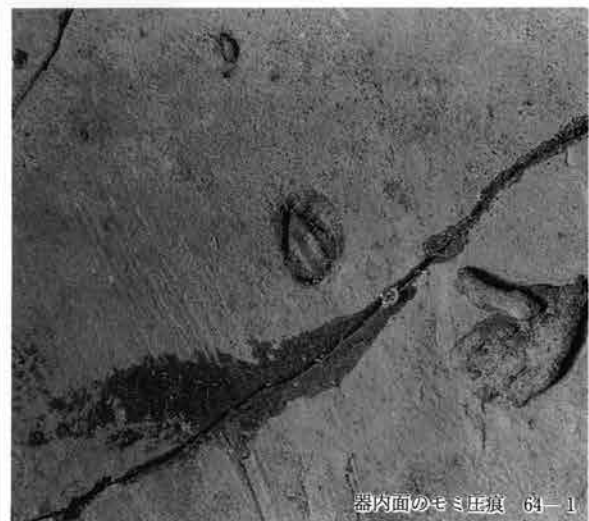
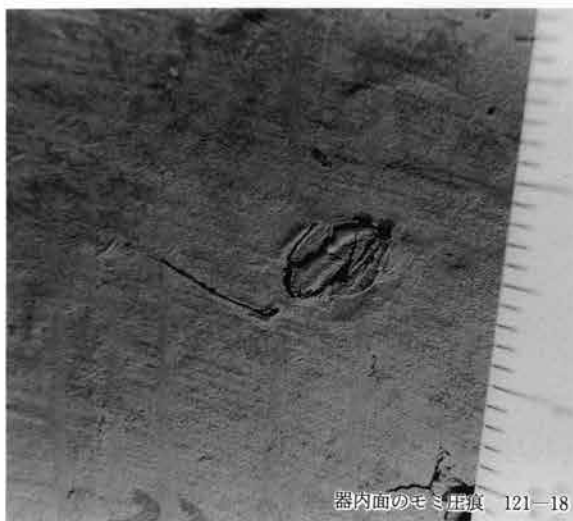
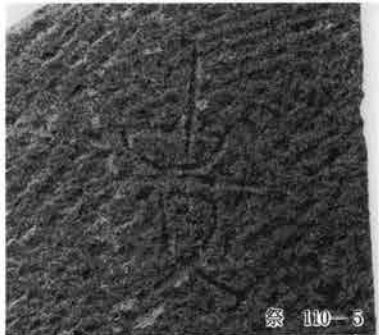
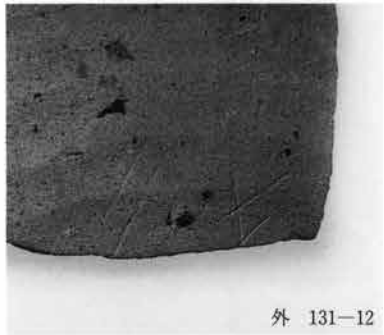
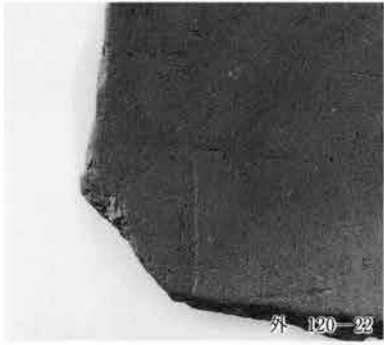




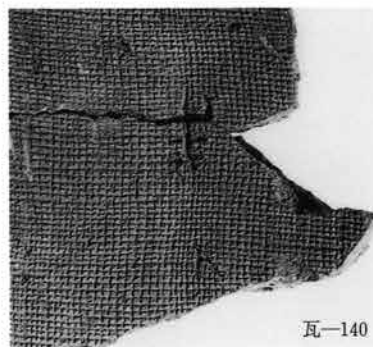
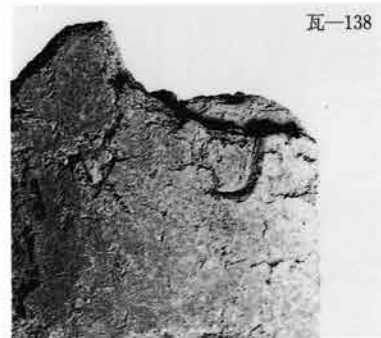
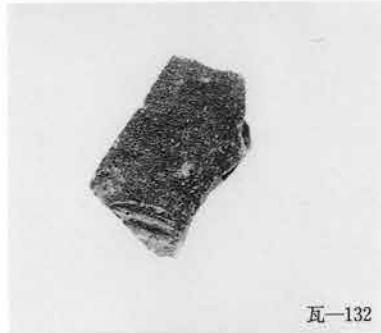
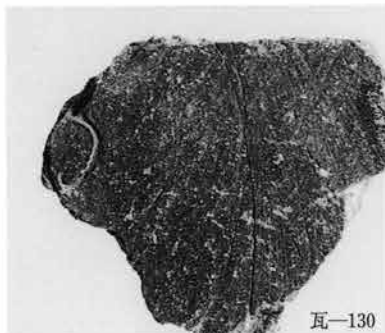


第80図版





第82図版





瓦-142



瓦-143



瓦-144



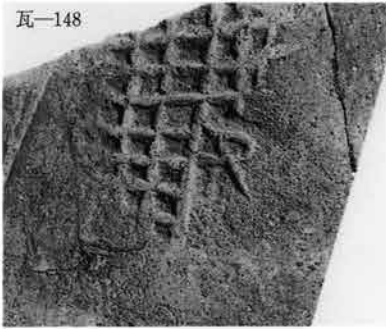
瓦-145



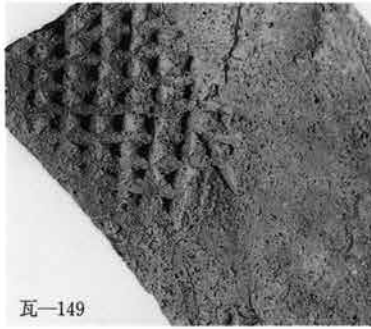
瓦-146



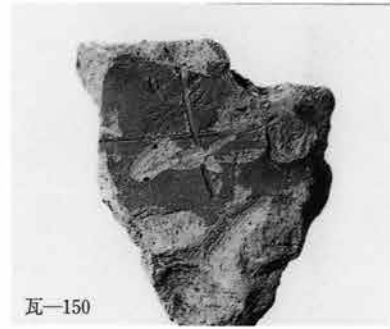
瓦-147



瓦-148



瓦-149



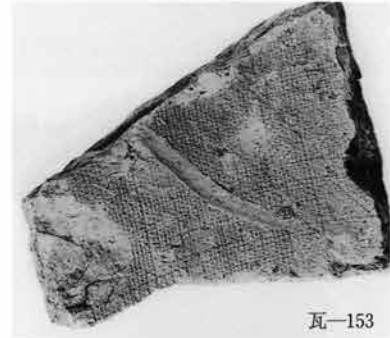
瓦-150



瓦-151



瓦-152



瓦-153



瓦-154



瓦-155



瓦-156

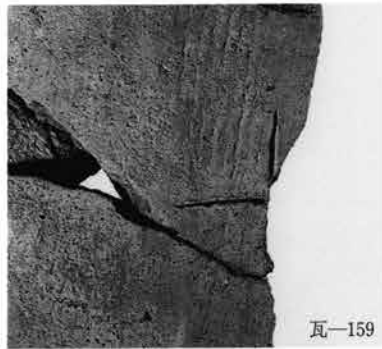
第84図版



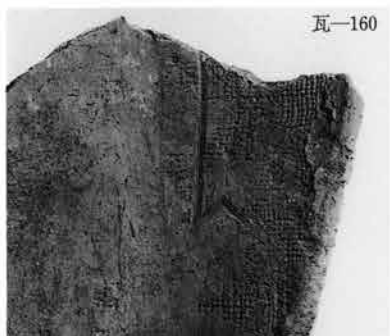
瓦-157



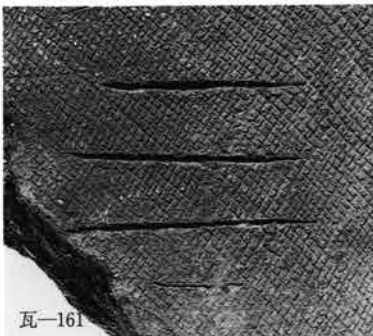
瓦-158



瓦-159



瓦-160



瓦-161



瓦-162



瓦-163



瓦-164



瓦-165



瓦-166



瓦-167



瓦-168



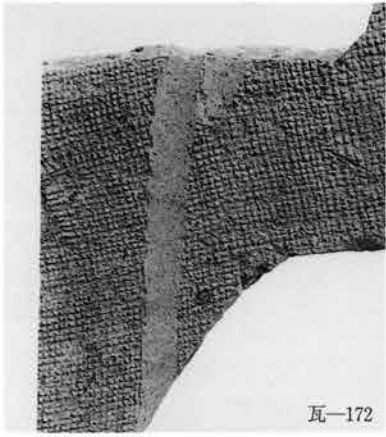
瓦-170



瓦-171



瓦-173



瓦-172



瓦-174



瓦-175



瓦-176



瓦-177



瓦-178



瓦-180



瓦-181



瓦-182



瓦-183

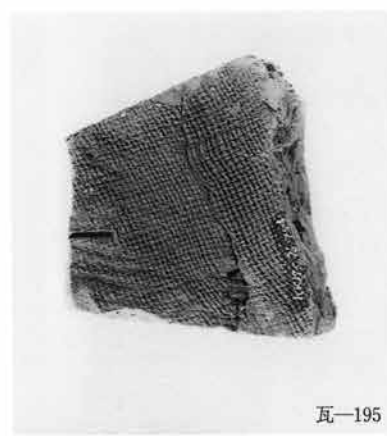
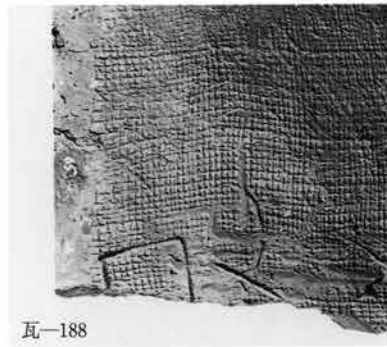
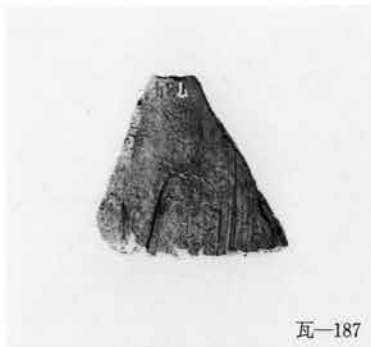


瓦-184



瓦-185

第86図版







瓦-199



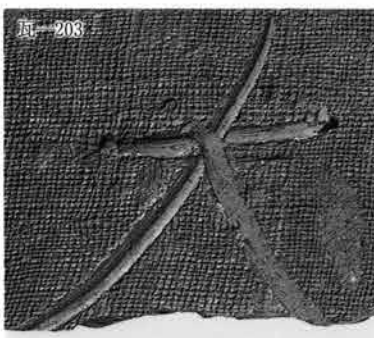
瓦-200



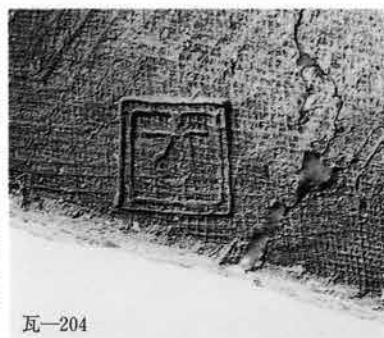
瓦-201



瓦-202



瓦-203



瓦-204



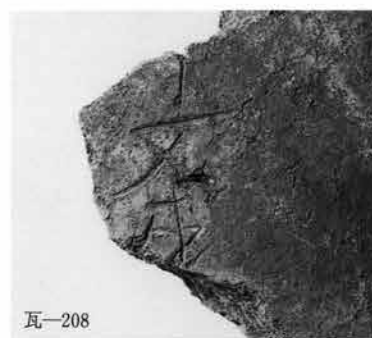
瓦-205



瓦-206



瓦-207



瓦-208



瓦-209



瓦-210



瓦-211



瓦-212



瓦-213

第88図版



瓦-214



瓦-215



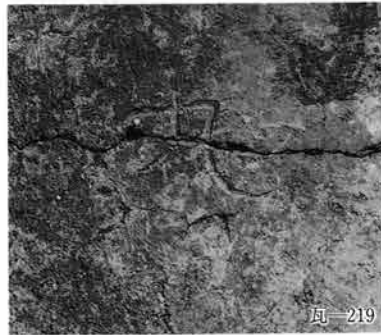
瓦-216



瓦-217



瓦-218



瓦-219



瓦-220



瓦-222



瓦-223



瓦-224



瓦-221



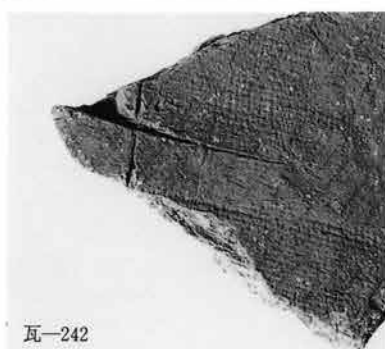
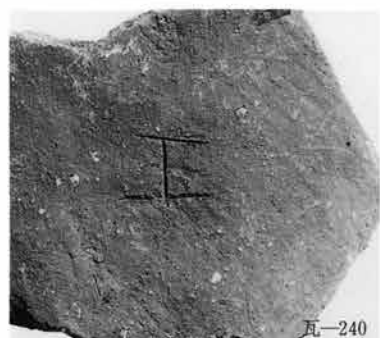
瓦-225



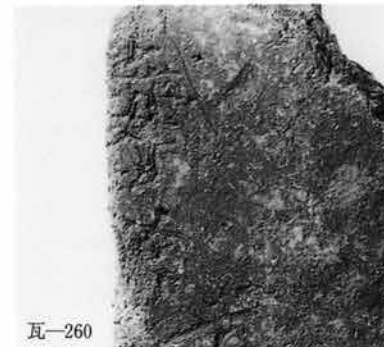
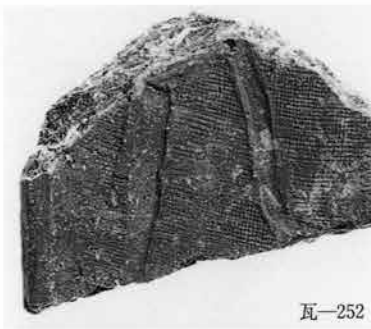
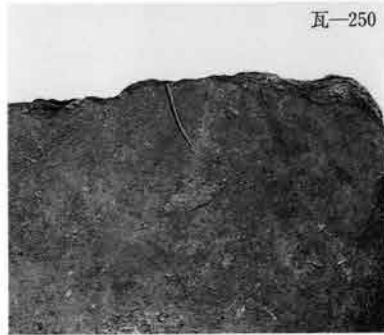
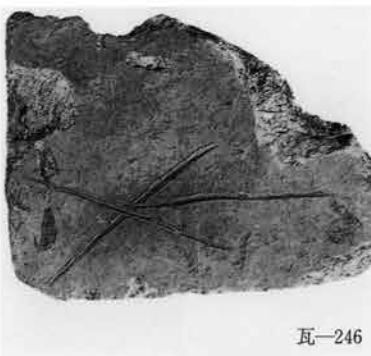
瓦-226

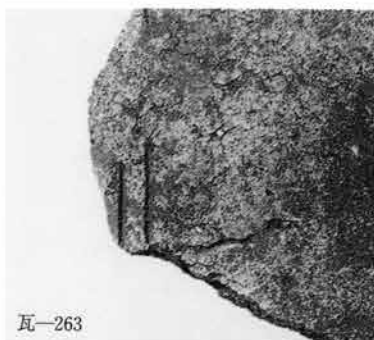


瓦-227



第90图版





第92図版



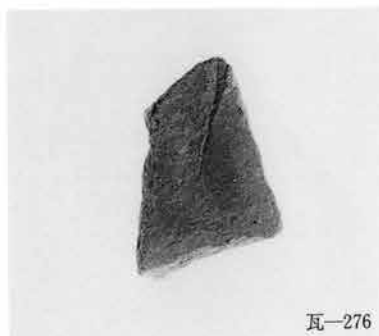
瓦-273



瓦-274



瓦-275



瓦-276



瓦-277



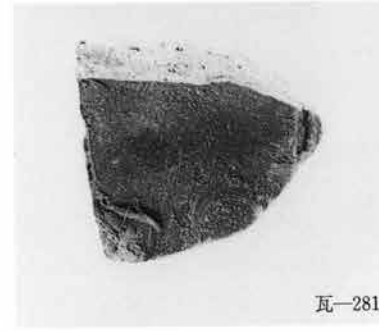
瓦-278



瓦-279



瓦-280



瓦-281



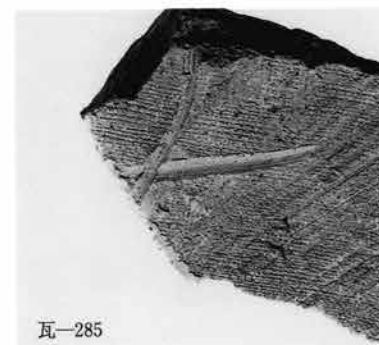
瓦-282



瓦-283



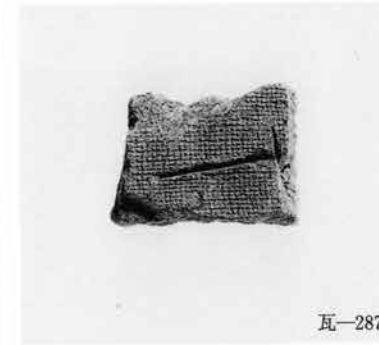
瓦-284



瓦-285

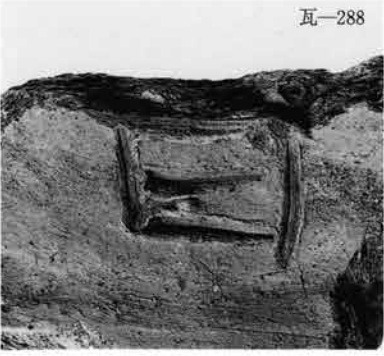


瓦-286

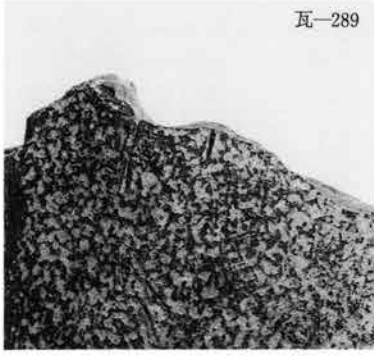


瓦-287

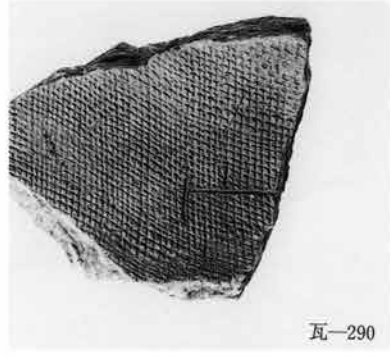
瓦-288



瓦-289



瓦-290



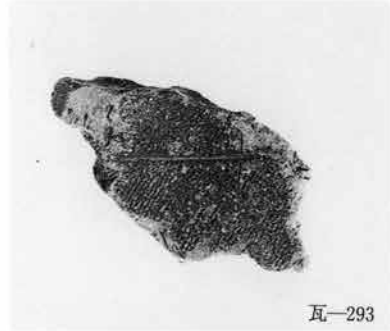
瓦-291



瓦-292



瓦-293



瓦-294



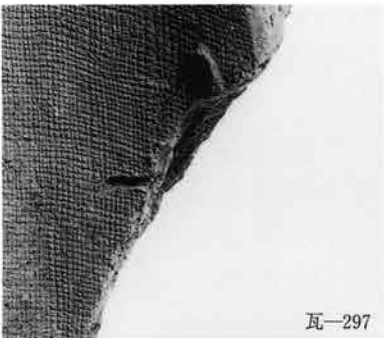
瓦-295



瓦-296



瓦-297



瓦-298



瓦-299



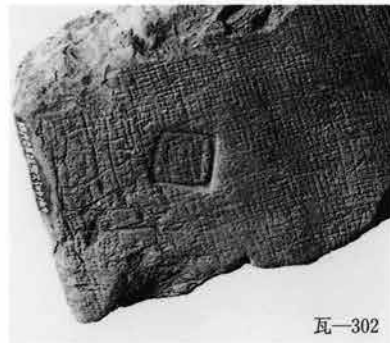
瓦-300



瓦-301



瓦-302



第94图版



瓦-303



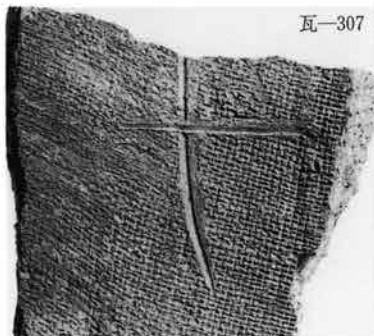
瓦-304



瓦-305



瓦-306



瓦-307



瓦-308



瓦-309



瓦-310



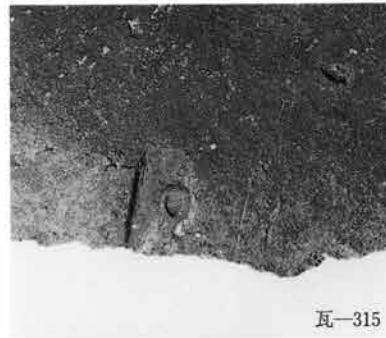
瓦-311



瓦-312



瓦-313



瓦-315



瓦-316

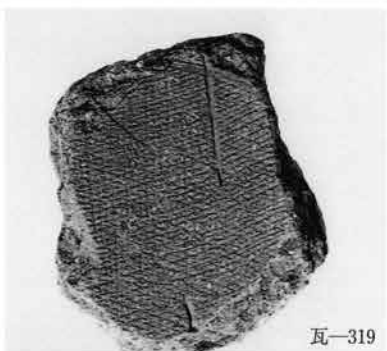


瓦-317



瓦-318





瓦-319



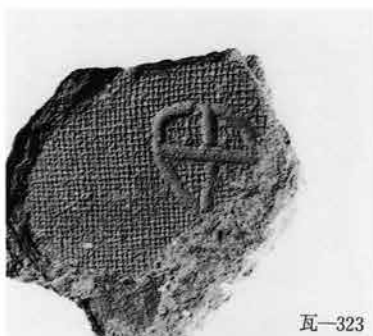
瓦-320



瓦-321



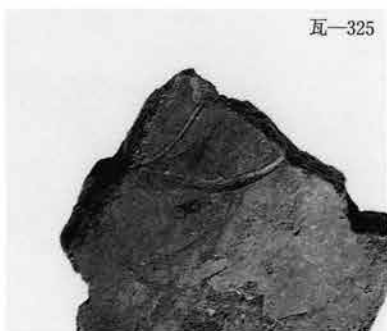
瓦-322



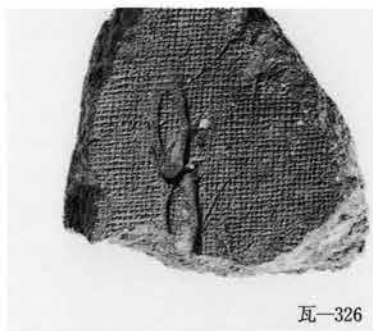
瓦-323



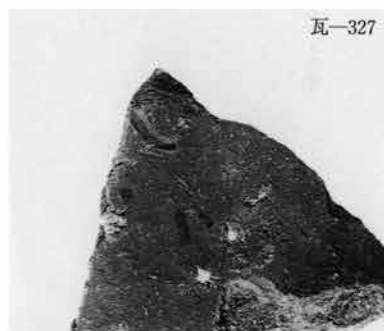
瓦-324



瓦-325



瓦-326



瓦-327



瓦-328



瓦-329



瓦-330



瓦-331



瓦-332



瓦-333

第96图版



瓦-334



瓦-335



瓦-336



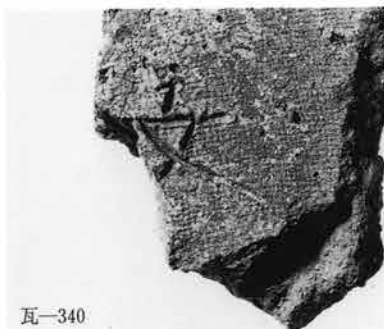
瓦-337



瓦-338



瓦-339



瓦-340



瓦-341



瓦-343



瓦-346



瓦-347



瓦-348



瓦-349



瓦-351



瓦-352



瓦-353



瓦-354



瓦-355



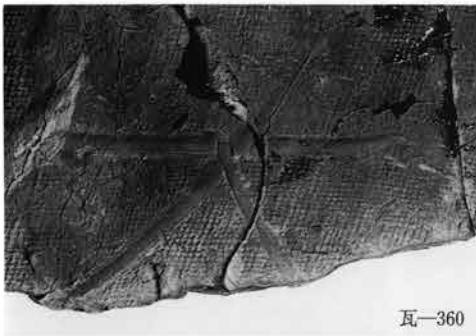
瓦-357



瓦-358



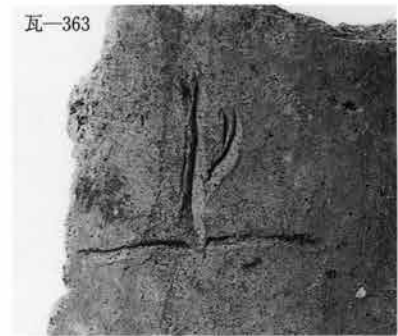
瓦-359



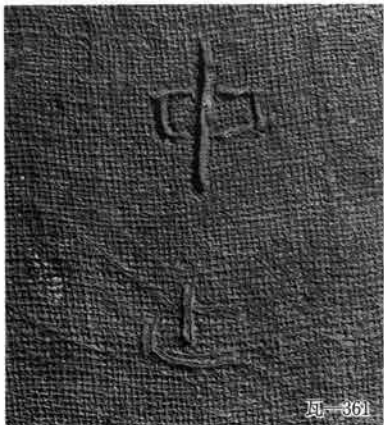
瓦-360



瓦-362



瓦-363



瓦-361



瓦-364



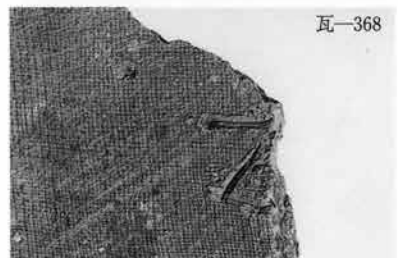
瓦-367



瓦-365

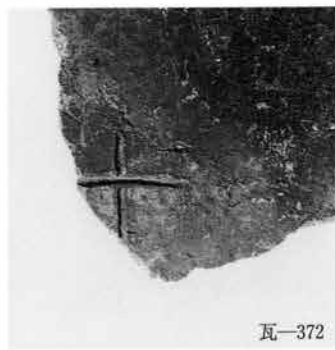


瓦-366



瓦-368

第98图版



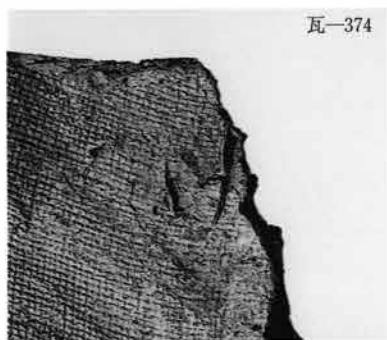
瓦-369

瓦-372



瓦-371

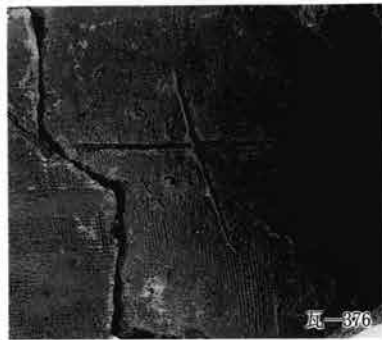
瓦-373



瓦-374



瓦-375



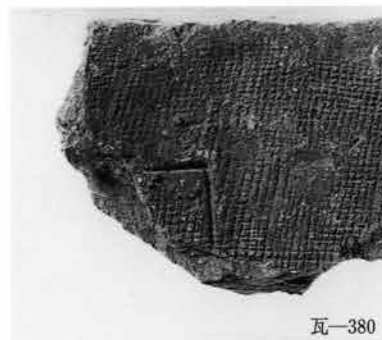
瓦-376



瓦-377



瓦-378



瓦-380



瓦-381



瓦-382



瓦-383



瓦-384



瓦-385



瓦-386



瓦-387



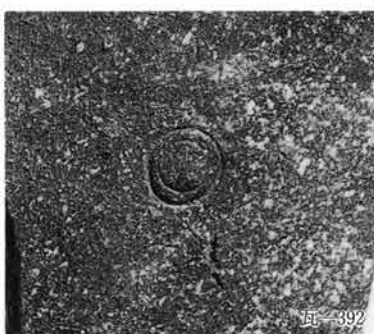
瓦-388



瓦-389



瓦-390



瓦-392



瓦-393



瓦-395



瓦-396



瓦-397



瓦-546



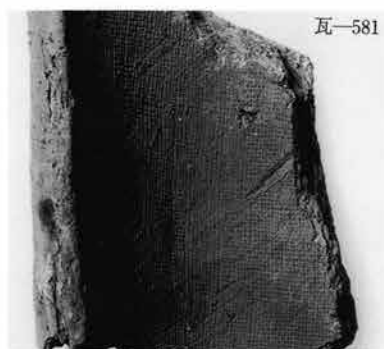
瓦-547



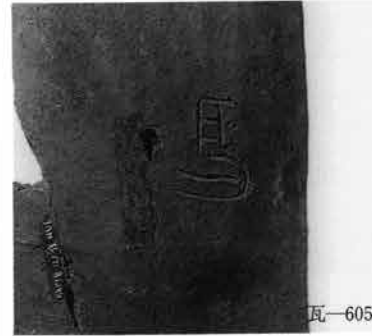
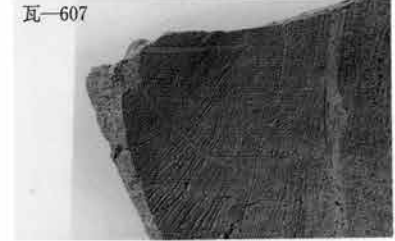
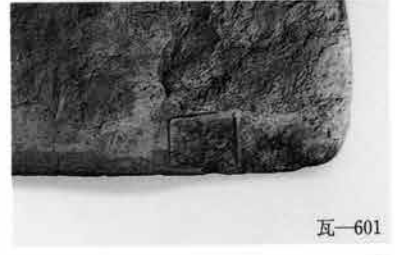
瓦-548

第100図版





第102図版







瓦-611



瓦-612



瓦-613



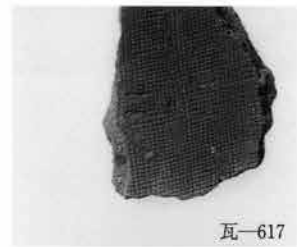
瓦-614



瓦-615



瓦-616



瓦-617



瓦-618



瓦-619



瓦-621



瓦-622



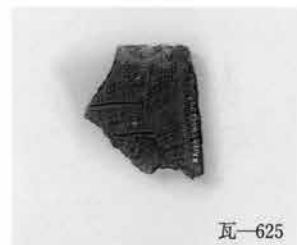
瓦-620



瓦-623



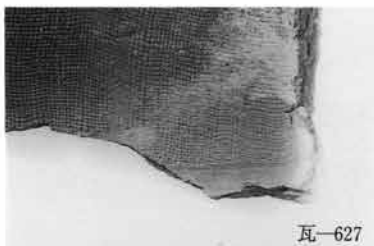
瓦-624



瓦-625



瓦-626



瓦-627



瓦-630



瓦-628



瓦-629



瓦-631

第104図版

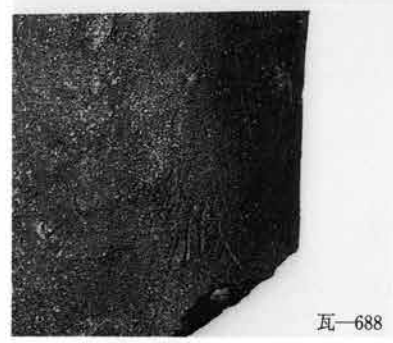




瓦-686



瓦-687



瓦-688



瓦-689



瓦-690



瓦-691



瓦-692



瓦-693



瓦-694



瓦-695



瓦-696



瓦-697



瓦-698

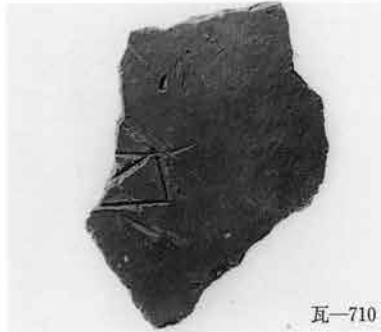
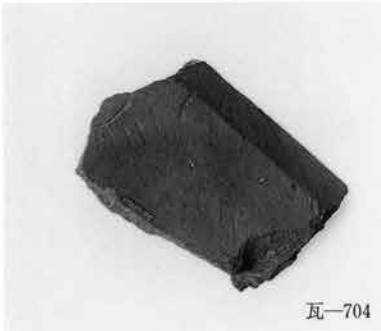


瓦-699



瓦-700

第106図版





瓦-716



瓦-717



瓦-718



瓦-719



瓦-720



瓦-721



瓦-722



瓦-723



瓦-724



瓦-725



瓦-726



瓦-727



瓦-728



瓦-729



瓦-730

第108図版

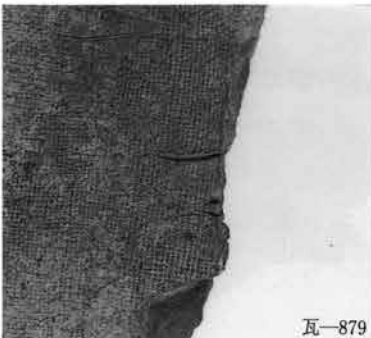
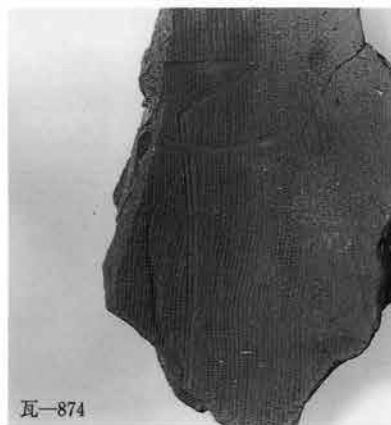
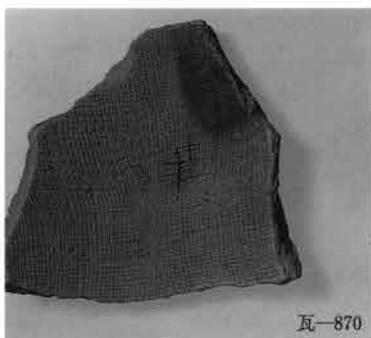




第110図版







第112図版



瓦-881



瓦-882



瓦-883



瓦-884



瓦-885



瓦-900



瓦-901



瓦-902



瓦-903



瓦-904



瓦-905



瓦-906



瓦-907



瓦-908



瓦-909



瓦-910



瓦-911



瓦-912



瓦-913



瓦-914



瓦-915



瓦-916



瓦-937



瓦-938



瓦-939



瓦-940



瓦-941



瓦-942



瓦-943



瓦-944



瓦-945



瓦-946



瓦-947



瓦-948



瓦-949



瓦-950



瓦-933



瓦-951



瓦-953

第114図版



瓦-347



瓦-954



瓦-955



瓦-956



瓦-957



瓦-958



瓦-959



瓦-960



瓦-961



瓦-962



瓦-952



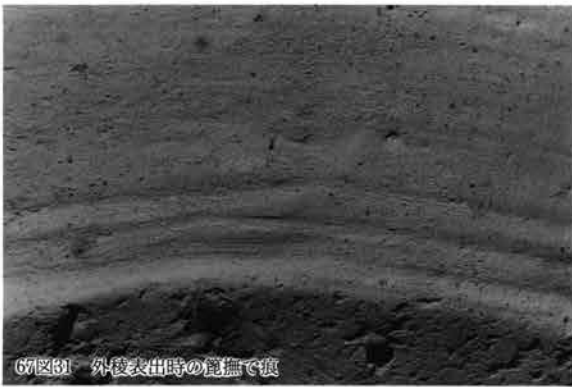
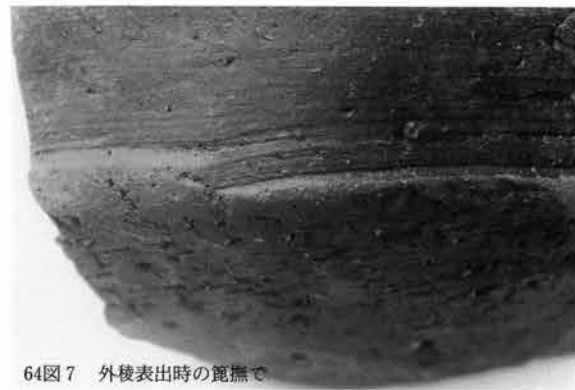
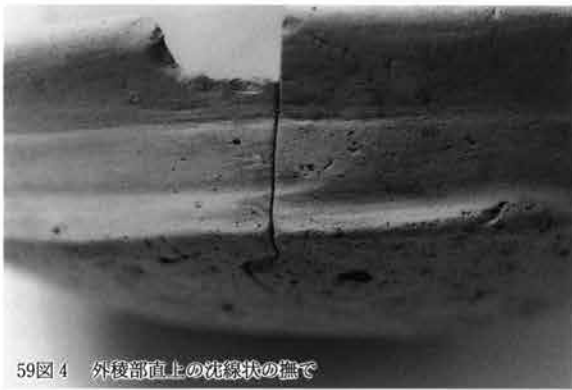
瓦-968



女瓦、側部の粗多、S-50-1



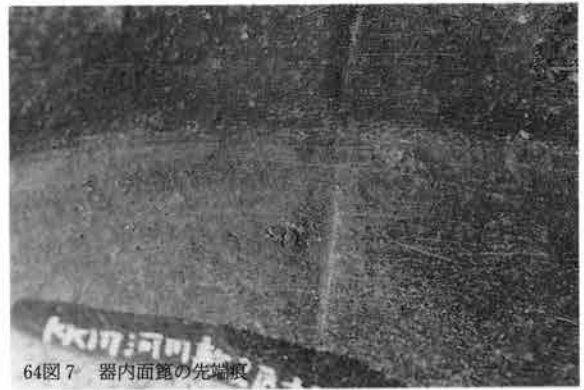
女瓦、赤白の叩き、S-23-2



第116図版



80図17 器内面稜部のシワ



64図7 器内面稜の先端痕



80図8 器内面稜の先端痕



63図4 器内面の寛幅でに伴う染線帯



70図13 器内面の撫で（水を多用している）



70図13 見込み部の篋痕



72図12 器内面の撫で（水を多用している）



226図8 須恵器杯の底部の墨書

(助)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第132集  
上野国分僧寺・  
尼寺中間地域(8)

《第一篇》

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第41集—

平成4年3月21日印刷

平成4年3月25日発行

編集／(助)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
勢多郡北橘村下箱田784番地の2  
電話(0279)52-2511(代表)

群馬県教育委員会  
前橋市大手町1丁目1番1号  
電話(0272)23-1111

発行／群馬県考古資料普及会  
勢多郡北橘村下箱田784番地の2  
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社